キング

KING



九月號


明眸の輝き！
生き〳〵とした明るい瞳、チヤーミングなまなざし、美眼液パミールを用ひたあとの快よさ！ 嬉しさ!!
パミールを一滴させば、五分たつかたゝぬ間にどんな眼でも見る〳〵清らかに澄んで、鈴を張つた様に大きくなり、何とも言へぬ美しい魅力ある眼となります。絶對無害で用ひれば用ひる程眼性がよくなり、瞳はいよ〳〵輝いて參ります。
美眼液
パミール
携帶用 一圓八十錢
大瓶 二圓八十錢
德用瓶 六圓
（送料內地十五錢領土四十五錢）
◇各地有名藥店にあります◇
パミール
"Pamele"
EYE WATER
MADE IN JAPAN
パミールを愛用される松竹のスター田中絹代さん
大日本雄辯會講談社代理部發賣
（東京市本鄕駒込・振替東京六六二九番）



[illegible]流を踰ゆるのは、即ちポンペイウスとの平和の破裂、即ち内亂の開始である。機逸すべからずと見たケーザルは、兵士を麾いて、斷然馬をルビコに乘り入れ、大音擧げて叫んで曰く「骰子は既に投げられたり」

内亂はケーザルの全勝、ポンペイウスの敗死、其餘黨の討夷を以て終り、天下はケーザルの獨占に歸して、百年の紛擾茲に靜まり、ローマの大國家はその更生期に入つたのである。

私のなほつたはい病の

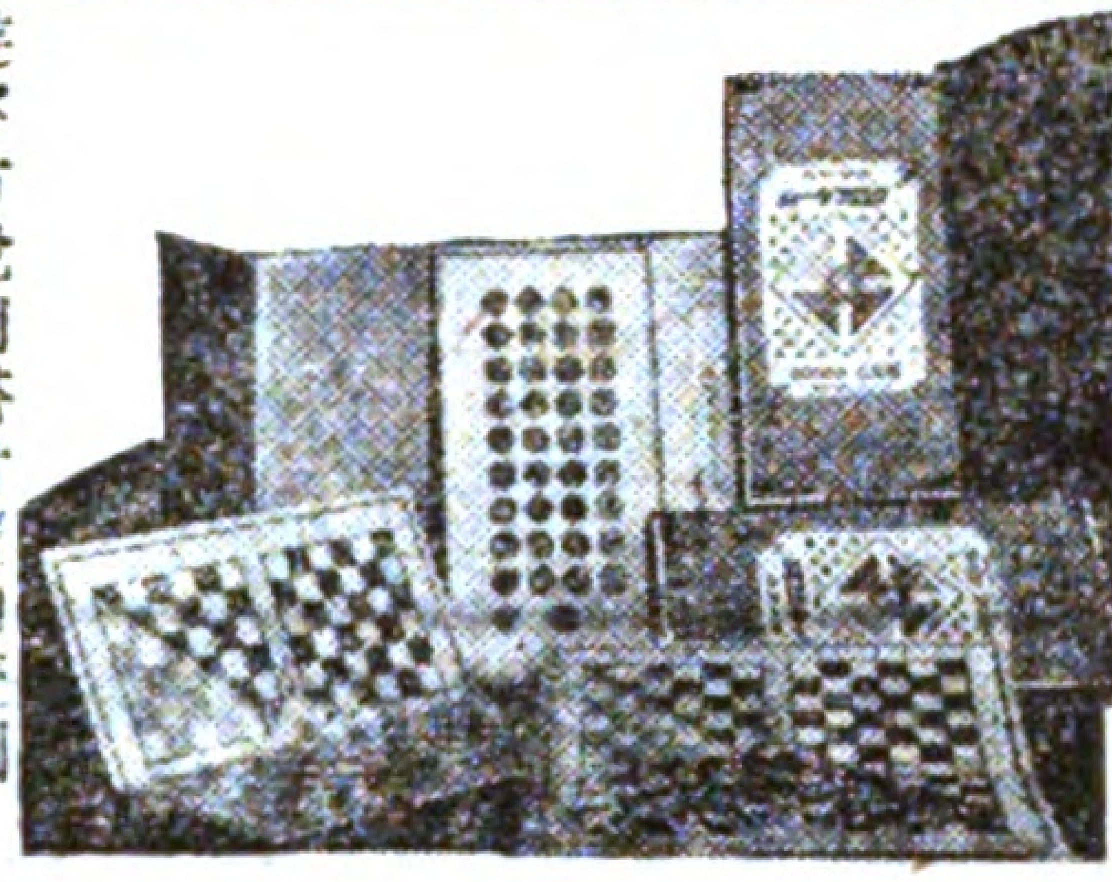
最良藥と養生法を

無料でお敎へ致します

私は數年前から猛烈な肺病にかゝり專門の病院や有名な先生方にも見ていたゞき生の執屑とでも云ひませうか人がいと云はれるドラックの藥か[illegible]がりにやせや細い[illegible]はやみんかり・なぜに至るまでいろいろの藥をあびる程のみましたが皆少しもキヽメなく日增にやせ衰へ家人には嫌はれ今は只死を待つばかりの心細い身の上となりました所が昨年の春フトした事から不思議によくキク藥を見つけまして服んだ其日からキヽメがあらはれ五六日目には食慾も進みひどい寢汗も止まり息切れまでも樂になり約二ケ月の後には全く元の身體になる事が出來ました。

餘りよくキク藥なので四五人の同病者へも敎へて上げました所何れもそのキヽメの偉大なるに驚いてをります肺病でお困りの方はあれこれと迷はず私方へ一度御出で下さい、私の治つたお禮の意味で不思議な藥や養生法等の實驗談を人助けの爲に喜んでお敎へ致します、遠方の人は手紙で御返事を差上げます。

東京下谷上根岸九六
加藤港





小學校卒業生は必ず本會へ入會せよ!!

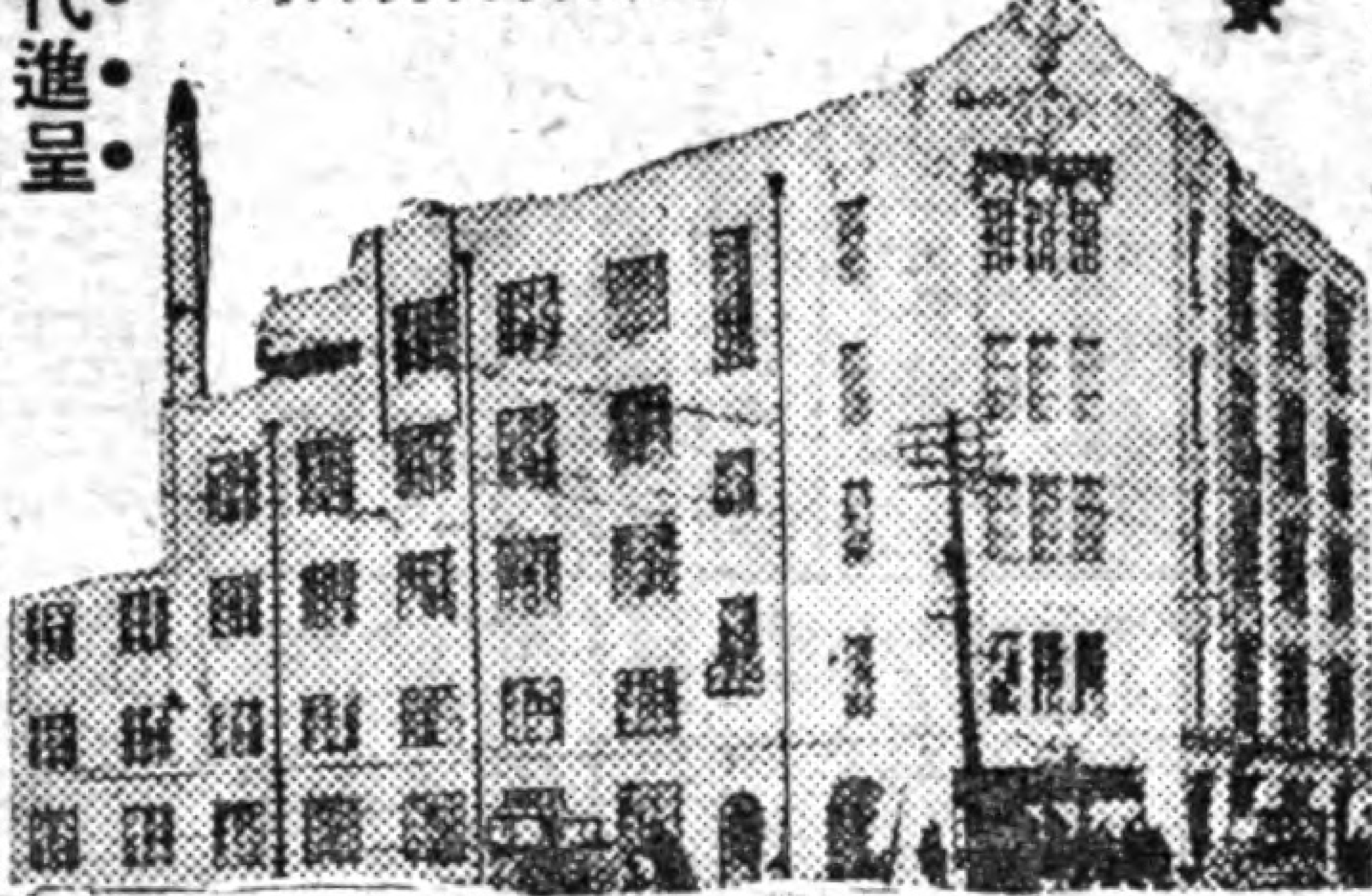
◁通信教育界のオーソリチー▷

內容完備せる世界第一のコレスポンデンス・スクール

本會の全景

基礎强固

社會的信用絶大



會長 前文部大臣 正三位 尾崎行雄
女學部學監 前愛國婦人會々長 從三位 下田歌子

▽無代進呈・・・・
檢定試驗總覽つき
獨學成功案內

▽創立廿七週年 第五十三回新學期開講△

藍綬褒章を拜受せる
本會の三大講義錄

◎獨學で中學卒業の學力が得られる
國民 中學講義錄
◎一ケ年卒業 ◎月三回發行 ◎會費一ケ月壹圓廿錢

◎獨學で高女卒業の學力が得られる
高等 女學講義錄
◎一ケ年卒業 ◎月二回發行 ◎會費一ケ月八拾錢

◎獨學で立派に補習敎育が受けられる
國民 補習講義錄
◎一ケ年卒業 ◎月二回發行 ◎會費一ケ月五拾錢

▽此際の入會者へ大特典提供△

藍綬褒章拜受
創立廿七週年

◎東京 駿河臺
大日本國民中學會

電話神田一一一一番・一一一二番・一一一三番 振替東京四二〇〇番

今が入會するのに
一番好い時だ

◎大至急入會を斷行せよ

◎通學者好個の自習參考書

本會の十大特長

▼基礎が固い ▼會費が廉い
▼信用が厚い ▼卒業が早い
▼學制が正い ▼指導が良い
▼內容が新い ▼敎授が巧い
▼講師が偉い ▼成功が確い

◎獨學成功案內
◎各科入會案內
つき
講義錄見本 規則
申込次第進呈す

いつ入會しても講義錄は第一號から每月順序よく發送する。





中村武羅夫先生の大傑作！

「女王」

小村雪岱装幀・伊東深水口絵
四六判羽二重表装函入美本

前篇
後篇
各｛定價金貳圓五拾錢
　｛送料金拾貳錢

發行所＝東京本郷
大日本雄辯會講談社
（振替東京三九三〇）

男性的意氣に燃ゆる
快青年雄作を廻る
美しき五人の處女

胸がワク〳〵する
熱い〳〵涙が流れる

こんなに美しくて、濃艶で、哀れで、波瀾に波瀾を重ねた素晴しい大長篇小説は又とありません。

誰方も一度は御覧下さい！

非常な評判で、各方面の問題となり、飛ぶ様に賣れる筈だと感心されます。（目下十七版發賣中）

就職第一主義講義錄の中のキング

本邦唯一の就職指導講義（創立十七年就職者五千餘名）

本會名譽顧問
前文部大臣
勝田主計閣下



獨學一年で判任官

普通文官講義

＝小學卒業＝程度の學力ある人であれば何人でも本會の講義錄一年の獨習で容易く文官試驗に合格し中學卒業同資格たる判任官たり得。

＝本會講義錄は＝基礎が固いのと講義が優秀なのと年々多くの青年官吏を出すので、前の内務文部兩大臣から推稱された光榮を有す。

特典 私立大學無試驗入學・學資貸與・獎學金贈與等の外目下文部大臣の筆蹟・文鎭・書籍等大特典提供!!

第卅五回新學期!!

ハガキ葉書に住所氏名を書き「キング」による官記入申込あれば、「文官受驗手續」「獨學者判任官成功談」等を滿載した講義錄內容見本書 **無代進呈**

最近の合格實例

每回試驗の度び合格者の大多數は本會會員たるの實情であるが、本年三月施行の鹿兒島縣普通試驗においても全合格者九十六名中七十四名は實に本會々員であつた下は其實例の二三

兵營で勉學して合格



合格者林春道君は朝鮮衛戍病院看護卒として勤務中本會講義錄で勉學、退營間もなく應試して目出度く榮冠を獲られた。

給仕から判任官へ

今回合格者中の年少者たる池田清君は佐賀縣廳の給仕を勤め乍ら本會講義錄で勉學して天晴れ合格の榮を獲、試驗官初め廳内を驚かした。

小學教員の傍ら獨學



鹿兒島市で小學校教員をしてゐた下御領義盛君は、其の勤務の傍ら本會に入會專心勉學の結果、僅か一年の獨學で今回優秀な成績で合格せられ輝く受驗記を本會機關雜誌に寄せられた。

外に見本に多數發表

何れも働きながら獨學

以上の外本會では十五歳十六歳、十七歳等の年少合格者も多數出してゐるが何れも働きながら僅かの時間で獨學したのである。乞ふ來つて此の歴史ある本講義錄につき先づ判任官たられ…

獨學者は何講義錄を讀むよりも先づ本講義錄を讀んで判任官に就職されよ

東京市日本橋區濱町新大橋際

日本大學通信法制學會

電話浪花一五〇五番・振替東京二三四五六番

佛師運慶



聖心畫譜その九　（裏面參照）　荒井寛方筆

佛師運慶

文學博士　中村孝也

佛師運慶の名は、喩へば極星のごとく、我が彫刻史上において、永しへに燦たる光輝を放つてゐる。それは實に古今獨歩の名匠であつた。

運慶は鎌倉時代の初めに出でたる彫刻家であつた。その父康慶は夙に斯界の先覺者であつたが、運慶は、その遺鉢を襲いで、百尺竿頭更に一歩を進め、新たなる樣式を案出し、彫像の規式を定め、萬世不朽の名作十數點を殘した。東大寺南大門二王像は、その一つである。

東大寺は奈良の英主聖武天皇の御發願によつて創建せられたる大伽藍であつた。然るところ、治承四年十二月廿八日、平重衡の兵亂によつて炎上したので、平家滅亡の後、また再建せられ、文治元年八月、後白河上皇は親しく大佛開眼の儀を擧げさせたまひ、建久六年三月、大佛殿竣成、征夷大將軍源頼朝も供養の式に列し、建仁三年、南大門も亦竣工した。

南大門の二王像は、運慶が、父の愛弟快慶と共に、この年十六人の小工を率ゐて製作に着手したものであつた。二王は金剛神の分體であつて、口を開いて大喝するを那羅延金剛といひ、口を閉ぢて睥睨するを密迹金剛といふ。南大門の二王像は、各〻身長二丈六尺五寸、隻手に大いなる獨鈷杵を携へ、片足を踏み出し、腰を捻つて威嚇する體勢剛健を極め、壯嚴なる面貌にも、雄偉なる肢體にも、無限の力が躍動して、靈活の妙趣、眞に驚心駭魄すべき千古の名作である。

この圖は那羅延金剛の製作に當り、佛師運慶が足場の上に立ち、鋭い鑿を手にして、今や最後の一刀を加へようとするところであり、金剛力士は實寫に基き、運慶は六波羅密寺所藏の木像に據つてゐる。名工の眼光炯々として、萬象の眞相に徹到するところ、全生命が鑿の先端より迸つて、神彩奕々たる趣がある。はら〳〵と散る櫻の花、佛神感應の程、尊しとも尊し。

影？美くしい顔へニキビ
希望と惱みの青春期

私達は今迄心の奥に影と云ふものを持たなかつた。心はいつも唱つてゐた。身體は何時も踊つて居た。唱歌遊戯、スポーツ、フーさんもハーさんも皆愉快だけ持つて居る仲間だつた心の中は晴れた天氣のやうだつた。私達はいつも綺麗なお子さんだと云つてほめられた。そんな時は別になんとも思はなかつたのに何かの時に鏡を見て自分でも嬉しいやうな氣もしたことがあつてから未だイクラもたたぬのに此頃**ニキビ**が一ぱい出來て來た。イヤだなアと思つて居ると、何處かの職人らしい人が「イヤヂヤ有りませんか」と云ひ乍ら私達の側を通つて行つた私達は此言葉が一番嫌ひだ。下卑て居て、面あてのやうに聞こえて。**ニキビ**さへなければなアと急に思つて見た。先生私達は澤山の希望を持つて居ります。**ニキビ**が出るやうになつてから何だか心の奥に影が出來て來て輝く希望の前をチラつきます。先生私達の心持ちを察して下さい。若い者の心を晴ればれしいものにして下さい。先生の**ニキビ**專門藥を一日も早く送つて下さい一日千秋の思ひと云ふのは今の私達の心持の事を云ふのでせう。



私が學校の寮からこんな手紙を先生に宛て出したのはつい此頃でしたね、**マーシー**は實際キ、ますね先生。私達仲間では心配無用と云ふ言葉が流行つて居りますよ、此頃もねフーさんの云ふことが振つて居ますよ「**ニキビ**があつても心配御無用日に**マーシー**（增し）キクからイーヂャありませんか」だつて先生私達の心は晴ればれしてきました。ドシドシ友達にも紹介します。色も白くなりますね先生。サンクス生

斯んな手紙が參りました。**マーシー**は歐米に十七年間も滯在して藥學を研究されたドクトル、オブ、ファーマシー小川龜重先生の製劑で發賣以來僅々三年に過ぎませんが効力本位で非常に信用を得て居る藥であります。內用と外用と有つて內用は服んで靑年期の脂肪のカタマリを普通にし**ニキビ**の病源を自然に治し外用は付けて外からバイキンを殺して治すことになつて居ります兩方一度に使ふと理想的であります。

マーシーは日本人にも西洋人にも支那人の如く多く脂氣を食べる人種にも黑人の如き熱帶に住む人々にもキク藥學上から見て世界的良藥です**ニキビ**あらば明日と云はず今すぐ御求め下さい

内用**マーシー**

七日分	七拾五錢
十五日分	壹圓五拾錢
四十五日分	四圓
特別難症用	拾圓

外用**マーシー**

試用形	五拾錢
中形	壹圓
大形	貳圓
特大形	參圓

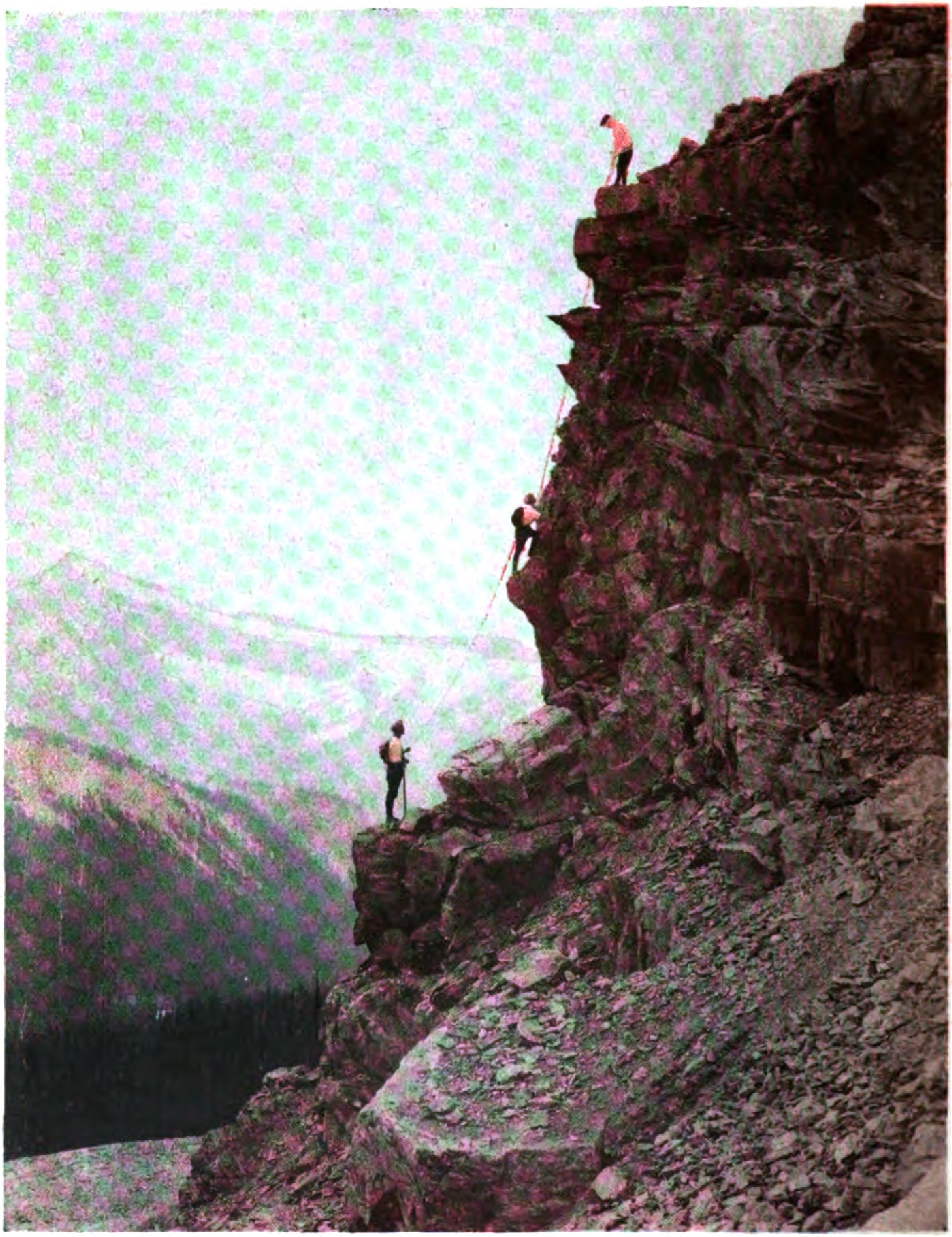
送料内地十八錢、海外四十五錢、代金引換小包は代金へ二十七錢を加へて申受く海外代引御斷り

製造發賣元 東京中野町東中野南大通り九七七 振替東京六四四二〇番

小川研究所

◎**大日本雄辯會講談社代理部**（東京振替六六二九）でも便宜御取次致します

雄大な國立公園



空に聞ゆるは禿鷹の羽音。一萬餘尺の峻峰をかすめて飛び去るかと思へば、地に見ゆるは羚羊、狼の足跡。千古の密林は谷から谷へと續いてゐる。

米國のエローストーン國立公園は、その面積三千三百平方哩、至るところに温泉湧き瀧躍り、雄大な自然の風物を以て世界に誇つてゐる。

サテどちらでせう

こゝに掲げましたのは何れも外國で著名な方々ばかり。しかも瓜二つの似顔のため、時々間違はれてトンダ悲喜劇が演ぜられるといふ始末です。サテどちらが御本人でいらつしやいませう？ (1)英國皇帝そつくりの前英國艦隊司令官チャールス・マッデン卿。(2)英國皇帝ジョージ五世陛下。(3)何處へ行つても米國大統領で通るオハイオ州の辯護士マッケルヴィ氏。(4)本物のフーバー氏。(5)奴隷解放で有名な米國のリンカーン大統領にソックリなカスウエル師。(6)リンカーン氏。

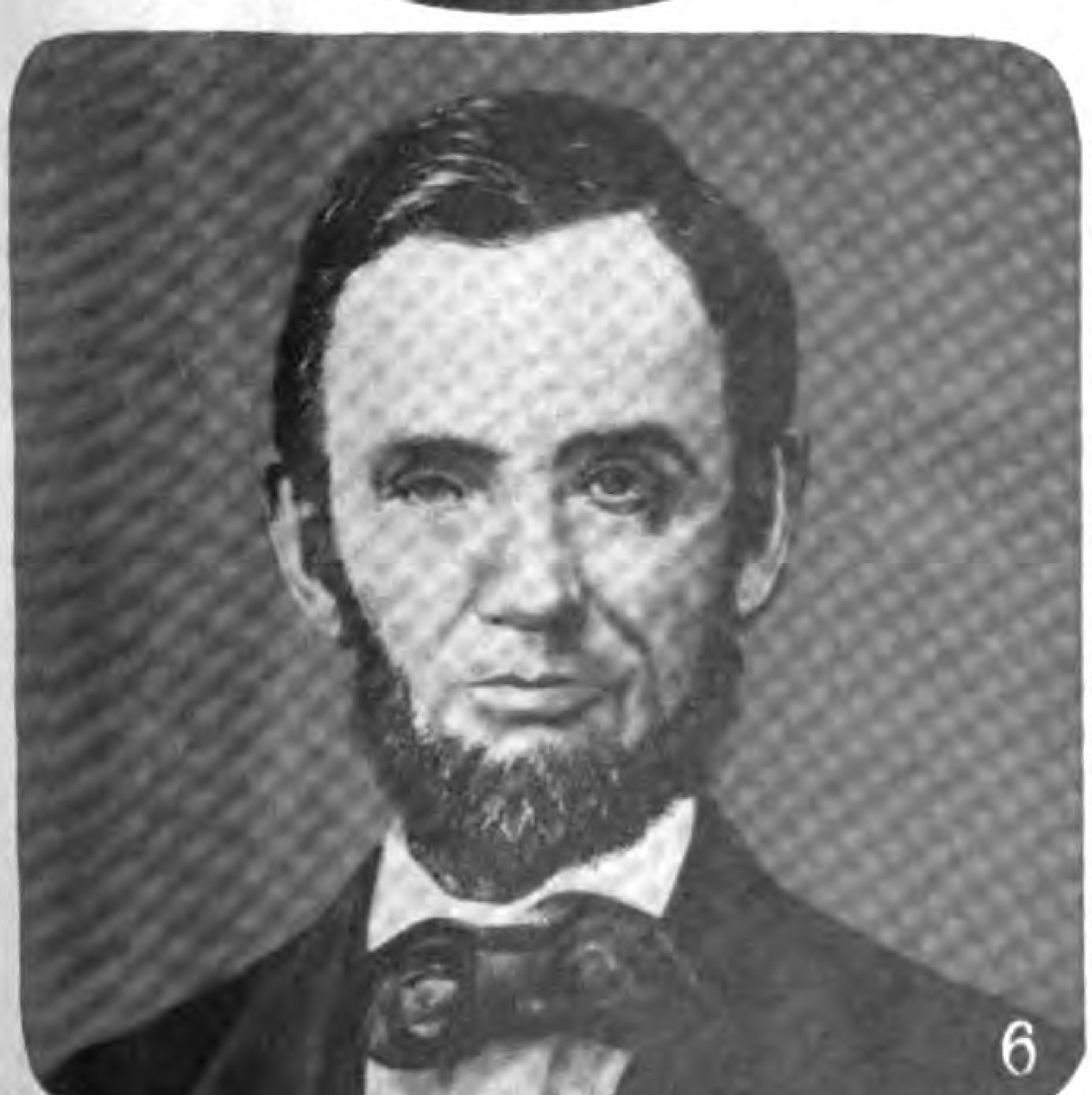












飛び上る

天下一品の快讀物！

▲過つて處女の誇を失つた美女の嘆き（悲戀悲話 見返り艶魔）

▲貧窮兒から忽ち大臣の榮冠（新大臣 松田源治）

▲唇の秘密！奇怪を極めた探偵事件（長篇大傑作 淸見陸郎氏）

▲劍聖劍豪快劍士の大秘錄公開（日本劍客傳 内田艮平氏）

▲栗島すみ子赤裸々問答錄（宮尾しげを）

映畫界の女王栗島さんと漫畫の宮尾しげを氏、遠慮會釋なく突込んで、火花を散らす愉快問答



▲映畫女優戶籍しらべ

映畫女優のことなら何でも判る。噂の種、話の泉、雜誌界空前の整つた戶籍しらべです

▲日本アルプスに芽ぐんだ悲戀（奇しき緣物語 山の勇者）

▲露國の皇女か？大詐欺師か？（世界奇談探し）

▲金儲け小說 岡辰大福帳（スグ應用出來る！妙味津々の金儲道）谷 孫六

程面白い

▲男装の女 謎の川島芳子（風雲の間に出没する快少女）朝名輝

▲大探偵小説 蜘蛛男（讀書界大熱狂！手に汗握る巨匠大作）江戸川亂歩

▲祐天吉松が義侠の助太刀！（痛快！侠客物語）

▲大逆事件犯人檢擧の殊勳者（大審院板倉判事發表）

▲仇討奇談特選傑作集（苦心慘憺血と涙、悲壯の仇討物語三篇！）

▲白井喬二先生大傑作發表（見逃す勿れ大傑作）

▲壯絶快絶！男でムる（義侠豪膽の快男兒が天晴れ譽れの大場面）

▲美男美女 かまいたち（村上浪六）

▲戀愛小說 王冠（中村武羅夫）

▲探偵小說 阿片夫人（大下宇陀兒）

▲佳人薄命 銀の鞭（加藤武雄）

▲時代小說 お洒落狂女（本田美禪）

▲劍侠小說 かげらふ噺（大佛次郎）

世相百態 面白パック
……一流漫畫家總出
……素敵滅法面白い

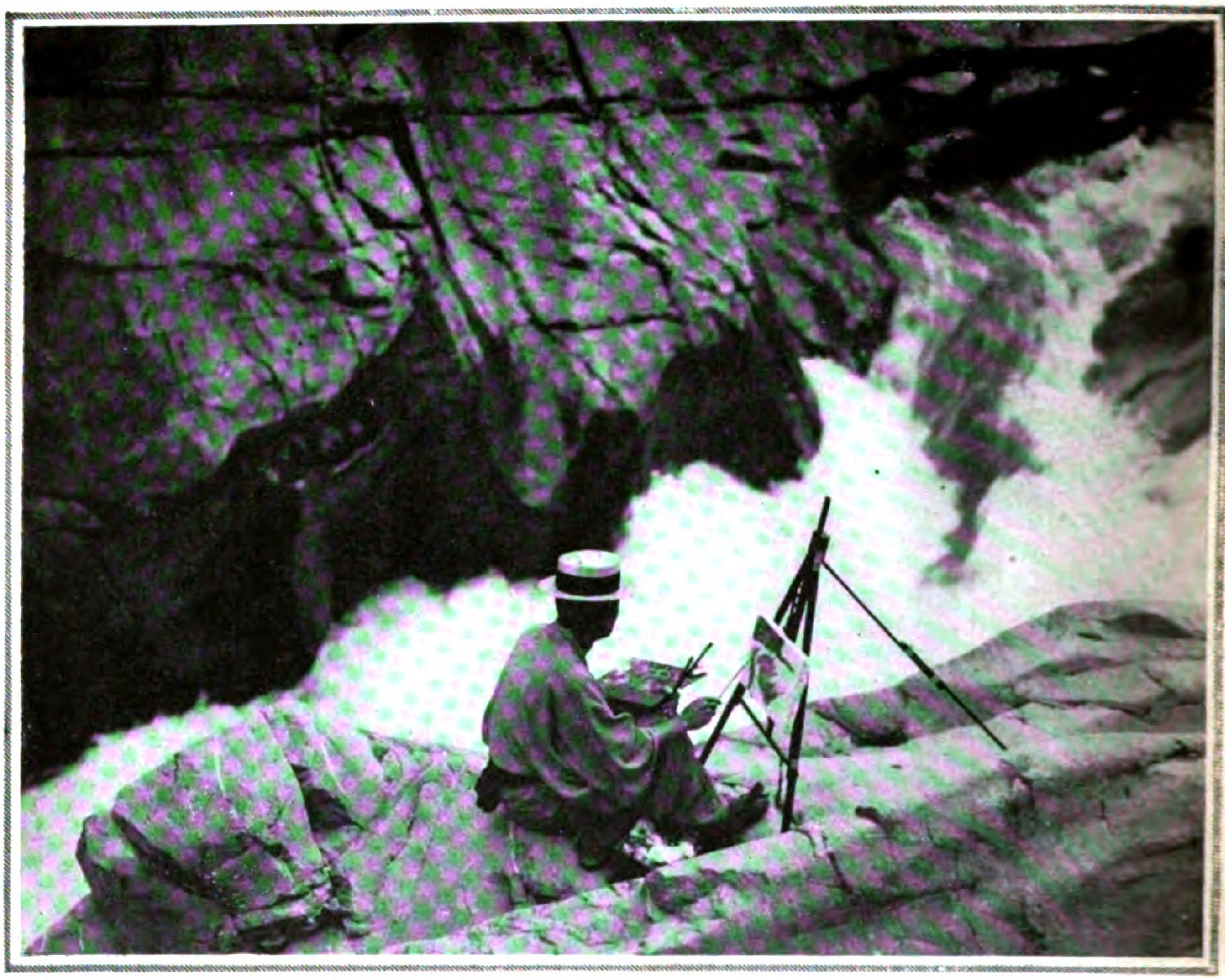
右の讀物全部 講談倶樂部 九月號にあり
尚大傑作數十篇！

一冊 六十錢

東京本郷駒込坂下 大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇番）

—全國書店にあり、賣切れぬ中即刻お求めあれ—

谷川のほとり

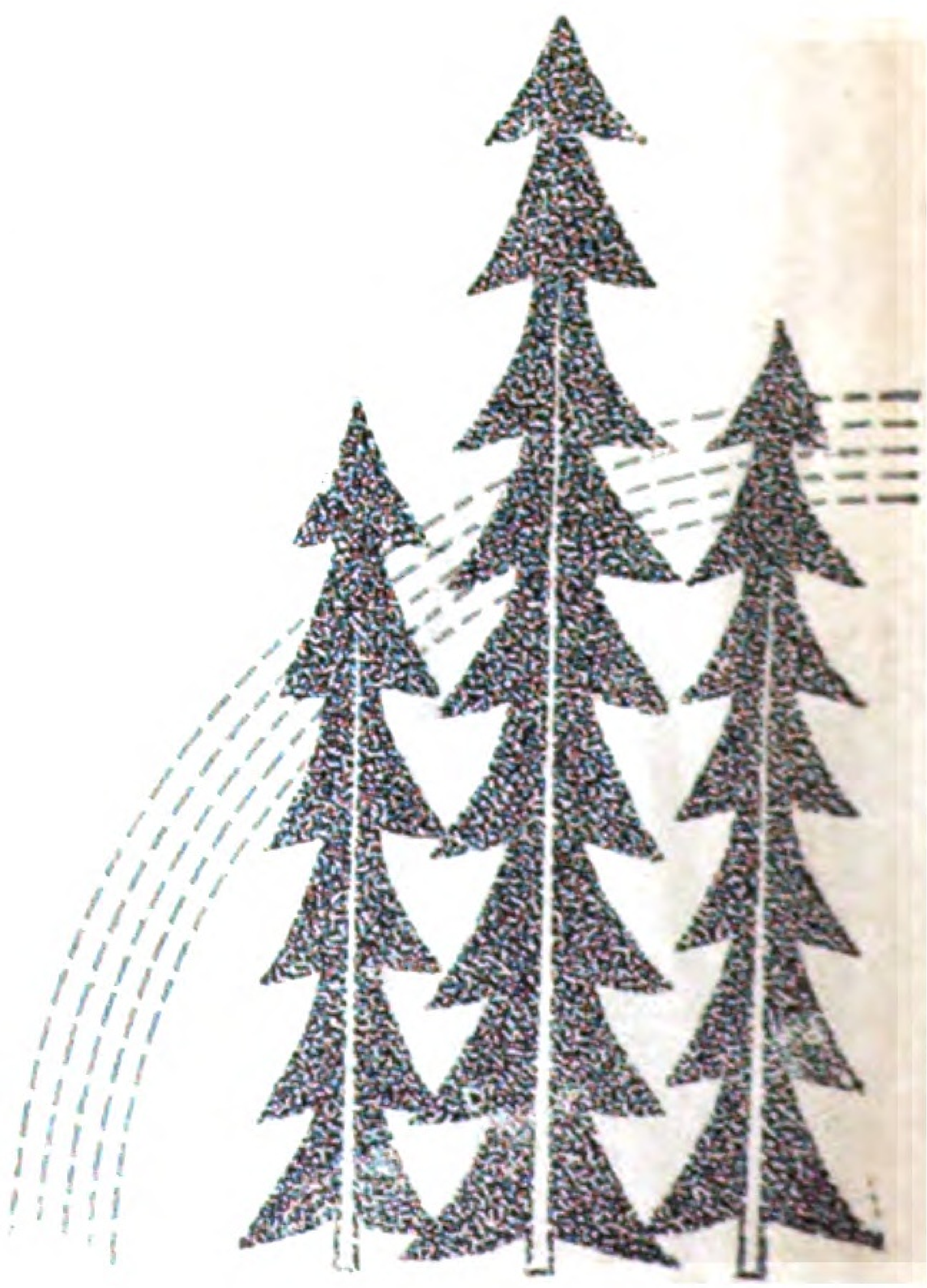


秩父の歌

尾山篤二郎

岩の秀を越えて墜落る水白しまたたくひまもとどまざらなむ
岩燕ときどきひらりと飛びをれり草の穂一つそよがざりけり
大なる水成岩が焼けをれりむつとして熱氣面にせまる
山川の岩もとゆりてゆく水のよどまるすゑはたぎちたりけり
落ちたぎちとどろく水を涼しむと面刺す暑き岩も踏みつゝ

（寫眞は秩父山中にて寫生中の和田英作畫伯）



秋はそつ



秋きぬとめにはさやかにみえねども
風の音にぞおどろかれぬる（古今集）
耳を澄せばかすかに聞ゆるものは羊の草食む音。眼を放てば遙に見ゆるものは慌しき小舟の様子。そうだ、もう秋だ。何處からともなく秋はそつと訪れて來たのだ。殘暑





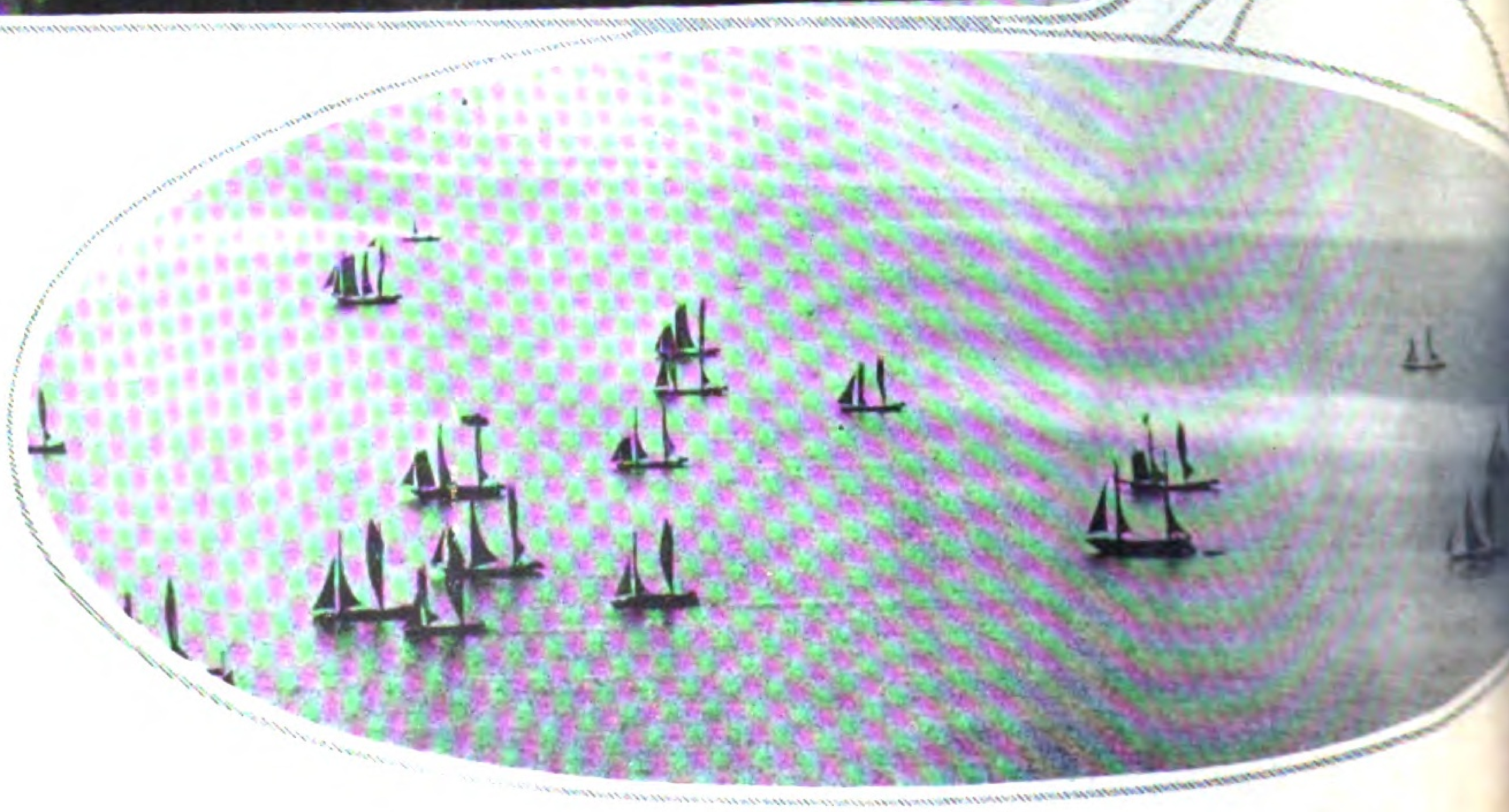
と來た





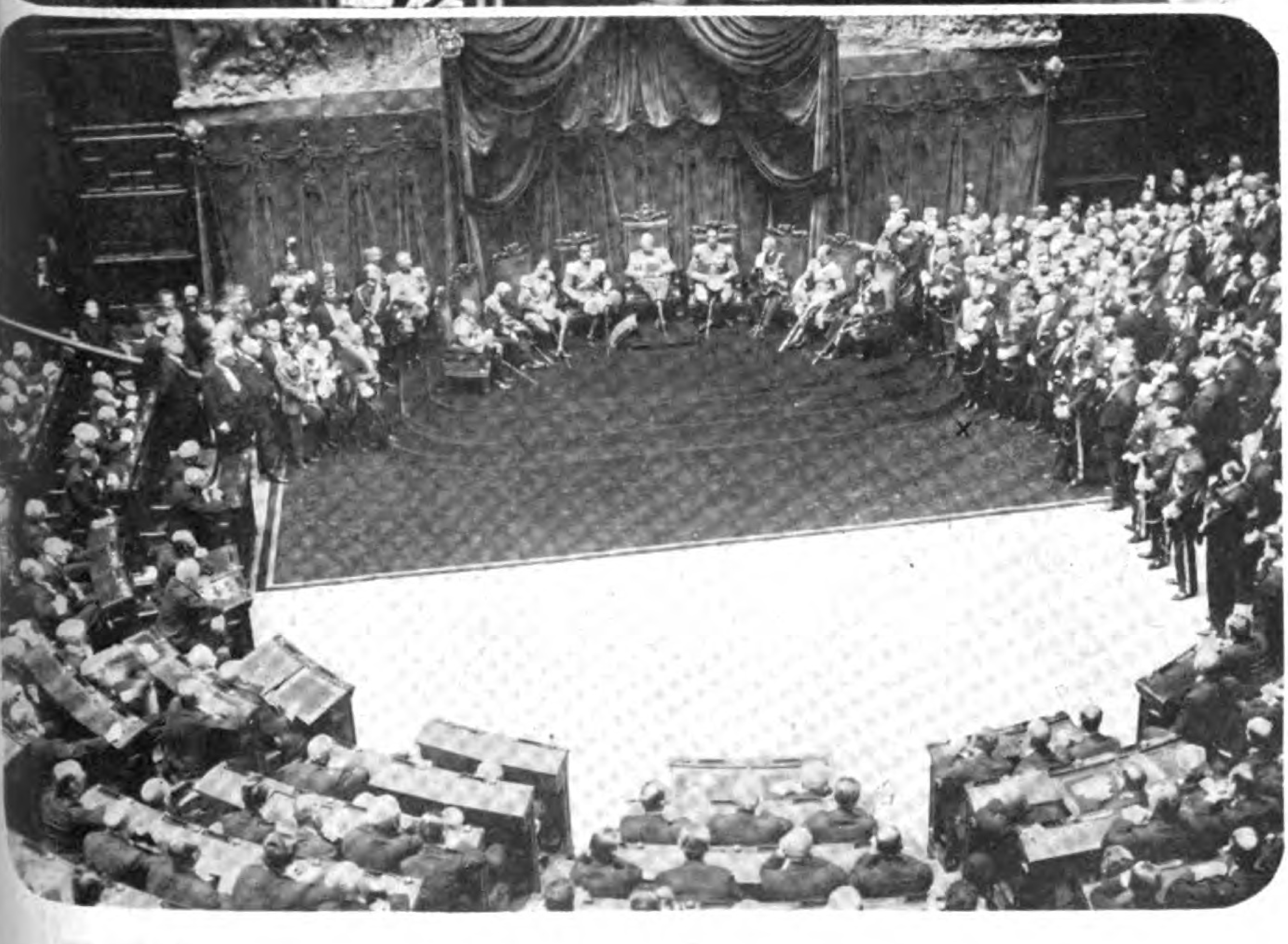
を厭ふ團扇のはためきもそう長くはあるまい。軈て樹々にはつやゝかな果實が熟れ出す事だらう。

（右頁下は音樂家松平里子女史と令妹。左頁上は同じく永井郁子女史）



海外通信





（上）今全米は勿論、世界の野球ファンの血を湧かせてゐるものは世界野球爭覇戰である。寫眞は大統領フーバー氏が始球式に臨んで最初の球を投げてゐる處。前列帽子を手にせるは農務長官ハイド氏、左へ大統領夫人、フーバー氏、大藏長官メロン氏。（下）伊太利ファッシスト制度第一議會の開院式。中央の玉座は皇帝エマヌエル陛下。玉座の右×印はムッソリーニ氏。


ウテナ
色の黒い方・赤黒い方・日ヤケ・ニキビ吹出物等のでき易い方・垢ぬけせぬ方・あぶら顔荒性の方・小皺を除きたい方・すべて色の白くない方は『ウテナ』を愛用なさいませ。
色白く誰でも美しくなる
眞夏の魅力！色白い素顔に『ウテナ』！
新秋の幸運！美しいお化粧に『ウテナ』！
『ウテナ』は色を白く美しくする獨特の新發見から政府の專賣特許權を二つも保有し、赤津醫學博士が有効を證明する科學的高級美白料で、その効果は、百人が百人、どなたにもすぐからわかります。
—『ウテナ』定價一圓、二圓、三圓—化粧品店藥店に有—
姉妹品
ウテナクリーム
品質の優秀と内容の豐富と、舶來品にまさる評判の『ウテナクリーム』は、雪印（無脂肪六十錢）月印（脂肪中性七十錢）花印（脂肪性一圓）の三種類揃って素晴しい人氣で愛用されます。
——東京　ウテナ本舗　久保商店——



良書の利益限り無し！

見よ！光明輝き！希望生ず！感激感動の大名著揃ひ！

識見を廣め、實力を養ひ、新時代に雄飛せんと欲する者必讀！

鶴見祐輔先生
熱血の大快著

英雄待望論

「大英雄出でよ！大思想家生れよ！太平洋を中心に大いなる時代來らんとす、田園に學園に第二の南洲、第二の山陽奮起せよ」本書を讀んで感激せざる者なし！定價五十錢、送料八錢

自動車王フォード原著
加藤三郎先生譯

今日及び明日

世界最大の事業家で大富豪であるフォード氏が刻苦慘憺の體驗と、意氣抱負を率直に述べたもので、世界的に歡迎を受けてゐる處世成功の活教訓である。定價貳圓貳拾錢、送料拾錢

澤田 謙先生
畢生の大快著

ムッソリニ傳

小學教員をふり出しに、奮鬪又奮鬪、遂に獨裁首相として新興伊國を双肩に荷ふ迄の大活躍！一讀何人も感激熱狂する大出世物語。定價壹圓貳拾錢、送料拾錢

大瀬鞍馬先生
苦心の大名著

三井王國

三井王國が生んだ巨人傑人の大活躍が恰も眼前に見るやうに描いてある。面白くて活きた教訓に富む快讀物。定價貳圓、送料拾錢

海軍中將佐藤
鐵太郎閣下著

新日本への道

思想の惡化、社會の腐敗、あゝ日本を如何、我が同胞を如何、と滿身の熱血熱涙を注いで著はしたのが本書である。愛國の至誠胸に迫り、高邁の識見、大光明を點ず。定價貳圓、送料拾貳錢

鶴見祐輔先生
英文原著(米國で出版)
澤田 謙先生譯

現代日本論

日本の世界的地位、思想の潮流、文學の諸傾向、國民性の特色、將來の運命等を詳說し、英語國民の間で大歡迎を受け、感激と衝動とを與へた問題の名著である。定價壹圓六拾錢、送料八錢

◎全國各地信用ある書店にあり――發行所（東京本鄉）大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

色の黑きを悲しむ勿れ

五大博士大家苦心發明の 白色美身强壯法の書籍

キング愛讀者へ無代進呈

今は科學の時代である、あらゆる事柄もサイエンスの力に依つて解決するニキビもソバカスも色黑も吹出等もサイエンス的に研究した結果其の根本原因を探究し得て初めて治療法も確實した譯である。

試みに御質問します……ニキビは額に出來て居ますか腹の中に出來て居ますか？……ソバカスは額ですか御腹ですか色黑や赤顏吹出等は額ですか御腹ですか……何人もお答へになるでせう「額」と……然しそれは間違です總てお腹の中です。

何故と云へばニキビソバカス色黑吹出物等の原因は何れも氣候風土や飲食物の關係で胃腸内に發生した悪血毒素が……即ち腸自家中毒の作用に依りて自然と顏面へ吹出すものである。從來只上部だけの疾患と考へて無暗と塗り藥や單純な化粧水等を塗り付けても治らなかつたのは皆右の如な科學的の研究もせずに「ニキビやソバカス色黑等は上皮の疾患故塗り藥が一番宜しかろ」位な事で居たからである。つまり科學的研究が足りなかつたからである。現に歐米各國では右の學理に依つて完全な内服藥が發明されドシドシ治療して居る爲めニキビソバカス等の見悪くい男女を殆ど見掛けぬと云ふ事であるが然し夫れ程效力確實の外國藥も氣候風土や飲食物の全然異る我東洋人種には效能なく却つて髮の毛を赤くする等と云ふ危險が伴ふので我醫藥學界に於て有名なる藥學博士島田耕一先生駿津先生越澤先生等の五大博士大家は共に協力苦心研究されて遂に内服に依つて之等の原因毒素を除きニキビソバカスを消滅して色を白く美しくするハルナーと云ふ藥物を發明されたのであります。



ハルナーは現に東洋至る處の藥局藥店で其特效を確信して取次販賣して居りますから是非御買求め御試驗下さい輕いニキビやソバカスなら二圓分か三圓分で治癒の御喜びを受けた例も澤山あります藥價は輕症向一圓、二圓、三圓、重症向五圓拾圓等です。

東京市京橋區築地橋際
合資會社 濟生堂製藥所
電話京橋(56)一〇二七番 振替口座東京一七二〇一番

無代進呈

色白美人となる書籍――非賣品

我五大博士大家は協力して白色美身强壯法と云ふ書物を著述された此の書籍はニキビの原因と除去法、色の黑い理由と色白くなる法、ソバカスの消除法、吹出物、肥胖病、赤顏、油顏等の療法其の他を滿載してありますが今回特に何人にもキング愛讀者としてハガキで御申込次第一冊宛無代進呈します。

◎ハルナーは全國到る處の有名藥店にて販賣して居ります。

初秋の香



たちさけばさと匂ひたち部屋のうち靜けき野の西瓜なりけり——若山牧水

明けき燈影の下にゐてふくむ葡萄の熟實あまかりにけり——矢島歡一

キンググラフ





あめ

白雨や
山伏里に
入かゝる

萬乎



くもり

渺々と
人のなき野や
雲の峰

丑二



はれ

顔洗ふ
川邊涼しや
魚の影

蘭子

わがスポーツ



(體操)
永井道明



(スキー)
長岡外史



(柔道)
嘉納治五郎



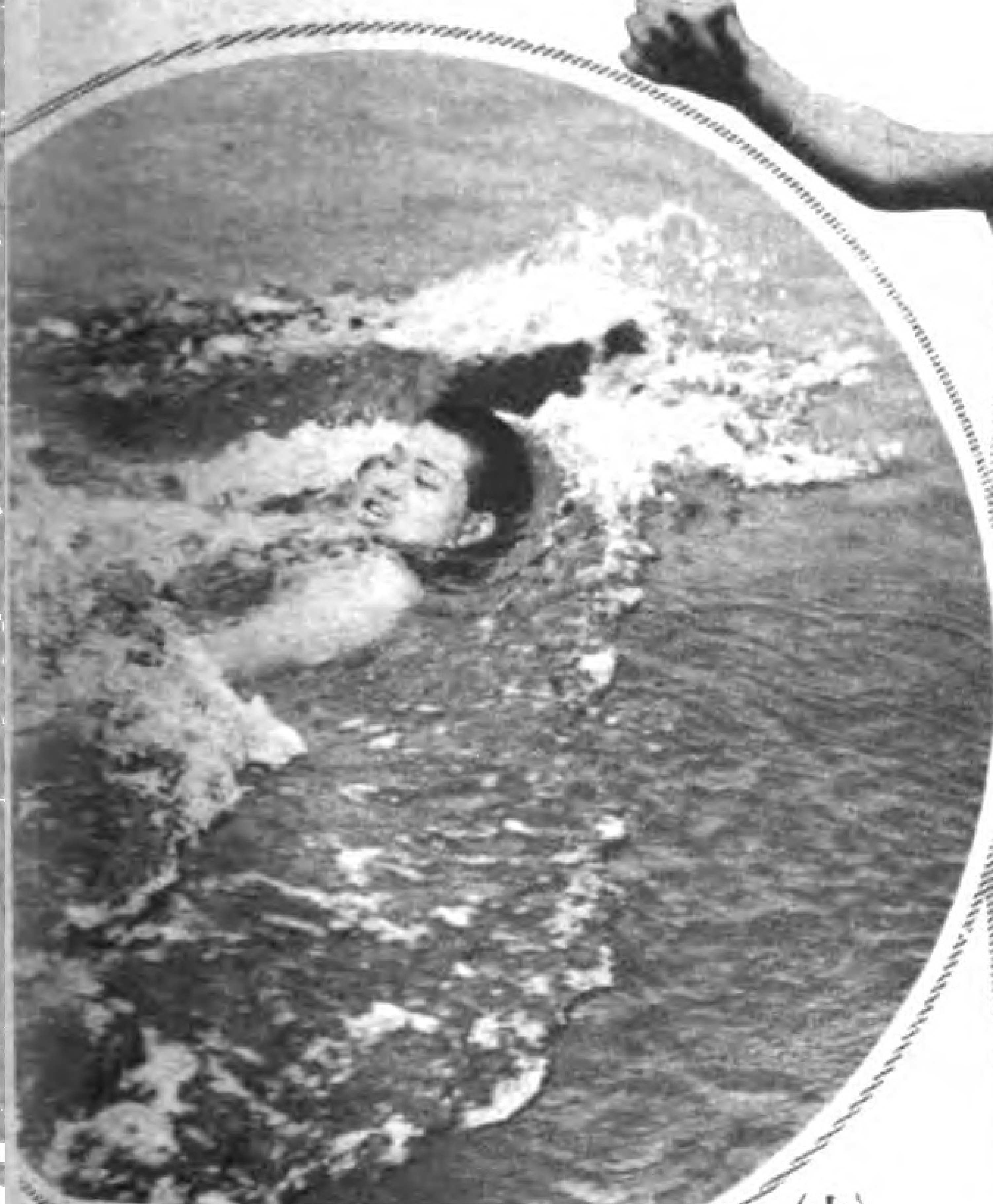
(マラソン)
金栗四三



(山岳)
小島烏水

最近わがスポーツ界の發達は實に目覺ましいものがあります。次から次へと新記錄が作られ、次回のオリムピックが待遠しい位です。併し日本の運動界が今日の隆盛を見るに至つた蔭には、今から二十年、三十年前斯界の為につくされた先輩の功を沒する理には參りません。上段及下段の肖像はその主なる人人です。





(右)最近圓盤投に新記錄をつくつた人見絹枝孃。

(上)背泳界の世界的選手入江稔夫。



(陸上)
岡部平太



(ゴルフ)
赤星六郎

界の思ひ出

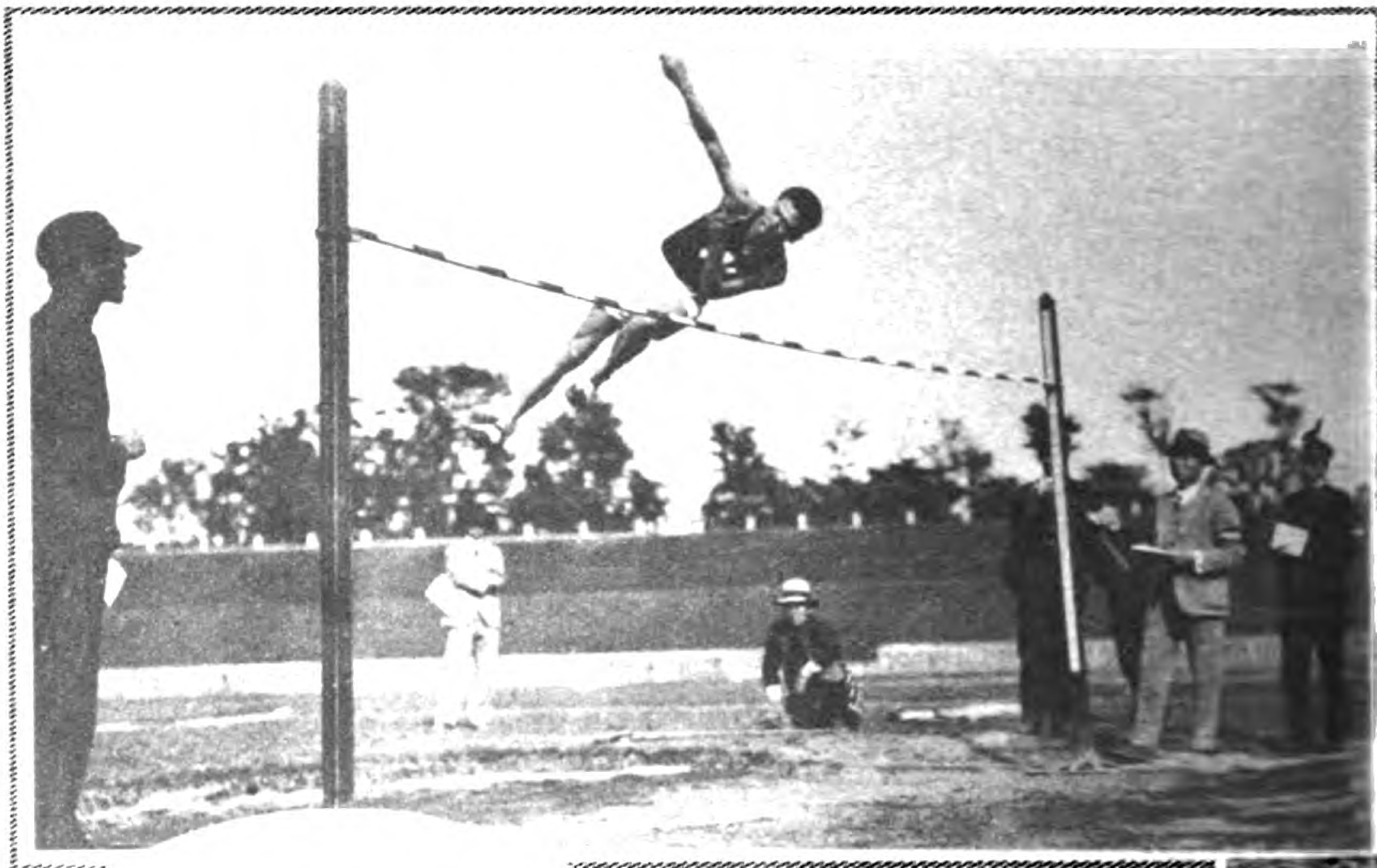

（劍道）高野佐三郎


（水泳）杉本傳


（庭球）熊谷一彌


（野球）安部磯雄


（一般）岸清一







（上）走高跳に新記錄をつくつた木村一夫。

（左）三段跳の第一人者織田幹雄。


（女子運動）二階堂トクヨ


（ボート）山口鋭之助

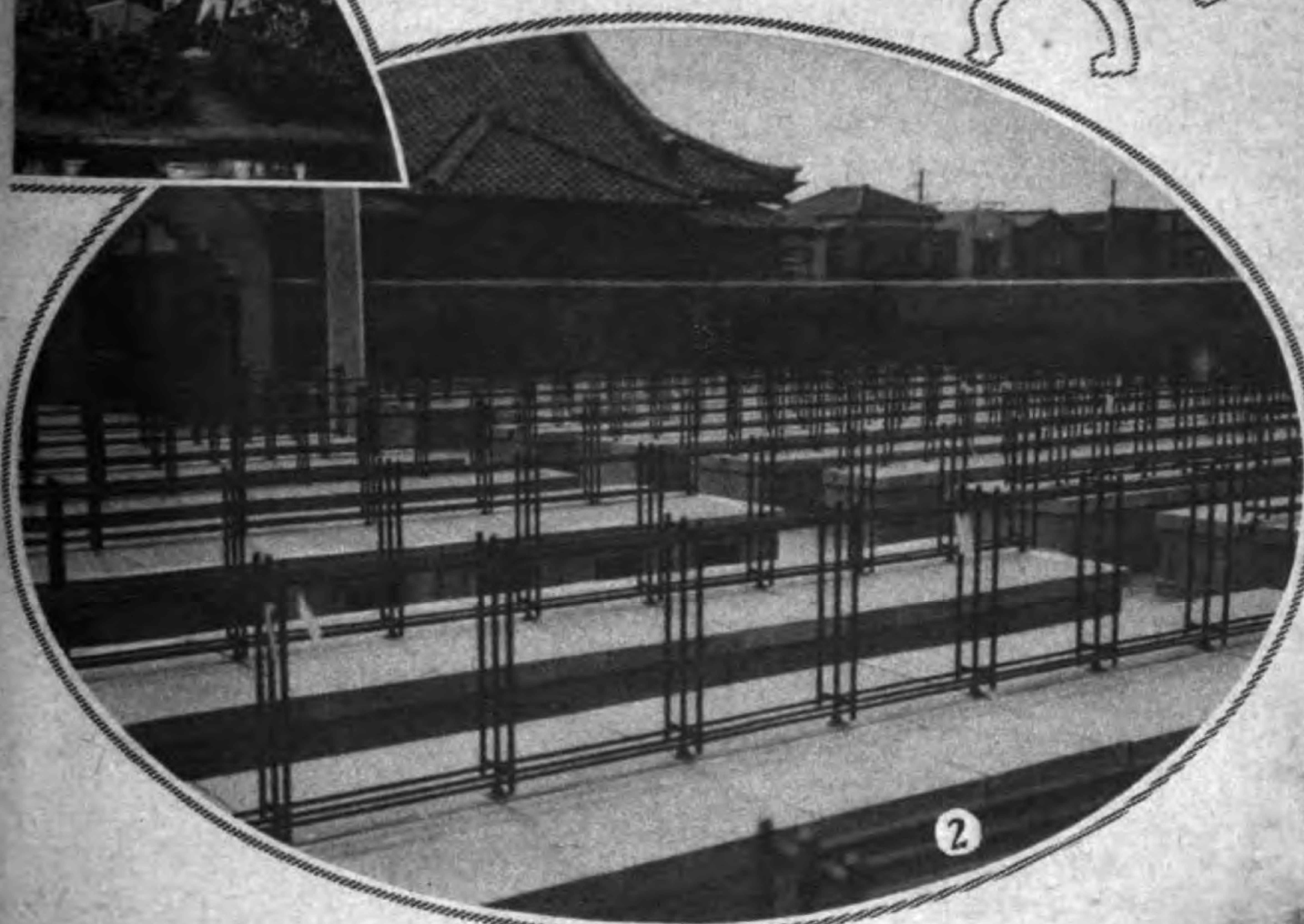
意外の所に

世の中がだん〲進みますと意外の世界に意外のものが出來て來ます。(1)東京驛の地下室にあるモダーン理髪屋さん。頭を刈つて別室で一風呂浴びてゐる間にお客さまのワイシャツからカラー迄チャント洗濯してくれるといふ便利な設備。(2)これがお墓と云つても誰も本當にしない程最新式なコンクリートの墓場。本所の法樹院に出來たもので上の鐵棒は卒塔婆をたてる處その下が先祖代々のお骨を納める處。(3)一寸見たところでは


1

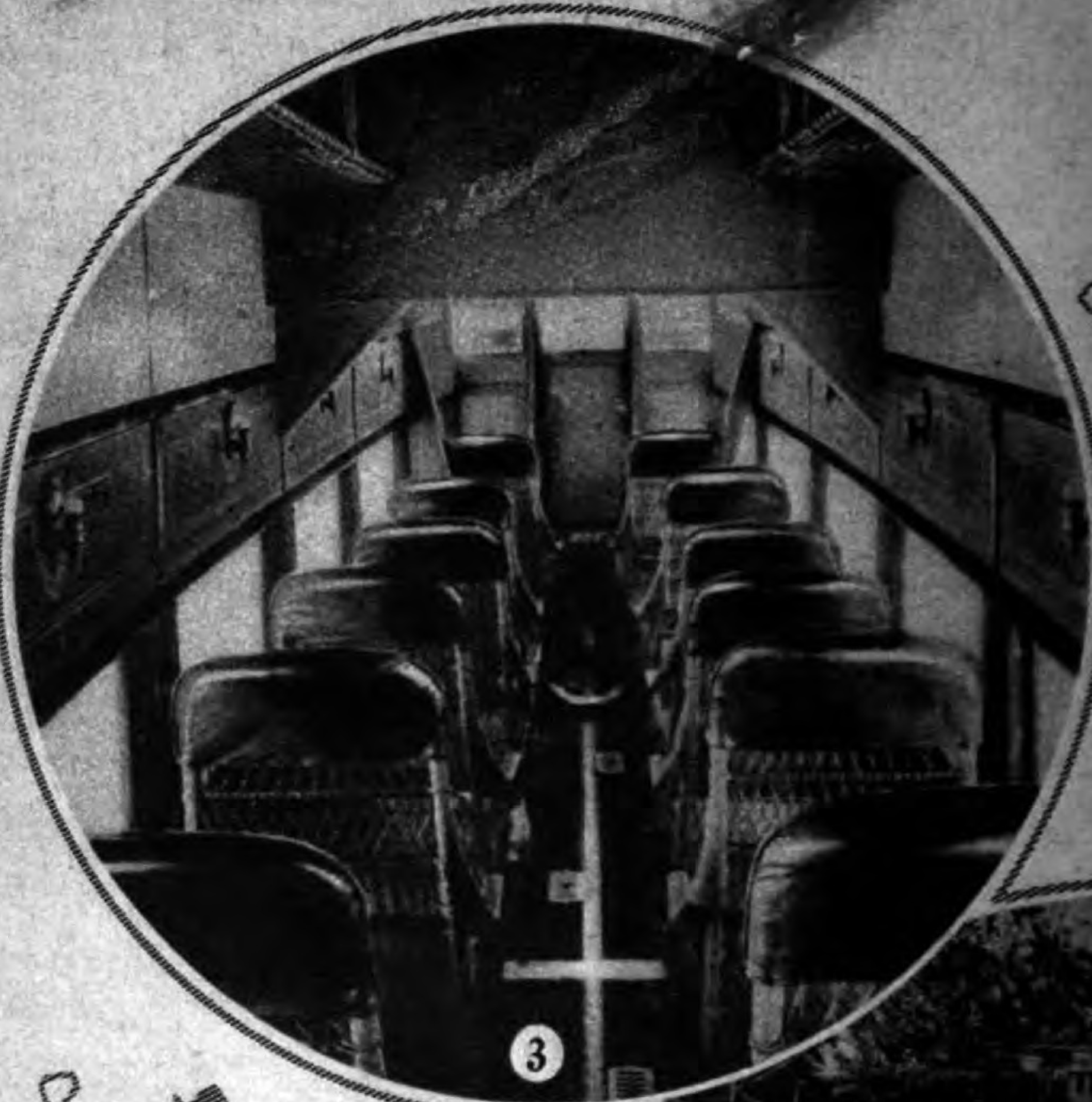





2

意外の世界





③



④



⑤





汽車の一等車の様に思はれますがその實は米國旅客輸送飛行機の内部です。日本にも軈てこんなのが出來ませう。(4)流石は土一升に金一升の東京少しの冗もありません。この立派な公園？は新築の松坂屋屋上に出來たものです。(5)見るからに壯麗な部屋ではありませんか。ピアノからシャンデリアから何處のホテルかと見擬ふばかりです。これは大阪商船南米航路のサントス丸の内部で、寫眞は一等船客の社交室であります。





前田曙山氏會心の傑作『怪盜夜叉王』は愈〻本號より連載され、天下の讀書子を熱狂させる事になりました。(上)は書齋に想を錬られる前田氏、(下)はその挿繪に縱横の彩筆を振はれる山川秀峰畫伯。

登録商標

黴毒と體毒を

切らず注射せず治し美體にする

内服藥「ベルツ丸」の効顯

▽捨て置けぬ梅毒性の諸症

四季を通じ顔色蒼白にして季節の變り目毎に頭、顔、手、足、又は身體全體に吹出物や腫物が出來た子供を澤山見受けます。これは親の不品行が罪もない子供に報いたので遺傳梅毒と云つて居ります。又神經衰弱に似た頭痛を覺え腰と言はず頭と言はず倦怠疲勞、全く仕事どころか身體の置場所もない程いやな氣持で毎日過して居る方々の多くは梅毒性に因出する諸疾患ですから一日も早く適當の方法で治療せねばなりません。黴毒は自分一個の病氣に止まらず妻を苦しめ子を泣かし身を害ね一家を擧げて破滅に導くのみならず遂には國家をも亡すと言ふ恐ろしい亡國病であります。昔ローマの倒れたのも此の病氣だと言はれて居ります。恐れても恐るべきは此の病氣であります。

▽黴毒體毒は内服薬で根治出來る

最近醫學の進歩發達は非常なものですが、悲しいかな黴毒や體毒には内服藥では現在弊社創製藥ベルツ丸の外には發見されて居りません。手術が厭だ注射が嫌ひだと言ふ方は是非ベルツ丸を御服用下さい。切らず注射せず梅毒體毒を一掃します。ベルツ丸は我が國醫學界の大恩人ベルツ博士の創製されたものですから絶對に信用出來る良藥であります。既に御承知の如くベルツ博士は明治九年我が國政府の懇請に依つて來朝せられ爾來三十年間東京帝國大學教授宮内省御用係りとして令名天下に轟いた名醫であります。

▽諸毒を除去すれば健康となり美體となる

ベルツ丸は實にこうした權威ある藥ですから梅毒、りん病、さう毒、梅毒性リウマチス。冷え脊髓、惡性のニキビ吹出物又は黴毒性にて頭腦惡き方や常に便祕性にして苦しむ其他凡て梅毒性から來た諸疾患に思ひ當る方は速にベルツ丸を服用下さい。切らず注射せずして血液中の諸毒を大小便に夜つて體外に排泄します。試みに四五回服用すれば直ちに心身の氣力は快復して頭腦は輕くなり胃腸は健康になり。食慾は進み。知らず識らずの間に血液は淨化され日ならずして全治の悦びに達します。これ迄御蔭様で助かりました一家幸福に暮して居ると言ふ禮狀を澤山頂いて居ります。梅毒や體毒の爲めに是れまで數十本注射をしても尚且つ全治せぬ方がベルツ丸の服用に依つて全快したと云ふ實例が澤山あります。注射の御嫌ひの方は一日も早くベルツ丸をお試めし下さい切におすすめいたします。





藥價は輕症用參圓、重症用五圓、頑固用拾圓、常服根切用貳拾圓。特別大德用參拾圓送料内地十八錢領土六十五錢代金引替は切手三十錢封入

東京市日本橋區濱町三ノ四（新大橋下車）

鈴木日本製藥社

電話浪花一〇六番
振替東京一〇五番

回講談社代理部（振替東京六六二九）にもあり

少年少女の皆様！

少年倶樂部

九月號の附錄はステキです

夏休み第一の友!!

少年には少年倶樂部あり
少女には少女倶樂部あり　どちらも素敵に面白い！

◎夏休み愉快袋

こんな愉快な附錄は日本に始めてです！

▼袋をあけると何が出るか？　とても面白い！

▼少年手品玉手箱…（これで手品をやつてみんなをあツと云はせると面白い）
▼熱狂野球盤…（仲よしのお友だちとやれば暑さも忘れてしまふ）
▼綱引き遊戲…（家内中の人が面白く遊べる愉快な遊戲道具）
▼ふしぎカード…（奇拔です不思議ですこんなおもしろいカードはない）
▼智慧の板…（十四枚の板を組合せると人犬鳥花、其他何でも出來る）

以上のやうな色々なもので此の夏休みがとても樂しく暮らすことが出來ます。　大奮發の附錄です

少年讃歌や眞田幸村等々小說はいよ〳〵面白い

此の外戰爭物語、愛國物語、劍客物語、愉快な漫畫、などいつもより

うんと澤山あります　定價ヤツパリ五十錢（送料五錢）

八月十日頃發賣　…賣切れぬうちに早く本屋へ賴んでおいて下さい

ぜひ御覧下さい！

少女倶樂部

九月號又々大ふろく

お早く御覧下さい

◎明治神宮参拜寫眞帖

本社寫眞部が特に謹寫したもので御本殿拜殿寶物殿から寶物の數々外苑の絶景からお庭からすつかり居ながら拜觀出來る大畫報であります。

◎好かれる少女アルバム

誰でも心がけ次第で人から好かれ尊敬されるものです。このアルバムはどうすればさうなるか寫眞でくはしく説明した實行しやすいものです。



本誌の大呼び物

▼乃木靜子夫人畫傳

▼一休漫畫物語……

▼輝く山々　吉田絃二郎

▼朝の雲雀　佐藤紅緑

▼正義の楯　宮崎一雨

▼七本椿　吉屋信子

▼あべこべ玉　陸奥速男

此外いつもの通り面白い讀物まん書澤山

定價 附録共 五十錢 送料三錢

少年倶樂部 少女倶樂部 發行所

東京・本郷駒込

大日本雄辯會講談社

（振替・東京三九三〇）

ぢ疾は世界人類の苦惱！

かくして速かに根絶を圖れ
權威ある自宅療法の推奬

東京肛門病院長　谷　泉　述



世界人類の六十パーセントは痔疾患者であるといふ、余の見聞する處に於ても特に印度支那方面の如きは殆ど全部の人々が大なり小なり痔疾に呻吟してゐる有樣である。痔疾！この恐怖すべき肛門病こそ第二の亡國病として今更ながら戰慄に價する。しかして本症は、初期の裡非常な苦痛のない爲、患者は迂濶にも之を等閑に附する傾向多く、殊に婦人の如きは場所柄だけに之を隱ぺいするの風があり、爲に病魔は情容赦もあらばこそ、骨肉細胞の深きに入り、亦肺、肋膜、心臟病等の餘病併發の憂目を見、名狀すべからざる苦悶と慘狀を齎らすのである。

痔疾！痔疾！余は東京肛門病院にて多くの痔疾患者を診療するの時、常に念頭を離れざりしものは、種々なる事情の爲、責任ある醫師の治療出來ざる人、或は治療を嫌ふ人を如何にして救濟するかの問題であつた。即ち權威ある自宅療法藥の創製こそ！この氣の毒なる人々を救ふ最大の道ではないか！余は之を信じ、余の三十有餘年の實際的經驗と更に加ふるにドクトル・メヂチーネ谷岩太氏の最新學説を斟酌し、價格を超越せる高貴藥を配して、痔疾ヒットを江湖に送つたのである。

ヒットは含有各藥物の完全なる效果を速進せしむべく、最も愼重に配劑され、從つてその鎭痛、消炎、防腐、殺菌、止血、吸收等の實際的治療效果を最も安全に、最も迅速に擧げ得るのであり、この點斷然一般市場の痔疾藥と選を異にしてゐる。かくてヒットは手術を欲せざる人、できざる人等に眞に理想の自宅療法藥として推奬するを憚らないのである。

世に痔疾患者多く、痔疾藥亦枚擧に暇なき程であるが、醫藥をその儘賣藥とせるものは蓋しヒットを以て最初とする。江湖幾萬の痔疾に惱む方々よ！宣傳のみを生命とする舊式賣藥や家傳妙藥等と稱する駄藥に迷はず、速かにヒットによつて恐るべき肛門病を根本より掃蕩せられよ！初期輕症の人は勿論、いかなる重症者も決して悲觀は無用である。

（ヒットは三種あり。挿入、塗布、內服、挿入は內痔核、痔出血、內痔瘻等に適し、塗布は痒痔、裂痔、脫肛、痔核、痔瘻等の外部症狀に良し、內服は一般痔疾を輕快ならしむるの效著大なり。以上三種を以ていかなる痔疾と雖、自宅で自分獨りで安全に治療し得るのである、

ヒット藥價、挿入藥、一圓、二圓、五圓、十圓、塗布、五〇錢、一圓、二圓、五圓、十圓、內服、一圓、二圓、五圓、尙治療速進に**ヒット式痔バンド**あり。一具一圓。全國到る處の各藥店にあり。發賣元は東京市銀座新肴町八（振替口座東京七二二二）大阪市西區新町通一ノ二（振替口座大阪一〇六）丁子堂藥房（誌名記入御申込み次第說明書進呈）

撃てベーブ！　撃てベーブ！　全世界の野球フアンは彼れの一撃毎に血を湧かせてゐる。今年のホームランは六十か七十か。撃てベーブ！　撃てベーブ！

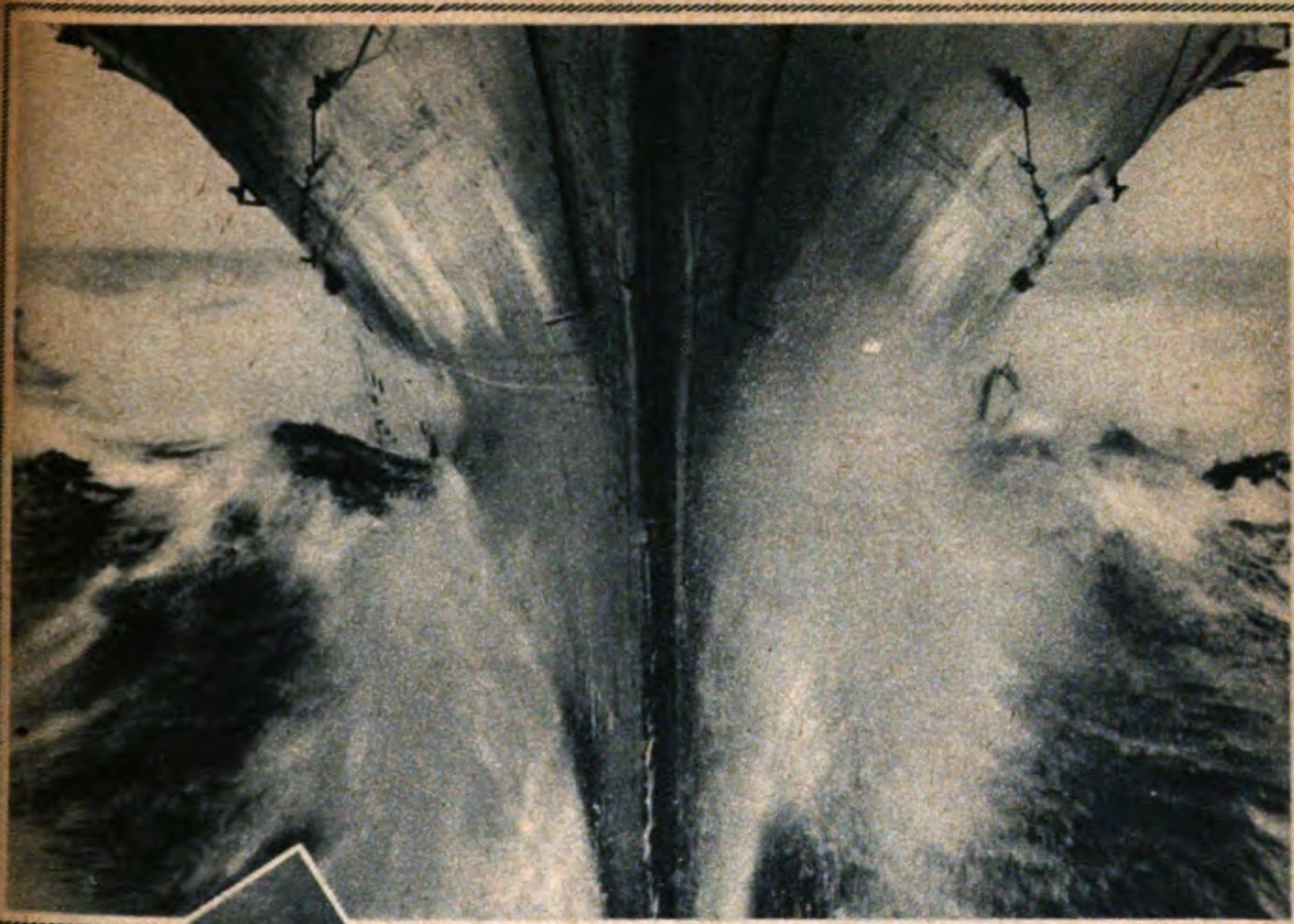






（寫眞左は本壘打王ベーブルースが猛練習の光景。下はシーズンに臨んで體育に餘念のないところ。）

突進！





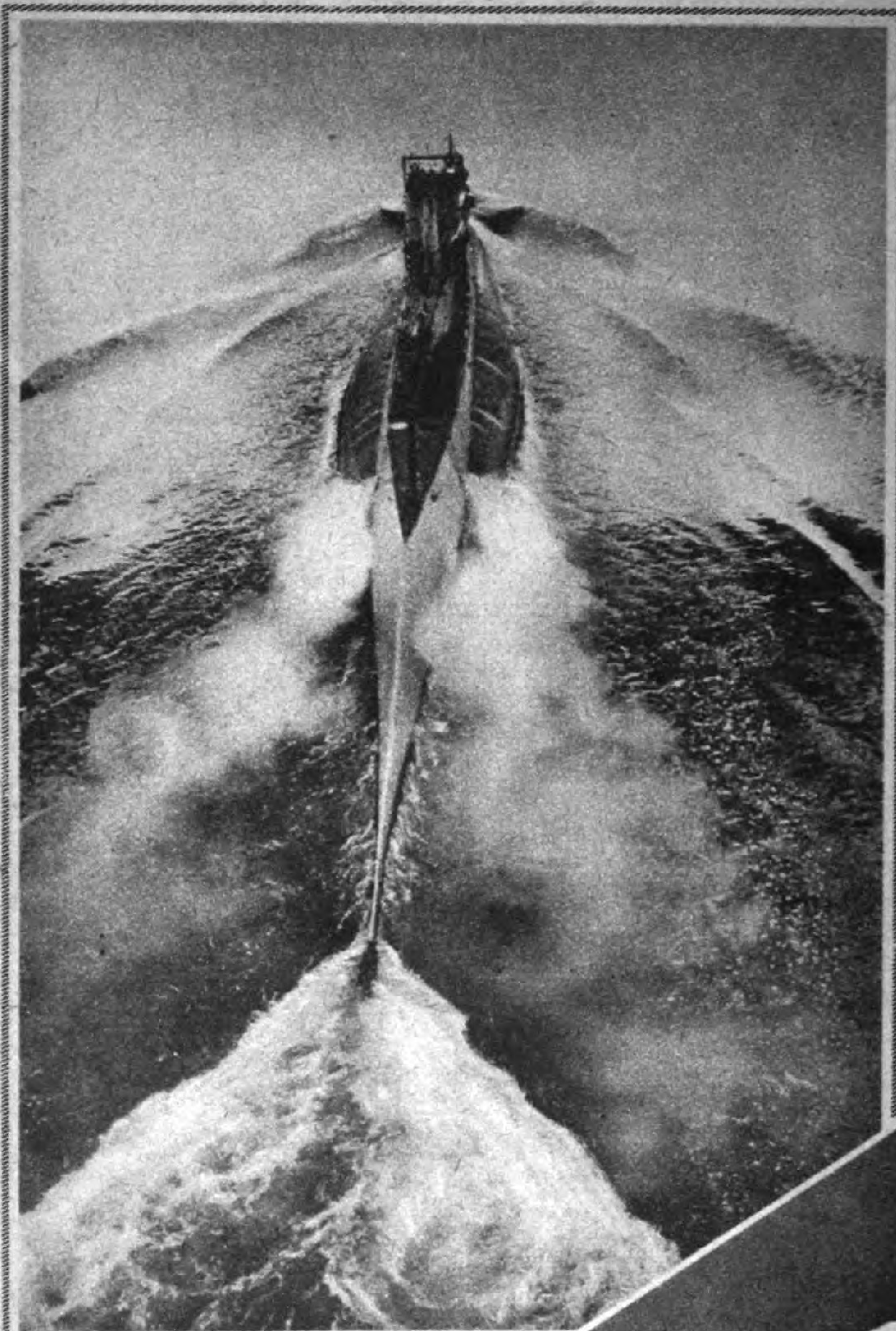
（上）走る！走る！〝速力三十二浬、艦首に白き飛沫をあげて飛行機母艦は走る。



（右）決勝點は今一息、榮冠は誰に！ 逐ひつ逐はれつ、獨樂の如く競技場を廻つて疾走する自轉車競走の壯觀！

驀進！

(左)決死の全速力！ エンジンの響、波の音、忽然と姿を現した潜水艇は、蛇の如く首を擡げて水面を縫うて行く、痛快！ 壮快！





(右)矢は弦を放れた！ 猛鷲一羽水面を掠めて飛ぶと見たのは一臺の飛行機である。今将に離水せんとする一刹那の光景。



伊香保音頭





(1)えんぶり　奥州八戸附近に傳はるえんぶりは野趣に富んだ面白い踊です。この地方では踊子の事を烏帽子太夫といつてゐます。



(2)大漁をどり　銚子から九十九里ケ濱へかけて行はれる漁村特有な踊り。唄も上總特有の數へ唄。

(3)伊香保音頭　東京近縣の避暑地として有名な伊香保溫泉には二三年前から民謡伊香保音頭が再興されました。向うに見えるは二ッ嶽。

玉川をどり



あやめをどり



(4) 玉川をどり

〽清き流れは今玉川の、
鮎は川瀬に鯉は淵、
君が好みの屋形船‥‥

多摩川を背景とした名物踊。

(5) あやめ踊

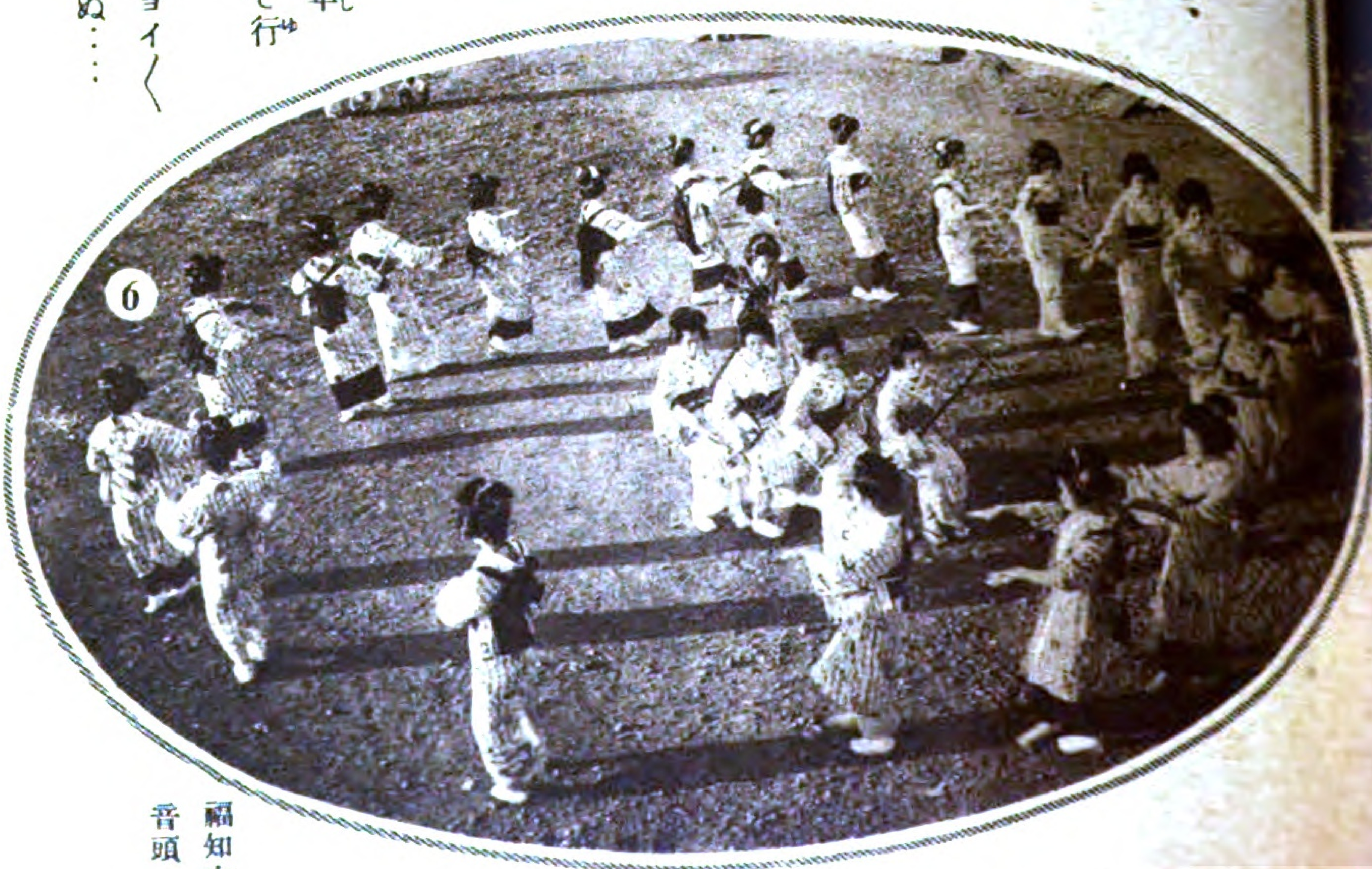
水郷名物、潮来の『あやめ踊』です。

〽潮来出島の眞菰の中に
菖蒲咲くとはしをらしや
唄もをどりも水郷情調に
とんだもの。

(6) 福知山音頭

河内音頭と共に關西地方の代表的盆踊とされてゐる福知山音頭は年と共に盛んになつて行きます。

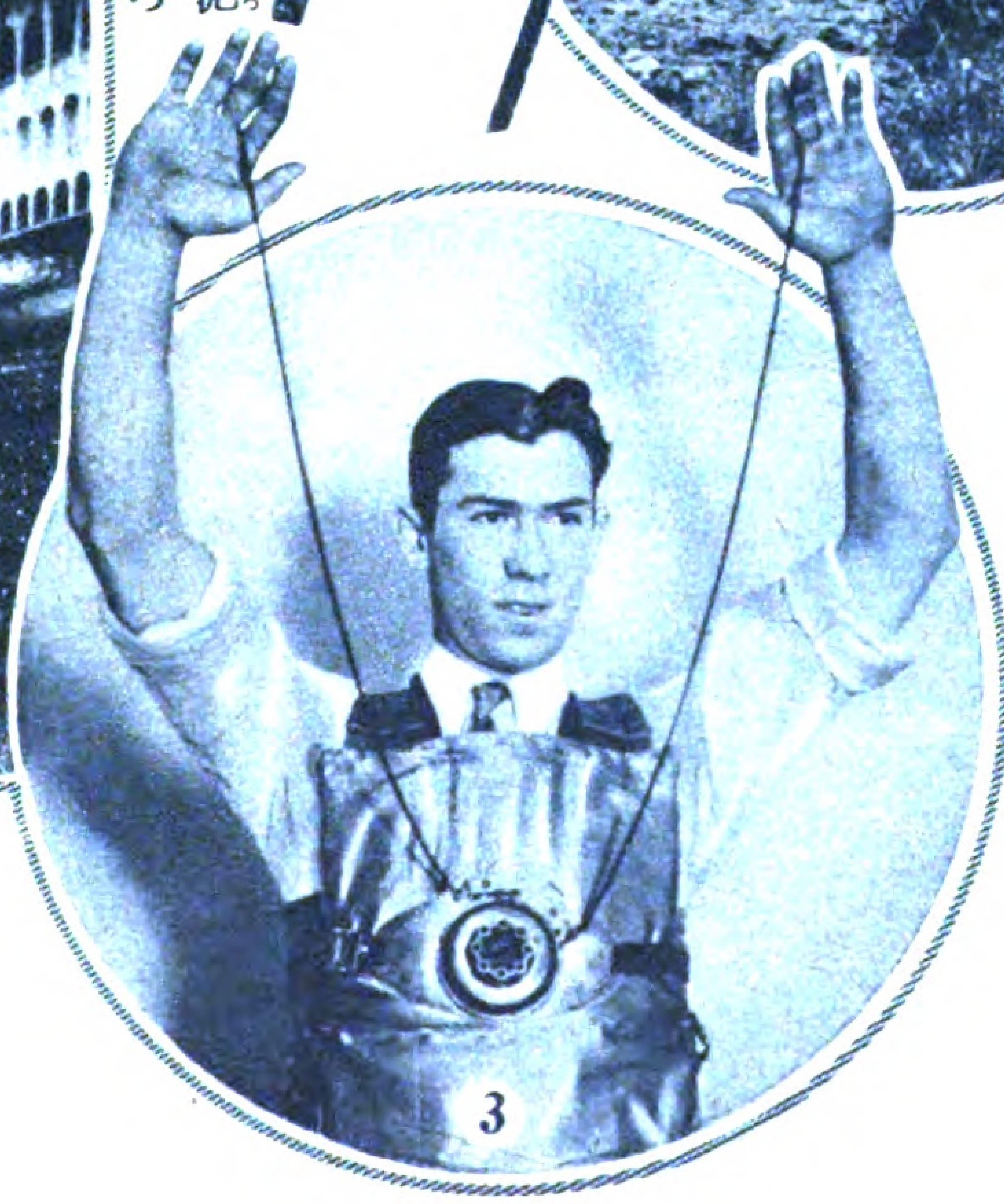
〽福知山さん葵の御紋チョイ〱
いかな大名もかなやせぬ‥‥



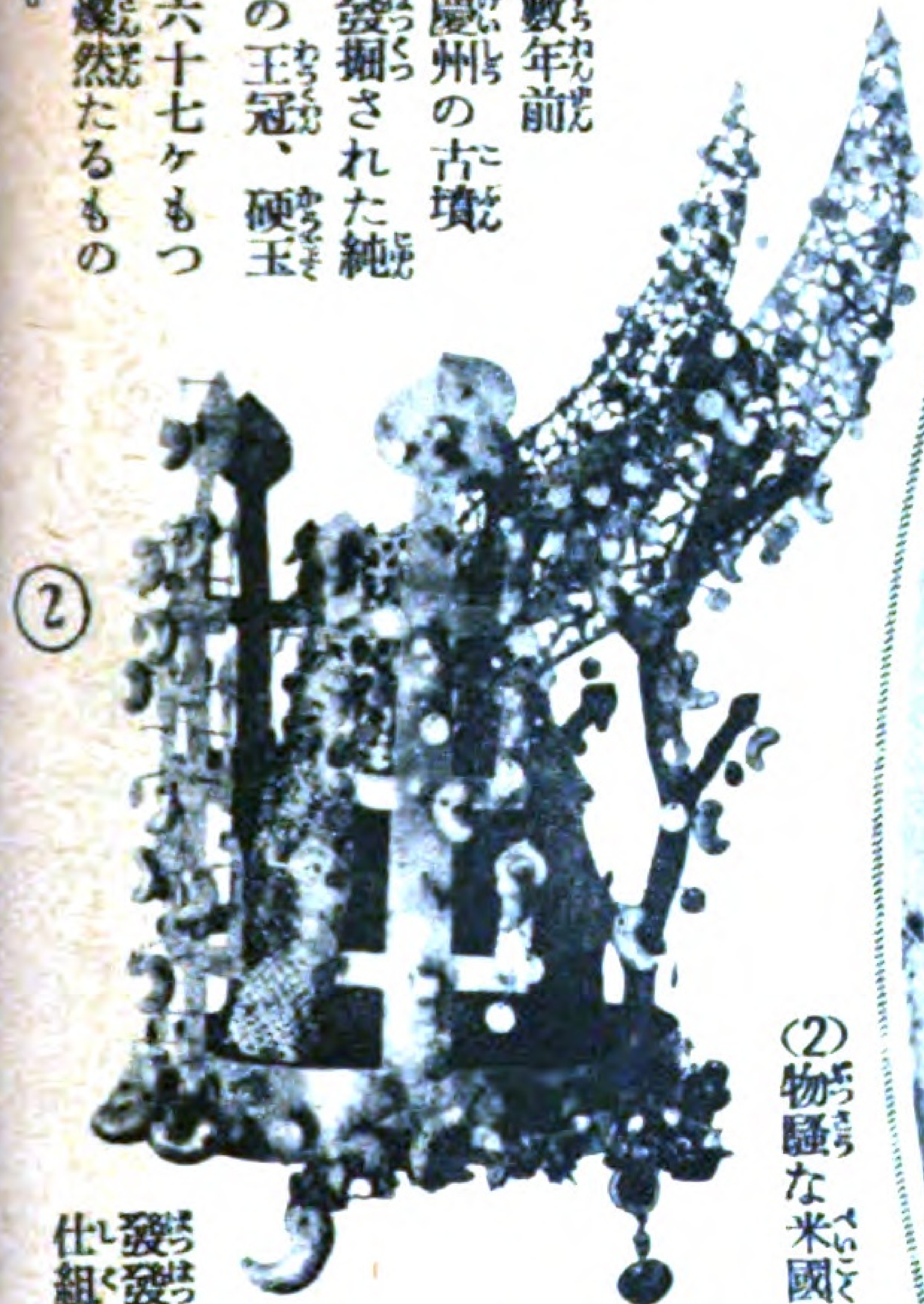
福知山音頭



(1)高さ二丈もあるこの不思議な竹馬に乗つてゐるのは英國の農夫です。釀造に使ふホツポ草を栽培しその蔓を這はせるため今針金を張つてゐる處です。



(2)物騒な米國で發明された珍型機關銃、泥棒が『手を擧げろ！』といふや否やズドンー發發射する仕組み。



(3)數年前朝鮮慶州の古墳から發掘された純金製の王冠、硬玉勾玉六十七ケもついた燦然たるものです。

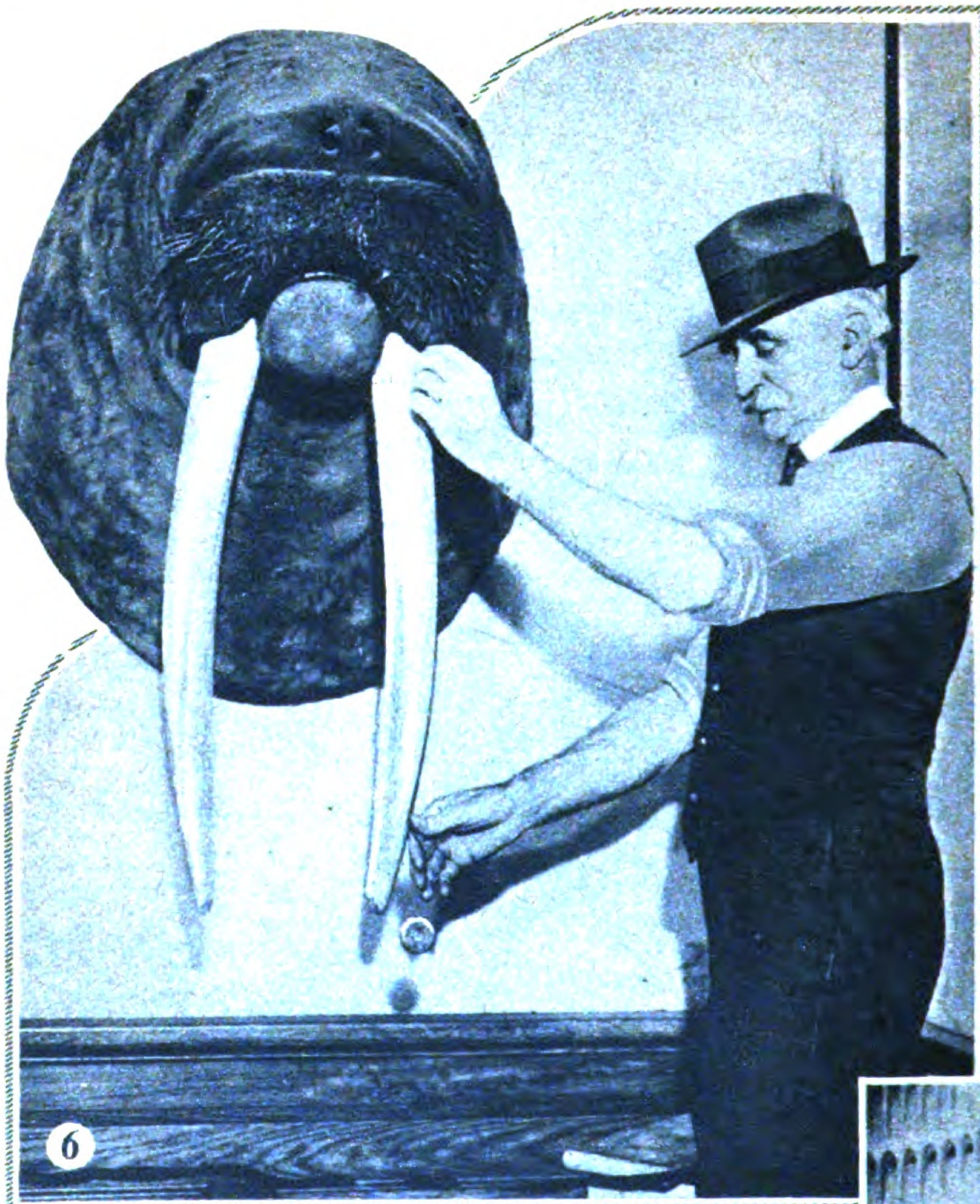


(5)伯林にある珍らしい劇場。まるで鍾乳洞の様な感じがします。(6)海の猛獸

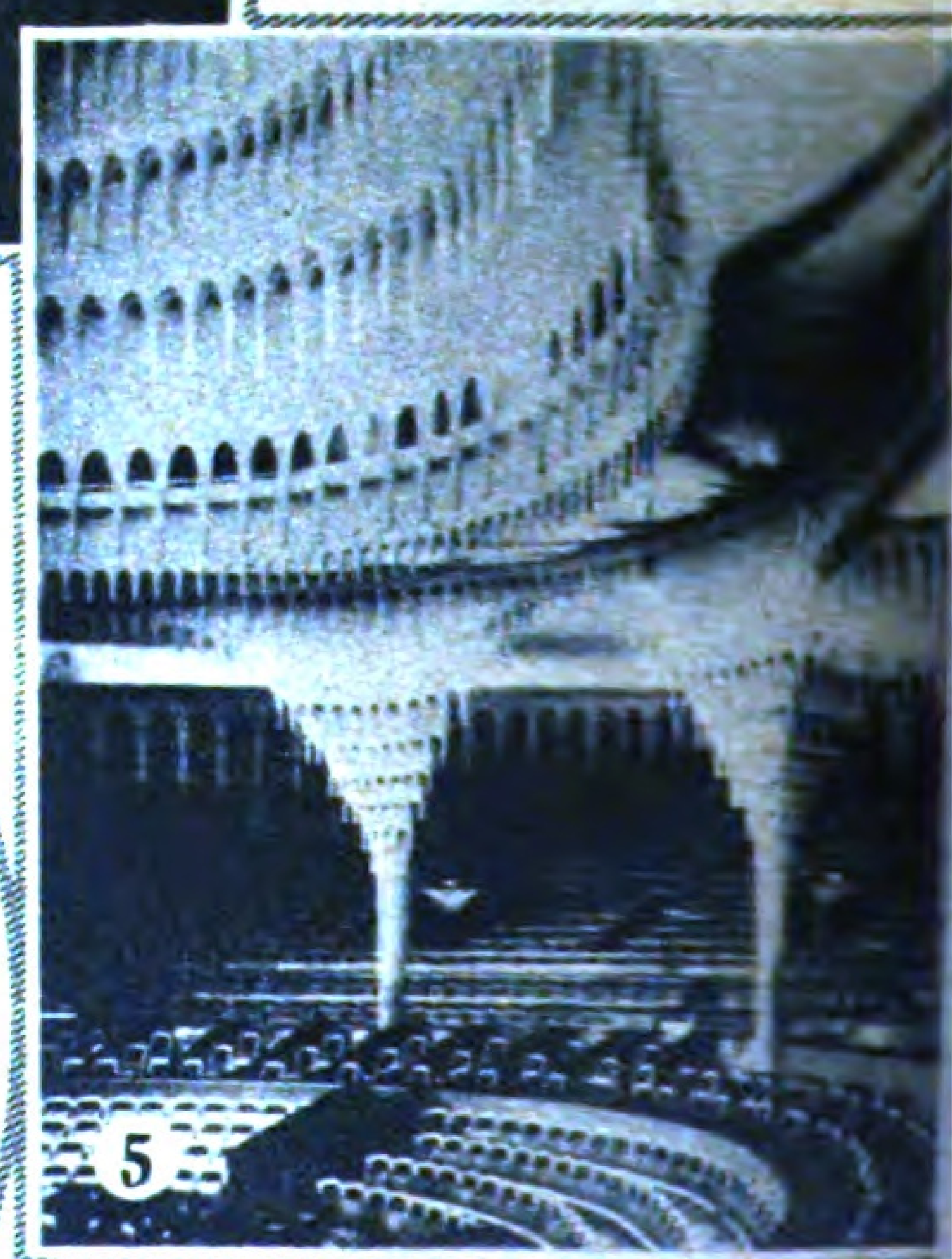
(4)巴里の珍流行帽子掛です。赤煉瓦の煙突の上に猫が尻尾を立てゝゐる姿に作つたもの。



一寸皮肉ですね。



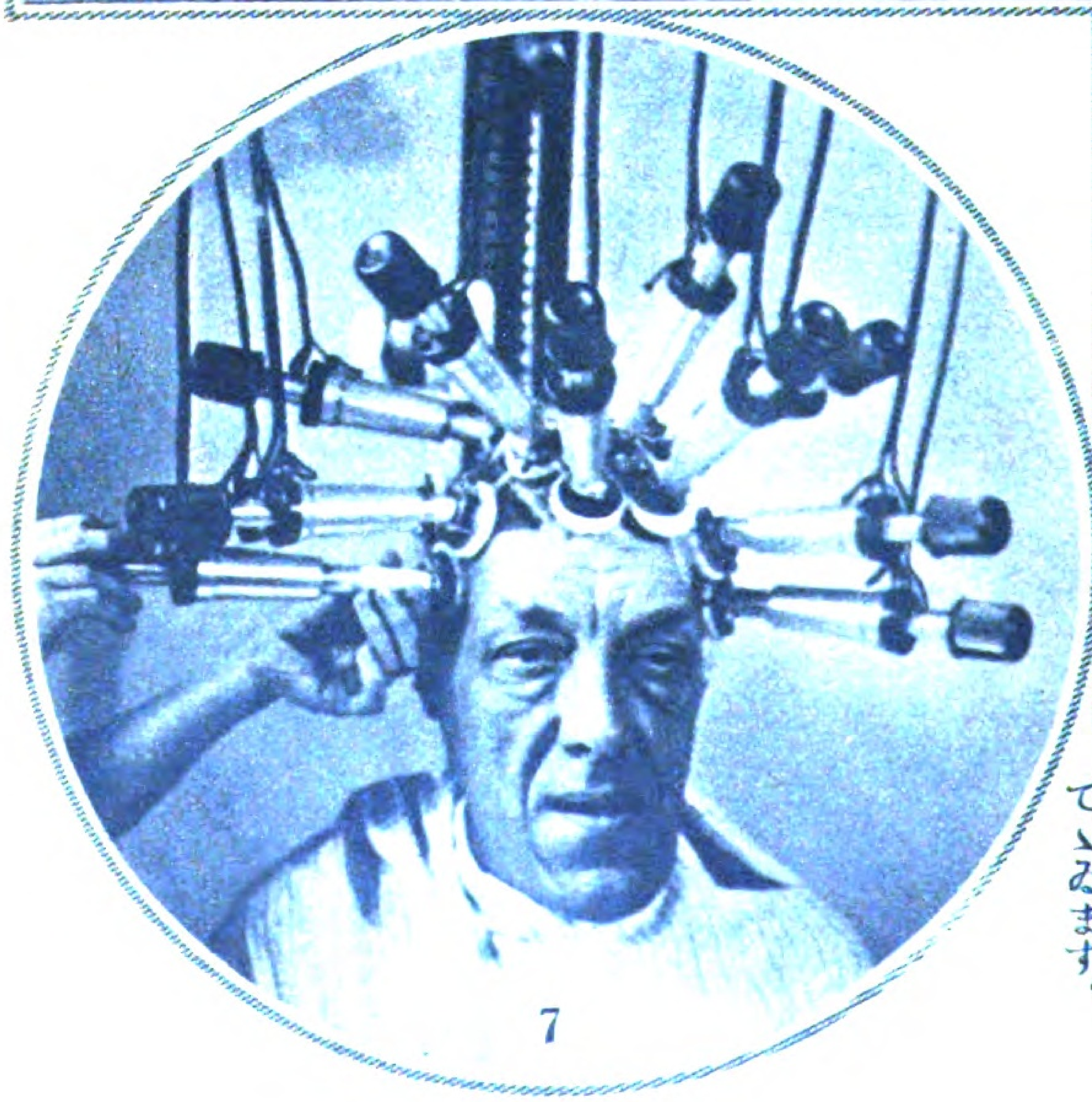
6



5

象です。何と素晴しい牙ではありませんか。

(7)これは今世界一の醜女と云つて賣出してゐるサーカス團の女、それでも人並に髪に鏝を當てゝゐます。



7

一本の草、一羽の鳥でも育てゝ行けば、わが子の様な愛情が湧くものです。人々が互ひに相いつくしむのは勿論、汎く動物に迄温い愛情を注いでやる事は、軈て此の世の中を最も清く、美しく、そして住みよくいたします。







獨占的新職業案内

僅か二ヶ月間自宅獨習の上
無試驗開業!

好收入ある電療士を養成

求職者及び失業者は來れ!
男女何人にても責任指導す



世を擧げて不景氣をかこつ時、僅か二ヶ月間の自宅獨習で完全に習得することが出來て、卒業の上は全國何處にても極少の資金で自由に無試驗で開業なし得られ、醫師や齒科醫に劣らぬ好收入を得られる有利な新職業は當所の養成する新式電氣療法專門萬病治療の電療得學士並に美顏術師であります。

この技術は極めて容易で學力程度を問はず男女何人にも習得することが出來ます。當所の卒業者は今や全國を通じて夥しき數に達してをりますが、何れも紳士的な生活の安定を得てをります。一日も早く安樂な生活を營まんとする人はハガキで申込次第內容見本付規則書を無代送附

東京市牛込區通寺町一三

東京電氣療法研究所

電話牛込四二〇四番
振替東京四三三二〇番

蚊帳のいらぬ
不思議な器具



使ふと使はぬは
これ程違ふ



どんな猛烈な蚊も忽ち撃退する

専賣特許 **かやいらず器**

◇蚊とり線香より効力遙に偉大而も全く手數いらず
◇一日の費用タッタ三四錢！　人畜に無害絶對安全
◇本器が一個あれば家中の蚊が全滅する

蚊くすべ粉を入れ、一方から火を點じると、十時間以上は完全に保つ獨特の裝置です。此の十時間分のかくすべ粉は僅か三錢にもつきませんから、從來の蚊とり線香などと比べたら實に驚く程費用がかゝらない。それで蚊とり線香よりは遙に有効で、一個あれば三室でも四室でも蚊は全く居なくなる。殊に之は線香の様に目にしみもせず、咽喉もいためないと云ふのが、此のかくすべ粉の優れた處で、之を用ひれば蚊帳は全く要らなくなり、ヘヘや蟲も驅逐して必ず涼しく爽快に過されます。

▽木製器具一圓五十錢（送料内地三十錢）
▽金製器具四圓（送料内地六十錢）
▽かくすべ粉（五十匁入）四十五錢
（送料　三本迄内地十二錢、領土五十錢）

大日本雄辯會講談社代理部
東京市本郷區駒込坂下町四八
振替口座東京六六二九番

佛國ピヴエー會社自慢製品を直輸入

質がよく頗る徳用 **豆香水**

香水の本場フランスで、非常な評判を博して居る有名な香水です。然も價は舶來品と思へぬ程の安價に拘はらず品質は極く純良、濃厚で永持ちがしますから價に實用向、トテモ徳用の香水だと輸入以來大歡迎を受けて居ります。

種類＝ムゲー、ジヤスミン、フリージヤ、ローズ、シイプレー、ヘリオトロープ、スヰートピー、ヴイオレット、何れも特價一圓六十錢（一瓶四十瓦入）送料内地十五錢海外五十錢

新若返り化粧液 **レーデリス**

レーデリスは皮膚のたるみや皺をのはし血行をよくすると共にお顔のキメを細かく又强壯にする驚くべき作用があります。お顔の年寄じみたお方小皺のある人、肌にしまりのない人等常用してそれ等がキレイに除かれ何時も若々しさを保つことが出來るのでその効果は確實觀面目下大評判の特殊化粧料です。一瓶二圓六十錢送料内地十八錢です。

右二品は本社代理部の專賣品です。



危險で!! 見苦しい!!

夏の肥り過ぎ

簡單に美しくやせる新療法

醫學士 芳野唐雄

夏の肥り過ぎは危險

じつとして居てさへ汗が出る之からの暑氣に、人並はづれてブク〳〵と肥り過ぎて居らる丶方はどんなに苦しく暑い思ひをなさる事でありませう。況してや浴衣の薄物では、一層肥り過ぎが目立ちますので御本人はどれだけ氣象をなさるか知れません。それに世間のいやな蔭口などが耳に入ることは、若い御婦人方には悲しい事で實に御同情に堪へないのであります。

元來肥り過ぎの人は十中八九人迄は病的で槪して短命の人が多いと學者の說は一致して居ります。特に夏期になりますと、肥滿症の人は、心臟痲痺、萎縮腎、動脈硬化、糖尿病腦溢血等の恐しい病氣に陷り易い危險性を持つて居ります 唯單に容姿が醜いと云ふ許りでなく、實に健康上捨て丶置かれぬ重大問題であります。

最も有効な痩療法

種々ある痩身法の中で最も信賴の出來るのは最近獨逸のフランクフルト大學で硏究發表された甲狀腺療法であります。この學理と實際に基いて精製されたのが卽ち甲狀腺劑アイマーでありまして、現今最も權威ある痩身良劑として一般に賞用せられ又安心して御推めも出來るものであります。このアイマーを服用しますと、直ちに體內に於て酸化作用を起し、脂肪の燃燒を助けますので、脂肪の體內蓄積を防ぎ、その上諸內臟器官の機能を旺盛にしますから極めて自然に惡血や不純物質、毒素等を排泄し不知不識の間にどんな肥り過ぎも見違へる程美しい健康體に復します、同時に前述の樣な恐しい病氣の併發を豫防しますので、實に天下に推奬すべき合理的最良藥であります。

實驗は僅か十日間で

アイマーを用ひて十日か二十日經つと御自分でも驚く程容姿が變つて來ることに氣づかれるでありませう。それ程アイマーの効果は的確であります。又本劑は他の痩身劑の樣な營養障害や其の他の副作用がなく、反つて消化を助け皮膚を强壯にいたすのです。

この驚く可き偉効は實驗者の等しく賞讃さるるところで、全く百發百中の實蹟を擧げて居ります。曾て二十貫餘の一靑年は僅々一ケ月一貫目以上も體重を減じ、步行困難な一婦人は三週間で見違へる程美しい姿になりました。男女を問はず肥り過ぎの爲に御困りの人は斯うした有効な痩身劑に依つて一日も早くスッキリとした、美しい健康體に復さる丶事を心から御奬めいたします

アイマーに就て

一記者

各種文藝彩色繪本

自ら山へ登る

二宮尊德

杣が深山に入つて木を伐るは、材木が好きにて伐るにあらず。炭燒が炭を燒くも、炭が好きにて燒くにあらず。夫れ杣も炭燒も、其の職業をさへ勉強すれば、白米も自然と山に登り、海の魚も里の野菜も、酒も油も皆自ら山に登るなり。奇々妙々の世の中なり。



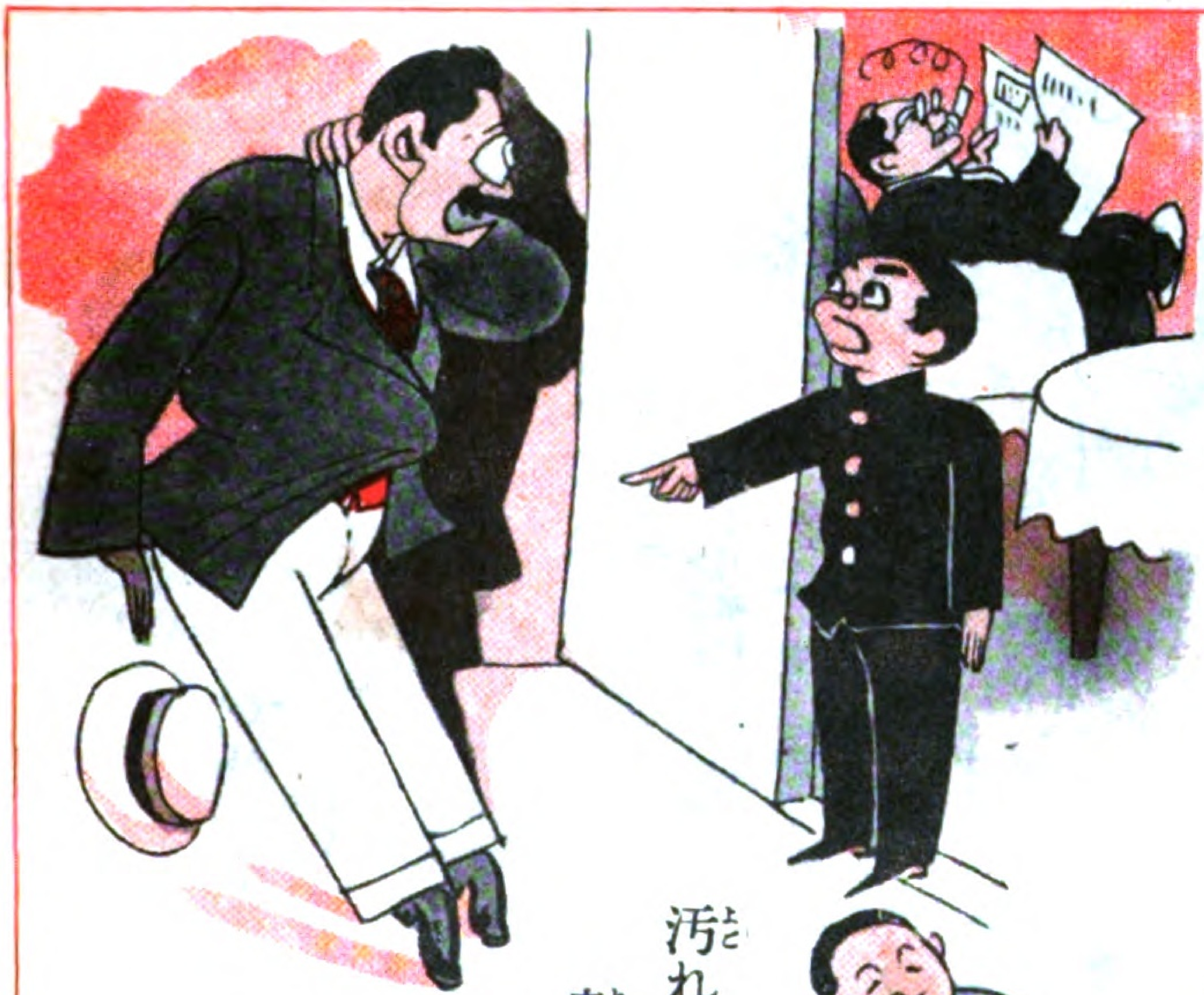

今日になりて菊作らうと思ひけり（二水）
足元の豆盗まるゝ案山子かな（也有）
投げられて坊主なりけり辻角力（許六）
叱られて家根から下りる涼みかな（湖十）
稲妻やうつかりひよんとした顔へ（一茶）


朝顔の花ほど口を欠伸かな
（嵐雪）
あんよ〱あんよや母を日傘持
（一茶）
名月を取つてくれろと泣く子かな
（一茶）
入相の鐘につき出す螢かな
（一茶）
蛸追へば蟹も走るや芋畑
（太祇）

谷脇素文畫

怪しからん

客『支配人がゐないつてのはほんとうかい。』
給仕（面を正して）『貴方は支配人の言葉を信じないと仰有るんですか。』



汚れてるわけ

床屋で、客、『小僧さん、手が汚れてるね。』
『えゝ、今日はまだ一度もお客さんの頭を洗はないもんですから。』



絶望

『あゝ、あゝ、僕あもう結婚なんかしないんだ。』
と彼女に肘鉄砲を食つた男が悲しさうにかう叫んだので、女、
『馬鹿な人ね。どうしてさ。』
『貴女さへ結婚してくれない僕に誰が結婚してくれるもんですか。』
『？？？』





それは大變

汽車の中で小さい兒、窓から外を眺め乍ら、『母ちやん、さつきのステーションの名は何て云ふの。』
『オヤ、退屈したの。どうしてそんな事を聞くのよ。』
『だつて、坊やあすこで母ちやんの手提袋を落つことしたんだい。』



長い名前

電話で焦れる女『違ひますわ。都築ぢやありません。鈴木ですよ。あらまた……鈴木ですつたら。さしすの鈴木ですよ。都築ぢやありませんよ。いろはにほへと、ちりぬるをわか、よたれそつね、ならむうゐのおくやまけふこえて、あさきゆめみし、ゑひも、せ、すの鈴木ですよ。あゝまあ、焦れつたい。』



壁の穴

泥棒が壁に穴をあけて入つて來た。大聲で叫ぶと逃げ出したので、主人が追ふこと二三町、流石、泥棒が短刀を拔[illegible]今度[illegible]の方で追つて來る。主人は我が家の前で壁の穴を見付けて其處から飛び込み、『やれやれ此の穴のお蔭で一命助かつた！』


雨宿りちよつちよと出ては濡れてみる
堪忍の帰りは棒が邪魔になり
押へれば薄はなせばきり〴〵す
炎天にすべるを見れば瓜の皮
シアン



蚊帳へ蚊を
入れる娘の
髪の出來



爪立つて
見えぬところは
口をあけ



せんべいを
頭へのせて
めつけさせ



見物の下知に從がふ
下手將棋

谷脇素文畫


數學のつもりになりて
考へしに
五目並べに
勝ちにけるかな
齋藤茂吉
男らは家には
居らず機鳴らし
女布織る
山の邊の村
窪田
ひる寝せし
子の枕邊に
人形を買ひ
來てかざり
ひとり樂しむ
石川啄木
白鳥はかなしからず
空の青海の青にも
染まずただよふ
若山牧水

和歌


赤い入日赤い入日と
さりげなく
背の子ゆすぶりかへる草原
若山喜志子
せんべいを
投げてやる子に
おじぎする
熊のいぢらしさ
夕陽はまとも
大木[illegible]三
わかむすめもまつ白な
[illegible]原
は[illegible]やうに
しげに
なれり露くさの咲く
土岐哀果
職人の懐のなかに眼をあきて
貰はれてゆく仔犬は知らず
島木赤彦

水島爾保布畫



暮れて戻れば

暮れて戻れば
厩で牛が、牛がよ
馬堰棒ならして　俺をまつ
ほんに可愛いや
俺をまつ

暮れて戻れば
野風呂も沸いて　沸いてよ
こぼんこぼんと　音してる
ほんにうれしや
音してる

（松村又一）



あの子とろり子

あの子、とろり子
油壺うまれ
しんととろりと
見て惚れる

（北原白秋）



蔦は枯れても

あにやさ　見なされ
蔦の葉かれた
枯れて　さみしい
あの土手の蔦
つるの先まで　みな枯れた

蔦は枯れても　なにさみしかろ
枯れて　枯れない　あの土手の蔦
つるはかれても
根がのこる

（濱田廣介）



東京の唄

東京　都は
煙のみやこ
胸の中まで
黒くなる。

東京　みやこは
不粋なみやこ
物干臺から
月を見る。

東京　みやこは *



* 薄情なみやこ
算盤はじいて
戀をする。

（霜田史光）

松の木

松はをとこの
立ちすがた
いちにや
まけまい
吹け吹け　あらし
枝は
をれよと
根は
をれぬ

（[illegible]）



黒馬なる夕

いとし山坂　戻り荷つけて
黒馬は寒そに　吹かれて急ぐ
カツパ　カツパ　カツパ　カツパ　星月夜

餓ゑてこごえて　山坂越えりや
黒馬もひひんと　尻尾ふつて急ぐ
カツパ　カツパ　カツパ　カツパ　星月夜

（藤田健次）

田中比左良畫


常よりも 圓くて白く見ゆればや
今宵の月を もちと言ふらん
（石田未得）
富士の山
夢に見るこそ果報なれ
路銀もいらず
草臥もせず
（貞柳）
蛤に しつかと
嘴を挟まれて
鴫立ちかねる
秋の夕ぐれ
（貞柳）
新しき
心の花は變るとも
月は眞ン丸
雪は眞ッ白
（金升）


猿猴が　月をとらゆる手の様に
長し　短し　秋のよるひる
（義文）
菓子壺に　花も紅葉もなかりけり
口淋しさの
秋の夕ぐれ
（眞顔）
世渡りの道に　二つの追分や
寶の山に　借錢の山
（飯盛）
コーヒーの　茶にして暮らす世中に
何んな　ケーキも氣にとめぬなり
（金升）

水島爾保布畫



作り上手で
咲かせたよりも
一層野末の
亂れ菊

浮世はなれた
木樵の小屋へ
暦がはりに
降る櫻

（長谷川伸）

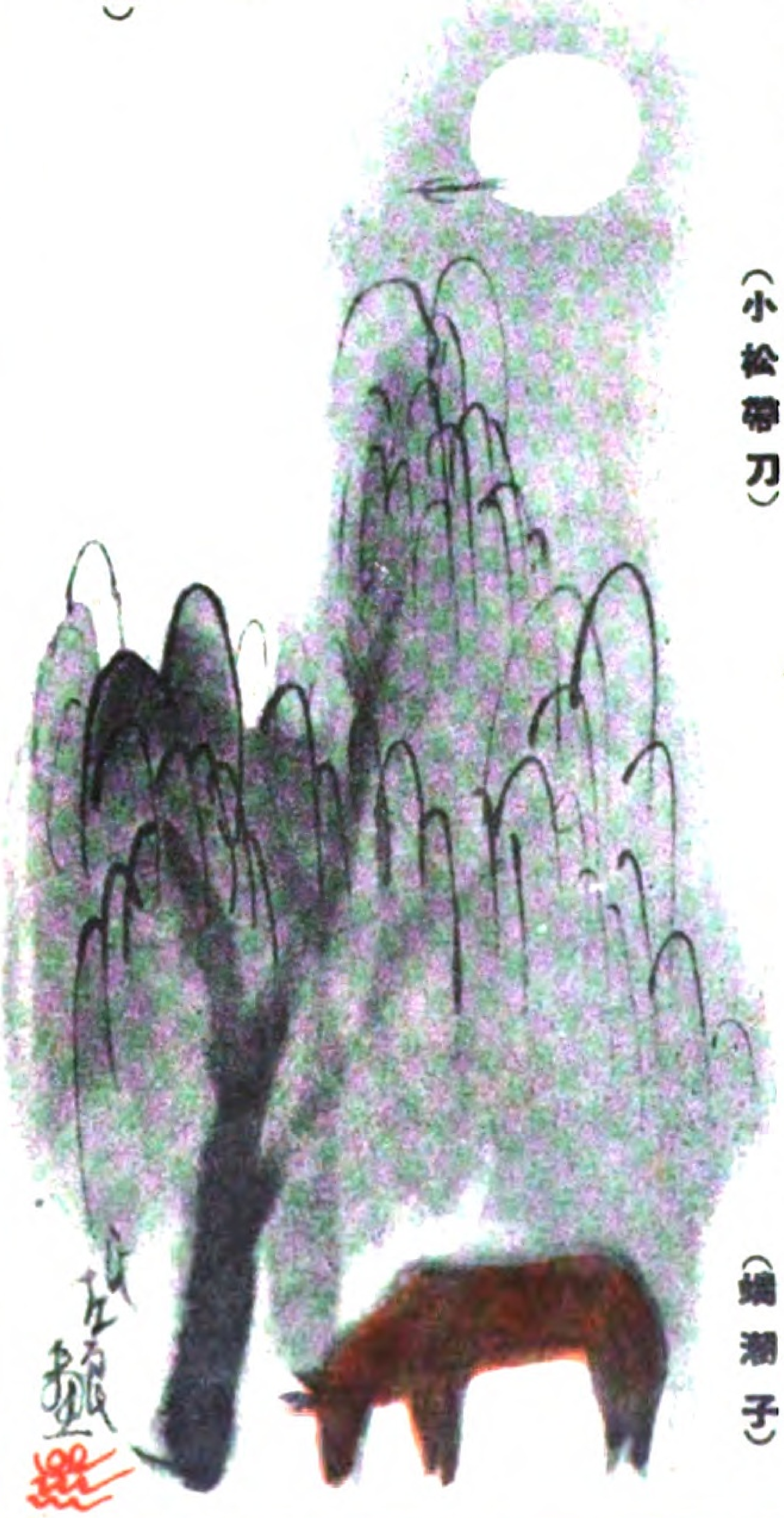
喜ぶ坊やを
世間へ見せて
うれしくのせてる
肩車



ふところの
寝顔一つに
あつまる笑顔
すみから
すみまで
みのる秋
（平山蘆江）



欄干にもたれて
化粧の水を
どこに捨てうか　虫の聲
（小松帯刀）



土手の柳に　つないだ駒が
月を飲み干す　桶の水
（蝸潮子）

田中比左良畫

警句



○金銭は官吏を奴隷にし、貴族と富豪とを木像にし、慧しきものを狼とし、愚なるものを驢馬となせり。（高山樗牛）



○子を知る者親に如かず。然れども子を知らざることも亦親に如かず。（徳富蘆花）



○危険の多い處に興味伴ひ、興味のある處に危険伴ふ。（夏目漱石）

細木原青起畫

断然！絶對的權威と驚嘆すべき治効!!

ニキビ・ハタケ・の一掃藥

藥學士青柳光造先生發見の理想品

男女を問はず青春期に

逢しますとニキビや吹出物に悩まされますが、殊に男子の十人中八九人迄このニキビの爲めに苦しめられる事は一通りではありません。まして御婦人の生命と申すべき花の顔にニキビやソバカス、ハタケなどがあつたら、どんなに心を痛め悲觀されるかは想像に難くありません。一體面皰は過剰の脂肪分泌のため、皮脂腺に汚物が附着して腺を閉塞したり、又は皮膚脂肪嚢内に黴菌が寄生し遂に化膿して生ずる極めて簡單な病氣であるにも不拘その治療藥として眞から滿足なものを得られなかつた事は何故でせう。

ニキビ・ハタケは黴菌の巣

之までニキビ、ハタケ或はそばかす等の顔面皮膚の療法としては、多く硫黄劑が効果ありとされ、クンメルフエルト液の様なものが最も多く用ひられて居りましたが、硫黄劑は一般に皮膚を刺戟し易い爲めに、嫌味を起し又白粉と併用出來得ない等、幾多缺點がある爲に御婦人方などには誠に不便なものであります。第一ニキビやハタケに刺戟の多い藥物を用ひますと自然その患部に炎症を起し赤くただれ上つて遂には細胞組織を腐蝕し、一時は表面の黴菌は死滅させる事が出來ても、残つた黴菌は再び腐肉内に非常な勢を以て繁殖して參りますから、その全治は愈々困難になつて來る事は申すまでも御座いません。

醫學士　櫻田十次郎

ピヨニーはニキビに中々よくきゝます。從來ニキビ治療藥として使用されてゐたクンメルフエルドの如き黄硫其のものでなく顔のあれなど絕對にないばかりか、白粉をつけてゐる人でも普通の硫黄劑のやうに氣くならない點はピヨニーの最も誇りとすべき點で非常に結構です。近頃小學生に流行してゐるハタケには全く申分なくよく效きます。

早ければ早い程速ぐ治る

つまりニキビハタケを始め顔面吹出物治療の理想的療法といたしましては、絶對に刺戟も腐蝕性もなく、然も吸收し易く殺菌力を有するものでなければあの難治なニキビハタケを癒すことは出來ないのであります。

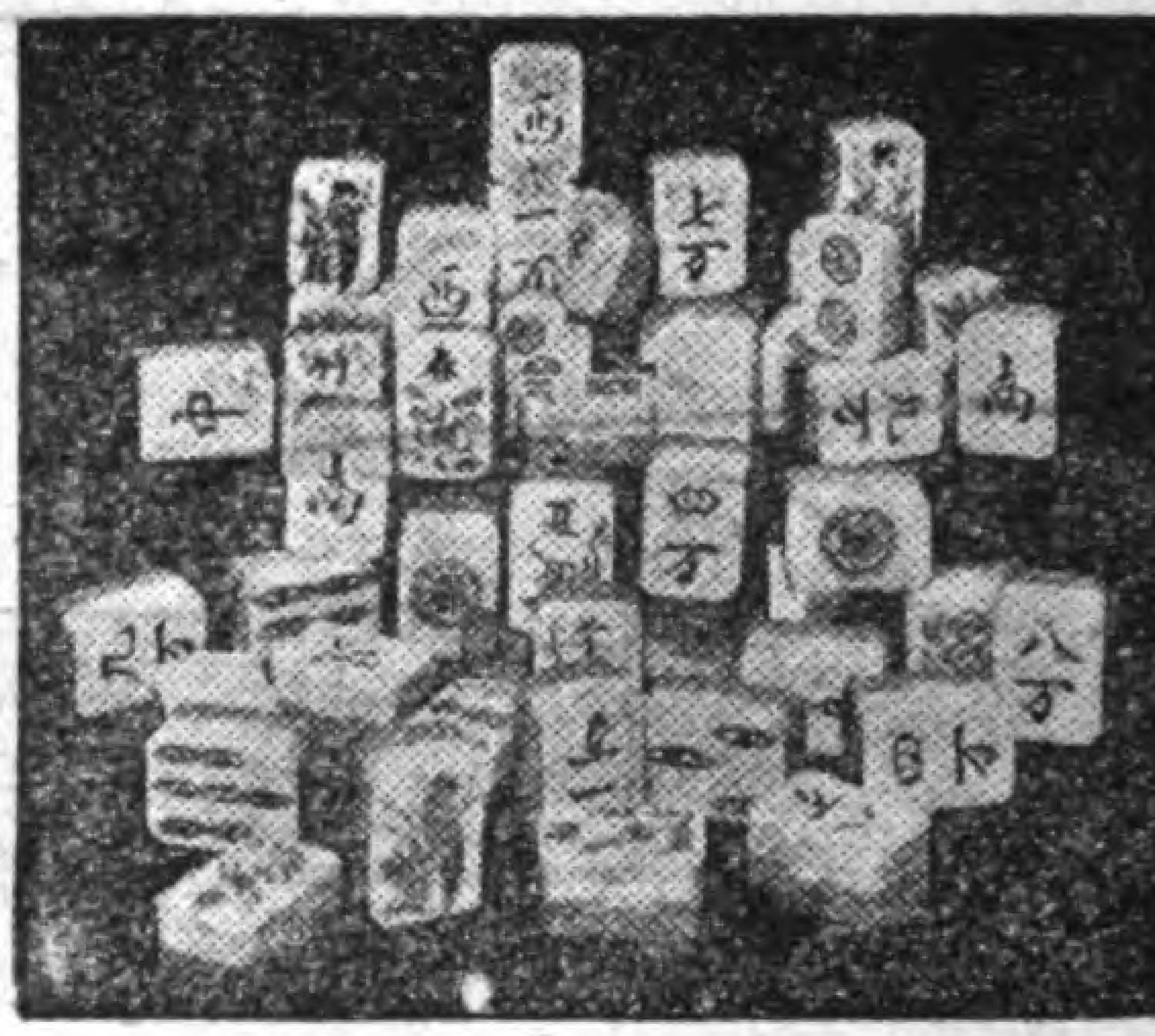
然るに今回藥學士青柳光造先生永年專門的に御研究の結果、遂に創製された藥用ピヨニー（送料共一瓶實費八十錢）は無色透明な水液で、幾らつけても決して皮膚に刺戟などないばかりか白粉と併用しても少しの妨げがなく却つて非常によくお白粉がつきますからお化粧下としても全く理想的であります。

然も從來の如何なる藥品にも見られない、驚くべき治効には、今日まで多數の實驗者は喜ばれ、醫師も學者も皆一應に感嘆激賞されて居ります、事實この藥用ピヨニーを僅か數回用ひた丈で、見苦しかつたニキビもハタケも拭つた様に全治した話はザラにある事で、東京市内各小學校などでも子供のハタケ治療のために盛に使用されて居ります。御試用御希望の向は本社代理部へ（振替東京六六二九）御申込みになれば早速御取次いたしまします。

本社代理部直輸入

世界的大流行の
支那遊戲 麻雀（マージャン）

◇新着支那製器具特賣



牛骨製厚肉上等極彩色の逸品
何れも上等容器計數器付

▼一號　特價　貳拾五圓
▼二號　特價　貳拾八圓
▼三號　特價　參拾圓
▼四號　特價　參拾五圓
▼五號　特價　四拾圓
荷造送料内地四十錢領土九十錢
▼麻雀解説書　一圓　送料二錢

マッチ一本で手輕に接く

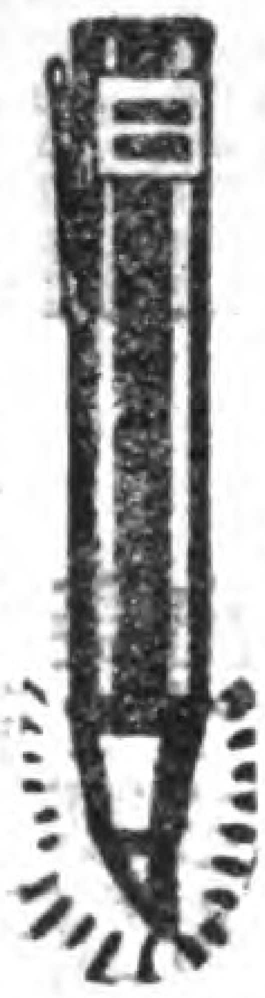
糊狀ハンダ
（一名道具いらず糊ハンダ）
ラヂオ等の組立に頗る便利



どんな金屬でも小さなものはマッチ又はローソクの火で（勿論大きなものは鏝）他に何にも要せず即座に手輕に接着出來る便利なハンダです。取扱ひの簡單なものと出來上りの美麗で完全なのが本品の特長です。家庭用として最も便利です。

試用小罐　四十錢
德用罐　一圓
（送料四錢）

SN式 携帶用 顯微鏡
萬年筆形ポケット用
倍率正確



萬年筆大のものでポケットに入れ携帶することが出來何時何處でも使用する事が出來ます。然も價がズハ拔けて安く、倍率が正確で使用に少しの面倒がなく構造頗る堅牢永久的使用に堪へる便利品。トテモ他の顯微鏡や擴大鏡の比ではありません。二百倍二圓六十錢、三百倍三圓六十錢、送料内地十五錢外五十錢

讀書三昧の好伴侶

寢ながら讀書の出來るブックスタンド



雜誌、書籍はその大小に拘らず、總てこれに用ひられ横向きでも仰向けになつても、寢ながらでも樂々と書見が出來ます。角度の加減回轉高低は自由故、目の爲によく衞生に叶ひ病人は勿論、身體の疲勞した場合に大層重寳であります。尙その上本器は左の如く種々の用途があり、實に便利ですから發賣以來非常な好評を博して居るのであります。

一臺で六種使用出來る



◇寢讀二通り
◇音樂演奏殊に尺八琴等の譜面臺に
◇卓上用書見臺
◇筆記用に便利
◇書架となる
◇氷嚢つり

上製三圓五十錢
並製三圓
三種用二圓五十錢
送料内地三十錢　領土七十五錢

旅行、移轉、保存に

便利な 蒲團袋



夜具は旅行や移轉の際の運搬には勿論、保存にも大變厄介なものですが、この蒲團袋を用ひれば、その取扱ひは非常に樂であります。一枚以上五六枚まで一人で手輕に完全に包め、バンドで締めれば別に紐等を用ひずとも運搬至極便利で又何處へ放り出しても安心、厚地上等ズック製故完全に保護せられます。上製九圓五十錢、特製十一圓（特製は防水裝置につき）（送料内地四十錢、領土六十錢）

埃よけ、虫よけ、濕氣よけ

新案特許 洋服保存器
（簡便な洋服簞笥代用品）

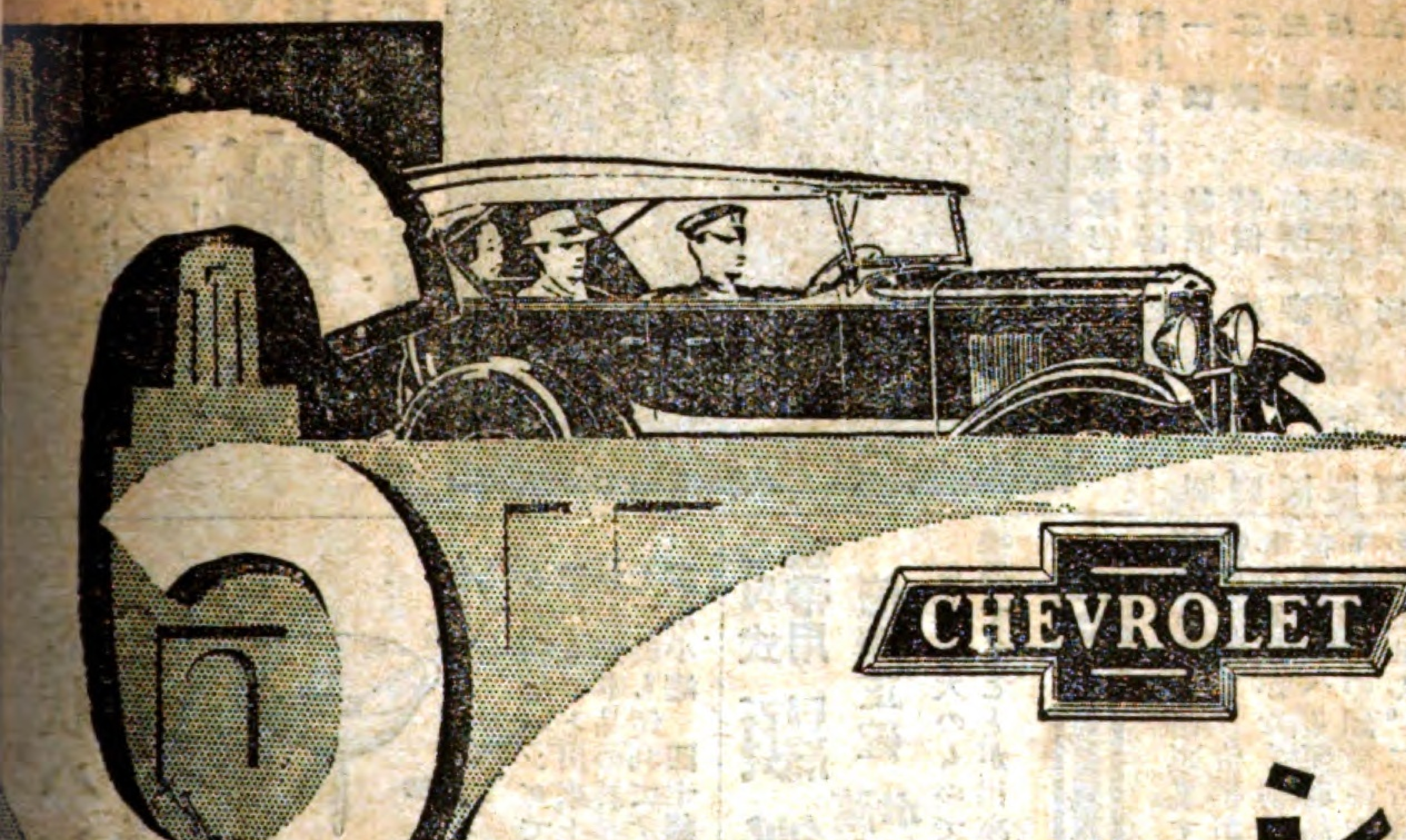


背廣用上　一圓八十錢
外套用上　二圓

（送料内地廿五錢領土六十錢）

極く丈夫な紙で圖の様に作られてあります。内部へ洋服を吊り下げ、口を閉ぢれば外氣を完全に遮斷しますから絶對に蟲食ひなどの生ずることなく黴にもならず完全に保存することが出來得る重寳なものです。

大日本雄辯會講談社代理部扱
振替東京六六二九番


CHEVROLET

キング特選映畫小說・日活京都撮影所撮影



熱血男兒

渡邊默禪

（1）平和の破るゝ日

『關の城より使者がまゐつたとのこと、定めし色好い返事を齎らしたであらうな。』

『いや、なか〳〵のこと。貴方より御申入れの二箇條とも、殘念ながら應じかぬるによつて、惡からず御容赦をと、斷りの挨拶にござりまする。』

『何と。すりや斷りの使者か。むゝ、さてこそ我に敵對、弓ひく底意と覺えたるわ。憎くい宗祐奴。よし〳〵、今に思ひ知らせてくれうぞ。』

常陸眞壁の城（眞壁郡古城村の遺跡に、今も、をり〳〵古瓦を堀出すことがあります）にやつて來た關（結城郡關館村）の城主小栗次郎宗祐の使者、その應接に出た家老畑山勘解由から、以上の趣きを聞きとつた城主眞壁大掾長幹は、烏帽子もふるへるばかりに激怒して、手にした蝙蝠扇をばり〳〵と引裂きました。

時は南北朝時代の延元二年（五百九十年前）。眞壁方は北朝に味方して佐竹義篤、足利尊氏の命令に從ひ、關方は南朝を奉じて護良親王、將軍北畠顯家を守護し、互ひに睨み合つてゐました。で、眞壁大掾は小栗宗祐を抑へる手段として、自分の娘駒姫へ宗祐の次男晋丸を養子に迎へ、永久緣者となつて兩家の繁昌を圖りたい、和睦のかためとして、當家からは十三塚峠の檜林を結納として進上するから、貴方よりは石田五千石の領地を聟引出としてお遣しあれと申込みました。と、宗祐から使者を送つてピタリと拒絕したのであります。

（2）三十人力の美男

『その使者は何者ぢや。』

『多賀の小太郎光興と申す若者にござる。』

『宗祐への見せしめに其奴を搦めとり、出陣の血祭に斬つて捨てい。』

『あいや。それは御短慮。この光興こそは關の鬼小太と呼ばれ、力三十人に敵する上、弓馬槍劍の道にかけては、常陸一國に雙ぶ者もなき剛の者。さればこそ、宗祐は特にすぐつて、この難役を申附けたものと思はれまする。彼を討取ることは容易な業ではござらん。それよりは寧ろ徳を以て懷け、利をもつて誘ひ、臣下となしてお用ゐあらば、天晴一騎當千の働きをなす奴にござります。』

『左樣か。でも左程の勇士ならば、容易に隨身はいたすまい。』

『其處が人を見て法を說く釋迦の智慧。萬事はそれがしの胸中、暫くお委せくだし置かれませ。』

長幹と勘解由の密談――使者の小太郎光興は奥殿に請じられ、勘解由が接待役となつて山海の珍味、さかんな饗宴が張られました。

小太郎はちやうど二十六歲、强健鐵のやうな骨格、しかも美男子の小太郎は、直衣の袖をまくり、烏帽子を引きそばめて、大杯を引きうけ〱、鯨のやうに呻りつけました。





（3） 舞のさなかに高鼾

宴酣なるころ、餘興として御殿女中だちの舞を見せました。次の間が舞臺がはり、廣縁が橋がかり、金襖を背景として、美しい女﨟の群が笛、大小の鼓、太鼓の囃子につれ、女猿樂を幾番もくりかへして演ずる。花紅葉とりどりの動く錦繪、面白い觀物なのですが、不骨者の小太郎には猿の目にお祭、けろりとした顏をしてゐます。勘解由は張合拔かして、

『貴公はこのごろ流行の猿樂などあまりお好きでないと見受けられる。では古めかしうはござるが、その昔鎌倉の花とうたはれた白拍子の舞、幸ひ當館にその流れを汲んだ妙手がござるで、一さし舞はせませう。それ女子ども用意。』

幕があくと、摺箔模樣の紅の衣に白の水干をまとひ、立烏帽子に鞘卷の腰刀をつけた美しい舞姫が立つてゐます。

『水の色のすぐれて澄めるは、西天竺の白鷺池、じんじやう許由にすみ渡る、昆明池の水の色、ゆくすゑ久しくすむとかや。』

魂をそゝるやうな序破急の妙なる樂の音につれて、さす手引く手、足拍子、扇をとつて翩々と舞ふ姿は、地に渦卷く虹、花に狂ふ胡蝶。一座恍乎となつて見とれてゐるうちに、グーといふ高鼾。見ると小太郎は肱突にもたれたまゝ、今にも前へのめりさうに舟を漕いでゐます。勘解由は是はと惘れて笑ひくづれました。

『こりやはや、驚き入つたる無風流、野武士上りは笑嗤なものぢや。ハツハツハ。』



（4）舞姫さわらび

『もし〳〵、お前さま。お目をおさましなされませ。』

徐かに搖起されてふつと夢を破つた小太郎、目を開いて四邊を見ると、誰も居ません。燃えつくした銀燭のかげに、只一人の艶かな女臈が居殘つて、自分を呼び覺してゐます。それは白拍子に扮した早蕨といふ女中。

『おう。大分夜が更けた。饗應の酒を過して思はず轉寐、飛んだ無禮を仕つた。どりやお暇をいたさうか。』

刀をとつて立揚る袖を、早蕨がやさしくおさへました。

『オホヽヽ。この夜更に御出立とは何事。あちらにお褥の用意も整へてござりまする。さ、入らせられませ。』

『それは〳〵痛み入る。然らば今宵は御厄介に相成つて、明早朝出立といたさうか。』

身を起すとひよろ〳〵。それを早蕨が介抱して長廊下を奥殿へいざなつてゆきました。

と、突如、物蔭からばら〳〵と躍り出たのが十餘人の女中たち、色鮮かな衣に朱の襷、額に菖蒲の鉢卷をして、手に〳〵木刀を押取りながら、

『小太郎様。端午のお祝ひ、印地打の菖蒲刀を進上いたしますぞえ。さ、お手の内拝見。しやうぶ〳〵。』

裲襠の裳を蹴かへし、黒髪を振亂して、一齊に打つて蒐る、勢ひ猛烈。

（5） 娘子軍の風流陣

『アッハッハ。これは御馳走。物打つ業なら我等大好物。遠慮なくお相手仕る。御免。』

小太郎は大口開いて笑ひました。扇子を青眼にかまへながら、右へひよろ〳〵、左へよろ〳〵、ピッピッと打込む木刀をかいくゞつてあしらつてゐます。此の醉漢奴、それ叩きのめしてやれと、女中だちはきやッ〳〵いつて、八方から蝗の飛びつくやうに亂撃するが、空虚だらけであるやうで、しかも乘ずべき空虚がなく、ちやうど鏡に映る逆光線、ひらり〳〵と逃げられてしまひます。同士打。悲鳴、混亂のさなか、茶目の小太郎、敵のうち一番大きな女――體重二十五貫もあらうかといふやつを無圖と執へて横に抱へ、人肉の盾にしてグングン押してゆくと、娘子軍はそれに壓迫されて將棋倒し、上を下へと腕き廻るところを、太郎はその大女を臼にして頭と背骨の上をドシン〳〵、一人づつ餅に搗いたからたまりません。

『あれ――、お助け――』

と金切聲。其處へ雪洞を片手に、急いで出て來たのは勘解由でありました。

『やア、聞きしにまさる武藝力量、さすが鬼小太郎殿でござる。これもお慰みの一つ。腹ごなしの戯れ事とおゆるしあられい。ハッハッハ。さ、あらためて御意を得たい儀がござる。あなたへお通り下されΟ』

勘解由は設けの一間へ、小太郎を請じ入れました。



（6）誘惑の餌

『時に小太郎殿。これは内密の御談合ぢや。承はれば貴公、拔群の器量を持たれながら、小栗殿格別のお目懸もなく、今猶微祿のお身におはす趣きを我等の主君が聞し召され、さて〳〵笑止のことぢや、小太郎程の豪傑を見分のつかぬ宗祐でもあるまいに、千里の駒も伯樂に遇はざれば駑馬に若かずとやら、惜むべき人物のうと御意ござつた。貴公も嘸かし御不滿であらう。何と一つ御思案あつて、主を取換へ、出世の途をお開きになりませぬか。及ばずながらそれがし推薦ないたさう。』

勘解由は詞巧みに誘惑しました。諾といへば、つゝかけに番頭に登庸、飼馬料として五十貫文（約五百石）稻千束（田二町歩）を給する、また無妻なれば當館第一の美人早蕨を媒酌つてやる――と牡丹餅で頰の條件附。と、小太郎はから〳〵と笑つて、

『出世はしたうござる。が、道にあらざる不義の榮華は望ましうはござらぬ。貴殿のそのお慫めは武門の節義を捨てゝ、遊女傾城の眞似をせいと言はるゝも同然、我等を辱むるものでござらう。たわいもないこと、お控へくだされ。』

てんで問題にならない。勘解由は不興らしい顏をして引下りました。と、その夜半、寢所の障子にぽつと映つた怪しの影法師、まだ寢もやらぬ小太郎は徐かに枕をあげて、そつと刀を引寄せました。何者か忍び入つて危害を加へるらしい氣配。



（7）大事をお知らせに

と、その曲者は障子の外に立つて、しばらく室内の動靜を偵つてから、次第に接近して來るらしく、淡い輪廓がだん／＼濃くなりました。やがてそろりと障子を開ける時に、

『誰ぢや。何者ぢや。』と小太郎が一喝する聲の下から、

『私でござります。』と傾がり込んだのは、意外にも美しい女﨟の姿。

『や。早蕨どのではござらぬか。この夜ふけに、何用あつて、男一人の部屋に……』

『はい。一大事をお知らせに參りました。』



『大事とは、すりや何事。』

『お前さまのお命に關はる大難。もし小太郎様。此のお館に在してはお危なうござりまする。さ、寸時も早うお立退き遊ばしませ。今日のお使に我君以ての外の御立腹、勘解由さまに仰せつけられ、大勢の力者を以て寢込を襲ひ、お前様を討つて取るべき密密の手配でござりますぞえ。それをお知らせ申すのもお前さまを、どうした御緣か、今宵の御宴に……オホ、、愛しう想ひそめた私の心中立、もし、哀れと思うて下さりませ。』露の瞳に溢るゝやうな熱愛の輝き。

『よくぞお知らせ下された。さほどに此の光興が恐ろしいのか。ハツハツハ。と承つては、意地でも此の館は立たれまい。どりや、ゆるりと一寢入いたさうか。』

其時、庭先に覆面黒裝束の武士二十餘人、拔足して寢所の外へ忍び寄りました。



（8）足尾の山狩へ

手鉾、長卷、袖搦、弓矢、いろ〳〵の武器を携へた暗殺隊。それを指揮する勘解由は直衣の袖をくゝり、太刀を拔きそばめてゐます。彼は直ちに斬込むべく、雨戸に耳をつけて室内の氣配を覗ひますと、ひそ〳〵と話聲――相手は確かに早蕨。

『それでは御用心遊ばしませ。蔭ながら御無事を祈りますぞえ。』

『や、失策うた。彼女の口から機密を……む、憎くい女郎奴。どうしてくれう。』

彼は切齒しながら、手を打振つて、疾く去れよと部下へ合圖をしました。双の目釘を濕して忍び寄つた暗殺隊は、こそ〳〵と暗へ。

かくして空しくその夜は明けました。翌日勘解由は何氣なき體を粧つて挨拶に出で、朝餐をすゝめてから、

『小太郎殿。切めて今日一日は御逗留あれい。ちやうど好い日和、裏の足尾、茸山へ狩獵を催しておもてなしを仕らうと存ずる。御承知の通り筑波の峯つゞき、近頃久しく弓矢を入れぬため、猿、鹿、猪など所得顏に荒れ廻り居る。先づ以て獲物に不足はござるまい。貴公の矢先にかゝつて百發百中、手に應じて斃るゝところを是非拜見いたしたい。』

小太郎は、さてこそ來たなと心に可笑しく、

『すりや望んでもない仕合。お言葉に甘えてお伴な仕らう。早速御案内を願ひたい。』

臆する色なく、我から進んで危險な死線に投じました。

(9) 渦巻く太刀風

打烏帽子に素襖をつけて左の袖をぬぎ、箙を負ひ射籠手をさし、小袴を高く括りあげて鹿の革の行縢をはいた武者三騎、駒の首を列べて眞壁の城を徐かに立出でました。それは勘解由と郎黨照田重氏、客分の小太郎。後には五人組の力者三十人、勢子となつて隨ひ、弓矢長卷など物々しい武裝をしてゐます。

筑波神社の附近は殺生禁斷ですが、峯續きの足尾、茸山は狩をするには屈竟の場所でした。三人は山の麓で馬を乘放し、森林谿谷のなかをめぐつて、狩立て射斃し、澤山な獲物を擧げました。が、勘解由にはもつと〳〵大きな獲物――小太郎の首を狩取らなければならぬ役目があります。その機會は、小太郎が一頭の大猿を追ひかけて谷間に下つた時に、完全に彼に與へられました。斷崖の上に突立ちながら重籐の弓に二十四指したる白羽の矢をつがひ、力の限りきり〳〵と引絞つて、ひようと發つと誤たず、確かに肋を射拔いたらしく、小太郎は溪川の石の上へばたりと仰向に倒れました。

『それッ、首打てッ。』

大力無雙の照田重氏眞先に岸を降りました。つゞいて力者十五六人、ばら〳〵と谷へ駈下りて、周圍を押取巻いた時、射殺されたと思つた小太郎は突然勃然と飛起き、拔打に薙ぎたてた太刀は、目にもとまらぬ電光を渦巻かせて、先づ重氏を車切に斬つて仆し、從者二人の肩からさつと血煙を噴かせました。



(10) 三十貫の巨石

『ヤア、卑怯なるぞ、勘解由。僞計をもつて我を陷いれ、油斷に乘じて討取らうとは言語同斷、武士の風上にも置けぬ奴ぢや。汝等如きヘロ〳〵矢に命を落す小太郎ぢやと思ふか。さア意趣あらば男らしう一騎打の勝負をせい。』

小太郎は血刀を振かぶつて、獅子吼を放ちました。威風颯爽、敵は恐れて一人も寄りつく者はありません。

『射てとつたと思つたは狸の空死。さてさて圖太い小冠者奴。それッ者共、容赦なくその素首を斬飛ばせッ。』

勘解由は無念の足摺、崖の上から激しい號令をかけてゐます。力者だちは多勢を頼みに、長卷を打振り太刀を廻し、やア〳〵と懸聲して躍りかゝる。と、小太郎の早業はさながら飛電、四方切八方拂ひ、撫切、立割、天狗倒し、變化の秘技をつくしてばた〳〵と斬りまくり、さつと崩れ立つ隙を覗つて、勘解由を打つべく脫兎のやうに崖へ駈け登りました。勘解由は驚いて逃げる。討洩らされた力者だちはその跡を追ひ、つながり猿のやうに蔦に縋つて登るところを小太郎は三十貫もあらうといふ大石を輕々と抱きあげて、頭上に高くさしあげ、



『印導とらす。念佛せい。』

崖を登る敵を目がけてズドンと投落すこと三回に及んだからたまりません。十數人の力者だちは折重なつてころ〳〵と谷間へ墜落、骨肉粉韲の慘狀。



(11)　山蔭にちる姫百合

敵はほとんど鏖殺されました。勘解由は何處へ逃げたやら、寂然とした山峽に血腥い風が流れて、樟の若葉をそよがせてゐます。

『おんでもないことに鬪り合うて、無益の殺生をいたしたわい。我が君はさぞお待兼であらう。どりや歸らうか。おう然うぢや、君への土産にこの獲物を。』

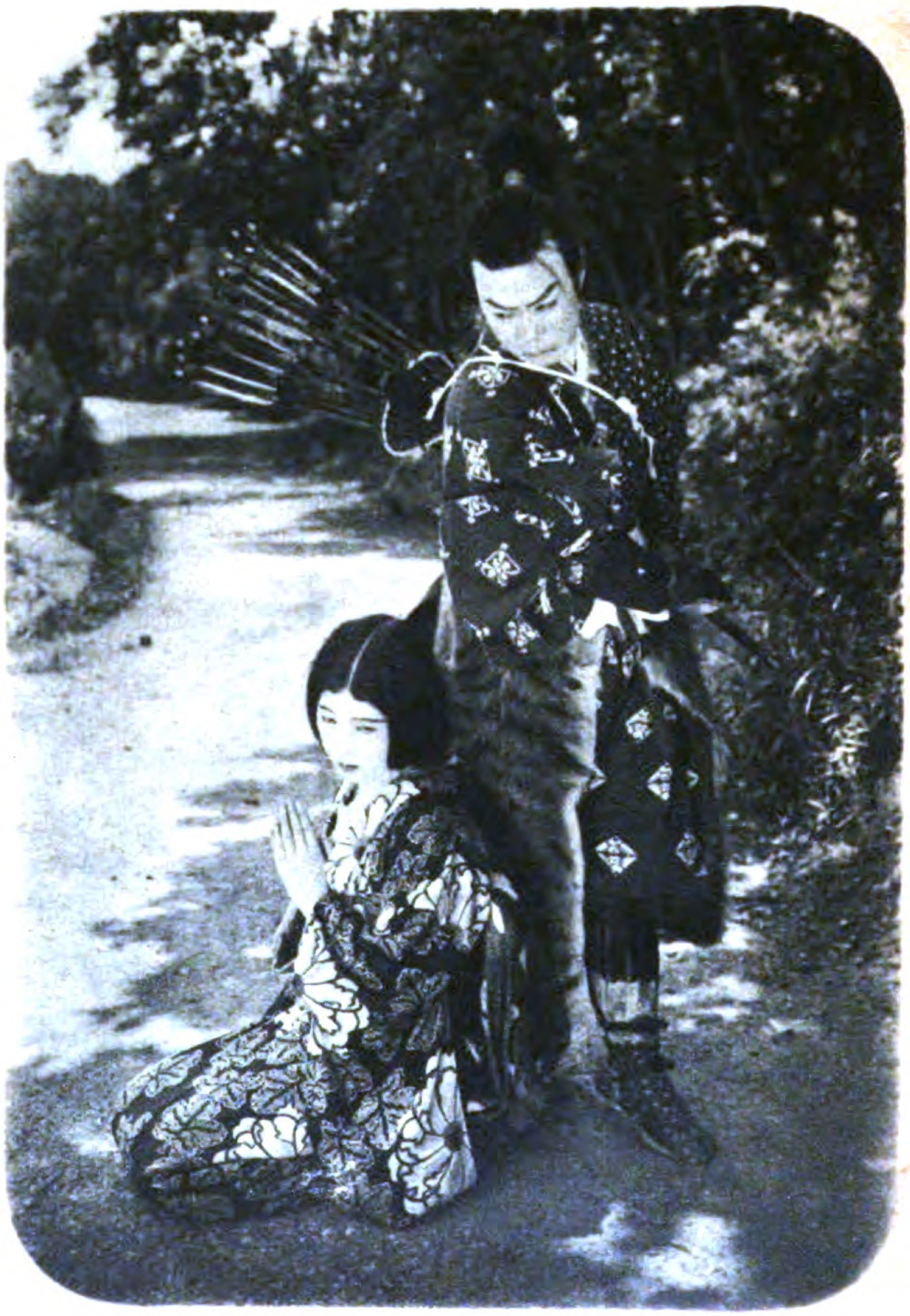
小太郎は太刀の血を拭つて鞘へ收め、射てとつた兎二三疋を弓籠にかけて、悠々と草山を降り、麓口につないだ駒に乗らうとする時、前方からよろ〱と駈けて來たのが早蕨でありました。

『おッ、小太郎樣。此處におはすか。お懷かしうございます。』

足下にばたりと仆れた彼女は、すぐと起きあがつて小太郎にひしと取縋りました。見ると肩先に創、血潮は白地に藍と紅の花輪を摺箔にした上衣をべつとりと彩つて息喘ぎ、眉も眼も苦痛に痙攣つてゐます。

『おう。この怪我は何とめされた。これ、早蕨どの、氣を確かに。』

『はい。お前さまに密事を洩らしたことが露顯して召捕られ、押籠の身となりましたのを稍との思ひで遁れてから、お前さまに遇ひたい一念矢のやうに、お跡を慕つて此處まで駈けて來る途中、あの御家老に出會ひまして、こ、このやうに、き、斬られました。ざ、殘念、く、口惜しい――』――ぶるぶると身悶。



けて首をふりました。

『いゝえ。この深疵では所詮……わ、私は、か、覺悟をいたしました、臨終のお願ひ、お前さまのお手にかゝつて成佛したうございまする。さ、早うこの苦みを止めて下されませ。』

といふ間に、顔色は刻々に變つてまゐります。小太郎は涙を揮つて立揚りました。

『詮ないことのう。では心を鬼にして介錯いたす。早蕨どの、未來は一蓮托生、七生までも渝らぬ夫婦ぢやぞ。光興しかと盟ひ置く。』

『嬉しうござります。南無阿彌……』

電光一閃、打落した早蕨の首を、彼女が着けてゐた練貫の袖につゝみ、馬を飛ばしてまつしぐらに海老が島へ出で、小貝川を越えて關の城へ歸つたのは其日の夕刻。城主宗祐へ見參して委細を復命し、早蕨の首級を見せますと、並ゐる君臣皆泣きました。哀れなる犠牲者の首は菩提所へ送られ、手厚く葬られたことは申すまでもありません。

かくして形勢日に切迫、同月二十日。北朝方の大軍五千餘人、怒濤の如く關の城へ殺到。

(12) はかなき縁

『それは憫然なことをしてのけた。一身を贄にしての心づくし、光興辱なく思ふ。さ、暫くの苦痛を怺へて身と共に關館へお越しめされ。良醫の手によつて手當を加へたなら、是しきの創、治らぬこともあるまい。』

小太郎は感激して早蕨を介抱し、馬の鞍に扶けのせようとすると、彼女はその手を押しの

(13) 女の首の旗指物

眞壁郡關館の城は、大寶湖に突出した三角形の高地にあつて、三面は湖水に臨み林を負ひ、北の一帶だけが土壘を列ねて藤が谷の平原を壓し、筑波の連峯を東に仰いだ要害の砦で、城主宗祐は南朝の忠臣北畠親房の旨を奉じて勤王の旗を擧げ、常陸一國に同志を募つたところ馳せ參ずる者數千騎。京都から護良親王も下向されて入城、廣橋經泰と聯絡して武威四隣を呑むの勢ひ。

寄手は眞壁の長幹を先鋒にして、守護職佐竹義篤、下野の桃井義盛の聯合軍、辻關本の兩方面からぐんぐ押寄せて來て、烈しく攻め立てました。城方では護良親王を總大將とし、宗祐軍配の下に志岐飛驒介、大崎左門、多賀小太郎などの勇士、決士の兵をすぐつて手痛く防ぎ戰ひ、さんぐに寄手を惱ましました。



なかにも小太郎は紺村濃の直衣に白綾威大荒目の鎧、鍬角打つたる兜を猪首に着なし、大太刀をとつてしばく打つて出でたが、敵の目を驚かしたのはその旗指物で五尺九寸の白絹に生々しい女の首——黑髪を振亂した圖を畫き、上に『南無阿彌陀佛、釋春光法夢信女』と記し、更にその左右へ『武士の拳の力ためせよと萌え出しかも春の早蕨』と一首の歌を書きそへ、早蕨の首を包んだ片袖を、笠標として鎧に縫ひつけた異様の粧ひ。

それが獅子奮迅の勢ひで薙ぎ廻ると、手に立つ者なく、忽ちに骸の山を築くのでありました。

(14) 一城存亡の危機

かくして包圍攻擊十日あまりに及んだけれど、城は容易く落ちさうもなく、寄手は日に損害が加はるばかりです。しかも五月雨しげく、野陣の困難一方でありません。大將佐竹義篤は諸將を集めて評議の末、諸川の水嵩が倍したのを幸ひに水攻の計畫を立てました。それは大寶湖の落口を堰き止め、諸川を切つて落して湖に集中するのでした。

『や、や。こりや一大事。』

宗祐は驚きました。湖は刻々に水量を加へ、岸を沒し、林を呑み、ひた〱と三面から押寄せて、外曲輪、搦手の雉堞下まで上つて來ました。一望漫々たる泥の海、物凄いうねりが渦卷き、もう一息で城內も水浸しになる有樣。援兵促した廣橋經泰、小田治久、下野の春田顯時からはまだ軍勢が到着しません。開城降伏するか、一軍溺れ死ぬるか存亡の危機。

『方々。名案はなきものか。所存はいかに。』

護良親王を奉じての御前會議に、宗祐が憂色をたゝへての發言、一座默然、太息の音のみがさわだつ。と、小太郎が進み出でて、

『それがしに一計なござる。明日中には必ず敵軍を陣拂ひいたさせ、此水を一擧に引落させて御覽に入れよう。お心安く思し下され。』

凜然たる言。堅い自信はにこやかな瞳に溢れて見えました。

その夜の子の刻、城の搦手から靜かに流れ出た一隻の筏。





(15) 櫓の上に縛られた美人

畑の堰口を守つてゐた寄手の一隊は、簑笠をつけた百姓體の曲者一人が、筏を岸に乘りつけたのを發見し、熊手薙鎌などを揮つて取押へに向ふと、曲者は恐ろしい手利で瞬く間に十餘人を斬仆し、闇に紛れて何處ともなく姿を晦ましました。やがて夜明ごろ、その曲者は何やら大きな袋を背負つて、城の大手先に現れ、巧みに寄手番兵の目を避けて、城門のなかへすーと消えて了ふ。

と、その朝、表櫓の上に意外な物が曝されました。芳紀十七八、牡丹花に魂を吹込んだやうな﨟長けた美人が、後手に縛られたまゝ櫓の柱にくゝされ、消えも入りたいやうな思で、さめ／″＼と泣いてゐるのです。傍に一人の侍が突立つて、野外十町に響き渡るやうな大音。

『やア／＼、寄手の方々、これを見やれ、大將眞壁大椽長幹の息女駒姫を細めとつて生擒にいたした。大將に左樣申されい。娘の命が惜くば湖の水を切つて落し、早々に陣拂ひをなさるべく、それとも武士の意地、父子の愛惜の羈を斷つても戰がしたいとならば、先づ以て姫を血祭に斬つて捨て、城門を開いてお相手仕らう。巳の上刻までいづれとも決答あれッ！』

大椽長幹は兵の注進によつて、陣營を出て見ると、疑ひもなき秘藏の娘駒姫。これは夢か、現かと惘れ惑つてゐる所へ、眞壁の城から馬を飛ばして急使がやつてまゐりました。



(16) 愛人の靈を祭る

『大變でございます。昨夜何者とも知れぬ怪賊城中に忍び入り、當宿の侍大勢を斬殺し、火を館に放ち、狼藉を働いて逃去りました。その混雜中姫君のお姿紛失、今以てお行方が分りませぬ。』

長幹はアッといつて茫然自失、忽ち激しい苦悶に襲はれました。最愛の我子を見殺しにし

て戰を續くる勇氣も失せ、ひそかに堰口を破つて水を落し、陣所には申譯のため勘解由と一隊の兵をとゞめ、自分は病氣と披露して早々に眞壁へ引揚げました。

奇計圖に當つて、敵の勢力は分裂し、一時雉堞の麓までのしあがつた水が、ずんずん引いてゆきます。城内ではホッと安堵の太息。

大膽にも只一人、眞壁の城に闖入して、人質の姫を奪ひとつて來た勇士は、小太郎であること言ふまでもありません。

長幹退陣と見るや、城方では一度にどつと門外へ突撃、疾風の如く敵陣へ斬込みました。寄手はさん〴〵の敗北、勘解由は小太郎と鬪つて首級を馘られ、佐竹勢は這々の體で結城へ退却しました。

小太郎は駒姫を眞壁に送り還してから、勝軍の式場にのぞみ、例の生首の旗竿物を庭にたてゝ、勘解由の首級を供へ、涙と共に慰めの詞を手向けました。

『早蕨どの。首尾よう仇を討取つた。心安く成佛してたべ。南無頓生菩提。』

勇ましくも美しい古武士の情緒。(終)



九月

——懐しい栗の實——

堂本印象畫
佐藤春夫題

なつかしいのは栗の實だ。とげとげしい外貌をして容易には人を近づけない。中味のほんとうの甘さに接するためにはなかなか手のかかる事だ。彼は巧言令色を好まない野人だが、しかし味つてみると仁者である。下らない理窟はどうでもいい。都門にあつて電燈の華やかな果物屋の片隅に栗の實を見出すとき、私はいつも郷愁に打たれる——本是山中人。



獨逸の恩人ルーター博士

戰敗ドイツの復興作業に向つて、實際家として、同時にまた精神家として、偉大なる貢獻をなした者に三人の人物がある。その一人は先年暗殺された外相ラーテナウであり、他の一人は産業合理化運動の指導家であるケットゲンであり、今一人は通貨膨脹時代の混亂から、レンテンマルクの發行によりてドイツを救つたルーター博士である。

博士は今日全獨逸抵當銀行聯合總裁の要職にあり、その他種々なる實業團體に關係し、復興作業に對して最も高き見地から、指導的地位に立つてゐる。非常な精力家で、また勉强家である。博士が宰相となつたのは、四十六歳の時でその前には大藏大臣をやつたことがある。本篇は特にキング讀者のために寄せられたのである。

興隆日本と復興獨逸

前獨逸國務總理　ハンズ・ルーター

永い間東洋――特に日本に行つて見たいと思つて、幾度となく思ひ立つたことであつたが、未だ實現しかねてゐる。自分は至つて旅行好きで、世界中殆んど旅しないところはないが、たゞ支那と日本だけは未だ見たことがない。日本を知らないといふことは、自分の國際知識の大穴であつて、いかにも遺憾に思つてゐる。

日本とドイツとは、種々なる點において相似通つた運命において發展して來た近代國家であるが、今日となつては、日本は興隆に向つて進展し、ドイツは復興に向つて努力しつゝあるところに、可成りの相違點があるやう

に思はれる。日本もアメリカあたりから、大分借金をして居るやうであり、借務國としての立場は、ドイツと何等異なるところがない。たゞその借務の單位が大分違つてゐる。ドイツには何しろ底の知れない賠償といふものがつきまとつてゐる。

だが、新興國の國民、特に、青年は、借務國であるといふことについて悲觀したり、失望したりしてはならぬ。多くの憂國家は、借務國であることを、非常に慨くのであるが、これは消極的な退嬰的な考へ方である。國家が大に興らんとするには、莫大なる資金を要する。その資金は當然借金によつて得るより外に道はない。アメリカは今日世界第一の資本國といはれるが、極めて最近までは借金で苦しめられた國である。ヨーロッパは、アメリカの債權國として、永い間アメリカを貧乏に泣かせたものである。スウェデンもまた借金で苦しんだ國である。それが今日では經濟的財政的基礎が、極めて堅實なものとなつてゐる。

如何なる事業家でも、最初から借金なしで大事業をやれるものではない。殊に近代的産業の勃興は、國家そのものを大企業の形において發達せしめんとする形勢においてある。かゝる際新らしい若い國家が借金をせずして、國家を經營するといふことは不可能のことである。故にドイツが借務國であるといふことについては、我等は決して失望したり悲觀してはならぬと、國民を励ましてゐる次第である。これは恐らく日本とても同じことであらうと思ふ。

今日のドイツ國民の負擔は、何といつても重税そのものである。これはドイツ復興のため、はたまたヴェルサイユ條約履行のためにドイツ國民が、どうしても背負はねばならぬ重荷である。これを税額の上から見れば、ドイツ國民の税額と、他の諸外國との税額とは、餘り隔りがなく、ドイツの力がある點においては反つて少いものがある。殊にイギリスの税額と比較する時、その一人當りの税額は餘り大差がない。けれども、これを國民一人當りの收入に比べる時は、いかにドイツ國民の税的負擔の大なるかを知るであらう。ドイツ國民の平均收入は一千マルクであり、イギリス國民の平均收入は二千マルク、アメリカ人は三千マルクといふ勘定である。一千マルクの平均收入者が、二千マルク三千マルクの平均收入者と、同一額の税金を支拂ふといふことは、如何に苦痛で

あるかは想像に難くないことである。ドイツは今日、實際想像以上の苦しみをしてゐる。それは世界のすべて認めるところであるが、震災を經驗し、復興の事業に體驗を有する日本國民は、特にドイツ國民の復興作業に對して理解せらるゝ點が多いことであらうと思ふのである。

ドイツの復興作業の中軸をなすものは、言ふまでもなく産業の合理化といふことであつて、工業方面においては、豫期以上の成績を收めてゐる。しかし、遺憾なことは農業方面の合理化運動が促進されず、加ふるに昨年の不作は、農業をして非常な苦境に陷入れてゐる。農業振興にも莫大な資金を要するのであるが、今日のドイツの信用では、極めて高率の利子を支拂はねばならず、最も苦境に立つてゐるものは實にこの農業である。

種々なる困難が眼前に横はつてゐるが、我等は今更らこれを慨いたり、悲しんだりしてゐる場合ではない。民族永遠の生存と繁榮のために、復興建設の努力を積むより外に道はない。借金を恐れてはならぬ。それよりも、國民の精神氣魄が、相一致せざるを恐れる必要がある。現在のドイツでは、最も重大なる問題の一つとして、統一國家の建設を急ぎつゝあるのであるが、これこそ全ドイツ國民の一致團結を强固にする必要があつてのことである。ドイツは御承知の通り、永い間聯邦國家として、幾多の小邦が相結んで來たので、それがなか〳〵一つの心となつて團結しにくい種々なる情實がある。この情實の障壁を取除いて、統一國家を實現する時こそ、新生ドイツの完成する時である。この點においては、日本は早くも六十年前において、藩制が撤廢され、世界に比類のない統一國家の範を示してゐることは、まことに羨望に堪へない。

要するに、今日のドイツは、御覽の通りの困窮の狀態においてはあるが、われらは少くとも借金を恐れず、債務國たるを恐れず、一途にドイツ統一國家の完成に向つて進みたいと念じてゐる。それにしても、世界は今や相接近し、隣近相理解し相扶け合ふにあらざれば、國家の興隆發展は不可能である。それには同一の、又は相類似の體驗と心情とを有する者が、最も相親しみ易いものであるから、同じやうな運命と、同じやうな條件の下に、共に新らしく興つて來た日本とドイツとは、最も相理解し合ふことの出來るものであることを嬉しく思ふものである。私は特にこの心持ちを日本の靑年男女諸君に告げたいのである。

見よ！目覺しき獨逸の復興振り

池田林儀

一 不斷の努力！不斷の前進！

『われらは負けた。われらの國富は損はれた。われらの繁榮は頓挫した。しかし、われらは失望してはならぬ。われらが戰場に於いて失つたところのものは、われらの産業戰場において取戻さねばならぬ。不斷の努力！ 不斷の前進！ 戰後に處するわれらドイツ人の覺悟はこれあるのみ！』

負けたドイツの産業統帥者は、かく叫んで戰敗ドイツの復興のために奮起した。

『時を重んぜよ』

『使用に堪へるまで之を使用せよ』

『考へて及ばざるは猶未だ足らざるなり』

『腦と足とは共に動かせ』

『至誠より強き力なし』

『義務と權利とは同一分量なり』

『臺所はベルリンに通ず』

これらの標語は、實に、復興運動に直面せる全ドイツ國民の肺腑を衝いて叫ばれるところのものであつた。物凄い意氣込み、ドイツ國民は馬車馬の如くに、一途に復興に向つて精進した。

二 宰相の飛行機利用

ハンズ・ルーターが宰相となるや、彼は一時間以上を要する旅行には、必らず飛行機を利用した。

『一國の大宰相たるものが、さう輕々しく飛行機にばかり乘つて、若し萬一のことがあつたらどういたします』

新興獨逸を率ゐる人々



全國民の信望を擔つて大統領となつた獨逸の大柱石ヒンデンブルグ元帥



民黨の首領にて外交官として有名なるストレーゼマン氏



四度首相となつた大政治家ウイルヘルム・マルクス氏

側近の者がかく忠告すると、『わが光榮あるドイツの航空業は、一國の宰相を過失のために殺すことは斷じてない。今日のドイツは、予をして一分一秒の時間も失ふことを許さない。卿等も予に倣つて時を重んぜよ』と。ルーターのこの一言は、全ドイツ國民に非常な感激を與へたばかりでなく、航空業者をして奮起せしめた。ドイツの航空業の大合同は、實にこのルーターの一言によつて促進され、斯業の發達は、この一言によつて速度を早めたと言はれてゐる。

三　青年科學研究所

ドレスデンの青年團員は、復興促進に奉仕せんがために、一日二時間づつ多く働らくことにした。彼等は朝は一時間早く起きて勞働し、夜は一時間だけ長く居殘つて勞働した。これに參加したるものは、青年團員七萬四千人、女子青年團員三萬二千人、合計十萬六千人である。彼等はこの二時間の勞働收入を貯金して四年八ケ月の後には、實に十一萬三千マルク（約五萬五千圓）の元利合計を得るに到つた。

彼等はこゝに、この金の使ひ方について研究考慮した。その結果、一つの科學研究所を設立することにし、これに『ドイツ男女青年團科學研究所』と命名した。この研究所の主なる研究科目は、

一、日用品の鑑定
（イ）衣服の材料はその用途によつて如何なるものが宜しいか
（ロ）石炭の鑑定は如何にしてするが宜しいか
（ハ）金屬類の利用方法使用方法は如何するか

二、工藝材料品の鑑定
（イ）成分
（ロ）持久力
（ハ）性質
（ニ）利用方法

三、日用品の使用方法及利用方法
（イ）電氣瓦斯などの使用法
（ロ）藥品の利用法



財政學者で嘗て大藏大臣として偉功ありしヨゼフ・ヴイルス氏



現任運輸大臣として活躍せるテオドル・フオン・ゲラルト氏



復興に重要なる植民政策の大家ハインリヒ・シユネー氏



現獨逸政府の內務大臣たるヘルマン・ミユラー氏

などすべて實用的方面を主とし、特に工業勞働に從事する徒弟に對して、材料の性質と利用法とを知らしめ、無駄のないやう、仕事の能率の上るやう、經濟的能率の增進に向つて十分なる理解を持たしめることに苦心してゐる。この眞面目と、この意氣込みとが、復興の眞劍さを物語つて餘りがある。

四　復興と婦人の活動

ドイツの復興に作用しつゝある力の中で、婦人の力の特に見逸すべからざるものがある。それが、婦人個々の心でなしに、婦人全體としての心の結合が注目すべき點である。『臺所はベルリンに通ず』といふ標語が物語つてゐる通り、ドイツの婦人たちは、彼女等の臺所の經濟的處理が、一國の經濟の運命を支配するものであると信じてゐる。

彼女等は、『國富』の何であるかを知つてゐる。試みにドイツの婦人に向つて、『一國の富とは何であるか』と尋ねるならば、彼女等は一樣に、

『お互の家事經濟の總勘定です』

と答へるに相違ない。

『物は使用されるだけ使用せよ』

『奢侈は國を亡ぼす最大の原因』

といふことは、彼女等の心肝に銘じてゐる言葉である。彼女等は浪費を忌むこと蛇蝎よりも甚だしい。

『浪費をするものは、無知無識無分別の徒である』

とは彼女等の言ひ分である。ドイツ女子青年團の標語の中には、

『知識と經驗とは勞費を省く』

といふのがある。

彼女等が知識と經驗とを重んずることは想像の外である。知識は文明人の活動の源泉であつて、經驗は知識を活用し、發明工夫を生むの根源であるとなしてゐる。

勤儉貯蓄は、彼女等の最も尊敬すべき美風であつて、臺所の始末の巧妙なることもこゝから出發してゐる。今一つドイツ婦人に學ぶべきことは、その『分』を知ることである。婦人の本

分と使命とをよく理解してゐることである。女子青年團の標語には、

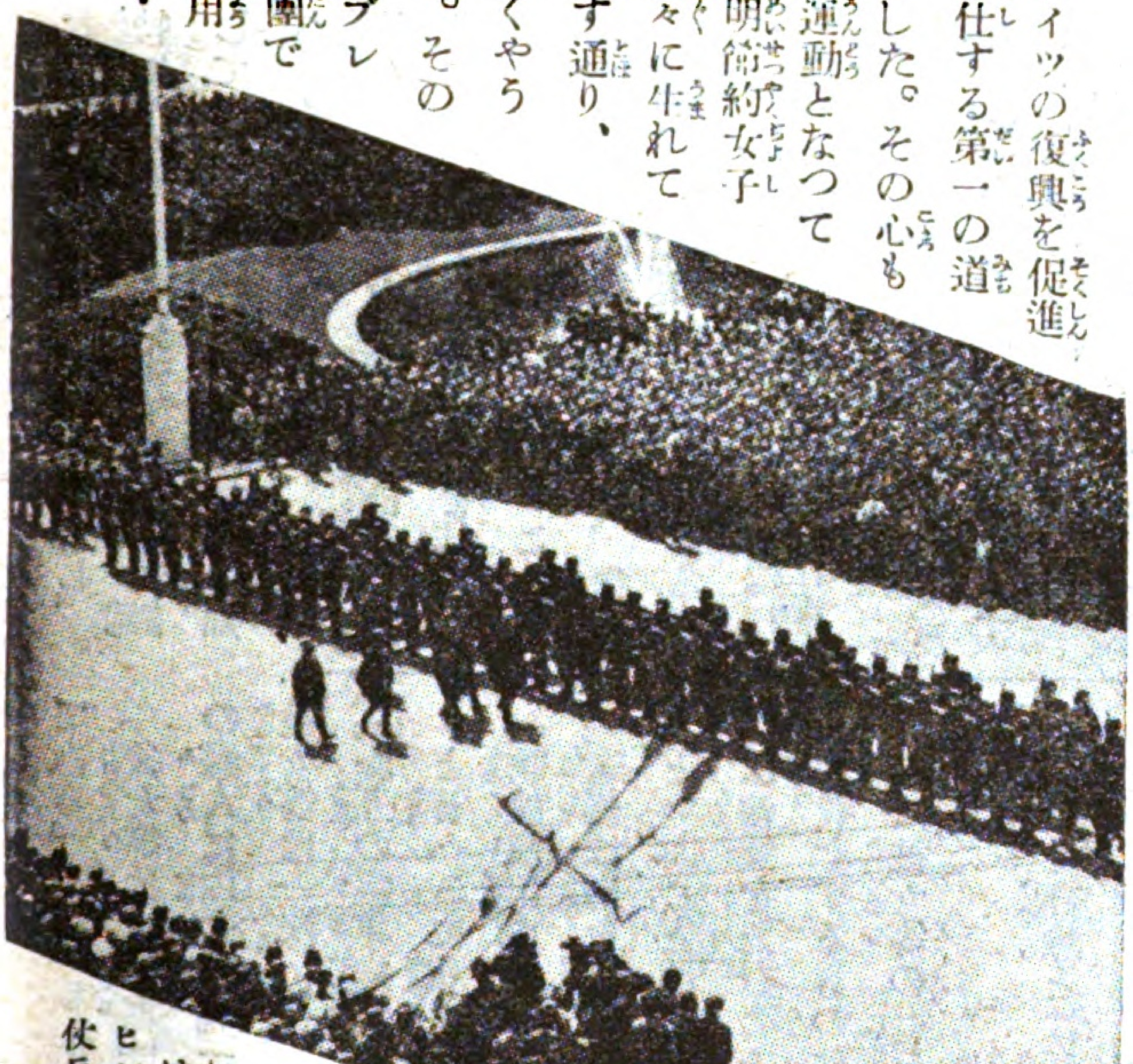
『太陽は晝に輝き月は夜を照す』
『處女とは女の準備なり』

といふのがある。

五　臺所の立直し

ドイツの婦人たちは、ドイツの復興を促進せんがために、彼女等の奉仕する第一の道は臺所の立て直しにありとした。その心もちが色々な方面に、色々な運動となつて現はれた。その一つは「照明節約女子青年團」といふものが、處々に生れて來た。これは、その名の示す通り、白晝無用な電燈を點けておくやうな事を差止める運動である。その元祖とも言ふべきものは、ブレスラウの照明節約女子青年團であつて、彼女等は『白晝無用な電燈が點ぜられることは、文明人の恥辱である』といふこと一點張りで、朝夕二回づつ市内を見廻つて警告を發して歩いた。彼女等は全市の戸數を、團員數で割つて、それを一人の受持區域としたのである。

その効果は半歳ならずしてよく現はれ、市民に對して照明節約の心を徹底することが出來た。ブレスラウ市は、これに感謝の意を表するため、照明節約によつて得たる浪費の償ひの中からとつて、年額二千マルク（約一千圓）づつを寄附することにした。女子青年團ではこの二千マルクを以て巡回圖書館を造つた。その後各地にこれに倣つて照明節約運動が婦人によつて行はれてゐる。



獨逸國大祭日
昭和三年八月十一日の大祭日には、リパブリック廣場に於いて嚴粛なる儀式が行はれた。寫眞は大統領ヒンデンブルグ元帥が儀仗兵を檢閲する處です。

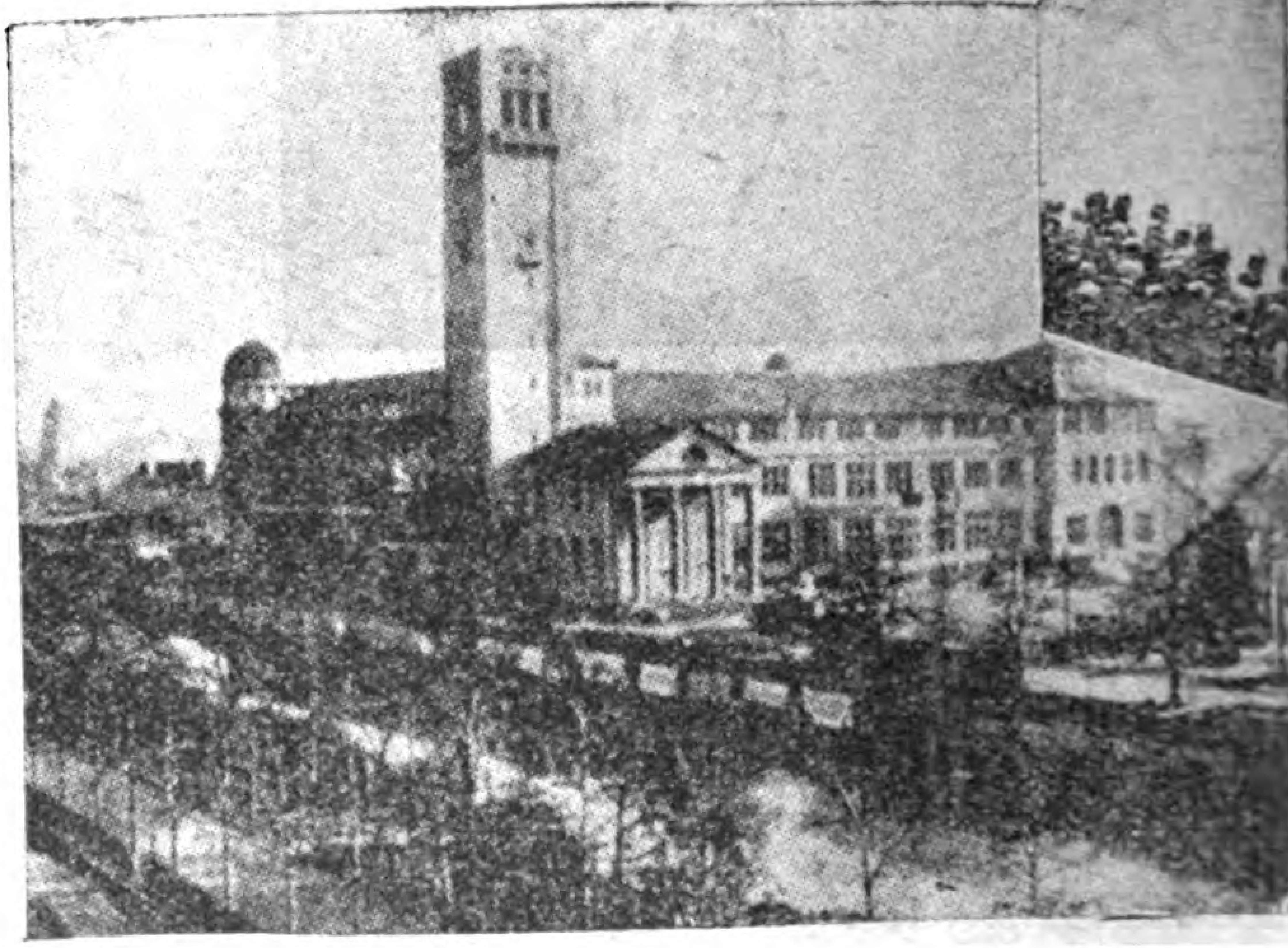
照明節約ばかりでなく、節約運動に對するドイツ婦人の熱心さは、實際に注目に値する。彼女等は、一寸の布、一片のパンでも、決してこれを粗末にはしない。彼女等について特に注意すべきこと

は、節約々々といふけれども、それが、決して消極的な節約でなしに、『無駄より有益へ！』といふ標語の下に、すべてのものを、利用し活用せんと努力することである。

六　性道徳の頽廢防止運動

負けたドイツの物質的打撃は今さら言ふまでもないが、精神的道徳的打撃も非常なものであつた。婦人道徳の頽廢も甚だしく、ドイツに旅するほどの人々が、これを歎じたものであつた。これは、單に婦人ばかりを攻めるわけには行かないことであつた。性的享樂を追ふ餓虎の如きやからの跋扈は、國民道徳の根柢をも搖がさんとする觀があつた。こゝにおいてか、心ある女子青年團は、『私娼撲滅』『社會病退治』を目標として蹶起した。その先驅となつて活動し出したるのは、實にポメラニア灣の一角、オーデル河口の一都市ステチンの女子青年團であつた。『處女とは母の準備なり』といふ標語を振りかざしてゐるドイツ女子青年團にとりて、この風紀の頽廢は最も憎むべき敵であつたからである。彼女等は、『獸慾を文明國より一掃せよ』と叫び、『ドイツを飾るものはドイツの處女でなければならぬ』と高調した。





クルツプ會社の壯觀

資本金二億五千萬圓、長さ五哩巾一哩に渉る大工場と職工五萬三千人を有し、ドイツの復興に絶大の威力を發揮しつゝある大會社。同社は兵器機關車等の製作所として世界第一と稱せられてゐる。

彼女等はまた、ドイツ婦人の貞操の危機を訴へて、『深淵に投ぜんとする處女を救へ！』『鰐の口より處女を脱れしめよ！』『色魔の跳梁を防止せよ！』『人面獸心の徒を葬れ！』と盛んに性道徳の頽廢に向つて挑戰した。彼女等は、『人間が最も眞面目な時代を生み出すのは、最も眞面目に性道徳を重んずる時代である』といふ見解を強く說いたのであつた。かくして、ドイツの婦人達は、ドイツを救ひ、ドイツを復興せしむべ

く、物質的に精神的にも、道徳的にも、あらゆる努力をなしたのである。この外にも家庭工藝を奬勵し、いはゆる手内職をして、組合式組織の下に、大規模に製品を統一し、これを一つの機關を通して販賣するといふ方法を講じたものもあつた。これは『臺所の不景氣を除く』ための最も賢明なる努力の一つであつて、今日では立派な組合となつて發達してゐるものが多々ある。

七　油斷を許さぬドイツ人

『常に備へよ機會は不用意の人を訪はず』

これもまた、ドイツ青年團の標語の一つである。ドイツの復興運動は、なか〳〵難かしい仕事である。難かしいだけ失敗も多かつた。

ドイツ今日の隆々たる復興振りは、眞にこれ粒々辛苦の賜物であつて、失敗に失敗を重ね、改良に改良を加へ、前進また前進、やう〳〵かゝる成果を生むに到つたものである。そこには、ドイツ人一流の研究心と發明心とが作用してゐる。その研究心と發明心とをして、最もよき成果を生むに到らしめたるものは、實に、

『常に備へよ、機會は不用意の人を訪はず』

といふ標語をそのまゝに活かし得たからである。ドイツ人には油斷がない。寸隙をも與へない。さればこそ、農業に工業に商業にすべての產業において、驚異すべき躍進を示したのである。

一つの例を引いて見る。ドイツは土質も風土も餘りいゝ國ではない。しかも、その農產率は極めて高い。これは全く農民の努力と科學應用との賜物である。今日のドイツの農產を見るに、玉蜀黍、野菜、馬鈴薯、及び肉類の一反當りの產額は、英國の三倍である。牛だけで見ると二倍、豚の方は五倍である。

また工業方面の生產能率の增加も非常なものである。例へば、鐵鋼業においては、鎔鑛爐一箇當り生產高は二割六分增加、ドイツ全體の銑鐵產額は二



伯林市外の模範的職工住宅

科學博物館　敷地はイーザル河上の一島全部を占め、陳列品は鑛山でもトンネルでも道路設備でも、凡て實物大の斷面を示し實に素晴らしいものです。しかも六十億ポンドの賠償金であへいで居る時に建てたのだとは驚くの外はない。

割八分增加、鋼鐵の生產高は四割五分增加、といふ風である。その他の數字もあるが煩を避けてこゝには抄略するが、とにかく、斯うした著しい生產能率の增加、生產額の增加は、一々ドイツ人の不斷の研究と發明によるものである。以つてその熱心さを想像することが出來ると思ふ。

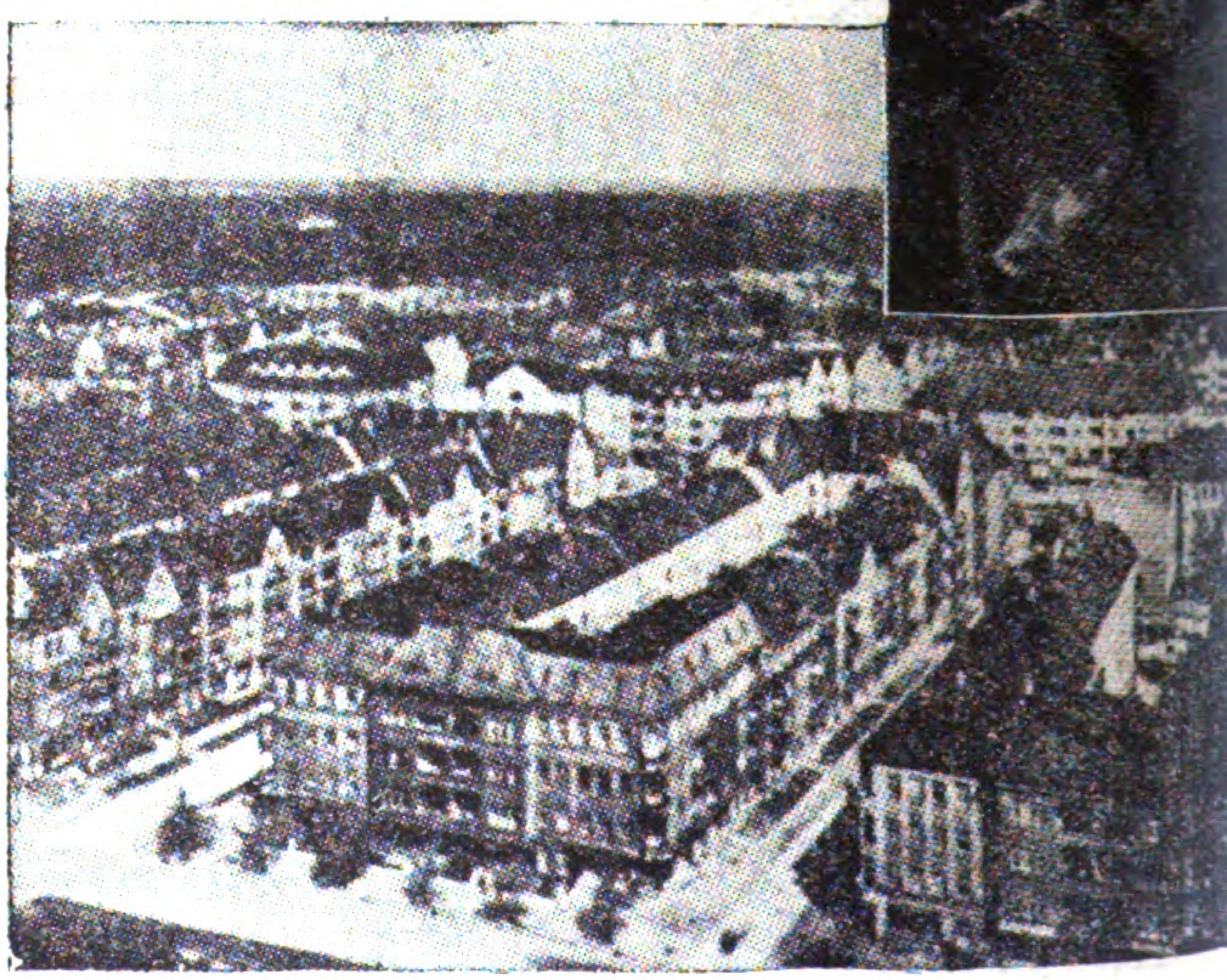


八　復興の中堅は青年

『尊き花は尊き實を結ぶ』

これはドイツ女子青年團のスローガンである。瓜の蔓に茄子は生らぬ。志を大にし、節操を重んじ、希望を永遠につながんとする國民は、自らその覺悟のほども異なつてゐる。

色々な困難があり、色々な難關が橫はつてをり、色々な危險が含まれてゐるとはいへ、ドイツ今日の狀勢は、すばらしい勢で復興に向ひつゝあると言へる。そのすばらしい勢こそは、全國民を擧げて、同じ心になつて、ドイツ及びドイツ人の永遠の繁榮と名譽のために、不斷の精進をつゞけてゐるからのことである。



ドイツ國民のこの熱心と、この努力と、この精進との前に、よき實が結ばぬといふ筈はあるまい。ドイツ國民が、その國歌に高調して居る通り、すべての上に優越することを以つて任じてゐるところに、彼等の眞面目は躍つてゐる。志操の堅固にして、理想の遠大なるところに、大國民の本領が存するものとすれば、ドイツ國民もその一つとして數へることが出來よう。尊き花は尊き實を結ぶ、と任ずるところに、ドイツ國民の前途を祝福する所以があらう。

ドイツの復興運動の中堅をなすものは、青年男女であつて、その目ざましき活動は、實際われらに多くのことを學ばしめる。特にその偉なりとすべき點は、『ドイツ及びドイツ人』とい

ふ自負の心を抱いて、はつきりと、ドイツの復興の理想目的を描き、自分等のため同時にまた自分等の子孫のために、眞劍な努力を積みつゝあることである。その團結の强固にして、組織の堅實なることは、その活動をして社會的に著しい効果を擧げつゝある。こゝにもまた、尊き花は尊き實を結ぶ、の感を深からしめる。

○嘴を渡り切る迄は歡聲を擧げるな　[illegible]

勇ましや獨逸魂！

東京工業大學教授工學博士　關口八重吉

一體獨逸といふ國は、昔から生産の原料に乏しい國で、どんなものでも斷じて無駄にせぬやう訓練せられてゐる。

夜眠る時には、必ず電燈を消して寝る。食事の際、ソースを使用するにも、一滴も餘すやうなことはしない。等々、こんな例は枚擧に暇が無い。

私は伯林滯在中、ゲハイムレート・ドクトル・グレヘーネル氏の許に三月ばかり厄介になつて居ましたが、入浴の際、女中から、

『貴殿は、何度のお湯に這入りますか』

と訊かれて、大いに面喰つたことがありました。これは單に燃料を無駄にしない爲ばかりでない。科學的訓練を經た國民の頭は違つたものだと感服しました。

×　×　×

やたらに物を無駄にしないばかりが獨逸人の誇りではない。『これは有益だ』と思つた事に對しては、勇敢に金を惜まず實行する元氣がある。

一例を擧げると、あの大戰中、寺院の鐘を鑄潰したり、婦人の裝身具までかり集めて、軍資にあてんと四苦八苦の際、驚いたことには、ケルン市の高等商業學校を商科大學に昇格させてゐる。

また、戰後に於いても、かの六十億ポンドといふ箆棒な償金を背負はされて喘ぎながら、一千萬圓の巨資を投じて、ミュンヘンに大規模な科學博物館を建てゝ、世界の識者をアッと驚かせてゐる。

×　×　×

私の視察したうちで、最も印象深きものゝ一つとして、ハンブルグの塵芥燒却場を紹介したいと思ふ。

鐵製の車で運び込まれる市中の塵芥を、先づ磁石を應用して鐵片を撰り分ける。この廢物の鐵片は、やがて有用な鐵材に還元されることは勿論だが、殘つた

塵芥を十二個の釜に移して燒却する。

その燃燒する熱を蒸氣汽罐に移して、電氣を起し燈火用に供したり、蓄電池に貯へたりして居る。尚その焚殼の灰を以つて煉瓦を造り、道路の敷煉瓦の代用品としてゐる。更にまた、その塵芥の燒却釜に炭酸瓦斯の測定器をつけて、完全に燃燒を行つて居るか否やを檢する。廢物利用も玆に至れば極まれりといふべきで、唯々感嘆の外はなかつた。

× × ×

流石に聞ゆる工業國だけあつて、工業教育は實に盛なものである。特に實地工業に從事してゐる職工を主とした夜學校が澤山設けられてゐるのが目についた。しかも、此の中で或學校は工科大學まで連絡の路が開けてゐるのである。即ち高等教育に對しては機會均等を與へて居るのである。

ある夜學校を視察した時の事。

ふと生徒の製圖を覗いて見たら、とても晝間でも目の疲れるやうな精密な製圖を熱心に描いてゐる。そこで、

『却々精密なものをやつてゐますが、電燈の下でよく出來ますね』

と校長に訊いたら、



關口八重吉氏

『えゝ、この生徒の描いて居る製圖は、工場へ歸つて、實際に製作するのです』

と答へた。

成る程、これでこそ學校の教育も生きてゐる、工業の盛んなのも故ある哉と思つた。

× × ×

科學萬能一點張りかと思ふとそれは間違で決してさうでない。實例を一つ申上げよう。

私がライプチッヒにしばらく滯留した折、定めつけの旅館で、何くれとなく深切に世話をして呉れた給仕君に、去るに臨んで心付けを與へようとしたところ、その給仕君は、

『御志は有難う御座いますが、私が頂戴するのは御辭退いたします。その代り御同情に預りたいものが御座います』

といつて、一冊の寄附芳名錄を持つて來ました。それは大戰のため戰死した軍人の遺兒の寄る邊ないもの達を世話する慈善團體の寄附であつた。

私も一種の感慨を催して、幾何かを寄附したが、カントを生み、シラーを生み、フイヒテを生んだ、美しい獨逸魂がほの見えて床しかつた。

おれさ國だよ
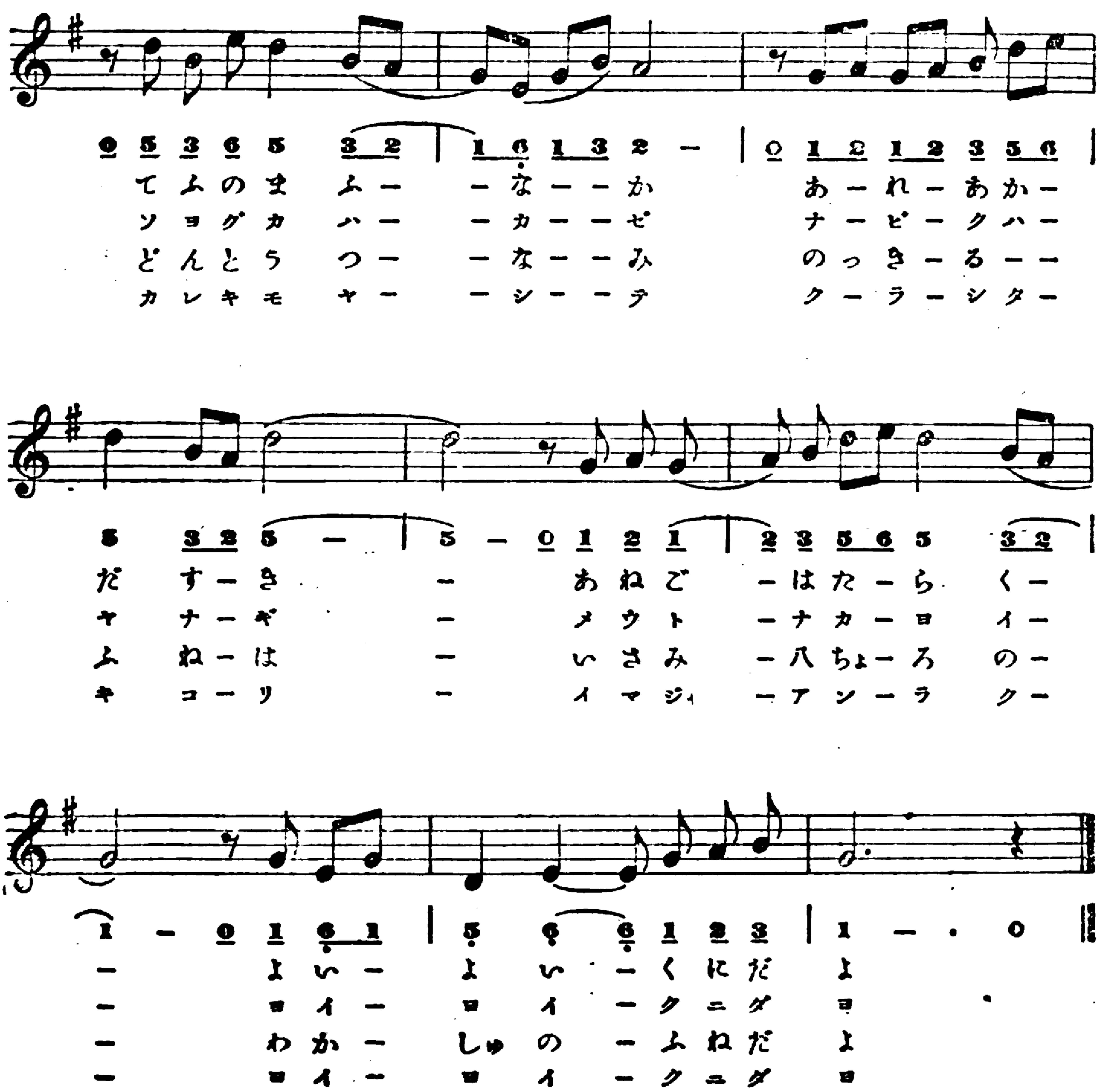
川路柳虹作
中山晋平曲

一

おれさ國だよ、あの松林、
松のみどりに菜たねの畑
蝶の舞ふなか、あれ、赤襷
姉御働く、よいよい國だよ。

二

おれさ國だよ、あの川堤、



宵にや螢のちららら光り、
そよぐ川風、なびくは柳、
夫婦仲よい よいよい國だよ。

三

おれさ國だよ、あの鰯雲、
空に大漁の夕映あかり、
どんとうつ波 乘つ切る船は
勇み八挺艪の 若衆の舟だよ。
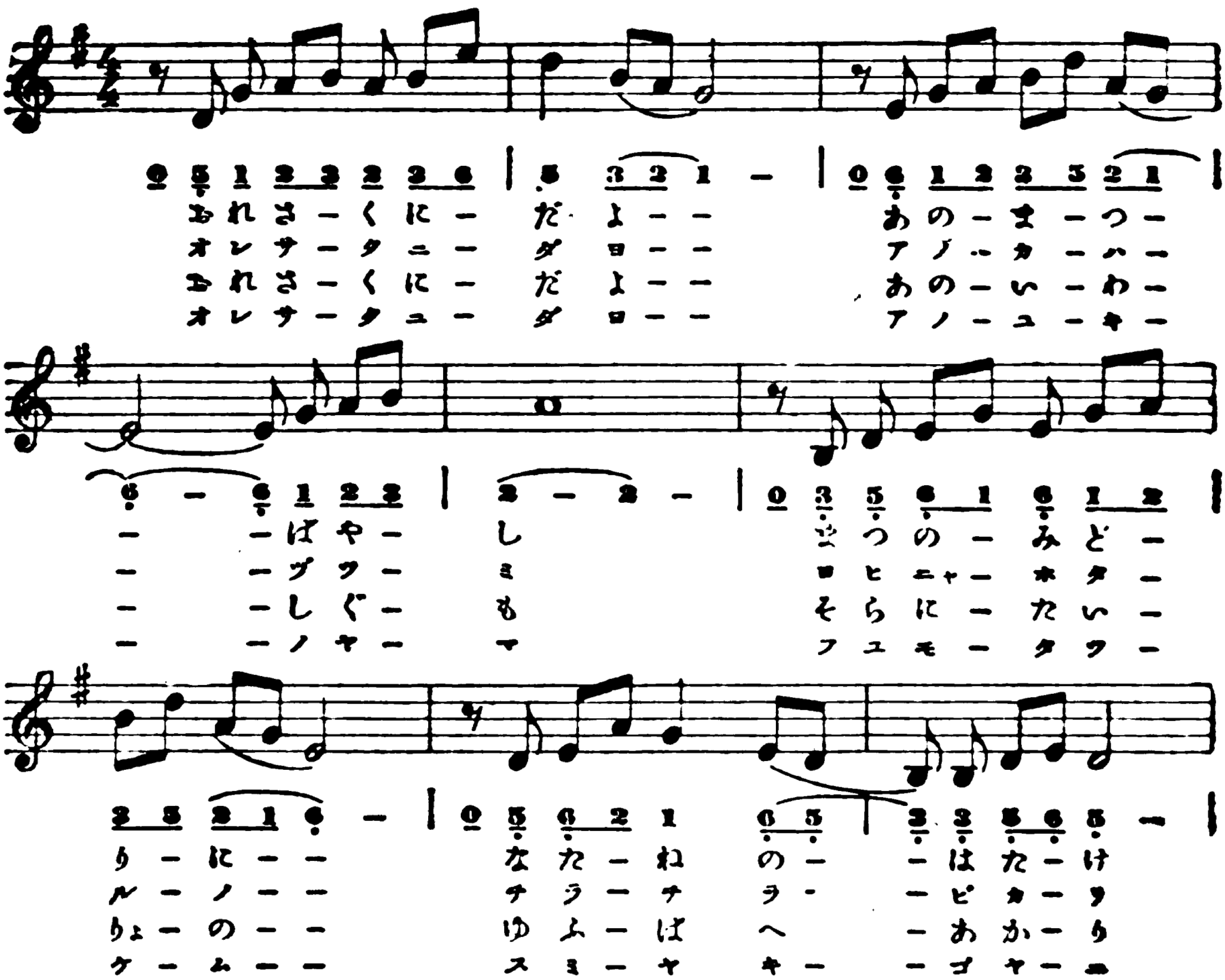
四

おれさ國だよ、あの雪の山、
冬も立つ煙 炭燒小屋に
枯木燃やしてくらした木樵、
今じや安樂 よいよい國だよ。

おれさ國だよ

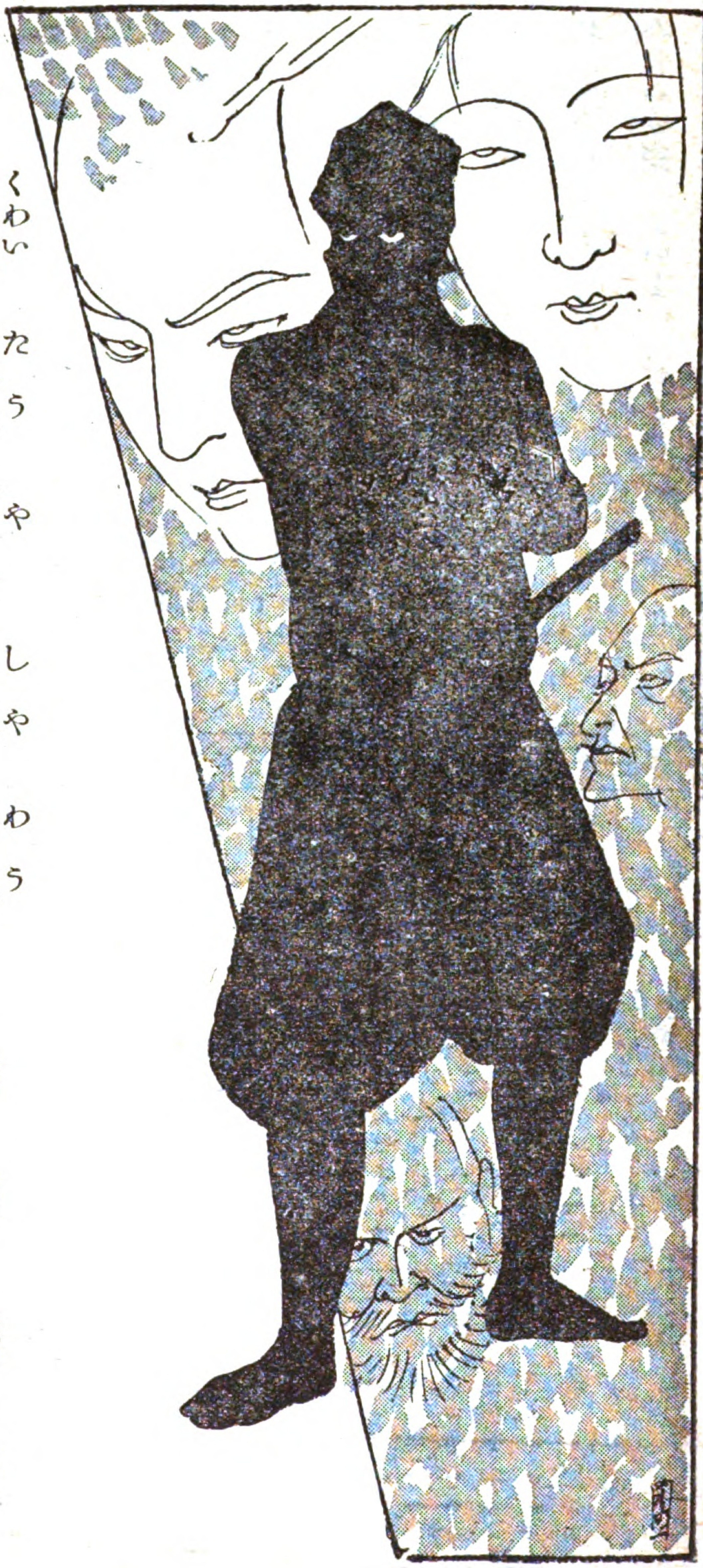
(川路柳虹)

(中山晋平曲)



怪盗夜叉王

前田曙山
挿繪 山川秀峰



美男の譽

夜叉王來、夜叉王來。

泰平の春夢にいきれる江戸は、怪盗夜叉王丸の出沒に、息の根を潜めて竦え戰のいた。夜叉王丸とは何者、風の如く來り、風の如く去り、誰一人として明らかに其の姿形を認め得た者は

無いが、彼の出現する處、金銀財寶は、翅が生えて飛び去るやうに、有ん限り掠奪されるので有る。公儀御金御用達の笹屋宗十郎、朱座の下村總五郎、廻船御用所苫屋久兵衛、御菓子御用達の鈴木越後、其の外有徳と聞えた町人ばかりか、大名旗下の大身が、此の盜賊に見舞はれて、家重代の寶物を奪はれたり、調度の金函を擔ぎ出されたり、被害は頻々として有るのだが、何れも外聞を憚かつて秘し隱しにするので、只物騷な噂が傳はるばかり、下々の多くは、直接出會ふ事が無いので、對河岸の火事のやうに思つて居るが、夫に出會つたものは、怖毛をふるつて恐れ驚いて居る。

如何に嚴重に用心をし、見廻りの火番や不寢番を附けても、夜叉王の一黨は、誰の目にも觸れる事無しに入つて來る。彼が來れば土藏の錠は自づと外れ、錠前の戸尻は獨り手に明いて、不思議の怪盜を請じ入れるので有る。さればこそ夜叉王の押入つたのを、誰知る者の無い程、いぎたなく眠りこけて居る内に、根こそげ財寶を浚つて行く。偶に聲でも立てる者が有れば、黑裝束の眞黑な者が飛鬼つて取つて押へ、電光石火の如く括し上げると、其の人は縛られながらもいつしか快よく寢入つて了ひ、其の後の消息を少しも知らないのだ。さればこそ切支丹の妖術を遣ふに相違無いと言ふ事に一致して了つた。

更に彼が傍若無人な事は、餘りに用心嚴重にすると、何時幾日に押入るといふ事を通告して置いて、必す其の日其の時に巧妙極まる掠奪をするので有る。宛ら天下の御膝下に人無きが如く、町方與力同心加役の面々などは、一切彼の眼中に無いのだ。

此の姿形を見せぬ怪盜を、夜叉王丸と知つたのは、彼が大袈裟の盜みをした跡には、必ず名書を殘して行くからで有つた。然も其の筆蹟が同一人で無いのは、達筆の時も有り、金釘の折れの時も有り、一つとして同じ手筋が無いのでも、其徒黨の多いのに脅かされる。此の怪盜が召捕られなければ、江戸八百八町の重立つた者は、枕を高く眠る事が出來ない。江戸役人は今黑船の強談示に狼狽へ廻り、釜の中の鮹同樣に行詰つて居る處へ、重荷に小附の夜叉王の爲に、手も附けられぬ恐慌の渦に卷き込まれて了つたのである。

外には異國の威嚇に加へて、禁裡御所に對し奉る幕府重役等の智慧の無い取計らひ、其の爲に鼎の沸るやうな混亂を生じ、勤王志士の召捕となり、水戸殿の蟄竄となり、世の中は混沌として、物の黑白も辨じられなくなつて居るが、其の役にたづさはる者より外は、江戸の上下とも御當家萬々歳と信じ切つて、長夜の眠りは昏々として覺めないのだ。

『右近、よう見えた。過分ぢやぞ。』

江戸霞ケ關の彦根家上屋敷の奥深く、時の一の人として、泣く子も止まる大老職、日頃柳營御用部屋に出仕しても、一顰一

笑だも苟しくもせぬ凛たる權式を、緩らかに崩して、十二分の寛ぎを見せて居る。御本丸では天下の筆頭の權臣でも、屋敷に寛ろげば、玄蕃頭と言つた部屋住氣分の餘裕を忘れないので有る。

『麗はしき御尊顏を拜し、右近恐悅申し上げまする。』

恐る〳〵僅かに頭を擡げた波多野右近、大御番組頭を勤役の八百石の旗下、年は二十三四、剃り立の月代の痕は、青黛を灰めかしたやうに青く滑らかで、眉目清秀の品の好い瓜實顏、中肉中丈の形のよさは、誰が目にも三座評判のやつし形が、裃着けて武家の役所を買つて出たやう、薄暗い柳營の廊下は、此の人の歩くに從つて明るくなるとさへ言はれた。如何なる功者な生みやうをしたか、若衆立から元服過ぎるに從つて、一日増しに美しさが盛上つて來る。男斗魁に咽喉を乾かせる大奥では、右近の噂を聞くと、女だてらに武者ぶるひが昂じ、萬に一つも右近の生身を見て來たと言ふ者でもあれば、羨ましさに突き飛ばされ、妬たましさに小突れし、其の揚句には菓子でも禁らせられるが落ちであつた。

『いや御身も勤役大儀で有る。御上通りも宜しいに因つて、予も蔭ながら滿足致し居るのぢや。』

『恐れ入りまして御座りまする。』

餘り調子が宜過ぎるので、右近は聊さか擽ばゆい心地がしてならない。愈〻御大老から御招きを蒙つたさへ有るに、餘り打解けての待遇に、勿體過ぎる程難有く感激した。

『今日は强ち御身に用向きが有るでは無い、久方振に籠居致した處、偶と御身の事を思ひ出して、久方で逢うて見たいと思ふた迄ぢや。』

大名の氣儘も有るけれども、身體が三つ四つ有つても足らぬ御大老が、只其の位の事で右近を招かれる道理は無いと、彼は胸の中で殿の用事を算當して見たが、どうしても割出しが附かなかつた。

『恐れ入りまする。親代々緣の外御贔屓下し置かれ、依樣に御招ぎに預りまするは、右近家門の譽れと、難有く御禮申し上げまする。』

右近は温かい玉のやうな肌から、細かい汗の露を滲ませる程恐縮した。若しも殿の後の小姓が奥向の御殿島田であつたなら、其處にも人知れぬ陰密の賦が、ぬめ〳〵と蕩けかゝつたに違ひない。年端の行かぬ若衆小姓さへ、名作の生人形を見るやうに、只歎美の目を瞠るばかりだつた。

『ウム、御身の親は世にも珍らしき忠節者で有つたな。今日は緩りと御身の親の話でも承はらう。……幸ひ釜に沸附いて居る。一服參るであらう、予に跟いて參られい。』

愈〻只事では無い、圍で茶を賜はるは身の面目ながら、

客只二人切で、小姓さへも遠ざけられたのは、尋常一様の事柄では無いと、右近は窃かに胸を躍らしたが、其の鼓動は臆病からでは無く、春風に嘶なく駒の勇みで有つた。いづれ何か公邊の御内談であらうが、人生意氣に感じては、家も思はず身も惜しまずと、三河以來の忠魂義膽に鞭打つ心地がした。



女間者の出入

『右近、御身は此の頃の御時世を何と見やるな。』
春まだ淺き圍室の瓶花、簪の梅の床しい綻びが、含み口の媚めきを見せて居る。恭しく押戴いた薄茶を、難有く頂戴して主人に戻すと、殿は續いて自服の手前を試みながら、快く一服した。全く右近を腹心の者として、更に心を置かぬので有る。如何に大老屋敷の奥の奥とは言ひながら、昨今の容易ならぬ時世、萬々一右近に害心が有つたら、取返しが附かないのだ。

『恐れながら御瑞たき御代と、辱けなく存じ居りまする。』
夫を聞くと主人の殿は、福やかな豐頰に零るゝ笑ひを湛へた。

『夫は通り一遍の世辭と申すものぢや。』
右近は不意を叩きのめされたやうに、ハッとまごついた。天下の大老も中々人摺れて居る。何と言ひ直してよいか、冷汗をしとゝ浮べた。

『御身も大方存じて居よう、此の度黒船の渡來、船將パルリスと申す夷人が、開港交易の條約といふものを取結び呉よと、切切公儀へ願ひ立てるのぢや、夫に就いては先年備中殿（堀田正睦）が上洛致して、種々公武の間を周旋されたが、何の功も立と[illegible]、[illegible]へる良人共て、物言ふ事を覺えさせたに過ぎぬのぢや。』
堀田備中守の軟らかい手口は、掃部頭の剛愎には合流されなかつた。

『剰さへ公卿堂上方を増長致させたとは思はぬか。』
局に中る中心人物としては、飽まで思ひ切つた批評だつた。夫も是も自分を腹心の味方と信じられればこそ、恁いふ打明けた御話しも有るのだと、右近は感激の涙を、桃色に上氣した眼元に霑めらした。

『恐れ多いが、予から見る時は、瑞たい御代とは存ぜぬのぢや。』

『恐れ入りまして御座りまする。重き御役柄、日々御苦勞な事と存じ上げまする。手前如き若輩、何の御役にも相立ちませぬが、もし犬馬の代とも相成る御用も御座りますれば、粉骨碎身御奉公仕つりまする。』
右近としては恁言はねばならず、又言ふのが禮儀だつた。然も彼は只の辭令では無く、心から底から懸命に働く決心なので有る。

『右近　もそつと近う。』
低い底力の有る聲が、此の時何かは知らず右近を壓し附けた

『ハハッ』と、彼は言下に躙り出た。主客の間隔は只爐一つを隔つるばかり、右近は同席の辱けなさが身に餘つて、泣きたい

聲だつた。

『右近、御身が御奉公する時節が參つたぞ。』

殿の微笑が消えると、其處に俊し難き威厳が押寄せて來る。

『御身は御上の御爲とあれば、元より一命を奉つるであらうな。』

果して重大事が鋒鋩を現はして來たのだ。金龍の閃めきが、チラリと雲中に耀やいたので有る。

『仰せ迄も御座りませぬ。只今一命を召しまするとも、難有く差出しまする所存。』

大方其の位の事は有るだらうと豫期して居たが、數ならぬ大御番位が、上の御役に立つかと思ふと、緊張した筋骨が揮ひ立つばかりに勇ましくなる。

『いや只一命を差出すばかりでは無い、御直参の面目も捨てゝ貰ひたう存ずるのぢや。』

『ハツ、何と御意遊ばしまする。』

右近の顔は鬩と氣色ばむだ。武門武士たる者が、義を金鐵に比し、命を鴻毛より輕んずるは、元より其分で有るが、武士の面目まで捨よといふは、如何にも心得難い。

『家も思はず、身も惜しまず、只御奉公大切と思ひ込むからは、如何なる惡名を受けても、御上への忠節ならば殘念には存ずまいが。』

『御意に御座いまする。先祖代々厚き恩みにより、八百石を頂戴致し居りまするも、凡て御上の難有い御慈悲に御座りますれば。』

掃部頭の謎は解せぬけれども、解せぬなりに答へる外なかつた。

『夫を聞いて予は滿足に存ずる。予が一昨年より重き御役を承はつたる節、身も惜しまず、家も思はず、又如何なる惡名を蒙るとも、是非ない事と覺悟して當職に就いたので有る。予の考へも御身の考へも、畢竟は同じぢや。』

『恐入りまする。して如何なる御用筋で御座いませうや。……手前に相勤まりまする事なれば。』

『オウ御身でなうては勤まらぬのぢや。公儀御扶持人は多いが、此の役目を仕了ふせる者は、右近御身ばかりぢや。』

殿の御居間と覺しき彼方に方つて、漏斗が銷魂しく鳴つて、閑室の灯は軟らかい明るさを増した。

『御身は秋の門の御力を知りやらぬか。』

緊張した大切な話は、突如として脇道へ外れて了つた。

『ハツ、秋の門御力と仰せ遊ばすは、先頃京より御下り遊ばされた奏者御力に御座りませうや。』

我意を得たりと言ふやうに、掃部頭は首肯いた。

『如何にも左様で有る。……御身は秋の門殿が、何故御府内へ

られたか、承知致すかな。』
『東路の歌枕をお捜り遊ばさるとか承はりまして御座りまする。』
闇老は嘲けるが如く、ニヤリと笑つた。
『猶亦承はる處にては、御方樣御許婚で在せられる西園中納言雅信朝臣、先年より御行衛相知れざる由、依つて御内々に其の御所在をお尋ね遊ばすとも承はり及びまする。』
『オウ夫もあらう。なれども猶其の外に大切なる一事を繋けられるのぢや。』
恁言はれると、深く消息に通ぜぬ大御番などには、其の先までの推量は附かなかつた。
『御身は萩の門殿の御身の上をよう存ずるか。』
『只已む事なく尊き御身分の姫君とは、承知致しまする。』
『如何にも尊き御方の御血縁を引かれ、又近衛殿とも誠に近しき御間柄で、言はば宮家とも臣下とも附かず、誠に高貴の御身柄ぢや、然し御府内へ下つて、長らく御逗留相成る内々の御用は、柳營御評定、乃至重役共内密の政道、仕置き、萬端を探索して、京都へ御通達相成る。申さば間者の役に方られるのぢや。』
意外の初耳に、右近は顏色を變へた。彼窈窕花の如く、荒い風にも堪へさせたまふまじき京家の上﨟が、聞くも恐ろしき間者隱密とは餘りと言へば邪推過ぎはしまいかと思つたが、元より言葉を返すべきでは無い。



「御身も聞いて居いたであらう。然し公儀にも隱密が有るにより、其の邊の事が大凡得心致されたのぢや。先般當上樣紀州御館より御本丸へ御乘込み、瑞たく御代替りの節、一方には一橋殿を守立て、恐れ多くも柳營を我物と致さうと、謀叛同樣の企てを致したる御近親御家柄の御館、又御譜代の大名、乃至は諸役人共、いづれも奸物の面々が有つて、事を謀らうと致した。之には京都表におかれても、内々御打合せも致されたやうに聞き及ぶが、其の節予は正しく天下の一大事と存じ、百方苦心致して當上樣を御迎へ申上げ、幸ひに事無きを得たのぢや。」

殿は我意に反するものを、一圖に奸物惡人と思ひ做して居るので有る。右近は盡く掃部頭に共鳴はされなかつたが、然し大老のする事は、公明正大一點の私心も挾さます、只天下國家の御爲に謀るとのみ信じ切つて居るのだ。

『然る處、予を始め御用部屋の内談事などが、豈圖らん、盡く京表へ知れ居るのぢや、之は何者かゞ、一々通達致す外、洩れよう次第は無いぞよ。』

『御意に御座りまする。容易ならぬ御用部屋御内談で御座りますれば、御坊主衆なども、元より遠慮仰せ附けに相成る事と存じまする。然る時は御用部屋御重役方の外に、右御談示御承知遊ばされる方は御座りませぬ。』



『如何にも左樣ぢや。御身は掛り合の老中などの口より洩れるかと存ずるであらう。』

夫より外洩れる筋道はないが、右近は流石に遠慮して答へな

かつた。

『實は御身故申し聞けるが、其の道筋がよう解つたのぢや。』

右近は石のやうに堅くなつて、兩手を疊へ突張つた儘片唾を嚥むだ。此の如き獅子身中の虫があらば、一刀兩斷の誅戮を加へべきだ。

『夫は斯様ぢや、御養君御相談の事又差當つての御政道の事を、予より御上へ申上る、御上より大奧へ御洩しになる、温恭院殿御臺様天璋院様は、近衛家とは御因緣深き御間柄、自然御物語の折節、萩の門殿の耳に入らう、または歌橋其の外の重き局達よりも御聞き出しに相成らう、夫が即座に京表へ飛んで參るのぢや。』

將軍家や大奧から自然と漏洩するのでは、如何に大老たりとも、如何ともする事が出來ない。さしも權威赫々たる一の人も、此の美しき女間者には、全く手を焼いて了つたのだ。

漸々深い經緯を聞いた右近は、三十五萬石の大々名になれば、成つただけの苦勞は有ると、ツク〳〵氣の毒に思へてならなかつた。

美男の鴆毒

茶室の密談は何時果つべしとも思はれない。近侍の小姓をさへ遠避けられたから、よく〳〵大切の御公用だらうと、昵近の者は不安の心地になつて、遠く控へて居た。何處やらの間から、又酉刻半（午後七時）の時計が鳴り響くが、お話は依然果ない。

『右近よう解つたか、上の御威光を以つてしても、如何とも手の下さん様なき萩の門の御方、然し只若き御女性の御獨住で有る、許嫁の君は御行衞知らず、定めし御寂しう御在さう、甚だ卑怯なる致し方にはあれど、御身の色を以つて御方に近づき參らせ、再び隱密間者などを遊ばさず、女性は女性らしく遊ばすやう、御意見申入れて見りやれ。これぞ武士の面目を棄てくれいと申す予の賴みぢや。』

成功の爲には手段を選ばず、卑怯な小刀細工と言はれようとも、公儀の御爲には易へられないのだ。

『手前が御方様に近づき參らせるので御座りませうや。』

右近は愕然とした。淺ましき色を賣る娼男同然の事に、苟にも直參の旗下たる大御番が指を染められようか。武士の面目は怨、男の男たる價値は此の時に剝れるので有る。餘りの事に、右近は言ふべき言葉を知らず、全身は猛火に焦されるやう、苦悶の火の玉が、丹田より燃え上つて、胸先を蜿蜒打ち廻つた。

『此の儀仕了せるは御身ならでは無いぞ。御身の美玉の面は、公儀忠節の爲に磨かれたので有るぞ。』

『仰せには御座りますれど、女の媚を買ふ俳倡同様の事は、恐

れたなら手前には勤まり兼ねるかと存じまする。』

是が必死の諫諍で有つたが、殿は更に耳にも入れなかつた。

『いや、男女の道は、自然の柔ぎ蕩かし味が籠るもの。御方は早二十を出でさせられて妖艶なる古今の美女に在される。背の君と思ひ込まれた西園中納言の御家出以來、世の中を味氣無く思して、男のやうに、旅路遙けく御渡りあるが、春の宵秋の夕べには、世の中を御淋しく思召す折もあらう、左樣の時を窺がうて、御身巧みに近づき參らせ、次第に御方より賴母しき者と思はれるならば、如何なる御意見も御聞入になるは必定で有るぞ。』

殿も之を勸説するのは、よく〳〵苦しいやうで有つたが、聞く力は骨肉をジリ〳〵と碎かれるばかりの惱亂で有る。右近は窃かに力無き溜息を洩した。

『御身は予の賴みを承引致し吳ぬか。忠義の爲ならば不惜身命と申したは僞りか。』

右近は知らなかつたが、人氣なき此の茶室の植込の陰には恐るべき槍刀が、寢刃を合せて渦卷き立つて居たので有る。殿の合圖一つで、篠芒の穗先は忽ち亂れ、天下の美男を惜氣も無く斬つて捨てる意氣込みが叢立つた。

『如何樣の難事たりとも、決して相背きは仕つりませぬが、此の義ばかりは手前不得手に致して、萬一仕損ずる節は申譯御座りませぬ。』

右近はホッと一條の活路を見出したと思つたが、殿は容易に逃すものでは無い。

『萬一仕損じなば夫迄、其の節は只素知らぬ振にて引返せば、御身の恥ともならず、又予の指圖とも知れず、闇より闇に葬むり去られる迄ぢや。』

右近は又行詰つて、退引ならぬ泥田へ踏む込んだので有る。

『尚今一つ御身に賴む事は近頃世上を騷がす夜叉王とやら名乘る盜賊ぢや、右は只財を貪ぼる盜賊ではなうて、察する處勤王浪士など稱ふる不逞の徒が、軍用金を集める手段に致すでは無いかと存ずる、其の證據には諸大名たりとも、聊さかたりとも、京都御爲を思ふ向へは押入らず、只管譜代の大小名、有德の町人にても、公儀御出入の者のみを襲ふのぢや、是等不敵の曲者の棲家など、御方が御存じ遊ばさぬものでも無いに因つて、且又探索致し吳い。御身の忠節は予が含み置くに因つて、必ず末惡しうは致すまいぞ。』

殿は十分に秋の門の御方を、京方隱密の元締と睨むで居るから、水戸を始め各地の勤王浪士とも脈絡を通じ、大盜夜叉王とも、一縷の糸脈を引いて居るのだと信じて居る。從つて色を以つて御方を軟化させる事は、少なくとも江戸の天下を泰平にする捷徑だと思ふので有る。

『左樣の御不審も御座れば、表向き萩の門殿を御詮議遊ばしませうならば。』

『夫が成らうなら、御身の力を借りはせぬぞ。……御方は世にも尊き御身柄、迂濶に表立つ事を仕掛けようなら、忽ち京方の怒を買ひ、益々勤王の者に口實を與へ、御政道の妨げと相成らう、又一面には柳營大奥とも淺からぬ御所縁が御在すにより、御方御不審とも有れば、忽ち大奥の御憤を招ぎ、予は御役御免に相成るのぢや。……御方に於いては夫を御存じ故、益々以つて目に餘る御振舞あらせられる。所詮御身といふ美しき毒を以つて鴆殺致す外ないのぢや。』

波多野右近は十分殿の苦衷を咀嚼する事が出來た。御方の在否が、柳營政道の死活ともなり、我身の外に夫を制する者無しとすれば、身を殺して仁をなすは男兒の本望、手段は卑怯とも未練ともあれ、公儀御爲、江戸安寧の爲には易へら



れぬと、必死の覺悟を極めたので有る。
『委細謹んで御受け致しまする。』
『得心が參つたか、祝着々々。御當家の興廢は一に御身の忠節に有るぞ。』
殿は如才無く煽て上げながらも、始めて重荷が下りたので有る。萬々一右近が承引せぬ場合、脊に腹は易へられぬ大事の漏洩、馬謖を斬る涙片手に、天下の美男を討つて、百花の精を泥土に委ねる事は、未來までの痛恨事だつたのだ。

花下の狼藉

『コウ〳〵見や、手前彼知つてるけえ。』
『何だ、騷々しい野郎ぢやねえか。』
顋で指された花の下の群集を見ると、枝もたわわに重く咲き充ちた花の雪を、徐ろに看行はす大前髮の男髷、若衆かと見れば、雲の鬢花の顏、紛れも無き男姿の女性の上臈で有る。
『何だい、彼は。』
『大きな聲を出すな。彼が名代の萩の門様といふのだ。』
『ぢや小梅の御館といふのは彼か。』
『何だつて素敵滅法界もねえ綺麗なもんだなア。奧山の松本喜三郎の生人形だつて、如彼には行くめえぜ。』

さらぬだに向島の花の春、江戸中の人を打負けたかと思はれる人出は、思ひ〳〵の花見の趣向、目鬘酒樽百手拭、往さ來るさに揉み合ふ人々の視線は、只一人の美人の姿にフラフラと吸ひ寄せられて行つた。
　永い春の日が西に傾むいて、待乳の梢を流る丶夕陽は、音も無く盛上る大川の水に影映し、嘴赤き都鳥が、畫のやうに緩く流れる。殺風景の江戸の中にも、優にやさしき風雅の景色を、少時樹の下に佇ずんで、飽かず見惚れて御在したは、噂の主の萩の門泰子の御方。
　京は女の美しいに止めを刺すが、其の美しさの中にも、爭へぬ氣品の高さは、尊とき御筋合の御身柄、御眉のかゝり、御目の切れ、鼻筋の形よく通りたる、御口許の優しい締り、能くぞ人間に此の美しさが有るものと、目のあたり拜した人々は、只呆氣に取られた程、人よりは神に近き縹渺たる姿容。夫が黑



緞子の丈長の羽織に、裏附の茶亭の袴を召され細身の大小を差された鷹揚の態度。逆卷のやうにソロ〳〵跟いて來た見物は、醉はされたやうに魂を吸ひ寄せられ、有頂天の心地に思ひ惑はされた。

『玄蕃。橋場から眞崎かけて、夢より淡く霞棚曳く。京とは又趣きの變りました、妙なる風情では有りませぬかえ。』

薔薇の蕾の唇が綻びると、玉を轉ばす駒鳥共の儘の美聲、如何なる邪念も自づと淨められさうに雖はしく聞える。

『景色などは、手前には一向に相解りませぬ。』

之は又牛の吼ゆるやうな地太の聲、主はと見ると、五尺七八寸もあらうかと言ふ大男、野郎頭の引詰鬢で、色飽く迄赭黒く、胸毛逆しまに生えた頑丈作りの侍、講釋場で聞く播磨右衛門 橘 直之其の儘の豪傑で有る。

『オホヽヽ、景色が解らぬとかへ。』

御方は輕く扇子を笹色光る唇へ添へられ、オホヽヽ〳〵と包ましやかに笑はれた。

『彼奴だ〳〵、側へ寄つたら最期の助、敗鳴附けられたら、耳が筋斗返るぞ。』

『彼鬼奴が御方樣の用心棒だな。』

『彼奴が附いて居たら、仁王樣だつて手出しする事ぢや無い。』

御方の後から、見物はソロ〳〵と跟いて行く。夫を振返つた玄蕃の目はギロリと光つた。一言物を言つたのでは無いが、恐ろしい顏色に、一同はワッと竦えて逡巡さる。

『不可ねえ〳〵。生きた帝釋樣のやうな野郎だ。』

『行かう〳〵。取捕まつたら、モリ〳〵と食はれて了ふぜ。』

物見高い見物の蒼蠅さに、流石の御方も顏を顰めかされたらしい。

『玄蕃、白鬚迄もと思ひましたが、餘りの人出故、之より堤を下りて、下通りを戻らうと思ひます。』

『夫がお宜しう御座る。恁樣な處は汚ならしい蛆虫共が、ザワザワ致して醜しう御座る。』

唇に反を打たしたのは墨繪の達磨其の儘、頰髭と顋髯と無精に繫がつたのは、餘り汚なく無い方でもなかつた。

途段に長命寺の方から、縺れ合つて蹣跚いて來たのは、見るから破落漢らしい市井無頼の一群、手拭で括つた一升樽を擔ぐものあれば、頭の上へ月鬘をかけたのも有る。手に持つは鰯の足、食ひかけの慈姑の串、若い女と見ると追廻しながら、ドヤドヤと來懸つたのが、端無く御方にパッタリ行き當つた。

『ヤア之や生きた辨天樣だ。』

『男かと思つたら、女たあ難有てえな。』

無作法な醉漢の眼眩み、大手を擴げて突如御方に抱き附かうとするのを、輕く躱されると、トッ〳〵トッと前へ泳いだが、



機會を食つて秋葉山の石の常夜燈に、嫌といふ程野郎頭を叩き附ける。續いて一人が慈姑の横刺を、丹花の唇へ抹り附けようとする無法の狼藉。醉つての上の戯事と御方は妙なる微笑を洩らされたが、天性烈火の如き鬼の玄蕃、自慢の主へ無禮と見て、何條默過すべき。

『無禮者ッ。』と青天の霹靂脳天へ落下する怒號一番、榮螺の殻其儘の拳を飛ばして、グワンと一撃を加へたから、慈姑の男は鞠の如く消し飛んで、櫻の根方へ平太張り仆れる。

『ヤア汝ッ。』

後に殘つた八九人の破落漢、事有れかしと呑代を漁つて居た矢先で有るから、ドヤ／＼と忽ち主從を取卷いた。

『汝ッ、味をやるな。』

『其の女郎引擔いで行つて、酒の酌をさせるから左樣思へ。』

『默れッ。』と、玄蕃は有ん限りに躍上つて哮ゆるやうに大喝した。

『下郎奴、貴き御方を何と心得る。其の分ならば目に物見せて呉るぞ。』

『目に物見るのは、汝の世話にやならねえぞ。』

喧嘩商賣の相手は、早くも下駄を脱いで、突如玄蕃へ打つて懸ると、玄蕃は足を擧げて夫を蹴返しながら、御方を後へ圍つて、仁王立に突立つた。

『夫喧嘩だッ。』といふと、見物は蜘蛛の子を散らすやうに逃げ出したが、夫でも遠卷に恐々見物する。廣いとは言ひながら花の堤、往來は忽ち止つて、右往左往に人雪崩を打つ。

『退れ、貴樣等身の程知らぬ白痴奴、何と心得て狼藉するのだッ。』

『何を言やがる、雌だか雄だか解らねえ獸物、此方等が確かりと検ためて呉ようと言ふんだ。』

『えゝ言はして置けば無禮千萬、恐れ多くも此の方樣は。』

玄蕃が名乘らんとする肩を、御方は扇子を上げて輕く押へた。

『コレ言うてたもるな。』

『然し此奴等が無法の狼藉。』

玄蕃はいきり切つて、目に百雷の稻妻を閃めかせる。

『妾が身分を言へば、其の者達が咎めにも遭ひませうぞ、不憫ぢやによつて、名乘つてたもるなよ。』

萩の門殿に無禮を働いたと有らば、輕くて遠島の咎は免かれないのだ。

『難有き御慈悲。』と言ふ間もなく、無法な命知らずは、いつの間にか腰の業物抜きそばめて、眞向望んでバッサリ斬つて懸つた。恁なると只行合の喧嘩ではない。

『汝ッ。』

怒心頭に發した呈月玄蕃、一足退つて一刀の柄へ手をかけると、御方は又鷹揚に止められた。

『あゝコレ拔いてはなりませぬ。高が町方の狼藉者、武士の魂を見せるにも及ぶまいに。』

緋芒と拔き連れた理不盡の刄、花醜へす太刀風を目前に眺めながら、御方は依然として優しい微笑を湛へられる。

『其の分ならば、斯様に致し呉まする。』

尺三寸の大鐵扇振上るより早く、敵を目蒐けて獅子王の怒れるが如く飛び込んだ。

チヤリン〳〵といふ仕太刀受太刀、劍戟の光が八方に亂れると、怒りの鐵扇に打仆され、右に左に仆るゝ者、瞬く間に敵は浮足となつて、刀を引いて逃げ出した。

『汝ツ、一人たりとも逃さぬぞ。』

烈火の火炎を噴き立てる玄蕃の憤激、鐵扇振翳して、何處迄もと跡を追ふ。

『コレ待ちや。逃げる者は追ひ捨にしてたも。』

御方が玄蕃を呼び戻さうとして、前に氣を取られる後に方つて、俄かに擧る見物の叫び。

『あゝ浮雲いツ。』

と、同時に、窺ひ寄つた二人の曲者、御方の後から、物をも言はず大上段に斬り下す、其の氣合を咄嗟に感じた御方の早業、體を開き樣に、流るゝ刄を扇子で打つと、臂痺れて取落す刄、隙もあらせず斬り懸る一人の横に薙いだ切先、アハヤ觸るも惜しき蒲柳な弱腰眞二つと見えたが、刄は翻へる綾羅の袂にも及ばずして、御方は屹と櫻を後に當てゝ身構へた。

『狼藉しやると許さぬぞ。』

屹と左右を睨んだ眉目の妖光、花の精靈が假りに姿を現はしたかと神々しい。

然し理不盡の相手は物をも言はず、無二無三に斬つて懸るのは、時に取つての間違ひでは無く、御方と知つて暗殺する企らみらしい。一味の破落漢が逃げ出したのも、兇の玄蕃を遠く引放す計略だつたのだ。

御方が持たせられるは、象牙骨の女扇、大の男の無法の白刃に對しては、是非なくもスラリと一刀を拔き放した。見るも鮮やかに鋭どい名刀の濡色、折柄の花がハラ〳〵と散つて、二つ三つ蝶の如くに舞つた。

途段に堤の下より、驀地に驅け上る編笠武士、御方の危急と見るや、突如飛び込み來つて、一人の襟際取ると、堤より人家の方へと、眞逆樣に投下した早速の早技。

『やあ邪魔ひろぐな。』

今一人が御方を捨て斬つて蒐るのを、二度三度遣り違はせたと見るや、隙を覗つて手元へ飛込み樣、グル〳〵と振廻して匹

いて、漫々たる大河の流れへ、淘然とばかり大の男を投げ込んだ。

見物は始めて胸撫で下し、ワアッと歡呼の聲を擧げる。

『恐れながら萩の門の御方樣と御見上げ仕つる。怪しからぬ狼藉者に御出會遊ばし、定めし御當惑と存じ上まする。』

笠を取つて輕く大地に指を附けた若侍、其の武士の艶美な姿を見た時に、見物は又ワツと動搖めいた。

『手前は公儀御旗下波多野右近と申しまする者。』

御方は靜かに首肯いて瞰下ろした。花を負ふ美女と、花を仰ぐ美男、何れ劣らぬ美玉と美玉、名作の女雛男雛を對ひ合せたやうで、見物の目は綾に眩まされ、呆れて口を噤むで了つたらしい。『狼藉者を取鎭めてたもつて、妾嬉しう思ひます。』と莞爾笑はれたが、其の一顰一笑は何かの靈有る如く怪しく右近の腸に沁み透つて行く。何かは知らず、身體中の筋



た、狂々たから一摑みに握りしめられたかと感じた。

『恐れながら御供の者も御在さぬは、誠に御心許無き儀かと存じ上げまする。』

供の無いのを幸ひに、送り參らさうとする下心で有る。

『うんにや、御供は是に居るわい。』苦虫食ひ潰した鬼の玄蕃は、いつの間にか取つて返して來て、頭上からブツキラ棒の挨拶。御方も思はず噴き出さんばかり。

『玄蕃、之なるは柳營直參の波多野右近と言はれまする。只今妾に斬りかけた惡者を懲してたもつた。其方よりもよう禮を言うてたも。』

優しく言葉を添へられたが、玄蕃は莞爾ともしない。

『ハハア左樣で御座つたか、然し夫は餘計な雜作で御座つた。』

右近は呆れ返つて、思はず鬼玄蕃の顏を見た。

『御加勢さつしやらずとも、御方樣は破落漢の一人二人、物の數とも遊ばさぬので御座る。』

直情徑行、思つた事は思つた通りに言つて退ける。言葉に見榮も飾りも無く、衝立のやうな肩を怒らしてのさばり返る。

『右近とやら、此の玄蕃は生れた儘の男、惡う思うてたもるなよ。』

優しく滑々と宥められるのが、玄蕃に取つては一層の不服。

『御上、最早御歸館遊ばしませい。』と、遠慮會釋も無く促し立てゝ、

『ほんに花見る人の長刀、思はぬ狼藉に興入りました。右近、御茶なと參らせませう、程近い妾の住居、御身も共々參つてたも。』渡りに船の御招きに、右近は身體中がむず痒くなる程難有く覺えた。

『冥加至極の仕合、御供申上げるで御座いませう。』

玄蕃はジロリと夫を尻眼にかけた。男の癖に女のやうな華奢風流の色白、其のニヤケ切つたのが、自態虫が好かぬので有る。男は筋骨逞しく、胸毛生えた頑丈者でなければ、使つて御爲には成らぬのだと、便々たる腹の底で詰り切つた。（つゞく）

見よ！　天馬空を往く奔放自在の妙想！　一瀉千里に魅讀させる暢達絢爛の靈筆！　何んといふ爽快、何んといふ壯烈な物語であらう！

鬼謀神算の怪盜夜叉王！　とはそも何者か？　終始、この謎の怪人を縱横に出沒飛躍させて限り無く讀者に快哉！を叫ばしめん作者の意圖が讀まれる。さらぬだに窈窕花の如き古今の麗人に清秀の美男を配し、事件を綾に織り絡ませて波瀾萬丈、彌が上にも讀者を快き陶醉に化する心憎き作者の手際！　次號は如何に見覺しき筋の展開を見るか？　如何に痛快なる場面を現出するか？　この一篇こそ！　必ず御期待を以つて熱讀されんことを衷心より祈願するものである。



春遠からず

加藤武雄
挿繪　伊東深水

母の死

（お願ひですから、あのいやなやつと離れて下さい。——）

しげ子は唇を噛んだ。

しげ子はみち子が何故家出をしたかを了解した。だが、しげ子は、あまりにも子供らしく單純なみち子の行動を恨まずにはゐられ無かつた。みち子は家出をして、それだけ自分の負擔を輕くして呉れたつもりかも知れ無い。しかし、あの病人の母が居る。どんなにいやな奴にしろ、そのいやな奴の手を離れては、あの病人をあゝして病院へ入れて置く事は出來ないでは無いか？——そのくらゐの事が、どうしてわからないのか？

しげ子は、辿々しく書かれた文字の上に、涙ぐんだ眼を据ゑた。腹立たしい、非

怨の氣持が先に立つた。だが――何處かへ行くつて、何處へ行く氣か知ら？　何處にあの子の行くところがあるのだ？　さう思ふと、しげ子は居ても立つても居られ無くなつた。

『何處へお出でになつたんでございませう？』

女中がそこへ來て、おど〳〵とおびえたやうな眼眸で聞いた。

『斯うしちや居られ無いのよ。急いで探さなきや――。』

しげ子は立ちあがつた。が、探すと云つても、別に何處と云ふあても無かつた。

しげ子は女中と手分をして、赤電車が通り過ぎる頃まで、あても無く探し歩いた。學校友達の家を尋ねて見たり、あたりの交番を一つ一つのぞいて見たり――あゝして出て行つても、子供の事だから、又、氣が變つて戻つて來るかも知れないと、横町の入口に立ちつくしたりしたが、みち子はその夜はとう〳〵歸らなかつた。

その夜はとう〳〵歸らず、はげしい憂慮に眠られぬ一夜が明けたが、あくる朝になつてもみち子は歸らなかつた。

ふと、もとゐた西大久保の露地裏の住居で、みんなが狂人の家と白い眼で見てゐた中に、割合に好意を寄せて呉れた隣りのをばさん――みち子にもやさしくして呉れたそのをばさんの事が思ひ出されたので、しげ子は、生憎降り出した雨の中を、タキシをやとつて出掛けて行つた。

『まあ！』

と、をばさんは、久振のしげ子の姿に眼を瞠りながら

『たれかと思つたら、しげ子さんぢやあないか？　まあまあ本當にお久振――。だけど、どうしてまあこんなに早く――さあさあ、どうぞまあ此方へ――。』

『いゝえ。然うしちやゐられませんの、あの、突然ですけど、をばさん、うちのみち子が此方へおうかゞひしやしませんでしたらうか？』

しげ子は入口に立つたまゝで訊いた。

『みち子さんが？　いゝえ――。』

をばさんは怪訝さうに、

『みち子さん、どうかしたのかね？』

しげ子はがつかりした。が、問はれる儘に手短かにみち子の失踪に就て話した。

『まあ、どうしたんだらうねえ。みち子さんも、飛んだ心配をさせるもんだ。』

をばさんは眉を顰めたが、

『それで、今、あんた達、何處にお出でなのかね？』

と訊いた。をばさんは、しげ子達が行先をも告げずに越して行つた事を少し不平に思つてゐるのだつた。

『今、小石川の方に居りますの。もし、ひよつとかしてみち子がこちらへでも姿を見せましたら――。』

と、しげ子は、今の住所を云つて、教へて呉れるやうにと頼んだ。

『みち子さんが來たら直ぐに知らせますよ。小石川區林町×××番地――。』

　とをばさんは諳誦するやうに繰返したが、

『さう云へば、あんた達が轉して行つてから間も無くだつたがね。あんた達を訪ねて見えた人がありましたよ。』

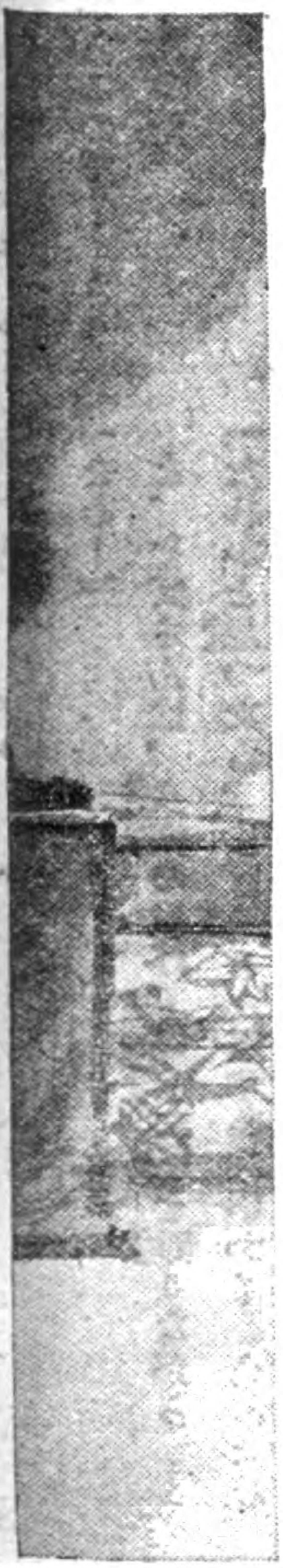
『私達を？』

『一人は若い人でね、一人は年老つた人だつたがね。兩方共立派な人でしたよ。移轉したと云つたら、がつかりしてね。移轉先を知らないかつて訊かれたけれど、あんた達だまつて行つちまつたもんだからね。』

『まあ、さうでしたか？　どんな人でしたらう？』

『だからさ、今云つたやうに、一人は若い人で一人は年老つた人でしたよ。兩方共洋服を着た立派な人で、ひどく用ありげだつたがね。知つてりや教へて上げたんだが、知らないもんだからね。』

　をばさんの話は要領を得無かつたが、しげ子は、昨夜の藤代の言葉を思ひ合せたりして、胸騒ぎを抑へる事が出來なかつた。しかし、しげ子の心はそんな事よりも眼前の心配で一ぱいだつた。



『だけど、しげ子さん今何うしてゐるんだね？』

　をばさんは、穿鑿的な眼でしげ子の樣子をじろ〱眺めながら無遠慮に訊いた。いゝ服裝をしてゐる、まるで何處かの奧樣見たいだ――をばさんはしげ子の現在の境遇を眼早く見てとつたらしかつた。

『阿母さん、近頃はどんな鹽梅だね？』

　俯向いて答へ惑うてゐるしげ子に、をばさんは追ひかけて訊いた。

『えゝ。相變らずなんですの？』

　しげ子は口の中で答へた。

『困るよねえ、本當に。』

　もし、みち子が來たら教へて呉れるやうにと念を押して頼んでしげ子は引返した。

　此上は警察へ搜索願を出すより外は無い。その足で警察署へ寄らうかと思つたが、萬一留守中に戻つて來ては居なからうか

と、一先づ家へ歸つて見た。——が、矢張それは空頼みだつた。

昨夜からの憂慮と疲勞とで、しげ子はもう昏倒するばかりだつた。彼女は長火鉢の前にぺたりと坐ると、がつくりと肩を落して大きな溜息を一つした。

(みち子さん！　お前、何て心配をさせるの？)

さう心の中で云つて、思ひあまつた涙をはら〳〵と落した。

——と、その時格子戸ががらりと開いた。

『電報！』

さう呼ぶ聲にはじき上げられるやうにして玄關へ走り出したしげ子は、それを受取つた女中の手から奪ひとるやうにして、雨にしめつた電報の封をわたゝく指先で掻き破つた。

開いて讀むまでは、てつきり、みち子に就ての電報だとばかり思つてゐたが、讀んで見ると、然うでは無かつた。それ



は、母の危篤を告げて來た病院からの急電だつた。

『まあ！』

しげ子は思はず叫んだ。みち子の家出――それさへあるに、母の危篤！

しげ子はぼんやりとしてしまつた。實際どうしていゝかわからなかつた。

兎に角、直ぐ病院に行かなければ――。病院への途中で警察署へ寄つて捜索願を出さなければ――。いゝえ、そんな事はしてゐられ無い、危篤といふのだから直ぐに病院へ馳けつけなければ――。

病院へ出かける可く、しげ子が慌たゞしく玄關へ降り立たうとした時、ひよつこりと欣助がはひつて來た。

『何處へ行くんだね？』

『あの、病院へまゐります。』

『病院へ？　病院へは昨日行つたばかりぢやあ無いか？』

しげ子は口早に、今、電報が來た事を告げた。

『ほう！　そりやいけないな。僕も、ぢや、一緒に行つてあげようか？』

『いゝえ。あなたはいらツしやらないでも――それよりもお願ひし度い事がございますの。實は、昨夜、みち子が見えなくなつてしまひましたんですの。』

しげ子は、みち子の家出の次第を語つて、警察へ捜索願の手續きをとつて貰ひ度いと請うた。

『そりやあどうも――。奴さん人騒がせをするもんだな。だが、警察などに持出さなくても、すぐに歸つて來るさ。』

欣助は呑氣な顏をして云つた。

『でも、もしかの事があるといけませんから――私、今警察へ寄つて居られませんし、一刻も早く屆けて置いた方がいゝと思ひますけど。』

『そんなに心配ならさうして上げてもいゝがね。警察へ持出すのはどうも面白くないな。私立探偵社つてものもあるんだからね。――だが、大丈夫歸つて來るよ。そんなに心配しないでも。』

『でも、若しか――。』

『よし、よし！　ぢや、僕がその方の手續きはとつておく。その方は僕に任せといて、君は病院へ行き給へ。』

『どうぞ、お願ひ致します。』

しげ子は病院へ急いだ。

しげ子の母の逸子は、その夜とう〳〵病院の一室で息を引取つた。昨日見舞つた時は、ひどく弱つてこそ居れ、未だこんなに急に變が來ようとは思はれ無かつたが、すつかり蝕まれきつ

てゐた身體は、ぽつくりと朽木のやうに倒れてしまつたのであつた。

死の間際になると、此のみじめな狂女はいくらか正常の意識をとりもどしたらしく見えた。

『しげ子！』

彼女は深い眼窩の底から、枕もとに坐つてゐるしげ子の顔を見上げると、

『お前には、長い間、いろ〳〵苦勞を掛けたね。すまない――本當にすまないよ。』

さう靜かな調子で云つた。

『阿母さん！　阿母さん！』

しげ子は、骨々しく痩せた母の手をしつかり握つて涙にくれるより外無かつた。

『みち子は？――みち子は何處にゐます？』

母は、頭を動かして、その次第に暗くなつてゆくらしい視野を掻き探るやうにした。

『みち子は、今まゐります。お母さんしつかりして――。』

『あの子を頼みます。あれは、お前には、本當の――本當の妹ぢや無い――あれの父親は――。』

母は苦しく喘いだ。

『お母さん！　そんな事仰有らないで――みち子さんの事はどうぞ御心配なさらないで下さいまし。』

『しげ子さん。お前のお父樣はいゝ方だつた。もし、あの人に會ふ事があつたら――いゝえ、そんな事は無からうけれど――。』

何かをじつと見つめるやうにしたその眼眸が次第に弱々しくなると、聲も、引入るやうに低くかすれきえて行つた。

と、突然、力無く横たへられてゐた彼女の身體がおどりのついたやうにわな〳〵と慄へたと思ふと、兩手をもがいて半身を擡げるやうにしながら、まぼろしにおびえる例の眼附になつて、

『村上！　村上！』

と、叫んだ。

『お母さん！　お母さん！』

しげ子は兩手で母の身體を抱くやうにして、

『何でも無いのよ。何でも無いのよ。』

と、やさしくなだめるやうにした。

――しげ子の母が息を引取つたのはそれから間もなくであつた。

一方、みち子の行方を案じながらも、葬式やら、その他の跡始末やらでしげ子は慌たゞしい三四日を過さなければならなかつた。

葬式――こんな淋しい葬式といふものがあるだらうか？遠縁の家が二三軒は此の東京にもある筈だつたが、全く打絶えてゐたので通知を出すさへ憚られた。喪主であるしげ子をのぞいては何人一人見送り人の無いやうな、そんな葬式といふものがあるだらうか？

母はかうして生ける屍から、まことの



屍となつて土の下に埋められた。悲しみの涙の中にも、ほつとした安心はあつた。が、みち子は行方のいつまで經つてもわからない事が、新しい憂慮を日毎にしげ子の心につのらせて行つた。

兎にも角にも、あゝして母は見送つた。重荷が肩から下りたのである。みち子と二人だけなら、何人の世話にならないでも生きて行ける。――さうだ！ もうあの呪はしい保護者の手を離れてもいゝ時なのだ！ 自分が、あの『いやな奴』と離れたらみち子はよろこんで自分のところへ戻つて來て呉れる筈だ。何は措いても、先づあの男から離れなければ――。

だが、欣助の執着は深かつた。

『もうそれでお前は身一つになつたんだ。お前は自由なんだ。ね、僕と結婚したつていゝだらう？』

云ふ事があべこべだつた。自由になつたから離れたいとしげ子は思つてゐるのに、自由になつたから結婚しろと欣助は云ふのである。

『ね、たつた一人でこんな家に居たつて仕方が無い。僕の邸へ來たまへ。正式に僕の母に紹介しよう。お前なら、やかましやのおふくろだつて屹度氣に入るに違ひ無いのだ。』

『でも、私、みち子の事が心配でしかたが無いのですよ。みち子が歸つて來て呉れないうちは、私、夜もおち〱とは眠れません。警察の方では探してゐて呉れるんでせうか？』

しげ子は、又しても煎りつくやうな不安に居ても立つてもゐられ無くなるのであつた。

『大丈夫だよ。そのうち屹度見つかるさ。』

『でも、もう今日で五日になるんですよ。あの子はまあおかあさんの死んだのも知らずに――。』

『だが、先生、何のつもりで家出なんかしたんかな？ ――なあに、お前が僕と結婚して呉れさへすりや、あの子だつて十分幸福になるんだ。あの子は何だか、ひどく僕にひがんでゐるやうだがね。』

欣助はあくまでも呑氣だつた。そして、彼はしつこく結婚問題を繰返すのであつた。

が、どうしてもうんと云はないしげ子を見ると、欣助は苛立たずにはゐられ無かつた。藤原藤代の言葉がまたそこに思ひ出された。こいつ、矢張、他の男を愛してゐるのか知ら？ さう思ふと、意地づくからも、どうしても一度は妻といふ名で呼ばずには措くものかといふ氣がした。

『僕はね、お前を愛してゐるんだ。お前の窮境につけこんで、金でお前の身體を買つたつもりぢやあ無いんだ。お前だつてまさか、金の話になるうちだけは、僕に身をまかせてゐたが、必要が無くなつたから早速左樣ならつて氣ぢやあるまいね。勿

論、そんなお前ぢやあ無い事はわかつてゐるがね、は、は！　まさか、お前がそんな女ぢやあ無い事ぐらゐはわかつてゐるがね。』

欣助は、皮肉らしく云つて意地悪く笑つて見せた。それは彼女にとつて何よりも痛い言葉であつた。

――しげ子は今更のやうに、その払つた犠牲がいかに大きいものであつたかを知つた。

彼女はうなだれて唇を嚙んだ。欣助は更に第二の嘲りを浴びせかけた。

『どんな男がお前を愛してゐるか知らないが――いや、どんな男をお前が愛してゐるか知らないが、お前の處女を得たものは、おれより外には無いのだからな。お前が神の前に恥ぢない女となるには、おれと結婚する外は無いんだぜ。』

何といふ事だ、此の放逸無慚な遊蕩兒は、神の名を呼んで彼女を苦めるに憚らないのであつた。

小鳥

（あなたは、私がまるきり出鱈目を云つて、あなたを欺したとでも思つていらッしやるやうね。違ひますわ。私は憚りながらそんなうそつきでは御座いません。あの繪に似てゐる方が私があるところでお見掛けしたといふのは決してうそでは無いのでございますッちやん、それが果してあなたの求めていらッしやる人か何うか、それまでは保證は出來ません。しかし、私は見たのです。よく似た方を、たしかに此の目で見たのです。

何處で見たのか？　思ひ切つてお話しませうか？　あなたが是非にと仰有るんなら、又、私と元々通りに仲直りして下さるならお話してもよろしいの。でも、なまじひお話した爲めに、餘計にあなたを苦めするやうな結果になつては困りますもの。その方があなたにとつて何んな方か存じませんけれど、もし、あの方がその方だとしたら、何だか妙な悲劇が起りさうな氣がするの。だから、矢張お話しない方が宜さゝうですわ。――）

そんな風に書かれた藤代の手紙を、禮吉は讀んでしまふと押丸めて、床の上に叩きつけた。

まじめ臭つた調子で書かれて居るのを見ると、本當か知ら？　といふ氣もする。本當に知つてゐるのか知ら？　とつい信じ度くもなつて來る。だが、禮吉は直ぐ思ひ返すのだ。出鱈目なのだ！　すこしでも自分の心を惹きつけようとやきもき苦しませて、その苦みを享樂しようとするたちの悪い思はせ振なのだ。

あのうそつき女！　何人がお前の云ふ事なんかを信じるものか！

禮吉は唾でも吐きかけてやり度かつた。

禮吉は椅子から立ちあがると、いら〳〵しく部屋の中を歩きまはつた。屹度探し出す！　と心に誓ひながらも、甲斐無い努力に彼はいくらか疲れてゐた。

幾千萬人の、寄せては返す人の海――その中のたゞ一人を、しかも、霧の夜のほのあかりにちらと見たといふだけの印象を辿つて、古びた袷にのこるおぼろな面影を辿つて探し出すといふ事の難さを思ふと、禮吉は、ともすると茫然自失せざるを得無かつた。

たゞ奇蹟を望む外は無かつた。偶然を僥倖する外は無かつた。その氣持で、今日もこれから街へ出て、あてもない彷徨を續けようとする禮吉であつた。

もういつか夏になつてゐた。夕暮近い日は、埃に白い街上になほ餘炎を逞しうしてゐた。電車から降りて夕ぐれの人出には間のある驛前の通りに出た禮吉は、例の少し猫背の、うつむき加減のあるき方で歩いて行つた。

『萩原君！』

よびかけられて驚いて面をあげると、そこに、まる〳〵と肥つた背の低い男が、古びた浴衣の襟をだらしなく廣げて立つてゐた。

『や、水野君。』

『いゝところで會つたよ。實は、これから君のところへ行かうとするところだつた。』

相手は去年のらしい、赤茶けた麥藁帽子を脱ぐと、汚ない手巾で額の汗を拭ひながらにこ〳〵とした笑顔で云つた。それは、童謠詩人の水野三郎だつた。交際ぎらひの禮吉の、數へるほどしかない友達の中の一人で、いかにも童謠詩人らしい呑氣な無邪氣な氣質を禮吉は愛してゐたが、最近あまり往來などはしてゐなかつた。で、

『僕のところへ？』

と、禮吉はいぶかしげに問ひ返した。

『うん。君のところへね。急に君に賴み度い事が出來たもんだからね。』

『さうか？　ぢやあ、こゝで會へて宜かつた。何だね、賴み度い事つて。』

『實はね、僕、今日「金の船」の原稿料を受取りに行つたんだ。もう、四月分もたまつてゐるんでね。毎月一篇づつ、一篇十圓の約束で僕はあすこへ書いてゐるのさ。四月分だから四十圓もたまつてゐるんだ。せめてその半分だけでも是非貰はなきやならないと思つて出かけたんだがね、矢張駄目なんだ。何しろひどい不景氣で雜誌の賣行が惡いもんだからね。』

水野は一氣にしやべりつゞけた。

『それで、どうしたんだい？』

『それでね――。』

と云ひさしたが、ふと、かん〳〵と片頰に照りつける夕日の暑さに氣がつくと、

『君、どうも暑いね。どつかその邊でつめたいお茶でも御馳走して吳れ無いか。』

謙吉は笑ひながら、久濶の友人を、近くのフルウツパアラアに案內した。

『歸りの電車賃が無いもんだからね、神田から步いて來たんだよ。これで漸く生きかへつた。』

冷茶のコップをぐつと半分ばかり乾すと、水野は、もう一度額の汗を拭いたが

『ねえ、君、僕んところへ小鳥が一羽飛び込んだんだよ。すてきにかあいらしい小鳥がね。』

『小鳥が？』

『うん、小鳥なんだ。――とてもきれいな小鳥なんだ。だがね、病氣をしてゐるんだよ、その小鳥は。』

水野は悲しげに顏をくもらして、

『熱が高いんだ。醫者にかけなけれやならないと思ふが、生憎僕は一文もないんだ。それで「金の船」まで原稿料をとりに行つたんだがね。』

『わかつたよ。少しぐらゐならどうかするよ。』

と、謙吉は笑ひながら、

『だが、一體何だね？ その小鳥つていふのは？』

『十二三のかあいらしい女の子なんだよ。』

『それがどうして君のところへ飛び込んだんだね？』

『飛び込んだんぢやあ無い。僕がつかまへたんだ。――いや、矢張飛び込んだんだな。僕が街を步いてると、僕のふところへ飛び込んだんだよ。』

『何だかわからないな、もう少しはつきり話し給へ。』

『一昨日の晩だよ。もう十一時過ぎだつた。僕あ例の「赤瓢簞」で飲んで――おでんやだよ。鶴卷町のね。大分飲んでいゝ心持になつて、ぶら〳〵と家へかへりかけると、橫手の露路の中からだしぬけに飛び出して來た者があるんだ。見ると、小ちやい女の子なんだ。そして、そのあとから四十ばかりの女が追ツ駈けて出て何かわめきながら、女の子をつかまへようとする。女の子は絕體絕命で、いきなり僕に縋り附いて來たんだ。僕は女の子をかばひながら、何をするんだ？ と女を怒鳴りつけてやつたんだ。餘計なお世話だ、それは私の娘だ――女がさう云ふと、女の子は、うそだうそだ！ つて泣き出したんだ。誘拐されたんだな、それで逃げ出したんだなと僕はすぐに直覺したね。そこで、僕は――。』

水野は得意さうに語つた。一緒に警察へ行け！ さうおどし

つけてやると、誘拐者らしいその女は、案外弱腰になつてこそこそと引込んでしまつた。そして、小さい女の子は自分の手に殘された。で、家へ送り屆けてやらうと、種々問ひたゞしても、唯泣いてばかりゐて返事をしない。氣がついて見ると、手でも額でもひどく熱い！　病氣になつてゐるんだ。それでとりあへず自分の家へ伴れて歸つて寢かしてあるのだ――。』

『それで、何處の子だかわからないのかい？』

『うん、何を訊いても返事をしないのだ。』

『矢張誘拐されてゐたのかい？』

『どうもさうらしいんだ。だが、何分何をきいても、些と



も返事をしないものだからね。』
『へんだね。』
『警察へ屆けた方がい〻とも思ふが、何しろ熱が高くてひどく弱つてもゐるやうだし——家へ送り屆けるなら、警察の手なんか藉りないで、自分で送りとゞけてやり度いと思ふんでね。』
『それは然うだね。』
『それにね。迚もかあい〻子なんだ。僕は何だか、あの子をよそへやり度く無いんだ。いつまでも、手許へ置き度いんだ。——ね、神樣が僕の孤獨を憐んで、あゝいふかあい〻子供を僕に授けて呉れたんぢや無いかといふ氣がするんだよ。』
さういふ彼は、いつもの郷を夢見てゐるやうな童謠詩人であつた。
『うん、さうかも知れないね。』
禮吉は微笑せざるを得無かつた。
『だがね、小鳥は病んでゐるんだ。そして、どうしても物を云はないんだ。啞の小鳥なんだ。』
水野はかなしげな眼附をした。
『それは妙だね。』
『あまり酷くおびやかされたんだよ。すつかりおびえてゐるんだ。誘拐されてゐるうちに、ずゐ分酷い眼にあつたらしいんだよ。』
『どうしても、家を云はないのかい?』
『云はないんだ。(歸り度くない!)と小さい聲でたつた一言云つたきりなんだ。』
『歸り度く無いと云ふのかい?』
『さう云ふんだよ。——それで實は、僕もすつかりよろこんぢやつたんだ。』
『妙だね。』
『本當に不思議な子供だよ。』
水野はさう云つたが、
『ねえ、君、ぢやあ、濟まないが、三十圓ばかり貸して呉れ給



へ、僕の事情から、いくら遅せるかわから
ないけれど――。』

『まあ、それはどうでもいゝさ。』

禮吉は、紙入からあるだけの紙幣をとり出して、その無邪氣な友達の前に置いた。

『こんなに要らないよ。』

『まあ、いゝさ。』

『ありがたう！　これで助かつたよ。』

二人は、そこを出たが、

『ねえ、君。』

と、水野は立ちどまつて、

『――君は、これから何處へ行くんだい？』

『何處つてあてもないんだ。そこいらを散歩しようと思つてゐるんだ。』

『ぢや、これから僕ん許へ來て見ないか？』

『うん。』

『あのかあいゝ女の子――君に見せたいよ。』



禮吉も、その不思議な少女について、ある好奇心を――いや、その意識下の意識に於ては好奇心以上の何ものかを感じてゐた。

『行つてもいゝね。』

『ぢや、來たまへ。』

タキシが呼びとめられた。

水野の家は、早稻田南町にあつた。この貧しい童謠詩人は、狹い横町の奧の貸二階に自炊生活をしてゐた。

はげちよろけた一閑張と、硝子戸にひゞの入つた本箱、その外には何一つ目ぼしいものもないやうな殺風景な部屋だつた。一足先に、階段をのぼつて行つた水野は、部屋の隅の方に敷かれた蒲團の方をのぞき込んで、

『あ、寢てゐる。寢てゐる――。』

と小聲でさゝやいた。

『よく寢てゐるね。』

禮吉は、こちらへ向けた後頭部のあたりに眼をやりながら、そこへ坐つて、

『何だか苦しさうぢやあ無いか？』

よく眠つてはゐるが、熱が高いと見えて、あへぐやうな呼吸がひどく苦しさうだつた。

『僕あ、これから醫者を呼びに行つて來るからね。君、こゝにゐて呉れないか？』

禮吉はうなづいた。

水野は出て行つた。

禮吉は、そつと枕もとににじり寄るやうにして、眠つてゐる少女の顏をのぞき込んだ。

一目見ると、禮吉ははッとした。

それは、あの花賣娘――みち子と呼ばれた少女に違ひなかつた。

『おゝ！』

禮吉は思はず聲を立てようとした。

物の氣配にその眠りを破られたらしく、みち子は、少し身動きをし、短いうめき聲をあげたかと思ふと、ぽつかり眼を開いた。

みち子の眼は、最初はたゞぼんやりと眼の前の人の姿にそゝがれてゐたが、ぼやけた視線に次第に力が加はつて來ると共に、一種の表情がその顏に浮んで來た。それは憎みの表情だつた。次には、驚きの――はげしい驚きの表情にかはつた。

『あら！』

みち子は、禮吉の顏を食ひ入るやうに眺めながら、かう驚きの叫びをあげた。

『わかつたの？　僕がわかつたの？』

『どうして――どうしてこゝに居たの?』

『僕よりも、あんたこそ――どうして、こんなところにゐるの?』

『……………。』

みち子は、たゞ、じつと相手の顔を見つめてゐるだけだつた。話し度い事は一ぱいだけど、さう何も彼も一度には話せ無い――と云つた表情で。

『みち子さん。僕はあんた達を探してゐたんですよ。』

禮吉は、聲をわなゝかして云つた。

『姉さんは――あんたの姉さんはどこにゐるの?』

『姉さんは――姉さんは――。』

みち子は喘ぎ喘ぎ云つた。あとの言葉がつゞかなかつた。

『姉さんはどうしてゐるか、敎へて下さい。

禮吉は、みち子の手を強く握りしめながら云つた。

『姉さんを――探してゐたの?』

『あゝ、探してゐたんだ。僕は、あれから、どんなにあんた達を探したかわからないんだよ。姉さんは何處にゐるの?』

みち子の喰ひ入るやうな凝視は些とも弛めずに續けられてゐたが、その時みち子は突然はねおきるやうにして、

『行つて頂戴。姉さんのところへ――、私、一緒に行くわ。

一緒に――』

みち子はさう云ひながら、起きあがらうとした。が、みち子には起きあがるだけの力が無かつた。

（つゞく）

明るい雜誌

三宅やす子

キングは老人でも少年でも面白く讀める雜誌だといはれるので、一寸不思議な氣がしましたが、材料が廣汎に亙つて撰まれてゐて、幾度頁をひろげて見ても何かしら變つたものが讀めるので、尤もだと頷かれました。

興味を伴ふ敎訓的なもの、此雜誌の主張するところの感激的なものといふのを、毎號苦心して集めてあるので、一寸でも反道德的なものは、排斥して、終始穩健な思想で一貫されて居る、だから誰にでも、安心して讀ませられる雜誌で、且、誰の前でも安心して讀める雜誌です。そこにキングの絶對の明るさがあります。

菊池寛氏の『東京行進曲』は、去年から引續いて好評の小說、これはもう映畫にまでなつてゐて、近く完結するのですから、大抵の方は知つて居られるでせう。『春遠からず』は、題名の示す通り、情味豐かな作品で、全體に流れてゐる美しいやさしみ、殊に數人の女性の數奇な生涯が、いろ〳〵に展開して、波瀾を極めてゆく經路がゑがき出され、純情の青年と老詩人の戀愛も、美しい詩のやうに響いて來ます。まだどういふ風に筋がひろがつてゆくか、期待されて居ます。



戯曲 恩讐追分節（二幕）

伊藤松雄
挿繪　苅谷深隍

○

【時代】——安政年間。

【人物】——馬士九六。妹おせき。山岡直之進。若黨五平。馬士權三。茶店の老爺。他に、旅をする武士、町人多勢。

○

第一幕

【情景】——追分宿から、碓氷への峠路は、秋草の咲き亂れた高原を貫いてゐる。淺間の頂きが噴く煙りは、東へとな

…き、遠々たる秋風には、すすき尾花を吹いて過ぎる。暗い雨雲は低く垂れ、夕ぐれ近いと云ふのに、下手から上手へと、峠路にかかる旅人が多い。

○

《峠を下つて來た旅人甲、二人伴れで上りを急ぐ旅人、乙丙に聲をかける》

旅人甲　もし〳〵！

旅人乙　え？

旅人甲　空もよひも怪しい、この日暮れにさし迫つて、峠を上る客仁の多いなア、何か譯ありですかい？

旅人丙　は、は、追分女郎衆に未練はあつたが、加賀樣とやらのお泊りで、宿場はゴツタ返してゐますのさ。

旅人甲　や、そいつア……いめいめしい話だ。

旅人丙　は、は、は……

旅人乙（丙に）お、急がうぜ、峠の茶屋で一息いれ、下りにかかりやア、一つ降り來ようが、夜道にならうと、驚くこたアねえて。

旅人丙　違えねえ、今夜ア坂本宿の飯盛で、埋合せをつけるか。

（二人は笑ひ作ら上手へ。旅人甲は舌打をして下手へと去る。暫時して馬士權三、馬の背に大きな葛籠をのせ、旅人丁少し遲れて、下手より出る）

權三（ふりかへつて）疲れやしたか？

旅人丁　なアに、ちいつと汗ばむで來たのよ。

權三　一息いれなさるがいい。上りは十八町、他處もねえ峠だ……が、江戸のお商人にやア無理でやす。

旅人丁　は、は、それぢやア此處で一息いれるか。

《權三馬をつなぐ。二人は草の上に腰をおろす》

旅人丁　これがなア、追分泊りの朝立ちだと、さぞかし氣樂な道中だらうが、日暮れにやア追ひせかれ、空模樣を氣にしい、峠越しは殺生な話よ。

權三　宿の女郎衆も怨んでゐやせうて、客仁のやうな旦那方を、みす〳〵見逃したも、今日明日の御賦役があればこそでごわす。

旅人丁　お大名はどちら樣だね？

權三　加賀樣の御別家とやら、大聖寺樣でごわす。

旅人丁　ほう、では、さぞかし黃金の花が撒かれることだらうて……

權三　戲談ぢやアごわせん、お大名衆と來たら、七里ケツ……イ、宿場ぢやア鼻ツつまみでごわす。

旅人丁　何故だね？

權三　江戸への上り下り、宿場は御賦役を仰せつかつた揚句が『御苦勞ぢやつた、過分に思ふぞ』これで追つぱらひでごわすからな。

旅人丁　成程！

權三　供廻りの木ツ葉武士が、それもわしら一人々々に云つて

くれるなら格別、お庄屋の喜兵衛様が、畳へ額をすりつけて、こいつをきかされるんでごわす。

旅人丁　そいつア仕方アねえ、長えものにはまかれろ、よくある奴さ。

権三　役徳と云ふのはありやすが、こいつばかりは役損でごわす。こんな御賦役が春秋と重つて、しかも上り下りのお大名方は、信州から北陸へかけてだからやりきれやせん。まアその鬱憤ばらしにやア、唄でもうたふより他、仕方アごわせんて。

旅人丁　ほんによ、追分節、馬士節てえ奴だな。どうだ、ひとつ唄つて貰はうかい。

権三　や、わしやア駄目でごわす。唄は九六の野郎でごわすよ……旦那様ア　へ錢は内藤信濃守袖からボロが下りての。をききやしたか？

旅人丁　さアてね、な、なんだつて？

権三　へ錢は内藤信濃守…………

（この時下手より、急ぎあしに一人の武士、上手へと過ぎるので権三ギョッとして唇をつぐむ）

権三　とつとつと…………いけやせん、いけやせん…………こいつをきかれた日にやア、わしの首が、この胴體と泣別れでごわすよ。は、は、は、は、は…………

旅人丁　は、は、は、は…………追分節でお大名方への鬱憤ばらしか、こいつア好いおもひつきだなア、どれ暮れぬ間に出かけるとしようか。

（二人は上手へ去る。邊りは次第に夕ぐれてゆき、淺間の煙りは、いよいよ激しく噴き流れる。馬士九六、馬上に山岡由之進をのせ、下手から出てくる）

山岡　馬士、そちの名は何と云ふ？

九六　へえ、九六でごわす。

山岡　おお、九六と申すか!?

九六　へえ。

山岡　さうか、待て、待て、ちと淺間を眺めてゆかう。

九六　へえ——併しお武家様、秋の陽はつるべおとし、暮れるが早うごわすからな。

山岡　なんの、約定通り、峠の茶屋できつと歸すわ。下り路は歩いてゆく。

九六　明日の御御賦がありやすから。

山岡　それは承知だ。時に九六。

九六　へえ。

山岡　噂にきき及んでゐる。そち、唄の九六であらうな？

九六　え？——へえ、御存知で……へえ、碓氷越え、唄の九六でごわす。

山岡　さうか、では頼みがある。

九六　え？

山岡　追分節をきかせてくれ。

九六　そ、そりやア御所望がなくとも、かうして供をしてゐる

やすと唄はずにはゐられやせん。併し、さう改つて仰有られやすと反つて唄へなくなるものでごわす。ま、このまま、シャン〳〵峠を登り乍ら、出たとこ勝負といきやせう。

山岡　はて、それがしはそちの名を、國許に居る頃、飛脚よりしげ〳〵きいてをつた。

九六　へえ。

山岡　聲自慢にも似ぬ、度胸のない馬士ぢやな、やれ〳〵、それがしとても旅する身、つれ〴〵の憂さ晴しぢや……それ『加賀の大聖寺は寺ぢやと思つた、寺ぢやないもの城ぢやもの』と云ふがあつたな。

九六　よく御存知でごわすな、加賀の大聖寺様つてなア、どちらでごわせう？

山岡　は、は、シラを切るな。前田侯の御別家、祿高は十三萬石、今宵追分宿のお泊りではないか、さ、ひとつやつてくれ。

九六　へえ——どうもお武家様の前で、さう改つて、さア唄へと仰有られやすと…………

山岡　何、苦しうない、ではかうしよう、それがしも大小捨てた町人となつてきかう、それならばよいではないか。

九六　ぢやア、お武家様、確に町人の心持できいて下さいやすな？

山岡　うん、丸腰の町人だ、心配するな、さ、やれ！

九六　へえ。(唄ふ)

〽追分一丁二丁
三丁四丁五丁
中の三丁が
ままならぬ

山岡　うむ、さすがは唄の九六だ。

九六　お武家様、旅でごわすぞ、町人になつてきいて下さいやすな？

山岡　ええ、くどい奴だな、その通りだ。

九六　有難うごわす。唄つてゐやすと、わしの心はかう、かるく大空へうかんでくやうな氣持になりやす。へえ、處でかう、胸がこれ以上、スウッとするやうな、いはば馬士風情が、身にかちすぎた願ひかは知りやせんが、唄はずにゐられねえつて奴をひとつ…………

山岡　うむ、やれ！

九六　お武家様、旅でごわすぞ、町人になつてきいて下さいやすな？

山岡　よい〳〵、さ、はやくやれ！

九六　へえ。(唄ふ)

〽銭は内藤
信濃守
袖からボロが
下り藤

山岡　う、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、いかさまな、や、これ馬士、

それがしならばだ、笑つてもきくが、うかつには唄へぬぞ。

九六　へえ。

山岡　〽錢は内藤信濃守か……や、痛快な唄ぢや、しかも岩村田藩ではないか、や、面白い、もひとつやれ、そんなのはもうないか、さ、遠慮はいらぬ、やつてくれ！

九六　へえ——旅でごわすぞ、お武家樣ぢやアなく、町人できいてゐて下さいやすな？



山岡　ええ、くどい、さ、胸のスク奴をやつてくれ！

九六　へえっ（唄ふ）
〽松本丹波の
糞丹波
糞と云はれても
錢ださぬ

（山岡は、ハッと息をのみ、顏色を變へる。が、九六は氣づかぬ）

山岡　み、美事ぢや、い、いま一度唄へ！

九六　御武家樣、お、怒つちやアいけやせんぞ、わ、わしらは、こ、この道草も同然、出る芽を、出る芽を誰にでもふみにじられてゐるんでやす。せ、せめても唄に氣をやるほかアねえんでやす。お武家樣、旅でごわ

すぞ、丸
腰にな
つて、町人
になつてき
いて下さい
やすな？

山岡　うむ、
い、いま一
度やれ！

九六　へえ。

（唄ふ）

〽祿高六萬三千石
丹波江戸への登り路に…………

山岡　馬士！

（大喝して馬上からとびおりる）

九六　へえ！

（あつけにとられてゐる。が、山岡は、蒼白な顔に、總身をふるはせてゐる）

山岡　く、糞、糞丹波をいま一度唄へ！

九六　えツ？

（はじめてギヨツとしてあとじさる）

九六　だ、だからお武家様、あ、あれほど念を押したんでごわす、だ、だから、わしやア、い、いやだと云つたんでごわす。





山岡　云ひ譯はきかぬ、いま一度唄へ！

九六　お、お武家様！

（大地に双手をつきひたすら詫いつたが山岡はききいれない）

山岡　ええ、それがしは松本藩の山岡直之進、えりにえつて、糞、糞丹波とは何ぢや、い、いま一度唄へ、ええ、唄はぬか（刀の柄へ手をかける）

九六　お武家様！　た、旅だ、旅だと仰有いやした。ま、丸腰になつて、大小捨てた町人となつてきかう、さうも幾度か仰有いやした。それだのに、それだのに……

山岡　ええ、旅が何ぢや、丸腰が何ぢや、そち、それがしをば松本藩だと知つての上でもあらう、さ、前へ出い、ズツと前へ出い。

九六　め、滅相もない、お、おゆるしなすつて、お、お許しな

すつて……

山岡　ええ、もう一度唄へと申すに……

九六　お武家様！

山岡　ええ！

《いきなり抜討ち、九六の肩をサッと斬る》

九六　うーむ！（仆れる）

山岡　う、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ……

《血糊を拭いて鞘にをさめると、馬の尻を叩いて下手へ追ひやり、自分は上手へと急ぎ去る。馬は淋しくいななき乍ら。うめき苦しむ九六の周囲を廻る。邊りはまつたく暮れ、秋風の音のみさやぐ。淺間の頂近い空は、噴く炎を反映して赤く、ぶきみである。上手奥から鈴の音近づき、やがて空馬を曳いた權三、九六の妹おせきを伴つて出る。おせきは峯の茶屋の戻りで提灯をさげてゐる。二人は九六のうめき聲にギヨッとして近寄る》

九六　うーむ！

權三　だ、誰だ？　あツ、九六ぢやアねえか？



おせき　あツ！　兄さ、ど、どうしやした？

權三　あツ！　血だ、血だ！

《雨がおちはじめる》

九六　うーむ、き、斬られた、き、斬られたんだ！

權三　え、いまいつた武士にか？

九六　うーむ！

權三　し、しつかりしろ、し、しつかりしろ、おせきさ、そこの藪かげにやア水が湧いてるはずだ。

おせき　ああ！

《藪かげへとびこみ手拭を水にひたしてくる》

權三　九六、しつかりしてくれ、わしら、お、お前の唄を遠くきき乍ら下つて來たんだア……

九六　唄の九六がやられたんだ、く、糞丹波を唄つて、あ、あいつにやられたんだ……

權三　ち、畜生！

《思はず武士のあとを追はうとする。が、おせきに止められる》

おせき　權三さ、ま、待つて、いつた處でどうなりやす？　對手はお武士でやすだ、それよか兄さを……

九六　權三、わしらに仕返しは出來ねえ、わしらに力がねえんでやす、う、唄より外にやア、あ、あいつらを笑つてやることたア出來ねえんでやすぞ……



《急に苦しげにうめいて前へのめる》

權三　九六！

おせき　兄さ！　兄さ、兄さ！

〔おせきの呼聲はだん〳〵泣き聲に變る。それにつれて雨は次第に強くなつてゆく〕

○

第二幕

第一場

〔情景〕――峠の頂、力餅をひさぐ峯の茶屋。旅人の往來がはげしい。休息してゐる者もある。茶店の老爺は、懸樋からおちる岩清水で、出刄庖丁をといでゐる。九六は下手寄の樹に馬をつなぎ、緣臺に腰をおろしてゐる。妹おせきは客をよびつづける。第一幕より二年後の初夏。陽は高い。

○

おせき　力餅あがらんせ、お疲れ休めていかんせ！

老爺　九六さ、傷處は痛みやせんか？

九六　ああ、あつさに向へば樂でごわす。

老爺　寒いうちは苦勞しやしたなア。

九六　あれからもう二年になりやす。

旅人(一)　馬士衆、怪我でもしなさつたか？

老爺　なアにの、こんたは一昨年の秋、旅の御武家から、いきなり無禮討をかけられやしてな。

旅人(二)　やれ〳〵、それはえらい眼に逢ひなさつた。

老爺　それからと云ふもの、こんたも頑固でやすよ。お武家衆の客仁は、假令口が干上つても斷ると云ふ心願をこの權現樣へかけやしてな。

旅人(一)　はアて、氣強い仁だなア。

老爺　時によつちやア、斷り方が荒いんで、わしらも側で、ハラ〳〵しやすて。

〔旅人(一)(二)は茶代を置き、おせきに送られ、上手へ下つてゆく。小鳥の聲。上手からは盲た山岡甚之進、杖を左手につき右手を若黨五平にひかれ、危ふげなあしどりで辿つてくる〕

九六　さア、宿へ下りやせう。おやかましうごわした！

老爺　下るかい？　氣の毒だが、ときあがつたこの出刄、つる屋へ屆けてくれやせんか。

九六　いいとも、相不變つる屋ちやア、權現樣の岩清水でといであげた出刄、そいつで料理を甘く喰はすてえ譯でごわすか、は、は、は……

〔九六出刄庖丁を手拭にまき、ふところに納め馬をつないである下手の方へゆきかける〕

五平　あ、これ〳〵、馬士。

九六　へえ。

五平　追分宿への歸り馬か？

九六　へえ。

五平　や、それは幸ひだ、坂本宿で馬が見つからず、やつと此處まで登つては來たが、若旦那樣をのせてはくれぬか？

九六　若旦那樣と云やア、お武家衆でごわすな？

五平　は、は、判りきつたことをきく奴だ。

九六　お武士なら御勘辨を願ひやす。

五平　な、何と申す、そち、馬士なりや、客を乘せるが商賣ではないか？

九六　假令商賣でも、お武家衆は客にせぬと、權現樣へちかつた二年越しの心願、反故には出來やせん。

五平　さうか、心願とあつては據處ない。が、馬士、見る通り若旦那は、尋常のお身體ではないのだぞよ。

九六　え？

五平　しかも世俗に申す俄盲目、普通なればこれからは下り道、乘つて來た馬からおりるのが常ではあるが、なんとしても御疲れではあるし、お眼が不自由ではな、たのむ、何故の心願かそれは知らぬ、また心願を反故に出來ぬと云ふもつとも、とは云へありやうはこの通りぢや、ぜひたのむ、よもや權現さまとても、これをおとがめはあるまいて。

（山岡は緣臺に腰をおろし、淋しさうにぢつとうつむいたまま陽を浴びてゐる。九六はチラリとこれを見やつたがそのまま默つてゐる）

老爺　お武家樣があゝまで仰有るんだ何とか考へ直してあげたらどうでやす？

おせき　な、兄さ、そんなにいつまでも强情を張つてゐなんで……

九六　うむ、お武家衆とは云へ眼が見えぬ、これも俄盲目、長い道中に疲れてもおいでやせう、無理アねえ、上り路の一里廿三町、杖にすがり、手引をされての旅ぢやア……

五平　ぜひたのむ、その代り鳥目はそちが申すだけはずまう。

九六　ぱ、莫迦ア云つちやアいけやせん。わしやア眼が見えねえ方だによつて、心から氣の毒に思ふんでやす。お鳥目に眼がくらんで、二年越の心願を破つたとあつちやア權現樣に申譯がありやせん。な、若黨さん、ただならのせてあげやせう。

五平　や、承知してくれるか、そいつは云ひ過ぎてすまなかつた。

九六　わしの氣持が判つて貰へやしたか？　さア、旦那樣をつれて來なさいやし。

（五平は山岡を伴れに戻る。九六は碓氷權現の方に向いて合掌する）

九六　權現樣おききの通りの始末で御さいやす。人の世の情けのため、世の中を良くし明るくする交際のためでごわす。わしは客人をお武家衆だと考へやせん。人間、眼を失しなさつた一人の人間だと考へやした。どうぞお許しなさいやして……

老爺　や、でかした、伜や、淚がこぼれやすぞ！

おせき　兄さ、わしも嬉しうごわす。


餅



《五平に手をひかれた山岡がつまづいてよろめく》

九六　おつとつとつと……さア此處からおのりやして……

山岡　お、そちが馬士か、何かと厄介をかけるな。

《山岡馬に乘る。五平は荷物を纏めてゐる》

九六　なアに、とやかく云つてわしがわるうごわした。お武家衆の客仁はとらぬ、確にさう心願をかけやした。が、よく考へて見りやア、姿形にかかづらつた考へでやす。馬士が人間ならお武家様だつて人間だ。人間裸體になりやア同じことでやす。五體揃つた達者な者が身體の不自由な方ア助けるなアあたりめえでごわす。世の中ア誰でも彼でもかうしてもたれあつてゆきせえすりやア間違えはねえでやせう。力の強え者が弱え者を虐める。だからこの世の中ア暗くなるでやす。こいつがなくなりせえすりやア世の中アもつと良くなり明るくなり、のどかにもなりやせうて。は、は、は、…………誰にも彼にも萬遍なく、よくして下さるなアお天道様でやす。處がお武家様ア人間の上に立つ偉え方かも知れねえが、眼がおわるくちやア、そのお天道様の光りせえ見られねえ……お察しいたしやすぞ。

山岡　おお、その心持が有難いのぢや。

九六　さア、出かけやすぜ、これから下りにかかるで、かうくらつぼへ確りと、とつついてゐなさるがようごわす…………爺さ、あとでまた上つて來やすよ。

《茶店の老爺、妹おせきに送られて、下手へと峠路を下つてゆく。五平も嬉々と從ふ》

○

第二場

〔情景〕——落葉松の林。風もなく、淺間の噴煙は、まつすぐ

立つてゐる。小鳥のさへづりが朗かである。馬士九六、山岡をのせた馬を曳き、五平つき從つて上手から下つてくる。

○

五平　や、しまつた、これ馬士。

九六　へえ。

五平　合羽を茶店へ忘れて來た。

山岡　不所存者め！



九六　とつておいでなさいやし、ブラブラやりやせう。

山岡　おお、さうしてくれ、では五平一走り戻つてくるがよい。何なら此處で休んでゐよう。眼には見えぬが若葉の香ひが、何とも云へぬな。一寸おろしてくれぬか。

五平　さうなさいませ、反つて御氣晴しにはよろしう御座いませう。

（山岡をかいぞへて馬からおろす。山岡は九六と二人草に坐る）

五平　では若旦那樣、一走りいつてまゐります。

山岡　おお。

五平　馬士、たのんだぞよ。

九六　へえ。

（五平は上手へ急いで戻る）

山岡　五平はいつたかな？

九六　へえ。



山岡　俄盲目は不自由なものだて。

九六　眼がお見えなさりやアこの若葉の景色が樂めやせうに。

山岡　さもあらうな。それがしも二年前、この碓氷越えに浅間の山の煙りをば飽くほど見て過ぎたものだ。あの日は秋風がしきりとさやいで、煙りが東へと流れてゐた。

九六　今日はまつすぐに立つてゐやす。

山岡　二、二年前と仰有りやしたな、秋だと？

九六　おお、二年前の秋だつた。

山岡　ど、どちらの御藩ですい？

九六　それがしか、松本藩ぢや。

山岡　え？

九六　どうかいたしたか？

（九六、思はずもふところの出刃を出して手拭ひをとく）

山岡　松本藩、山岡直之進と申すものぢや。

九六　うーむ！

山岡　どうかいたしたか？　これ馬士、そちの名は何と申す？

九六　ち、畜生！

山岡　なんとした？

九六　九六だ、唄の九六でやすぞ！

山岡　えツ？

九六　やい武士、やい山岡直之進、お、俺の聲に、わしが名に覚えがありやせう？

山岡　おお！

九六　やいどめくら、二、二年前、抜討にあはされた、唄の九六でやすぞ！

山岡　九六殿！

九六　さ、二年前の敵討だ。眼の見えねえがもつけの幸ひだ。さア野郎、くたばつてしめえ！

（出刄でついてかかつたが、あまりにあせりすぎて空を切る。山岡辛くもそれをよけて叫ぶ）

山岡　ま、待たれい、九六殿、し、靜まられい九六殿、欲しい生命ならば與へもしよう。併し、それがしが申すこと、一應はきいてくりやれ、な、たのむ、たのむ。

九六　な、何を云やアがるだ。そ、そんなことウ云つてまた…………

山岡　せきやるな、さ、これを見やれ。

（大小をとつて遠くへ投げる）

九六　お！

山岡（手を地上へついて）九六殿、すまぬ、すまぬ許してくりやれ、はしなく犯したあの罪、古傷となつてうづき通し、今日が日までもそれがしの心を、せめ責んだはあの夕のことぢやつた。俄盲目になつて氣臆れしたではない。眼が開いてゐたうちこそ若氣の至りとは云へ猪同様、目茶苦茶な歩みをつづけ、世の中などは顧みようともしなかつた。だがいまとなつては、双眼共に盲となり、光りを斷ち、色を感ぜず、唯だ人の情のみをあり〳〵見ることの出來る心眼が開けた時、初めて眞實の世の中が判つて來たのぢや、さつき峠の峯の茶屋で、そなたがそれがしの不具を憫み、二年が間思ひつめてゐたらう、その心願を破つてまで、この身を馬にのせてくれ、しかも明るい世の中になることを権現に祈念したあの言葉。あれほど純な美しい人間の眞心がどこにありえよう。眼が開いてゐるうちは、それほどのことすら身にしみじみとは判りえないそれがしなのだつた。人の情、人の世の姿、始めて一切が會得され申した。それにつけてもあの折の狼藉沙汰、いま思ふだに恥不知な振舞ひではあつた。赤面の至り、穴あらば入りたき氣持に、これこの通り責められても居る。さ、九六殿、この通りだ、思ふ存分にしてくりやれ（双手を地上につき首をさげる）さ、突くなり、斬るなり自由になされい、ありやうを云へば、今宵追分宿へついたなら、村役人にそなたがことを問ひ訊し逢うて心から詫びもしよう。もしやあの折不幸にも、そなたの命が果ててでもゐたなりや、せめてその墓に詣でてなり、過去の罪をば償はう。そればつかりを念願として、ここまで旅をつづけて來た身ではある。

九六　お、お武家様、いや、山岡の旦那様、わしは何も知らなかつたのでごわす。旦那様が、そ、そんな氣持で苦しんでゐなさりやしたとは、まつたく知らなかつたのでごわす。

山岡　さ、九六殿、それがしをば、思ふ存分討ち果してくりやれ、さ、寸時も早く、かうしてゐる間も心がせく、もじや五平奴が戻つてでも來たなりや……

九六 ええ、あ、彼相な旦那様、謝つてせえ下さりやしたら、今日と云ふ日お限りでごわす。恩も讐もこの胸に殘しはしやせん。淺間の煙りが大空に噴き出されても、すぐ青空にとけこむでゆきやす樣にわしの呪ひも怨みもいまとなつちやア同然でやす。きれいにとけやした。消えて跡形もスッパリなくなりやした。この上わしが旦那樣を敵よばはりした處で、假令指一本でもつけた日にやア、またそれがお互え怨みを重ねるもととなりやせう。お手をあげて下さいやし、さ、旦那樣、お手をあげて下さいやし。

山岡 おお、では九六殿、そなたはそれがしを許さうと云ひやるのか？

九六 旦那樣、許すも許さぬもありやせん。旦那樣、お互えがいま身にしみじみとおぼえられるこの心持でごわす、こいつア恩と云ひ讐と云ふ、そんな小せえ心持ぢやアごわせんぞ！

山岡 おお、九六殿、忝じけない、忝じけない！

九六 旦那樣！

（二人は手をとりあつて泣く。長い間。處へ五平が上手から戻つてくる）

五平 さぞお待ちかねで御座いましたらう。

山岡 おお、戻つたか！

五平 遲なはりまして。

山岡 なんの、若葉の香ひをかぎ乍ら、この九六殿が、いや馬士めの咽喉をきいてゐたのだ。

五平 若旦那樣、どうなさいました。涙を流しておいでなさいますな？

山岡 なアに、さ、九六殿、唄つてくりやれ、五平、こちも心を澄せてきくのだぞ。

五平 はい。

九六 唄ひやせう、旦那樣が御所望なら、この聲が涸れるまでも唄ひやせう。（唄ふ）

へ淺間根ごしの
燒野のなかに
あやめ咲くとは
しをらしや（山岡泣く。五平不審に耐へぬ面持）

五平 若旦那樣、どうなさいました？

山岡 莫迦め、こ、この追分節をきいて泣けぬ奴があるものか、莫迦、泣け、泣け、思ひ存分泣くがいいのだ。

五平 は、はい！

九六 （唄ふ）

へ追分枡形の
茶屋で
ホロと泣いたが
忘らりよか

（唄ひ乍ら、九六も終に咽び泣く。五平のみはひとり啞然としてゐる。クワクコウが淋しく啼いてゐる。高原初夏の眞晝）

——完——

名士の談話室



陸軍大將 町田經宇

人間の一生は修養だ。少年時代には少年時代として、老人になれば老人として、或は官吏として、職員としてといふ様に、如何なる職業でも、如何なる年齢でも各々適當な修養があるべき筈である。

所が、世間では修養と云へば、直ぐ青年と云ふやうに之を青年ばかりに強ひる傾がある。之は大きな誤りだ。青年に修養を説くもよいが、說く老人自身にも修養の必要がある事を忘れてはならぬと思ふ。

「年五拾にして四拾九歳の間の非を悟つた」と云つて修養に努めた蘧伯玉の言は吾々にとつて金科玉條といふべきである。



彫刻家 朝倉文夫

眼だけについても日本人が西洋人に勝つてゐる事が分る。第一瞳が黒い事だ。瞳の仕事は、寫眞機のシボリと同じに光線をさへぎる役目をする。光線をさへぎるには茶目や碧目よりも黒目の方がよい事は分つてゐる。それから睫毛にしてもそうだ。日本人のは完全に日除けの役をしてゐるのに、彼等のは上向きになつてゐるため思ふ様に行かない。論より證據、日向に出ると西洋人はみんな日ずるしい様な顔をしてゐるではないか。それから又日本人の眼は長く、まなじりが切れてゐる事だ。隨つて前方九十度だけは完全に見る事が出來るに、西洋人の眼は八十四、五度しか見えない。も一ツは、日本人の眼の周圍は非常に脂肪が多い。隨つて眼球の回轉が自由自在で西洋人などはとても比較にならない。

これは彫刻家としての私の體驗だが此の外嗅覺や聽覺、骨骼についても優秀な事が云ふ事が出來ると思ふ、他日大いに論じて見る積りだ。

放言漫語

文學博士 谷本梨庵

一 智と徳

古川柳に

○智ではじめ徳でをさめる小倉山

といふのがある。これは「百人一首」の天智天皇に始まり、順徳院に終はりたるのを指して云つたものだらうが、人間の一生亦此の如し。

二 老人の眞價

老人は固より大に敬重しなければならぬが併しあまり買冠つてはいけない。西洋の古い諺に「腦髓は髭のうちにはない」The brains don't lie in the beard といつてゐるのは、大に面白い。

三 街頭所見

「武玉川」初篇に

關守の淋しい日には物とがめ

大日本聯合青年團理事 關屋龍吉



此の間、或る公開の席上で阪谷男爵が講談社の編輯方針、殊にキングの態度を賴りに賞めて野間社長の努力を稱揚してゐたが、實際此の頃の雜誌界中、量の上から云つても質の上から云つても斷然キングが一頭地を拔いてゐる事には敬服してゐる。尚此の上の希望としては、益々自重自愛覇王の如き勢威を利用して、更に國論の指導、社會の木鐸としての活動を層一層やつて貰ひたい事だ。

キングを以て世の中を淨化するの一大勇猛心を私は衷心から熱望してゐる。

陸軍教授 鹽野新次郎



自分の云はんと欲する事に、ピッタリ合ふ言葉が頭に浮ばぬため、結局、廻り冗い事を書き並べて文章を力弱いものにして仕舞ふ。斯うした苦い經驗は、お互が屢々痛感する事だ。力強い文を作るためには、どうしても語彙を豐富にする必要がある。

そこで、語彙を豐富にするのには？と訊かれゝば、私は、漢文を讀み時には詩を作るのがよいとお答へする。西國立志編が當時の青年を感奮興起させたと云ふのも漢學の造詣の深い中村正直先生の飜譯だつたからです。

今時、殊更に漢文學を御勸めするなんて、或は時代後れだといふ譏りを蒙るかも知れませんが……。

エフイシエンシー協會々長 池田藤四郎



ホテルの新參ボーイは、私共を日本人と見て、半人前の西瓜を一人前だと言ひ張つた。それが支配人の耳へ入つて、正式の詫となり、ホテルの社長からは、改まつた禮狀が屆いた。『お客の苦情はホテルの繁榮の基です。苦情のないのは見捨てられたも同然、貴下の御注意は當ホテルの得難き寶云々』と書いてあつた。之は世界一のホテル紐育市ウヲルドーフに二ケ年間下宿して居た當時の出來事。

蓋し人情の機微、今も尚巡査などに這の癖はありがち。さりとては咎められるものこそ、迷惑千萬！

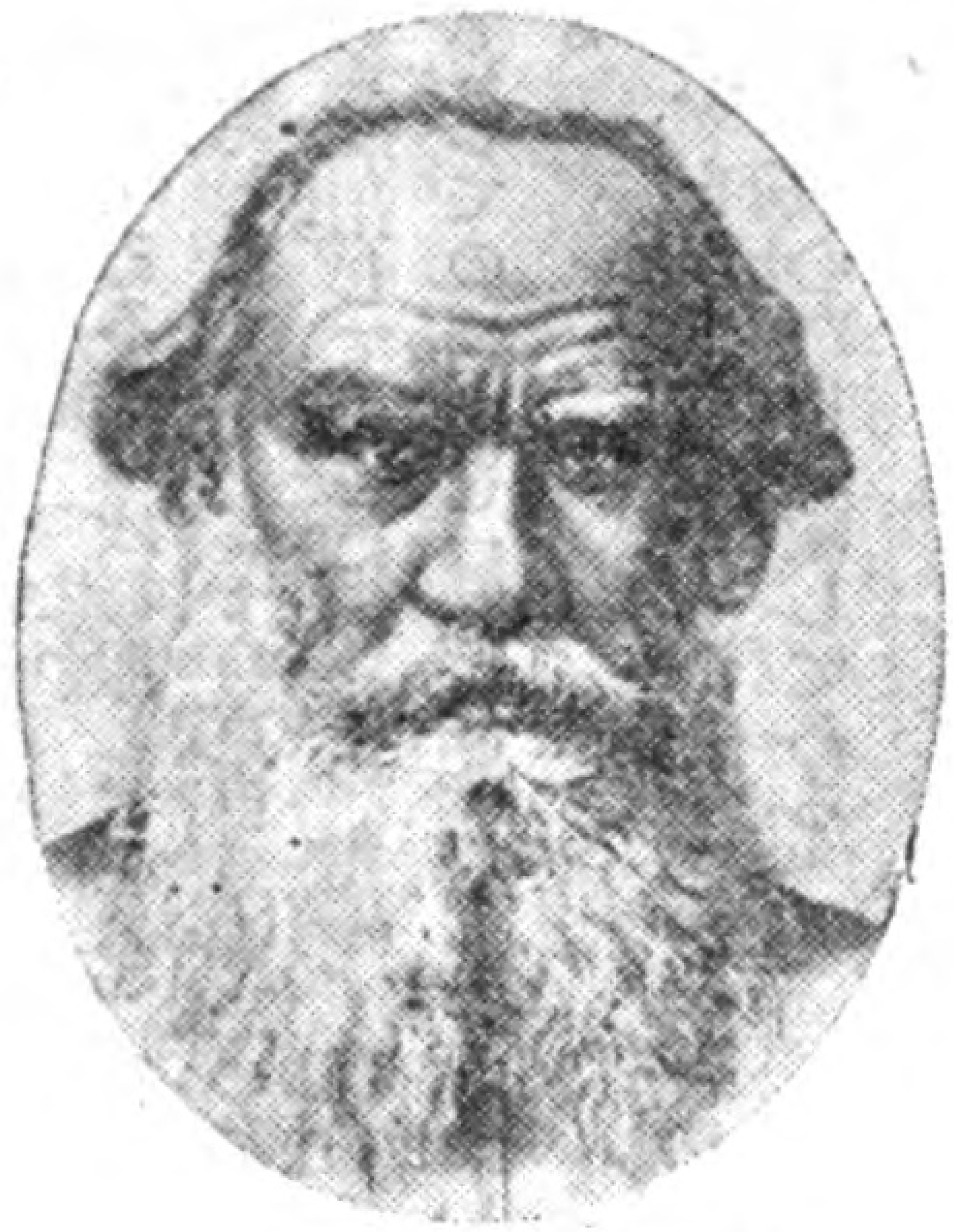
四 戀愛と痲疹

伊太利邊の俚諺に、戀愛を痲疹に譬へたものがある。英語に直すと Love is like the measles ; we are not apt to have itse vere but once. となる。即ち「戀愛は猶ほ痲疹のごとし、人は一生に只一度しか、猛烈にそれに罹るものでない」と。奇想天外と謂つて好からう。

五 戀愛と嫉妬

又「舊約全書」の雅歌には Love is streng as death: Jealousy as cruelas the grave. と、あるのを思ひ出した。邦譯に「愛は強くして死のごとく、嫉妬は堅くして陰府にひとし」とあるが、平たく言へば寧ろ「戀愛は死のごとく強く、嫉妬は墓の樣に殘酷な」といふ程で、又其處に人をして戰慄せしむる、無限の凄味がある。


老子


トルストイ


マルクス


シヨウペンハウエル


ルソー

幻惑より覺めて脚下を顧よ

貴族院議員　赤池濃

覺悟はよいか

よきを取りあしきを捨てゝ外國に
おとらぬ國となすよしもがな

畏くも明治天皇の御製である。まことに『よきを取りあしきを捨て』る採長補短の精神は、古來わが國民性の特長であつた。

●斯くして我等の祖先は、或は印度文化を吸收し、或は支那文明を咀嚼して、我が固有の美點を彩り、裏づけ、展開して、こゝに燦然たる今日の文化を建設した。そ



エレンケイ



ラッセル



孔子

れは全く他國人にも類のない手並であつた。

然るに、近來、我國民が外國の風潮に接する態度を靜觀すると、吾人をしてそぞろに寒心に堪へざらしめるものがある。これを外國の事情を紹介する者の側から見ると、其の多くは、紹介の範圍を越えて、一にも西洋、二にも西洋と、全く崇拜であり、憧憬であり、隨喜渇仰である。甚だしきは、その短所までも盲信的に紹介してゐる者さへある。

之を受ける一般民衆の側から云つてもさうだ。そこに何等國民的確信があるのではない。ただ光は西方より、文化は横文字の中よりとのみ過信する情ない連中が多いやうだ。

さてその結果は、と云へば、果然、政治は濁り、風教は衰へ、國民の思想は混亂して、遂に識者をして國難來を叫ばしむるに至つたではないか。

外には、士君子の與に齒すべからざる收賄、瀆職の聲。内には聞くも忌はしき三角關係沙汰。これが昭代の不祥事でなくて何であらう。

一體われ〳〵の特長とした採長補短とは、斷じてそんな輕薄なものでは無かつた筈だ。己れの美點までも長所までも沒却して、何の採長があらう、補短があらう。冗談ぢやない。

眞に採長補短せんが爲めには、我等は先づ眼を明かにして我が脚下を見なければならぬ。我れ自らの身邊を顧みなければならぬ。三千年來、我等の有する精神を、特長を、深く究めなければならぬ。

諸君、その覺悟はよいか。

『己を知り、敵を知る』は獨り兵家の要訣たるのみではない。實に一國文化の建設の第一歩は、自國の精神を靜觀するにあるのだ。

聖德太子がさうであらせられた。和魂漢才を敎へた菅公がさうであつた。明治維

新の大先覺佐久間象山も横井小楠もさうであつた。我等もまた此等の先人に倣つて、西洋模倣に浮身をやつす前に、まづ東洋文化に目覺めなくてはならない。

笑止千萬

近時、殊に歐洲戰役後に於いて、外來の思想として我國に紹介されたものは、實に夥しいものである。さうしてその何れもが、非常に新らしがられ、有難がられ、隨喜渇仰され、中には外來思想と心中するものすら少くなかつた。果報なる外來思想よ。

だが、お前は本當にそんなに新らしいものか、珍らしいものか。

外來思想として傳へられた思想の殆ど悉くが、わが東洋に於いては、既に〱遠き昔に於いて、研究しつくされ、或は實行にまで移され、而してその是非、成否如何についても、十分究めつくされてゐるものである。

『燈臺下くらし』なら、まだしも、われと我が手に握りながら、何處だ〱と探しまはつてゐる滑稽さ。無自覺さ。洵に笑止千萬な事と云ふべきである。

人類愛の本家はこちら

最近、『イン・ザ・ネームス・オブ・ピープルス』の字句の解釋からやかましい問題となつた不戰條約といひ、萬國平和會議といひ、苟しくも世界の平和運動、博愛の看板は米國の一手專賣のやうに考へて、今更の如くアメリカニズムを謳歌する者も少くない。が、人若し、東洋史の一頁をだに繙くならば、そこには、ちやんと『人類愛の本家はこちら』と明かに指標の立てるを看取するであらう。

春秋の昔、大國は小國を攻め、強者は弱者を侮り、富者は貧者に傲り、水火兵刃を以て侵害する悲慘な樣を、默視するに忍びず、義憤と痛恨の極、敢然立つて不戰非攻を唱道し、平和なる國家の建設と人類相愛の精神の普及に努めた墨子の活動の如き洵に好個の實例である。これがために彼は諸國の間を奔走して熱烈に侵略戰爭を諫止した。其の意氣の壯なる、今日の平和運動に携はるものに比して、決して優るとも劣るものではなかつた。

戰は何によつて起るか、人類相愛せざるより起る。故に天下の人々、わが身を愛するが如くに、互ひに差別なく平等に相愛するならば、國は必ず治まり、世は必ず太平である。これが墨子の主張であつた。全く無我の愛である、無差別愛である、我が父も、人の父も、自國人も、他國人も、我も、人も、皆同樣に愛すべきを說く。恰もそれは現代人が、人類愛を禮讃し、宇宙人として行動すべしといふのと、その軌を一にしてゐるではないか。

『自然に歸れ』と老子は敎へた

更に又、トルストイ、ショウペンハウエル等の名によつて、無抵抗主義なるものが、我國に始めて紹介せられたるが如く考へるものも少くないが、奚んぞ知らん、それは早くも二千年の昔、東洋に於て老子の既に唱破した所であつて、彼等こそ遙かに老子の後塵を拜する者であるといつても差支ない。

周室の衰微と共に、官制、道徳、儀禮、作法、その他一切人爲の製作は形式のみで、その實を失ひ、罪惡醜行底止するところを知らざる有樣となつた。これを見た老子は、つくづく人爲の技巧の果敢なさを悟つた。さうして一切の人爲を廢して素朴の自然に歸るべしと高唱した。

彼の理想は太古素朴の世にあつた。それは恰かもルソーが『自然に歸れ』と叫んだと軌を同じくしてゐる。

老子が人は嬰兒の如く柔弱に、女子の如く忍耐すべきものだと力說し、無抵抗主義を叫んだことは、正に基督教の馬太傳以上である。

『二十世紀は兒童の世界』とエレンケイが唱へ出したと云つて、今更のやうに兒童の保護を叫びつゝ、これを家庭の天使と讃美したり、或は中世紀の騎士の風を裝うて女性尊重を說く連中に比べると、

『柔は剛に勝ち、弱は強に勝つ』

『牝は常に靜を以て牡に勝つ』

と女人を禮讃し、

無欲にして以つて靜なれば天下まさに正し。と叫んで、ひたすらに童心に歸ることを力說した老子の如きは、蓋し最も徹底したるものと謂ふべきではなからうか。

管仲の後塵を拜するマルクス

更に、財產の平均を圖らんがために井田法を布き、需要供給を適度ならしめんとして均輸法を設け、物價の調節のために常平倉を設けたやうな古の施設の跡を顧みる時、やかましい共產運動なるものも、また必ずしも勞農政府の獨擅場でないことに思ひ當るであらう。『マルクスの思想は、老子の說を祖述した莊子の說と同じである』英人バートランド・ラッセルは、支那旅行に得たる研究の結果を報告して、かう言つてゐるではないか。

私は、唯物觀に徹底し、功利主義を實行した好箇の實例を、かの管仲に於いて見ることが出來る。管仲は齊の桓公を助けて、自己の信奉する大主義を實行したる、異彩ある政治家であつた。彼の政治的特色の第一は、功利主義であつた。

その結果、齊人は凡て利益を重視し、常に利を思ひ、利を謀つた。利益第一主義である。その政治の萬端が、利益より出發して利益に歸着すること、さながら今日、西洋の政治家たちが利益を以つて政治の實質となし、取引の本體なりとする思想そつくりである。

第二に齊人は相互主義の觀念があつた。萬事利益の交換を基調とし、相互的、相對的に物事を解決しようとした。物を與ふ

るは物を取るためである。何事も、無償ではやらぬ、すべて利にかけて損得を考へる、君臣父子の關係と雖も、

『君、君たらざれば、臣、臣たらず』

である。

之を要するに管仲によつて培はれた齊人の思想は、西洋人のそれと全然同一とは言はざるまでも、殆んど異るところなしと云つて差支ないと思ふ。

それがよいか惡いかは、今多くを言ふを要せぬ。たゞ斯うした何等道德的な永遠性のない、單に利を以つて結合する一時的の集團たる齊の國の末路が、その當然の歸結として、頗る悲慘なものであつたことを知れば足りる。

以上私は、墨子の不戰非攻の說、老子の無抵抗主義、管仲の功利主義を略述する事によつて、今日いはゆる外來思想として傳へらるものが、必ずしも新らしき思想でもなく、學說でもない、東洋に於いては既に〱說きつくされ言ひ古された陳腐のものであることを紹介した積りである。

米の飯と太陽の光

最後に、われ〱は、これら幾多の學說、思想の中にあつて、常に鞏固なる精神と永遠の生命を含む信念とを以つて、萬代易らざる一大理想を押し立てゝ、戰禍の慘害、風教の頽廢から、生民を根本的に救はうとした孔夫子の道のあることを忘れてはならない。

管仲の功利主義の弊に對しては、

『國は利を以つて利となさず、義を以つて利となす』(大學)

と喝破して極力、克己を說き、物質生活に對して精神生活を推稱し、

『君、君たらずんば、臣、臣たらず』の相互主義に對しては、君臣父子の關係を以つて絕對的のものとなし、飽くまで忠誠の一念を高調し、大義名分の爲には、常に二つなき生命をも犧牲として、

『身を殺して仁を成す』

と絕叫して、至高至大の道德を、恰も炬火と振りかざした孔夫子の濟世安民の經綸は、遂に儒教となつて結晶した。

孔子のいふところは、かの諸家の學說の如く、一時的應急的の治療ではなかつた。萬代易らざる保健の原則である、たとへば米の飯だ。世道人心を永遠に救はうとする大慈大悲の心である、たとへば太陽の光だ。何の新奇もない、何の變哲もない、だが一日一刻もこれなくては生命が絕たれる。——戰亂相繼ぐ非常の世にあつて、この恒久不變の常道を靜觀し、これが體驗と顯揚とに、あらゆる貧苦と迫害とにいみじくも耐へ忍びて、老いの將に至らんとするを知らなかつたのである。

想ひ見よ。かの曠野にさまよひ、飢餓、骨を削り、兇刄、刄前に閃く陳蔡受難の秋、尙從容として永遠の道を說き、靜かに人生に徹見して、救世の責に任ず、儼として奪ふべからざるの意

氣こそは、一時の遇、不遇によりて態度を變へ、徒に己を屈して迎合を求め、言を賣つて虚名を博せんとするが如き徒輩に比して正に天地霄壤の差ではないか。凜として犯すべからざる夫子の風骨、千載の下なほ懦夫を起たしむるものあるを覺ゆる。

光は東方より

而も孔子の感化の最も著しきものは、實に支那にあらずして我日本にあつた。我が國こそ儒教が醇化し、完成し、而して奕々たる精華を發した理想の地であつた。

由來、支那は空名の國である。理想を理想としてあこがれ、これを實行にまで努力しない國である。

我國はあくまで現實の國、實行の國である。孔夫子によつて說かれた高遠の理想、永遠の道を、最もよく消化し、更にこれを簡易化して實行に移し、我國固有の文化に加ふるに採長、補短、更らによりよき獨自の文化を建設したのは我國である。

近年、わが國の急激なる勃興に驚き、わが眞相を知らんとする歐米の識者は、日本國民の優秀なる所以は、全く儒教によつて陶冶された爲めであると信じ、東洋文化の根源を究めんとしつゝある。

今や、歐米人は、その誇とする物質文明が、必ずしも唯一のものでないことに目覺めた。その得意とする專門的分析的學風が、往々にして枝葉末節に拘泥して大局を誤り、時に人をして懐疑に陥らしめ、或は社會の解體を促がすの危險さへあることを痛感した。

こゝに於いてか、物事を大觀してその要領を掴み、大きく悟つてあつさりと考へる――守約、綜合を主とする東洋思想を謳歌し、東洋の精神生活に憧れるやうになつたのである。彼等としては、それは偉大なる目醒めでなければならない。かくて彼等の研究が進めば進むほど、彼等はいよ〳〵東洋思想の醍醐味に陶醉するに至るであらう。

西洋思想を基調とした物質文明は、既に明かに下り坂にあるのではあるまいか。此處に於いてか當然興るべきものは東洋思想を中心とする精神文明でなければならない。

この風潮に棹して、よく目的の彼岸に到達せしむるものは果して誰が任か。わが國民の使命いよ〳〵大なりと云ふべしである。

乞ふ、先づ、西洋心醉の幻惑より覺めよ。而して我が日本精神の精華の前に活眼を開け。東洋文化の神髓の上に立脚せよ。（完）

都會は人類の墓場だ。少し代を重ねる中に子孫は皆或は滅び或は零落してしまふ。そこで人間の入れ替へをしなければならぬ、而してその新奇な人足は何時でも田舍から送り出して來る。

（ルソー「エミール」）


福田正夫


花園兼定


戸川秋骨

幸福

陽にくるめいてゐる向日葵！　華かな彼女の微笑が、輝かしくヴェランダにこぼれた。綠の木蔭に坐つてゐながら、彼女の美しい頬は靑空のやうに明るかつた。
その膝の上から、純白の毛絲の玉が尾を曳いてころがつた。
『マヽ！』　さし出された小さい手、彼女は愛するものに向つてやさしくその白い手をのばした。

水晶の象

水晶の象をタゴール翁に贈る。机の上におくと、翁の手が桐の箱から、この沈默した、透明な動物を取り出した。春の光線が、水晶にふりそゝぐ。動物の眼は、印度の詩人をうつしてゐる。詩人は、今度も詩をうたつてゐた。

無題

泥棒が殖えるので、金持の方の飼犬が殖える。おかげで吾々郊外の貧民は、棒をもつて外出しなければならない。犬除けのためである。八九歳の子供は、犬に飛びつかれると云ふので、まはり道をして學校へ行く。犬に賴んで、お金の安全をはかる人間は、見上げたものだ。さう思ふと、戸締りをしなかつたとかいふ、トルストイは、矢張り豪いのかナアと感心する。



加能作次郎

凡人唯修養

私は凡庸なる一作家に過ぎない。私は自分に天才があるなどと夢にも自惚れたことがない。私が作家として生存して行ける唯一の頼みはたゞ不断の修養努力のみだ。

「凡人唯修養」

これが私の座右銘だ。



上原敬二

無題

水は流れる、然し流れたあとに水は残らない、然も森羅萬象は如實に之れに姿を浮べる。丁度時は過ぎる、過ぎるが故に時であると云ふに同じ。けれども冷い風が吹きまくれば流れもいつか凍つてしまふ、味のない氷塊だ、かくて流れはとめることが出來ようが、時をとどめる術はない。明日は明日の風が吹くと云ふ心は封じたいものだ。



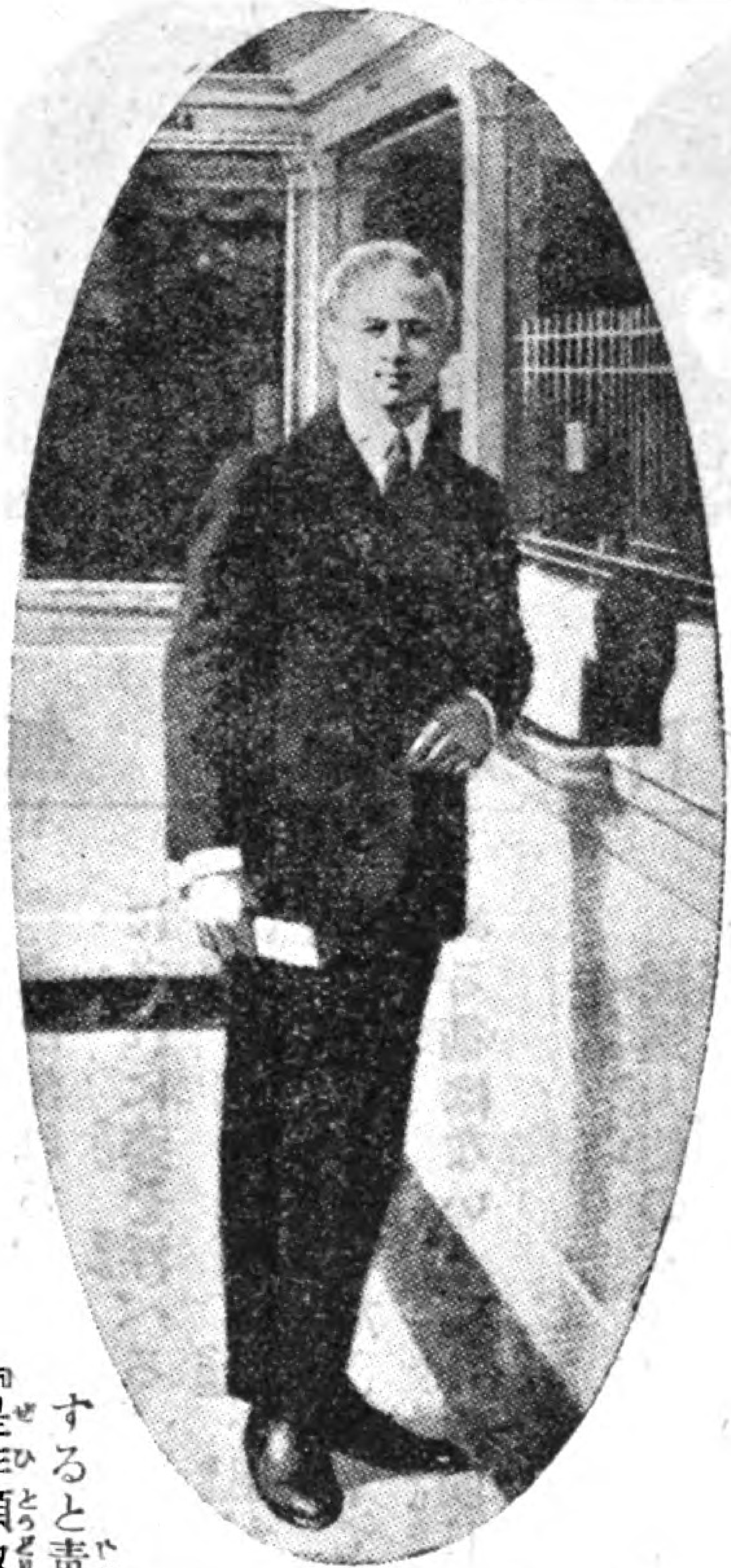
十一谷義三郎

日本座敷

獨逸大使のゾルフの令孃が買つていつた「邪淫」と題する彫刻の「男の首」の原型がいま僕の手許に來てゐる。僕は、日本座敷の床の間に、それを据ゑた。或人が鉢植ゑの紅い西洋草花を呉れた。それを僕は、その首の傍へ無雜作に並べた。さうして、そこに、一種の調和が生れたことを知つた。日本座敷の床の間は、必しも掛軸と花活と置き物の占領に委すべきでないことを知つたのだ。

二十八歳で銀行頭取

井桁敏郎


ダイクマン氏

アメリカのニユウ・ジャージー州の或る町に、資本金五百萬圓の小さな信託銀行がある。或日のこと、この銀行へ、風采堂々たる一紳士がたづねて來た。その時、如何にも賢さうな一青年は、行內から出て來て、いそ〳〵と紳士を迎へた。紳士はその青年に向ひ、

『頭取にお目にかゝつて、少々お話したい事があるのだが、どうぞ取次いで下さらぬか。』

と鷹揚に申込んだ。青年は物靜かに、

『畏まりました。では私がお話を承はりませう。どうかおかけ下さい。』

と答へた。

『イヤそうしちや居られません。至急頭取にお會ひ申さなければならない。』

すると青年は、ニコ〳〵しながら、

『是非頭取に會はうとおつしやるなら、私にお話しを願ひます。申後れましたが、實は私が頭取で御座います。』

『コレはどうも……アナタが今度新任になられた頭取ですか。』

『ハイ、私が頭取で御座います。まだお目にはかゝりませんが、お名前は疾に承知いたして居ります。アナタは、ロビンソンさんでいらつしやいませう。當時ニユウヨークで御商賣をなすつていらつしやる筈です。前にアナタが、この町で店を開いていらしつた時に、私共の銀行で、多少御力になつたことがあります。それを御忘れなく、ニユウヨークへお引移

り後も、一部分の預金を、私共へその儘御殘し下さいました。御好意は常に感謝して居ります。』

紳士は笑ひながら、手をさしのべて、

『イヤ全くその通り、さうおつしやられては誠に痛み入ります。アナタが銀行の歴史に明るくてお出でのやうに、目下利廻りのいい放資物に通じて居られるなら、將來引續いてお互ひに圓滿の御取引が出來るといふもの、どうか然るべく御配慮を願ひます。』

客の驚きは、實際無理もなかつたのだ。頭取ダイクマンは、その頃アメリカ中の銀行頭取三萬三千名中の、最年少者であつたのだ。

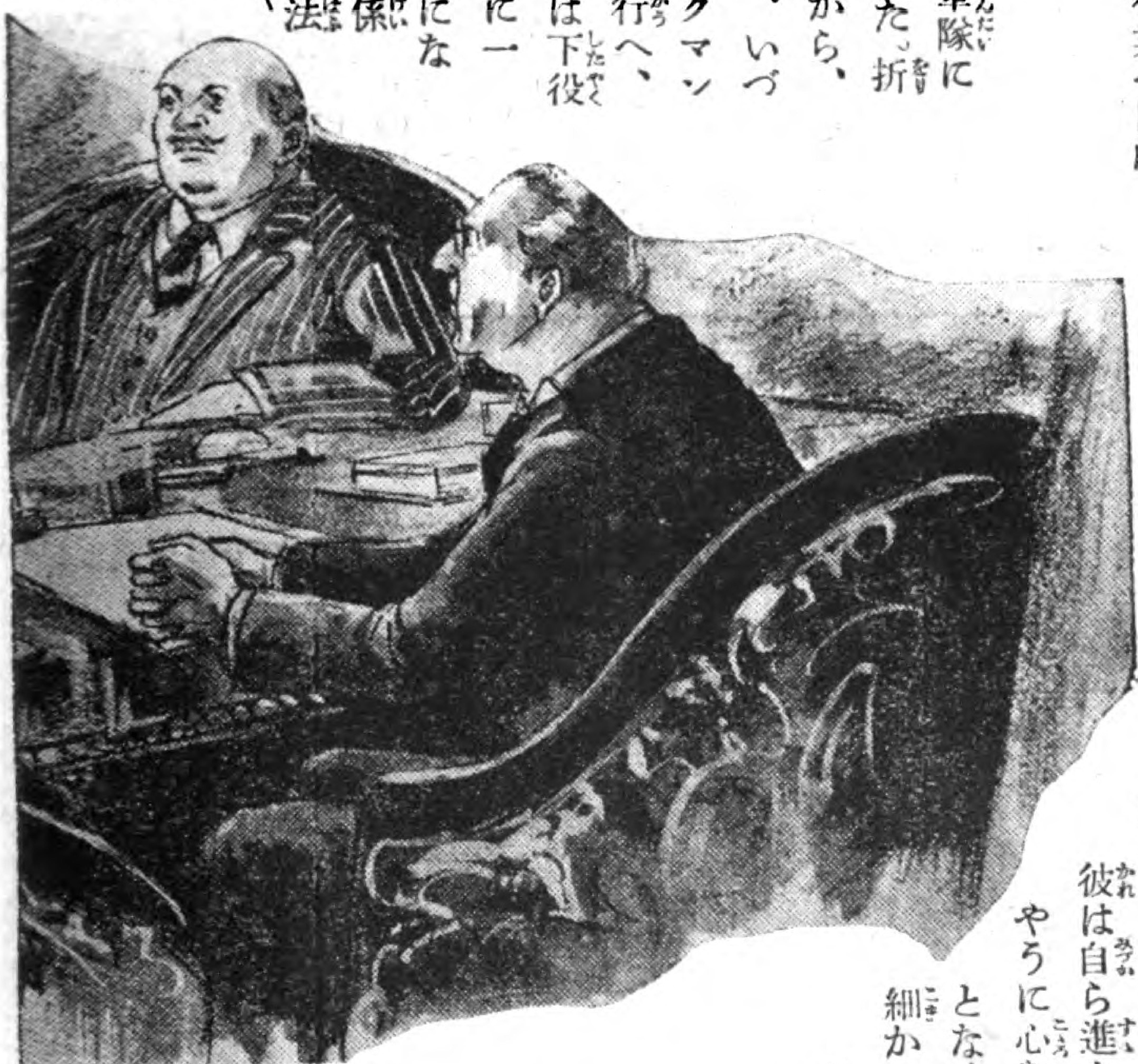
その上、年よりも一層若く見え、如何にも小僧小僧して居たのだ。彼はこの銀行の事務員に採用されてから、五年目に頭取となつたものだ。ダイクマンの父は、家屋内の排水管を取付ける職人であつたが、伜の中學校を卒へる少し前に死去した。父に死なれたダイクマンは、中學校を出ると共に、母親を助けるため、何か職を求めなければならなかつた。幸ひ知人の口添へで、ニユウヨーク市の或る汽船會社に、使ひ走りのメッセンヂヤー・ボーイに雇はれた。何しろ中學校を出たばかりの少年でもあつたし、前途の目的などといふことについては、何等はつきりと纏つた考へもなかつた。只ボンヤリと學問百姓になつて見ようくらゐの考であつた。彼は僅



の金を借りて、或大學の農科へ入學した。學業の餘暇には、進んで色々の内職を引受け、少しばかりの所持金を減らすまいと注意した。冬は、肉屋の手傳ひ、雪かき人夫、又は暖房裝置の罐焚きなどをして居た。夏は夏で、農家の日傭取り仕事に雇はれ、苦學を續けて居る内に、自分の學んだ經濟學が緣となつて、心氣一轉、農業から銀行業へ目的變へをするやうになつた。

○

その後二年も經つた頃、軍隊に入るため、彼は大學を去つた。折しも世界大戰の眞つ最中であつたから、各大學の學生は、事情の許す限り、いづれも軍籍に身を投じた。戰後ダイクマンは陸軍中尉として隊を去り今の銀行へ、事務員に雇はれたのだ。その仕事は下役の簿記係であつた。彼は計算事務に一向不案内であつたが、一度銀行家にならうと決心してからは、それに關係の全科目を、通信教授、その他の方法により、學び得るだけのものを悉く學び盡した。單にあてがはれたものをコツ／＼やつて居たのでは出世が遲い。賢くもそれを知



つた彼は、油斷なく身に學問をつけることを、怠らなかつた。その御蔭で銀行に於ける昇進は、全く目覺ましい程であつた。入行して一ケ月後には、はやくも出納係に進み、上役からは特に目をかけられた。彼は氣をゆるめず、受持仕事をテキパキ處理して、少しの暇があると、上役の仕事を見習ふことに努力した。出納係の上役といへば出納部長のことだ。

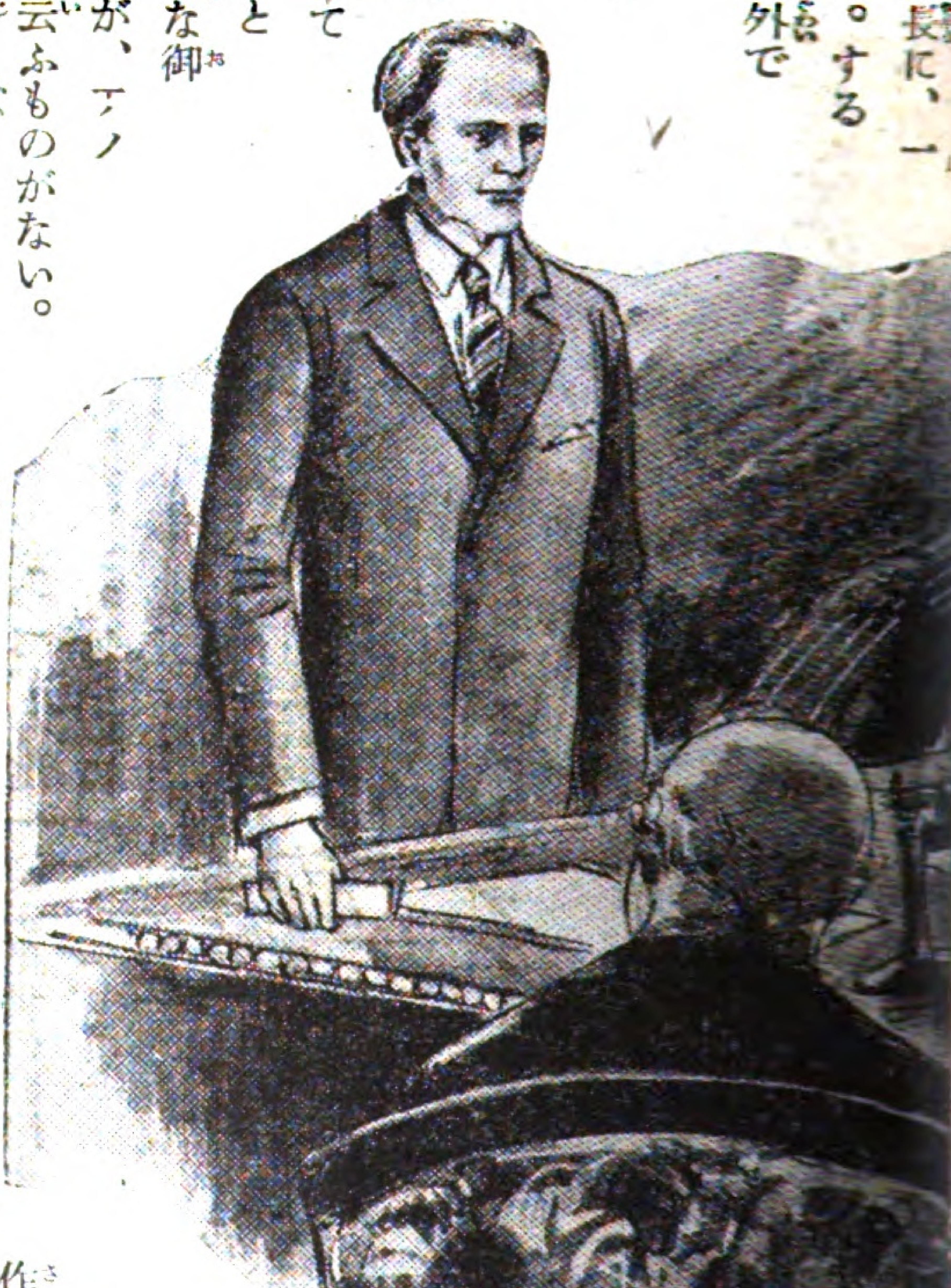
彼は自ら進んで、出納部長の負擔を輕くするやうに心を配つた。事情の許す限り、それとなく部長の肩代りをして、成るべく細かいことには、部長の面倒をかけぬやうに取計つた。斯うした働きが、報いられずには居ない。彼は一年程經て副部長に引上げられ、更に九ケ月後には部長になつた。彼の前任者は、急に他地方の大銀行から招聘されて、一層重要の位置に就くため、職を去つた。

その際、銀行の重役一同は、ダイクマンを部長の後任に選定する事を、少々危ぶんだやうだ。あの若さで部長格に陞すことは、如何にも心元ないとあつ

て、重役達は前の部長に、一應その相談を試みた。するとその答へが寧ろ意外であつた。

『アナタ方は、そう御心配なさるが、私は今日までに、アノ男ほど一生懸命、行務に熱中して働く人に接したことはないのです。妙な御話をするやうですが、アノ男には執務時間と云ふものがない。何時に出勤して何時に歸るといふことは、彼にとつて何の意味もなしません。早出遅引けは、彼にとつて普通のことです。實際この銀行のことなら、ダイクマン青年は、何でも心得て居ます。銀行内外の一切に通じて居るものは、上下を通じ、彼を措いて外に誰も居りません。萬一にもアナタ方が、年齢の問題で彼を私の後任者に御命じなさらぬとすれば、それは銀行に取つて非常な損失です。』

さう言はれて見ると、重役の方でも、前から薄々、ダイクマンの働き振りを耳にして居らぬでもなし、殊に彼のお蔭で、銀行の取引先が、經費の無駄を省くことが出來たなどといふ評判もあつたし、その上銀行内外の人氣も良かつたので、重役一同大に心が動いて來た。



それにしても、進歩發達の著しい、五百萬圓のこの銀行の出納部長たる大責任を、思ひきつてこの青年に脊負はせることは、少々荷物が重すぎるといふ懸念もあつたのだ。其處で一と先づ本人の意向を聞いて見るのもよからうといふことになつて、彼は重役會の席上へ呼び出され、重役會長から無雜作な質問を受けた。

『どうだ、君にこの仕事がやれるかネ。』

彼は一時に嬉しさが込み上げて來た。嬉しいやうな、恐ろしいやうな、何とも言へぬ一種の感に打たれた。

『不束ながら、必ず立派に引受けてお目にかけます。』

と彼は答へた。

○

間もなく彼は、この銀行以外の金融團に、重役を兼ねることになつた。それは彼が、土地の人氣者であり、且又金融の事情に精通して居たからでもある。ダイクマンは銀行の得意先と、

懇親を結ぶことが、格別上手であつた。殊に年長者に對しては、丁寧親切の限りを盡した。自分の若輩未熟が缺點だとすれば、その缺點は親切の力で補へると考へたものだ。彼は進んで得意先の誰彼を問はず、先づ折合ふ事が何よりも大事だと思案した。先方が銀行へ來てくれゝばよし、來ない人には、自分から出かけて親しくするといふ風であつた。腕はあり、態度はよし、かうなつてはどんな苦勞性の人でも、青年ダイクマンを、彼に倍する年輩の老練家にも倍して、業務に明るいと見るやうになつた。

間もなく頭取は引退した。重役會は、その後任者を選定するため、再び開かれた。前の場合とちがつて、今度こそは誰一人躊躇するものなく、擧つてダイクマンを新頭取に選定した。

この青年が、何等の縁故情實によらず、腕一方でかくも目覺ましく出世したのは、前にも記した通り、執務時間を少しも氣にかけず、精根の限りを盡して、仕事を覺え込むことに身を入れたからだ。いつ何時どういふ都合で上役が職を去つても、右から左へその後釜に坐るだけの用意をして居たのだ。

多くのサラリーマンが、常に小成に安んじて上役の仕事を見習ふことをなさず、自分の受持仕事でさへ、碌々心得ずに、單に他人の出世を羨み、何時までもサラリーマン生活を脫し得ないのは、全く社會の罪でも、誰のお蔭でもない。畢竟はその心柄が出世の邪魔をして居るのだ。

三十歳で大學總長

マスターオブアーツ　奈良靜馬

一

千九百二十八年米國教育局の發表に依れば米國で正式に大學として、教育局に認められて居るものゝ數は實に六百五十の多きに及ぶ。若し此の外に設備不完全な低級大學を加ふるならば千にも餘るであらう。其の中一流大學のみを以て組織され居る大學協會に加入を許されて居るもの二十七校、此の二十七校は世界の何處に押し出しても推しも推されも

せぬ大學である。大學中の大學である。其の二十七校の中で其の基金の大なることに於てハーバート、コロンビア、エールに次ぎ約一億圓の巨資を擁するはシカゴ大學である。其のシカゴ大學に於て最近米國の社會に大きなセンセーションを與へて居る事件が起つたのである。それは同大學の總長に新に任命された人が三十歳の若年であると云ふことである。年齢と云ふことを考慮に置かず、實力を將來發揮し得ると思ふ者を拔擢することに於て有名である米國の社會に於ても、三十歳の若年者を大學中の大學と云はる丶大大學の總長に推戴したと云ふことは、さすがに大きな驚異である。



新大學總長は名をロバート・メイナード・ハッチンス（Robert Maynard Hutchins）と云ふ。一千八百九十九年（明治三十二年）一月十七日と云ふに米國ニューイングランド・ブルツクリーに生れた。其の家は代々教育に關係を持つた、英國から移住して來た良い家系である。彼の父ウイリアム・ゼームス・ハツチンスはエール大學の卒業生で現在ケンタツキ州のベレア大學の總長をして居るのである。彼れの母も大學卒業生である。此の夫婦間に生れたロバートは幼にして穎悟十六歳にしてオベリン高等學校を卒業し、次いでオベリ

ン大學に入つた。

二

オベリン大學に於て學ぶこと二個年、一千九百十七年恰も米國が世界大戰に參加した年である。當時十八歳のハッチンス氏は、世界を擧げて大戰の慘禍の中にある時、一學究の徒として、平然として學窓に閉ぢこもつて居るべきではないと思つた。彼れにはそれが出來なかつたのである。彼れは奮然として起ち、米國野戰病院隊に加はり歐洲の戰場に馳驅し、幾多の傷ついた兵士の爲に赤誠を以て看護の任に當つた。殊に一千九百十八年から十九年にかけては伊太利軍に加はり、砲火の中をものともせず、最も勇敢に働いた。それは銃劍を以て戰爭することよりも、幾倍かの沈勇と沈毅を要する仕事であつた。彼れの勇敢なる働きの爲に他の者も、鼓舞され、激勵され怯者も勇者となつた。伊太利政府は彼れの殊勳を表彰する爲に、最高の名譽ある十字勳章を贈つた。

三

一千九百十九年休戰となると共に彼れは米國に歸り再び學窓の人となつた。今度はエール大學に入つた其の時が二十歳であつた。一千九百二十三年に卒業し、その年二十四歳でエール大學の幹事に任命された。之れは異常な拔擢であつた。世界第一流の大學の幹事と云ふものが容易に勤るものではない。大學事務所に來る者は餘りに若い人が重要な椅子に居つて、てきぱき事務を處理して行くのを見て、愉快な氣持で笑ふことがあつた。そんな時にはハッチンスは早く頭が禿げてくれゝば良いのだがと云つて居つた。

幹事の職にありながら法律の研究は相變らず續けて二十六歳の時に法學博士となつた。序に彼れの學生時代の生活に就て一言して置く必要がある。

親が大學總長をして居る位ゐだから學資の如きも充分に貢がれた樣に思はれるが、さうではない。彼れは徹頭徹尾自活の生活をして來たのだ。掃除人となつて床の拭き掃除もすれば、給仕人となつて食卓の給仕もすれば、皿洗ひもし家庭教師もして來た。彼れは其の當時の仕事のことに就て、

『私は私のした樣な激しい仕事をすることを學生に勸め度くはない。若い人の精力を消耗し盡して遊戲精神を殺してしまふ恐れがある。』

と云つて居る。彼が今日運動競技に餘り多くの興味を持たないと云ふのも、芝居、活動寫眞なぞにも興味がなく、娛樂と云ふものがなく、只家庭でその夫人と一人の娘の子を相手に話すのが樂みと云へば樂みと云ふ位なものであると云ふのも、或は激しい苦勞の爲に運動遊戲に費す時間を持たなかつた爲の結果であるかも知れない。

米國の成功者の八割迄は苦學力行の人であることも、日本人の考へねばならぬ問題である。



ハッチンス氏夫妻

四

ハッチンス氏の二十八歳の時に、當時のエール大學法學部部長のトーマス氏が合衆國巡回裁判所の判事に任命せられた。ハッチンス氏は其の後を受けて部長代理となり間もなく正式の部長となつた。尤も其の以前に法學部の教授として講義もして居た。碩學を網羅して居る法學部々長は只の事務家では勤まらない。合衆國政府の法律に關する調査會などに、彼は委員として選ばれ出席し、其の若いのに第一人を驚かし、同時に又其の仕事の出來るのにも人を驚かした。斯くてエール大學で彼れは三十歳に滿たざる學部長、別して米國の大學では法學部は學生修學の年限も長く且つ重要視されて居る、其の學部の長として、立派な働きを見せたのである。

シカゴ大學では昨年總長マークス・メーソン博士が辭職して以來、久しい間總長適任者を物色して居つた。一年後の今日發に白羽の矢はエールの若年法學部長ハッチンス博士に立つたのである。大學の當事者は熟慮詮衡の結果ハッチンス博士に交渉した。博士は之れを受けた。七月一日を以て愈々總長として就任することゝなつた。恐らく世界最少年の大學總長であらう。然かも親子共に同時に大學總長となり、其の子供の方が大きな大學の總長となるなぞは實に珍らしいことである。

米國では三十代で大學總長となつた人は珍らしくはない、前のエールの總長エリオット博士、スタンフォード大學のジョルダン博士、同大學のウイルバ

ー博士が總長となつたのも三十代であつた。其の他にもあるが三十歳でなつた人はない。正にレコード破りである

米國人の人物詮衡の標準は如何に若いかと云ふことでもなく、如何に年を取つて居るかと云ふことでもなく、如何程の仕事をなし能ふかと云ふにある。若きが故に必ずしも取るべからず、老いたるが故に必ずしも捨つるべからず、要はその人の有能なるか無能なるかと云ふことにある。ハツチンス博士此の度の任命も博士に總長としてこの全能を認めた爲である。

吾人は閲歴、經歴、門閥と云ふ物を度外視し、人物本位を以て進む米國の社會事情を見て學ぶところがあらねばならぬ。ハツチンス博士は勿論人物であるに違ひないけれ共、彼れが其の力量を眞に發揮するのは今後にある。彼れの大成は未來にある。使ひ盡した閲歴のある人よりも、之れより使用せんとする精力を多く貯へて居る若い人を、何等の故障もなく起用し得る、米國の社會習慣を面白く且つ羨ましく思はなければならぬ。

嘗て米國大統領であつた、ウイルソンは云つた。米國の特徴は機會の國であると云ふことである。學資なき人も米國では學ばれる機會が與へらるゝであらう、資本なき人も米國では資本家となり得る機會が與へらるゝであらう、位置なき人も位置を作る機會を與へらるゝであらうと。實に機會を與ふることに吝ならざることに於て米國民は正に世界第一である。

五

ハツチンス博士は其の任命を受けた時に押しかけて來た、新聞記者達に云つた。

『新らしいことをやつて見ようとする、機運に私が際會したのである。只それだけのことである、今迄ないことをやつて見ようとする時に打ち當つたのが私である。大學の皆が協力一致でやつてくれると云ふから、自分はそれを何よりも有難いことゝして仕事を進めようと思ふ。』と謙譲の數言を述べたのみであつた。博士の弟フランシス・ハツチンス氏も二十六歳でエール一部の長となつて居り、其の兄はウエスト・ミンスター・スクールの校長である。博士の一家は凡て之れ輝かしい道程を地味にたどりつゝある人のみである。

吾人は茲に博士一家の光榮を頌し、博士の將來を見守りたい。

（一九二九年六月一日北米にて）

蜘蛛の謀計

大なる蜘、檐にかゝりたるを地に落せば、足を收め石の如く成りて死を遁れんことを計る、彼が小智にて人を計らんとす、少しなりとも走り遁るれば、その程も命存すべし、彼が謀計は人よく知れり。彼は思ふべし、人は知らじと、無智の人、有智の人を計ることも蜘の謀略に同じ。（澤庵和尚『玲瓏集』）

立志物語

二つの誓

大畑良彦

『ではこれを買ひますよ。』

客の老婦人が眼鏡の目を凝らして見極めた一つの鰹節を風呂敷に包まうとした時、恰度歸りゆく他の客へ愛想よく禮言葉を浴びせてゐた二十六七の主人は、振向いて、

『鳥渡お見せ下さい。仕入れに隨分氣を付けるのですが、それでもつい見落しの疵物がありますので。』

正直に斯う言つて、主人はその鰹節を手に受けると、客よりも克明に檢べてゐたが、

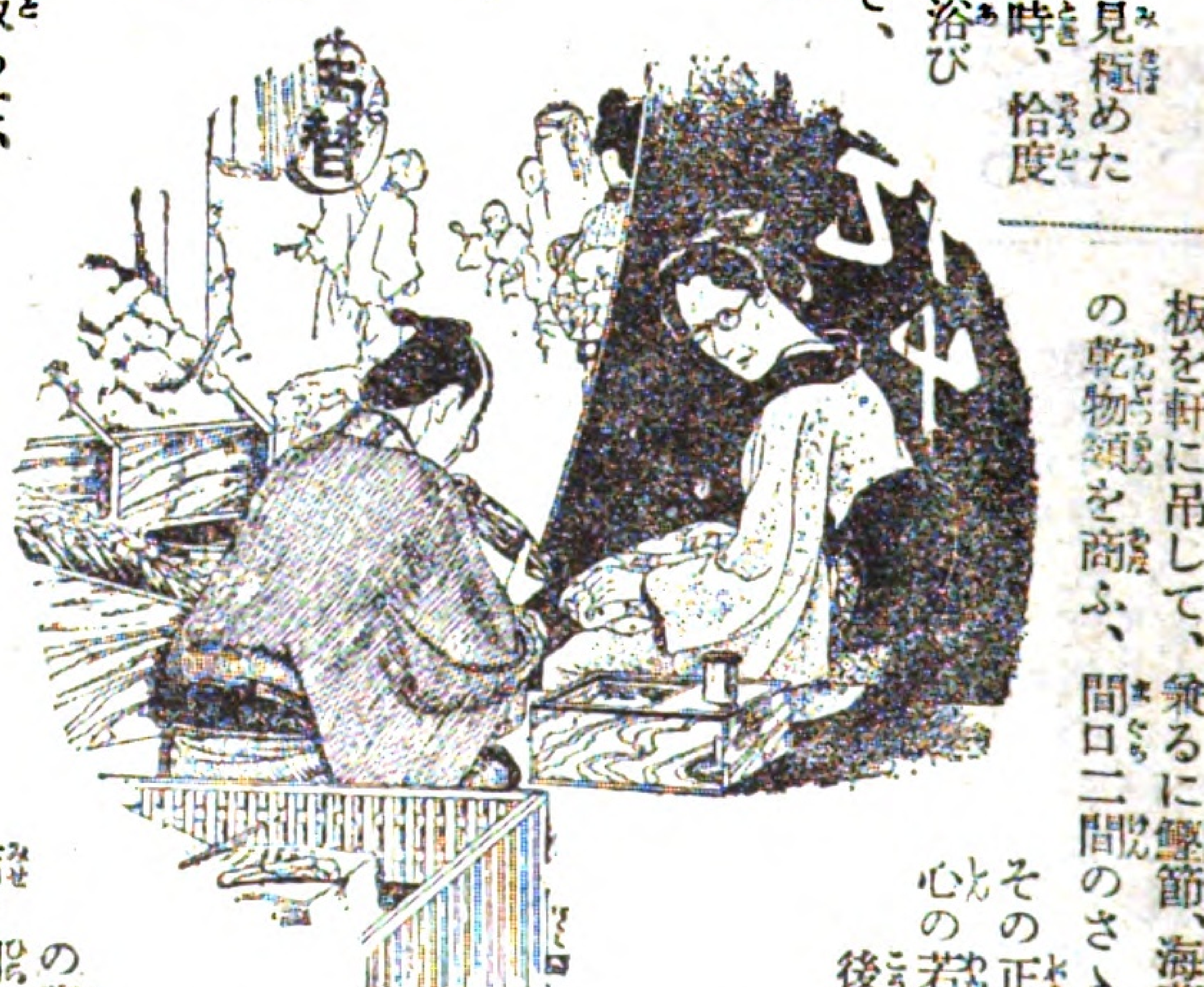
『そら矢つ張り……これだからうつかりお渡しできません。』

見ると、それはあるかなきかの虫食ひだつた。

そして改めて老婦人に別のを選り取らせ、それを又主人は微細に檢べて言つた。

『これなら申分ありません。有難う御座います。』

そこは繁華な人形町通り。小さな兩替の看板を軒に吊して、飾るに鰹節、海苔、砂糖などの乾物類を商ふ、間口二間のさゝやかな店。



その正直な商賣熱心の若い主人は、後年の大富豪安田善次郎翁だ。

善次郎翁は、老婆一人小僧一人を雇つて、二十五兩の資本でその店を開いた時、心に二つの誓ひを立てた。

第一　いかなる場合と雖も嘘僞りをもつて自分の都合よきを圖り、他に迷惑かけるが如きは斷じてなすまじき事

第二　いかなる事にも身分不相應の生活は斷じてなすまじき事、而して生活費は收益の十分の一を越えざる事

かくて善次郎翁は、第一の誓ひを堅く守つて、たゞの一度も粗惡な品を賣つた事がなかつた。從つて客の信用、人氣は日に日に高まつて、目覺ましく繁昌して來た。そして一年たゝぬうちに二千兩の資金を築き上げた。

ある日、善次郎翁は、近所に間口二間半土藏附の賣家を見たので、値を尋ねると四百三十圓だといふ。いよいよ繁昌して店の狹さを痛感してゐる折柄、すぐにも買取つて移らうと思つたが、逸る氣を凝つと抑へて、その晩愼重に算當してみると、その店では生活費が收益の十分の二かゝる。僅か一の違ひだ。商賣の隆盛の際、それ位すぐ取返せる――と思つたが、又ふかく考へ直した。

『今日のこの繁昌も第一の誓ひを守つたからだ。それを思へば、第二の誓ひも固く守らねばならぬ。よしや僅であらうとも、誓ひを破ればいつか身を亡ぼす。耐へよ、耐へよ。』

と、われとわが心を嚴しく戒めて、從來の店を動かなかつた。後年、財界に荒れ狂ふ嵐の中に、安田家が磐石の如くゆるがなかつたのも、善次郎翁のこの正直と手堅さとの誓二つにその礎を築いたからである。

大成功の要諦は茲にあり

日本興業銀行總裁 鈴木島吉

嘆はしき青年の告白

ある青年が、私のところへ來て、こんな事をいつた。

『私は何うも運が悪い。最初勤めたT會社は、日本一流の電氣會社で、紹介者もその會社の專務取締役でしたから、出世は望みの儘だと大いに期待してゐたのに、突然、その專務が死んでしまつたのです。力と恃む人を失つたのみか、却つて××專務系といふ色彩が強いために、新專務系からは繼子扱ひされて、ぴたりと出世の道が鎖されてしまひました。そこで私は、種々運動した結果、第二のD會社に、有利な條件で勤めることになつたのですが、この會社は數年にして破産してしまつたのです。さあ、そうなると、私も前途を急ぐ心になつて、何でも構はず取付いたのが今の會社ですが、入社して見ると、實に驚きました。月給は安い、勤務時間は長い、それに資本も少ない、まあ個人の商店程度のものですから、人聞きも悪い。私は、何とかしてもつと立派な就職口を探して、大いに成功を期せねばならぬと思つて居ります。』

聞いて見れば氣の毒な話ではあるが、こんな境遇の青年が世に幾らもあるのではなからうか？ 否、この青年の告白こそ、現代の青年に共通な悪弊を悉く曝露してゐるのではあるまいか？

重役などの後楯に縋つて出世しようといふ依賴心、尠し出世の道に故障が起き

古今偉人智慧物語

真の智慧

德川吉宗がまだ將軍にならず紀州にあつた頃、幼少の小姓を多く召し使うてゐたが、或る夜のこと、湯殿に剃刀を忘れたから取つて參れと、今年八つになる小姓二人にいひつけた。兩人畏つて湯殿に行つて見たが、灯は消えてまつくらがりである、いかにしたら見つけることが出來るかと思案にくれたが、ややあつて一人が『じつと坐つてくらがりを見てゐたらおのづから分るだらう』といふと片方が、『暗がりをいくら見てゐたとて分るものではない』いや〳〵左にあらず、心氣しづまれば必ず剃刀の光が明らかに見える筈だ』すると片方はからからと笑ひ出し、『よい方法がある』と湯殿の



ると、直ちに他の道に轉々する、確固たる精神の缺乏、また執務時間が少なく、月給が高く、人聞きの好い仕事を望む精神、何れも世に立つ青年としては寒心に堪へぬものばかりではないか!? 何故、自分の力を恃み、至誠を後楯として出世しようとはしないのだらう? 尠し位の感情問題などは隱忍自重し、三年五年出世の遲早に惑はず、堅忍不拔の精神をもつて最後の大なる勝利と凱歌とに猛進しないのであらうか?



日本興業銀行總裁
鈴木島吉氏

不可能事さへなされた

私は、英國の大宰相ヂスレリーの傳を讀んで、彼が、この青年と全く反對の道を歩んだことを思ふと、實に感慨深い。

ヂスレリーが、初めて自分の大抱負を口にしたのは、彼が二十歳の時であつた。ピール首相から、

『君は將來何になる積りか?』

と質問された時、ヂスレリーは昂然と答へた。

『大英帝國の總理大臣!』

併し、ピールには、それが青年特有の空想としか思はれなかつた。

『それは君止し給へ、英國の首相となるには、まづ劍橋か牛津兩大學出身でなくてはならぬ、また首相たらずとも政治家になるには莫大の金が要る。それに君は猶太人だ。望んで得べからざるものは、初めから望まぬが悧巧ではないか!?』

ピールは親切に説諭した。併

板間をとんとん足拍子で踏んだ。するとの方でカタリと音がした、そこを手探りで探つて見るとたしかに剃刀があつた。それを持ち歸つて吉宗に差し出すと、吉宗は[illegible]そのわ踏んだことを聞いてそのまゝ奥へ[illegible]。お側の者達は小姓の智慮を大人も及ばぬと云つていたく褒めそやした。

程たつて吉宗の上意に、

『いや〳〵必ず彼を褒めては相成らぬ。智慮がすぎて却つて危い。實に上々の智慧といふはも一人の小姓のふるまひだ。心を靜めたら分るとは至極落着いた仕方と思はれる、足拍子を踏むのは頓智とはいひ條、若しその下に剃刀があつたらどうする、立所に傷を負はねば相成らぬ、かゝる智慧は眞の智慧とはいひがたい、一同成程と感じた。

紙の手錠

北條安房守が江戸奉行の時、或る家に伯父甥で家督爭ひをした。甥は漸く六七歳であつたが、その家の番頭並びに親類の者が家督をさせようといひ合つてゐた。

安房守は兩人を呼び出し、先づ叔父に手錠をはめ、次に甥に手錠の代に紙をよつて結び封印を押した、その上双方の親類縁者名主に

し、ヂスレリーは、冷笑して、それに耳も貸さなかつた。

『學閥、人種的偏見、金……そんなものは、今に見ろ、俺の意志の力と情熱とで焼き盡して見せてやる！』

ピールから不可能と刻印を打たれた人生の大事業に、ヂスレリーは猛然と突進した。金のないために、彼は辯護士にもなつた。著述もした。代議士となるまでに幾度か落選もした。然し、鐵の如き彼の意志は、失敗や困難の灼熱の火に焼かれる毎に、益々その地金は鍛へられ、硬度を増し、初一念の遂行に敢然と奮起して行つた。

隠忍三十年、彼は遂に大英帝國の首相となり、保守黨の首領となり、ビスマルクをして恐るべき敵手と叫ばしめるに至つた。

ピールの刻印を打つた絶對不可能事さへ、ヂスレリーは成し遂げた。否、堅忍不抜の精神こそ猶太人のヂスレリーを、大英國の宰相たらしめたのである。何ぞ一小會社の幹部たらんと欲する位の事が、不可能であらう？

不平をいふ前に先づ努力

私は常に兩親に感謝してゐることが四つある。それは、學生時代に贅澤に使ふ金を一錢も與へられなかつたこと、必要な教育だけは授けられたこと、強健な身體を享けたこと、最後に、性格的に強い忍耐力を授けられたことである。

私は生まれながらの神童でなかつた事を喜ぶ。才氣煥發の青年でなかつたことを、却つて幸福だつたと思ふ。

學校卒業後三十年、私は正金銀行から一歩も他の仕事に足を向けなかつた。凡愚であつた爲めに、破天荒な大成功などを夢みたこともなかつた。刻苦淬礪、こつ〳〵と牛の歩みを續けたお蔭で、遂に副頭取の椅子を與へられた。才氣あり、功名心に燃え、成功を急いで、却つて失敗した人々に較べて、私の遲足は却つて成功であつたと思ふ。

その後、私は朝鮮にも行き、また現在の興業銀行に轉じたが、これは私の意志

向つて兩人共その方達に預けるからそのつもりで大切にあしらふがよい。且つ兩人共封印を少しでも汚したら預かり人一統同罪であるぞと申し渡した。



皆々はつと御受けをしたが、よく考へて見ると甥は幼年のこと故唯泣くばかりだから涙で封印が汚れるのは分り切つたことである。さうすると一同へ預けられたのだから罪は一様に蒙らねばならぬ、これは困る、とそこで双方の親類縁者が打寄つて相談の上、甥に家督させるのが本筋でございますからと、伯父の方から折れて出た風にして封印の解除を願ひ出た。

安房守の方ではもと〳〵そのつもりであつたが、奉行所から甥に家督を申しつける時は伯父の側が自分の私慾をかへり見ず後で訴へ依怙の沙汰をしたと恨みは一入、熟談づくで極めさせたがよいといふので巧みに計略しことであつた。

ではなかつた。寧ろ老後の樂しみとして、求められる儘に轉々したので、そこに功名心も覇業欲もない。

自分でいつては、自畫自讃の譏もあらうが、兎に角、銀行家としての私は、成功したものと思ふが、その成功が專ら堅忍不拔の精神が齎らして呉れたといふことは、青年諸君の大いに參考にならうと信じるのだ。

冒頭に掲げた青年の如く、『私は運が惡い。』とか、『惠まれない。』とかといふ嘆聲を、私はよく、青年の口から聞く。成程、多くの青年は惠まれてゐないであらう？　併し、惠まれぬからといつて愚痴を零し、泣言を並べ、甚だしきは親を恨み、人生を呪咀する者に至つては、愚の骨頂といはねばならぬ。

『貧乏人の子は、人一倍に働く外はない。學校へ行けぬものは、刻苦して獨學する外はない。』とは、後年の寫眞機王にして、世界の大實業家となつたヂョーヂ・イーストマンが、十四歳の時の覺悟であつた。彼は不幸や逆境を呪咀する前に、自己の享有する唯一の力、即ち努力を見出したのだ。そして、堅忍不拔の精神で、よくその努力を續け、遂に大成功をしたのだ。何故惠まれぬ青年達は、惠まれぬと嘆ずる聲の下から、

『努力しよう!!』

と、絶叫しないのだらうか？　惠まれぬと打萎れるに先立つて、『やるぞ！』と、一歩足を踏み出さぬのか？　困難や失敗に衝突して退却する代りに、じつと踏留まつて、逆襲の準備をし、それらを突破しようと大覺悟をしないのだ！

畢竟意志が弱いのだ、才氣があり過ぎるのだ、成功を急いで、短兵急にこれを得んとするからだ。併し、それでは眞の成功は得られない。

成功は僥倖ではない。短兵急に得た成功には無理がある、不自然である。織田信長や豐臣秀吉の成功がそれである。成功と同時に崩れかけてゐる。『人の一生は重き荷を負うて遠き道を行くが如し、急ぐべからず。』と、自他共に訓誡した徳川家康の成功には、三百年間貧乏搖ぎもし

家康の深慮

徳川家康が鷹狩に出た時、或る在所で、お供の者にむかひ、今年は麥が豐作だ、そのわけが分るかと尋ねた、誰も存じませぬと答へると家康は、

『總じて麥の莖が左へよれて見えるときは作の出來が惡い、右へよれて育つ時は必ず豐年だ。それ、あたりの畑を見よ、どれも右へよれてゐるではないか。その上見受けるところ百姓の幼き子供達の氣ざしがいかにも達者だ、これは母親の食物がよいから乳が澤山ある故と知るがよい、又芋藏とても去年の芋を積みそれに土をかけ置いたものが、まだ崩れずにゐる、定めて養ひが豐かと思はれる』と云つた。誠に天下を治めるほどの人は下下のことまで委しく知つてゐなければ叶はぬこと、それ故かりそめの鷹狩もたゞの遊興ではなく皆民情をたづねるよすがである、とお供の者は今更のやうに家康の深慮に恐れ入つた。



ない確乎とした地盤が築かれてゐた。それでこそ眞の成功といへるのだ。現代の青年は、餘りに信長式であり、秀吉流でありはせぬだらうか？

報酬のみに目を注ぐな！

また物質文化の齎らした弊害として、現代の青年は餘りに報酬に重きを置き、自分の働きを評價しようとしない。人聞きの好い仕事で、執務時間が短かく、金の澤山取れるところを覘ふのが、現代の青年共通の心理ではなからうか？報酬よりも先づ自分の努力、技倆、價値等を高めることを考へねばならない。

その點では、私は、社會制度にも誤りがあると思ふ。月給なども單に勤續年限や勤務時間に標準を置かず成された仕事の價値に相應するものを支拂ふべきだと思ふ。現在諸會社で出す賞與がその意味であるが、まだ階級意識に囚はれてゐる感がある。技倆本位なら、船長よりも月給の高い船員があり、支配人と同じ給料をとる社員があつても善い筈だ。

石田三成が、自分の半地を裂いて、島左近に與へた如く、腕次第では必ずしも階級に囚はれなくても善いではないか？そうなれば自然、腕を磨き、技倆を尊ぶ眞價のある人間が續々出て來ると思ふ。

併し、理想的には行かぬとも、現在の狀態でも、矢張技倆と至誠とは最後の勝利を得るものである。單に報酬のみに重きを置き、自己の働きを考へぬから、不平不滿も起り、會社から會社へ、一仕事から他の仕事へと轉々するやうになる。しかも、何處にだつて、働きなくして報酬を與へる仕事はないから、遂に滿足を得ぬのみか、最後には自分の同輩で無能と嘲つた者に、却つて追ひ越される悲慘さへ見ねばならぬのだ。

餘りに物質文化の榮えた國民は滅びる、餘りに精神文化の盛んな國民も滅びる。物質文化と精神文化とが兩々相伴つた國こそ、眞に健實な文明國である。

物質を求めよ！　その一方に堅實な精神の練磨をせよ！　それが私の極力主張するところである。（をはり）

物も言ひやう

紀伊大納言頼宣は器量の人で、その一言一行はよく人の心を感動させた。

或る時、岩手へ行く道中、駕籠先のお供をしてゐた若者の脚絆草鞋のはき様がいかにも下手であつたので、頼宣は駕籠の中からからからと笑つた。すると駕籠側にゐた吉見喜左衛門が若者に聲をかけて、脚絆草鞋のはきやうの下手なのは平生の心掛が惡いからだとさんざんに罵つた。



頼宣は俄に不機嫌になり、『やあ喜左衛門、あの者の先祖は城主大身の者と見受ける。その子孫で草鞋立の奉公をして居る故に下手なのは當り前ぢや、さり乍ら』と今度は若者に對ひ『大將も馬から下りて下知をする事もあるものぢや脚絆草鞋はしつかりとはきつけたがよいぞ』と云つた。若者は思ひやりのある頼宣の言葉に感涙を流した。ものは言ひ方である。

文豪逸話

田舍教師

小田吉郎

『只今、先生の御謦咳に接したいと申して露西亜人が一人參りましたが、如何いたしませう。』

西暦千八百六十年の秋の或日、獨逸ドレスデンの農民小説家アウエル・バツハは、召使に斯う取次がれると、机から振向いて、

『名は何んといふのだ？』と訊く。

『オイゲン・バウマンと申しました。』

『何！ オイゲン・バウマンだつて？』

バツハは駭いた。眞個駭かざるを得ないのだ。何故なら、オイゲン・バウマンとは、彼の傑作『新生活』に書いた人物の名であるから。――その小説は、主人公オイゲン・ファルケンペルヒ伯が、小學教師オイゲン・バウマンに諸國漫遊の費用を與へて旅立たせ、自身オイゲン・バウマンの假面をかぶつて農民の兒童を訓育教化するといふ筋なのである。



レオ・トルストイ翁

軈て、バツハは言つた。

『ともかく會つてみよう。すぐこゝへ通せ。』

頓て、その露西亜人は召使に案内されて書齋へ這入つて來た。そして、勸められた椅子にかけると、極めて眞率な口調で言つた。

『私は先生のお作の愛讀者です。殊に「新生活」は何遍繰返して熟讀したか知れません。私は感激のあまり、オイゲン・バウマンのやうに、私の故郷の片田舍に小學校を建て、農民の兒童を集めて理想通りの教育を始めましたが、するうちに何んだか斯う、自分がオイゲン・バウマンだかオイゲン・バウマンが自分だか、自分乍ら分らなくなつてしまひまして、只今もお玄關に立ちました時、我れ知らずオイゲン・バウマンと申上げてしまつたやうなわけです。』

バツハは、曾てこれほど熱烈な愛讀者を見たことも聞いたこともないので、非常に感動した。

『で、貴方の御本名は？』

『私は斯ういふものです。』

と、露西亜人はポケットから一葉の名刺を取り出してバツハに呈した。それには住所ヤスヤナ・ポリヤナ村、伯爵レオ・トルストイとあつた。

後年、トルストイが描いた農民小説の、バツハのそれを凌駕して正に完璧と稱せられるのは、彼の豐かな天分によるとは言へ又一面、バツハが空想によつて書いたところを伯爵の榮位に傲らずして、自身田園の小學校に教鞭を執り、そして農民の兒童とその家庭に親しみ、眞に體驗したところを書いたからである。

雲

西條八十

夏の日、海に湧く雲は
眞白き薔薇に似たるかな、
夕となればその薔薇の
はかなく散りて、ちり〴〵に
白帆となりて歸りくる。

半田良平

ビルディングのうしろの空に正午過ぎ
てむらがる雲は光含めり、
西空に晝より立てる雲の峰月夜となり
ていまだ見えをり。
宵の程街空ひく〳〵行く雲はサーチ
ライトに照らし出されぬ。

平山蘆江

出船の汽笛に、入道雲の、目玉が
光つた、涙雨

◇

待てど來ぬ日は、莨のけむり、山
までつゞいて、ちぎれ雲、

三木露風

夏雲重疊し
峰の上にありて白し。
ああ盛りなる八月には
そをば見て雄志湧くなり。
湖上白帆泛び、
青嵐吹きて涼し。
雲か峰か、峰か雲か、
眞晝の灼熱しけれども、

男性的なる美に、
心頭自ら涼味を覺ゆ。

伊東深水畫



高島平三郎

久方の空のあなたに一ひらの雲かと
まがふ不二の遠山。
見はるかすみどりの野邊の空高く
ちぎれ〳〵て白雲の飛ぶ。

一刷毛に神やゑがきし大空のはてより
はてにわたる白雲。

矢野錦浪

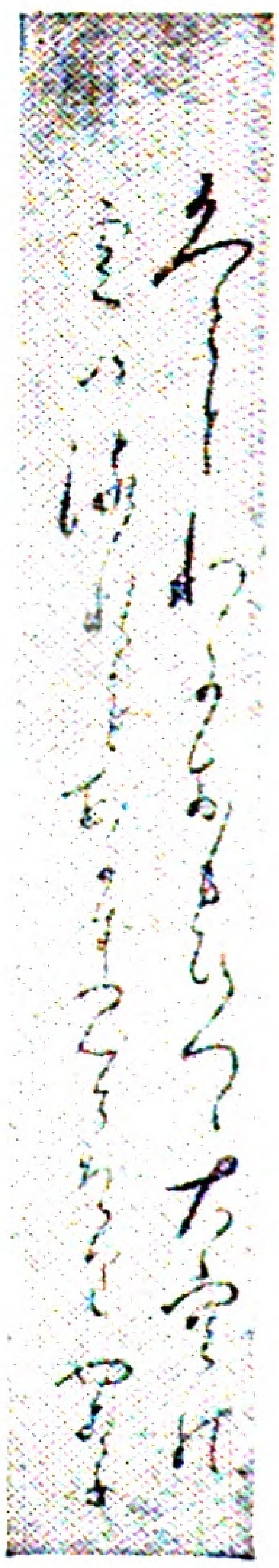
雲の峰こんどはあんな型になり。
富士の山雲の無い日は淋しさう。
あべこべに馳け出して居る月と雲



小寺健吉畫

前田鐵之助

いたゞきは朝日に映ゆる足柄の
谷間に夢とたゞよへる雲。



三宅やす子筆

山の上に
雲ゆく、雲ゆく、
その大いなる靜か
さ、大らかさ
見つゝあれば心また力にあふる。

× ×

嵐雲
北に流れてとゞまらず
あゝ雲、雲、
爾の流るゝは杳かなるかな。

相馬御風

紺碧の海のあなたの雲のみね
ながめつゝひとりけふもわがあり。

沼田笠峰

濃き雲のやゝに霽れゆき靄のごと
見はるかすなる大島の山。

○今なほ病床にあり

かにかくに病いえなば白雲の
銮祖くごとくあらむとぞ思ふ。

安倍季雄

春五月、松花江の驛頭で見た夕雲はまたなく美しいものであつた何方を向いても地平線、ゴビまで續くといふ其の地平線の一角にフハリと浮いた雪の樣な綿雲が、一つ一つパッと夕榮した美しさ。ラスキンならでもと思つた。



大醜女物語

本田美禪
挿繪　磯田長秋

また見えた！』小雪は手を擧げて指差しながら、ほと〳〵感に堪へたる樣子で、『あのへの字狀にむつくりしてゐる丘の頂きを南へ向つて、宙を翔ける同じ毛並の馬の一群があるじやらう』

怪童と悍馬鬼鹿毛

『十二三の男の子が獨りで馳を追うてゐるのじやが……。それ

『へえ御ざいます』

『成程どあの中の一匹に子供が乘つて居りますな』と山達とお袖も、小兒を見出して驚嘆してゐる。

『那れじや、あの捷さは什うじや！』

『まつたく巧く乘りますな』

『然も裸馬に乘つて居り、周圍にはあのとほり十頭からの馬を從へ、競馬でもするやうに、一束になつて走つてゐるのじや。乘つてゐる馬だけは、騎手次第で什うにでも走らすことの出來るものじやが、周圍の馬を意のごとく――手綱をつけて引いて行くやう自由自在に操つつて、一緒に飛んで行くなどといふ藝當は出來ないものじや。實に不思議じや。や、またあの丘の間へ隠れた！　それまたあの丘の頭へ登つた。あの模樣ではあの邊は丘と谷と、谷と丘とが、二三町毎に起伏して續いてゐるやうに考へられるが……。それまた谷へ隠れてしまうた。それまた丘の頭へ登つた。何といふ自由自在な乘樣をするものじやらう！　今度はずツと緩傾斜に、あのむく／＼と煙を吐く阿蘇の麓まで續いてゐる高原へ出たやうじやから、暫くはあのまゝで姿を見せてゐてくれるであらう。もう一里足らず慥かに行つたの。大分影が小さくなつたで――六爺や！』

『ねい／＼』と案内に來た老爺は馳け寄る。渠は水田尾の小百姓だが、正直律義一遍の者。で、矢部の庄屋何がしの推薦によつて先月以來、新領主領内の檢分の都度案内者として供されることになつてゐる。名は六爺やで通つてゐるが、六右衛門かその通稱なのだ。

『あの澤山の馬を引きつれ、一例で馳を追うてゐる小兒はどんな素性の者じや』と小雪は訊ねた。

『あの餓鬼は手前同樣、水田尾の者で御座りますだが、唯今では孤兒で、世話する者も御ざりませんので、牧場の小屋で寢起して、この北の埒の馬を預り、馬同樣にこの原で暮して居る者で御ざります』

『ほう孤兒か』

『然やうで』

『馬は大變に達者なやうじやの』

『ねい、其りやアもう』六爺やは眼を舉げて、見かすむやうな高原の果まで行つて引ツ返して來る――豆粒ほどに小さく見える馬群をちよつと見てから續けた。『何しろ貴下六つの時から上手に乘つた腕白者でな、矢部三郷に那奴ほど達者に乘る者は大人にも二個とありはいたしませんです』

『六つの時から達者に乘つたか』

『ねい。其れについて不思議な話説が……。今でも爰ら界隈の話説の種になつてゐる事があつたので御ざります』

『どういふ事がの』興ありさうに小雪は訊ねた。

お袖等も六爺の萎びた口元に注目してゐる。

『其れは駒市が五つの時にな――あの餓鬼の名は駒市、然う申すので御ざりますだが』と六右衛門はちよつと斷わり、『もう其の頃から馬が好きでな。兩親に連れられて、野良へ出てゐる間にも牧場へ來ては馬を見てゐて、日の暮れるのも知らないでゐるやうな餓鬼で御ざりましたが、その頃薩摩から取り寄せた、種馬にする牝馬の中に、矢部の鬼鹿毛と綽名を呼ばれた――今、駒市が乘つてゐるあの鹿毛のことで御ざりますだが』眼を擧げてまた馬群の方を数へるやうにちよつと見てから、『あれは貴下牝馬のくせには、恐し駻強で、其れにその頃はやつと七歳、元氣盛りの荒馬で手に了へなかつたので御ざります』

『成程、幹も大分高いの』

『ねい、トキ四寸(五尺四寸)ほど御ざりますだよ』

『其んなにあるかの』

『ねい』六右衛門は、ぴよこりと行つて、『で、側へ寄れば蹴仆されたり、咬ひつかれたりいたしますので、牧場の者も持てあまし、那奴だけは嚴重に、別に拵へた檻へ入れ、さかりのついて來たときばつかり、牡馬をその中へ追ひ込んで、尾ましとつたので御ざりますだが、或日あなたあの餓鬼が、どうして那れに乘ツかつて檻から飛び出してしまつたものやら、高畑の方へ歩いて行つた姿を見たといふ者が、村へ飛んで來てその事を知らしてくれたので御ざります』

『五つの時じやな』

『ねい』六爺やはまたぴよこりとやつて、『で、村中は大騷ぎ、もう今頃は命はあるまい。探しに行つたとて駄目かも知れぬが、まア兎も角も行つて見ようと、村中の者が總出になつてな、捻鉢卷で押し出しましたが、御覽のとほり大矢野は十里四方の高原で、その間には十丈以上の深さの谷も胆斗ありや、谷川もまた胆斗あり、舟でなければ越すことの出來ない許も御ざりますだで、一刻や二刻で探せるわけは御ざりませんです。で、竹法螺をぶう〳〵吹いたり、太鼓をどん〳〵と叩いたりして、躍起となつて探してゐますと、恐ろしい夕立がやつてまゐつたので御ざります。いふまでもなく夏のことでな、拳ほどの雨粒がじやん〳〵と降る間には、雷は鳴る、稲光はする。見る〳〵うちに谷川はみな一ぱいと水となり、下手をすると水田尾へ歸れぬやうになりさうな鹽梅なのでぶツ魂げ、駒市のことは放つておいて一同大急ぎで引揚げましたが、其の時はもう高原一面眞闇くなつて居りました。勿論風も凄じく、近年にない荒れ方で、村でも納屋を吹き飛ばされたり、土手や石崖が崩れたりして、大騷ぎしてゐましたが、その中に日は暮れて、夜は段々と深けて來るのに、一向夕立は止みませぬ。この鹽梅では本當の時化になるのではないかと思つて、村中一同、心配をして居ります

と、その曉方のことでした。駒市の家の表の雨戸をどん／＼叩く者がある。拳固で人が叩く音はから何所となく違つてゐるので、駒市の親父仁平が、怪しみながら訊ねて見ますと、まア貴下什うでせう、ひゝゝゝん！といふ馬の嘶聲！雷は鳴る、稻光はする、雨もまだ横ツ仆しにじやん／＼土砂降に降つてゐる其の中でもつて物凄い其んな嘶聲が聞えたのです。他人は時化におッ魂げ、駒市の事は忘れてましたが、肉身の兩親は案じて泣いてゐたとこですから。事によると鬼鹿毛が……？と思つて、がらり雨戸を開けると、大きな馬の鼻づらがその眼の前へぬつと出ました。見覺えのある鬼鹿毛が、案の定雨戸の外に突つ立つてゐたので御ざります』

大雷雨の日の出來事

『馬だけが歸つて來たのか』と小雪は訊ねた。金覆輪の鞍上に悠然として跨つた體は矢はり其のまゝに、老爺の前に愛馬の頭を眞直に立てゝゐるのだが、覆面中の涼しい瞳は、起伏する丘陵を馳け登り走り降つて、豆粒ほどに見えてゐた姿を段々と擴大して來る馬群の狀を折々見てゐた。

『いえ』六右衛門は藥罐頭を横に振つてから言葉を續けた。『不斷だと人喰馬と評判取つた恐ろしいのが眼の前に立つてゐたのですから、ぶツ魂げて腰でも抜かして、平太張つちまふところでしたが、子供のことが御ざりますので、仁平めは夢中になつてな、お品、鬼鹿毛が歸つて來たぞよ！と嬶を呼んだので御ざります。と、その鼻先へ鬼鹿毛が、今嘶く時に地べたへ置いた子供をぐいと口でくはへて、さアといふやうに出したので調べて見ると駒市はずぶ濡になつて死んだやうぐつたりとして居りました。その模樣から察すると、子供は馬に啣へられ、水の出た谷川を何ケ所となく越して來るうち、氣が遠くなつてしまつたやうに思はれるので御ざりましたが、何にしろ命が助かり、歸つて來てくれたので仁平夫婦は狂人のやうになつて欣びましたゞ。さア其れからの駒市の評判てふは太豪いもんでな、あの兒には神樣が憑いてゐらつしやるに相違ない。其れでなくて鬼鹿毛が喰つてしまはずにのこ／＼と啣へて歸る筈がない。大人でさへも食殺したり蹴仆したりする悍々馬だ。第一神妙に駒市を乘せて行つたのからして不思議だ。不思議だ不思議だといつて其れから此方、駒市には神樣が憑いてゐるものと極めてしまつて、惡戯しても親父は勿論、村の者も我を折つて小言をいはないでゐたものですから、惡さは段々と激しくなつてな、箸にも棒にもかゝらなくなつてしまつたので御ざりますだが、何しろ貴下誰一個乘る者のない鬼鹿毛を、駒市だけは猫の子を扱ふやうに乘り粉し、六つの時から今年まで牡馬を鬼鹿毛に尾ける時には、渠奴一個して面倒を見て、他人にや世話を燒かせ

ませんので、牧主初め村中一統、兜を脱いでしまひましてな、今では貴下あの餓鬼がどんな亂暴を働きましても打ッ棄つとくので御ざります』

『亂暴するツて、一體どんな事をいたすのだ』默つて聞いてゐた出逢が訊ねた。

『どんな事でもいたしますので、假令ば餘所の成物は手當り次第に取つて喰べます。畑の物も手當り次第にどし〳〵持つてまゐります。他と我との見界がまつたくこの餓鬼には御ざりませんので、明神様の神主様でも、南泉寺様の和尚様でも、お庄屋様でも村役衆でも、自分同様に考へくさつて頭を下げんので御ざります』

『其んなに増長してしまつてゐるのか』

『ねい。何にしろ神様が憑いてゐるものと思つてゐるので、どんな者でも那兒の眼からは偉く見えぬので御ざります』

『困つたものだな』

『尤も其れは三年以前に、引續いて兩親に亡られてから構ひ手がなくなつたもので御ざりますから、尿やけになつて特更に亂暴し出したのでも御ざりますがな、唯今では牧場の小屋をわが住家として馬と一緒に寢起もすれば飲食もして、馬同様な口すぎをして居りますので御ざります』

『親類なども一個もないのか』

『ないわけでは御ざりませんだが、お話說したやうな有様ですから、構つてやらんので御ざります』

『話說の模様では珍らしい子供のやうに考へられるが、引き連れてゐるあの馬は』小雪は手を擧げて今はもう四五町先の丘の上まで引ッ返して來た奔馬の群を指差しながら老爺に訊ねた。

『どういふ質の馬なのじや』

『そ、其の事で御ざります』六右衛門も眼を擧げて馬群をじつと見ながら答へた。『是れもまた一つの不思議で、六七年來當地は勿論、恐らく九州一國の大評判となつてゐる事柄なので御ざりますだが、あの十匹の大鹿毛は、みな駒市めが鬼鹿毛に産ましたものなので御ざります』

『ほう其れは妙じやの』

『全く妙で！』と老爺は頷き『總じて馬といふものは仔を一匹しか産みません。時とすると二匹仔を儲けることも御ざりますだが、まア大概は一匹と極つたもので御ざりますのに、あの餓鬼めがついてゐて、牡馬をあの馬にかけますと、極つたやうに二匹づつ仔を産みますので御ざります』

『成程其れは不思議な事じやな』

『で、五年續いて二匹づつ産れたもので御ざりますから、那アして都合十匹あるので、あの中での若いのは三歳駒で御ざります。



『其れにまだあのやうに』感嘆しつゝ小雪はいつたが、今十頭の駿足が、母なる馬と鼻を並べてその燃ゆるやうな光澤のある、赤褐色の綺麗な毛並を煕煕たる春日に輝かし、自分の前を眞一文字に馳けぬけて行く姿を見ると、『どれもみな逸物らしいに、什うして餘所へ售らずにあるのじや』

『駒市めが放しませんので』

『とすると鬼鹿毛は、もう大分の老馬じやの』

『ねい、十二歳で御ざります』

『で、那アやつて引き連れて、毎日遊びくらしてゐるのか』
『ねい』六右衛門も奔馬の群をまた眼を擧げてちよつと見てから、『何にしろ今はもう山猿同様な人間と、いえ、人か馬か分らない僮となつてしまつてゐるので、食物なども木の芽だの、草だの食つて平氣な面して生きて居りますので御ざります』
『不思議な事を聞くものじや。おーい、駒市！』手を擧げて鞍壺に伸び上るやうにして小雪は呼んだ。その時はまた奔馬の群は、引ッ返して來て吾等を去ること一町ほどのところにあつた。

伯樂よく馬を相る

『お止しなさいまし』六右衛門は慌てゝ止めた。
『今お話説したやうな亂暴者で御ざりますだで、どんな御無禮をいたさぬとも限りませんで御ざります』
『氣支しやるな。駒市！　駒市！』
と、小雪は手招く。
その時はもう駒市は、小雪の前へ馳けて來て、動するとかの女の方へ反れようとする悍馬の頭を眞直にしてぐる〳〵と輪乘りをかけて乘つてゐた。小雪一行の立つてゐるところを圓の中心として、七八間の隔りを半徑としてぐる〳〵と輪乘をかけて乘つてゐた。其れに從ふ十頭の駿足もまた鼻を並べて輪をぐるぐると描いてゐる。其れは實に際立つてよく訓練がされてある。眞中にある鬼鹿毛は、前記のごとく十二歳、馬としては佳なりの老馬で、もう廢棄される年齢なのだが、三歳駒も其所退けといふ活氣に充ちて張りきつてもゐる。燃ゆるやうな其の毛並の壯觀さ！　トキを拔く四寸の巨軀の、前肢を張つてぱつ〳〵と野面の草を蹴上ては、輪を描きながら宙を飛ぶその風格の雄偉さは全く繪にかいたやうである。鬣々とした鬣は、左右に浪を打つてゐる。眼は悍强の特徴として瞋つて物凄く充血してゐる。白泡を噛む口からは眞白な齒をむき出して、折々太い鼻嵐を噴く。
『呼んだのはおらが事かね』と駒市は返事をしたが、依然と馬の飛ぶのに任せて、輪乘をぐる〳〵とかけてゐる。
『おゝお身のことじやが、暫らく馬を止めては什うじや』
『駄目で御わんす』
『何故かの』と小雪はうら問ふ。
『何故かツて貴下の乘つてる斑月毛は男が好いだで……。はゝはゝゝ、この馬はもう婆アなんだが、什ういふものか男好きでな、毛並の美しい牡さへ見ると、すぐ變な氣を起しますだよ』
『まア！』小雪は顏を赤めたが、顏は覆面の中にあるので、人には其れは分らなかつた。

『で、うつかりと止めようものなら、すぐ飛びかゝつて行きますだで』
『でもお身は馬の達者じや、什うにかなりさうなものではないか』
『其りやなるだが……。どう／＼！　好い年をしやがつて然う浮氣ばかりするでねえ。ち、畜生め是れでもか！』と駒市が手綱を緊めると、悍馬は横に狂ひながらも、飛ぶことだけは一まづ止めた。
と、十頭の駿足も其れに從つてぴたりと止まつた。野飼のままの裸馬、どれもみな一條の手綱も付いてゐないのだが、達者なる騎手のために、手綱をぐつと締められたやう、素直に其所へ停つたのである。
『まつたく不思議じや』と感嘆しながら、今眼の前に停つた馬群を小雪はじつと眺めてゐたが、暫くすると優しい調子で、『什うじや、妾と共に城へ來ぬかや』
『失禮ながらお前さん、覆面してゐるところを見ると、今度來た御領主樣の奥方樣で御ざらつしやるだね』
『然うじや』
微笑みながら小雪は頷く。
『其んならば行つても好いだが、おら行くとなるとこの馬殘らず、一緒に連れてゆかなきやなんねえ』
『でも其れは牧場の馬で、お身の持物ではないのであらう』
『其んなことは什うでも好いだよ』駒市は冷笑しながら、『旦那が何といはうとも、おら引ツ張つて行かうと思へば、この邊にゐる馬には限らぬ。牧場中の好い馬はみな引ツ張つて行つてしまふだ』
『度限つたことを申す男の！』
『はゝゝゝ』と駒市は他愛なく、すつかり相恰を崩して笑ふ。炭團のやうな丸い顔だが、憎氣といふものを少しも持たない。張りきつてゐる筋肉は、何所を叩いても、かつ／＼と金屬性の音がしさうだ。柄もまた十三の割には莫迦に圖ぬけて大きい。頭髮は丸で百舌の巣を載ツけたやうにもじや／＼してゐる。着てゐるものは綴はぎだらけの尻切半天一枚で、麻手綱の切端を腰に帶代りに卷きつけてゐる。『でも一文も給金むらはず』と彼は續けた。『二百匹からある馬の世話、おら一個してやつてゐたのだ。同胞同樣の馬ぐらゐ貰つて行かなくちや間尺に合はねえ。だが何だかね』と駒市は眞顔になつて、『おらを連れてつて奥方樣は一體何に使ふ氣だかね』
『馬奉行にする氣じやが、お身は侍になる氣はないか』
『ないどこじやねえ』と駒市はぞく／＼しながら、『實をいふと先達から、貴下に一度お目にかゝつて、草履取でも構はねえから、奉公さしてむらふやう頼んで見ようかと思つてゐたんだ』

『ほゝ然やうか』

『斯んな事をいふてえと、またあの餓鬼めが廣言を吐く、身のほど知らぬ僮だと六爺などは笑ふだらうけど、おら今の日本に、



心から頭を下げても悔しくねえと思ふもな、奥方様！貴下ばかりだ』

『氣疎いことを申す男の』

『でも貴下樣じやア、先御領主と伯仲の豪物だといふ評判の福島といふ荒大名さへ投げ飛ばしたといふではね

えだか』
『其れは嘘じや』
『否や然うじやあるめえ。今度御入部になつてからでも、奥方様は一個してお馬に召して領内の見廻りをしてゐらつしやる。この物騒な世の中に、女性のくせに一個して、其れに殿樣を放つて置いて、廣い領内の檢分をして歩くなんていふことがなかく出來るものではねえだよ。おら何も斯も知つてゐるだよ、奥方樣は武勇力量共に萬人に優れたお方で、關白樣に見込まれて今度御入部になつたんだつてな。三萬石も奥方樣がお貰ひになつたものなんだつてな。女大名！ 女の大將！ おら生れてから初めて聞いただ。關白樣は偉くても京都の方に御ざらつしやるんじや、家來にしてむらふわけにはゆかねえ。先御領主は強くても朝鮮征伐に行つた留守、是れもまた出かけていつて家來にしてむらふわけにはゆかねえ。其所へ行くと奥方樣はおらの御領主で眼の前にゐる其れが向ふから家來になれッて……、願んでもねえ仕合だ。おらどんな事でもするだで、すぐ連れてつておくんなせえまし』



『ではその馬を連れてまゐるか』
『ねい、お土産に引いて

行くだよ』

造營中の新濱町城

『いや』微笑みながら小雪は抑へて、『普請の出來次第馬もまた買ひ上げようと思つてゐたのじや。馬の代は牧主に追つて姿から下げて取らせる』

『然うして貰やこの上はねえ』

『ではお來や』といふかと思ふと、小雪は馬の手綱を操る。かの女の馬の名は飛帆、今駒市がいつたやう毛並は斑月毛だが、身體はあまり大きくない。過日熊本を立つ時に、加藤主計頭清正が餞別としてくれたので、かの女は領地着以來大切にして乘つてゐるのだ。

『好い馬で御ざりますなア！』駒市は賞揚しながら、くツついて行く鬼鹿毛の手綱を緊めてゐるのだが、動すると鬼鹿毛は飛帆に躍りかゝらうとする。『ち、畜生め、助平阿魔めが、御領主様のお馬に對して御無禮すると恕して置かぬぞ。汝の餓鬼の若い駒さへ神妙にして歩いて行くだに……。はい、どう〳〵！』と手綱と腰とで、操りながら辛うじて悍馬を無事に歩まして行く。

その後からはお袖と山邊と、六右衛門とがて〳〵從ふ。山邊も亡主伊津野家に仕へて居つた時分には、家中屈指の騎手として知られたほどの男であるから、今眼の前に駿足十頭、鼻を並べて行くのを見ると、騎心は太く動いたのだが、鞍の有無は兎も角も、手綱がついてゐないのでさすがにちよつと躊躇したのだ。

『奥方樣は騎兵でも御組織になる積りと見ゆるな』

『然うかも知れませぬ』歩きながらお袖は答へた。『お屋方よりもお馬場だのお的場だのを第一にお造りになつてゐらつしやるほど御武備の事にお心をお打込みになつてお在であそばす。其れから見ても其のやうに拜察することが出來ますわ』

『まつたくだ。生來の武將の御器量、たゞ恐れ入る外はない。御女性には惜しいお方だ』

『其れに引きかへてあのやうに殿は御柔弱な事ばかり……。袖は齒痒くてなりませぬ』

『其れといふが早苗などいふ女性を連れて來たからだ。お家百年の利害を思ふと、いつそのこと人知れず……と心が躍るが、奥方樣の貞淑なお胸の中をお酌み申すと……』といひかけて口を噤むと、眼を數叩いてお袖と共に默々として歩みを運ぶ。

小雪は先頭に立つて行く。

金内へ出ると左方へ切れて、石ころ道と峻阪の連續をした國道を矢部の濱町の方へと向つて、しづかに馬の足掻を進める。

一體今度小雪等夫婦が、阿蘇益城二郡の主として、居城を其所に築くべく決定をした濱町は、往昔宮原とも稱したところで阿蘇大宮司の住んでゐた頃には渠の邸宅は矢部の濱屋方と稱されてゐた濱町の名は其れから起つて、もつて今日に至つたわけだが、最近には清正の代官、小代下總守則祐が郡奉行とし一駐

構[illegible]であた。勿論壕と名づくべき設備も堀も何もなかつた。不逞の兇徒一揆の輩に備へるための木柵が町の入口と出口とに僅に出來てゐたゞけで、郡奉行の役所のごときも、ほんの型ばかりのものだつた。其の跡へ小雪等夫婦が、三萬石の大名として不時に乘り込んで來たのであるから、手狭な上に萬事不自由、途中において募集して來た千人近い家來の多數は町家を借りて宿泊せしめた。で、到着した翌日以來、領内から徴發をした大工左官や、農民中の器用な者に命じて建築に着手する、その一面では大名の居城に必要な石崖や、堀や木柵の造築を夜を日に繼いで急がしてゐた。濱町初まつての大土木、材料はみな近所の山から切り出して來た材木や石を其のまゝで使用するので、石は大小不揃ひな角材乃至自然石、木は碌々外方皮も剝かない、丸太のまゝでどし〳〵と要所々々へ運ばれてゐる。その繩張は熊本で召抱へて來た軍學者、加々爪景治が打つたので、本丸、出丸、外廓等、みな本式に設計をされ、南北十八町、東西十二町、竣工の上は宮原高地に見仰げるやうな本丸の天主を初め白壁の矢倉や塀が堂々と現はれる事になつてゐる。

加々爪景治は越後の浪士だ。宇佐美流の兵學を駿河守に就いて學んでその蘊奥を修得したので、小大名の軍師たる資格は充分に持つてゐる。知行は僅かしか貰つてゐないが、小雪からは信任をされ、普請奉行をやつてゐる。

『お、奥方樣のお歸りだ』渠は今大手へ出張つて。石崖の基礎を積ませてゐたが、濱町の往來を右方へ切れて登つて來る女主人の姿を[illegible]

『いか樣』半兵衛は小手をかざして彼方をじつと眺めてゐたが、

『お後から變な小倅が馬に跨つてお供をして來る。其れに馬も十頭ばかり……。はゝア分つた。途中でお買ひ上げになつたものだな』

『然うかも知れぬ、兎も角お出迎ひいたすといたさう』景治と半兵衛は、相連れ立つて普請場から阪の中途まで降りて來る。

その間に段々と登つて來た小雪は馬上から渠等にいつた。『出迎ひか、大儀じやわのう』

『は』と兩個は謹んで頭を垂れた。

『精しいことは追つて話すが、今歸りがけに矢部の牧場で、不思議な童を見出して、すぐ召抱へて連れて來たのじや。馬奉行にいたす筈ゆゑ、其の考へで居つてくりや』

『この小倅をお馬奉行に……？』

『一體是れは人間ですかな』

軍師と物頭とは呆れて見てゐる。

『今いふとほり不思議な童で、見所もありや頼母しくも思つたゆゑに連れて來たのじや。侮らぬやうに注意してたも』

『は……』

『其れに童が乘つてゐるのは、牝馬じやが稀有の悍馬で、名は鬼鹿毛と申すのじや』

『ほう鬼鹿毛！』

『童が乘れば其のやうに素直に神妙にして居るが、他人が乘る

と、いや、いさゝかでも側へ寄るとの、すぐ蹴仆したり咬ひついたりして、什うにもならぬさうなれば、厩も別な厩を造つて其れへ入れるやうにさしてたも。周圍のはみな鬼鹿毛の仔で、數年以來年毎に生れた同胞であるさうな。骨格といひ、大きさといひ、みな母親にも劣らぬ駿馬じや。調練したらお身達のよき乘用になるかも知れぬ。童と共に飼はつてやりや」

「畏まりました」

「汝はもう歸つても好い――年熊は後に殘つて、すべて好きやうに指圖してたも」

「は」

「薙刀は茲へ出しや」と山邊から受取ると、小雪は其れを小脇にかい込み、「袖お來や」といふやうに眼配をして、大手の方へ馬を進める

石垣はまだ普請中、礎石を置いたばかりであるから、仕樣帳に載つてゐる見附は繩張が出來てゐるだけ。格好さへもついてはゐない。百人ほどの石工と人夫が眞黒になつて働いてゐる。指揚の櫓だの、鯱だの矢倉だのが諸所に立てられ、その周圍には石材や土砂を運んで來た駄馬や手車が一息入れながら群がつてゐる。

積欝に泣く忠婢の憤慨

小雪は其所を靜かに通つて、廓の內へ入つて來た。賦役に取つた職工や人夫の數は八千あまり、其れがみな部署を定めて、本丸初め全體の工事に就いてゐるのだが、家中の者も上下を分たず、普請場へ出て職工や人夫の手傳をやつてゐるので、總人員は一萬近い。で、從つて工事は捗取る。豫定以上の能率が面白いやうに擧げられて行く。鯱を卷く木遣の聲だの、胴突をする音頭唄だの、牛馬車を追ふ聲だのが、春の麗らかな天を動かし、其れが八方に山彦してゐる。槌の響き、鋸の音、石工の鑿の音なども隨所に高く騷がしい。小雪は其れを聞きながら、本丸の下に建てられたわが住居なる黑木造りの屋方の方へ馬を進めた。

甲手をかざして見下すと、馬見原口の第一關門、五郎の瀧の側にある見付は半ば出來上り、井籠狀に組まれたる足場を外す人夫の影が蟻の動くやうに小さく見える。金內口、土原口、水越口など、見付豫定地に立てられてある矢倉のやうな足場の上には人が鈴成になつてゐる。萬里の長城を見るやうに長く北の方に續いてゐるのは、城の平臺の木柵である。何にしろ肥日豐三ケ國の交界にある高原中の要所を占めて、築城されてゐるのであるから、最高處にある本丸の直下に立つて眺めると、どの方面の形勢も一眸中に集まつて來る

『喃う袖』小雪は馬上からかの女にいつた。『人の運勢といふものはまことに測り知られぬものじやの。昨臘までは吉良に居り、名もない醫者の孤兒として、悲しい生活してゐた妾が、たゞ若樣をお慕ひ申して上洛をしたばかりに、思ひもよらぬ果報に見舞はれ、三萬石の大名の主人となつて爰にあるのじや。大敗

所樣の御耳にお聽し申し上げたのも、關白殿下のお聲がかりで讒言さして頂いたのも、下向の途中方々で數多の家來抱へて來たのも、みな夢のやうに思はれるけど、然し決して夢ではないのじや。矢部の瀬町の新城主、三萬石の主人として今その城普請をやつてゐるのじや。喃う袖！』と感慨無量な調子で『其もじも吉良を出る時に、斯うした者にならうとは夢にも思ひ設けなかつたらう』

『勿論で御ざいます』雄々しい聲でお袖は答へた。

『けど、戰國の習ですもの、貴下ほどの御武勇と御怪力のあるお方でしたら、誰殿にしても是程の出世は必となさいます』

『でも女性では然うはまゐらぬ』

『否え、殿方で御ざいませんでも、戰場へ出て敵の大將討ち取るほどの力さへありや、三萬石はおろかなこと、十萬石の大名にでもなられぬ筈は御ざいません。また申すやうで御ざいますけど、お城普請の出來次第、殿のお供して朝鮮へおいであそばしては如何です』

『またしても其のやうな』

『でも貴下當地にゐますと、殿があのやうに毎日々々、御酒宴ばかりあそばして、其れに……』

『も、もう止めや！』小雪は叱る樣に慌てゝ止めた。『其れも是れも御意に入らない妾といふ者があるためじや。其れに殿下上意にも、三四年は領地にあつて確かり雅樂に武藝を仕込め、由來肥後は煩い所じや。主計留守中には不逞の奴ばら、一揆を起すに相違ない。其等の者を擧げて朝鮮にも功を樹てさせよ。きと然うせよとあつたでないか』

『其りや然やうでは御ざいますけど、袖はいつまでも御當地で殿のあのやうなお身持を拜見するに忍びませんです』

『……』

『貴下は其れをじつと耐へて、何事にも素知らぬ顔をしてゐらつしやるやうで御ざいますけど、その御胸中をお察し申すと、袖は泣かずには居れません。其れが辛いので御ざいます』

『……』

『尤も殿も以前と違つて、今は大名のお殿樣、一個兩個のお手かけをお側にお置きなすつたからとて、其れは有りうちの事ですが、貴下樣を放つて置いて、其れに』……とお袖は段々と激昂しながら、『肝腎な領内の御政治向のことは勿論、あのやうにして御家中一統、總出でやつてゐらつしやるお城御普請の事でさへお見向きなさらうともあそばさぬ。まア何といふ事でせう。かりそめに一城の主人たる身でありながら、御自分樣のお住ひになるお城普請を其のやうに——丸で隣國の事でもあるやう、たゞ冷やかに御覽なつて、朝から晩まで御酒宴とお妾樣とお戯けになる……といふやうな痴けた方が、まア何所の國にあるでせう。袖は考へても腹が立ちます。聚樂第をお立ちの際に、關白樣が仰せなすつた上意をよもや貴下樣にはお忘れなすつたのでは御ざいますまい』

『……』



『領地へ着いたらば雅樂之介、抑へておいてでも可愛がらせい。打ツ叩いてでも可愛がらせい。もし目かけなどを置いたらば片ツ端から斬りすてよ。浮氣をしたら思ふ存分取ッちめてやれと仰しやつた上意を袖は覺えて居ります。今日は一つ上意のとほりに、明日は是非取つて抑へて……と思つて袖は先月この方、手具臑引いてゐたのですけど』

『もう止めや！ほゝゝゝゝゝ』默つて聞いてゐた馬上の小雪はこのとき突として笑ひ出したが、その笑聲は涙に戰き且つ不自然なるものだつた。『阿房じやのう其もじは！人の事をわがことのやう思つて腹を立てゝゐる』

『でも貴下餘りですもの』

『もう好い、措きやといふのに』

『はい……』

お袖はそつと涙を拭ふ。

『効なき愚痴に手間取つてゐた……』小雪もそつと涙を拭きつゝ『其れより御大事な御用が山ほど積んであるのじやに——。お來や』といひながら手綱を捌くと、斑月毛の頭を回らし、屋方の方へ靜かに打たせる。

出征地からの第一捷報

黒木造りだが領主夫婦の屋方に應はしく宏壯に、高く頑丈に出來てゐる。まだ戰國の殿づくり、其れに拙速を旨として、わづか一ケ月足らずの日子で、遮二無二に叩き上げたる建物、輪奐の美は勿論ないが、玄關書院客間等みな廣やかに配置され、敷きつめてある莚のごときも厚く念入りに綴られてある。雅樂之介の住む一廓と、小雪の住まふ一廓とは、小やかなる谿川を隔つて向合つて建てられてある。門もまた二ケ所に付けられ、表と奥の入口は別に造られてあるのだが、谿川には屋根つきの渡り廊下が架かつてゐるので、夫妻の會合は隨時隨意に其所から行き來が出來るのである。

小雪が門を入らうとした時、加地五郎太が玄關から飛び出して來て頭を下げた。

『お歸りあそばせ。實は今し方熊本から飛脚がまゐつたので御ざいます』

『お留守居から手紙でも……?』

『御意。是れで御ざいます』と五郎太は差し出す。

小雪は馬の上から取つて、上書を見ると達筆に、『吉良雅樂之介殿』と認めてある。返して見ると加藤家の留守居、長野三郎左衛門の署名がしてある。

『是れは殿へ宛てゝの御書狀、妾の拜見するものでない。殿のお手許へ差上げてたも』

『其れがその……』と當惑さうに加地は口籠り、

『差上げたのでございますが、殿は御酒宴最中にて今披見する暇はない。奥の許へ持つてまゐれと仰しやるものでございますから……』

『然やうか』といつた小雪の眼からは、雫を切つて涙が落ちた家事のことは大小となく一切棄てゝ



顧みぬ。其れは雅樂之介が領地入部の途中からして執つて來たかの女に面あての自棄的態度で、今に初まつたことではないが、出征中の加藤家の留守居から來た大事な書狀を——然も自分宛の貴重な書狀を、今酒宴中といふのを名として、手も觸れず妾のところへ持たして遣すに至つてはあまりに極端に過ぎてゐる。餘りに責任を解さぬ所業だ。『然うまでにして妾を苦しめ、妾に辛くなさらねばお胸が霽えぬとは情ない！』然う思ふとさすがのかの女も、悲しくなつて不覺にも見せまじきものを見せたのだつたが、すぐ氣がついて然あらぬ顏して、書狀の封をぴりゝと破つた。

書狀には斯う認めてある。『一筆啓上仕り候。その後御城普請、着々御進捗の由、祝着至極に存じ奉り候。さて本日名古屋表より飛脚到來。主人主計頭樣御事、去る四日朝鮮釜山浦御上陸、直に慶州へ御進軍、一戰に及ばれ候處、大々御捷利、敵の首級一千百五十お討取りなされ候趣、まづ御祝福下さるべく候。尤も右は、戰地より主人家來、庄林喜右衞門をもつて殿下へ御注進の戰況、其のまゝ喜右衞門より申し來り候へども、殿下殊の外御悅喜、則ち御感狀を下され候との事に御座候間、是れまたお欣び下さるべく候。尙ほ追々の捷報、その都度、即報期して待つべきもの可有之と存じ候につき、その都度、申上ぐべく候。恐惶、謹言。天正二十年彌生十二日』

『是れは目出度い！』讀み了つた小雪は叫んだ。『主計頭殿御勝利、殿も敵の首千百五十お討取りの由、開戰第一の御軍功、目出度い、目出度い！　早速殿に申し上げよう』といひながら馬から降りると、手綱と薙刀とをお袖に渡して、玄關の式臺を馳けるやうにして昇つたが、恰もこの時、奥からばん〳〵と響いて來た鼓の音を聞くとひとしく、ぴたりと其所へ停つてしまつた。

『班女の閨の中には秋の扇の色』と謠の聲が續いて聞えた。夫雅樂之介が早苗相手に班女の一節を謠つてゐるのだ。

『又してもあのやうな……。然もこのやうな大切な、自分へあてた御書狀を御覽なさらうともあそばさず……吁何といふ事だらう』小雪ははら〳〵と涙を零した。開いたまゝで持つてゐる手の卷紙は戰いてゐる。

『楚王の臺の上には夜の琴の聲』朗々とまた續いて聞える。

『お面あてに、聞けがしに……いつでも那んなお謠ばつかり……

…其りや餘りでございます』心の中で小雪は叫んだ。

『夏はつる扇と秋の白露と、いづれか先に起臥の床——。冷じや、獨りねの淋しき枕して、閨の月を眺めん』

『お孃樣、いえ、奥方樣……』と後から小さな聲で、憚るやうにお袖が呼んだ。主人の愛馬斑月毛の仕末は加地に賴んで置いて、主人の後を追うて來たのだ。その右手には主人から今渡された薙刀を小脇にかい込んで持つてゐる。

『……』

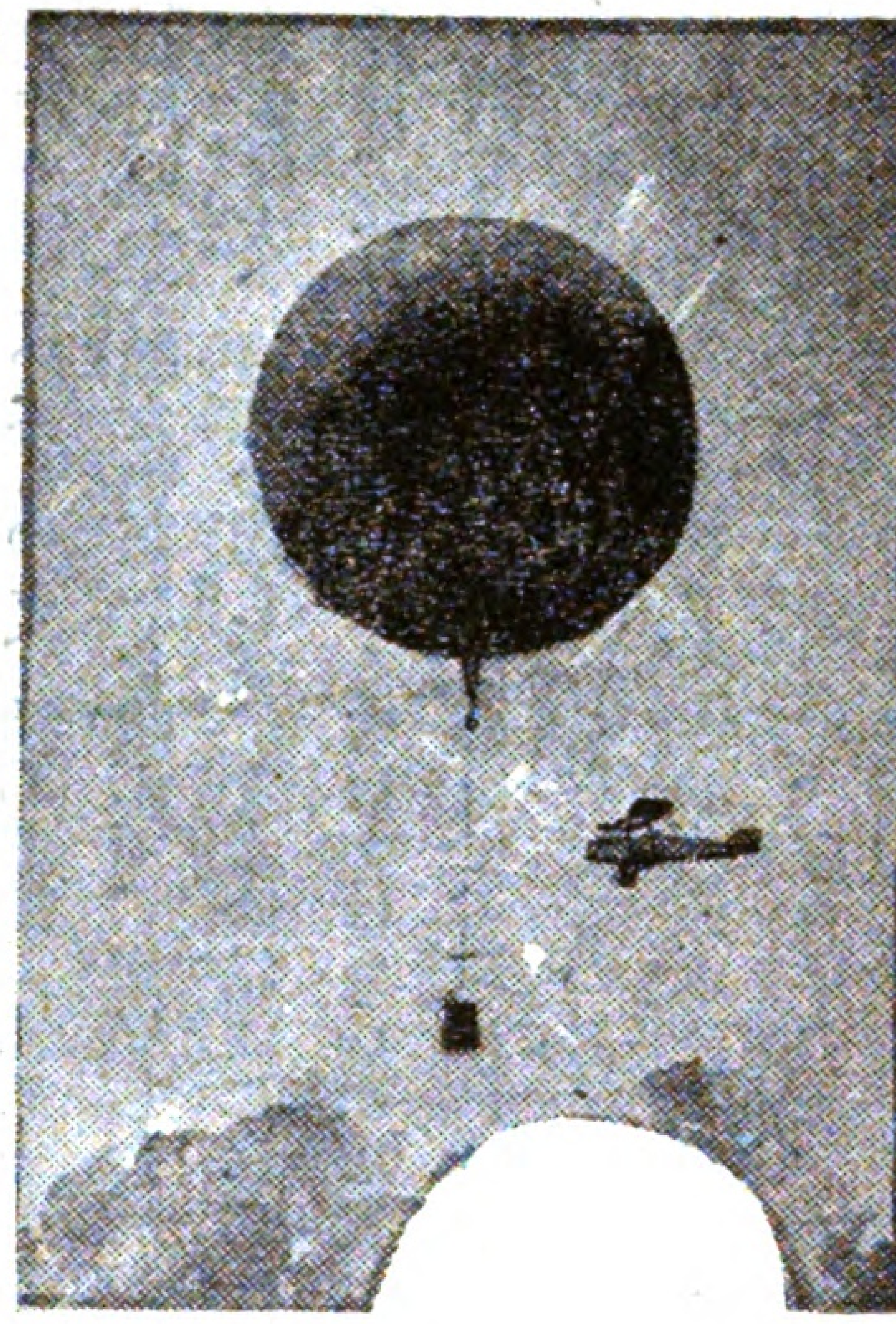
『お行りあそばせ！』戰く聲をお袖は勵まし、『殿は兎もあれ、早苗めは今日こそは成敗をしてお仕舞あそばせ』

『……』
『あのやうな者をお側に置いては、殿のお心はいつまでもお諫め申すことは出來ませぬ。貴下が行ることがお厭でしたら、袖がぶち斬つてしまひます』
『まア滅相もない――待ちやツ！』
『否え何うぞお放しなすつて』
『待ちやと申すに！』
『花、巾上に散りぬれば……』と謡の聲は依然としてゐる。
鼓の音も依然としてゐる。（つゞく）

「大醜女物語」を讀みて

中村武羅夫

大衆小説といふものを、殆んど讀んだことのない私は、本田美禪氏の『大醜女物語』を讀んで、讃嘆した。
規模雄大、構想の逞しさ、文章の枯淡にして平易なところ、これは、一流の大家でなくては書けない小説だ。
しかも、時代は遠い桃山の頃で、現はれて來る人物は、太閤秀吉であり、加藤主計頭清正であり、福島正則であり、淀君である。艶麗花を欺く、秀吉愛撫の小姓吉良雅樂之介に配するに、大力無双、武藝に秀でて、福島正則ほどの豪傑をも手玉に取る醜面の一女性小雪の可憐な戀を以つてしてある。吉良雅樂之介に對する、小雪の無限の思慕と、切なき哀戀とを中心に幾多の英雄、豪傑、荒大名の群が、華麗壯觀を極めた聚樂殿を背景にして、波の如く、嵐の如くに渦卷くのである。
これだけの時代、これだけの背景、これだけの人物を、これだけ大がかりな構想の下に描出するには、餘程の大才大手腕を以つてしなければ駄目である。而も、作者の渾然の想と、練達の筆とは、一つ／＼を目に見る如く描いて退けてゐるのである。
大抵の作家が、太閤秀吉とか、淀君とかを描けば、英雄的偶像にしてしまふか、美の權化にしてしまふ。形ばかりは書けても、生きた人間として描けない。つまり材料負けがするのだ。
ところが、この作者は、秀吉でも、淀君でも、偶像の壇上から引き摺り下ろして、當り前の人間として描いてゐる。當り前の人間として描きながら、秀吉の偉いところ、淀君の妖艶な美しさは、生き／＼として紙上に躍つてゐるのである。秀吉でも、淀君でも、作者の掌上に豆の如く握つてゐなければ、斯うは書けない。
筋の變化、構想の起伏、重疊たる波瀾と、横溢せる興味と、私は『大醜女物語』を讀んで、我が日本にも、ビクトル・ユーゴー、アレキサンダー・チユーマに、優に比肩し得る大作家を發見したやうな氣がした。若し、私の讃辭を過褒に過ぎるやうに疑ふ人があるなら、是非『大醜女物語』の一篇を、一讀してみることをすゝめるものだ。



探偵小説
不思議な支那娘

木蘇穀
挿繪　椛島勝一

◇空中の美人

民間飛行家の大石純三氏は、その技術の練達と勇敢とでその名を知られた冒險飛行士であります。氏は、かねて、日本の飛行記錄が、高度に於ても、時間に於ても、遠く歐米諸國のそれに及ばないことを慨嘆してゐましたが、此度、愈々世界記錄に肉薄すべく高度飛行を試みることになりました。

六月二十四日、朝來惡氣流があつて、飛行中止とならうとしたのですが、午後になつて、風も止み空も晴れて絶好日和となりました。氏は、愛機隼號に搭乘、午後三時といふに、氏の所屬するT飛行場を離陸したのです。奮起一番關東の上空高く世界記錄を破らんものと、氏の意氣込は非常なものでした。

隼號は、爆音勇ましく、飛行場の上空から西南へ向つて、廻旋しながら漸次、上へ上へと上昇して行きました。直徑四五百米位の輪を描きながら、その輪は、一段毎に高く、機を小さく見せて遂に空中の一點と化するまで飛揚して行きます。それから、何十秒かの後には、遂に飛行場の人々は、機を認めることが出來なくなつてしまひました。

其の時、機は、四千米前後の上空にあつたと思ひます。先刻まで快晴であつた空模樣が急に變つて、機の下層一面に薄雲が立こめて、下界を閉ぢてしまひました。いくらか、風も強くなつたやうでした。けれども、大石氏の頭は、『記錄』で一ぱいなのでそんなことは少しも意に留めません。高度計を見つめながら、ハンドルを上へ上へと向けて、機の描く累線を昇つて行く

のでした。

空虚な上空――實際何ものも見えない空虚な雲の上です。下界への視界を斷たれたこの五千米の空中には――機は其時、最早、五千米に達しようとしてゐたのですが――たゞ存在するのは隼號があるばかりです。自分の姿以外に何ものも見えないといふ世界に到達した時、人は、何となく孤獨の淋しさを感ずるものだらうと思はれます。實際、何ものも見ることの出來ない雲上遙かの上空ではありませんか。大石氏が、その寂しさを感じたか否かは知らず、氏はたゞ記錄に夢中になつて、空氣のあらん限りと勇を鼓して、上へ上へ、前人未踏の世界へと愛機の進路を向けるのでした。

六千米を突破しました。續いて七千、八千を征服したのです。續く幾分かの後には、遂に、隼號の高度計は一萬米を示しました。それ程の高所になれば、最早、陸を離れたといふよりも地球を去つたといふ氣分であらうと想像されます。大石氏は、自己の優越感と共に、地球を離れたといふ一種云ひしれぬ寂しさを感じたであらうと思ひます。しかし、今茲で、そんなことは、どうでもいゝのです。問題は、氏が、それほどの上空で、自分の他に、何ものかを見ようなどと豫期したであらうかといふことです。

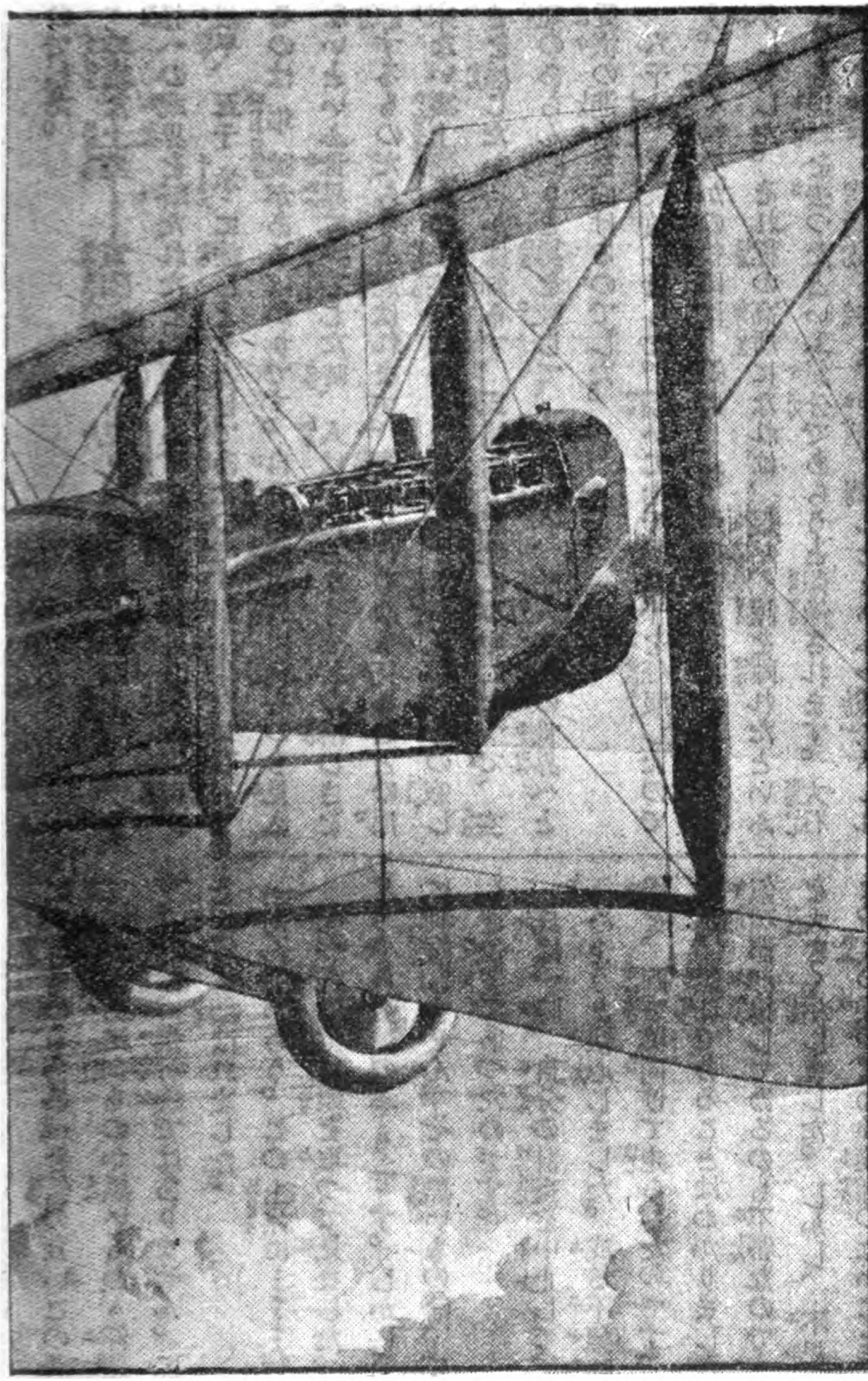
實に氏は、愕然として眼を見張りました。自分と機との他に、何ものもあるべき筈のないこの一萬米の高空に、彼の前方遙か彼方に何ものか黑いものゝ浮遊してゐるのを認めたのです。無論、飛行機ではありません。氏は、一種恐怖に近い驚愕と不審に襲はれました。

『何んであらう。この上空に……』

先づ氏は望遠鏡を取つて見ました。レンズに映じたものは、どうやら氣球のやうです。しかしそれも遠距離のために確かに判然しません。その黑いものは、氏の西方約五六千米と覺しき位置にあつたのです。

氏は一時、自分の計畫を中止して、先づこの空中の怪物を見極めようと決心しました。或る不氣味な興味に誘はれながら、機を、西方に向けて走らしたのです。機が近づくに隨つて、それが、氣球であることはわかりました。しかし、日本の空に輕氣球が浮揚してゐるのも不審なのです。望遠鏡は、秒每に氣球を大きく示しました。しかし、不思議なことに、その氣球には、人の乘つてゐる模樣のないことです。いや、人は一人乘つてゐるらしいのです。しかしたゞ一人です。

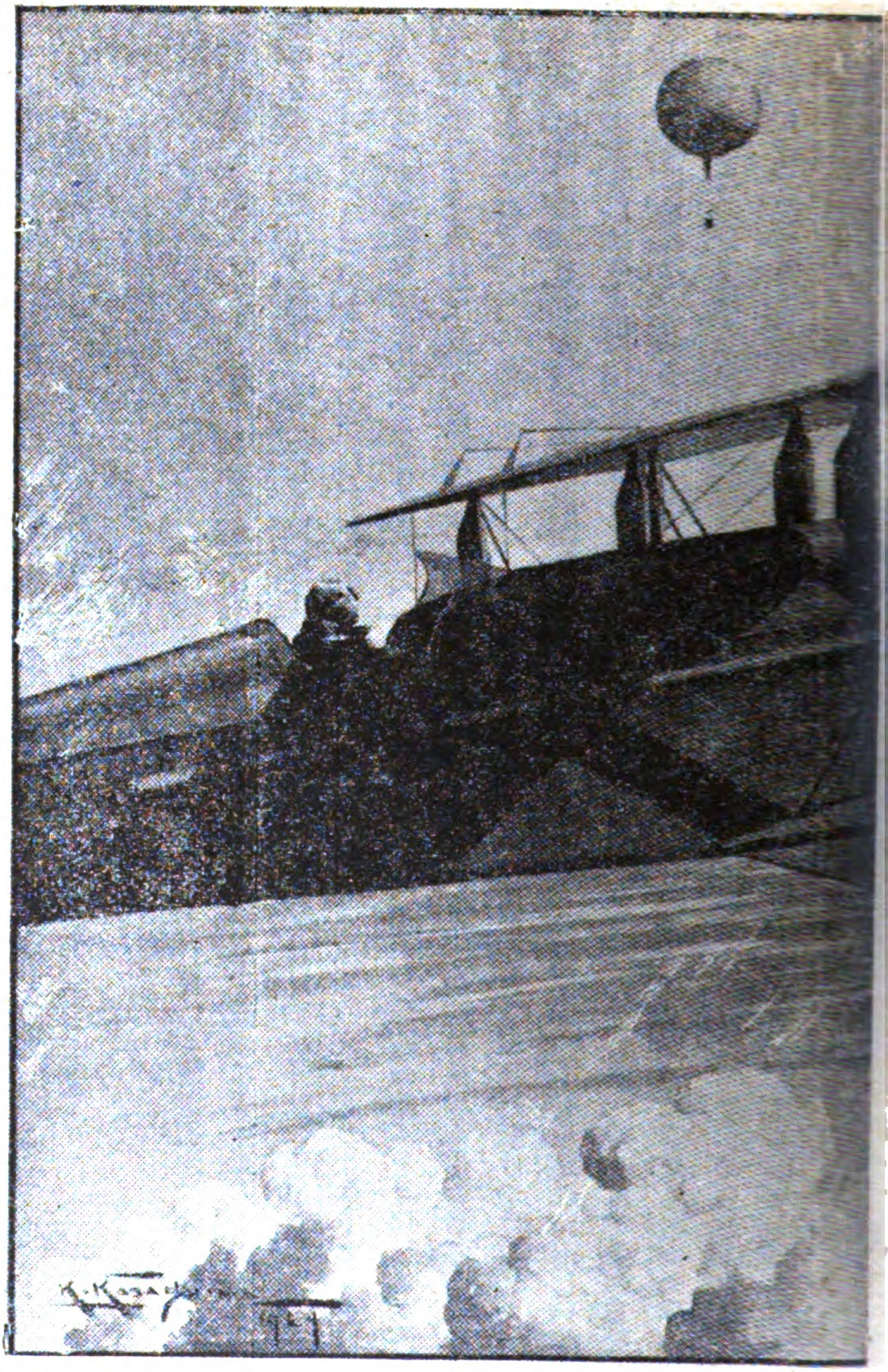
機は、千メートル程に近づきました。双眼鏡は妙齡の婦人を映じ出したではありませんか。女です。たゞ一人の搭乘者は女です。若い美人ではありませんか。しかもその女性は、兩手を高く上げて救ひを求めてゐるやうです。飛行機の近づいたのを



認めて、救助の叫びをあげてゐるやうです。最早、機は、二三百米の近くへ來ました。肉眼で見えます。確かに女です。しかし、妙齡な花の如き支那美人ではありませんか。しきりに叫んでゐます。手をかざして救ひを求めてゐるのです。意外も意外この一萬米の空中に支那服の美人を見ようとは、何といふ不思議なことぞ。察するにその女性は氣球の操縦を知らず、風の運ぶがまゝに空中を漂うてゐるらしいのでした。一體どうしたことでせう。

大石氏は、この驚異な事實に遭遇して實際自分の意識を疑つて見たほどでした。しかし、事實は確かな現實の事實です。一體これは、どうしたことであらう、どうしたものであらう。女は、頻りに手をあげて救ひを求めます。大洋の漂流者が、汽船を認めて助けを呼ぶやうに、必死となつて叫んでゐるのです。

何をおいても先づ女を救ふことが急務でした。しかし、この空中に於いて、如何に冒險家の大石氏と雖も、氣球と飛行機のことです、救助する術はありません。氏は、氣球の周圍を三四回廻り



ながらどうしたものかと氣を急かせました。といふのは、今や、北よりの風は益ゝ強くなつて氣球を南へ南へと運んで行つてゐるのです。もし太平洋上の空に打ち出されたが最後、救助の望みはありません。とはいへ、現在、この空中に於いて、如何なる方法がとれるであらう。一體どうしたものだ。女は頻りに救ひを求めます。

◇生死一發

年若き支那美人が、どうして、この天と地との高い中間を、たゞ一人漂うてゐたかは、今暫く尋ねる餘裕がありません。大石氏は、今眼前に横はる女の救助をどうしたものかに頭を惱ましました。氏は、五六回、氣球の周圍をぐる／＼廻りながら、どうしても、氣球を下降せしめるより他に方法がないと思ひました。氏は一策を案出しました。全く字義通り氏は、街を飛んで飛行場へ引返したのです。

飛行場に着陸するや氏は直ちに一挺のピストルを持參して再

び機上の人となるや、フール・スピードを以て太平洋上へ打出されんとする氣球のあとを追つたのです。其の頃、氣球は横濱の西部上空を三浦半島へ向つて流れて居りました。どうしても氣球を陸上に於いて止めなければ無効です。海上に出る前に追ひつかねばなりません。氏は、夢中で上昇し目南へ急ぎました。

三浦半島が突出してゐたことは、非常に好都合でした。益々強くなつた北風は、半島に添つて氣球を走らしてゐるのです。もし、この半島が無かつたならば恐らく其の頃は、海上へ運ばれてゐたに違ひありません。

隼號は、追ひつきました。半島の上空とはいへ遙か富士の靈峰を眼下に見下す高所です。正しく陸に下降するか海に落ちるかの見さかひはつきません。しかし一刻も猶餘はありません。生死一番英斷を以て氏は、氣球の横腹へ向けてピストルを放つたのです。それは、確かに、氣球の下部に小穴を開けたに違ひありません。

隼號は、氣球を護りながらその周圍を廻り始めました。氣球は漸次下降し始めました。風を受けて四十度位の角度を以つて南へ下降し始めたのです。

『しめた、この分では大丈夫。』

大石氏は、先づうまく行つたと思ひました。しかし水素瓦斯を失ふと共に刻々に、氣球は速度を増して走り出したのです。風は愈々強くなり、横なぐりに吹きつけます。霧の如き雲層を横ぎり出れば眼下に下界が開展されました。右手に見ゆるは相模灘です。大きな口を開けて美しき乙女を吸ひ込まうと待つてゐるやうです。大石氏は、氣が氣でありません。隼號は、慈母の如く乙女を護衛しながら下降するのでした。海に落ちるか、陸で喰ひ止めるか、見る〳〵うちに海岸線が近づいて來ます。

大石氏の心配が杞憂に終つたのは幸でした。氣球は、半島の西岸、海岸に近い森の中に落ちたのでした。しかし、陸に近づくに隨つて非常な速度を以つて落下したのですから、第一氣遣はれるのは、女の生命でありました。

氏は、氣球の落下を見屆けるや直ちに附近に着陸場を探しました。それには、海岸の砂濱が誂へ向きです。陸の人となるや彼は、直ちに森へ馳けつけました。

其處は、遠く人里離れた淋しい場所で見ようとする人影もありませんでした。氣球は、その巨體を密林の中に横たへてゐたのです。瓦斯球に連なる數條の綱が樹木の間に引か〻り、女を乘せた座船は、ゆがめられた樹上に宙に浮いて倒まになつて居りました。女は落下した瞬間、座船から投げ出されてゐたのです。可憐な小さい女の身體が、樹下の叢に俯伏せに動かず横

はつて居りました。

呼吸は止まつて居りました。しかし身體の溫みはまだ充分あります。脈もかすかながら、まだ止まつてはゐないやうでした。大石氏は、女の身を抱き起しました。

『まだ、絶息れては居ない。大丈夫蘇生する。』

氏は、何かと非常手段を講じました。こんな場合死者の身體を動かすことは却つて、呼吸を復活させることに有効であることも知つてゐる氏です。女の胸部に急激に壓迫を加へて見ました。そして人工呼吸を行つて見たのです。

女の身がピクリと痙攣しました。そして、ウームと背を伸ばしました。そして次の瞬間には、黒水晶のやうな眼がぱつちり開いたのです。

女は蘇生しました。彼女の意識はだん〲明瞭になつて來ました。彼女は、じつと自分を抱いてゐる大石氏の顏を見つめたのです。彼女は、始めて自分の眼前に屈強な男のゐることを知つて、大石氏の體にしがみつきました。可哀さうに、彼女は、空中をたゞ一人さまよつたことが、どんなにか淋しく、いや、恐ろしかつたであらう。人間を見たことが、それ程彼女には悅しかつたのです。

見れば、寂しい瞳、房々とした前髮、翡翠の耳輪、色艶かしい支那絹の衣服、多分は、卑しからぬ支那の令孃であらうが、どうして、こんな破目を見ることになつたのであらう。それを思へば、愈ゝ女が可哀さうになつて、大石氏も思はず、妹でも勞はるやうに、彼女を抱き返しました。

『氣がつきましたね、大丈夫です。もう大丈夫です。』

氏は相手が支那婦人であることも忘れて、日本語でさういつて彼女を勇氣づけました。

『有がたうございます。有がたうございます。』

意外にも、氏の耳もとで、彼女の唇を漏れた言葉は、同じ日本語でありました。

◇戀の夜叉

其の日——もう夕暮に近い頃でした——大石氏は支那美人を伴ひ、隼號に同乘させて、東京市外T飛行場へ連れ歸りました。このことは、忽ち帝都の新聞社の知るところとなり、翌日の新聞はこの魅力ある社會記事によつて滿されて居りました。『空中を漂ふ支那美人』『一萬米の高空で拾はれた女』等々の標題で紙面を賑はし、全市民の好奇心を滿たして居りました。實に絶好の新聞種に違ひはなかつたのです。しかし、總ての新聞は、たゞ大石氏が遭遇し且つ實行した事實の報道をしてゐるばかりで、何が故に、この支那美人が空中に單身浮遊してゐたかについては、一言も書き及んではゐなかつたのでした。

翌日――事件が新聞に花を咲かせた朝のことでした。T飛行場近くの大石氏宅の二階の一室には、支那娘が床に橫になつてゐました。大石氏がその枕もとに坐つて居ります。氏は昨日、あれから娘を伴ひ飛行場へ着陸するや直ちに自宅に連れ歸つたのでした。娘は、非常に昂奮してゐたし、疲勞も甚だしかつたので、附近の醫師を招じた後、床に安靜を保たせてゐたのです。しかし、今朝になると氣分も勝れ、心身の異状も幾らか平常に復しかけた模樣でした。

『ねえ、話して下さい。一體どうして、あなたが、一人あんな高空にただ一人殘されることになつたのです。どうしたわけなのです。あの氣球には何處からお乘りになつたのですか。』

實は、昨夜も、ちよつと、この問題について大石氏は娘に尋ねたのでした。しかし、娘はそのことについてはあまり語り度がらなかつたし、疲勞も甚だしい樣子だつたので昨夜は、そのまゝにして寢ませたのでした。けれども、娘は、今朝も、そのことを訊かれるのをあまり好みませんでした。何か、自分に後ろめたき事でもあるのか、娘は、容易に口を開かうとしなかつたのです。しかし、大石氏にとつては、そのことが第一知り度いのだし、娘の身元が判明しない以上娘の處置に困るので重ねて強ひて追求しなければなりません。それには、娘



も、否みかねたか、ぽつぽつ訊かれるまゝに前後の分ちなく語り始めました。その遭難談を綜合しますとかうなのです。

娘は何故にか自分の住所と名前を明かしませんでしたが、話の模様から大石氏が察じたことによると奉天の相當な家庭の娘らしく曾つて一時東京の女學校に在學したこともあつて、日本語は至つて巧みでした。



五日前の晩のことでした。滿洲の空には隈なき美しい月が掛つて居りました。自分の部屋で胡弓を彈いてゐた彼女は、窓をさし込む月に誘はれて庭先へさまよひ出でたのです。庭には、石があり池があり樹木があり花壇もありました。庭園は仲々廣いらしいのです。その庭園の間を彼女は月を愛でつゝ侍女も連れずに逍遙してゐたのです。彼女を月と結びつけたのは矢張戀でした。彼女は戀人のことを思ひながら池の汀の庭石に腰を下しました。

突然背後の庭木の繁みの中から覆面の怪漢が現はれて、彼女を運び去らうとしました。彼女が、驚き叫びを上げようとした時は、既に口には猿轡をはめられて、救助を求める術もなかつ

たといひます。怪漢は、邸内の勝手を知つた者に違ひなく犯行も計畫的に行はれたのです。庭園の奥の裏門の外には、自動車が待つてゐました。怪漢は、彼女を小脇に抱いて自動車内に隠れると自動車は疾走します。彼女は、逃れんともがき悶えました。しかし、もう、蜘蛛の巣にかゝつた蝶同然でした。

奉天軍に屬する氣球隊の深夜です。營内は、静寂な眠りに落ちてゐました。その氣球隊内に彼女は運ばれたのです。其處には、輕氣球がいつでも浮揚準備が整へられて居りました。勿論、それは、怪漢が密に仕組んで置いたに違ひはありません。彼女は氣球に乘せられました。怪漢も乘りました。おゝ、繋條は斷たれます。氣球は月夜の空に陸を離れ去ります。彼女は狂はんばかりにもがきました。

空中に於いて怪漢は覆面を取りました。彼は、彼女の從兄で氣球隊附陸軍中尉でした。中尉は彼女を戀し、再三彼女の父と彼女に結婚を申込み、その何れからも拒絕された男なのでした。彼は、戀の夜叉となり輕氣球を盜み彼女を奪つて天上高く、空中へ去らんと企てたのです。永久に陸に離別を告げて空中へ無理心中に行く――それは、全くロマンチックな計畫に違ひはありません。戀する女とたゞ二人だけの世界へ行く、瓦斯の許す限り空氣のあらん限りの高所へと二人で行く、二つの屍骸は永遠に地上に返らぬであらう、二人の失踪は、たゞ謎として地上に殘るであらう――と失戀夜叉中尉は、考へたに違ひありません。

しかし、彼女だけがどうして一人だけ氣球に殘ることになつたかについては、彼女は、男が一所に死んでくれと哀願しながら先づ自分から先に刄を喉に突立てたと云つてゐるけれども、恐らく、大石氏は、彼女の口ぶりによつて、彼女は、空中で中尉に陵辱され何かのはずみに、刄を盜み取つて男を殺害したのではなかつたらうかと察しました。彼女が、事實を語り度がらなかつたのもそのためではあるまいかと思はれました。

兎に角、彼女の從兄は屍體となり彼女だけが殘ることになつたのです。彼女は、たゞ雲と、空とをのみしか見ることの出來ない空中に、一人ぽつち殘されて、風のまに／＼漂ひさまよひました。シベリヤの彼方から吹く烈風は、南へ東へと彼女を日本海の上空へと運び去りました。雲の上に暮れ、雲の上に夜が明けます。彼女は、それを五回繰返しました。彼女の淋しさ、恐ろしさ、それは、生きてゐる氣はしなかつたに違ひありません。中尉の屍體は、日本海の上から捨てたと云ひます。男の持參してゐた少量の食物が漸く五日間彼女の生命を保つことが出來たのは、幸ひでありました。彼女は日本の上空へ吹き流され關東の上空に於いて運よく大石氏に發見しられたのでありました。

何といふロマンチックな、そして、奇異な遭難でありませう。大石氏は聞けば聞くほど、この小説的事件の一役を演じつつある自分自身までが興味を以って眺められずにはゐられませんでした。

『お聞きすれば全くお氣の毒でなりません。しかし、偶然昨日僕が高度飛行を試みたのも何かのお緣があつたといふものですね。で、貴孃は奉天の方なんですね。失禮ですけれど、お名前は、何んとおつしやるのです。』

彼女は、名を訊かれるとまた、沈默してしまひました。何故か、彼女は、名前を明かすことを避けるのです。女としての不名譽な遭難が世間に發表されるのを恐れてゐるのか、それとも彼女自身に何かの落度でもあるためなのか不審でなりません。

『ねえ、それでは、私も困るのですが、云つて下さい。奉天のお住ひですね。お父さんの御名前は？』

けれども彼女は、口をもぢ〳〵させただけで返答をしませんでした。あまり無理に追求されると、彼女は、しく〳〵泣き出しました。

◇怪奇の朝

不思議な支那娘――(不思議な)といふより今の場合仕方がありません――二三日大石氏の宅に靜養することになりました。それは、ただ娘の健康が充分でないのと、一つには、大石氏の厚意な勸めによつてでありましたが、娘は何事か非常に心配なことでもあるのか、常に憂鬱に伏せつて居りました。

妙な事件が起りました。それは、大石氏が娘を自宅に連れ歸つた翌日――即ち新聞記事が賑はつた晩のことです。大石氏の宅に放火した者があつたのです。母屋裏の納屋内に火が起り湯殿の中に燃え移らうとしたのを漸く消し止め、大事には至りませんでしたけれど、一時は、非常な騒ぎとならうとしたものです。放火であつたのに疑ひはありませんでした。しかし、大石氏は、其の時まで、放火狂か火事泥の仕業と思ひ別に意にも止めなかつたのです。

然るにその日中別に變つたこともなかつたのですが、その翌朝のことです。大石氏は、早寢早起の方ですが、前夜はいつになく夜更かしをして、十二時頃寢みました。就寢前、娘の部屋に行つて十分ばかり話して自分の部屋に歸つたのです。寢んで間もなく非常な驟雨が襲來してゐる模樣でしたが、その雨の音を聞きながら氏は眠つてしまつたのです。そして、翌朝のことなのです。

翌朝、氏が起床したのは、七時頃でした。娘の部屋とは梯子段を隔てゝゐるだけですから、氏は欄干を傳へながら、段梯子を下りる時、娘がもう眼醒めたかなと、戸を叩いて見ると返

事がないので扉を開けて見ました。床は敷かれたまゝで娘は、もう起きたものか居ないのです。

氏は下の洗面所へ降りて行きました。そこで娘が『お早う』といふのを豫期して行つたのです。娘は、洗面所にも居ませんでした。

『おい、お客さんは？』

氏は、召使のお杉に尋ねました。

『いえ、存じません。』

『降りて來たのではないのか。』

『いえ、ちつとも存じません。お二階にお寢みではございませんのですか。』

大石氏は、不思議でならないのです。狐につまゝれたやうな心地でした。氏は、再び二階へ馳け上つて行きました。大石氏は、獨身主義者で、一人の召使を雇つて食事の世話をさせてゐるだけですから家族と云へば、召使と二人だけ、目下のところ支那娘と三人だけが一家の内に寢んでゐたのです。

二階の部屋には、居ないものは、居る筈がありません。床だけが藻拔けの殼となつてゐます。逃げたのかな、をかしい。

氏は念のために部屋の窓を調べて見ました。窓は何れも堅く閉されて、內側の錠に別狀はありません。逃げたとすれば一體何處から逃げたのであらう。氏は自分の部屋の窓も調べました。別狀がなく錠が下されてゐる。再び氏は、階下へ馳け下りました。

『おいお杉、今朝、お前が起きた時、表戸口はどうだつた。緣の雨戸が開いてはゐなかつたかい。鍵はかゝつてゐたのか。』

『いえ、何處も變つたことは、ありませんでしたわ。どうなさいましたのでございますの。』

『何につ、鍵はかゝつてゐた？』

『はい。』

『表戸も、裏口もか。』

『はい、わたし、毎晩、鍵をかけ忘れたことはございません。ちやんとはまつて居りましたのでございますわ。』

『…………』

一體どうしたことでせう。大石氏は、面喰つてしまひました。氏には、掌中の玉を奪ひ去られたやうなあつけない失望もありました。しかし、もし、逃げたとしても彼女が何處から屋外に出たかゞ不思議です。家中の窓、戸口は、總て內側から鍵がかゝつて居ります。その他に出入口は絕對にないのです。これが、一體あり得ることであらうか。また彼女は、何故に逃亡したものなのか。彼女の不思議な態度と云ひ、實に奇々怪々、不可解な女ではありませんか。

不圖氏は、昨夜驟雨の襲來したことを思出しました。今朝

は、拭つたやうな晴天です。

『よし。』

氏は考へました。もし、彼女が逃げたとすれば、屋外に足跡がなければならない、そして、それによつて、何處から忍び出たかゞ判明するのだと思ひました。で氏は、表戸を開けて外へ出て見ました。雨のあとのぶく／＼した泥土は、坦々として何ものにも汚されてゐないのです。縁側の方へ廻つて見ました。別狀はない、犬の足跡もないのです。最後に氏は、裏口の戸外へ廻つて見ました。氏は愕然として立すくみました。あるある、二つの足跡が泥土の上に鮮かに印せられてゐるではありませんか。

しかし、此處にも一つの怪奇が出現しました。一つの足跡は驚くべき巨大な跣足の足跡――それは、裏口から左へ向つて去つて居ります。今一つは、下駄の跡、それは裏口から右へ續いて居ります。しかも、その二つの足跡、何れもが、外に向つて去つた跡で、外から家へ來た足跡ではないのです。更に不思議なことは、この下駄の跡は、氏の下駄でも、お杉の下駄でもないことです。裏口は、內側から鍵がかゝつてゐたのです。實に、奇怪と云はうか、不可解と云はうか、氏は思はず戰慄を覺えました。

もし、家の內から外へ出た人物があつたとすれば、家內に在つた下駄の跡がなければなりません。外から何者かゞ來たとすれば、家に向つて足跡がなければならないのです。その何れでもないのです。外に向つてゐる巨大な跣足の跡は何者か、裏口の鍵はどうして別狀がないか。娘の足跡は、どうしてないか。下駄と跣足の人物は、何故に左右に別れてゐるか、また、全く異つた別々のものであるのか――思ひ及ぶ時、實に、それは、戰慄そのものであると云はずに、どうしてゐられませう。あまりに不思議なことは、恐ろしいものです。大石氏は、いつまでも、茫然と裏口に立ちすくんで居りました。

◇美貌の青年

其の朝、突然、大石氏宅へ、支那青年が訪れて來ました。女中の取次いだ名刺には、金永昌と記されてありました。

『是非お主人にお面會が願ひ度いと申してゐられます。』

氏は、支那人の知人も二三はあるけれど、未知の名前なので躊躇したのですが、支那娘に關する事件の渦中にある時ではあり、實は、或る興味を以つて會ふことにしました。女中は、客間へ、金君を招じました。客間――それは、昨夜まで娘の部屋とされてゐた二階の八疊です。

初めて見る支那青年は、非常に美貌の持主でした。學生服を着て、つゝましく座蒲團を傍へ退けて部屋の入口近くへ坐つて



ゐました。傍に角帽が置いてあります。

『私が大石ですが。』

大石氏がさういつて青年と對坐しますと、青年は恭しく辭儀をして重い口を開きました。

『突然、お訪ねして甚だ恐縮であります。實は昨晩、新聞を見ました、少しお尋ねし度いことがありますので、ぶしつけにお訪ねしたのでございます。』

『なるほど、どんなお要件ですか。』

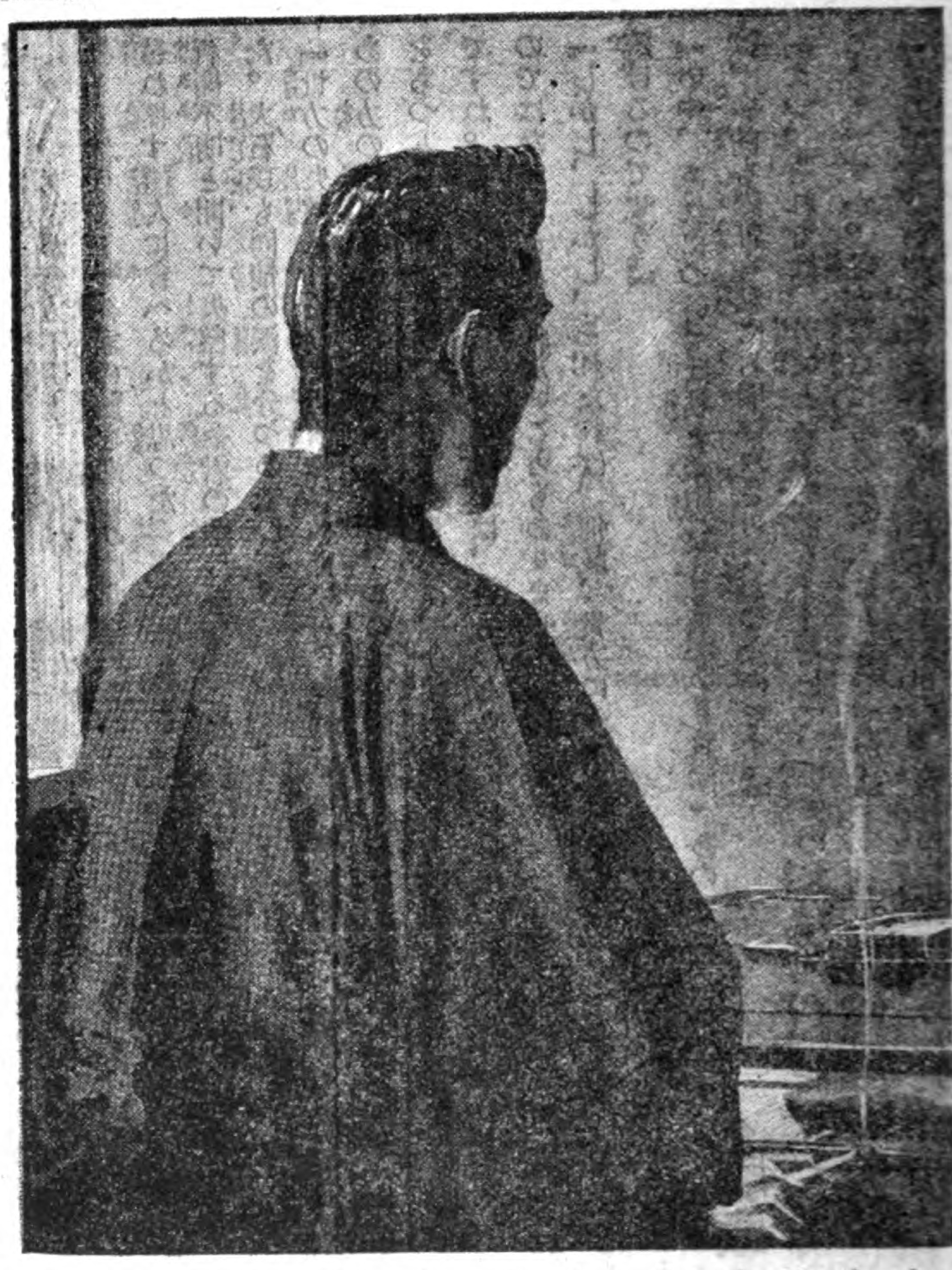
『はい、實は、私は滿洲奉天の者です。一昨年から日本に留學中で只今早稲川大學に通つて居ります。實は、昨晩のことですが、東京の朝の新聞を不圖見ますと、貴方が氣球に乘つてゐた支那娘をお救ひなさつたといふことが出て居りました。私に心當ることもありますので、もしか私の尋ねて居ります娘ではないかと存じまして御訪ねしたわけです。新聞には娘の名前も何も出て居りませんでしたので……』

大石氏は、しめたぞと思ひました。この青年は、確かにあの娘との何かの關係にあるに違ひないのです。

『なるほど。で、貴方の尋ねてゐられるといふ娘さんは？』

『李芳蓮といふ娘なのです。實は、私は芳蓮の許婚であります。芳蓮は、李家の一人娘なので私が大學を出ると同時に、

李家に養子になつて結婚することになつて居ります。その芳蓮が先達、行方不明になつたといふ知らせを父の李寛良から受取りました。電文にも、もしか、さうではないかと認めてありました通り、私は今迄、芳蓮が、私を慕つて東京へ來るのでは



ないかと毎日それのみを待つて居りました。彼女は、常に東京に來度がつて居りましたのに父の寛良が私の卒業まで許しませんでしたから、もしか、さうではないかと思つて待つて居たのであります。』

『待つて下さい。李さんの家は、資産家ですか。邸宅も廣く、庭園には池がありますか。庭は廣いでせう。』

『はい、李家は、百萬長者と呼ばれて奉天屈指の資産家です。さうです、邸宅は廣いのです。池もあります。』

『芳蓮さんには、從兄がありますか。』

『あります。芳蓮を戀してゐる陳張除といふ氣球隊附中尉がゐます。實は、昨日の新聞で氣球に乘つてゐた娘と見ましたので、愈々不安になつたのです。いえ、そんなことまで貴方が知つてゐられるとすれば、きつと彼女に違ひありません。芳蓮です。彼女です。會はせて下さい。彼女は、只今貴方のお宅に居りますでせうか。』

『いや、わかりました。その方です。その芳蓮さんに違ひあり

ません。』

『えゝ、では……では……確かに芳蓮が……會はせて下さい。會はせて……彼女は、張除に誘拐されたに違ひありません。』

『しかし、私は、貴方に悲しいお知らせをしなければなりません。芳蓮さんは、昨夜、私の家を出て行方不明になられました。』

『えゝ、芳蓮が行方不明！　彼女が……彼女がどうして、行方を……おう……』金君の驚き悲しみは非常なものでした。漸く尋ね探す戀人に會へるかと思つた喜びの暇もなく、その戀人が行衛不明と聞いて失望する金君の悲しみもさこそと思はれました。大石氏も同情の涙を分つのでした。

『貴方の失望されるのは同情に堪へません。しかし私は、今迄あの方の戀人——即ち貴方がですね、この東京に居られることをちつとも知らなかつたのです。貴方は、今朝宿を出られたのですね。もしかしたら、芳蓮さんは、貴方のところへ行かれたのではないかと思はれないこともありませんな。』

『しかし、しかし、それなれば、何故、貴方に一言も告げずに逃げるのでせう。』

『いや、それについては私も不審なことがあります。あの方は、名前も素性も私に打明けなさらなかつたのです。』

『えつ、それでは、芳蓮といふ名前も……そして、奉天の父のこともですか。私が東京に居るといふこともですか。』

『さうです。いや不審といへば、更に〳〵不思議、奇怪至極なことがあります。』

そこで大石氏は、昨夜來の一伍一什を殘らず話してしまひました。彼女の失踪、驟雨、二つの足跡等々。そして、その前夜に放火があつたことなど殘らず話りました。

『私は、放火が芳蓮さんに何か關係があるものであるかないかを疑つてゐます。第一、あの方が自分で逃亡されたか、それとも、何者かゞ奪ひ去つたか、それが判然しません。』

『いえ、私信じます。彼女は貴方に一言の挨拶もなく逃げるやうな女ではありません。善良過ぎる程優しい乙女です。きつと何者かゞ……』

『しかし、誰れが、何のためにあの方を奪ふのでせう。第一、この東京に、あの方が誰れであるかを、まして、芳蓮さんであることを知つてゐる者がどうして居りませう。』

さう云はれると、金青年も答ふる言葉がなかつたのです。全く迷宮です。

青年が大石氏宅を辭し去つたのは、それから一時間後でした。彼は、此の後とも、芳蓮捜査について大石氏の助力を賴み、大石氏も進んでそれを快諾して別れました。

◇驛頭の屍美人

翌朝になつて事件は急轉直下しました。

大石氏は、前夜、よく眠れないで今朝、眼醒めたのは、八時頃でした。朝の食事を濟ましたばかりのところに、金青年があ

わたゞしく飛込んで來ました。

『大石さん、大變です。大變なことになりました。これは、芳蓮に違ひありません。いゝえ、彼女です。彼女です。』血相變へて彼れが大石氏の前にさし示したのは、今朝の新聞でした。

『讀んで下さい。芳蓮に違ひありません。』

大石氏は、驚きながら、云はれるまゝにさし出された新聞の社會面に目を通しました。

おゝ、大阪驛頭の屍美人！　トランク詰の支那娘といふ標題、小誌が大石氏の心臓をひやりと刺しました。

『何につ、トランク詰の支那娘！』

新聞記事はかうです。東京發下ノ關行特急第△△號列車が午後九時二十分大阪驛停車の際同驛にて下車した會社員山崎甚四郎氏は如何に狼狽せるものか、下車の際隣客のトランクを自分のものと思ひ間違へて赤帽に渡した。山崎氏は、列車發車後、そのことを驛構内にて發見したので直ちに、驛員に告げて善後所置を賴んだところ、このトランクは、非常に重量重く手荷物携帶規定に違反して居り且つ外部に二三小穴を穿ち怪しき點もあつたので係員が開いて見たところ驚くべし、中には、妙齡花の如き支那美人の屍體が入つて居た。忽ち大騷ぎとなり其の筋に於いて直ちに右トランクの所持客並に、屍體の美人が何者なるかについて搜索を開始した。美人は、その服裝から卑しからぬ身分の者と、察しられるが山崎氏の言によると、氏の隣席にゐた客は二人連の紳士風、一人は非常な大男であつたといふ。

これは、午後十一時の大阪電話でありまして、東京の新聞の締切に漸く間に合つたもので、昨夜十一時後事件がどう發展してゐるかは、勿論、知るよしもないことでありました。

『さうです〳〵、芳蓮さんに違ひありません。』

大石氏も、あまりに事の意外に氣も轉倒せんばかりになりました。

『彼女は……彼女は、殺されました。大石さん、お願ひです。私は、これから直ぐに大阪に行き度いと思ひます。飛行機で急行させて下さい、そのお願ひに參りました。』

『いや、金さん、そのお願ひに及びませう。早速出發しませう。さあお出でなさい。』

兩人は、そのまゝ飛行場へ急ぎました。今日も、愛機隼號です。それから十五分と經たないうちに隼號の爆音がけたゝましく場の上空に響き渡りました。

西への進路を急ぐのです。

◇黄金鬼

可憐な美しき乙女芳蓮は、死にました。殺されました。彼女は、矢張、何者かに奪ひ去られたのでした。しかし、犯人は、……その憎むべき犯人は何者でありませう。

金青年の絶望悲嘆はどんなでありませう。大石氏の失望落膽も思ひやられます。今日こそは、ほんとに、隼號の快速も牛の步みの如く感じられたに違ひありません。

隼號が奈良の上空から大阪城東練兵場へ向つてゐる頃でした。

大阪M警察署内では、大男と小男の二人の洋服紳士が取調べられてをりました。兩人は姫路驛で昨夜捕へられ、同署へ護送されて來たものです。兩名とも最早觀念して犯行を自白してゐるのであります。

『うむ、で貴樣は、常に奉天の新聞を取つてゐたといふのだね。』

『はい、私は、滿洲に數度渡りまして何事か大仕事はないものかと常に狙つて居りました。そのため奉天の新聞を取つて居りました。』

『うむ。』

『二三日前に屆いた新聞に奉天軍の輕氣球が盜まれたといふ記事が出て居りました。その翌日屆いたものに、李寛良の娘芳蓮の失踪記事があつたのを見たのです。李家が奉天随一の長者であることはかねて知つて居りましたところ恰度その新聞には李家の名で娘の所在を知らせてくれたものに一萬元の謝禮をするといふ廣告が出てゐたのでございます。すると其日の東京の新聞に、氣球に乘つて漂浪して來た支那娘の記事が掲つてゐたのでございます。私は、奉天新聞と讀み合せてどうしてもその支那娘が李家の娘でなければならぬと思つたのです。別に理由は發見しませんでしたけれど、前後の關係からさう直覺したのでございました。そして、それに間違ひはありませんでした。』

『うむ、それで一萬元の金に眼が眩み娘を奪ひ出したのだね。』

『包み隱さず申上げますが、實は、馬賊に五萬元位に賣込むつもりでした。李家の娘とならば十萬元でも馬賊は買ひます。彼等は、その上、二十萬元も李家に要求するでせうから。』

『實に怪しからん、で、貴樣が娘を大石氏の宅から奪ひ去つたのだね。』署長は、大男の方に向き直りました。

『はい。この大浦さんの指圖でさうしたのでございます。大浦さんは私の先輩です。』

『その顚末を申立てろ。』

『最初の晩は、あの飛行家の家に放火して、その騷ぎにまぎれて、娘が出て來たのを奪ひ去らうとしましたがうまく行きませんでしたので、翌日は夕方のうちに家人のすきを見て家内に忍び入り床下に潜んで居りました。夜中に這ひ出して、密かに二階に上り娘の樣子を窺ふとよく眠つて居りました。大浦さんは藥品に精しい方で豫め私に、多分クロロホルムであつたらうと思ひますが、渡して置かれましたので、それを娘の鼻先へ嗅がしたのでございます。娘は、眠つたまゝ假死の狀態になりましたので靜かに背負うて家人に氣づかれないやうに、裏口から外に出たのでございます。裏口は、鍵がかゝつて居りませんでした。それから大浦さんと示し合せて、計畫通りにうまく運んだのであります。午前の汽車で滿洲に向ひましたが、大阪で、つい、こんなことになつてしまひました。トランクに詰める前

に、大瀬さんは、嬢に更に何か薬品を作用しておられるやうでしたけれどその ことについては、私は、よく存じて居りません。』

大男がこゝまで自白した時でした。警察署の前に自動車が止りました。大石氏と金青年とが駈け込んで來ました。

『私は大石です。支那婦人事件について參つた者です。』

『どうかすぐにお案内を願ひます。芳蓮の屍體は何處にございませうか。私は、彼女の身寄の者です。』

大石氏と金青年は直ちに案内を乞うて署内に入りました。署長は、兩人を招じて、昨夜來の事件のあらましを告げて、犯人も既に逮捕された旨を知らせました。

『實は、只今、犯人も逐一犯行を自白したところです。しかし、事實は、あまり御心配なさることではないかと思ひます。』

さう云ひながら署長は、兩名を別室に伴ひました。そこには、臺の上に芳蓮の可憐な屍體が横たへられてありました。逆境に逆境を重ねた芳蓮は、實に可哀さうです。彼女の死體は、それでも、何と美しく活々としてゐることでせう。

『芳蓮！ 芳蓮！』

涙の聲を震はせて金青年は、彼女の屍體にすがりつき、かき抱き頰ずりしました。支那語なれば何事か解せぬけれど、彼は、生きる戀人に話す如く思慕の情を訴へ泣くのでありました。大石氏の顏もどんなに曇つてゐたことでありませう。

おゝ、芳蓮の手が動きました。美しい眼が開きました。

『芳蓮！ 芳蓮！』金青年は、狂喜して叫びました。大石氏も思はず『芳蓮さん。』と叫びました。芳蓮は活き返つたのです。生きてゐたのです。

『芳蓮！ 芳蓮！』呼びながら金青年は、彼女の胸を抱き起します。芳蓮は、暫し茫然と洞ろの眼を見張つて居りましたが、やがて彼女の瞳は、眼前の戀人を認めました。

讀者諸君、久方ぶりに相會ふ戀人同士の抱擁が如何に切實なものであつたか、それは、こゝで精しく叙述する必要はありますまい。諸君の想像に委せておきませう。大石氏も、兩人の抱擁を見ることがどんなに悦しいことであつたでせう。

『いや、私もこれで、安心です。芳蓮さんが生き返られようとは實に神運でした。我々は全く絶望して參つたのです。』

署長も悦しさうでした。

『皆さんの幸福を祝びます。しかし最初からお令孃の生命には別狀はなかつたのです。犯人にとつては、お令孃の生命が必要でしたから。たゞ、途中、發覺を恐れて、假死の狀態としてトランク詰にして滿洲へ連行しようと企てたまでゝすから只今薬品の効力が盡きたのです。』

◇幸福な空の旅

皆なの人々に幸福が戻つて來ました。

幸福な空の旅です。東京への歸還飛行なのです。大石氏は、金青年と芳蓮とを乘せて歸るのでした。

大石氏は隼號の操縱ハンドルを持ちながら、東へ飛揚しつ

つ考へるのでした。

『いや、實にめまぐるしい三日間であつた。しかし、總てが無事に納まつてこんな喜びはない。だが、あんな場合は、何んでもないことまで、怪奇に思はれるものだなあ。ふん。』

芳蓮が名前を明かさなかつたのだつてさうです。今にして考へるとなんでもないのです。彼女は、氣弱いねんねな乙女で東京にゐる戀人に、自分が、張除に誘拐されたことを知られ、捨てられはせぬかを恐れたのです。そのことを新聞に出されることを恐れたまでだつたのです。あの足跡の一件でも解けて見れば何んでもないではありませんか。あの巨大な足跡——あれが犯人の一人、大男のそれであつたことはいふまでもありません。夕方から床下に忍んでゐたのだから、そして、驟雨は、夜中前であつたれば、去つた足跡ばかりしかない筈です。

『しかし、あの下駄の跡、あれは一體どうしたものであらう。』

これには、大石氏もちよつと困りました。しかも犯人は、裏口の鍵は開いてゐたと自白してゐるではありませんか。

『此奴には、困つたな、しかし待てよ。』

氏は、飛びながら、考へて行きます。隼號はもう伊勢灣を横斷して東海道にかゝつて居りました。

氏は不圖何事かに考へ及んで、ふゝんと笑ひました。

『畜生、お杉の奴、男を持つてゐやがるな。』

さうです。さうでなければ、この下駄は解決が出來ません。お杉の戀人は、あの驟雨前に忍び込んで來たものらしい。そして、犯人が仕事を終つて去つた後、犯人と反對の方へ歸つて行つたものだらうと思はれます。お杉の部屋は、玄關の横なのです。事實彼等も、犯人の仕事には氣づかなかつたに相違ないのです。翌朝、お杉が裏口も表戸も鍵に別狀はなかつたといつたのは、自分の秘密を隱すためで無理からぬことでありました。

『ふん、馬鹿々々しい。彼奴、うんと、とつちめてやらさなるまい。』けれども、大石氏の唇には、云ひしれぬ微笑が浮んゐます。心も空も晴れて居ります。

幸福な空の旅です。若い二人は、抱き合つてゐます。

行手には富士の靈姿が見る〱うちに大きく近づいて來るのでありました。

（完）

次號には　どんな探偵小説が出るか？

本誌の探偵小説は毎號大變な評判。いよ〱出でいよ〱面白いと、賞讃の書狀は每日机上山を成す有樣。これに氣を得て、更に奮鬪、次號以後を飾るべき眞に素晴らしい探偵小說數篇を得ました。花か、紅葉、何れ優り劣りのない力作ばかり、目下どれを掲載すべきか考慮中でございます。

魔法博士の鞄ならねど、聲に應じて跳び出すは寶玉か、黄金か、鬼か、蛇か、どうぞ次號を御期待下さい。

考物智惠くらべ番附

横綱　削れば削る程長くなるものは何？（鉛筆の心）
大関　しないでするものは何？（撃劍）
關脇　前に生れたもの程若いものは何？（電話番號）
小結　金を出してかつて貰ふものは何？（頭髪）
前頭　寒いと延び暑いと縮るものは何？（氷柱）
同　切つても切つてもへらぬものは何？（トランプ）
同　使へば使ふほど増すものは何？（知識）
同　眞直で眞直でないものは何？（曲尺）
同　退けば勝ち進めば負けるものは何？（綱引）

前頭　白くて黒いものは何？（影法師）
同　高ければ高い程安いものは何？（丸ビルの家賃）
同　食へば食ふ程多くなるものは何？（年齢）
同　高い所へ落ちるものは何？（入札）
同　つまらない方がよいものは何？（煙管）
同　重くなればなる程輕くなるものは何？（病の體重）
同　一人で滿員になるところは何？（便所）
同　ふかない中が奇麗なものは何？（雑巾）
同　眼の前にあつて見えぬものは何？（眼瞼）

行司
目で見ないで口で見るものは何？（味）
口がなくつて歯のあるものは何？（足駄）
大きければ大きい程通るものは何？（針のめど）
若い時に白髪なものは何？（毛筆）

横綱　おればおる程長くなるものは何？（織物）
大関　敵に後を見せて勝つものは何？（ランニング）
關脇　賣れないで儲るものは何？（草臥儲け）
小結　いる時にいらないものは何？（風呂の蓋）
前頭　食はないでくつて見るものは何？（暦）
同　骨を折ると損をする商賣は何？（傘屋）
同　盲の人でも見えるものは何？（夢）
同　幾ら切つても元通りになるものは何？（水）
同　人の口で飯を食ふものは何？（歯醫者）

前頭　生前でなく死後に鳴くものは何？（法螺貝）
同　薄ければ薄い程あついものは何？（懐爐の包）
同　寒いと寒い程あつくなるものは何？（氷）
同　目に見えないで節のあるものは何？（唄）
同　立てば低くなり坐れば高くなるものは何？（天井）
同　大きければ大きい程安いものは何？（品物の疵）
同　割つても割つてもこはれぬものは何？（算盤）
同　骨の中に肉のあるものは何？（蟹）
同　飲まないで酔ふものは何？（汽船）



新作講談

よく耐へた秀吉

眞下醒容
挿繪 伊藤彦造

（一）

清洲の第一次會合で、秀吉をいぢめぬいた柴田勝家も、今日ばかりは何にも言はず、どうやら無事に治まりさうだ……と、皆が喜んでゐると、それも束の間、果然、彼の眼は段々すわつて、一脈の凄味を帶びて來た。と同時に、じり〳〵と秀吉の方へにじり寄つて來た。すはやと滿座、覺えず顏色を變へる。ただ一人、當の秀吉ばかり憎らしい程、落着いたものです。にこにこしながら、

『ハヽ、これはお元老には、大分好い御機嫌で……。』

と柳に風。態よく小口を滑られて、勝家、一寸たじろんだが、

『いや、先般は思はぬ御無禮をしたつた喃。』

てれ隱しの辯解といふやつ。

『なんの、拙者こそ……。』

『兎もあれ、これからはお手前と拙者、一切の私情は捨て、何事にも胸襟を開いて天下

の政道を談じ、先君の御遺業を完うするやうにせねばなるまいて喃。』

大きいところを見せる。

『御覧の通りの未熟者、何分、よろしくお引廻しの程を……。』

『ついては筑前！　これより一つ、亡君思召のお盃といふを酌み交し、更めて、水魚の交りを致さうではないか。』

髯深い顎をしやくると、豫て言ひ含めてあつたものか、前にゐた小者が、つと立つて、持つて出たのが一升入りの大盃。勝家、静かに執つて、秀吉に差し、

『イザ、この大盃を乾けて、拙者へ賜はれ。』

突きつけられて秀吉、思はず當惑の眉を寄せた。實は此方は餘りいけない。それに引きかへ、勝家は斗酒なほ辭せぬ酒豪です。言ふことは如何にも親切さうだが、内心困らしてやらうが目的であることは見えすいてゐる。——だが、先君の思召てふ由来因縁つきの盃であつてみれば、無下に辭むといふわけにも参らぬ。

『では、有難く頂戴いたす。』

ほんのチョッピリ飲むつもりで、その大盃を手にすると、

『おつと、待つたり！　そのお酌なら拙者が致さう。』

弾丸のやうに共座へ飛び出したのは佐久間玄蕃、イキナリ小者の手から、長柄の銚子を奪ひとりました。

呆れて目を瞠る秀吉をじろり睨めつけ、憎さげに笑ひながら、

『ハッハッハ。何もさうビクつく事はあるまい。筑州殿は天下の勇士、白い綺麗なお手々よりかも、俺がのやうな、むくぢやらの酌の方が、ズンとお好きぢやつた筈。な、さうおやろ？……さ、出さッしやい……や、や、溢れさうになつたぞ。さ、遠慮なく呑んだり／＼……。』

（二）

百萬の大敵にも笑つて向ふ秀吉だが、これは流石に持てあました。名に負ふ大盃、觸れば溢れんばかりに波々とつがれたのを、迷惑さうに捧げながら、

『こ……これは!?』

と、眼を白黒してゐる。

『さ、さ、早く飲まんかい。』

『筑州、待つてる者がござるぞ』

と、玄蕃と勝家が、交る／＼急き立てる。絶體絶命、秀吉も觀念して、眼をつぶり、一口グッとやる。つゞいて又一口。が、元來がいけぬ口、そこへ酒が一升入と來てゐる。お猿さんが人中で、熱いお茶でもすゝるやうな事をしてゐたのでは、一日かかつても、飲み乾せるわけのものではございません。

一口のんでは休み、二口呑んでは溜息をついてゐると、又しても鬼瓦が、秀吉の顔と盃の間へぬッと出て、

『こも意氣地のない、筑州、早く飲まんかい。お元老がお待ちかねぢやぞ!』

切羽つまつた。では、どうでも乾さねばならぬか、と鉛の熱湯でも飲むやうに觀念して、やをら大盃を口元へ! と、その際である――

『アイヤ、羽柴殿!』

勵聲一番、小山のやうな身軀を動かして、のつそりそこに現はれたのは、誰あらう、中川清兵衛清秀――織田の家臣中で唯一の秀吉黨です。

『これは羽柴殿とも覺え申さぬ。貴殿、近頃身體を傷められ、酒類お愼みあるとは、吾等一同承知のところ。それに何ぞや、その大盃、無理飲みして體をこはすお積りか。よう心得られよ、貴殿、今は畏れ多くも一天萬乘の大君より、禁裏守護の大任を仰せつけられある御身では御座らぬか。また先君亡き後の織田が家は、正しく危急存亡の秋、一人百人に當る、人を要する、此の時より急なるはない。それを今、大酒暴飲のために見す見す身體を損ねんとせらるゝ、若しその爲にお役が勤まらぬとあつたとき、上禁廷に對し奉り、



又一つには先君の英靈に對しても、貴殿、何と申譯なさるゝ氣か、これにまさる不忠は御座るまい。然るに、承はれば右大臣樣思召のお盃とやら、ならば一口でも口にする以上、禮に缺くる處もござらぬ筈。その上の無理呑みは、右の大不忠ぢや。

だによつて、その殘酒は、拙者が代つて頂戴いたさう。……どれ、こちらへ……。』

言ふが早いか、秀吉の手から件の大盃を引つたくるやうに――と見る間に、ゴク／＼／＼と、宛ら長鯨の百川を吸ふが如く たゞ一息に呑み乾してしまひました。

一面から見れば隨分、傍若無人の話だが、これ暴を制するに暴を以てせし淸秀の奇智。――秀吉の心は、それをどんなに嬉しくも亦有難く感謝したことでありませう。

それだけに、玄蕃の顏は變つた。ふくれた。が、對手が口でよし、腕でよし、何方からでも持つて來いと云ふ豪傑だから、こともとうつかり手出しは出來ない。詮方なく澁面つくつて、『おい、中川！　お身の出る幕ぢやない。引ツこんどれ！』

『アハヽヽヽ。』

『な、なにがアハヽヽアだ？』

『まア、佐久間、さうむくれずと、もつと注げ！』

『なにツ？』

『いやさ。何でも、呑める者が、どつさり頂戴して、飲めん者は無理強して身體を壞さぬやうにする、そしてお家のために骨身惜まず忠節を盡し合ふ。今の場合、これが先君への何よりの



忠義といふものぢや。……喃お允老、さうではござらぬか？』

玄蕃だけでは物足らぬと思つたか、到頭、その一軒置いて隣りの勝家の口にまで、チクリ留めの一針は、拔目がない。何か言はうとして、口をモガ／＼してゐた勝家も、機先を制せられて、『チエツ……。』と、横を向いてしまふ。

『アハヽヽヽ、何しても甘露ぢや〳〵。とりわけ玄蕃殿の、毛むくぢやらのお酌と來たら、天下逸品ぢや。さア否らずと、もう一杯注いでくれんか。』

　盃をつきつけられては、注がない譯にもいかない。玄蕃は苦い顏をしつゝも注いでやる。清秀は、ゴク〳〵〳〵と、見る見る空にしてしまひます。

『おい、佐久間、もう一杯だ。』

(三)

一座はまた、もとの陽氣に復りました。たゞ勝家だけは苦い顏を濃してゐる。折角、問題になりかけたものを、思ひがけずも清秀によつて壞されて了つたのが、癪で癪で堪らないのです。

　彼は、大小さま〳〵の盃が、又も飛ぶやうに諸將士の間を往つたり來たりしてゐるのも外に、ひとり、肱を枕にごろりと横になつた。寢たふりをして、實は次の執るべき道を考へてゐる――それも長いことではなかつた。にやりと北叟笑をすると、徐々に鎌首を持上げて來ました。

『ときに、筑州……。』

『お、これはお目覺めか。水でも持たせませうか。』

　又かとは思つたが、流石に如才がない。

『ハヽヽ、水も何だが、その前に一つ、貴公のお肴が貰ひたいものぢやが。』

『ほ、ほう、拙者の肴を……。では、こんなものでも……?』

　ぬからぬ顏で、秀吉が摘みあげたのは、皿の上の輪ぎれの大根二つでした。

『いや〳〵、拙者の所望は、そ、そんな肴ではない。』

『ほ、では、すてゝこでも踊りますかな。』

　眞顏になつて云ふ。勝家も思はず苦笑したが、

『實はな、筑州。貴公もかねて知つての通り、拙者、先君から越前北の庄を賜はり、只今は北國七州の管領職。それがため、あの遠い北の庄から、はる〳〵此の淸洲まで出て、政を見るといふことも、一寸できんと云ふわけでの……。』

『いかにも。』

『とは言へ、今、北の庄を捨てるといふ事もならず、實は當惑の體ぢや。そこでな……。』

『どこで御座るか?』

『解らんかな?』

『少しも……。』

『さて〳〵、ふだん血の環りの良い貴公にも似合はん事ぢや。』

『恐れ入りまする。』

『――つまり、その、何ぢや……一時、貴公が居城された、あの江州長濱の城な。あれを一つ、拙者、けふの酒の肴に……つ

まり貰ひたいと思ふのぢやが。』

『………。』

『それとも、駄目かな……？』

勝家の凄い眼が、ギョロリ光りました。

何といふ蟲のよさであらう、彼の無理難題はもう一再ならぬ事である。かねて期したる事ではあつたが、思ひ設けぬ此の一太刀には、流石の傑物も、一寸息塞つたかたちでした。

無理もない。そこにはまだ眷屬が殘してある。しかのみならず、江州長濱五萬石、小祿ながらも秀吉にとつては、忘れ得ぬ最初の出世城である。名もない足輕から幾辛酸を甞めつくして、初めて一城の主になつた記念の地である。今では播州姫路が、その本城となり、長濱へは別に城代を置くやうになつてはゐたものの、この思ひ出多き地を、誰が故なく手放したからう——そこを附けこんだのが勝家で、知つて、出來ない相談を持ちかけたのでした。

『スハ、また始まつた！』

今までの賑かなさんざめきなど何處へやら、滿座の大將、酒の醉も醒めるばかりに緊張して、思はず其の方へ眸を合せた。

その折しも、

『これ、筑前！　お元老が、あのやうに强う御所望ぢや。なぜ早く返事をされん!?』

（四）

思慮あさい、恥知らずの玄蕃が、又ぞろ破れ聲はりあげ、今にも喰ひつきさうな劍幕で詰め寄つて來たのを見ると、秀吉は、

『あアハヽヽ。』

と、取つて着けたやうに笑ひ出しました。

『お、おのれ、又、人を愚弄するか！』

併し秀吉は玄蕃などには見向きもせず、勝家の方に向き直つて、

『實は、お元老御所望のお詞が、餘りに意外……といふよりも、ちと大きすぎた爲めに……。』

『それ故、應じられぬと申すのか？』

今度は、勝家がキッとなつた。

『いや何に、それがため一寸喉へ痞へたまでのこと。それで言葉が一時途切れ申した。』

この鮮かな應酬ぶりには、滿座思はず失笑。

『それに長濱の城と申せば、御存じの如く、拙者、淺井（長政）追討の功により、始めて先君より拜領いたした、いはゞ出世城。さればこそ當時先君よりも、（この長濱は其方の出世城ゆゑ、決して他人の手に渡すでないぞ）と、呉々も仰せられた一言、拙者、今以て肝に銘じて忘れませぬ。その因緣深き長濱を

者にとの御所望ゆゑ、こりや意外とも存じませう、咽喉に痞へも致しませう。なれども又翻つて考へますれば、餘人ならぬお元老の仰せ御主君同様の柴田殿の御所望とあつて見れば、お辭儀は却つて失禮、いや〳〵辭むどころか、拙者は、欣んで、熨斗つけて差上げるで御座りませう。』

『では何か、あの長濱の城を、この勝家にお與りやるか？』

まさか？　と思つてゐた、そして否といはゞと構へてゐた。それが事もなげに熨斗つけて進上と出られたのだから、勝家のあつけなさ、重ね〳〵の當てはづれの失敗、腹の底ではどんなに薬を費しても、言葉にそれとは言ひ得ない。玄蕃は玄蕃で、盛れあがつた拳を見つめて、聲も起て得ぬあはれさであります。

山雨將に至らんとして、風樓にはち切れんばかりになつた其の日の會合は、斯くして又もお開きといふ事になつてしまつた。

（五）

『さて、各々、折角お招きしても何もござらんが、酒だけは孤で用意いたさせた心措きなく乾して下されい。』

勝家、今日は珍しく機嫌が好い。みんなの顏が揃ふと、笑顏を作つての挨拶です。それから小者に命じて、やたら無性に、大將連の間を注いで廻る。

――急を聞いて集つた織田家の大將連も、先君の跡始末が一段落ついたので、一先づ二三日中に、それ〳〵自分の持城へ引揚げることになつた。そこで、織田家の元老として、勝家は、その名殘りの盛宴を假邸に開いて、一同を招待したのでした。

七月九日の夕。

短檠に火が這入り、宵闇の彼方から流れてくる涼風が、裏縁から忍びよる頃になると、誰の顏もが櫻色になる。

とりわけ、主人役の勝家の顏は赤い。――醉ひが廻ると、

『どうも、人間の運ほど分らぬものはない喃……。』

そんな事を言ひながら、彼は無作法にも又、ゴロリ、横になつたかと思ふと、赤く血走つた眼をジロリ秀吉の方へ向けて、

『喃、さうではないかな、筑州！』

と、からまつて行く例の癖。『そら來たぞ！』秀吉は警戒しながら、ぬからぬ顏で、

『お蔭樣で、拙者、最早快よく酩酊いたして……。』

『ハヽヽ、さう逃げ腰を打たんでも宜いわ。例へばさ、貴公にして見てからが喃。』

『名もない足輕からでござるか！』

先を越された勝家、さすがに顏を顰めたが、

『さうよ、喰ふや喰はずの水呑百姓の子倅がさ、昇りも昇つたり、今ぢや播州一國のお地頭さまぢやから喃。』

『思へば、勿體なう存じまする。』

『それも、これも、みな亡君のお蔭ぢやぞ。咽喉もと過ぎれば熱さも忘れるぞ、人は兎角出世をすると、つい苦しかつた當時の事を忘れたがるものぢや。……ぢやが、貴公に限つて、先君の山海御恩といふを、よもや忘れはすまい喃。』

『仰せまでもない。先君の御鴻恩は、片時寸時も、忘却いたした事は御座りませぬ。』

『ハ、、、口先ばかりは、の……。』

『いや、弓矢かけても。』

『…………。』

勝家は、何思つたか、暫く默りこんでゐたが、やがて語調を更へて、

『それはさうと筑州。……もう二十年の昔になるか、喃。』

『何がで、ござります？』

『貴公が藤吉郎と呼ばれた時分に、よく拙者、貴公から按摩をして貰つたものだが、顔に似合はぬ其の巧者な揉みつぷり………。勝家いまだに忘れられんがな。』

例によつて傍若無人な言ひ草、併し秀吉は、もう慣れてゐます。

『ハ、、そんな事もありましたつたかな。』

『さういへば、今宵も何だか、酒飲んだあとが、いやに肩が張り、足腰が凝つて、どうもならん。……こんな時に又、按摩でもして貰つたらば、と思はんでもない。が、貴公も今では昔と違うて、堂々たる羽柴筑前守。――ハ、、、まさか按摩を頼むわけにも行くまい、喃……玄蕃！』

意味あり氣な眄し目を、ジロリ、玄蕃へと注ぐと、お調子者の玄蕃のこと。

『おい、筑前！　お年老様が、貴公の按摩を所望だとよ！』

（六）

おい君、すまんが一寸僕の足を擦つてくれないか。など云ふ事は、階級打破の呼ばれてる今日でも、一寸言ひ難い話。又そんな事を云へば、たとへ友達の間でも『馬鹿！』の一喝に蹴飛ばされてしまひます。況してや其頃は、階級制度の恐ろしく嚴ましい時代。僅か一萬石位の大名の、その陪臣の、その又家來の眇たる小者でさへも、武士と名がつく以上、同輩の足腰なんかを撫で擦ることは、この上もない恥辱とし、一命を賭けても爭つたものであります。それが人もあらうに、三十六萬石の大殿樣に對し、しかも、天下諸將士環視の前で、同輩の按摩せい、と言はれたのだから、

『いかな秀吉でも、こればかりは……？』

と、一同ハラ〳〵してをりますと、これは又、意外、當の秀吉は顏色一つ變へないで、

『ハ、、、、何かと存じたら、拙者の按摩が御所望とござるか。いと易き御用。但し、もう久しく致さぬので、以前のやうには參らんかも知れ申さぬ。が、……どれ、それでは一つ揉んで進ぜませうかな。』

と、氣輕に傍へ膝行り寄つて行くのでした。大紋の袖刎ねあげるなり、

『くたびれた人を掴んで喰ふ按摩――か、ハ、、、。』洒落など言ひながら、勝家の背後へ廻り、腰の邊りから、小器用な手つきで、ゴシ〳〵と揉み出したものです。

一座、啞然。中には見かねて、顏を外向けた者もあつた。ましてや當の勝家、まさか？と思つたのが――又負けた。傲岸不遜、人を人とも思はぬ彼も、この時ばかりは流石に氣まり惡く、身内のくすぐつたくなるを感じたが、大勢が視てゐます、今更冗談だとも言へません。仕方なく眼を瞑つて、グウ〳〵と狸寢入……。

秀吉はやがて一通り揉み終ると、靜かに自分の席へ戻つた。愧ぢらふ色もない、平然たる其の顏を見ると、玄蕃の顏がサッと朱を濺いだ。

『これ、筑前！』彼は耐りかねたやうに飛び出して、『貴、貴公、今の醜態は、ありや何ぢや。』

『……。』

『き、貴公は今、播州一國の主ではないか！いくら誰人に頼まれたからとも、中國の探題ともあらう者が、人の足腰を撫でさするとは何事ぢや。武士の風上にも置けぬ奴！』

『……。』

こんな無茶な話はない。自分から揉んで進ぜよと勸めておいて、さて揉んで進じたから不都合だといふ。秀吉は呆れてしまつて、何も言はず、ニヤリ〳〵してゐる。

『わ、わらひ事かい、馬鹿ッ！これが假に俺だつたらば、その場に於てズタ〳〵に斬りさいなまれようとも、誰が朋輩なんかに媚び諂つて、その足腰を擦るやうな、骨なしの、意氣地なしの、馬……馬鹿な眞似が出來るものか！』

『……。』

『ヤイ、猿面！推ふに貴樣、やつぱり生命が惜しんだらう。それと云ふのも、心に大望を懷いてをるからぢや。後日爪を伸さうと二心に違ひない。さア、どうだ、それに違ひあるまい。泥を吐け。猿面！！』

憎惡に充ちたその眼、憤怒にへ、へし曲つたその脣、――握りしめた巨大な拳を、ワナ〳〵と顫はせながら、歩一歩、秀吉の

身邊に近寄つて行く。あはや、鐵拳亂打、危機一髮！と一座は思はず腰を上げた、その刹那、さつと躍り出て、ドカリと二人の中へ大きな胡坐をおろしたものがある。
『待て、佐久間、そりや何を言ふ？　貴公、喧嘩を賣るつもりか！』
例の中川清兵衛です。

（七）

『や、やかましいわい。そこ退け！』
寸鐵、みごとに圖星を指されて、玄蕃はひどく面喰つた。
『いゝや、退かぬ！』
動かざること泰山の如し。こんどは二人の睨みあひとなつた。
見かねて、二三の者が、また出て來て、いろ／＼に言ひ宥める。玄蕃も今は八方塞がり。無念ながら此の上おし切るわけにも行かぬ。ブツ／＼言ひながら、二三歩後へ退く。その途端、
『カッ！』と吐いた青痰は秀吉が晴れの大紋の袖を汚した。
だが、秀吉は、子供の惡戯ぐらゐにしか思はない。袖にかゝつた汚いものを、しづかに押拭つてから、
『佐久間殿……。』
玄蕃の心の沈まるのを待つて、やさしく懇ろ呼びかけました。
『な、何が佐久間殿だ！　賤技武士の夜迷言なんか、この玄蕃は、聽く耳持たぬわ!!』
『貴殿は、その昔、聖武帝のお后が、深く佛道に歸依して、誓願を起されたお物語を御存じないか。』
『へん、聞いた風な說教なんか、措いてくれ！』
『でも、貴殿にとつてまんざら無益の說法でもござるまい。』
そして、諄々と語り出したのは、聖武帝のお后――光明皇后が、あつく三法に歸依し給ひ、一千人の垢を擦りとる大願を立てて、九百九十九人に及ばれたところ、次いで千人目にやつて來たのが、生憎、二目とは見られぬ癩病やみの乞食であつた。手も足も顏も膿み爛れてゐる其の女の乞食から、膿を吸つてくれと賴まれると、皇后は嫌なお顏もなさらず、即座にお口で、それを吸ひとつておやりになつた――と云ふやうな例を、幾つも擧げて、
『尊き皇后の御身ですら、猶且つ斯くの如し。ましてや拙者、氏もなき匹夫より身を起せしもの。それが天下の大業半ばにして、賴み奉りし主君を失つたのでござる。九州は愚か、未だ近く西には、毛利、吉川、小早川の諸家、厳然として雄を稱し、東には北條、北には上杉、四國には長曾我部、英雄豪傑、虎視眈々、手ぐすね引いて機の到るを待つ有樣。從つて御當家の危

きこと、風前の燈火とも申すべきか。然るに、これ等の豪傑が敢て兵を我れに向け得ず、ぢつと、形勢を見てをる理由は？　これ言ふまでもなく、こゝに在はす元老柴田殿を首め、列座の諸將士が、心を一つにし、幼君を補佐し奉ればこそではござらぬか。……にも拘はらず、今、一旦の怒りに任せ、貴殿が言はるやうに、柴田殿と刺違へて相果てたら何となる？　これまでにした織田家の礎石も忽ち壞れ、四方の敵將、一齊にそゝり起るは、火を睹るよりも瞭かな事。かくては先君に對し奉り、この上もなき不忠不義。……秀吉が身にかへて悲しむは、卽ちここの道理でござる。』

『……………。』

『ましてや、柴田殿は織田家の元老。その元老の足腰を、尾州の土民から成り上つた拙者が、撫で擦つたからとて、さまで恥辱とも思はれん。それがし、只今、御當家の爲を念ふに急にして、身の恥を顧みる暇なぞ少しもござらぬ！』

『……………。』

『拙者の心中、お分りでござらうな、佐久間殿。』

あせらず、激せず、言ふところ、理路整然、立板に水の能辯です。眞情を籠めて、釋明し終はると、秀吉は淸々しい眼光で、苦りきつて横を向いてる玄蕃の顏を、ぢつと見つめました。



『チエッ、どうせ口から先に生れた男、言ふ事だけは、いつも巧者ぢや。』

窮した玄蕃は、こんな捨臺詞でもいふより外には能のない男。でもそれ



はまだ可愛い。勝家に至つては、灯に反いて長々と寢そべつたまゝ、見えすいた狸寢入りの高鼾といふ圖々しさです。

引けたのは、その夜の亥刻（十時）近く。醉歩蹣跚の、踏む足も危なッかしく、涼しい夜風になぶられながら、皆、それぞれ己が假邸へと歸つてゆく。

秀吉もその一人でした。すると、その背後から、見え隠れに跟いて行く一人の怪漢がある。月が餘程、邪魔になるらしく、影のとぎれた處、木立の疎な

處へ來ると、一寸間を置いては馳け出します。又、或る處では四つ角になつたり、わざと迂廻道したりして、密かに後を尾けてゆく。

が、彼には、も一つの邪魔者があつた。それは何處まで行つても、從者の外に、大きな漢が、影の形に添ふ如く、秀吉の身に引き添つて離れないことです。

大きな漢、それは中川清兵衛清秀であつた。二人は何やら話し話し行つたが、やがて或る家の前へと來ると、

『羽柴殿、もう安心ぢや。では、いづれ、又……。』

『いや、これは中川殿、いかい迂廻道をさせて、お氣の毒でござつた。』

お互ひに一揖して、一人は自邸へ、一人は右の小路へと消えて行きます。

その後姿を見送つた件の怪漢、

『チエツ、又してもか！』

（八）

短い夏の夜も、はや四ツ半（十一時）……

勝家は、まだ自分の居室に、屈託らしい顔をして、ひとり、ぽつ然として、起きてゐました。うるさく寄つてくる蚊を、松葉いぶしで避けながら。

そこへ表から慌だしく馳けこんで來たのは玄蕃。彼はおそろしく息せき切つてゐます。

『伯父上、只今。』

『おゝ玄蕃か、早かつたな。首尾はどうぢや。』

『委細判然。』

『それは大儀。……供廻りは何の位か？』

『只今、忍びの者が歸つて來ての報告に、出發は八ツ（午前二時）供の人數は總べて二百五十ばかり。』

『なに、二百五十……とは餘りに尠ないな。……間違ひではあるまいの？』

『いや、念のため、鐵砲組、槍、馬の數まで調べたと申します。』

『何しても好都合ぢやつた。では此方は五百も……？』

『何の、不意打ちをくれるのに、三百もあれば十分……。』

『でも、用心といふ事もあるから、先づ五百……倍の人數は用意して行かさなるまい。……それから、諄いやうぢやが、彼奴をあのまゝにしとく事は、虎を野に放すよりも危險。されば今度といふ今度は、間違つても、討ち漏らすやうな……。』

『ハヽ、伯父上御安心なされませ。今度こそは、いくら何が居ても有つても、不意に躍りでて、前後左右から押包みや、袋の鼠も同然、やがて吉左右もたらせう程に、お心安くお待ち下されい。』

鬼をも拉ぐ屈竟の體軀と意氣と、身仕度で、逆りに逆つた手勢五百人を引きつれた玄蕃が、コソ／＼と闇に紛れ、清洲城外へと脱け出して行つたのは、それから間もない事でした。

一寸そこら迄と言つたやうな輕裝振で、秀吉がその假邸を出發したのは、十二日の午前二時頃。人數は正に玄蕃が探り得たるが如く三百人たらずの小勢である。途中、江州長濱に立寄り、城明け渡しができるやうにして、一先づ姫路の本城へ落着かうと云ふ豫定だつたのです。

（九）

『おい、その邊はどうかな？』

『うん、向うの松林の陰、あそこが可いかも知れないぞ。』

『さうだ、あれにしよう。』

玄蕃の手の者が、兵を伏せるに、どこか適當な地點もがな―と、探しに出かけて、街道から少し引ッこんだ。――その松林の近くまで行くと、何やら闇に蠢めく物があります。

怪しみながら、とつおいつ近寄つてみると、愕いた、人です。しかも大勢圍つてゐる。

『はて、これは……何者の伏勢か知ら？』

しかし、見咎められぬ中にと、一行は又、三四町先へ行つて見た。と、不思議、そこの堤下にも、岩陰を背に、百騎ばかりの一團が、黒く、鳴を靜めてゐるではありませんか。誰かなく、また三四町行つて見る。と又、そこの窪地にも百騎ほどかたまつてゐる。

それを聞いた玄蕃の不審は、いや增すばかり、

『これ、誰でもよい七八人、飛んで行つて、この先をもう少し見て參れ。――くれ／＼も氣取られぬやうにな。』

『はッ。』

月は重疊たる山巓にかげつて、曉近い空には、ぼやけたやうな星が、そこゝに瞬いてゐる。どこからともなく流れて來る犬の遠吠え、夢の世界からでも送られてくるやうな川瀬の音。

あるか無きかの涼風に、玄蕃は寢不足な頭腦をなぶらせながら、緊張の眼を据ゑてゐると、慌しい跫音がして、

『た、大變でございます。』

『な、なにが大變だ！』

玄蕃は胸をどらせて、半身を前へのめり出す。

『た、只今、この先を探つて參りましたが、どうしたわけか、二町置いては五十騎、三町離れては百騎と、どこまで行つても同じこと。いやはや、その軍勢の夥しさ、恐らく何千、いや何萬になるか解りません！』

『えツ、何……何萬とな？』

瞬間、物に無頓着な玄蕃も、ぶるぶるツと身ぶるひしたが、すぐ又、その後から、

『いや、事によると、他にも秀吉を怨んで、打取らうと企らみの者があるかも知れぬ――いや、それに違ひない……。』

兎に角、どんな樣子か、一つ調べてやれと、今度は御大自身、先に立つて。

と、なる程、斥候の言葉の通り、そこに一團、かしこに一群と、どこまでも／＼果しない伏兵で、動きも取れぬ。夜目にもしるく、鞘拂つた槍の穗先、いざと言はゞ直にも射ち出さん彈ごめの鐵



砲、筒先そろへた物々しさ。

『いかさま、これは大した人數ぢや。』

（十）

それにしても、これ程の兵を準備するとは、一體、どこの何奴か不知？　中國の毛利？　で無ければ四國の長曾我部かな？……そんな風に考へてくると、玄蕃はゾク〳〵する程、嬉しくなりました。

あの伏兵に取り圍まれたら、いかなる猿面でも、どうする事もなるまい。今度ばかりは手に血濡らさずして、敵を屠ることが出來ると云ふものだ。何しても、こんな有難い話はない……考へがこゝまで來ると、もうジッとしては居られませぬ。

『どんな狼狽へ樣をするか、こゝで高見の見物だ！』

とばかり、兵を纏めて、元來た方へ、サッ〳〵と引き返して參つた。街道からやゝ引きこんだ小高い丘、小松越しに展望の利くところに散解して、兵を伏せた。寢てゐて、秀吉の最期を眺めようといふ趣向です。

と、待つ間ほどなく、遙か向うの街道筋にあたつて、物々しい軍馬のどよめき！

『ソレ、來たぞ。』一同の眼が光る。唾をのむ……。



もう夜は明けてゐました。その清々しい朝風に飜へる幾流れの旗指物、煌めく千生瓢簞の馬印――と見ると、馬上の兜、槍、鐵砲の幾群……秀吉を圍んだ三百騎足らずの行列が、粛々として街道筋を上つて來ます。

『見ろ、今に、猿面自慢の千生も何も、滅茶々々に踏み潰され

て了ふぞ！』玄蕃が思はず手を拍つて、手も足もワク〳〵させてゐると、すぐ其處の土手下に隠れてゐた一團が、ムラ〳〵と動き出しました。と、見る間に、

『アッ！……。』『おや？……。』

これは又、何とした事か。今にも砂煙を擧げて、すさまじい亂闘激戰が展開されるものとばかり、極度の緊張味を以て期待した、その一場の活劇は、幕は開いたが筋が違ふ——その一塊りは、近づいて來た秀吉の一行の中へ、音もなく吞まれてしまつたのである。玄蕃の一行は開いた口がふさがらない。

物の化に憑かれたやうな貌をして、ぼんやり、其の方を見つめてゐると、その先の一團も亦、見る〳〵うちに、一行の中へ吸はれてしまふ。つゞいて又一團、また一隊、出るは〳〵、幾百とも幾千とも數知れず。だが出るほどの伏勢が、悉く瓢簞の中へ吞まれて了ふのでした。

『チエッ、又、猿面奴に計略の裏をかかれたか！お、己れ、憎ッくい奴！』玄蕃の眼はみる〳〵、攣りあがつた。抑へても抑へきれぬ憤怒の激情に、手は震へる、足は戰く、歯と歯を、ギリ〳〵と嚙み合せたかと思ふと、大粒の雨！彼は到頭、そこへ蹲踞つて、泣き出してしまひました。

求めてした事とは言へ、今度こそは、と堅く約束して、伯父勝家の前を出て來た彼としては、どんなにか口惜しかつたに違ひない。——家來達も見かねて、顏をそむけてしまふ。

[illegible]

に其の後を尾けて行つてみると、その伏兵と云ふのは、悉く秀吉の敵ならぬ加藤、福島、片桐、糟谷、脇坂、石川等の手の者であつた。

それが一屯ごとに數を増して、總勢實に二萬人。旌旗雲を蔽ひ、槍鐵砲は林をなして、嚴重を極めた警備の中に、秀吉は、馬上豐かに英氣颯爽、威風四邊を拂ひながら、江州さして乘りこんだのですから、玄蕃ならずとも、手の出しやうは無かつたのであります。

（十一）

これを聞いて、重ね〳〵の失敗に、怒氣頂點に達した勝家が、歯がみをなして無念がつた反對に、秀吉は、今、得意の絶頂にありました。それだけに身體も忙がしい。

久しぶりに姫路の本城に戻つて來たかと思ふと、もう入洛してゐます。それは身、禁裏守護の重職にあつたからです。彼はこの大任を果すために、山崎の寶寺に假城を設け、そこを足場として京攝の間を往返しつゝ、庶政を宰たのであります。

從つて、中央の政權は、自から秀吉一人の手に歸するかと思はれるばかり。居ること久しからざるに、五畿内の百姓町人は申すに及ばず、近國の大小名に至るまで、皆、その下風に聽き從ふやうになりました。越えて、十月の三日には、畏くも朝廷より、從五位下左近衞少將に任ぜられる——と云つたやうに、

[illegible]彼の滿悦や思ふべしです。

來る十月十五日、巳の刻を期し、紫野大徳寺に於いて、織田右府信長公の御本葬を營みたいから、萬障くり合せて、御會葬有之度……。

といふ意味の通知を齎らした飛脚が、秀吉の名で、八方へ立てられたのは、それから二日の後、卽ち十月五日の事でした。

右の通知は、織田家恩顧の大小名ばかりでなく、つい此の間まで、鎬を削つてゐた毛利三家や、上杉、北條、佐竹、德川などいふ天下の大諸侯にまで、それ〳〵發せられました。

勝家は果して怒つた。目も眩むばかりに怒つた。

『又しても彼奴のために先を越されたか。』

越前北の庄にあつて、初めてその通知を手にした時の彼は、さながら鐵棒でも吞まされたかの如く、片手に書面を握つたまま暫くは棒立になつてゐた。と見ると、次の瞬間には、それをズタ〳〵に引き裂いてしまつた。それでもまだ慊らぬか、はては狂氣のやうに、髮の毛を搔き毮りながら、座敷中をのた打ちまはるといふ騷ぎ。

終に發熱。それから床の中、やつと起きられるやうになつたのは、その翌々日の朝。

『くそツ、誰がそんな所へ參會なぞするものか！』

まだ餘憤が癒えぬ。無理もない。――する事、なす事、悉くが、齟齬し、失敗した。このまゝには何としても癇の虫が治まらない、是非とも腹癒せにやおかぬ……いよ〳〵突き詰めた最後の一念から來る十一月初めに、先君信長公の本葬を營み、[illegible]のお瀧川一益、現に四五日前も、その打合せで、上州廐橋にゐる一益の許へ、急飛脚を立てたばかりだつたのではないか……

……勝家が氣ちがひのやうに殘念がる所以は、そこにある。

だが、頭腦が少し落ちついてくると、さう怒つてばかりゐられない。やつぱり考へねばならなくなりました。

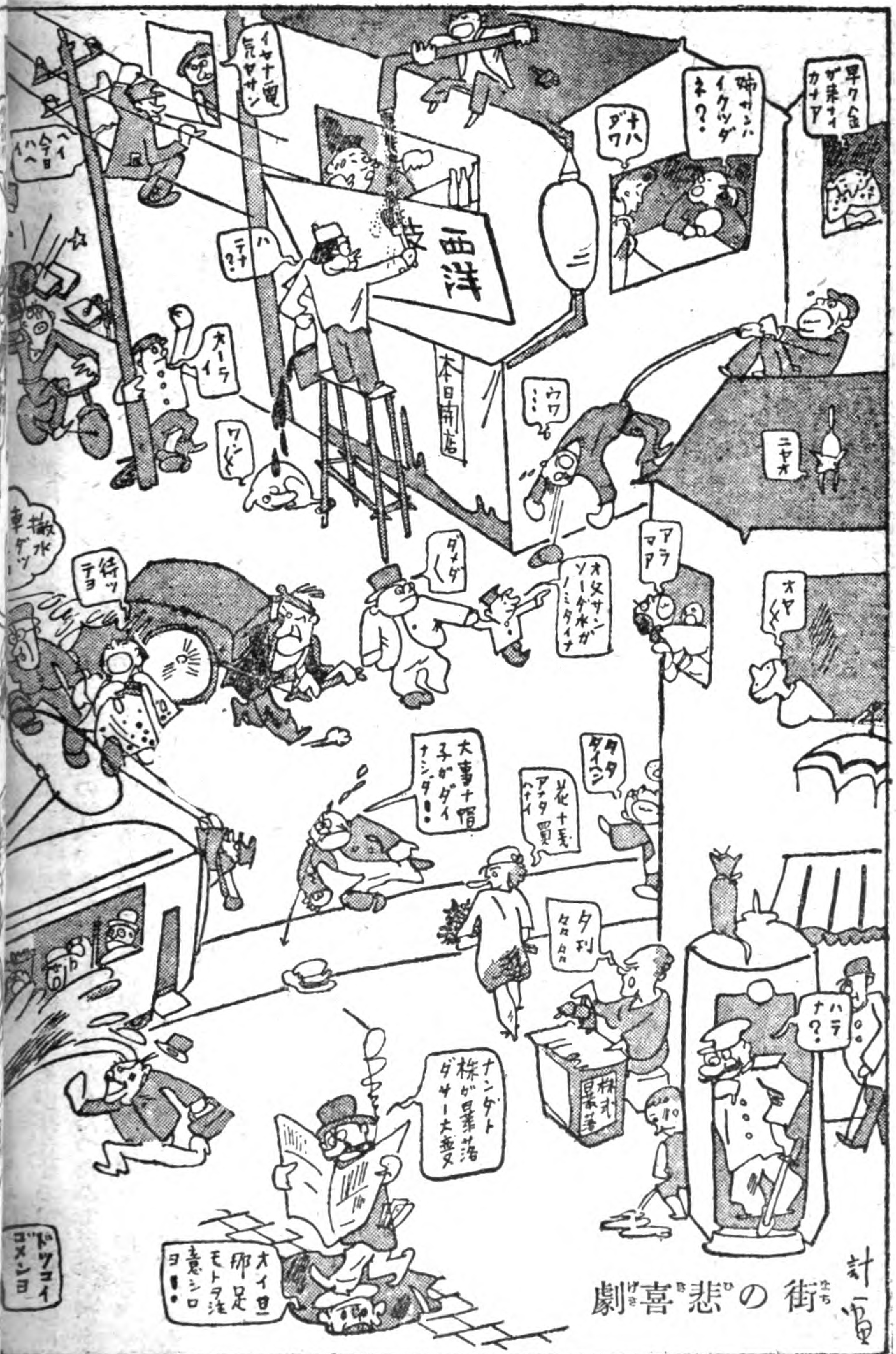
今度は御本葬のことだから、內々の者ばかり招んだわけではなからう。敵の毛利も、上杉も、それから德川などへも、それ〳〵招待狀を出したに違ひない。それだのに、若し俺が行かなんだら――織田家の近親者で元老たる俺が顏を見せないとあつては、尙ほの事、世間の物笑ひを招くばかり、全然天下の諸侯から俺一人が取り殘されてしまふ――こりや油斷のならぬ時機だ、と思ふと、たゞ拗ねてばかりも居られなくなつたのです。

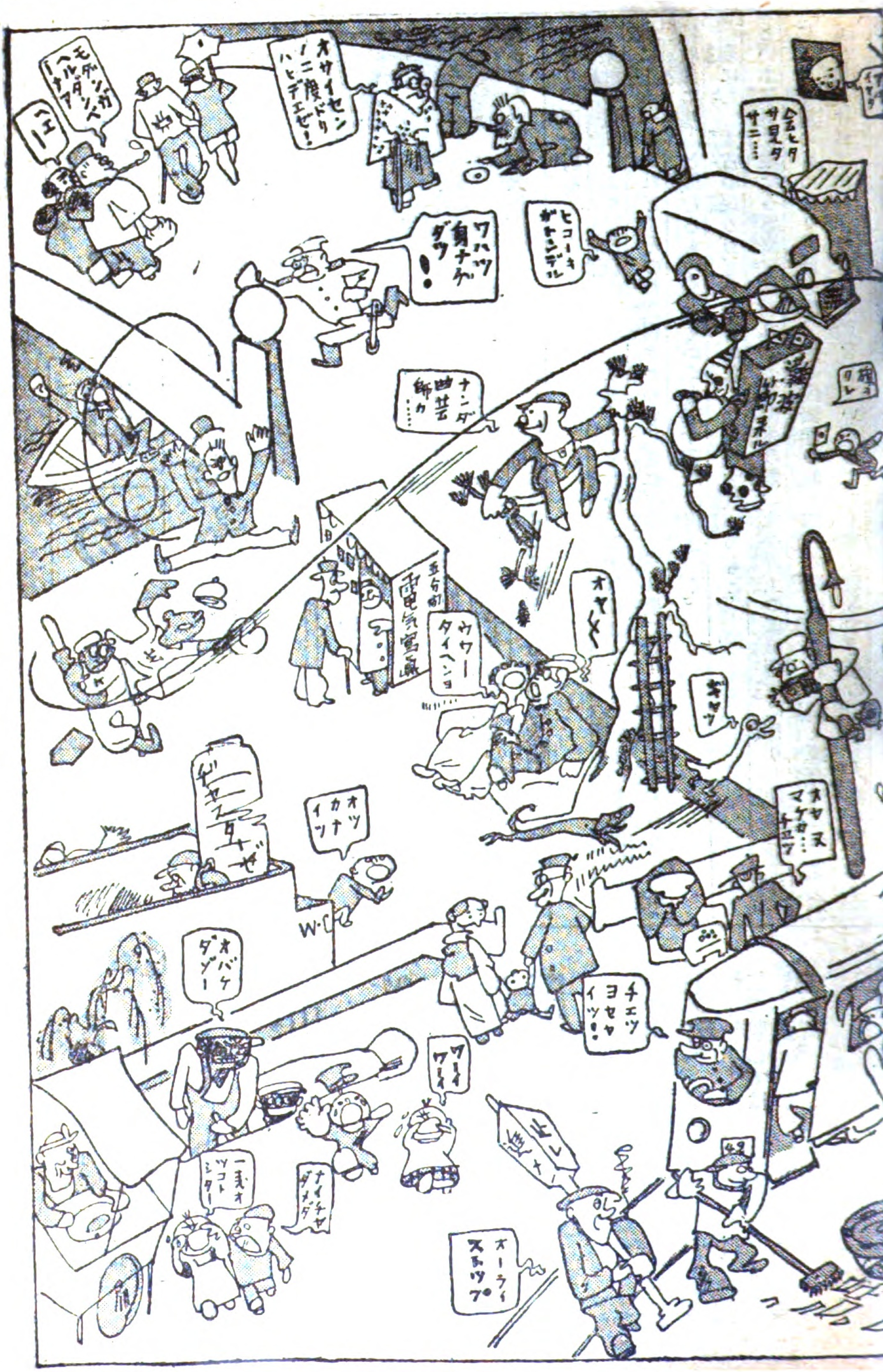
『詮方がない、行から、行つて、あの猿面めが御家督に推擧した三法師君を、そつち除けに、俺は御三男を抱き込んで、いの一番に燒香して見れう。そして、反對に、猿めの鼻をあかし、並みゐる天下の諸侯をアツと唸らせて、鮮かな俺の元老振を見せてやるまでぢや、……うむ、それ〳〵。この場合、それより他に、報復の手段も無ささうだ……。』

甘酸ばい顏をして、ニヤリとやる。手を鳴らして近侍を呼ぶと、重臣達にすぐ奧の間へ集るやうにと、命じるのであつた。

さて、この結末は？

（つゞく）


早ク金ガ来ナイカナア
姉サンハイクツダネ?
十八ダワ
イヤナ電気ヤサン
ハテナ?
西洋
本日開店
オーライ
ワーン〱
ウワ……
ニヤオ
アラマア
オヤ〱
オ父サン ソーダ水ガノミタイナ
ダメダ〱
待ッテヨ
撒水車ダゾッ
大事ナ帽子ガダイナシダ!
花十銭 アナタ買ハナイ
夕刊
ハテナ?
ナンダト 株ガ暴落ダサー大変
株式暴落
オイ旦那足モトヲ注意シロヨ!
ドッコイゴメンヨ
街の悲喜劇


ヘエー
オサイセンノ二度ドリハヒデエゼ!
ヒコーキガトンデル
ナンダ幽芸師カ……
オヤヽヽ
ウワータイヘンヨ
オツカナイツ
オバケダゾー
オサヌマケガ……
チエツヨセヤイツ!
ワーイワーイ
ナイチヤダメダ
オーライストツプ
電気写眞
W.C

ある日の日記

日々の生活記錄は最も有効なる書籍よりも教ふる所多し――ゲーテ

高村光太郎



詩人 高村光太郎氏

六月十日 月曜、時の記念日。

空晴れて初夏の暑さを感ず。二三日來の夜ふかしにて稍疲れ、窓前の葉櫻にひるがへる午前の太陽、金髮の美少年となりて眼を射る。

某社の依頼により自作短歌の中より五十首を選む。二十年來詠みすてし短歌の數はかなりの量に上るべきなれど、その都度書きとめもせざれば多く忘れ果てたり。記憶に存するものの中稍收錄に堪ふと認むるものをともかくも五十首だけ書きつく。

海にして太古の民のおどろきをわれふたたびす大空のもと

といふ單純幼稚なる感慨歌は一九〇七年渡米の際、太平洋上の暴風雨中に作りし歌なれば完全に二十年前のものなり。此の歌、余の代表作の如く知人の間に目され、屢〻揮毫を乞はる。余も面倒臭ければ代表作のやうな顏をしていくらにても書き散らす。余の短册を人持ち寄らば恐らくその大半は此の歌ならん。

英傑民謠

霜田史光

山陽の簀刺し

鳥も通はぬ
八丈で
國士山陽が
簀刺し。

一つ刺しては
浪の音、
二つ刺しては
鳥の聲。

無情の鞭は

ちゑ子風邪の氣味にて引籠る。彫刻中の胸像、坐像等に手入す。

夕方近く女子大學櫻楓會より某々の兩女史來訪せられ、新歸朝のA女史が手づから作られたる季節の菓子『クレーム ファンティーヌ』を贈らる。そのやさしき心と美味の想像とにて聊か昂奮し、思はず明るく快き兩女史と稍多く語る。故成瀬校長胸像の事、タゴール翁の事、利根河上流旅行の事、等々。ジャズの日本東京のまん中にて有閑哲學を講ずる翁の勇氣に余は感動せり。人を感動せしむるものは說にあらず、その說の由來にあり、人に在り。

夕食後、たのしみにせし美しき『クレーム』を折よく來合せたる父とちゑ子と共に賞味す。父喜ぶ。新鮮なる苺の香氣高し。父を實家まで送る。夜天東方よりアークチュラスの星、夏の氣息を余の横顏に吹きかく。



陸軍大將
町田經宇氏



六月十一日

本日より入梅のせゐか何となくどんよりとした天氣である。曉起、沐浴、喫飯の後、いつもの如く先づ新聞に目を通した。相かはらず各新聞の主ページは政爭記事の醜狀に滿たされて居る。又其の三面記事に至ると、瀆職、收賄、亂倫、家出、自殺等の綱紀頽廢、風俗壞亂等の事柄に埋められて居る。假りに夫等新聞記事の十分一を事實と見ても、我國社會の現狀と邦家の前途は深憂に堪へぬ感念にかられ、氣分も何となく沈鬱になつて來た。

起つて書齋に入り、聖經賢傳を繙けば、所謂『古道顏色を照す』で、轉た一服の淸涼劑を喫するの快感を感じた。

吾人は今日迄、畏くも國民精神の振作時弊矯正に關する累次の詔勅を拜受して居ながら、目

屍に曝り
妻子を思ふ
暇もない。

身はこの儘に
果てるとも
闇の夜に咲く
筆の花
やがて實となる
こともあろ。

思へば嬉し
簀刺し
熱い心に
踊るかよ。



註——勤王愛國の導火線となりたる「日本外史」の筆禍を受け、賴山陽は流罪となりたり。

下の如き世相人心では、實に申譯なき次第である。元來、我國從來の教育が智育に偏し德育を忽にしたのと、世界惡思想の浸染、生活狀態の困難とが原因して居ることは勿論なるが、社會の上流者や、指導的地位に立つ長老者等が、皆自らを修めず、所謂躬行率先、範を一世に垂れ德を不朽に及ぼすの觀念に乏しきは其の主たる原因ではあるまいかと思ふ。古語に『噴水は其の水源より高からず』といひ、又『其の本亂れて而して末治まるものは未だ之あらず』と云ひ、『上下交〻利を征つ而國危し』と云ひ、『治國平天下の本は修身齊家にあり』と云ひ、『山中の賊を破るは易し心中の賊を破るは難し』と云ひ、『日々我身を三省せよ』と云ふが如き一々眞理の言である。蘧伯玉は衞の賢人である。彼は齡五十歲の日記に、猶其の四十九年の非を嘆じて居る。孔子の聖を以つてして、猶四十歲にして始めて立ち、五十歲にして始めて天命を知るの境遇に達して居る。要するに、修養といふことは人間の一生を通して勵行せねばならぬ一大鐵則である。不良老人や不良大官が到る處に充滿して居るやうでは、到底不良少年や不良少女の淨化や一掃を望み難い次第である。聊か記して以つて本日の日記とし將來の自箴に供す。

鈴木傳明、



映畫俳優　鈴木傳明氏

六月十五日

向側のテーブルを圍んで、混合酒や麥酒を盛んにあふり立てながら談笑してゐる西洋人三人と何時の間にか知り合ひになつて、食卓を共に圍む、談笑又談笑、空壜の數が增える、時間は夜十二時頃、外は暗、寢靜つて、森閑としてゐる中を我々を乘せた下關行の國際列車だけが物凄い音響を二筋のレエルに殘して走つてゐる。

三人の西洋人の一人がゼネラル・モータースの技師、二人が活動屋、一人はP會社の東洋支

自由は死せず

板垣が
板垣が
殺されながら
云うたとさ
『板垣死すとも
自由は死せず』
——自由はネ

國士氣取りで
殺した奴も
今ぢや地獄で
泣いて居よ
『板垣刺しても
自由は刺せず』
——自由はネ



童人、一人がトオキイの指揮で[illegible]

活動屋なんてものは實に、人みしりのしない、半面愛す可き圖々しさを持つてゐるから知らない撮影所の連中とも直ぐ知り合ひになるのが常だが、眼色が青くても活動屋の氣分は、西洋も日本も變りないらしい、國境のない、打ひろげた氣分でつき合つてくれる。

他人をけなしたりなんか尠しもしないのが彼等の商賣上手であり交際上手であるところの祖先からの習慣だ。

『ミスター・デンメイは米國に行き給へ、本當にいゝと思ふ、僕の友達も澤山ゐるし、いくらでも君の爲に便宜を計りませう』だの『ミスター・ウシハラは作品を透して知つてゐる、日本の映畫會社は年若き有爲の監督を澤山に持つてゐることは何よりの强味である』だの『本當に可愛らしいビッグ・ボーイである君の名がデカオであるなどは實に面白い。君に似た俳優が私の方にゐますが知つてゐますか、――バンクロフト………』など次から次へと賞められるのに我々三人は、何んといつて彼等三人を賞めていゝか容易に言葉を見出すことも出來ず、只矢鱈に肯づいて見たり笑つて見たり『イエス』を云つて見たりするばかり。それでも食堂車が終る頃には、彼等が非常な精力で利益を擧げようとしてゐる『トオキイ』に對して不本意ながら知つてゐるだけの讃辭を吐露して賞め擧げ將來を祝福した。それは中學と大學十年間それから今日迄五年、十五年間に覺えた單語を凡て吐き出して賞めた。併し覺えてゐる單語が、なんと尠な過ぎるのに内心驚いた理である。

牛原監督は可成り得意になつて、米國映畫界のことなど論じてゐたらしい。その頃の泥海男は『うでだこ』のやうに眞赤になつて前後不覺に眠つてゐた、多分洋行でもしてゐる夢でも見てゐるのだらう。

食堂車には係のボーイ達の外一人の客もゐない、九十キロから百キロ位の快速で汽車は走り續けてゐる。國際列車らしい客を乘せて。(九州行きの出發の日)

櫻田の血吹雪

櫻田門の
血吹雪は
血吹雪は
この世を闇に
しとゝ降る。
思ひを殘す
直弼は
直弼は
狂ふ吹雪に
埋れたが――
吹雪のあとに
花が咲く
花が咲く



朝倉文夫



彫刻家
朝倉文夫氏

六月十七日　晴

篠崎氏の案内にて小林大高の兩人と同行四人、星ケ浦都ホテルより一臺の自動車を馳せて旅順に向つたのは午前九時、照り續く滿蒙の天地、野も山も畑も赤土に燃えて紅塵宛らの世界、一條のアスフワルトを流した自動車道、砂利を敷いた車馬道、片側ブル、片側プロと云つた樣な階級道路が約三十五哩にして旅順に入る。山岳背面を圍繞して東に黃金山、西に老虎尾の諸山起伏し、內に天然の良港を抱いて東亞無比の要害を誇る。この地唐の策命使、明の旅順城、康熙帝の水師營等の古跡を遺し、日淸の役我に於いて一度は血を以つて之を購ひたれど、三國干涉の爲涙を吞んで返還の止むなきに至つた地である、其の後露國が堅壘を築き難攻不落と號したるも乃木軍の肉彈攻擊、東鄕艦隊の港口閉塞にて遂に陷れ、實に世界を驚倒せしめた戰跡を殘す。先づ關東廳に敬意を表し、博物館を見物す、それより爾靈山に登る。麓に自動車を乘り棄て、テクリ初める。此の山登りは恐らく疲れたとか、苦しいとかは云へた義理ではない、永久に絕對に云へない。中腹に靈光寫眞館といふ記念撮影をなす小屋あり。寫眞師に案內されて最高峰に登る。凉風ならで戰跡にふさはしい烈風に吹かれながら戰談を聞く。靈光先生寫眞より戰跡談を得意とするらし。傍の砂利の中より砲丸の破片やロスキーの服の切れ等拾ひ出して語り出す所明細懇切、當時の慘憺壯烈の狀髣髴、兩軍の死傷者一萬四千と云ふ。乃木將軍令息の墓標は山の中腹に、廣瀨中佐の靈消えし港口は指顧の中にあり。東鷄冠山、二龍山、松樹山等は一望の下に展望され回想盡きず。草々には虫がすだく、木々には閑古鳥が淋しくないてゐる。虫なくやそこへ討死したは誰ぞ

開國文化の
花が咲く。

政岡

忠義一途の
政岡が
そつと飯炊きや
焦げばかり
スツトコドツコイ
焦げばかり。

何故にお飯が
焦げばかり
胸に　眞の
火が燃えて
スツトコドツコイ
火が燃えて。



一叢の茂れる草や　閑古鳥

白玉山、東鷄冠山、記念品陳列館等を見て星ヶ浦に歸つたのは黄昏時であつた、終日燃えた日本魂を星ヶ浦の浦風に吹かせて眠る。



帝劇専務
山本久三郎氏

山本久三郎

六月二十七日

午前八時離床。例により冷水浴、深呼吸。次で裸體跣足にて庭掃。朝食後厠に入り例の如く數種の新聞を讀了。十時出社。今朝は前夜帝劇に於ける新築地劇團の初日の爲平日より起床遲る。

昨夜帝劇で築地小劇場團の『母』は思想的に官憲の注意を受け脚色者や演出者は並大抵ならぬ苦心を重ねた。斯うした芝居は勞働者階級計りでなく資本家階級の人達も見るべきである。以つて發見する處もあらうし啓發される點もあらうし又理解融和するよすがともならう。必ず得る處があるに違ひない。勞働者側の人々も之によつて理解し思想に泥まず協調の精神を涵養される事にならう。必ず好い結果を現はすに違ひない。――と思つた。自分が主宰する劇場に斯る芝居を上演するのは洵に有意義だと考へた。

自分が萬難を排して外國から世界的大藝術家を招くのも藝術報國の一つである。即ち日本の斯界に貢獻し、國民の文化の點に寄與し且つ藝術上のみならず其の國及び其の國民との親善に資し國民外交の一ともなつて居る。斯のやうに藝術を通じて國の爲めに盡す事が出來るなら、假令志と違つた方向に入つたとは云へ、劇界で働く事又自分が劇界に存在する事は大いに意義があり、無意義に終らぬ事を信じ愉快に思つた次第である。

次號は德川家達公、櫻井忠溫大佐、北原白秋氏、千葉龜雄氏、女優八雲惠美子氏等の方々の最も興味ある日記を掲載いたします。

吾子死なして
政岡が
お家の爲めに
泣き笑ひ
スツトコドツコイ
泣き笑ひ。

落首二つ

小堀遠江守が伏見奉行だつた時、百姓の公事があつて、五味越前守がその席に出たので、落首に、

いとゞさへ濁れる小堀五味入つて
すましかねたり百姓の公事

○

板倉周防守が京都所司代の時、饂飩で米二石が銀八十目になつたので、

板倉につめおく米は八十目
雜炊粥も周防やうなし



國家老



國家老はじめて江戸屋敷へまかり出で、殿様へ御目見えの時、若が笑ふほどに近よつてあやして見いとの仰せ、ハ、あと治部右衞門おそれ入り平伏す、近習の衆氣の毒がり、御意で御座る、おあやしなされと云ふ、治部右衞門やう／＼顏をあげ、ハ、畏れながら、バアー

敏捷も極まれり

或る英國の有名な實業家の事務所へ、或る日一人の新聞記者が會見を申し込んで來た。名刺が通ぜられると、一分千金の多忙な身體だから、もし三分間の會見に十磅（約百圓）出せば特にお會ひしようと云ふ奇拔な拒絶を食はせた。

ところが『それでもいゝ。』と云ふので實業家は膽をつぶして引見した。然るに豫期してゐたやうに刻下の大問題に就て意見を求めるから、實業家は二度吃驚してすつかり好奇心を挑發されてしまつた。

『君は私に十磅出しておきながら、別に君に必要な質問もしないやうですが、ぢやどうしてそんな無駄な金を捨てたのです。』

新聞記者はニヤリと笑つた。

『別に捨てたわけぢやありません。それどころか私はこの會社のお蔭で九十磅（約九百圓）儲けましたよ。』

『ホ、ウ。どう云ふわけで。』

『いや、貴方とお會ひする爲に私が損したのは成程十磅ですがね。』と記者先生愉快そのもの〻調子である。

『私がこゝへ伺ふ前に、或る人が貴方と會へたら百磅賭けるつて約束でしてね。貴方がお會ひ下すつたら、卽ち賭けに勝つたわけですよ。』

一人にしては？



小さい女の子が母親と一緒に電車に乘つてゐると、まもなく篦棒に肥つた婦人が乘り込んで來て、女の子の向側にドッシリ腰かけた。女の子は目を丸くしながら肥つた婦人を凝乎と見つめてゐたが、やがて母親の耳にさゝやいて曰く、

『ねえ。母ちやん。あの小母さんは、あれで矢つ張り一人なの？』

天一坊



愛妻が安々と男兒を產んだ。初めて人の父となつた男は、欣喜雀躍、たゞちにその趣を田舍の兄に報じたが、大いに氣取つた積りで、

『……昨夜玉のやうな愛らしい貴方の甥が我が家を訪れました。……』

と書いてやると、間もなく兄が電報を寄越して曰く、

『甥は無し。ニセ者、注意せよ。』

牡蠣食ふ馬

雨の中をびしよ濡れになつて旅して來た男が、とある村の宿屋へ着いた。濡れて寒くつて堪らないが、何せ滿員でストーヴの側へ近寄る事も出來ない。と、亭主の方を向いて怒鳴つたものである。

『わしの馬に牡蠣を少しやつてくれないか。』

『馬にですつて。まさか。』

『わしの命じた通りにしなさい。』



居合せた人達もこの變手古な注文を不思議がつて、亭主の後へついて牡蠣を食ふ小馬を見に廐へぞろ〳〵出かけて行つた。

さてその男一人になつてストーヴの側へ坐り、思ふ存分煖まつたものだ。やがて亭主が引返して來た――

『それ御覧なさい、馬は食べやしませんぜ。』

『何、御心配御無用。テーブルへおいとくれ。わしや着物が乾いたらそいつを自分で食はうよ。』

阪妻

女教師の子『寄らば、斬るぞ！』



母『太郎や、お前そンなへンな事を言つてはなりませんよ。』

太郎『だッてこれは阪妻が言つたの。』

母『そンな子と遊んでは不可ません。』

藪蛇



料理屋で見榮坊の男がメートルを上げ、『僕は世の中で何一つとして出來ない事はない。殊に他人の出來ないと云ふ事は、猶更やつて見たい。どうだ、君の出來ん事があつたら言つて見たまへ！』

友人『僕はこゝの拂ひが出來ないんだ、君一つやつて見てくれたまへ！』

落第

泥棒養成所の生徒『腕力でその腕時計を奪ることは、全く譯はなかつたんですが、それよりも



うまく誑して取替へた方がいゝと思つて、子供に五十錢銀貨を一つやりました。』

教官『成程、それは至極面白い考へだ。で、それからどうした？』

生徒『さうしたら、子供は銀貨を握つたまゝ、一散に逃げて行つてしまつたんです。』

女醫

或る男が、美しい女醫の診察を受けた。

――大した事はありません。脈も九十そこ〳〵ですから平脈ですし……

――然し普通七十位でありませんか？と患者が訊くと、女醫は首肯いて、――さうです。でも男子の患者に限つて、妾の診察を受ける時は、二十位脈が亢進する物と認めて、それを差引くのです。

夫の安否

船長、難破談に油が乘つて、

『で、あッと云ふ間に船は海底深く沈んで、遂に、私の身體は木の葉のやうに波に卷き込まれたのです。』

と云ふと、五六人の聽衆に交つて聽いてゐたその細君、酷く顏色を變へて、

『あらつ！……で、貴方はどうなつたの？ それから？ 助かつたの？』



四百哩決死のマラソン

審判員　行田重治

昭和四年六月二十三日の早天、大阪毎日新聞社前、群がる觀衆の間を躍り出でたのはこの擧の勇士、正に十人——純白なるユニフォームの胸間、漆黒に刻んだ各自の姓は、高橋（東京）——澤田（愛知）——北島（福岡）——福安（埼玉）——鈴木（北海道）——森（大阪）——李（朝鮮）——廣瀬（岐阜）——山田（香川）——楠（香川）——あゝ、何たる壯擧ぞや！　大阪東京間四百哩マラソン大競走の第一日、生命をまとの大冒險、わが競走界空前のマラソン大競走は今、この十勇士によつて決行せられたのである。

讀者よ！　或は既に御承知のことかも知れないが、わが國從來の長距離競走（公式に於ける）のレコードとしては、二十六哩四分の一と云ふのが、最長のものであるのに、この大競走は、全行程四百哩——その一日々々を見ても、五十哩七十哩と云ふ長距離のもの——而かも時は六月下旬、烈日、日に暑き最中なのである——選手一同が勞苦の程や察すべく、その昔、上野不忍池畔に於ける長距離競走に於いてさへ、血の尿をして死んだ優勝者あるを思へば、これはたしかに生命をまとの大冒險たるに相違ないのだ。

然るに、この空前の大壯擧が發表せらるゝや、全日本に起れる反響はまた素晴らしいもの、全國各地の健脚家は、われも〳〵とこの壯擧に加はらんとし、參加申込み日に殺到、中には、

『予は今次の競走に必死の覺悟にて出場せんとす。斃るゝこと勿論覺悟なり、是非共この壯擧に加へられよ』

と血痕淋漓たる願書を送つて係員を驚嘆せしめたほどの熱血漢もあつたが、今大阪毎日新聞社を出發した十勇士はかゝる猛者のうちよりすぐりに



すぐつた勇士揃ひ——そのいづれを見ても鐵軀鐵脚、よくこの大競走を押切り得べく思はれた。

『よくもこれ程の選手が揃つたものだ！』

筆者は今、選手一同のあとより自動車を走らせつゝ、現今、スポーツの全國的浸潤に今更ながら感嘆措く能はなかつたのである。

さて、今日第一日は、大阪より大津まで四十哩——烈々たる炎天の下を物ともせず、わが十勇士は、默々として走つて來た。もう十餘里を走りつづけて來たのだ、遉がに多少の疲勞なきを得ない。

・と見る、先頭、韋駄天の如く走り來たるは楠好藏（二十二歲）香川縣坂出町選出、彼れは、過ぐるオリンピック大會マラソン競走に於いて世界的大選手の榮冠を得た山田兼松と並んで、香川縣より選出され、坂出町青年團から『たしかに山田以上』と云ふ折紙をつけられてゐたが、果せる哉、今日のスタート間もなく、早くも先頭を切るそのスピード、こんなに早くて、果たして今日の四十二哩をつゞけ得るや否やと危ぶまれたが、今、十餘里を走りつゞけ來ても、そのスピードに微塵の衰へもない。實に驚くべき走力である。

彼れは、『坂出』と書いた白鉢卷のもと凛たる眉宇に必勝の覺悟を刻して、默々として……そして驚くべきスピードで坦々たる街道を滑るが如く走つて行く。

『山田は？　山田は何うした？』


大阪毎日新聞社玄關前をスタートせる選手諸君と黒山の如き大觀衆



云ふとき早くニュッとその雄姿をあらはしたのは白帽眞深の一壯漢、

『おゝ、山田だ！』

謂ふまでもなく彼れは、オリンピックマラソン第四等の世界的選手、當今、場馴れのしてゐる點では、さすがに本場を踏んでゐるだけに第一人者であるが、今日と云ふ今日は、彼れに似合はず、無謀に近いスピードを出しつゝ先頭を切つてゐる楠を追うて、殆んどこれと同樣のスピードを出してゐる。恐らく彼れも楠のスピードに刺戟されて『前途尙遼遠とは云へ、餘りに離されて了つては、つひに追ひつけなくなる』と思つたに相違ない、而かも彼れ楠は、昨年以來、彗星的新人として斯界を驚かし、現に今春の東西對抗のマラソンにも堂々として一着を占め、今や旭日昇天の勢ある猛者なのだ、追がの山田も、彼れに釣られて、思はぬスピードを出したものに相違ない、イヤ、ひとり山田に限らず、爾餘の選手八名も、先頭楠の走力に刺戟され、いさゝか狼狽氣味にスピードを加へたのは實際の事實、中にも、東京の高橋淸二は、最初、滿を持して七番目位を驅けてゐたが、沿道の觀衆から、

『先頭との差二里餘！』

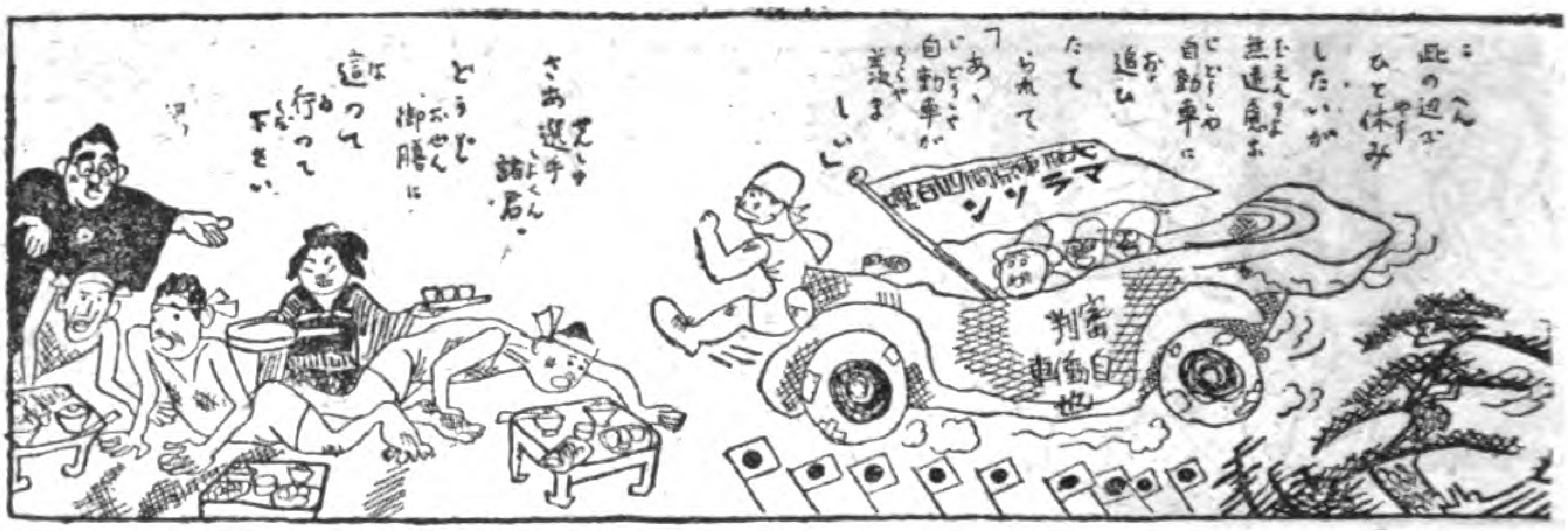
と聞くや一氣に走力を早め、鈴木、廣瀨等所謂關東方選手の一團を拔け出し、更にまた三番四番を驅けてゐる二人を大津市間近で追ひ越した。


淀川堤防附近に於

此方大津市の決勝點では、順位や如何に？先頭は？と今か〳〵と待つてゐる、そこへ第一に疾驅し來つたのは楠好藏、つゞいて山田兼松、それに三十六分をおくれて高橋淸二、つゞいて廣瀨、森、李、鈴木、福安、澤田、北島の諸選手、第一日四十二哩は完全に走り終へた。

『イヤ、驚いたぞ、北島は、途中脚部の痙攣で、ひつくりかへつちまつた。幸ひ倒れた所が、按摩さんの家だつたので、早速治療して癒つたんだ』

『そいつあまたお誂向きの所で倒れたもんだ。ところが早大の鈴木君はさう行かなかつた。これも矢張り脚部の痙攣でバッタリ路傍に倒れたが、生憎按摩さんもゐないので幾度か倒れて



は起き上り、驅けては倒れ、泣くやうな思ひで、京都市中の熱狂的歡迎のうちを漸く驅けぬけたのだ』

　下馬評、挿話、——宿舍に着いた我等一同の話はそれから〱と花が咲く。が肝腎の選手はと見れば、十一名が十名、みな疊の上を匐ふやうにして歩いてゐる。無理もない、この烈日の下を十七里と云ふ空前の長距離を驅けつゞけて來たのだ。

『しかし、楠君は、アンなに走つてつゞくかな……?』

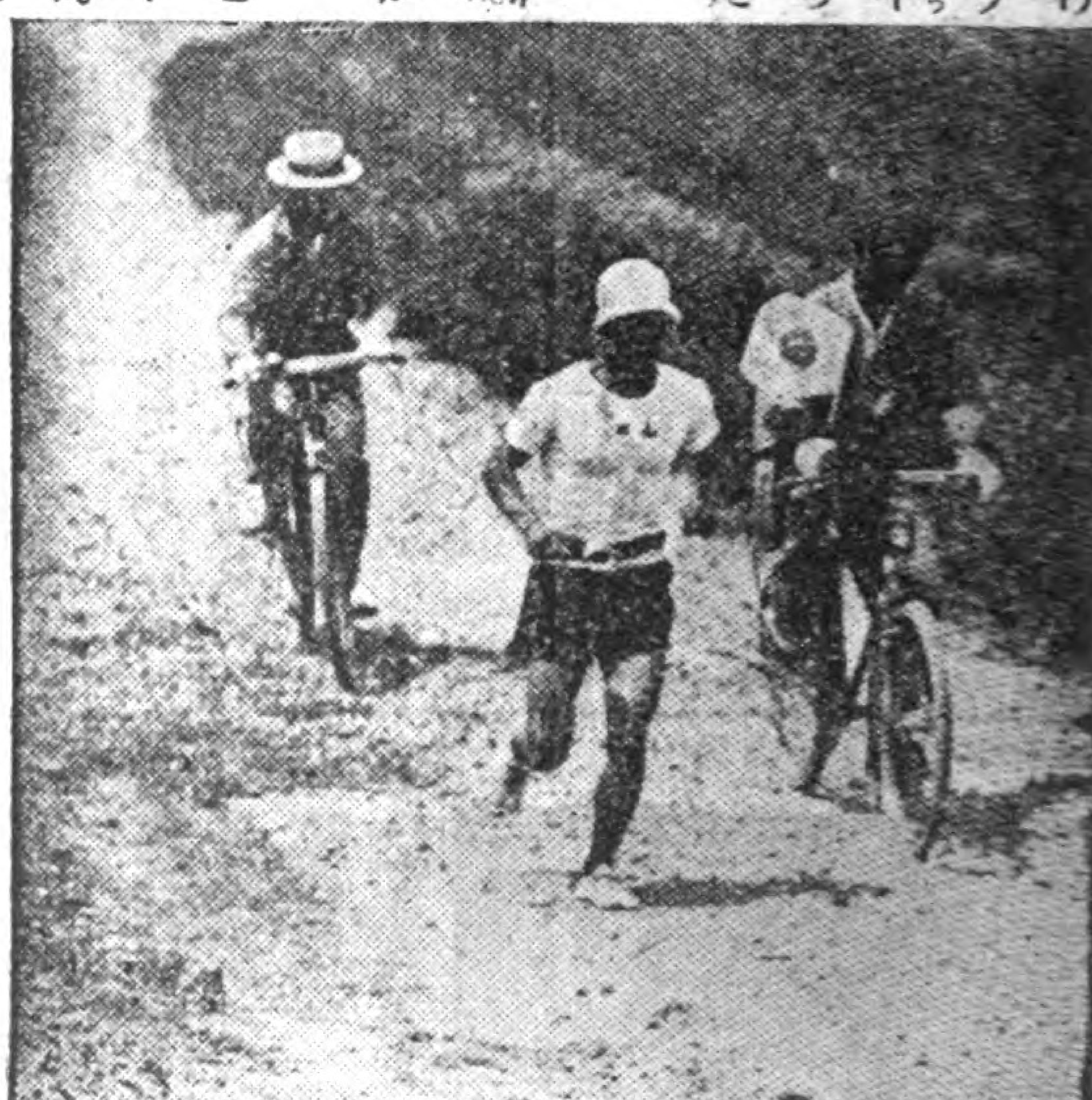
『イヤ、楠ばかりぢやない。山田も、楠に釣込まれて走り過ぎた。トテモあれではつゞくまい。つゞく筈がない。何しろ山田はオリンピック大選手と云ふ看板を背負つてゐるだけに一段とつらい。誰れにも負けられないと云ふ氣でいつぱいなのだ』

『ほんになア……』

　いつか選手等は鼾聲雷の如く深い眠りについて了つた。

　第一日の夜は靜かに更けて行く……。

□


走力大るけ　先頭楠好藏君と次は山田兼松君

　第二日大津米原間四十二哩、意氣昨日に倍せる十人の壯者は、一齊に大津の街を驅抜けた。走る……走る……一群の走者、忽ちその間に遲速あつて、白帽、鉢卷、追ひつ追はれつ走りゆく、そのうちに依然先頭は楠好藏、僅かにおくれて山田兼松、高橋清二……北島九洲男……はじめの程は、いづれも元氣いつぱいに見えてゐたが、流石に昨日四十二哩の疲勞が出たか、いつか、關節の痛みを訴へるもの、足部、脚部の疼痛をかこつもの相ついで出で競走は漸次深刻味を加へて來た。

　その夜である。



さすがに山田は、思ひ餘つたやうに楠に云つた。

『楠君、君はまた今日も走り過ぎた。アレぢやドテモつゞかんぞ。君もつゞかんと同時に僕もへタばる。僕は決して、君の先きには出ないのだから、何もあんなにムキになつて走るには及ばんのだ。困つた男だ。もう少し滿を持して、精力を蓄積しておかにや駄目ぢやないか』

場馴れのした山田は、早くも來るべき運命を看破したのだ。が、いつこくな楠はたゞ一言、

『僕の性分だ。走らずにゐられんのだ』

『イヤ、それがいかん、この儘で押して行つたら君も僕も共倒れだ。折角優勝候補に數へられながら、二人とも倒れては郷里坂出町青年に濟まん、頼む、明日は速力をゆるめてくれ』

がその第三日、米原名古屋間五十五哩の戰ひは何うであつたらう。

相も變らず楠は、斷然先頭に立つて、微塵速力をゆるめようとしない。山田も負けずに追つて行く。

然るにその沿道、廣瀬選手を出してゐる岐阜縣下は、到る處熱狂的歡迎を以つて、廣瀬や如何にと待ちうけてゐる、廣瀬もこれに氣を得てや、躍進また躍進、見る／＼儕輩を拔いて韋駄天走り、つひに大垣市通過の頃は、楠、山田の二者を追うて、追ひつ追はれつ、拔かれつ拔きつ、三者その先頭を爭ふの壯觀を呈した。

『廣瀬！　廣瀬！』

『拔いて了へ！　廣瀬！』

猛烈なる聲援に氣揚れる廣瀬選手、こゝを先途と力走すれば、楠、山田も『何の糞』と、こゝに三者入り亂れて力走する。

『ア、山田を拔いた！』

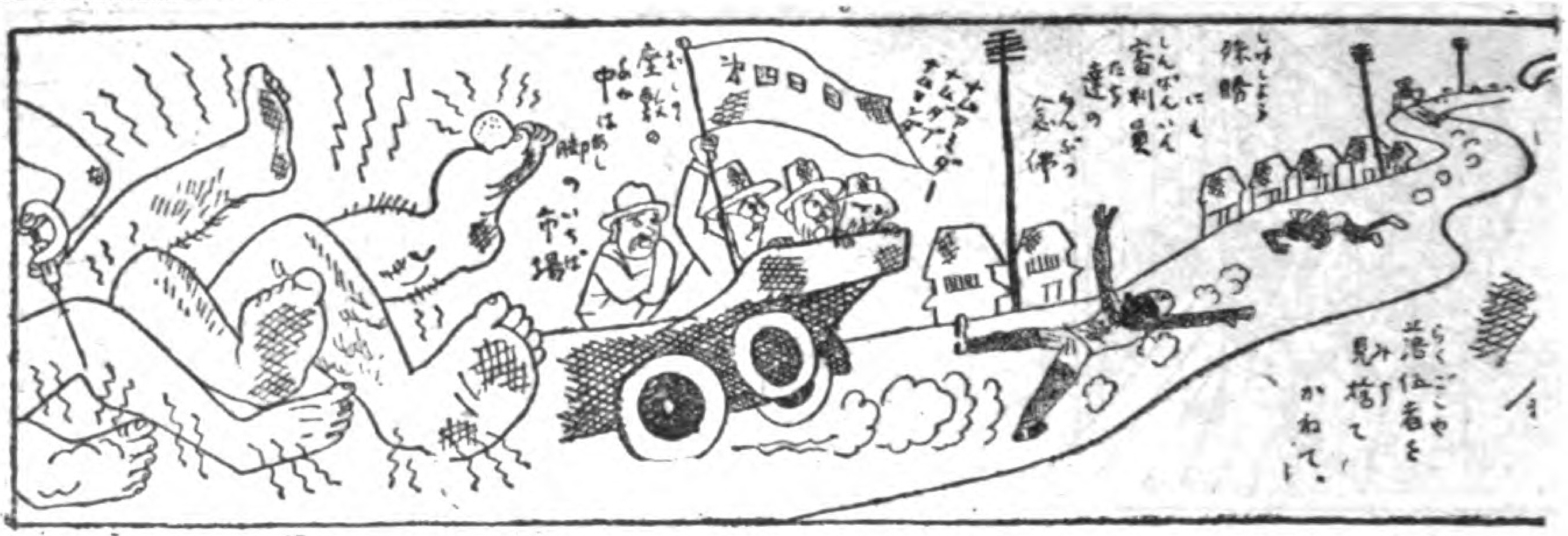
『廣瀬二位！』

『ソレ楠をも拔く……山田が走り出したな、負けるな廣瀬！』

それを追はんとする高橋選手、つゞいて鈴木の

元箱根附近に





東京組、馬力をかけて肩を並べ、タツタツタツタ……猛進すれば、今や先頭との差も僅かに數分、切齒しつゝ追ひに追ふ、かくて形勢は全く混とん、この五人中、誰れが先頭を切るか全く豫測を許さぬ亂調子とはなつて來た。

筆者をのせた自動車は、その報告を耳にしつつ、彼等のあとをついて走る。

と見る前方、今日の行程の半ばとおぼしき松原街道を力なく歩み行く一人がある。

『誰れだ?!』

『ア、山田だ!』

『山田!?……おゝ、山田君!』

自分は思はず聲をかけた。

『どうした? 君、えー、ど、どうしたのだ!』

『いけません』

と山田は、それでも歩みつゝ答へて曰ふ、『足……膝、膝です、膝が痛んで我慢にも走れんのです。四十分休みました』

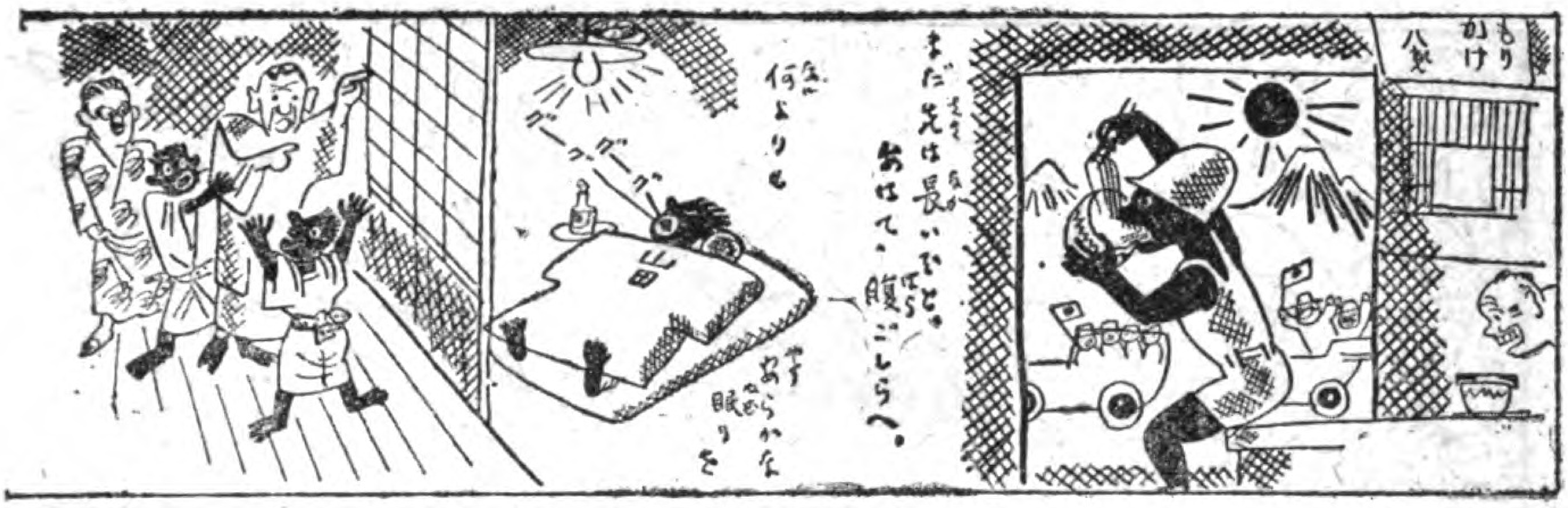
聞いて自分はひやりとした。山田はつひに倒れるのか!

『膝? それはいかん、……』

危ふく『落伍するな』と出ようとした聲を抑へた。

て可愛い小學生達の盛なる應援に勇み立つ選手諸君　先頭山田繁松君





『イヤ、落伍したら警察電話で知らせます、が出來るだけ……出來るだけ行きます。走ります』

『よウし、その元氣だ、元氣を出せよ！』

激勵の言葉を投げつけて、我等の自動車は一路先頭を追うて行く。

廣瀬……鈴木……高橋の三人は今猛烈な競走、中にも高橋は、

『今日から、そろ〳〵先頭との差を縮めて行くぞ、見てゐ給へ』

と豪語してゐたゞけに、三人中、最も輕快なフオームで先頭を追ひつめてゐる。

『先頭は矢張り楠だ。それにしても楠の姿が見えなさ過ぎる。何うしたのだ？』

と自動車は第二位の高橋を追ひ越して走ること一里餘、漸くにして、前方はるかに楠の姿を發見した。

『驚いたな、第二位を一里餘も引離してゐる、この調子だと、楠は最後までこの調子で驅け拔くぞ、全く超人間だ』


第七日目箱根の大難嶮を

自動車は彼れのそばを驅けぬけた。が彼れ楠はそれに見向きもせず、依然默々として、たゞひたぶるに走りに走る。

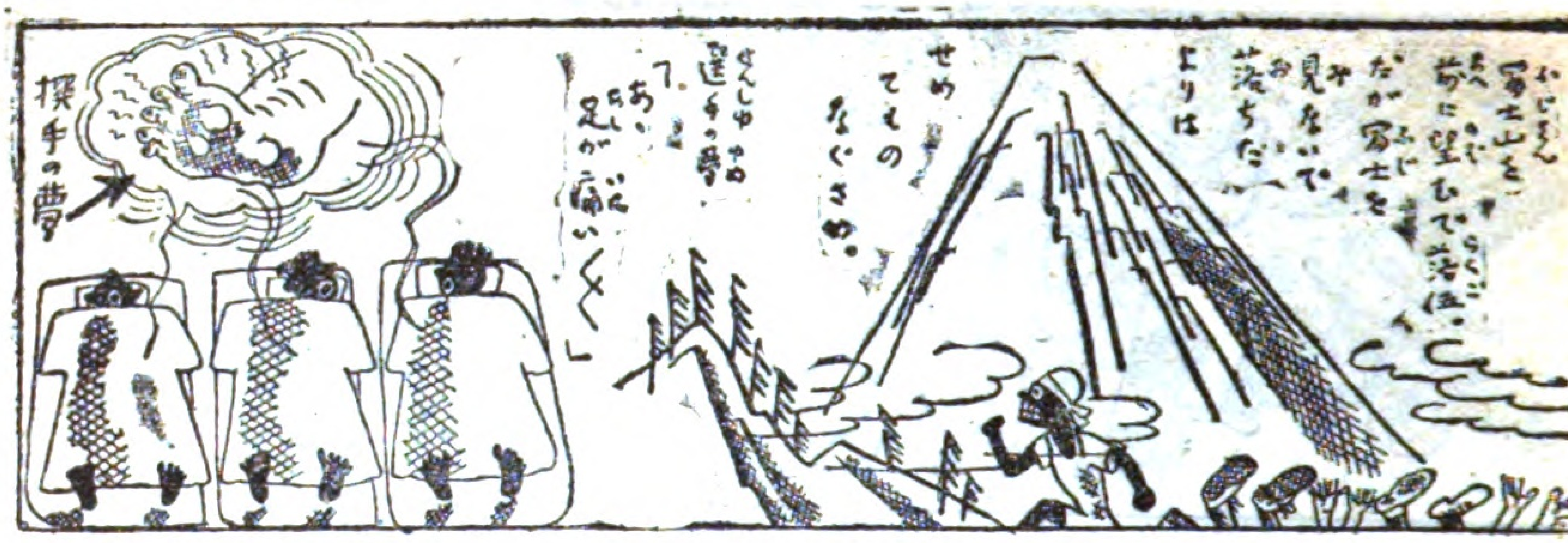
『楠君、山田は落伍するかも知れんぞ！ 自重してくれ』

が彼れは、依然眉宇一つ動かさず、さながら、熱と眞劍の塊の如く、何等の技巧もなく些の策戰もなく、たゞ默々、全力をあげて走れるだけ走つて行くかに見えたが、果たしてこの『山田倒る』の一語を耳にした彼の胸中や何のショックをも感じなかつたであらうか。否……否……否、斷じて左にあらず、彼は默々として走る中にも、戰友山田の身の上に思ひを廻らしたに違ひない、イヤ或は晴天霹靂の感があつたかも知れないのだ。

『おゝ山田もつひに倒るゝか！そして俺も……』

つひに共倒れか！ 知らず、彼れ果たしてこの感なかりしや否や。恐らく云ひ知れぬ悲しみが交々その胸に去來したであつたらうとは知る人ぞ知る。

果然、名古屋の決勝點に近づくや、朝來の好調に乘



じたる高橋は、いよ〱勇を鼓して奮進また奮進見る〱先頭楠との差を縮めて追ひに追ふ。時に楠如何にと見るに、如何にしけん走調頗に悪しく、忽ち後ろに高橋の追走をほしいまゝにしなければならなかつた。

『楠！　どうした！』

『抜かれるな！』

彼れはつひに眼をつぶつて驅けた。驅けて驅けて驅けぬいて、およそ、その全身全細胞の力と云ふ力を出して驅けぬいたが、高橋の追走や刻々に急、いよ〱勢ひに乗じつゝ、走れよ、追へよ、追ひ抜けよと、奔馬の如く疾驅すれば、楠も亦ここを先途、のめるが如く死走したが、無謀に近き三日の力走、今つひにその鐵脚に禍して、體心共に驅くれども、如何にせん足つひにこれに伴はず、焦心哀しくも高橋の精鋭に追ひ抜かれ了つた。その差實に二分半！



突破して第一着に蘇灘の決勝線に入る鈴木憲雄君

この日最初の落伍者は李大鵬君。

□

『だから僕が、アレ程注意しておいたのだ。君、明日大丈夫か』

山田は、戰友楠の身體をいたはるやうに云つた。――彼山田は、今日、辛らじて落伍の難を免かれ、つひに第五位に落ちたのだ。

『俺が弱つた上に、君まで弱つて來ては大變だ、しつかりせいよ。決して先きを急ぐな、まだ五日ある、前途は遼遠なのだ。兎に角この旨、郷里へ知らせよう』

電文に曰く、

『クスノキ二、ヤマダ五、アシイタム』

彼れは無言の儘この電文を楠に示した。二人



は黯然として顔見合はすばかりである。

山田にとつても、楠にとつても、悩み多かりし名古屋の一夜は明けた。

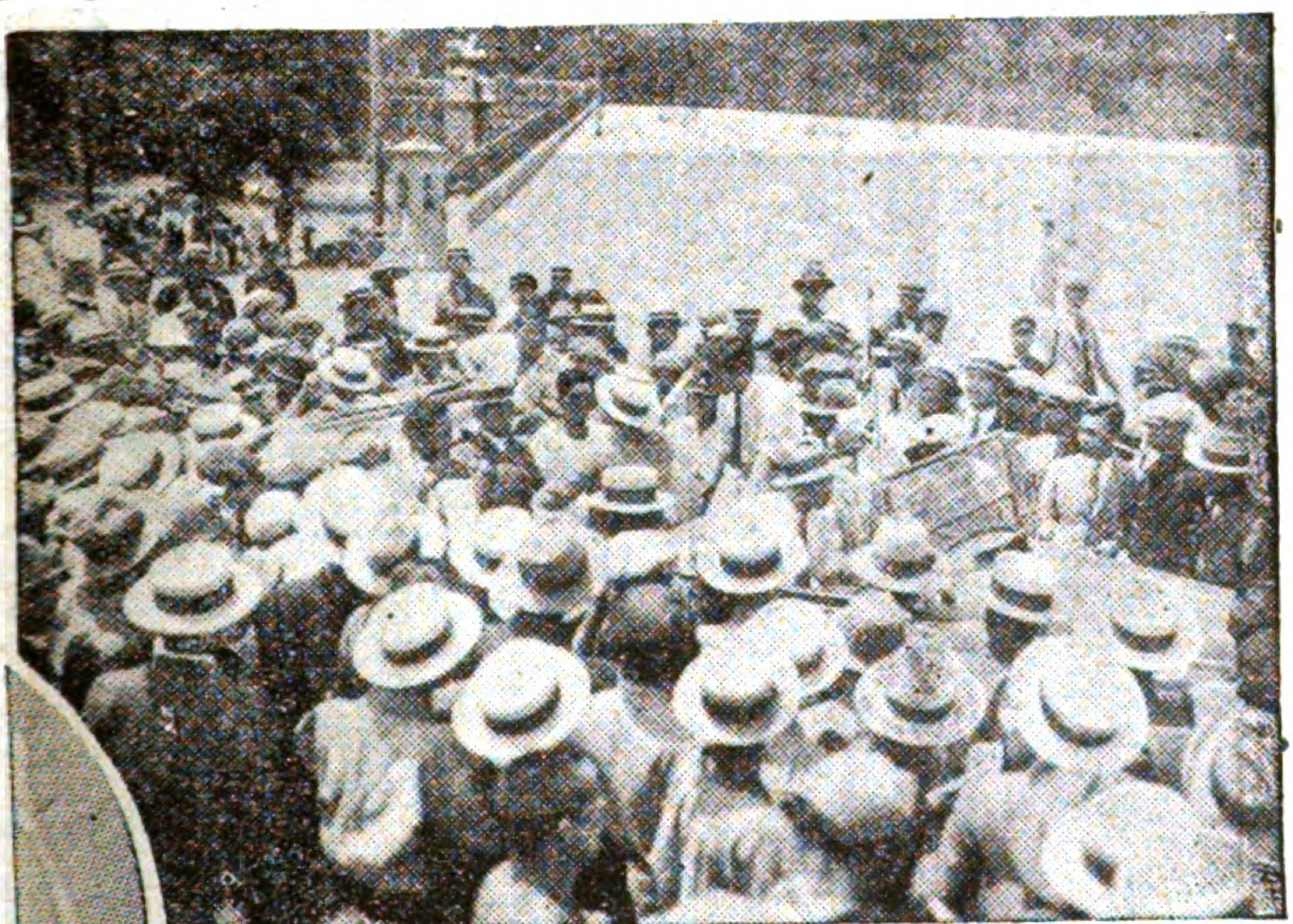
今日第四日目、名古屋豊橋間四十一哩、その出發の間際にあたつて、突如楠は審判に訴へた。

『今日、途中で足が痛み出したら審判自動車にのせて下さい』

今の今まで、一言半句の苦痛をも訴へなかつた楠が突然さう云ひ出したのだ。

『さては楠、危ないな』

九人の選手は走り出した。然るにまだ名古屋市中をも驅け抜けぬうちに、何事ぞ、大豪楠の落伍、まさか楠はと思つてゐたのだつたに、つひにこの悲報、彼の足は、最早意地にも走りつゞけられなくなつたのである。



右は優勝せる山田選手が香川縣人會應援團に萬歳されてゐる所

『彼れもつひに落伍か!』

するとまた、これにつゞいて『死ぬ迄頑張る』と云つてゐた北島も落伍した。

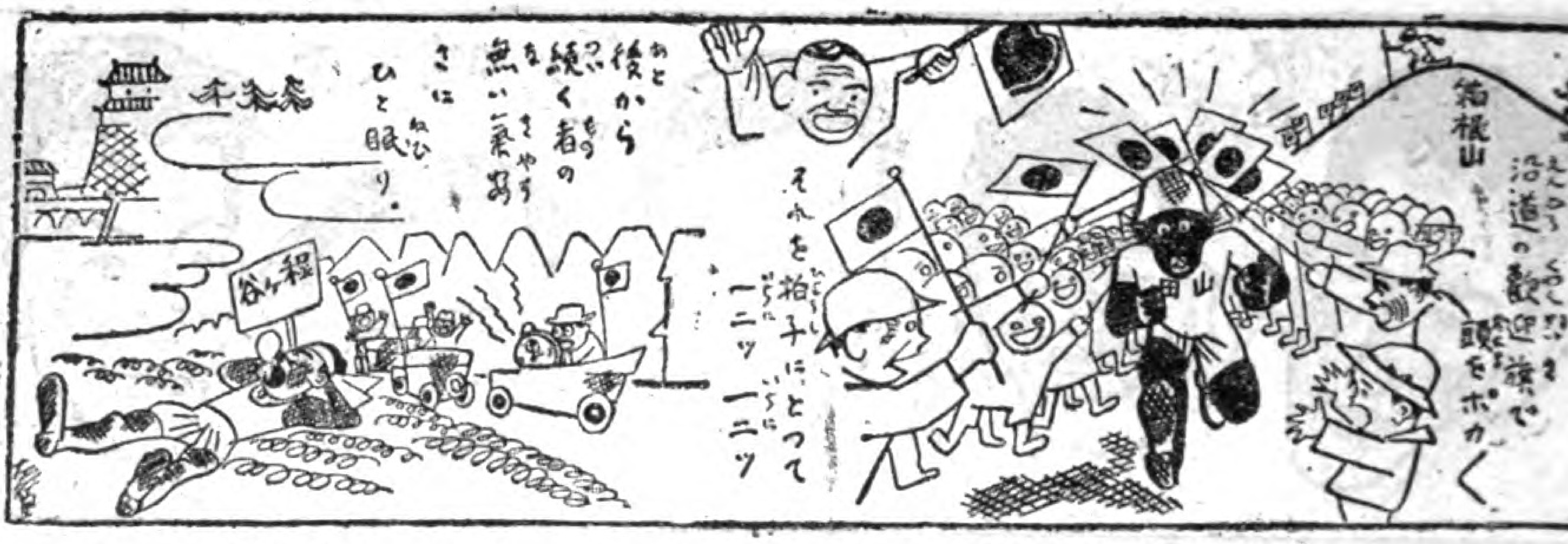
『これで落伍三人か……ア、山田君!』

筆者は、車上から山田の姿を見て聲かけた。

『楠は落伍したぞ!』

聞いて山田は愕然とした。しまつた! 到頭彼れを落伍さしてしまつたか! と、さすがに足も鈍り勝ち、しばしはこの後輩の落伍を惜しんでゐたが、やがてまた氣を取直したか、走調一段と力を增して來た。

――若しこの上に俺が倒れたら、マラソン・ダムを誇る郷里坂出町青年の



歴史を汚す、俺の責任はます〳〵重い。俺は倒れない、死んでも倒れない、死んでも勝たなければならないのだ――山田は痛める足に鞭つて驅けた。併しそれも長くはつゞかない、痛んでは休み休んでは走り、漸く豊橋に近付いて來た。その決心の程、實に悲壯の極である。

『山田君、東京のファンは君の東京入りを鶴首して待つてるぞ、君は君の歴史の爲めにも是非最後を完うしてくれ給へ』筆者は、車上から、今、痛みに堪へず休んでゐる彼れにさう力づけた。

『やります、やります！』

簡なる語にもその決意はうかゞはれる。

この日高橋は依然先頭、山田の力走もつひに及ばず、その差實に一時二十分。

いよ〳〵明日は競走の峠、而かも行程は豊橋藤枝間六十七哩と云ふ最長距離。

血まめ、足袋ずれ、膝の痛み……殘る七選手の足はみな傷いてゐる。彼等は綿のやうに疲れた身體を床にうづめて深い夢路を辿つてゐる。

するとその深夜、丁度一時頃、突然一行の宿舍に一人の田舍爺が訪ねて來た。

『山田に會はしてくれ、わしは山田の足を癒しに來たのぢや』これぞ山田兼松の岳父――彼れは、


左は深田選手

その前日、折柄容と將棊合戰の眞最中、思はざりき、山田の電文『クスノキ二』ヤマダ五、アシイタム』の電文を見るや、ガラリ、將棊を投げ出して、その夜の汽車に投じて、はる〳〵香川縣坂出町から此處まで急行したのであつた。

『ア、山田君の御嚴父ですか。それははる〳〵大變でした。だが山田君は今よく睡つてゐますから、今起してはいけません。今起したらもう眠れなくなります。明日の競走に障ります』

あゝ、何と云ふ涙ぐましくもまた美しい場景であらう。折柄眠れずにゐた森、廣瀬の兩選手は、かう云つて、この老人をなだめたのである。謂はばこれ敵同志、競走相手の弱るのは却つて己れ等の有利となるわけであるのに、あくまでこの敵同志とも謂ふべき戰友の身體を氣遣ひ、岳父の衷情は察しながらも、敢へて戰友の奮鬪の爲めに安らかな睡を保たせようとするスポーツマンシツプ、



見る我等の胸には、快き涙を誘ふのであつた。

第五日……六月二十七日、早天六時、一人として傷つかざるなき七人の勇士は、けふ六十七哩の最長コースを突破せんものと、いづれも勢込んで走り出した。

果然、競爭の第一日、第一の遭難者として、危ふく京都に倒れんとした鈴木選手は、第三日頃より捲土重來の勢もて、擡頭し來り、昨日第四日に於いては、高橋、鈴木の順に決勝に入つて意氣いよ〳〵鋭どく、今日は、破竹の勢に驅ける先頭高橋をも追拔いて了つた。

『オヤ、この調子だと鈴木が優勝するかも知れないぞ』審判のうちにもさうした聲を聞いた。

この日、廣瀬選手つひに落伍。

然るにその翌日、第六日目、藤枝三島間五十二哩に至るや、さすがに山田は、斷然、鈴木、高橋を拔いて先頭を切つた。

『漸く足の痛みがとれたぞ。この調子だ』

勇躍一番、彼れは『楠の分まで走つて見せる』の意氣で力走また力走、雄々しくもその勇姿を三島決勝點にあらはした。その時である。『高橋傷つく』の報、一同顏見合はして言葉もない。實に彼れ高橋は、昨日までの順位に於いては、合計時間順位に於いても、到着順に於いても、共に第一位にあつた強者であつたのに、彼れも亦、脚部の激痛に堪へず、つひに今日先頭、山田におくるゝこと六時間餘、かくては最早如何とも挽回し難く惜しくも優勝圏内を滑り落ちて了つた。

この日、森選手惜しくも落伍す。

□

かくて第七日目箱根越えの選手はつひに五名、大阪出發



寫眞は前列向つて右より小笠原遞生氏高橋清二君鈴木山口六郎氏―後列向つて右より三人目から記錄員加賀三氏等々



當時の半數である。

『戰ひは最後の五分間、これからが最も大事の時、今日は箱根を歩いて越さう』飽く迄自重する山田がさう言つてゐるに引きかへ、彼れと先頭を爭はんとする鈴木選手は、例年の驛傳競走に於いて箱根越の自信は充分、『俺は走つて越す』と頑張つて、海拔三千尺の函嶺を走りつゞけつつ、刻々、山田との時差を縮めようとした。

果然、彼れは塔の澤に至るや、奮走また奮走、つひに山田を拔く五十分餘に及んだ。

『鈴木果たして山田を拔けるか否か』

さうした聲も聞こえて來た。しかし山田はあせらず、急かず、箱根を越えて平地に至るや、今の今まで蓄積してゐた精力を傾けつくし、走りに走つて鈴木を追ひ、つひに藤澤の決勝點に於ては、時差十四分に縮めて了つた。

かくてその日鈴木は一位を占めたものの、出發以來の合計時間に於いては、山田はなほ鈴木にまさる一時間二十分餘である。

翌くれば六月三十日の最終日、平地殊にアスファルトを得意とする山田を前にしては、鈴木の力走もつひに及ばず、山田は沿道の歡迎裡に、一路二重橋前決勝點のテープを切つた。

『山田萬歲！』香川縣人會應援隊は思はず叫んだ。

山田は、つひにオリンピックマラソン第四位の名譽ある歷史を汚さなかつた。

かくて第一着、山田、第二着、鈴木、三着高橋、四着福安、五着澤田——さしも全國ファンの血を湧かした大阪東京間マラソン大競走は、黄昏大内山を包む頃、しづかに〳〵その幕を閉ぢたのであつた。（大尾）



雄君會長小池厚之助氏福安鐵一君山田兼松君副會長
一郎氏審判員行田重治氏總務出口林次郎氏審判長金栗四

スポーツ界噂話

◇大食選手

沖田君と共にハンマー投で六〇米以上を投げて日本記録を破つた早大の中川義勝君に君がもし日本記録を破つたら牛肉をおごると云つた友人があつた。遂に中川君美事日本記録を破つたので友人は



牛肉をおごつて約束を履行した。中川君は力もあるが食ふ事もよく食ふものだ。牛肉三百匁を一人で平げ更に飯を十杯食つて友人をあつと云はせてしまつた。中川君の大食については面白い話がある。圓盤投の古山君と東京から郷里大阪へ歸省する途中辨當の食ひつくらをして横濱、大船、山中と順々に辨當を食ひ大阪までに各〻十個づつ平げたが古山君大阪驛へつくや直に辨當を買ひ驛の待合室にかけこみ合計十一個となし十一對十で流石の中川君も惜敗に終つたさうだ。

◇人見嬢の濡れ衣

全日本學生選手權大會で、相澤選手を破つて百米と二百米に優勝した早大の大澤重憲君は四百メートルリレーレースのメンバーとしてアムステルダムのオリムピックの檜舞臺に立つた名選手である。オリムピック大會を前にして日本代表選手一同は芝生の上で記念撮影をした。その寫眞が日本へ送られた。新聞紙は爭つてこれを掲げた。所が偶然にも前列の芝生の上に相並んで居たのが大澤君と人見絹枝孃であつた。

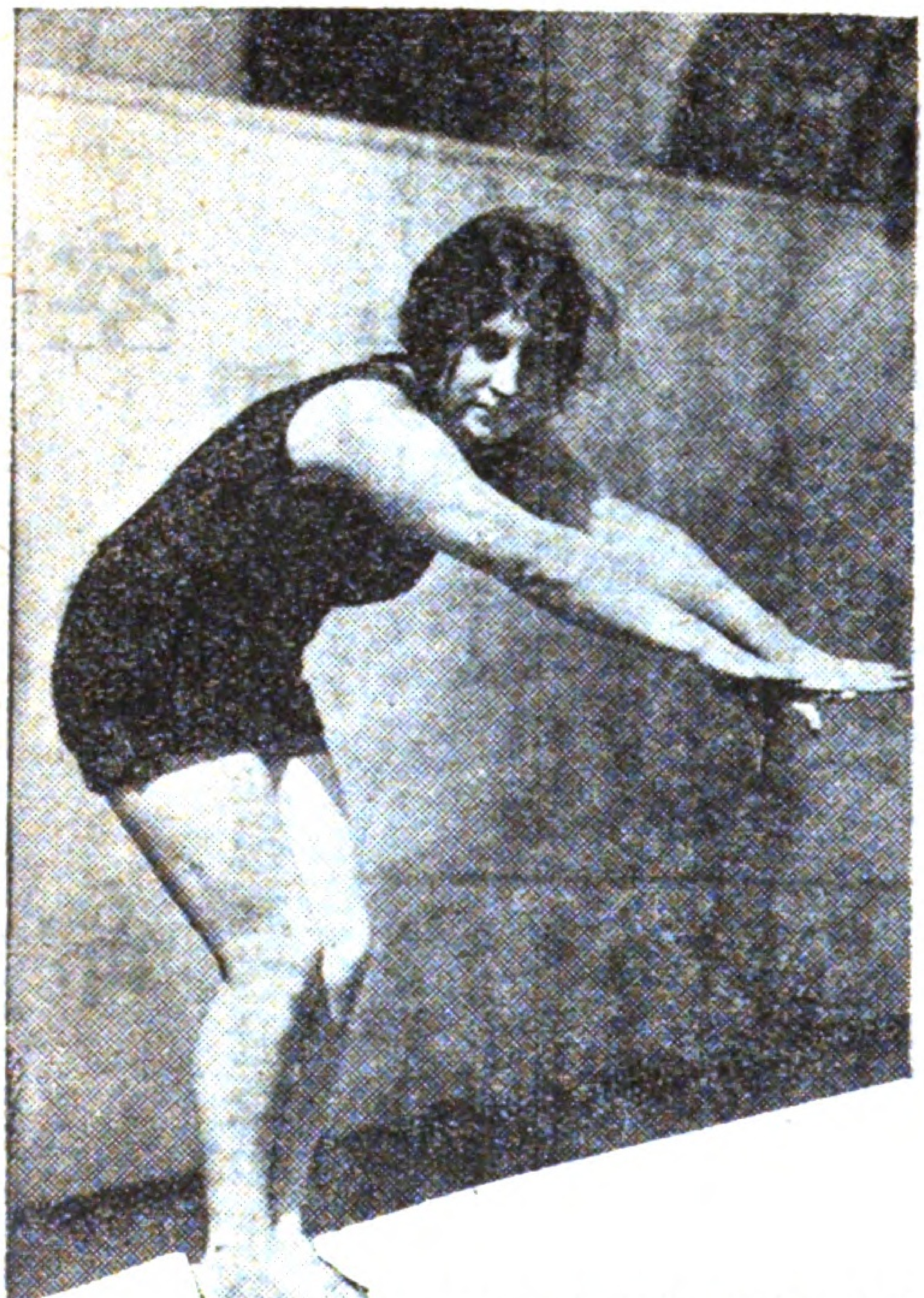


しかしそんな事は誰一人氣にとめるものも居なかつたが唯一人氣に留めたのは大澤君の御親父さんであつた。大澤君には互の親と親とが相許した許婚の人があつたのである。他の女と並んで寫した寫眞等新聞に掲げられては許婚の家の人に相濟ぬと考へられたのであらうか



世界短距離界の巨星米國のウイリヤムス君のスタートぶり

父君は郷里より大任を果して無事歐洲から凱旋して來るオリムピック選手を東京驛頭に迎へ全日本陸上競技聯盟會長平沼亮三氏を拘へ大澤君と人見さんとは寫眞をとる時に偶然並んだだけでそれ以外に何ものもないと云ふ言明を得て安心して歸郷されたと云ふ話だ。この話をきいて大澤君も人見さんもさぞ苦笑したことであらう。平沼さんはあまり突然な質問であつたのであんな驚いたことはなかつたと云つて居る。當時噂の高かつたオリムピックの一挿話である。



昭和三年秋ワイズミユラーなどと共に日本に於て活躍した米國女流水泳選手ミーニー孃

◇職業調べ

この關大對東京クラブ野球戰に出場した東京クラブのメンバーは皆古六大學の錚々たる名選手で人氣頗るあつたが、ファンもこの名選手の卒業後の就職先を實によく知つて居る、



河合君が現れると『地下鐵！』と呼ばれる、山崎君が現れると『保險屋！』永井君は『キリン・ビール！』秋田君は『放送局！』新田君は『洋服屋！』山岡君は『質屋！』野球場の管理署に勤めて居る武滿君が現れると『グランドの主』柳田君が現れると『浪人！』とはひどい。

◇金庫番人

早大で圓盤投とハンマー投で日本記錄を作り武名赫々たる沖田芳夫君卒業して三省堂につとめ金庫の前に巨體を横へソロバンを彈いて居るが店員どもは沖田君が日本一の選手である事を知らぬものがあり、あいつは體が大きいから金庫の番人に丁度いい等と蔭口もきいて居るので沖田君癪にさはつてたまらず新聞記者に向つて『今度競技會で優勝したら三省堂の沖田芳夫は日本一だと大きく書いて店の者どもに僕の偉い事を知らせてやつてくれ給へ』と。



空の命

町全體に腦貧血を起させた少年の冒險

『危いッ！　危いッ！』
『教會の塔へ子供が上つたッ！』

口から口へ、叫びから叫びへ。町は騷とわき立つた。人が走る、巡査が馳ける。町の人々が指す處、雲を突くやうな教會の塔の最頂上に、黒一點の黒い人影が見える。

子供だ。いたづら盛りの少年が何處を如何して登つたか教會の尖塔の上につけられた黄金の玉の上へ攀ぢ登つてゐる。

不圖見ると、教會の屋根の修繕の爲めにかけた梯子から、子供心の一すぢに危いも怖いも知らずと登つたものらしい。塔の天頂の子供は、群がる人々を眺めて得意だつた。何かしら無邪氣に手を振つてゐる。

『危いぞッ！　靜かにおりて來いッ！』

叫ぶ聲が唯だワーッと大波のゆれるやうに響く。少年は賞められてゐると思うたらしい。怒鳴れば怒鳴る程、帽子を振る、手を振る、

『アッ！　一足辷つたら……一足辷つたら……』辷つたら地上數百尺、アッといふ間に地へ落ちて、血しぶきを上げて粉微塵になる。

『トムやあ！』帛を裂くやうに母親が叫んだ。血の叫びだ。

呼ばれたのが通じたか遊びくたびれたか、子供は降りようとした。降りようとしてハッと躊躇した。氣がつかなかつた。見下せば屋根は急勾配のスレート葺。玉を辷り降りれば足だまりもなく辷つて辷つて百數十尺！　骨破無塵！　流石の悪戯少年もゾッとした。

彼は暫く立ちすくんだ。

『梯子を！　梯子を！』

町の人々は叫んで梯子を搜しに走つて行つた。

が少年は何思つたか、クルリと身をかへして玉に抱きつき、上端の棒を掴んでズル／＼と身を辷らせた。足が屋根に屆かない。兩手を針金のやうに一生懸命、伸した。と足の先がスレートに觸れた、上るか？　降りるか？

少年は爪先でカッチ、カッチ、スレートを叩き初めた。肩がミシ／＼と鳴り初めた。少年の汗ばんだ眼は上の風見を見る。無限の青空に金の鳥の尾がゆれる。

さあ手を離すんだ。放せば身體の平均を失つて、足を空に、宙返つて身も魂もくだけひしげる！　生死の境！

一秒、二秒、少年の手は少しづつ玉の表面を辷つて行く。あゝ、一寸、二寸、手が慄へる。足が……ッ、ッ、ッーッ！　手が汗で辷つた。アッ！　發止！　瞬間一轉すると、右の手が電光の速さで、玉の下の柱を掴んだ。

『ウアーッ！』悲鳴と喚聲が下から擧

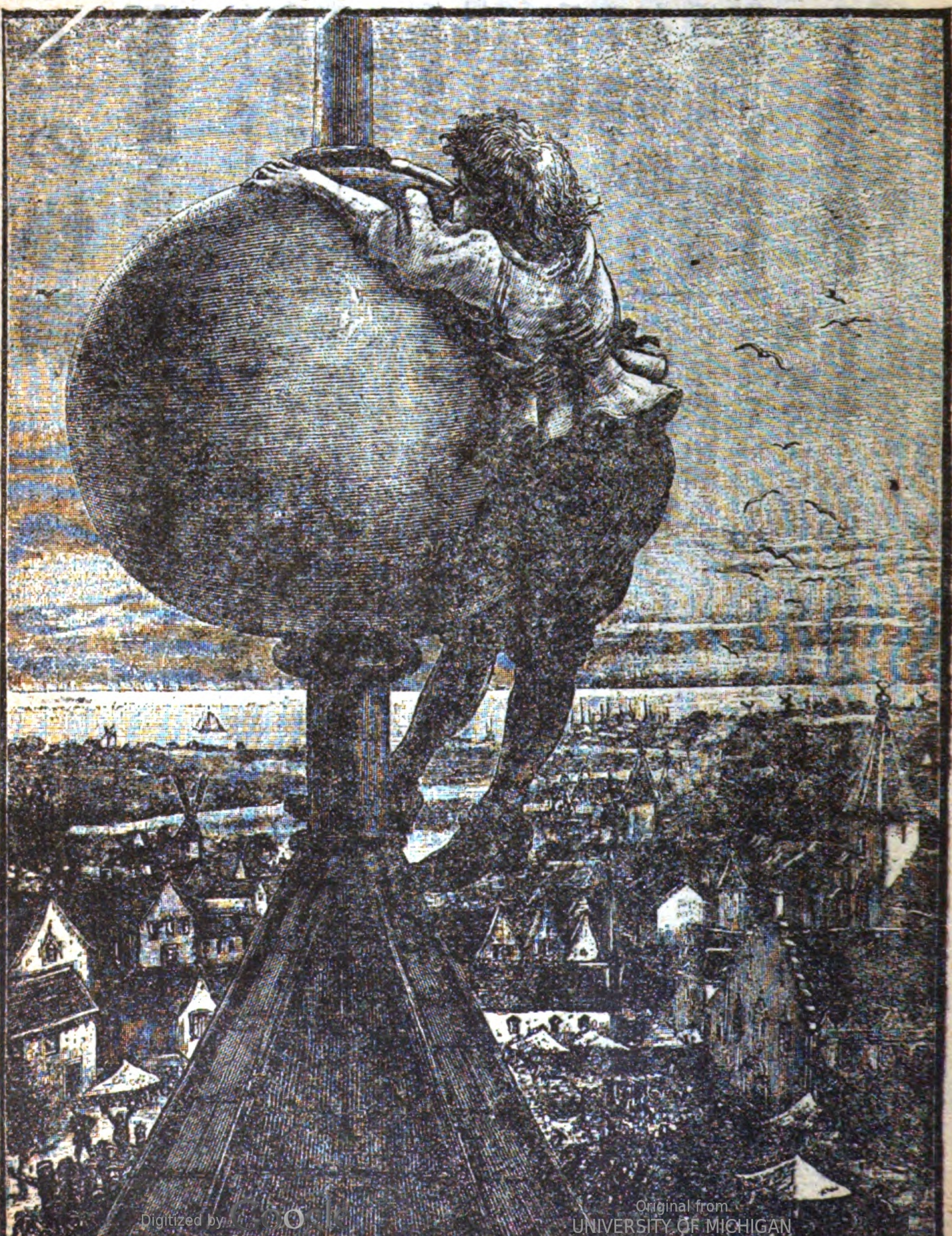
つた。もう大丈夫。スレートを壞しながら、梯子のかけてある處まで降りて來た。

『トムやッ！』

母親が少年を抱きしめた時、ムズと少年の襟首を掴んだものがある。父親だ。腕をピユーッと空にふつて、

『馬鹿ッ！』

（をはり）



洋上の慘劇

全船を血で彩つたセイヤー號の暴動

キヤツ！ ウムー！ パタリ！

月もない洋上の闇を破つて、突如、物凄い悲鳴が、フランク・セイヤー號の甲板に起つた。マニラ麻を積でニユーヨークへ向つて靜かに波を蹴つて進んでゐる小帆船、船員十四名、それに船長と細君と子供一人と……夫等が當直を除いて皆夢まどかに眠つてゐる夜半。

『アツ！ 曲者ツ！ 船長ツ！』

走る音、倒れる音、悲鳴、呻吟！

寢室に入つたばかりの船長は異樣の物音にガバとはね起きた。パツと扉を開ける。

『船、船長ツ！』叫んで階段から轉落した男が船長の足元にころがつて來た。それは血染みれの二等運轉士！

『何ツ！』飛び出した船長が階段を昇る刹那、キラリ！ 突如闇中に閃いた白刃、船長は『ウわツ！』と横鬢を斬られて倒れながら、むんずと敵の利腕を掴んだ。そして忽ち猛烈な格闘が始まつた。

『やツ！ 貴樣は！』

窓洩れる夜空のあかりにチラと見えた兇惡の顏は、マニラから乘せた黑人二人の中の一人、ゴリラのやうな醜惡殘忍の惡魔の形相。既に幾人かを殺戮したらしいその手は血糊でヌル〳〵してゐる。

『ウヌツ！』長年荒海できたへた老船長、組みついた相手を突き飛ばしてサツと身を退くと船長室へ飛び込んでバタリ扉を閉めた。……

深沈たる闇夜の洋上、突如彩られた黑人二人の兇刃は、一等運轉手を慘殺し、二等運轉手に深傷を負はせ、當直水夫の胸を刺し、船大工を海中へ投じ、舵手をズタ〳〵に斬りさいなんだ。眞に之れ荒れ狂ふ惡魔、船を奪はんとする殺人鬼。

『船長ツ！ 助けてツ！』

再び船長室のドアを激しく叩いたのは一水夫。船長は負傷した頭を布でまいた、ピストルを握りしめつゝ扉を開けた。

『船長、大變だ。隱してくれ！……駄目だ、船長、助けてツ！……』

老水夫がころげ込んで來た。そしてピストルを握つて飛び出さうとする船長を押へて、

『ま、待ちなさい。今出たら危い、朝まで……』

船は黑人二名の兇刄のために完全に奪はれた。船室に閉ち籠つて不安の一夜が過ぎた。

『高が黑人だ。武器は皆こゝにある。あ

んな野郎に無惨々々やられてたまるかッ！　殺された部下の仇だ。仇打をするんだ』

船長は悲壮な決心をすると共に逃げ込んだ船員と二人、ピストルを掴んで、攻撃に打つて出た。

甲板上は再び流血の惨劇を演じ始めた。然し兇刃もピストルには敵はない。一人の黒人は射殺され、一人の黒人は船底に逃げ込んで火を放つた。

船長は生き殘つた船員とボートに乘つた。血染の帆船は、通り魔のやうな殺人鬼と恨の惨死體とを包んで大洋の眞只中にその姿を消してしまつた……

（をはり）



水牛と鬼ごつこ

危機一髮！ カウ・ボーイの大冒險

急所に命中したらしく、水牛は、たちどまつて、ぶる〱と身體をふるはせたと思ふと、どさりと倒れた。四つ足を空へ向けて、人間なら虚空を掴んで斷末魔の悲鳴といふ恰好——一聲叫ぶとその儘ばつたり……

一發の銃聲で、もう一匹の水牛は、逃げていつてしまつたのだ、もう襲撃される心配はない。私は馬を間近にある綿の木に乗りつけて、手綱を木に結びつけた。

さて腰につけた小刀をとり出して、殺した水牛の舌を切りとらうとしてゐると、突然烈しい地響がした。最前逃げた水牛が、私を目がけて、まつしぐらに突き進んで來つゝあるのである。肩毛は亂れ目は血走つて、その物凄い勢ひ！

馬の手綱をほどく暇もない。手に持つた銃を、横へ直すや否や、のろかそるか、ズドンと一發ぶつぱなした。それで運命がきまるのだ。ばつたり倒れるかと思ひきや、その儘、襲撃をつゞけてくるではないか。駈けた、駈けた、十歩、九歩、八歩……三歩私と水牛との距離は、だんだん狭ばまつてくる。うしろにあつい猛獣の鼻息。もう息がつゞかなくなつたと思つたとき、天の助け、目の前に、深い溝があらはれた。直徑十七尺ぐらゐもあらうか。これをうまく飛び越せば、一時、息がつける。

『エイツ』飛んだ。完全に飛べた。死の跳躍だ。

向ひ岸には、水牛が、肩から血を流しながら、地團駄踏んで荒れ狂ふ。

水牛はその溝を迂回して、再び襲ひかかる。また『エイツ』と向ふ岸へ飛ぶ、敵がまた逆戻りして、くると、又飛び越える。廣い原に、水牛と人と、生命懸けの鬼ごつこをしてゐたのだ。

しかし、いつまでも、十七尺もあるところを、飛びつゞけて居る譯にはゆかない。疲勞は加はる、危險は刻々に迫る。

綿の木に繋いでおいた馬は、既に敵の猛襲に恐れて、手綱を切つて逃げてしまつて居る。この上はあの木へ攀ぢ上るより外はない。身を翻すと、それつ！とばかり駈け出した。

危いところで、木の枝に手がかゝつたが、足下には、水牛が猛り狂つてゐる。

私は危く木に殘されてゐた綱で、カウ・ボーイ得意の投網。と水牛先生、あがけば、あがく程頸を締められて、もがきにもがく。そこを鼻さき三尺で狙ひをつけて、もう一發お見舞申した。

天來の美味である二頭の水牛の舌を、キャムプに持つて歸つて、皆舌つゞみをうつたのは、それから間もなくであるが、これぞ眞カウ・ボーイ稼業の痛快味である。（をはり）



火の海突破

大平原に猛火と馬との競走

『旦那ッ！』案内のインヂアンが突然叫んだ。『大變だ、旦那、逃げるんだ。火事だア！』叫んだと思つたら、もう彼は馬の背に飛びついてゐた。

『何ッ、何處が？』ミヅーリの奥地丈餘の草を分けて來た探檢家四人は、食事中のフオークを投げ出して立ち上つた。

『旦那ッ！　あの小さい雲！　野の神様がお怒りになつただ。風を吹きつけて來るだ。火を放つただ。逃げるだ、逃げるだよ、早くあの山へ！』言ひ放つが否や、馬に一鞭、忽ち草の中へ身を沒した。譯がわからずに隨いた四人、夢中で、つゞいて馬を飛ばした。目指す避難場は、遙か遠くに霞む山！

この大平原で最も恐れる野火である。人も獸も木も草も、ありとあらゆるもの悉く一瀉千里に舐め盡す地獄の火！

如何に名馬も、丈餘にあまる草の中を全速力では走れない。あせつて、夢中で、暗雲に恐怖にかられた案内人のあとを追つた。三分……五分……十分……。

空が俄かに曇つて來た。暗い影が平原全體を包んだ。サーッと吹いたなまぬるい風一陣！　ゴーッといふ悲鳴と共に、草は右に左に激しくゆれ出した。烈風だ！　暴風だ！　それが火を煽つたら……

……仰げば空は暗澹として地を覆ふ、ふりかへれば、火だ！　火だ、いつの間に迫つたか紅蓮の焔が目近に見える。眞紅の長い蛇の舌が風に靡く草の上へヒラヒラと這ふ。烈風、黒烟、火焔、刻々に渦を卷いて背後に迫つて來る。

空氣は次第に熱くなつた。チリ〳〵と襟筋あたりに熱い火氣が吹きつける。焦げる匂ひ、風の叫び、焔の唸り……走るんだ。走るんだ。火と競爭だ、走るんだ。走るんだ！　必死の騎乘だ。

『來たッ！』先頭が叫んだ。山の麓だ。案内のインヂアンは、耳も裂けるやうな聲を上げ、山の傾斜を一氣に驅けのぼる。精も魂も盡き果てた。今一息！　最後だ。これで助かるんだ。馬よ！　命だ。鞍が折れた血みどろの馬と人。

『助かつた！』

涙がポロ〳〵四五人の頬を流れた。やつと頂上に着いたのだ。四人は抱き合つた。インヂアンは地に俯して禱つた。……

……そして眺めれば……壯觀だ。

一面火の海、たちのぼる黒煙。平原一體、地平線から地平線まで唐紅の火の海だ。焔の流れだ。激流のやうに奔馳する火焔の洪水の中から、黒塊の焔が渦卷き逆卷く物凄さ。

それもやがて、靜まれば、ただ見る、黒一色の燒野原、いぶりつゝ、死の靜寂に歸つてゆく。

四人は化石したやうに山頂にいつまでもいつ迄も立ちすくんだ。（をはり）



三人の兄妹

大洪水と戦った恐ろしき一夜

春淺い日、米國ミヅーリ河畔に住む農夫のジョー夫婦は町の親戚へ泊りがけで出て行つた。

留守は、ヘンリーといふ十五の少年と、アイザー、ジエニーといふ十歳と六歳の妹。話をしたり、遊んだり、寢床に入つたのが、九時。ぐつすり寢て、ヘンリーが眼をさました頃は、もう朝日がかん／＼と窓を照らしてゐた。

何だか、恐ろしい物音が、連續してきこえるので、アイザーが不圖窓から外を見た。

『アツ！　水！　兄ちやん大變だア！』

見渡すかぎり一面の水海、畑も牧場も、濁水が渦を卷いて、太い樹にぶつかつて、泡を吐き、低い小屋の屋根は、もう渦卷の中に、呑み込まれようとしてゐる。ミヅーリ河が雪解の大氾濫だ。首だけ出して、流されてゆく家畜、根こそぎ拔かれてたゞよふ樹木、人の叫ぶ聲、水のうなり、凄じい洪水の眞只中に、たゞ一つ取りこされた子供達の家。

家全體は物凄い震動をつゞけて、もう階下の入口は、半分程水に浸り、土臺は、烈しい水勢で、次第に崩されてゆく。渦卷いて押し寄せる水、水、水。

ヘンリーは、慌てゝ階下へ馳け下りた。

家が流される。妹達を助けなくては――十五のヘンリーは、勇氣を振ひ起した。さうだ、あの楡の樹、臺所の屋根に、長い太い枝を出してゐる楡の樹。あれなら、あれならこの水でも……。

膝近くまで浸水した臺所から、物置に入つて、古い扉、綱數條、古い板片など、とり出して、これを臺所の屋根へ。

綱を腰に結んで、まづ枝傳ひに、楡の樹に攀ぢ登つた。二十尺下には、濁水の渦、吸ひこまれるやうな死の脅迫！

上から綱を下し、まづ必要の物品を、それに結びつけて引上げた。次ぎにアイザーの身體を、しつかりと體に結び、自分は又樹にのぼつて、その綱を引上げ始めた。泣きながら、アイザアは、するすると屋根を落ちたかと思ふと、もう空中に吊り下げられて、だん／＼と上へ引き上げられる。十五の少年の手に十の少女の重み！　彼の手は、ちぎれるやうだ。肩は拔けるやうだ。ヘンリーは、腹這ひになつて、滿身の力を細い腕にあつめて、やつと一人を、樹上のプラツトホームに引き上げた。ジエニーもおなじやうに、今度は、兄妹二人が力を合せて、これも、到頭無事に引上げた。何しろ危い樹上なので、三人綱で、樹に身體を縛りつけ、滿目濁水の中に、幼い胸を痛めてゐた。

淋しい夜が來た。

一際烈しい音と共に、家の土臺はく

づれて、自分達の住みなれた家は、もう流されていつた。

『お母さあーン、お父さーん』

暗澹たる夜、烈しい水の音。恐怖の一夜。

一夜が明けて、十五の少年の沈勇と氣轉とは、完全に二人の妹と自分とを助けた。

そして親も子もひた泣きに喜びの涙に泣いた。（了）



暴風雨の猛襲

荒波に難破せる帆船の大慘事

どすーん！

瞬間に、船長も船員も將棊倒しに投げ出された。

『失敗つた。乘りあげたぞ！』と船長が叫んだ。『全員上甲板へ集れッ！ SOSッ信號だッ！ 避難準備ッ！』

忽ち烽火はあげられた。闇夜、暴風雨を衝いて、空中に火が飛ぶ――しばらくして陸上の方からも、答への烽火。ありがたい、救はれる。その中に、明方が近づいて來た。

雨は止んだが、風はます／＼募つて、傾斜した船體を狂濤が嚙み、怒濤が洗ふ。潮水は瀧のやうに船室へ流れ込む。危險、ボートは下されたが、三艘が三艘とも、水面につくかつかない中に、浪の猛襲にあつて、渦巻く怒濤にのみ込まれてしまつた。

朝が來た。晝が來た。夕方が近づいて來た。しかし救ひの船は、まだあらはれない。船は眞白い浪の牙に嚙まれて、呑まれて、今では、唯一の避難所は、マスト、帆桁のみだ。

然し、此の暴風！ 物凄い唸りを立てて烈風は天と地を吹き飛ばさうとしてゐる。それでも船長はじめ水夫達は必死だ。必死の勢ひで後檣と、前檣とに別れ別れになつて攀つた。あり合はせた、キャンヴアスや綱を切つて、身體を、しつかりと結びつけ、脚下に白く泡立つ海を見ながら只管神を念じてゐた。

後檣に、船長と一緒に逃げ上つた一等運轉士は、急に、今ゐるところの危險を感じた。さつきから、ぶら／＼になつて搖れてゐる主檣、これが倒れたら、きつと後檣にぶつかるだらうと信じた。

『船長、前檣の方へゆきませう。こちらは、危險です』

『いや、そんなことはない。きつと、向うへ落ちる。前檣の方が、危險だよ』

『兎も角も、私は向うへまゐります』

『さうか、どつちが生き延びても、これだけは、妻子に傳へよう』と、家族への傳言を、手短に話し合つて、運轉士は、帆桁を渡つて前檣へゆくことになつた。

翌日の三時頃である。突然『あつ！ ボートが來た。こつちを向いて來たッ！』と人々が生の歡喜の聲を擧げた瞬間である……猛りに猛つた大濤が、船艙へ、だだーッ！ と打ち込んだと思ふと、主檣は塔のくづるゝやうに、ミリ／＼ッと激しい響を立てゝ根元から折れた。

『ウワーッ！』折れる刹那に、後檣も一緒に倒して、船長はじめ十幾人かの命を乘せた儘、荒海の底へ……

前檣にゐた人々は、その日救はれた。

千八百八十一年一月五日イギリス、ミツドルスボロー附近の『インヂアン・チーフ號』遭難實記。（をはり）



恐ろしき一夜

生か死か狼群に圍まれし橇の主!

冬、そして寒さに暮れ易い十二月。もう四時といふに、日は全く落ちて、夕暗のひしひし迫る森の中に、かすかにひゞく橇の音。こゝは人里遠く離れてまだ部落までは十哩。

ふと怪しい物音を背後に聞いた。

『あゝ犬だな、主人に離れて人懐かしさに慕つて來たのだな』

深い森を横切る橇の主はかう呟いた。時々あとを振返つてみると相變らず同じ位の間をおいて、ついて來る。

『おや、まだあとに一匹ゐるぞ、あッ! そのあとにまた一匹……』

橇の主は靜かに呟いたが、馬のみは異樣に耳を立てゝ疲れながらに走る足が次第にはやつて來た。怪しいなア……と思うたのも束の間!

『しまつた! 犬ぢやない、狼だ。こらッ!』

後を見た彼は駭然として叫んだ。狼だ! 餓え切つた狼の群だ。狼は一時立ち止まつたが、たゞ一聲『ウオーッ』と吠えた。

彼はハッとして四邊を見廻した。斧と、雪掻きのシャベルと、金の物差し。これでは餓狼をふせげる術もない。

『一匹、二匹、三匹……七匹、八匹……』

橇にのせたぼろの包みを放り出した。狼は忽ち群り來つて、ビリ〳〵に裂いて仕舞ふ。

今度は、卵を入れた包、殻も中味も一緒に、忽ちの中に喰はれてしまつた。

もうない。何も彼等の足を止める爲に棄てるものがない。怖ろしい森の惡魔!

『ウン、さうだ』

いきなり馬をつないだ手綱を切り離し、自分は橇の中へピタリとかくれて、エイッ! 馬の尻へ一鞭強く鞭をふる。

身輕になつた馬は、ヒヒーンと一聲嘶いて驅出した。殘された橇の中に只一人彼は息を殺した。と聞ゆる狼の遠音!

逃げ行く馬の跡を、狼は雪煙をちらして一團となつて追つてゆく。荒い息づかひ、うなり聲、一秒、二秒、突如烈しい悲鳴が起つた、彼は背中から水をかけられたやう。馬の運命が決つたのだ。

橇にあり合ふもの、すべてを、身に纒ひ、ヂッと身をひそめて、生か死か、彼はたゞ夜を明けるのを待つた。

風もなく、物音もない森の雪の夜、しかもどこに目を光らせてゐるか分らない狼、血に餓えた猛獸、かくて彼はまんじりともしない一夜を橇に送つた。

やがて夜が明けて來た。ホッと息をついた。助かつた四邊には狼の姿が見えぬ。夜の魔は日の光と共に消え去つた。

次の部落に行く途中、約一哩のところで昨夜の馬の死骸を見た。只骨ばかり、あたりは血潮でどす黒く汚てゐた。(了)



命懸けの綱渡り

世界の人氣を沸す無鐵砲な曲藝師

『高が十尺二十尺の小屋の中だ。渡れもしよう、藝も出來ようが……然しだね』、と酒に醉つた曲藝のトミーが云つた『然しだね……こいつが百尺、二百尺となると、……どうでえ、プロ！』

『譯アねえよ。同じものさ、例へば、あのナイヤガラの瀑の上だつて、綱一本渡しやあ、平地を歩くやうなものよ』

『何ツ！ ナイヤガラ？ 馬鹿、手前に出來るものか？』

『出來るよ』

『きつとか』

『くでえや。綱渡りのプロだ。エツフエル塔だらうが、ナイヤガラだらうが、變るけえ！』

『チワー！ 大きく出やあがつた……』

綱渡りのブロンダンは話の途中で不圖思ひついた。

さうだ。ナイヤガラの瀑の上を渡つて見よう。物見高いメリケンだ。ヤンキーだ。……こいつあ一まうけ出來るぞ。

綱渡り、佛人ブロンダンから州當局へ『ナイヤガラ瀑布の下流に綱を渡して之を步いて渡りたいから、右興行許可相成度』といふ願書を受取つて、當局はその無鐵砲にあきれ返つた。

が結局、ヤンキーだ。やらして見ろ。落ちたつてこつちの命に差しさはりはない、落ちる瞬間を見るのも面白いぢやないか……と……結局お許しが出た。

天下のナイヤガラ！ 凄じい音と水しぶき。ブロンダンは悠然と岸の一端に現れた。物凄い拍手と喚聲がわいた。

ニヤリ！ と彼は笑つた。笑つたと思ふと彼の身體はツツツ！ もう岸から數間の宙へ浮いて居た。

猛烈な瀑しぶき。綱は上下に、左右に搖れた。中央だ。

彼は得意になつた。片足上げた。眼下數千仭！ 激流は岩を嚙んで、白い泡がわき立つてゐる。危い！ 中央の重心はひどく搖れ初めた。

と見る、パツと足が辷つた。中心がはづれた。

『ウアーツ！』

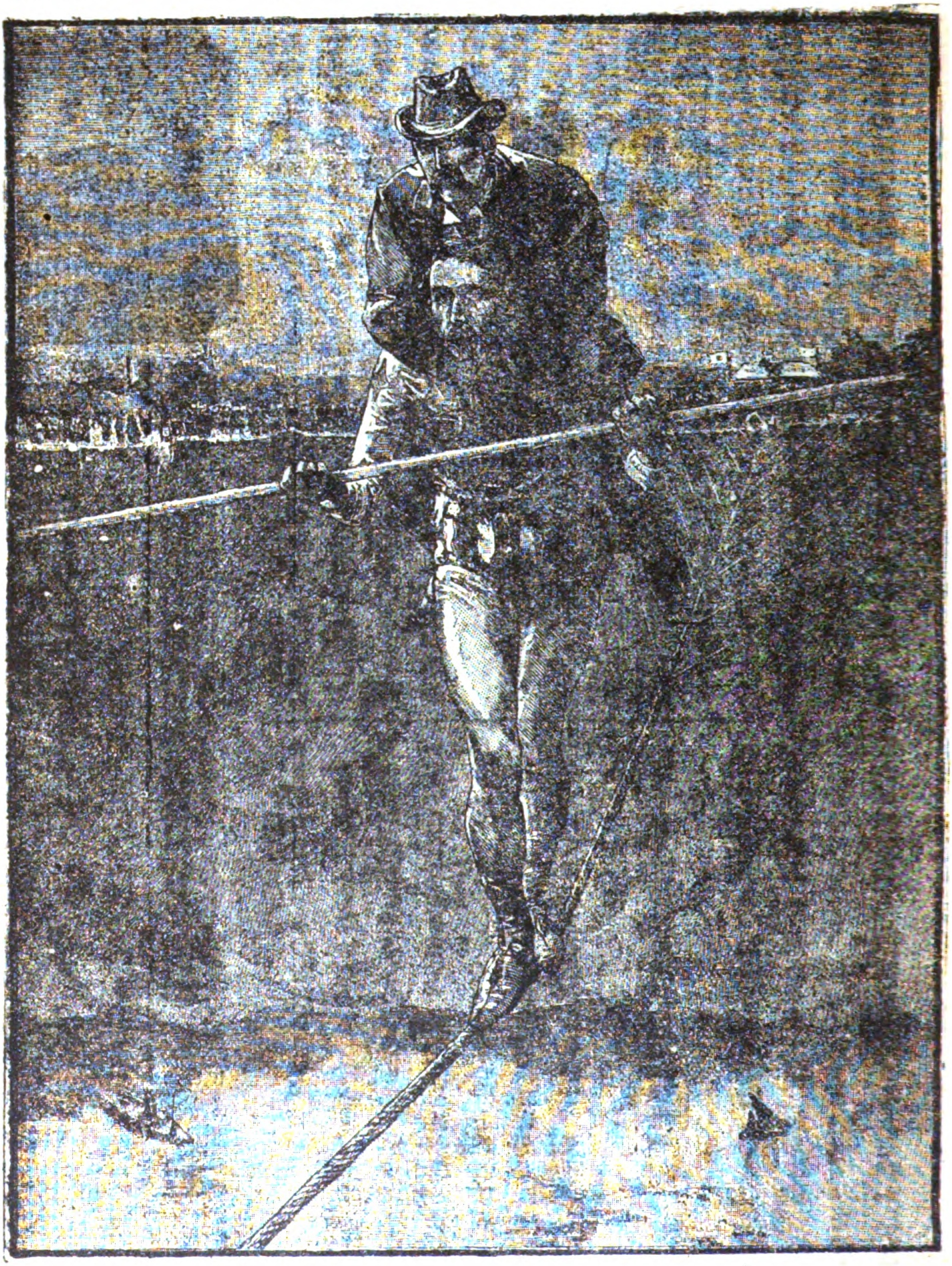
落ちた！

刹那に彼の身體はサツと宙に躍つて、業も美事な方向轉換！ 後に向きになつた儘ツツと背進し初めた。

二度目の跳躍！ 事もなげに元の位置に還つて易々と渡つたナイヤガラの瀑布上の綱渡り。

人を背負つて渡つたり、袋を冠つて渡つたり、見物の膽を冷させて、二週間に一度づつの興行を三ケ年に亙つてつゞけた。

その間には御來遊の英國皇太子殿下の御前で、秘術を盡して御覽に供したこともあつた。



『ヤア御苦勞であつた』

と殿下から御握手を賜つたので、先生得意になり、

『如何です。殿下を御負ひ申し上げて、渡りませうか』

と言上したが、これだけは物にならなかつた。

『俺ア世界一の綱渡りの名人だ』

と彼は今でも自慢してゐる。（をはり）


泉道雄氏

言ひ譯しない人々

千代田女子專門學校長　泉　道　雄

修養の道は多岐多端でありますが、私共は何か一つを中心として進んで行けば、遂には全體を全うすることが出來る樣になります。それ故に何でも一つの標的を作つて專心そのことを貫徹する樣につとむれば、他の諸徳も自ら成就する關係があるものであります。

私は『言ひわけをしない』と云ふことを一の標的として修養したら大變面白いことゝ思ふ。『言ひわけをする』と云ふことは自己辯護をすることであります。自己辯護と云ふことは、私達の當然の權利と考へられてゐることでありますが道徳的、宗教的の高い見地から眺めて見ると、誠につまらないものであります。人から疑はれたり、誤解されたりしてゐるとき、どんなに自己辯護をやつても、容易に疑は解くるものではありませぬ、言ひわけをすればする程、益ゝ疑を深くすることがあります。かの新聞や雜誌で、記事の取消廣告をなすが如きは、あまり効力のないものであります。

自分が正しくないことをしたとき、又は過失をなしたとき、兎角自己辯護をやるものでありますが、之れは尤も男らしくない醜い行爲であります。例へば生徒が學校に遲刻した場合、教師が『君、今少し早く來たまへ』と注意すると、『電車が停電しました』とか、『滿員續きで乘れませんでした』とか、何とか理由をつけて申譯する風があります。又家庭に於いて、御飯の出來が惡るかつたとき、主婦が、

『下女が不慣のため出來が惡かつた』

とか、

『一寸御客があつたので火加減をしくじつた』など辯解がましいことを言ふ傾がありますが、かゝる場合に、私は多少の理由はあるにしても、只『はい』とか『すみませんでした』とか穩かに挨拶して、以後を注意する人をゆかしく尊い人と感じま

す。かつて、高輪中學校で、數回遲刻した一生徒を叱つたことがあります。彼は謹嚴そのもの〻如く、直立不動の姿勢を取つて『私が惡う御座いました』とあやまつて、少しも辯解がましい態度を見せませんので、之れは一種變つた學生であると思つて、段々樣子を調べて見ると、意外にも彼は感心な苦學生であつて、毎日牛乳配達して、御得意を廻はつて學校に通つてゐることが分つた。私は非常に氣の毒の感が起つて、爾來彼に對して心からの同情者となりました。今は彼は立派な宗教家となつて、東京附近の某刑務所の教誨師を勤めてをります。又千代田高等女學校で、一人の優秀なる女生徒が遲刻が屢々ありますので、『あなた、どうして、屢々遲刻しますか』と主任教員が注意しますと、彼女は只眼に涙を浮べて、『惡う御座いました』とのみいつて、更に何事も申しませんので、母親を呼んで樣子を聞きますと、母親も又涙を浮べながら、



『それは全く私共が惡う御座います。[illegible]御座いませぬ』

と申しますので、愈々不審になつて、[illegible]と、次の樣な譯でありました。

彼女の家庭は中產以上の家庭で、生活には何等の不足のない家でありました、然るに其の父親は長い間患つて病床に親みがちでありましたから、自然朝の食事が遲れ勝でありましたが、彼は毎朝家族全體と一緒に食事することを無上の樂みとしてゐました。彼は千代田に通つてゐる娘を特に愛してゐましたので、彼女が食卓にゐないと非常に機嫌が惡いのであります。可憐な彼女は父の氣持をよく知つてゐますので、登校の時間が來ても思ひ切つて家を出る勇氣がなかつたのであります。母親も亦娘を氣の毒に思はないではありませぬが、行く先短き老父をなぐさめる娘の心を察して強くも云へなかつたのであります。こうした理由で彼女はともすると遲刻勝であつたのであります。そして一度も辯解がましい言ひわけをしない處に、大和なでしこのゆかしさがあるのであります。此の事情が明瞭

になりましたとき、何とした麗しい少女であらうと、一同が感賞したやうな譯であります。彼女は同級生から、非常な尊敬と思慕とを受けた模範生でありました。こうした少女が、やがて家庭の主婦となりましたとき、如何なる家庭が實現せらるゝでせう！　何人も容易に其の美しい家庭を豫想することが出來ませう。

要するに言ひ譯をし、自己辯護をすることは、今日一般の男女の通弊でありますが、たま〳〵こうした例外な男女學生に接したことは誠に氣持ちよい感が致します。私は言ひ譯の上手な人に、人格の高い人はないと思ひます、古より孝子貞女と呼ばるゝ人は皆辯解のまづい人で言ひわけをしない人だと思ひます。



我日本の國は元來言擧せぬ國といはれてをります。言擧せぬと云ふことは神明に對し、祈願して諸事を行ふことを忌むといふ意味に用ひられてゐた樣でありますが、又貴人や目上の人に對して言葉數を多く云はない、乃ち上の人に反對しない事はないと云つた樣な意味にも解せられて來た樣であります。乃ち言擧せぬことは言譯をしないといふ精神と根本に於いて似通ふものがあります。

伊勢の寂照寺に、月僊上人と云ふ高德がゐました。上人は繪が上手で、依賴者があると快く書いて遣られました。併し上人は後にはお金を取つて繪を書かれたので、段々と評判が惡くなり、上人の繪を愛する人でも、上人の人格を尊敬する人は少くなりました。あるとき伊勢の松阪の遊女が上人に繪を賴んで書いて貰ひました。繪が出來上ると遊女はそれを受取つて、『お金で書いて貰つた繪ですから、私が勝手に致してもよいでせうね……』と念を入れて、上人の目前で腰卷にしてしまひました。定めて怒られるだらう。怒られたら一つ忠告を致しませうと遊女は待ちまうけてゐたが、上人は一向怒らるゝ樣子もなく、極めて無頓着な態度であつたので、遊女は更に憤つて上人にお金を投げつける樣にして、其の場を去りました。

此の話が世間に知れると、只さへ不評判な上人の道譽は益々地に落ちました。然るに上人は一生涯の間、一度も自己の辯を

やられたり、一度も言ひ譯がましいことをせられませんでした。從つて、上人が何の爲にお金を取らるゝか、何に故に惡評に對して馬耳東風でゐらるゝか、其の眞相が遂に知られなかつたのであります。かくて上人は墮落僧、賣名僧の惡評を浴びつつ遷化せられました。上人の死後遺産の始末をつけるとき、莫大な金が殘つてゐたので、關係者は一驚を喫しました、がやがて又一個の遺言狀が現はれて、更に二度目の驚を喫しました。遺言狀によつて見ると、上人には、二つの大きな願望があつた。一つには自分のお寺の山門の大修理を發願せられてゐたのである。今一つは、自國領内の貧民救助を念願せられてゐたのである。それ故に其の遺産は一は山門修理の費にあて、一は貧民救助の爲めに領主へ獻納することに定め、殘餘の少額を以つて、僅に自分の葬儀の費用にあてゝあつた。居合はす人々は、始めて月僊上人の寡慾淡泊であることを悟つて、今迄自分達が惡評を浴びせてゐたことを心から悔いました。更に驚くべきは、上人沒後、上人は陰れたる慈善家であつたことが知れわたつたことである。上人は常に人知れず財貨を惠み、陰れて慈善を施されたのであるが、嘗て之を人に知らしめたことがなかつた。又貰うた人もその何人であるかを知ることが出來ませんでした。唯時時旅の坊さんがやつて來て、村の氣の毒な人々へ物など惠んで、飄然として去つて行く所を知らなかつたのであります。里人は只後姿を拜んで心密かに感謝してゐたに過ぎなかつたのであります。それが月僊上人であつたことが歿後始めて明かとなつて、其の聲譽は非常に高くなりました。上人の書かれたもので今も尚其の道の人に非常に愛好せられてゐるのは、故あることであります。



私は上人の傳を讀んで、上人の其態度に感激なしに終ることは出來ませんでした。人からお金を取つて繪を書いてゐるとき、

『實は之は慈善事業の爲にお金を集めるのである』

とか、又は、

『山門の大修理をやる爲にお金が入用であるから……』

など云つて、辯解がましい言譯や、宣傳をせられたなら、お金は澤山集まつたか知れぬが、上人の人格を價値づけるには、あまりに平凡であります。人が何と惡口を云はうが、罵詈しようが、そんなことは少しも頓着しないで、只自分の信ずる行爲を行つて、一生言ひ譯しない處に偉大なる性格が發露するのであります。普通の眼から見れば、言ひ譯しないのは、極めて意氣地のない、卑怯の人の樣に見えますが私は寧ろ言ひ譯をしない人こそ、眞の勇者であると思ふ。心に餘程確乎たる信念がないと到底之を一貫せしむることは出來ないのであります。西鄕隆盛が、『人を相手とせず天を相手とせよ』と云はれましたが、月僊上人の如きも人を相手とせず、佛を相手として進まれた方と信じます。『人の惡評』や『世間の噂さ』……そんなものが何程の價値があらう……自分は佛の心を心として衆生救濟の爲に盡してゐる、否報恩の爲に働いてゐる、人が何と云はうが、佛の御心に適ふ樣に働けばそれで充分である……此の確信が遂に彼をして陰德の高僧として完成せしめたのであります。現代はあまりに自己辯護が盛であります。自己宣傳が熾烈であります。而して靜に退いて內容の充實を計ることが忘れられてゐます。それ故に、宣傳がきゝすぎて自分の評判が高まつて行くとき、其の人の內容は空虛になつて、價値は低下するものであります。學者、醫者、藝術家、宗敎家、事業家等々の人々が、一時名聲嘖々たるものが、忽ちにして、其の影が薄くなるのは畢竟之が爲であります。此の點に於いて、私は大に月僊上人の態度に學ぶ處があると思ひます。



最後に今一つ言ひ譯をしない人の實例として、良寛和尚のことを御紹介致しませう。

良寛和尚は越後の出雲崎の名主の息子でありますが、十八歲の頃出家し、後、備中玉島圓通寺の國仙和尚の下に修業することゝなりました。成業の曉故鄕に歸りましたが、其の貧弱な乞食僧の姿には誰あつて彼が良寛上人であることを知るものはありませんでした。偶〻、其の地方に小盜棒が出入して、村人が困つてゐたときでありますが、誰云ふとなく、あの近頃來た乞食僧がその盜棒に

違ひないと速斷して、遂に彼を捕へて、路傍に生き埋めにしました。頸から上だけ地上に出して、他は全身地中に埋めたのであります。往來の人々は、口ぎたなく良寛上人を罵つて、小氣味よく笑つて過ぎました。良寛上人は少しも爭ふ所なく、又訴ふる所なく、唯ゝ雙眼をパチクリ〳〵させてをりました。唯ゝ村の一老人が通りかゝりまして、

『お前さんは良寛さんではないか』

と尋ねますと、

『えゝ、わたしは良寛です』

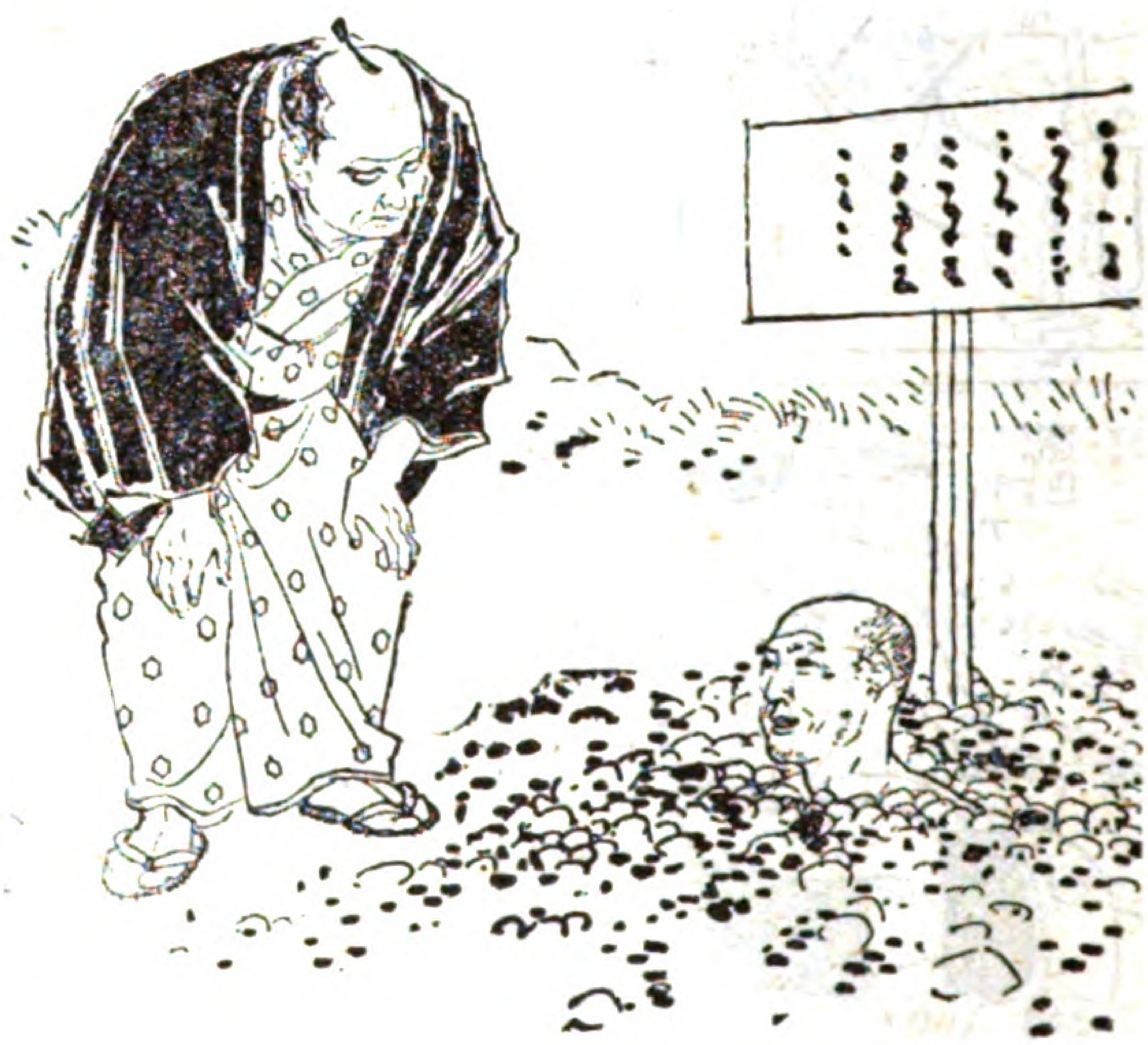
『何だつて、そんな目にあつてゐなさる……』

『村の人が俺を盜棒ぢやと云つてこんなことにしてしまつたのだ……』

『お前さん盜棒しなさつたのか……』

『盜棒なんかしないが間違へられたのさ』

『間違ひなら間違ひとはつきり辯明しなさればよいぢやありませぬか……』



『辯解したつてしなくつたつて同じ事さ』

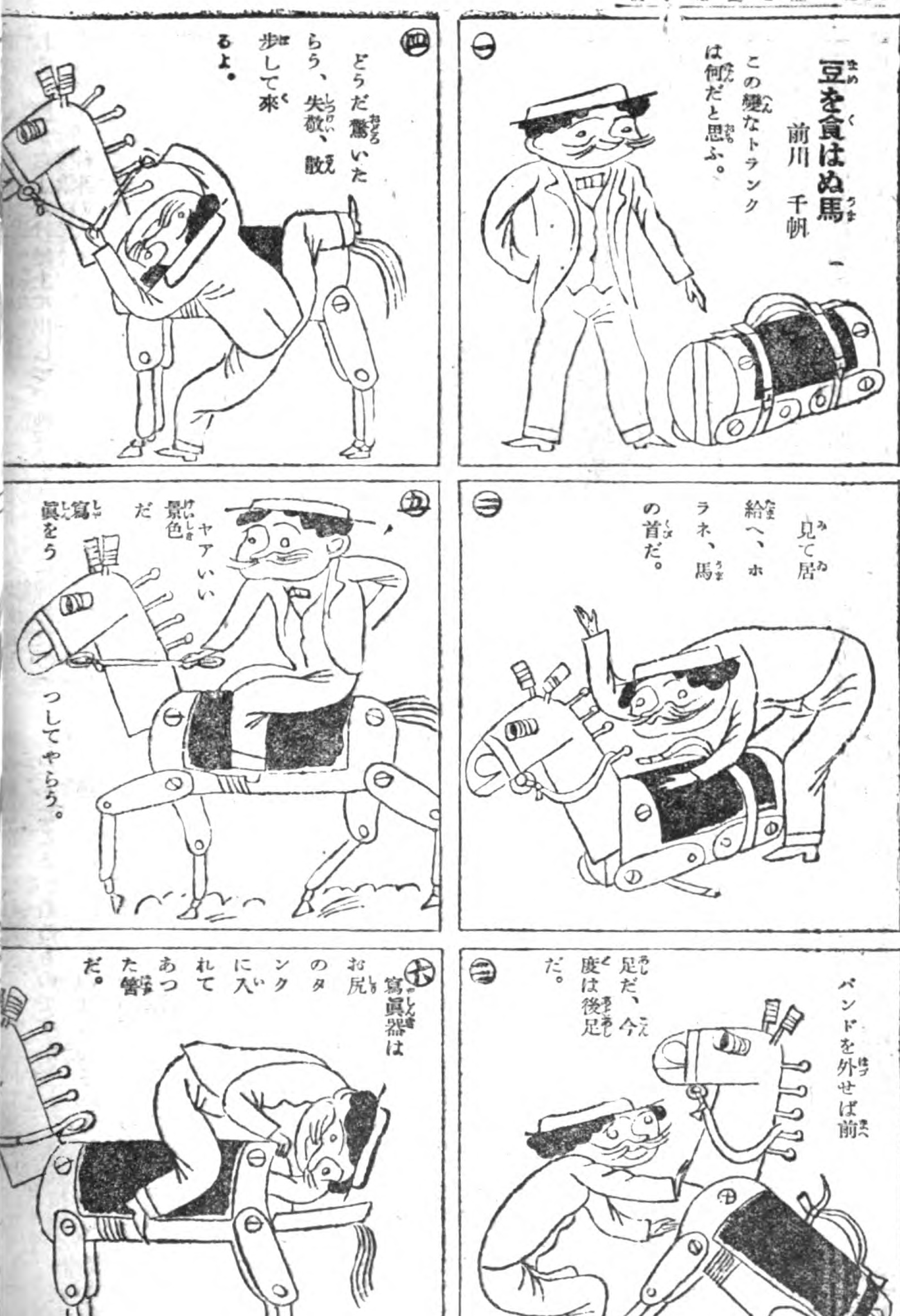
『そんなことがあるものですか』

『間違つて殺されるものなら殺されもしようし、助かるものなら、ほつておいても助かるだらうよ……』

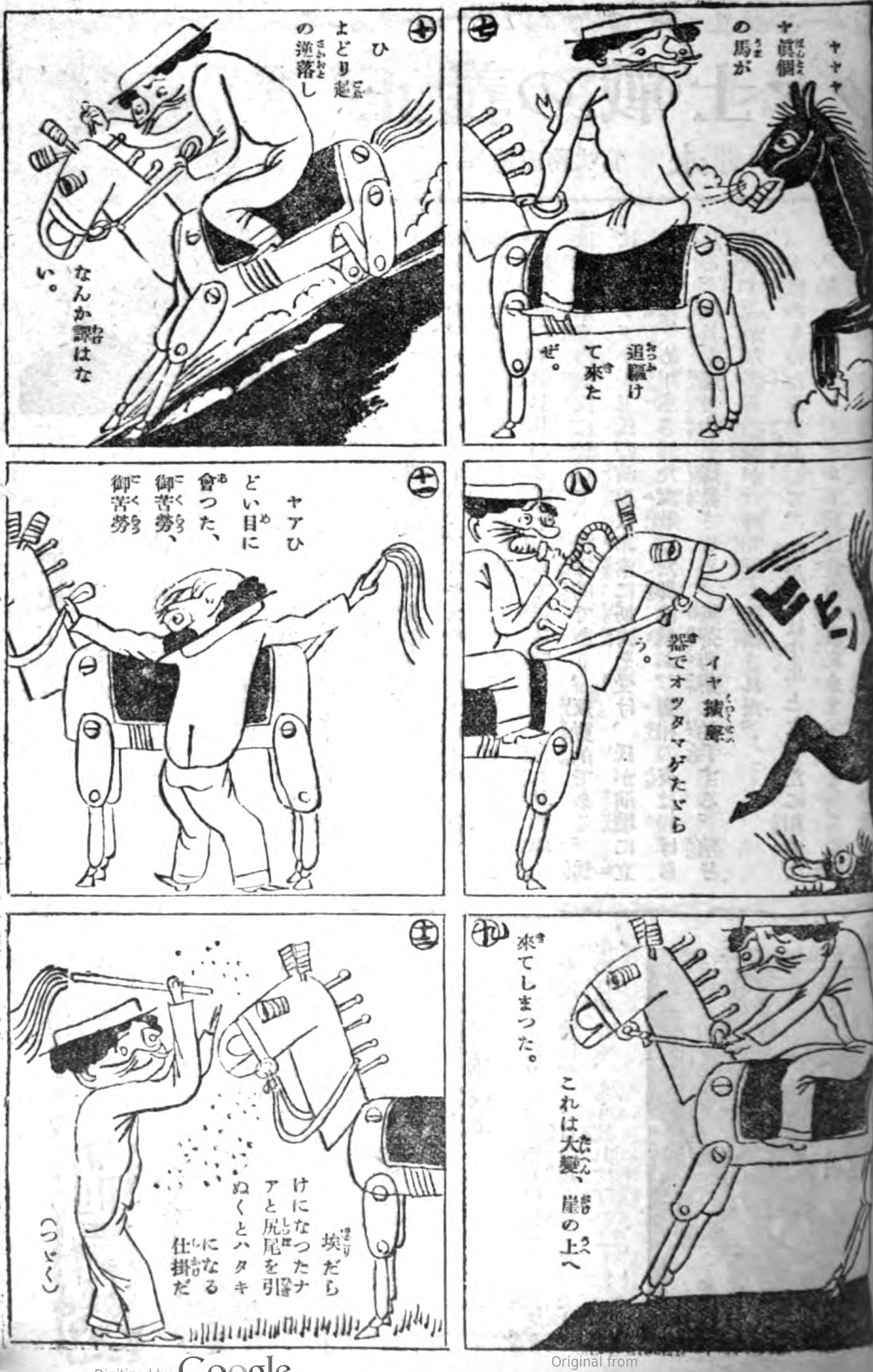
かうした問答の末、彼は遂に自由の身となつて村人の尊信を受くるに至りました。

良寛上人が生埋めにされたことに付ては異說がある樣であります。只單に縛についたと云ふ話もあります。何れにしても一言半句の自己辯護をやらないで、自然の前に自己を投げ出してゐるところは、常人の企て及ぶことの出來ない處でありますが、之は良寛上人の信念の力が與かつて多きにあるのであります。佛敎の信仰に生きてゐた彼は因緣と云ふこと、宿業と云ふことに深い確信を持つてゐられたのであります。そうして、その確信は遂に彼をしてかかる奇行を敢てせしめたのであります。併し此の奇行は良寛上人に取つて決して奇行でもなんでもなかつたのであります。彼は只自分の信念の儘に動いたに過ぎないのであります。上人の行爲には敎へらるゝ所が數多ありますが、さきの奇行の如き私達をして深く考へしむるものがあるやうに思ひます。言ひ譯をしない修養をお互に心掛けたいものであります。(完)

◇率直にして男らしき人格は辯解を要することなし　エマースン



豆を食はぬ馬
前川　千帆
㊀ この變なトランクは何だと思ふ。
㊁ 見て居給へ、ホラネ、馬の首だ。
㊂ バンドを外せば前足だ、今度は後足だ。
㊃ どうだ驚いたらう、失敬、散歩して來るよ。
㊄ ヤアいい景色だ
寫眞をうつしてやらう。
㊅ 寫眞器はお尻のタンクに入れてあつた筈だ。


ヤヤヤ眞個の馬が追駈けて來たぜ。
ヒヒン
イヤ擴聲器でオツタマゲたどらう。
これは大變、崖の上へ來てしまつた。
ひよどり起の逆落しなんか譯はない。
ヤアひどい目に會つた、御苦勞、御苦勞
埃だらけになつたナアと尻尾を引ぬくとハタキになる仕掛だ
（つゞく）

正義の戰士マク

外務政務次官　永井



永井柳太郎氏

○歴史上記念せらるべき存在

回顧すれば二十年前のことであります。英國に於ける勞働黨が、當時、尚微々たる一在野黨に過ぎなかつた頃、ラムゼー・マクドナルド氏は、一日、オックスフォード大學に來り、勞働黨の爲に一場の演説を試みた。

オックスフォード大學と云へば、其の卒業生中からグラッドストンや、ローズベリーや、アスキスや、モーレーや、グレー等の如き幾多自由黨の名士を輩出したけれども、大體に於いて貴族富豪の子弟が其の多數を占めて居る關係上、自ら其の學生は其の思想の傾向に於いて、保守的であり、反動的である。爲に、マクドナルド氏の演説は非常に妨害を受け、氏が演壇に立つや、豫め用意された腐敗した卵は飛ぶ、蜜柑の皮は投げられる。玩具の爆發物を爆發させる。無茶苦茶に拍手する。殆ど名狀すべからざる喧騷が一時間近く繼續された。

大抵のものなら辟易して、演説會は中止となつたに相違ない。然るに、マクドナルド氏は此の喧騷底止する所を知らぬ野次に對して一向ひるむ所なく、否、野次が高ずれば高ずるだけ

風變りな刑罰

ドイツのニユロンベルグの城の中には、ドイツ中世期の拷問器具を保存した展覽場があります。その中には、有名な「鐵の生娘」などいふ殘酷を極めたものもありますが、さうした殘酷なものの半面には、又、頗る巫戲化た、ユーモラスな、奇拔な面白いものも澤山ありました。中から、特異なものを拾ツて見ます。

喧嘩兩成敗

さアからなツては手出しは出來ず、顏と顏とを睨め會はせて、口で罵り合ふだけです。その口爭ひも、もう疲れて了ひました。さす



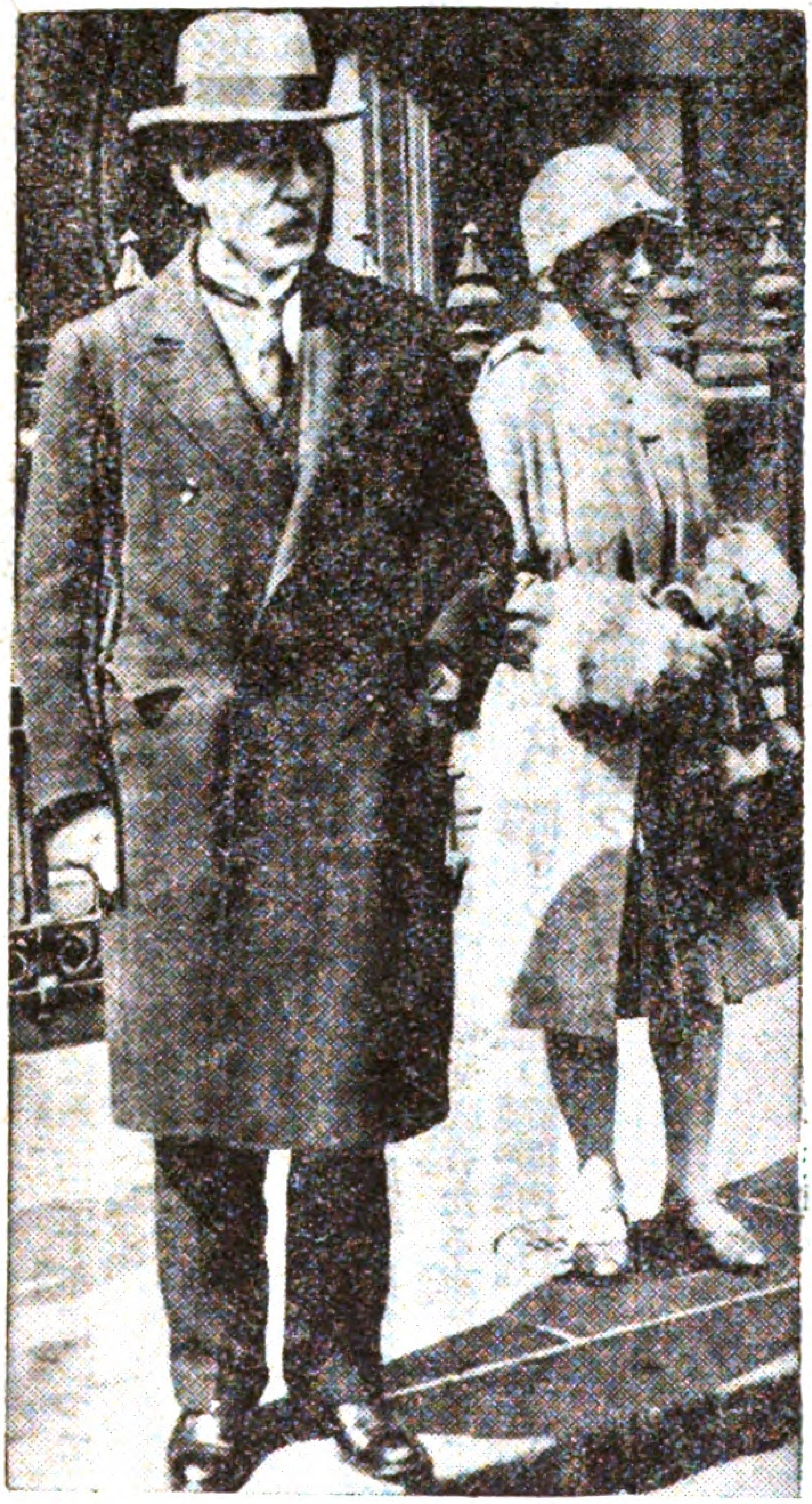
ドナルド

柳太郎

勇氣を增し、或時は沈默、或時は絕叫、さしも凄じかつた之等の喧騷を、遂に、完全に征服して其の述べんと欲する所を遺憾なく述べつくしたのである。

私は當時、此の英國大學生の亂暴に驚くよりも、寧ろ、かゝる亂暴なる學生を征服し、一切の喧騷に超越して自己の所信を述べつくしたマクドナルド氏の勇氣に對して驚かざるを得なかつた。

其の非凡なる忍耐と勇氣と沈着と見識とは、當時、私をして、マクドナルド氏



寫眞は最近のマクドナルド氏と、亡き母に代りて父を助けつゝある愛孃イシベル・マクドナルド孃。

が喧嘩好きな內儀さんも、そろ〳〵後悔して來ました。——これは、むやみと喧嘩をしたがッて、あたり近所に迷惑をかける者に科する刑罰です。拷問器をよく御覧下さい、實に面白いではありませんか。

音樂冒瀆

よく注意して見ないと間違ひます。クラリオネットを吹いてゐるのではありません。手も頸もガッシリと錠かけられて、動かないのです。——これは、下手ないゝ加減な音樂を聽かせて、金をとると、かういふ刑に會はされるのです。我が國には、古々藝術賣買の徒



とか、藝が身を助くとかいふことがありますが、こんな風では、うつかりイキな門づけも出來ないわけです。

が他日必ず英國の政界を指導すべき大政治家として、傑出したる地位を獲得するに相違ないと信ぜしめたのであつた。果せる哉、今や彼は過去三十年に渉つて全英國を通じ、オックスフォード大學に於けると同樣、勞働黨に加へられたあらゆる攻擊と壓迫と妨害と罵詈とを克服して、自ら勞働內閣を組織し大宰相として英國史上に前例なき地位を確保するに至つたのである。

實にマクドナルド氏は、多年虐げられたる無產階級が、其の奴隷、屈從の世界を葬り去つて、獨立自主の世界を建設せんとする新時代の先驅者たる事に於いて、歷史上特筆せらるべき存在である。私は、許さるゝ時間の範圍內に於いて、正義の戰士、マクドナルド氏の面影を諸君に語つて見たい。

○山紫水明の地偉人を生む

マクドナルド氏が今日の地位をかち得て、新らしき一頁を歷史の上に記錄さるゝに至つたのは、一朝一夕の努力ではない。今や、英國民の絕大なる信任と世界に於ける無產大衆の大なる期待とを一身に擔うて倫敦市ダクニング街の首相官邸にあるマクドナルド氏も、一度頭を廻らして靜に過去を瞑想する時、六十三年の苦闘の生涯、忍苦の體驗は、實に血淚の歷史そのものである。

一八六六年秋十月、マクドナルド氏の呱々の聲を擧げた蘇格蘭の片田舍ロッシーマスは、蘇格蘭のナポリと呼ばるゝ程の美しい海岸で、スパイニーの荒城、モレーの古代寺院等を始めとして、歷史、口碑に富んだ舊蹟が數多く殘つてゐる。此の景勝の地、此の傳奇的な環境の裡にマクドナルド氏の幼少年時代は過されたのであるが、彼の性格に最も大なる感化を與へたものは、其の故鄉の山水よりも、

飲んだくれ

やア來た〱、みんな出て御覽！　だが、一寸待つて下さい。これは、サンドイッチマンでも、チンドン屋でもありません。癖の惡い飲んだくれが、お上の罰にかけられてゐるところです。——性懲りのない飲んだくれは、みんなかうして重いタンクのやうなものを着せられて、町中を引廻されるのです。少しでも怠けたり、不貞腐れたりすると、看守は容赦なく手にせる棒でコツンコツン喰はせます。



不正パン屋

斤量不足なパンを賣つた、不正パン屋です。まるで、鼠落しにかゝつた鼠を、殺す時のやうな光景です。でも、命だけは助けられ

寧ろ彼自身が、其の少年時代より好んで讀んだ英雄傳や、偉人物語であつた。貧弱な自分の家の藏書は勿論の事、村中の書籍といふ書籍を漁りつくして讀み盡して失望を感じてゐた時に、偶々、南方より移り來た時計職人が、多少の書籍を所持してゐることを傳へ聞いた彼は、直ちに走つて色々の書籍を借り受けて、貪る樣に讀破したと云ふ一挿話の如きは、彼が如何に讀書を好んだかといふ事を證するに餘りあるものである。彼は此の點に於いて米國の生んだ近代の偉人アブラハム・リンコルンの少年時代に彷彿たるものがある。

彼の少年時代は、多くの立志成功者の例に洩れず、平和ではあつたが、可なり酷い貧乏の中に過された。彼の家庭は、彼のために一足の靴を求める事さへ出來ずに、彼は雪の日素足の儘で小學校に通つた程貧乏であつた。併し、成績は拔群でいつも首席をかち得たと云ふことである。

○市營倉庫の一事務員

マクドナルド氏が青雲の志抑へ難く、倫敦に出て來た時は、まだ廿歳にも滿たぬ青年時代であつた。

大都會の冷酷さに沁々と幻滅の悲哀を味はつた彼は、幾度も故郷に歸らうかと考へたが、其度毎に彼は齒を喰ひしばつて踏み堪へた。而して、我と我が身を勵まして、漸く探ね當てた就職口は、市營倉庫の一事務員であつた。一週間僅かに十二志半（約六圓五十錢）これが、マクドナルドの倫敦に於いて受取つた最初の俸給であつた。斯くして、眼の廻るやうな多忙な生活が始まつたのであるが、晝休の時間には必らず讀書し、夜は夜で遲く迄、通信講義錄で勉强した。

ます。全く奇拔な刑もあつたものです。



長屋こはし

『ほんとにいゝ氣味だわ。』

『これですつかりせいせいしたよ。まあ此のシャツ面を見てやりなさいよ！』

群がり寄つた內儀連は、口を極めて醜怪な曝し人を罵りかけ、痛快がッて居ります。胸にちやんと『長屋こはし』の板をぶら下げてゐるやうに、此の內儀は、あッちへ行つては



彼は二十三歳の時、幸運にも當時、自由黨から立候補したトーマス・ローと云ふ政治家の秘書役となつた。爾來、トーマス・ローの許にあつて實際政治に親しみ、其の後數年にして、新聞記者となり、「デーリー・クロニクル」「エコー」等に堂堂たる論文を掲載して世人に認めらるゝに至つた。如斯にして彼は遂に推されて政界に進出した。

彼が政治運動の第一歩は、一八九三年、ケーア・ハーデー氏と提携して獨立勞働黨を組織した時より始まる。實に今より卅五年前である。一九〇〇年獨立勞働黨が、社會民主黨や、フエビアン協會や、勞働組合聯合會等と合併して今日の勞働黨を組織するや、彼は擧げられて其の書記長となつた。

勞働黨の黨勢は、其の後伸々として擴大し、殊に世界大戰に直面して、英國民が未曾有の生活難を體驗し、從來の支配階級の頼むに足らざる事を自覺するや、彼等は、翕然として勞働黨に多大の期待を寄するやうになつた結果、一九一八年、休戰後第一回の總選擧に於いては、俄然として其の勢力を增加し、一九二四年一月遂に第一次勞働内閣は組織され、今回復たびボールドウイン氏の率ゐる保守黨内閣の後を受けて第二次勞働内閣を組織し、其の宿昔の志を行ふべき絶好の機會に遭逢したのである。

○高潔なる理想と非凡なる信念

マクドナルド氏は、高潔なる理想を持つ非凡なる信念の人である。

世界大戰直前の事であつた。英國民は全土を擧げて『戰争へ！　戰争へ！』と熱中しつゝあるに拘らず、彼は戰争が資本的帝國主義の必然の結果であるとして、英國が戰争に參加するの罪惡なことを絶叫した。彼は往年グラッドストンが

こッちの惡口を言ひ、こッちに來てはあちらのアラを告げ口し、俗に言ふゴマ挾き、アマノジャクの品性劣等な仕様のない女で、長屋の平和を掻き亂すため、斯くは醜怪珍妙なる罰に處せられたのです。

窓からそッと一人の老婆が、『鼻の孔でもくすぐつてやれ』とばかりに、麥の穗を突き出しました。

イカサマ博奕

立派な髭なんか生やして、一寸見ただけでは堂々たる軍人のやうであります。

だが、よく見ると、勳章だと思ッたのは、サイコロにトランプ、パイプ、飛んでもないものばかりです。……もう解つたでせう。これは、イカサマバクチ（インチキ）をやつた男です。



阿片戰爭を罪惡なりとして、唯一人、英國民に反對し、迫害を意とせず、主義のために爭うたと同様に、彼は、一人毅然として參戰に反對し、飽く迄も非戰論を高唱して止まなかつた。果然、非國民、國賊、賣國奴等罵詈と讒侮は彼の頭に與へられたのである。

彼は社會の誤解と排斥とを被りて、一九一八年の總選擧に於いては不幸にして落選し、次いで一九二一年に行はれた補缺選擧に於いても復敗れ、あまつさへ黨主の地位をも放擲せねばならぬ羽目に陷る等、具さに艱難辛苦を嘗めたにも拘らず、飽く迄も、其の所信を提げて勇敢に戰ひたる一事を以つてしても、如何に彼が自己の信念に忠にして、不撓不屈の精神に富む政治家であるかが明瞭である。

私は、在英中、屢ゝ彼を倫敦郊外のハムステッドの邸宅に訪づれ、其の私生活に於いても知る事が出來たが、彼は單なる政治家でなくて、又熱心なる宗教家である。然して彼が燃ゆるが如き熱情を有する人である事は、亡妻を記念する爲に著はした『エセル・マーガレット・マクドナルド』傳を一讀する人の、直ちに感得する所であらう。

マクドナルド氏は、一九二六年の勞働黨大會に於いて『今後再び勞働黨が政權を執る機會ある場合には、他の何れの政黨とも妥協せず、即ち聯立內閣を形成する事なく、勞働黨獨自の力を提げて、單獨にて勇往邁進すべし』と宣言した。

果して、今や人道の熱血に燃ゆる正義の戰士マクドナルド氏は、其の嘗つて天下に聲明したるが如く、勞働黨の單獨內閣を組織し、英國に於ける無產階級解放の爲に、勇往邁進し、正に英國史上、未曾有の大改革を行はんとして居る。私はマクドナルド氏の率ゐる勞働黨內閣の成立が、獨り英國に於けるのみでなく、世界に於ける無產大衆の解放運動の先驅として、永久に記憶せらるゝ日があるであらう事を信ずる。（了）

詐欺、盜棒、殺傷、放火

これは、現代でも行はれてゐる苦役です。詐欺、盜棒、殺傷、放火などの犯人に科する



Strafe der Zwangsarbeit.

普通の勞役です。頭の上のベルが面白いではありませんか。

猥褻行爲

婦女子に對して猥褻な行爲をしかけた者は、かういふ醜態を公衆の面前に曝さねばなりません。



Bestrafung eines Zotenreißers

藝道の聖境に入るまで

音樂家 田邊尚雄


田邊尚雄氏

我身の事を例に引くやうで甚だ恐れ入るが、本意は、乏しいながらも私自身の體驗から得た實感であることを、明らかにしたいからである。

私の母

は、明治の初年に於ける和洋音樂通の一人であつたが、私のまだ少年の頃亡くなつたので、私は唯一人東京を離れて神戸の親戚に身を寄せた。そこで、母を慕うて泣き暮らしてゐる内、或る精神上の打撃を受け、隨分なやみ拔いた揚句、遂に死を決するまでに至つたが、生死岸頭に思はざる自在境を得て、豁然として悟るところあり、そこに藝術の世界を發見して、わが全心全靈を之に打ちこむに至つたのである。

併し養家の反對に遭つた私は、直ちに音樂家となることを許されなかつた。で私は大學に入ると共に、一方音樂學校に入つた。

二つの學校を同時に

やつたのである。私は滅茶苦茶に身を苦しめて藝道に精進すると同時に、また慘憺たる苦難を學問の道にも嘗めねばならなかつた。二三日ぐらゐ寢ないことは敢て珍らしくなかつた。總じて平均三時間以上は眠らなかつた。友達とも殆ど交らず——交る餘暇がないのだつた。さうして毎日蛇を嚙んでは精力をつけつゝ、無茶な勉强を持續した。大學でエネルギーといふ綽名をつけられたのは、その爲めである。

亂暴といへば亂暴であつた。けれどもその亂暴のおかげで、音樂の『藝』も分つて來た。音樂の『學』も出來て來た。今日私が、斯の道を以つて世に立つを得る所以のものは、一にこの難行の賜である。顧みて感謝と愉快に堪へないものがある。

何事もさうであらうが、殊に藝道にはこの、

苦しむこと

の必要を、私は切實に體驗し得た。昔の名人が、一日でも長く苦しみたいと望んだ眞劍な心持も理解できた。

然るに今の人は藝術を求めながら、成るべく苦しみたくな

いと考へる。既に苦しみにあるものも、一日でも早く苦しみから脱れたいと望んでゐる。昔に眞の名人あつて、今、眞の名人なき所以であらう。

つまり成るべく苦しまないで、早く藝道を上達させたいといふのだ。最小の勞力で最大の效果を得ようとするのだ。それは經濟の原則でもあらう。また能率の觀念から云つても當然のことであらう。だが、それは主として事務の上のことである。これをそのまゝ藝の上に持つて來ることは出來ない。藝には最も多く苦しまなければ、到底得られない部分のあることを忘れてはならぬ。

この意味に於いて、私は藝の道程を凡そ四段に分けて考察したいと思ふ。今それを人間の出來上る道程に譬へて見る。第一段は、

不具者になるか

完全な肉體に出來上るかの、人體形成の第一歩である。そして、それが藝の第一歩でもあるのだ。如何なる藝でも、先づ以つてそれが完全な形に出來上らなければならない。だが、この域には、少し勉強さへすれば誰でも達し得るものである。尤も自稱天狗の中には隨分をかしな畸形兒も多いけれど。

第二段は、肉體としては完全でも、美人もあれば醜婦もある。美人は誰もが好むが、醜婦は皆が嫌がる。藝がそれだ。すべての人に喜ばれるやうになるには餘程の苦心が要る――とは云へ、この境地はまだ至り易い。素人でもそれだけの天性があり、そして熱心に努力するものなら、決して難事ではない。

次は第三段。いかに美人でも、

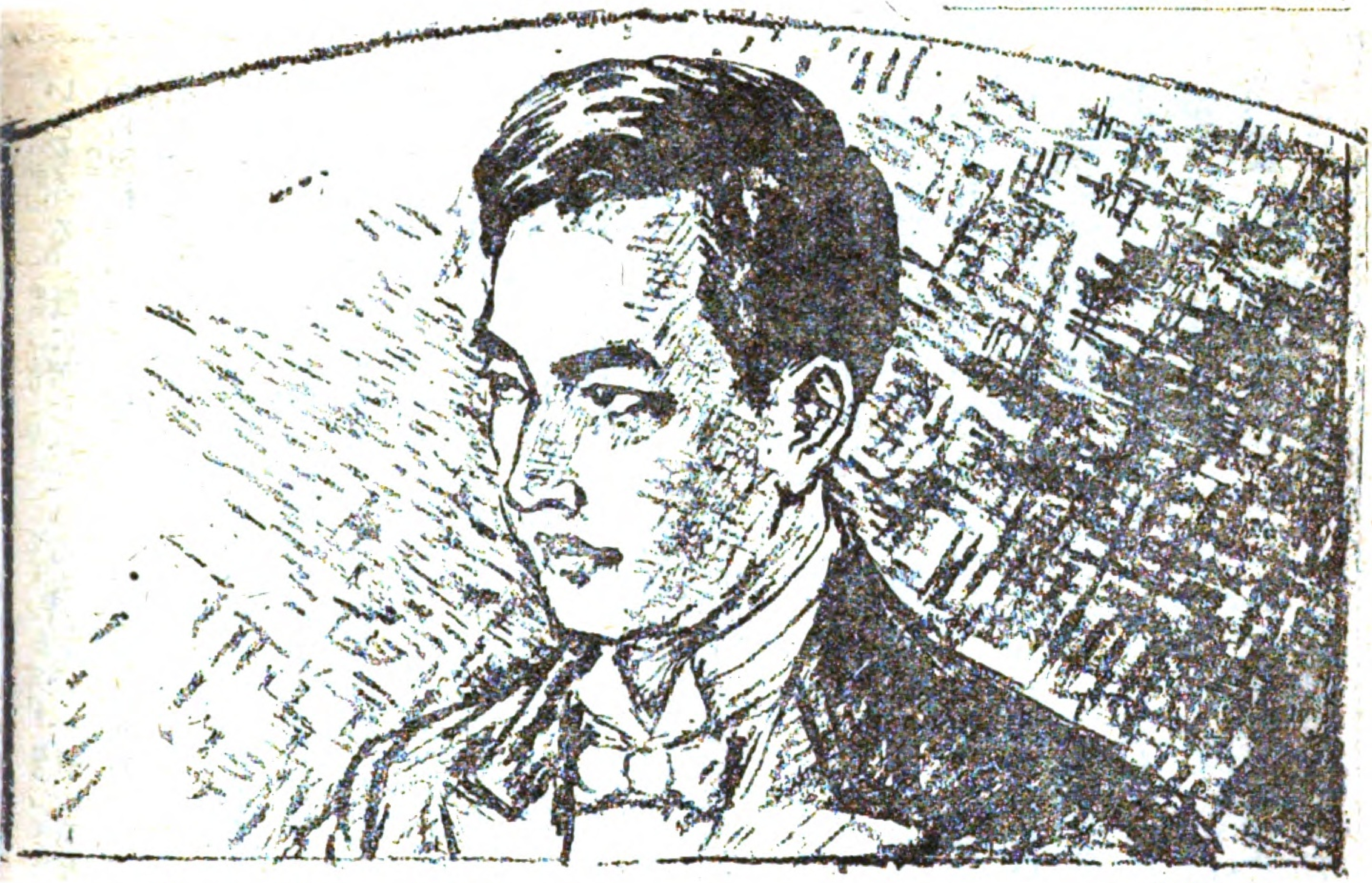
魂のない美人

では人形も同樣だ。藝も生きてゐなければならぬ。藝に魂があるか無いか、その境は即ち玄人と素人との分れ目である。

さて最後の第四段。同じく生きた人間でも、善人もあれば惡人もある。聖人、凡人、さま〴〵だ。その中、本當の美人となり、萬人の師表と仰がれて生きてゆく人――藝の魂が最も偉大なる人格の發現となるの域に入つてこそ、はじめて萬人に卓越する名人となるのである。これぞ即ち藝の聖なるもの。

今日わが國の藝の人を見るに、多くは第二段か、精々第三には達しても、第四段に至るものは曉天の星の如く、殆ど稀だといつてよい。それは自ら求めて最も多く苦しんだ人でなければ至り得ない境地だからである。最小の努力を以つて最大の效果を得ようなぞと考へてゐる才子連の、覗きも出來ることではないのだ。

こゝに苦しむことの光が輝く。啻に藝道にのみ限らない、學問然り、宗教然り、事業然り、人間萬事、みな然らざるはない。私は今の青年が、苦しまずに藝道を求め、苦しまずに學問を求め、苦しまずに事業を求め、苦しまずに戀愛を求めつゝあるを見て、むしろ不思議に思ふ。



理想小說

死よりも強し

鶴見祐輔
挿繪 野崎貞雄

一

勇に一つの特徴があつた。

それは彼が米國滯在中、どこへ往つても日本人と見られないことであつた。彼の顏の輪廓と、色白と、眼付と鼻だちがどこか西班牙風であつたので、彼は亞米利加では、いつも墨西哥人か、玖瑪人か、乃至は西班牙人と間違へられた。

それを面白いことにして、彼は西班牙語の稽古を初めた。さうして、初對面の人にはよく、西班牙語で話しかけた。さうすると、その席の終るまでに、相手はすつかり彼を西班牙系の人間と思ひ込んでしまふのが常であつた。そこで彼はわざ〳〵、ドン・カルロスといふ綽名まで案出して、親しい米國人の間では、カルロスで通つてゐた。實際、ヨシカワだとか、イサムだとかいふ名前は、亞米利加人には六ケしくて憶えきれなかつたので、

彼等は勇のことをカルロス、カルロスと呼んでゐた。

そのドン・カルロスが役に立つ時が、今や彼の身の上に到つてきたのである。

彼は西班牙人に化けて、露國財務官の邸にまぎれ込まうと決心した。

決心は付いたが、手がかりはまるでなかつた。これが本所松坂町の吉良の邸ならうどん屋に化けてでも邸内を探ることが出來るが、生憎倫敦には、鍋燒うどん屋といふ商賣はなし、財務官の召使には、うどんを買ひさうな奴は一人もゐない。

はた、と勇は行き詰つた。

そんなときに有りがたいものは紹介狀だ。

彼はシカゴを發つときに、友達の亞米利加人から、しこたま紹介狀を貰つてゐた。一たい亞米利加人といふものは、好き嫌ひの强い人間で、嫌ひとなると見向きもしないが、好きとなるとうるさい程世話をする。勇の正直な生一本な性格が、ぴつたり亞米利加人に來たので、彼は大勢の亞米利加人に可愛がられた。可愛がつてくれた亞米利加人のうちには、勿論若い娘さん達もゐた。

それ等老幼男女の連中が、賴みもしないのに、山のやうに紹介狀をくれた。

『カルロス、おまへ倫敦へ往つたら、この洋服屋の親爺に會つてご覽。おもしろい奴だぜ。ディスレリーの洋服を一着作つたことがあるつてのが、奴の自慢でね』

と言つて、ボンド街の洋服屋を紹介する男があるかと思ふと、

『ね、ドンちやん、この人にお會ひなさいね。忘れちやあ、いやあーよ。とても可愛いゝハイドパークの花賣り娘さんよ。あたしこの前倫敦に居たとき、母と一緒に、毎日花を買つたのよ』

といつて、花賣りのマリオンに紹介狀をくれる娘さんのベギーがあるかと思ふと、

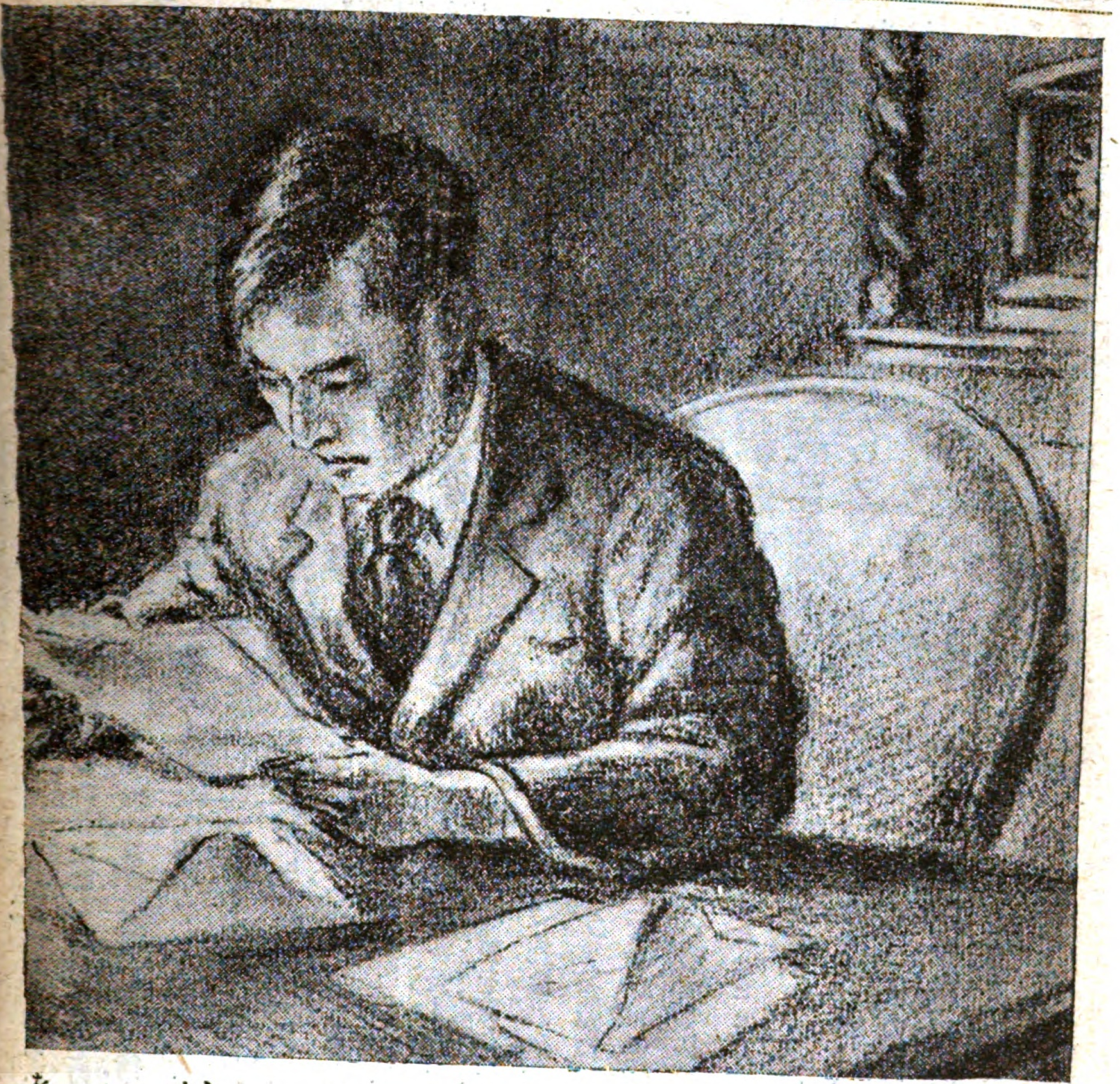
『おいカル公！　こいつはね、うちの女房には内緒だがね……』

と、一寸聲を落して、へうきん者のキントンといふ寫眞屋のおやぢが『これは乃公がお微行で、倫敦ご駐箚の際、親しくした金持の未亡人だがね、エヘヘヘヘ』と、妙にうれし相に笑つて『これをお前に紹介するから、往つておれは達者でゐると、言つてやつてくれ。さうすりや、むかうがえらい安心するからな、イヒヒヒヒヒ』と、ひとりではしやいだものだ。

かと思ふと、大學教授のケンウォージー博士は、

『ヨーシカーワーさん！　これは私の獨逸在學中の學友で、今は倫敦大學の人氣教授ですが、是非往つてお會ひなさい。政治學の教授ですから、色々の政治學者に引合して貰へます』

と、部厚な眼鏡の底から、懷しさうに勇の顏を打ち守りながら言つた。



それやこれやの紹介狀、嚴肅なるあり、ふざけたるあり、媚きたるあり、大小合計八十幾通を旅行鞄の底につめて、吉川勇は倫敦に渡つて來たのである。

彼は露國財務官邸に打ち入りと決心すると、この紹介狀のことを思ひついて、思はずハタと膝を打つた。

『さうだ、あの紹介狀の中に、何か役に立つのがあるかも知れないぞ』

さう思つて彼は、部屋に歸ると、スート・ケースの蓋を開けて、一束にも二束にもなつてゐる紹介狀の束を取り出して、丹念に克明に讀み初めた。

『可愛い丶人よ。隨分しばらく會はないねー……』

といふ書き出しに、おや〳〵と思つて、一番おしまひの署名を見ると、例のへうきん居士のキントンの紹介狀だ。

『こいつは、當てられるな』

と、剛ならアハハハと大笑するところを生眞面目な勇は、一寸擽つたさうな顏を



しただけで、すぐ次のを開けてよむ。

『親愛なる友人足下、本書持参の日本人、勇、吉川君を足下に紹介することを許容せられ得べきや。抑ゝ吉川君は本年取つて二十二歳……』

おや〳〵、日本のお役所の採用履歴書のやうだな、と思つて、勇が署名人の名を見ると、

『足下の最も柔順なる僕、ピー・エス・ケンウォージー』

と書いてある。

『キントンのとは、大分違ふんだなあー』と、勇は感服した。

それから、

『私の可愛い〻小さい人よ……』

おや〳〵、と思つて勇が、少しく下腹に力を入れて用心して讀んでゆくと、

『私は今市俄古にゐても、夢は懐しい倫敦に飛んでゐるのよ。あのハイドパークの翠々とした樫の木の陰で、羊の群をよび集めながら、あなたと手を取つて遊んだころのことは、本當にうれしい思ひ出だわねー……』とある。

この手紙はさらに奥深く探検する前に署名人を見る必要あり、と勇は思つて、すぐひつくりかへして、差出人を見ると、

『今も尚ほあなたを愛してゐるペギーより』とある。

『娘さんから、娘さんにゆくのならまあい〻や』と、勇は獨言ちながら、次の手紙に移る。これが小笠原剛なら、『チェースト！』と言つて、その手紙を兩手でひつか〻へて、『甘えぞ甘えぞ』と、大に興に入つて三十分位は繰りかへし、繰りかへし讀んで、長椅子の上をころげ廻るのだが、吉川勇はこれより財務官邸打入りの場合だ、そんな即興詩人のやうに無用な陶醉はしてゐられない。

「我が親愛なるメリーよ、この書を持參する日本人吉川勇君は、東洋人にして、しかも西洋人の心理を了解し同情し得る珍らしき余の友人である。我々夫妻は、吉川君と相知りて、初めて東洋に日本と稱する世にもすぐれたる文明と德操とを有する民族あることを知りたり。吉川君と語る幾日幾夜は、我等の忘れ難き貴き思出として聖別するところなり。人種と言語と傳統との差別なく、人類はある普遍的なる思想感情を有するものなることを、吉川君を知りて、余等夫妻は初めて知りたり。

恐らくはおん身も、吉川君を知ることを我等兩人と同樣に幸福とすべく、吉川君も亦、おん身を知ることを、我等がおん身を知りて喜びたると同樣の喜びをもつて感謝すべし。

玆に東洋の友人吉川勇を、我が歐羅巴の友人メリー・ハリツクに送る。この兩人の會見により、日本の魂と、英國の魂との、相隔れ相知るの紐縁たらしめよ。

おん身の親愛なる、ジョーヂより」

とある。

「あ、これだ！」と、勇は思はず、膝を叩いた。

ジョーヂといふのは市俄古の辯護士である。米國は日本と法律の制度が違ふために、辯護士の仕事といふものは非常に範圍の廣いものである。ゆゑに米國の偉い人は多く辯護士から出てゐる。日本では辯護士は法廷に出て、法律の解釋論を闘はすのが役目であるが、米國の辯護士は法廷外の仕事に重きを置く。色々の大家の家庭の相談ごとや、大會社の方針の相談や、社會凡百の事業の相談に預る。從つてまづ平たく言つて、常識の問屋のやうなものだ。

ゆゑに辯護士として成功した人は、すぐ外國の大使にもなれる、大會社の社長にもなれる。大新聞社の主筆にもなれる、閣員にも、大統領にも、大學總長にもなれるといつた具合だ。

このジョーヂといふのは、市俄古で一流の辯護士で、世界に有名な『國際農具會社』といふ何處かの大會社の顧問辯護士で、いつも世界を旅行して、學者、文章家、美術家、外交官などと交友してゐるために、將來は國務卿か又は駐英大使になるであらうと噂されてゐる人である。

その名をジョーヂ・ホワートトンと呼び、夫人は市俄古の富豪スキフト家の娘で、ドロシーといつた。

この夫人がまた、水の滴たるやうな愛嬌を顏に湛へて客を迎へるので、この夫妻の家は、いつも門前に馬車が一杯停まつてゐた。

ところがこの夫婦が、馬鹿に勇が好きで、いつも自分の家族の一員のやうにして可愛がつた。

「イサトムは、私の甥でございますのよ、オホホホ」

さう言つて夫人のドロシーが栗色の澤々した髮の毛の下に、湖のやうに碧い眸を一杯に見開きながら、來客に勇を紹介したものだ。勇さへ承知なら養子にもし兼ねまじき勢だつた。

さうして、勇が急に市俄古を發つと聞いて、夫婦は色々の紹介狀を書いたそのうちに、

『このメリーにだけは、どんなに忙しくつても會つてゐらつしやいね。この人のお父さまは、有名な宰相のキャニングね、あの人の孫に當るんですのよ。それにお母さまが、ロンドンデリー公のお嬢さんなんでせう？ だからメリーは、英國の一番よい頭腦と、一番よい血統とを引いてゐるのですよ。それに、メリーのご主人は今は、自由黨の領袖で、この次の内閣にはきつと入閣する方よ。若いけれども、よく出來た人でね。だから倫敦の人は、このメリーの家の晩餐會や、お茶に呼ばれるのを、一つの名譽としてゐる位よ。私たちの夫の仲よしでね。私はメリーの夫ジョンとそれは氣が合ふもんですから、よく冗談にメリー、お前がジョンと結婚してゐなかつたら、私きつとジョンと結婚してよ、といふと、メリーがきまつて、さうよ、あなたがジョーヂと、結婚してゐなかつたら、私がジョーヂと結婚するわ、と言つて、笑ひますのよ。だから私達夫婦からの紹介狀なら、きつと大事にしてくれますよ。私からも別に手紙を出しておきますからね。だからわざと、ジョーヂから、メリーに紹介狀を書かしたのよ。ね、西洋の儀式なら、ジョーヂから、夫のジョンに書くか、私からメリーに書くのが本當でせう？ そんな月並をやめて、ジョーヂからメリーに書いたのよ。その位私達は仲よしなのよ』

さう言つて、ドロシーは、嫣然と微笑した。

『さうだ、このメリー・トレヴエーリアン夫人に會ふ事だ！』
勇はさう決心した。

二

『どうぞ、お入り下さい』
黒の衣裳に、白のリネンの帽子と、同じ白のリネンのエプロンをかけた、古風な裝束の若い奇麗な女中が、大きいマホガニーの扉をあけて、さう言つて案内したときに、勇は思はず、一寸固くなつた。

亞米利加の家では、どんな大きい家に招かれても、少しも氣後れのしないものだ。氣作な開放的な心持が、隅々に滿ちてゐるからだ。ところが、同じ英語の國でありながら、英吉利へ來て、大きい家に招かれると、妙に氣後れのするものだ。それは何百年來の貴族國だから、國の隅々にまで貴族の香りがする。中世紀の香りがする。格式とか作法とか門閥とかの高い香りが、倫敦からケントからサセックスに滿ち／＼てゐる。さうして、やに上品な正しい英語が一寸人をどぎまぎさせる。

生眞面目な勇は、この大玄關に入つた瞬間に、この中世封建の餘香に搏たれて、一寸たじろいだ形だ。

『はあ』
さう言つて彼は、絹帽と、外套と、洋杖とを下女に渡した。透き通るやうな白い顏に、頰だけが桃色してゐる。碧い眼が碧玉のやうに輝いてゐる。

『英吉利の女は、色が白いなあ』と、勇は思はず心中で獨語した。

廣い廊下を歩むこと三四間、つと左に折れて應接間に入ると、昔風の高い天井から懸つてゐる懸垂燈には、もう電燈がほんのりとついてゐる。踏み心地よい波斯絨毯の上を五六歩進んで勇は、煖爐を左に、大きい安樂椅子の上に、深く身を埋めた。机から、本棚、椅子、長椅子の好みが、すべてエリザベス朝式だ。

勇は妙に氣が落ち付いてゆくことを感じた。

亞米利加では感じられない味だ。倫敦へ着いてから、忙しいのでまぎれてゐたが、折々ふと感じることは、倫敦の靜けさ廣さ、といつたことだ。狹い島國であるにかゝはらず、倫敦は不思議に廣々とした感じがする。どこへいつても、せゝこましくない。公園も、家も、庭も、みーんな悠然としてゐる。

さうして音がしない。

ワシントン・アーヴィングのスケッチ・ブックのうちの、倫敦の日曜日といふ淸楚な一文を、勇はよく倫敦で思ひ出した。あの感能の鋭いアーヴィングが、英國に渡つての一番の感じは、この國の物靜けさだ。

物音のしない國だ。森閑として、國中が眠つてゐるのかと思はれるやうに靜かだ。

『かういふ靜かな國だから、偉い人が出たんだなあ』さういふ感じが、勇の胸に忍び入つた。

日本を出てから初めてのやうな、落ち付いた感じに彼はうつとりとしてしまつた。

あるか無きかの香りが、勇の鼻を掠めたと思ふと、彼はその光を消した靜かな燈光の下に、白い絹の衣をきた人の姿を發見した。

と、その次の瞬間には、

『まあ、お待たせ致しました。ようこそ』

さう言ふ軟かい美しい聲が、彼の耳朶に墜ちた。

燃えるやうな金髮を、上品に束ねた下に、つぶらな碧い二つの眸が、にこやかに笑つてゐた。少し細面の白い顏は、戸外運動の與へる壯健な色に冴え〴〵してゐた。

『はあ』たゞそれしか勇の口から出なかつた。溫かく軟かい夫人の手を握つた。

それからは、勇は何も言ふことはいらなかつた。世慣れた夫人の口から、それからそれへと泉の湧くやうに話が流れ出た。うぶな勇の樣子を見て取つた夫人は、少しも彼にぎこちない思ひをさせないやうに、氣樂な話をそれからそれへと初めた。

『まあ、さう言へば、あなたは明日はお閑？ あしたは私の接客日なのですのよ。色々の人が參りますのよ。おいで下さらない？ 四時から六時のお茶よ』

夫人がさりげなく、さう言つた。

例によつて勇は『はあ、どうも有りがたう御座います。參ります』と、あつさり言つた。

夫人は心の中で『成程、ドロシー夫婦が好きになつた筈だ。上品で、柔順な青年ね』と思つて、につこりした。

三

沸々、沸々、とまるで鐵瓶の湯氣のたぎるやうに、廣い部屋のうちは、人の聲で一杯だつた。

應接間二つをぶち拔いて、さらに奧の食堂の扉も開け放つて、ところ〴〵に卓を置き椅子四五脚をならべてある。向ふの食堂の大卓の兩端に、美しく着飾つた女が一人宛坐つて、一人はお茶、一人はつめたいポンチの世話をしてゐる。

『あなたは、お茶？』

さう言つて、水色の薄い絹の午後服をきた中年の上品な婦人が、來る人、來る人に香りの高いリプトン茶をつぐ。

『まあ、どうぞポンチも、めし上つて』

さう言つて、油繪の中から今拔け出してきたやうな水々しい

若い婦人が、眞紅に黒を色どつた目のさめるやうな輕羅のうちに微笑む。

來客は、應接間の方から流れるやうに入つてきて、男はその大卓の上の皿とナプキンと匙、肉さし、ナイフを取り上げ、サンドヰツチや、菓子、冷肉、サラドなどを程よく取つて、皿に盛つて同行の婦人たちのところに運ぶ。さうして、婦人たちの好みを聞いて、温かい紅茶やら、冷たいポンチやらを貰つて持つてゆく。



『まあ、ようこそ。あなたは今年は亞米利加かと思ひましたら、まだ倫敦をお見捨て下さらないのね。有りがたう』

『まあ！　メリー！　亞米利加ゆきはあなたでせう？　オホホホホ』

『いゝえ。私はもう年を取りましたから、亞米利加ではないの。そろ〱東洋へでもいつて、大勢の召使に取りまかれて、終日ころんでゐようかと思つて、オホホホ』

『オホホホホ。それでは、亞剌比亞夜話ね』

『まあ、さうよ』

『さう言へば、あすこに立つて、スーザンと話してゐるあの若い人は誰？　東洋人でせう？　それとも西班牙人かしら』

『あゝ、あの青年？　あれは私の極最近の獲物よ。ご紹介しませうか？』

『さうね。しかし私のやうな年寄りでも話してくれるかしら』

『さうね。あなたがもう八十ばかりお若ければ

よかつたのにね。オホホホ』

さう言つて主婦のメリーが、この若い婦人の手を取つて、勇に紹介した。

『ヨシカワさん、この方が先日まで英國の駐露大使館の參事官をしてゐらつしやつた方の夫人です。ノーブル夫人』



勇は、とつかは身をめぐらして、この二人の婦人に會釋した。と、今まで話してゐた若い夫人が、

『まあ、ベツシー、今日は。あなたまだ倫敦に居たの？ 非道いのね。横合から出てきて、この若い方を私から取らうとして、オホホホ』

『取れるかどうか解らないぢやないの、オホホホ』

と、ノーブル夫人は氣輕に笑ひながら、輕く手を差しのべて、勇と握手した。きら〱と、二の腕の寶石が電燈の薄明りの下で光つた。

『さう言へばあなた』と、今一人が急に、ノーブル夫人に、『あなたあしたの晩、露西亞の財務官のウエンツェルの家の夜會にゐらつしやる？』

『えゝ、呼ばれてゐるんですけれどね。それがね、困つたことに、私のところの主人が一寸した風邪で外出を、醫者から止められてゐるんでせう？ だから一人でもゆけないし困つてゐるのよ。誰か男の方で隨いていつて下さる方があるといゝんですけれどね』

『あるわ！　私、い〻こと考へついた！』
大きく眼を仰山に見開きながら、相手は、勇を一寸眼で指して、
『この方！』さう言つた。
『でも初めてお眼にか〻つて、すぐねー、まさか？』
と、半ば求めるやうに、ノーブル夫人が愛嬌を一杯に湛へて、下からのぞき込むやうに勇の顔を見た。
勇の胸が早鐘のやうに鳴つた。
『露國財務官邸の大夜會！　往きたいな。どうしてもゆきたいな！』彼は全身の血が急潮のやうに頭に昇つてくるのを感じた。
『ね、ヨシカーワさん。い〻でせう？』と、今一人の若い夫人が誘ふやうに訊いた。
『ノーブル夫人なら、大丈夫よ。おつれの役をお勤め下さる？　あしたの晩はね、倫敦呼びもの〻一つの、假裝舞踏會なのよ！』
『しめた！』と、もう少しで勇は、口走るところであつた。
『運命の絲が我々肉眼のそとで、こんなうまい筋書を仕組んで、俺をあの家の中に連れ込んでくれるのか』
彼はさう思つて內心小躍りした。
しかし、用心深いいつもの勇であつた。
『さうですね、こ〻のお邸の夫人が許して下さるならば』
と、彼は飽くまでも、この國の作法を破らない用心をした。
『あ、それならい〻わ。それぢや、メリーに訊きませう』
と、二人の婦人は大喜びで、人波を分けて、主婦のトレヴェーリアン夫人のところへ小走りに走りよつて、何か語り合つて、聲高に笑ふと、すぐまた勇のところへ、三人で歸つてきて、
『よろしい！　定まりました』
『それでは、あしたの晩の假裝會には』
『ベッシーのつれの男は、ヨーシーカーワーさん！』
三人で交〻にさういふと、
『オホホホホホ』と、聲を合して笑つた。

三

『ね、そんなこはい顏を、しないでね』
女はのぞき込むやうに、下から男の顏を見上げた。
『私、惡かつたよ。本當にすまなかつたのよ。ね、ね、ご免なさいね。だけれどあなた。そんなに怒つちや可愛さうよ。私だつて、あ〻してゐなければ、生きてゆけなかつたのぢやないの。貧乏な家に、少しでも奇麗な容貌を持つて生れてくるといふことが、女にとつて、仕合せになるとばかりは限らないわ。かういふ職業になるのも、私の廻り合せよ。運命よ。

人間は運命には勝てないわ…男だつてねー。ましてや私のやうな、教育のない弱い女に、どうして勝てませう。私がこんなことをするやうになつたのは、私だけが悪いのぢやないと思ふわ。ね、ね、お解りになつて、私は本當に後悔してゐるのよ……』

眼瞼が段々紅くなつたと思ふと、ハラ〱ハラと、白い露が女の頰を傳つて落ちた。

『私ね……私ね……木乃伊取りが木乃伊になつたのよ……私ね……私ね……あなたを欺す役を受け持つて毎日、日日、あなたと一緒になつてゐるうち……とう〱本當にあなたが好きになつてしまつたの……』さう言ふと女は、兩手を男の肩にあてゝ、よゝとすゝり上げて泣いた。

『本當に濟みません、濟みません。あなたのやうな……あなたのやうな……一本氣の純な方を色戀で釣つてだまして……』

しばらく泣いてから、涙にひじた顏をあげて、『でもいゝわ、もう今は私の方が深いのだから……もう欺してゐるのぢやないわ、……もう私は命も何もいらないの……もう私は、あなたの奴隷よ』と、につこり淋しく笑つた。

それでも男は、默つて棒のやうに突つ立つたまゝ、煉瓦の床の上を睨んでゐた。彼は、わな〱と震へてゐた。

『お怒りになるのも無理はありません。本當に無理とは思ひません。お詫びはあとで、いくらでもするわ。しかし、今はね、その時間が無いのよ。早く、早く、私と一緒に逃げて頂戴。今夜はね、假裝舞踏會で家中大騷ぎで、召使も何も總出で世話をしてゐますから、この地下室には誰もゐないのよ』私もその假裝會に來たのですから、こんな妙な西班牙娘の風をしてゐるのよ。だから、逃げませう。私の馬車がこの家の裏門のところに待たしてありますから、今のうちに逃げませ

ちね、ね、すぐ逃げませう。逃げてから後で、お氣の晴れるやうに私を、どうなりとなさつて頂戴、私、殺されてもいい。あなたの手にかゝつてなら死んでもうれしいのよ。けれど、一生ですから、今夜は逃げて頂戴。追手の來ないうちに逃げて頂戴。ね、ね、私も命掛けですのよ。あの惡者の仲間にすぐ解ります。さうすれば、私の命のないこと位は知つてゐます。しかし、私の惡事のつぐなひに、どうしても、あなたは無事に日本に歸してあげたい……』さう言つてきて、女は少し蒼ざめた。

『日本には、おすきな方が居るんでせう？』さういふ感じが、女である彼女の胸に電光のやうに閃めいた。

『いやだ。日本に歸すのはいやだ』女の本心が、女の耳にさゝやいた。

『この男を逃がすな。かうして捕虜にしておけば、とに角會ふことは出來るのだ』盲ひた戀がさう私語いた。

『さ、逃げませう。早く、早く！　今にも誰か來るかも知れないから！』女は自分自身の内心のさゝやきを恐れるあまり、さつと男の手を取つて引き摑つた。

『いやだ！』大きい太い聲が、初めて男の唇から洩れた。『僕はいやだ！　お前なんぞに助けて貰ひたくはない！　殺すなら殺せ！　俺が欺されたのが惡いんだ。殺されよう。甘んじて殺されよう。誰が、お前なんかに命乞ひをするもんか。あつちへ往け！　往け！　往け！　往けつたら往け！　ゆかないか！』荒々しく男は、女の手を振り切つた。

『さう？』と、女は急に態度を變へて、

『まあ、さうなの？　それぢや、あなたは私が思つた方とは、まるで違ふ人ね。』と冷かな口調で『私は日本人といふものは、自分のことよりか、お國のことを先に考へるのかと思つたのよ。まあ！　こゝで死ぬんですつて？　わたくしに欺されたのが口惜しいから、逃げないんですつて？　それぢや、あなたの大事なお仕事はどうなるの？　あなたの大事な先生が、困つてゐらつしやるのを、見殺しになさるの？　自分さへ氣まぐれの鬱憤が晴れゝばそれでいゝの？』

女は蒼ざめた顏に、さげすむやうな表情を浮べて、ぢつと男の顏を見据ゑた。

さつと、男の顏色が變つた。

彼はよろ〳〵とした。さうして、縛られて暮した何時かの苦しみの後の疲勞で、危く倒れようとしながら、寢臺の一端に僅かに躰を支へて、無言で女の顏を見返した。

憎みと、憤りと、愧ぢと、悔恨と、恐れとの感じが雜然とまざつて、彼の蒼い顏の上を走りすぎた。

『こんなにまで自分は、この女に足許を見られてゐるのか！』激しい憤りが、彼の頭の中を暴風雨のやうに荒れ狂つた。跳りかゝりたいやうな憎惡と憤怒とに慄へながら、彼は、はつたと女の美しい顏を睨んだ。

『還る！』彼は吐き出すやうに言つた。



この瞬間である。

『こゝだ！　こゝだ！』

『さうか、さうか』といふ聲々が聞えて、ドヤ／＼と、二三人の足音が扉の外に聞えた。

女は眞蒼になつた。さうして本能的に男の胸により添つて、わな／＼と震へだした。(つゞく)



長篇講談 三家三勇士

大島伯鶴
挿繪 井川洗厓

あぶない戯れ

こゝに常陸の國水戸の家臣にて、天下の名人といはれた和田庄次郎政直、當時名を平助と偽つて、周防岩國吉川家の御指南役國次惣左衞門方へ下郎として住込んでをります。これは主君光圀公の内命によつて、國次が編出した當時評判の八重垣小太刀の秘法、これを盗み出さうがため。ところが、これはお止め流といつて、他藩の者には絶對に教へぬ剣法でございますから、平助の苦心は一通りでない。併し固より武藝無双の平助、最早その呼吸もほゞ會得いたしましたので、夜陰を利用して實地に之を試みようと、同じ下郎仲間の茂助要助の兩人を巧みに誘ひ出した。用水堀のこなた藪疊を前にして、手造りの明りを力に、これから平助が短い木刀を取り、兩人の竹槍を向うに廻して稽古をしようといふところ。

平『さア來いッ』

前へ向つた茂助要助の二人、

茂『おやツ、こん畜生、手前短い木刀なんぞを持つて、家の先生の眞似をするな。そんな眞似をしたつて、突かうと思やア突けるんだ。いゝか突くぞ……ヤイ要助、しつかりやれ』

要『合點だツ。一突百文だ。箆棒めえ、五百か一貫、一度に取つて見せるんだ』

ヤツ、エイツ、二人が突いて來るのを、ひらり體をかはして、ポンポーンと竹槍を彈ね返す。

茂『おや、この野郎、生意氣な眞似をしやアがる……それツ、今度は突いたぞ。ヤツ』と叫んで突出す槍先、ひらりツと體をかはされて、つツつツ空を突く。

茂『畜生めえ、何といふ早い奴だ。少しぢツとしてゐろ』

平『ぢツとしてゐりやア、突かれてしまはア』

幾らやつても突けませぬ。突けない筈です。相手は劍道の名人、八重垣小太刀の秘法を會得しようといふので下郞に身をやつして入込んだくらゐの人物。二人はへと／＼になつてしまつた。

茂『おい、要助、どうした』

要『どうしたにも斯うしたにも、平助の野郞、早くつて突くことが出來ねえ、これぢやア百のことはおいて、一文になりさうもねえぜ。止さうぢやねえか』

茂『けれどもな、これまでになつて止すのも業腹だ。もう一度やつて見ろ……それッ行くぞッ』

ヤツ／＼と突ツかゝつて來る。一本も突かせないと、次が利かないと思ふから、平助、いゝ所で一本突かれて、

平『參つた。參つた／＼』

茂『畜生、どうだ。さア百だ。さア出せ』

平『出せといはなくつたつて、やるつもりだ。さア百づつだ』

茂『有難え。あゝ骨を折らせやアがつた』

平『よし、今夜はこれだけにして歸らうぜ。明日の晩頼むぜ』

茂『よしツ。明日こそ少しは慣れたから、二三本突くぞ』藪の中へ竹槍を投り込み、燈明を消せば元の暗黑。先夜まで鳥居の脇に樣子を窺つてゐた怪しき人影、何時の間に立去りましたか、この時はもう姿は見えずなつてをりました。さういふことは更に氣もつかない三人、小さな聲で話をしながら、裏の塀を乘越え、元の部屋へ立戻ると、そのまゝぐつすり寢てしまひました。

翌日のこと、平助高箒で庭の掃除をしてをりまするで、遙かに座敷で之を見た主人の國次惣左衞門、

惣『どうも來た時から徒者でないと察してをつたが、昨夜茂助要助を向うに廻して、暗中に小太刀を持つてのあしらひ、いよいよ自分の流儀を盗みに來た者に違ひない。よし試してくれよう』

弓矢を取出した惣左衛門、矢を取つて弓にしつかと番へ、キリキリキリと引絞つて、平助にヂッと狙ひをつけた。さうとは知らぬ平助は、餘念もなく箒で庭の落葉を掃いてをります。狙ひを定めた國次惣左衛門、へうふつと切つて放てば、ビューッと矢は羽響き高く飛んで來て、平助を一矢に射貫いたかと思ひきや、ひらり體をかはしたその早さ、持つてゐた箒でポンと向うへ拂へば、矢は空天遙かに飛んで行く。續いて來た第二の矢、平助の頭顱狙つて飛んで來る。これもひよいと頭をかはしたから、矢は向うの松の木へプッーリと刺さつた。第三に足を狙つて飛んで來た矢、平助、足を揚げたから、矢は空を走つて向うの叢へと飛んでゆく。第四の矢が飛んで來たらばと、平助、身構へをしてゐると、矢はそれッきり飛んで來ない。向うを見ると、主人

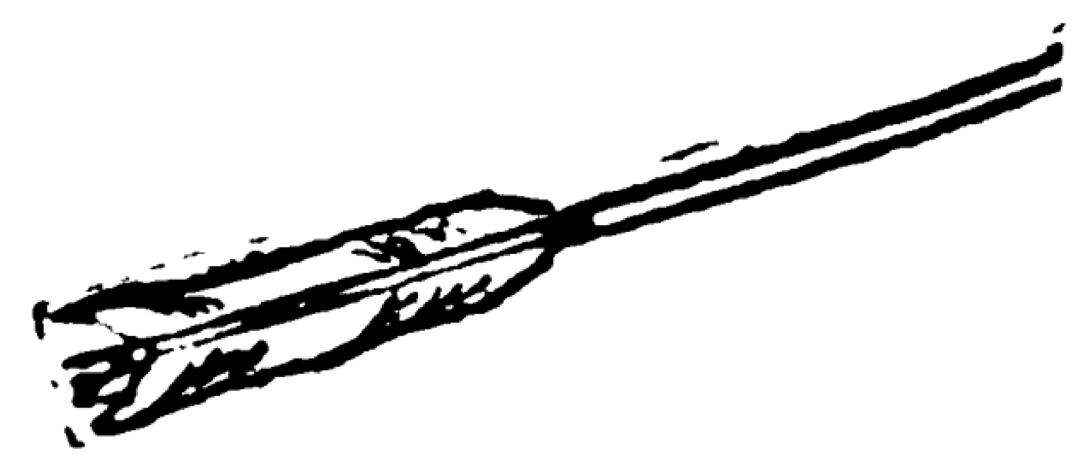


の都筑惣左衞門、弓を持つた侍呆れて立つてゐる。

平『旦那樣、今の矢は旦那樣がお放しなすつたのでございますか』

惣『ウム……』

平『お戯れをなすつちやアいけませぬ。憚ら下郎奉公をいたしてをりましても、命まで取られちやアたまりませぬ。旦那樣の射掛ける矢、一本でも中つたら、それッきり息の根が止まつてしまひます』



惣『いや、如何なる名人の放つた矢でも、其方は射られまい。……平助、これへ參れ』

平『へエ……』

惣『其方は徒者ではないな』

平『へえ、何でございます』

惣『いやさ、元をたゞせば何の某と、立派な名のある武士であらうがな。包まず話をいたせ』

平『へエ、さう仰しやられて見ると、大層なものゝやうでございますが、何の下郎奉公をいたします私、根が好きで少し許りは武藝の眞似事はいたしますが、決して怪しい者ではござりませぬ。どうかおゆるし下さいませ』

惣『これ〳〵、咎め立てをいたしたわけではない。本名を名乘れといふのだ』

平『本名は平助でございます。どうかこれからあんな冗談はなさらねえやうにお願ひ申します。あゝお庭の掃除が遲くなつた。どれ、今の間に掃いてしまはうか』

一禮をしてさッさと行つてしまつた。あとを見送つてゐた惣左衞門、今名乘れといつても名乘るまい、また時機もあるであらうとこの場はそのまゝにして、奧へはいつてしまひました。

姉は美人、弟は泣虫

その晩もまた九つの鐘がボーンと鳴ると、下郎部屋の三人、

平『さア茂助要助、出掛けようぜ』

茂『あゝボン百か。今夜は平助、氣の毒だが三本だぜ』

平『突けるものなら突いてくれ』

茂『突かなくつて……』

これから又例の竹藪の前へ來て、ヤツ、エイツ、ボンボーンと頻りにやつてをりましたが、何の突ければこそ、それでももうよからうと思ふ時分に、一本づつ突かれた平助、百文づつをくれて歸つて來る。妙なもので、毎晩やつてゐる内には、槍で突く呼吸も覺えて、茂助要助の兩人も面白くなつて來た。

茂『なア平助』

平『何だ、茂助要助』
茂『乃公達もかうして何日までも下郎奉公をしてゐたくはねえ。武藝でも習つてお武士になり、一つ威張つて見てえと思つてゐたんだ』
平『ウム……』
茂『ところが、毎晩お前の相手をしてゐるんで、槍の呼吸も解つて來たから、一つみつちり槍の稽古をして、お武士にならうと思ふんだ』
平『そいつは結構だ。何でも人間は、出世をすることを心掛けなくつちやいけねえ』
茂『どうだ、要助、手前はどうだ』
要『茂助のいふ通りだ。乃公も一つ槍を修行して、十萬石ばかりの大名になつて、要助の守とか何とかなつて見てえものだ』
茂『何をいひやがるんだ。下郎から十萬石の大名になれるか……就いちやア平助、今までは一突突いて百づつ貰つてゐたが、今度からは本當に槍を教へて貰ひてえと思ふが、どうだらう』
平『それアな、教へてくれと云へア教へねえこともねえ。だが、乃公はお前より後から來たんで、お前達のする用も、乃公は代つて餘計するといふやうな譯だ』
茂『ウム』
平『槍を教へれば先生だ。先生が平助々々と呼捨てにされて、クルクル用をした揚句槍を教へるといふことは出來ねえ』
茂『それぢやアどうすればいゝんだ』
平『部屋の用はお前達二人でして、乃公のことを平助先生、平助先生といはなくつちやアいけねえ』
茂『平助先生……おい要助、どうしよう』
要『仕方がねえ。槍を教へてくれるんだから、先生に違えねえや。先生と呼ばうぢやねえか』
茂『さうか……ぢやア平助、頼むぜ』
平『おい〳〵、弟子が平助頼むぜといふ口の利きやうがあるか。なぜ先生といはねえ』
茂『もうやるのかい。早いな。では平助先生』
平『オヽ、茂助要助』
茂『ウフツ、氣取るねえ』
平『これ〳〵茂助要助、茶を持て』
茂『威張つてゐやアがる』
平『これ〳〵これへ參つて肩を叩け』
茂『急に人使ひが荒くなりやアがつた』

それから毎晩主人の用がをはると、平助が二人に槍を教へてをりましたが、二人も熱心に稽古をする。不器用なものでも熱心といふものは恐ろしいもの、二人はめき〳〵上達して參りました。

さてこの國次惣左衛門といふ人には、二人の子供がございまして、上は娘でおみつといつて當年十八、小野の小町か照手姫、普賢菩薩の再來か、常磐御前か袈裟御前、お晝の御膳は濟んでゐる……と、まア申したやうな美人、この娘が外を通ると、往來の者が振返つて流す涎は雨の如く、どんな砂煙もその涎で忽ち收まる。區役所でこの女を雇つて置けば、水を撒かないでもいゝといふ撒水夫代用の婦人、何しろ手數のかゝる美人でございます。その弟が當年七歳で惣之助、この惣之助といふのが誠に泣蟲、人の顔を見るとワーッと泣く。ところが不思議に平助にはよく狃んで、泣いてゐても平助が一言いへば默つてしまふ。今しも平助が部屋にゐると、ワーッといふ泣聲。平助が見ると、惣之助が泣いてはいつて來た。

平『オ、ツ坊ちやん、どうなさいました』

惣之『平助や、お母さまが坊を叱つた』

平『オ、さうでございますか。それでは平助が、只今お母樣にお詫をして差上げます。さア〱泣くんぢやございませぬ。平助が抱つこをして差上げます』

さう云つて平助が抱いてやると、惣之助はピタリと泣きやんでニコ〱してゐる。茂助がこれを見て、

茂『おい〱平助兄い、よしねえ〱、癖にならア。叱られた

といつては泣き、轉んだといつては泣いて來る。その度毎に手數がかゝつて仕樣がねえ。世の中に泣蟲ッて、この小兒ぐらゐよく泣く小兒はねえ。ちよいと觸つてもピイ、顏を見たといつちやアピイ、このぐらゐ泣きがよけれア、鈴蟲や松蟲だつたら値が出るぜ」

平『よせ〳〵。茂助、そんな事をいふものぢやアねえ。御主人樣の若樣だ』

茂『御主人の若樣だから我慢してゐるんだ。自分の子なら踏み潰さア。世の中にこんなにベソ〳〵、ピイ〳〵泣く奴はねえ。乃公ア大嫌ひだ。ヘツ、ピイピイ〳〵のピイーツ』

惣之『ウワーツ……』

平『ヤイ茂助、よせッ。折角泣きやんだものをわざ〳〵泣かせる奴があるか。御主人の若樣だ。無禮なことをするな』



茂『平助兄いは何の因果で、そんな小兒が可愛いんだら……アッ、汚ねえ。洟をかんでやつてゐるぜ』

平助は腰にさげてゐた手拭で、惣之助の涙や洟を拭いてゐる。それを垣根越しに見てをりましたのが、惣左衞門の娘のおみつ。

みつ『惣之助、惣之助や』

平『オ、ツ……坊ちやん、お姉え樣がお呼びでございます。あちらへ參りませう』

忠之助を抱いたまゝ、平助は垣根を廻つて庭の内。おみつはニッコリ笑つて立つてゐる。

戀のさゝやき

平『ヘエ、お孃樣、只今坊ちやまがお泣きでございましたから、お抱き申してをりました』

みつ『平助や、いつも親切にしてくれて濟みませぬ。今、お母さまに叱られて、泣いて行つたものと見えます。これといふのも何時もお前がやさしくしておくれだから、子供まで賴りにして……』

平『いえ、どうも恐れ入ります……それではお孃樣、坊ちやんはお渡し申します』

忠之助を渡して行かうとするから、



みつ『あゝ平助、ちよつとお待ち』と、呼びとめた。

平『へえ、何ぞ御用でございますか』

みつ『お茶を入れるから、私の部屋へ來ておくれ』

平『へえ、それでは恐れ入ります。少し用事もございますから、折角でございますが……』

みつ『私の入れたお茶はいやかえ』

平『いえ、いやといふ譯はございませぬが……』

みつ『そんなら此方へお出で……』聢めに平助の顔を見て、ニッコリ笑つて先に立つ。平助も止むなく、

平『さア坊ちゃん、參りませう』と、又惣之助を抱上げて、おみつの後に從つて來たおみつの部屋。

みつ『此方へお上りなさい』

平『いえ、恐れ入ります。下郎の私が、上へあがつては勿體なうございます。これで澤山でございます』

みつ『それでも其所ではあんまり、せめて緣側へお掛け』水臭いといはぬばかりの目付。平助は靜かに緣側へ腰を掛ける。

みつ『惣之助、此方へお出で』と、惣之助の手を曳いて奥へはいつたおみつは、間もなく紙の上へのせた羊羹二片、盆に載せてそれへ出て參りました。

みつ『これ平助、これは私の志、口には合ふまいが、食べておくれ』

平『へえ、有難う存じます。口には合はないどころではございませぬ。下郎の私共は見たこともない結構なお菓子、私一人で食べては勿體なうございますから、部屋へ持つて歸つて、茂助要助にも、分けてやりたう存じます』

みつ『ほんにお前はどこまでも深切者。だが、これはお前に上げたもの、お前一人で食べておくれ。はしたない茂助要助に、何の心遣ひはいりませぬ』

平『へえ、有難う存じます。茂助要助は私同樣下司の生れでございますから、お孃樣方や坊ちやまに、失禮なことを申上げますが、取るに足らぬ犬猫同樣の者共と思召して、どうかお心に懸けられないやうに願ひます』

みつ『私も腹は立たないが、賴りに思ふはお前ばかり……あの平助や、お前薄茶をお上がりかえ』

平『へえ、有難う存じます』

みつ『待つておいで……』

奥へ立つたと思ふと、間もなくおみつがたてゝ來た薄茶。甘味を食べ、茶を飲んでゐる平助の樣子を、チッと見てをりましたおみつが、

みつ『平助』と、何か意味ありさう。

平『へえ』

みつ『お前はお内儀さんがおありかえ』

平『エッ……お孃樣、御冗談仰しやつてはいけませぬ。女房がありやア下郎奉公などはいたしませぬ。自分一人の糊口さへ、滿足に出來ないこの平助、女房を持つたら干し殺してしまひます』

みつ『いえ／＼、今は下郎奉公をしてゐても、お前は確かにお武士、どうぞ本名を明かして、私のやうな者でも……』

平『エ、ッお孃樣、何をなさいます。幾ら馬鹿な私でも、そん

な冗談をなすつて、からかつちやアいけませぬ』

みつ『いえ／＼からかふのではない。それが眞實私の心……』

傍へ寄り添はうとする折しも、

母『みつや、おみつ……』といふ母の聲。びつくりしたおみつ、

みつ『はい……』と、そのまゝ心を殘しながらも平助の顏を見てニッコリ笑つて奥へ行つてしまふ。これを機會に平助は、仲間部屋へと歸つてまゐります。

茂『おい平助兄い、何處へ行つたんだ』

平『何所へ行つてもいゝぢやねえか』

茂『お前、お孃樣の部屋へ行つたぢやアねえか』

平『見てゐたのか』

茂『見てゐなくつてよ。お孃さんがお盆に載せて羊羹を持つて來たら、お前が一人で食べちやア勿體ねえから、部屋へ持つて歸つて、茂助要助にも分けてやりたうございますと、お前さう云つたらう』

平『いゝぢやねえか。友達の交誼だ』

茂『そこまではいゝや。その後が氣に入らねえ。さうしたら、お孃さんが何といつた。それはお前一人にやつたもの、はしたない茂助要助に何の心遣ひがいりませうと、さう云つたらう。さうしたらお前何と言つた。茂助要助は下司の生れ、取るに足

らぬ犬猫同様の者共と思召して、どうかお心に懸けられないやうに願ひますと、かういつたらう。乃公達は何かい、犬猫かい。何方が犬で、何方が猫だい」

平『だから、私同様と云つたぢやないか。まアさう怒るな。本當の話だ』

茂『尚ほ悪いや。あの弱虫の小兒を可愛がるのも、あの娘を手に入れようといふ計略だな。何にかけても平助、お前にやア敵はねえや』

何をいはれても、平助は只笑つてゐるばかりでございます。

平助の啖呵



こゝに國次惣左衛門の隣家に同じ吉川家の家臣で陶大之進、大次郎といふ兄弟が住んでをります。兄の大之進は一藩の者に大島流の槍術を指南するほどの腕前。ところが何所でもよくあること、隣り同志でゐながら、この陶兄弟と國次惣左衛門とが大の不仲、顔を見合せても、用事の外は口を利かないといふくらゐ。隣りのことでございますから、國次の邸の庭と陶とは垣根一重が境になつてをります。すると、ある日のこと。

『ヒーツ、ヒーツ』といふ子供の泣聲。聞耳立てた平助、バラバラツと聲する方へ來て見ますと、何時の間に入つたものか、陶方の庭の牡丹畑、今を盛りと紅白の花が咲きほこつてゐるその牡丹畑の中に、國次の悴の惣次郎が、陶の大次郎のために、襟髪を押さへられて、ポカポカ毆られてゐる様子。驚いた平助、そこは槍術の達人、ひらりツと間の垣根を飛越えて、

平『もし、若旦那、何をなさいます』と

云ひながら、振上げた拳を摑んで、ウンと向うへ突いたから、大次郎よろよろとよろめくうちに、平助は泣いてゐる忠之助を後へ庇つた。

大次『ヤア貴様は隣家の下郎平助だな』

平『へえ、仰せの通り平助でございます』

大次『何をいたす』

平『何をするとは此方でいふこと。これは私共の主人の大切な若様、何でお打ちなさいます』

大次『其方には大切の若様かは知らぬが、われ〳〵にとつては憎くき小伜』

平『へえ、どういふ事をいたしました』

大次『見ろ。兄上とこの大次郎が、丹精をして作つたこの牡丹、断りもなく小伜が、垣根の破れから忍び入り、今を盛りと咲いてゐる花一輪を手折りし不屆、それゆゑ處刑をいたしてゐるのだ』



平『なる程、そりやア悪うございました……坊ちゃん、貴下は何をなさるのでございます。なぜ平助にそれならそれと仰しやいませぬ。黙つて入つて來て、花を折るからこんな目に逢ふのでございます。此方の先生が丹精して咲かした花。詰らねえ花でも折られて見れば腹が立つ……』

大次『これ〳〵下郎、詰らぬとは何だ。無禮な奴』

平『まア正直な話がそんなものでございます……もしお隣りの若旦那、なる程これは私の方が悪うございました。坊ちゃんに代つて、私がこの通りお詫をいたしますから、どうか御勘辨し

てお呉んなさいまし』
大次『ならぬッ。下郎の分際で出過ぎたことを申すな。全體、この小倅の平常の躾が悪いから、かういふことをいたすのだ。下郎の粗相を主人が詫びるといふことはあるが、假令小倅でも貴様には主人、主人の粗相に、下郎が詫びるといふことがあるか。歸へれ〳〵。歸つて主人國次惣左衛門に、自分參つて詫びをいたせと申せ、無禮者め』
平『へえ、御尤もではございますが、これが武士の面目に係はる事でもしたと云ふなら、御主人からお詫を申上げもいたしますが、まだ頑是ない子供のした事、それも高が牡丹の花の一つや二つ……』
大次『默れッ、默れ〳〵無禮者。高が牡丹の花の一つや二つとは何だ。勘辨ならぬ』
平『主人に代つて私が、七重の膝を八重に折り、この通りお詫をいたします。どうか御勘辨……』
大次『ならぬ〳〵。ならぬわ』
平『へーえ……これほどにお詫をしても、御勘辨がならねえと仰しやるのでございますか』
大次『諄いわ。歸れ〳〵。歸らぬか』といひながら、履いてゐた庭下駄のまゝ、俯向いてゐる平助の肩の邊をパッと蹴つた。體をかはすぐらゐは心得てゐましたが、この場がをさまらぬと思ふから、平助、蹴られるまゝにぢッと耐へてゐると、又もや蹴上げた大次郎の下駄、平助はその所へドッと尻餅をつく。
大次『馬鹿め』
惣之『平助や、怖いよう』縋り附いて來る惣之助を、抱いたままに起上がつた平助が、心に怒りはもちながら、いや〳〵何をいつても此方が悪い事、なる堪忍は誰もする、ならぬ堪忍するが眞の堪忍と、そあらぬ體で、
平『坊ちやん、御心配なさいますな……若先生、恐れ入りましてございます。それではこれで御勘辨を下さいまするか』
大次『いゝや、ならぬ。貴様如き下郎の詫で承知をする吾々でない。とつとと屋敷へ歸つて、自身詫に參れと、主人惣左衛門に申せ。それまではこの小倅は、此方へ預かつておく』と、惣之助の手を取らうとするから、今はこれまでと、その手を拂つて、ハッタと大次郎を睨んだ平助。
平『ヤイツ、大次郎』
大次『なにッ、人の名を呼捨てにする無禮な奴』
平『呼捨てにしたのが何とした。これッ、此方が悪いと思へばこそ、詫をするのも聽き容れず、足蹴にした其の上に、まだ勘辨をしねえとあればもう之まで。これやい大次郎、よつく聽けよ、これが締りの嚴重な屋敷の門を破つて入つたといふではなし、隣り同志の間の垣根、大人さへ潜れるやうに破れてゐるのだ。

綺麗な花が咲いてゐりやア、子供心に欲しくなるのは當然。まだ頑是ねえ子供のこと、善いことも惡いも心得なく、此所へはいつて手折つた花。成程、他人の大切の花だから、手折つたのは惡からうが、何をいふにも子供のしたことだ。躾けの惡いは親の罪と、先刻お前さんは言ひなすつた。親が惡いと思つたら、なぜ親御にこれ〳〵からうだと掛合はねえのだ。親がねえのぢやアなし、國次惣左衛門といふ立派な親があるんだ。それ程腹が立つたなら、なぜ表向き名乘を掛けて掛合はねえ。西も東も分らねえ子供を捉へて打ち打擲、武士にも似合はねえ卑怯な仕方……』

大次『默れツ、默れ〳〵。己れ下郎、子供の罪を棚に上げ、人を罵しる白痴者、その分には捨て置かぬぞ』

平『捨置かなきやアどうするのだ』

大次『かうしてくれる』と、拔打ちに斬りつけて來た一刀、ひらり體をひねつたから、空を打つて流れるところを、利腕掴んで肩に掛け『エイツ』と氣合諸共、傍らの池の中へドブーン……。

平『アハヽヽヽ、態ア見やがれ……さア坊ちやん、參りませう』

惣之助を抱上げたまゝ、垣根をひらり飛越して歸つて來た國次の屋敷。

平『さア〳〵坊ちやん、早くお母さまの側へいらつしやいまし。お母さまにもお父さまにも默つていらつしやいましよ』と、口留めをして、そのまゝ平助は部屋へ歸りました。

二つに一つの返答

それから間もなく、顔色を變へてはいつて來た茂助要助。

茂『ヤア平助兄い、大變だ〳〵』

平『何だ。何が大變だ』

茂『何がつて、兄い、何でも構はねえから、お前荷物を纏めてこ

こを逃げてしまひねえ』
平『何だ。何で逃げるのだ』
茂『何で逃げるといつて、お前の胸に覺えがあるだらう』
平『何も乃公は人の物を盜んだ覺えはねえ』
茂『盜んだといふのぢやねえ。お前先つき隣屋敷へ行つて、隣りの若先生を池の中へ叩ツ込んだといふぢやあねえか』
平『あゝあの一件か』
茂『あの一件ぢやあねえ。何だつてそんなことをするんだ。飛んでもねえことをしたぢやアねえか。それに就て、今隣り屋敷の陶大之進から、弟に無禮をはたらいた憎くき下郎、首打つて渡すか、當人に縄打つて渡せといつて來たんだ。それで家の旦那樣が御立腹になつて、乃公達二人を呼んで、お前を庭へ連れて來いと、かういふんだ』
平『さうか。そいつは御苦勞だつた。ぢや行かうか』
茂『行かうかぢやねえ。兄い、どうか早く逃げてくれ』
平『何だつて逃げるんだ』
茂『何だつてといつて、庭前へ行つて見ねえ。旦那のために首



を切られてしまふか、さもなきやア縛られて縣りへ送られるんだ。どつち道命はねえんだ。乃公達二人も兄いのお蔭で槍術を覺えてみれア、朋輩とはいひながら師匠同樣、恩があるからお前の身の爲を思ふんだ。どうか今のうちに此所を逃げてくれ。後は乃公達二人で、旦那の前は何とでもするから……』

平『ウム、さうか。あゝよく言つてくれたお前達の厚い志、決して忘れはしねえ。下郎に似合はぬ感心な奴』

茂『冗談ぢやアねえ、そんな所で氣取つてゐねえで、早く逃げてしまつてくれ』

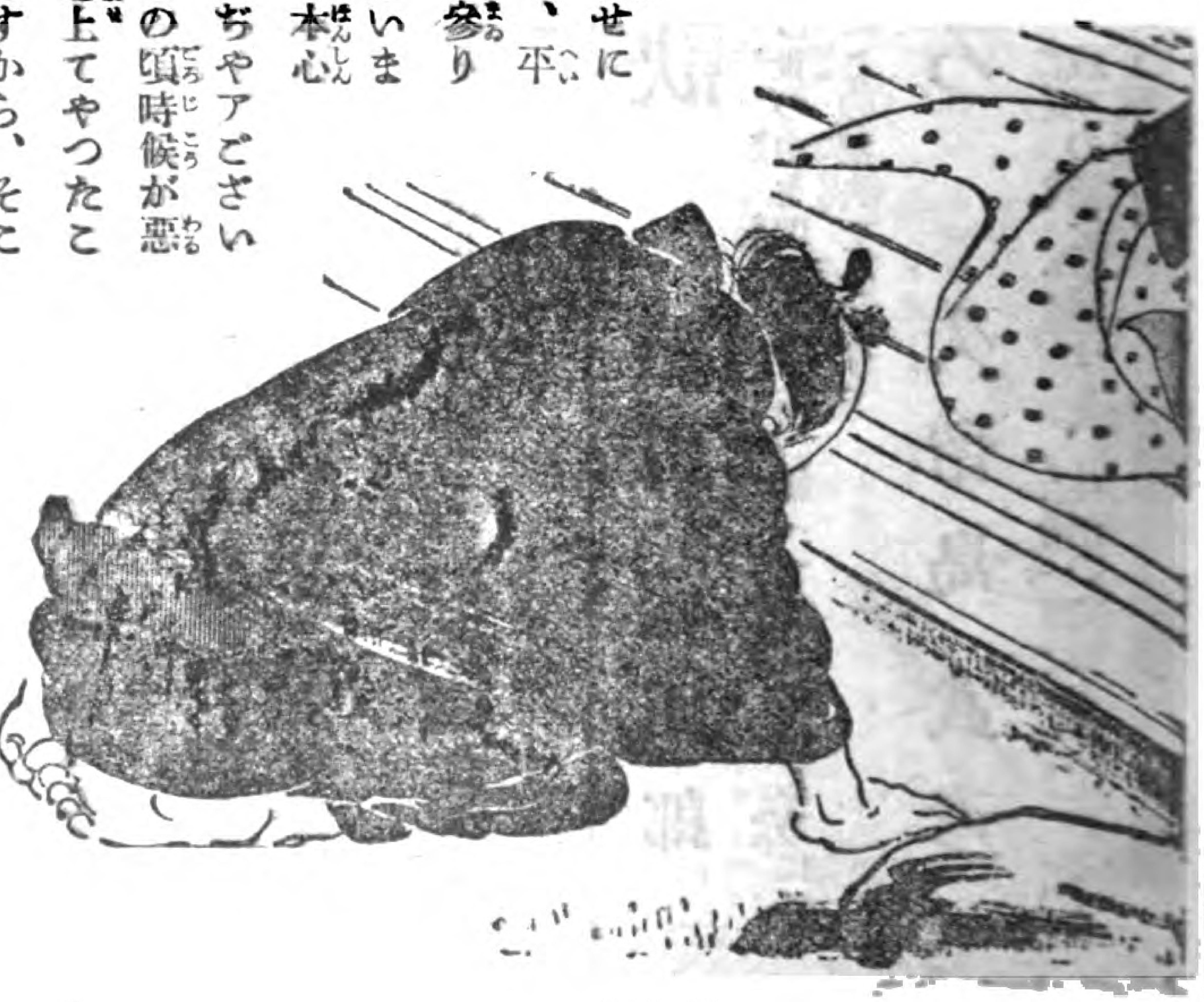
平『いや逃げねえ。お前達の志は分つてゐるが、乃公は逃げるやうな卑怯なことはしたくねえ。決して心配するな。乃公が行つて旦那に會つて話をしよう』

茂『大丈夫かい、兄い。そんな事をするより、逃げた方がいいぜ。憎くき下郎めとか何とかいつて、家の旦那に刀を拔かれたら最後、首が落ちるぜ。首が落ちてしまふと、歩くのに見當がつかねえぜ』

平『いゝッてことよ。連れて行つてくれ』

茂『さうかい。ぢやア仕方がねえ』

　何といつても、平助が肯きませぬ。そこで二人は平助を連れて庭前へ來ると、緣端には國次惣左衛門、後方には奧方、娘のおみつが心配さうに控へてをります。



茂『へえ、仰せによりまして、平助を連れて參りましてございます。決して本心でやつたのぢやアございませぬ。この頃時候が惡いので、逆上てやつたことでござんすから、そこん所は何分どうか宜しく……』

惣『控へろ。其方共のかれこれ申す所でない……これ、平助』

平『へい……』

惣『前へ出い……其方、先刻隣屋敷へまゐり隣家舍弟大次郎を池の中へ投げ込んだと申すことであるが、覺えあるかどうぢや』

平『へい、確かにそれに相違ございませぬ』

惣『何で左様なことをいたした。只今隣家陶大之進よりの書面、無禮をはたらきし下郎平助、首にして渡すか、繩打つて渡すか、二つに一つの返答をいたせとの趣。下郎の身を以つて何で左様の事をいたした』

平『へえ、左様なら申上げますが、隣りの牡丹の花があまり綺麗でございますから、一本折つて目の慰みにしようと思ひまして、隣屋敷へはいつたところを、生憎若先生に見つかつて、お叱りを受けました。七重の膝を八重に折つてお詫をいたしましたが、何といつてもお肯き容れなく、刀を拔いて切らうといたします。幾ら下郎でも命は惜しうございますから、池の中へ叩ッ込んで、歸つて參りましてございます』

惣『ウーム、憎くき奴、隣家で成敗受けるまでもなく、この惣左衞門が首にして、隣家へ申譯に屆け遣はす。そこ動くな』といふより早く、長押に掛けたる手槍、取るかと思ふと、リウ〱と扱きを入れるその意氣込みのはげしさ。これを見て驚いた御新造に娘のおみつ。

妻『貴下、御立腹は御尤もでございますが、私からお詫をいたします』

みつ『お父さま、どうぞ堪忍して、平助を助けてやつて下さいまし』と、左右から縋りつくのを、

惣『えゝい、邪魔いたすな。退けッ』縋る袂を振り拂ひ、『ヤッ』と一聲、平助の胸板を望んで突つかゝつた。平助の命は今や風前の燈。

さてこれからどうなりませうか。來月號のお慰みでございます。(つゞく)

絶對無害 色を眞白くす 脱色素法

ニキビそばかすを除くは極めて容易なり

色を白くする方法……色を白くする藥品……世間に幾通りもあつて、どれも多少は效果のある事であらう。けれども、讀者諸子が實用と時間をかけて實行する場合は、一番に最大效果のある手段を選定するのが賢くはあるまいか！　そこで、讀者諸子が、新聞雜誌の廣告文を目標として、色白美顔料の類を求められる際には、十分御研究が必要です。

我がレオン洗顔クリームの宣傳文中には、所謂宣傳的の色々な言葉を悉く除きて商工省特許局の特許條文の一部を拔萃して報告するに止める。レオン洗顔クリームなる品は、今日までの化粧品中には、曾つて類例を聽かぬ日英米三ケ國の專賣特許品である。どんな色の黒い人でも、レオン洗顔クリームを二月も連續的に使用すれば、色黒の原因たる色素が漂白されて西洋人の皮膚の如くに綺麗な純白に變化するのは當然であつて、その點が新發明である。これだけの權威ある發明品も大大的な宣傳をせぬので知らぬ人も多いやうである。幸ひにして此文章を見付けた人は早く實驗あれ。默つて使用すれば顔や手の皮膚が別人の如く白く美しくなるので隣人などは吃驚するであらうか。ニキビそばかすに惱んでゐる人々には藥品などより何層倍も迅速な奏効だから御知らせを乞ふ。若し廣告本位の他品に失望せる人は特に滿足すべし。本品は効力本位なれば博士の證明等は省略す。

特許條文の拔萃

英國專賣特許。第一一七〇六〇號。
米國專賣特許。第一二七八五一八號。
日本專賣特許。第三一九〇八號。第三八一一九號。第四一六〇四號。

(前略)……右ヲ温湯ニ於テ使用スル時ハ、極微細ノ狀態ニ混和セル硫黃ハ石鹼様泡沫中ニ薄ク散布シ『コロイド』硫黃ニ近似セル働キヲナスト共ニ、石鹼様ノ加水分解ニ伴ヒテ苛性曹達ト結ンデ硫化曹達ヲ生ジ、普通ノ硫黃泉ニ於ケルト同様ノ効能ヲ發揮スルニ至ル。此ニ成生セル硫化曹達ハ一部分分解ニ依テ生ズル有機酸又ハ酸性鹽ニ觸レテ、硫化水素ヲ發生スル事アリト雖モ、石鹼様乳中ニ散布セル『ワゼリン』膜ニヨリ水分ヲ遮斷セル過硼酸曹達ガ此際石鹼様溶解ニ從ヒテ水分ニ觸レ過酸化水素ヲ放チ、此分解ニヨリテ生ゼル強力ノ酸素ト樹脂石鹼ノ『レジネートドライヤー』ニ類スル一種ノ接觸作用ノタメ、新鮮ノ傾向ヲ帶ビタル附近ノ酸素ニ依リ概ネ直チニ酸化サレテ新鮮硫黃ニ復シ、一層強力ニ作用スルニ至ルヲ以テ(中略)多量ノ極微硫黃ヲ遊離シテ美白ノ効果ヲ一層有力ナラシム。(下略)

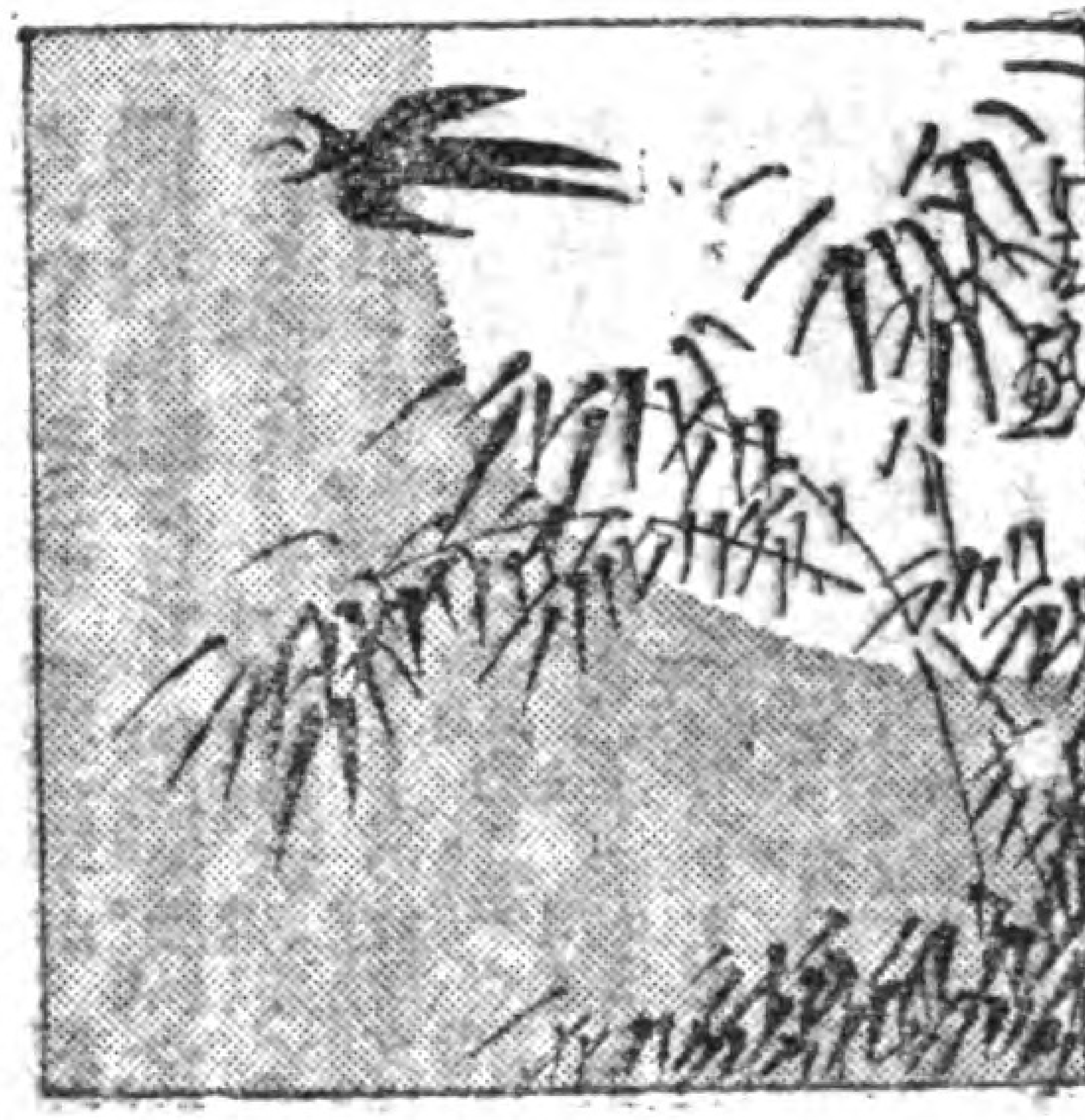


顔と手だけ白くなりし少女の寫眞

△注文の方法▽

レオン洗顔クリームは、その特殊効果を認めて、本社の代理部で取扱つてをりますから御希望の方は東京市本郷區駒込坂下町四八大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）へ送金あれば直ぐ鐵道小包で發送します。(代金引換はハガキで申込み下さい)＝價格は眞面目な美顔料として極めて安價です。徳用大瓶金三圓四十錢(送料十八錢海外五十五錢)なれば賣藥等より遙かに多量で凡そ二月以上も使用ができ他の化粧料や石鹼まで節約し頗る經濟である。また小瓶金一圓四十錢（送料内地十二錢海外四十五錢）を申込まれてもよい。レオン洗顔クリームは雜誌の口繪の上においても忽ち漂白するほど確實の發明品なれば何人も躊躇なく速刻注文を寄せられたい。

（注意）あまり早く色白くなりたる故に何等かの害なきかと照會書面に接するも却つて皮膚を饒々となす安心あれ。他に專賣特許と稱するも本品の如く內容を公開し得るは絶無なり。この點に刮目あれ！



諧謔小説

新家庭双六

佐々木邦
挿絵　田中比左良

模範的夫婦喧嘩

折が折だつた。幾つかの事情が同じ方角を差して進むでゐた。後から考へて見ると、丁度、新家庭に第一回戦の起るやうな廻り合せになつてゐたのである。徳子さんはその夕刻、

『御免下さい。』

と訪ふ聲に應じた時、玄關にケバ〳〵しいモダン・ガールを認めた。婦人客の例がないでもないが、それは皆素性の分つた人で、妻女の自分を訪ねて來る。

『里見さんはもうお歸りでございますか？』

と、主婦を差置いて、いきなり主人の動靜に立ち入つたのはこの斷髪がレコードだつた。

『未だ戻りませんが……』

と答へた時、徳子さんは何て厭な人だらうと思つた。大きな目は覺えず睨むだ。

『……』

『何方樣でいらつしやいますか？』

『私は有田と申しますが……』

と相手は行き詰まつた。初めて徳子さんを新婦と承知したのらしかつた。

『……』

『一寸この方面へ參りましたので。』

『はあ。』

『それでは何れ又お伺ひ申上げますから。』

『はあ。』

『何うぞ宜しく。』

『はあ。』

　これでは取りつく島もない。女性の來訪者は突つ放された形で歸つて行つた。敷居に引つかゝつて、パラソルを取り落した。尠からず慌てゝゐたと見える。

『何て行儀作法を知らない人でせう。奧さまでございますかとも訊かないで。』

　と徳子さんは甚だ感心しなかつた。

『一體何ものでせう?』

　と考へ込むでゐると、婆やの顏を思ひ出した。掻き廻して行つて憎らしい婆やだと瞋恚の炎がその方へ移つた刹那、又思ひ浮べたことがある。それは婆やが、

『こんなおしやべりを申上げて旦那さまに叱られるかも存じませんが……』

　と斷つて話し出した一條だつた。その折は單に厭がらせと考へて、胸一つに納めて置いたが、斯うなると、全くの根なし草でない。今來たのはその職業婦人だらうか? 然うして、お友達の妹さんで、スッキリとしてゐて、御器量もナカ〳〵お宜しく? お年は二十二三。確かにあれだわ。

『一寸この方面へ參りましたので』と。仰有ることが生圖々しいわ。餘程御懇意よ。宜いわ。私、訊いてやるわ。女性の友達なんてものは絶對になかつたなんて、嘘をついて。』

　と徳子さんは考へれば考へるほど腹が立つた。

　里見君は斯ういふ穩かならぬ心理狀態のところへ、いつもよりか少し後れて歸つて來たのだつた。徳子さんが無言で出迎へて、ツンとしてゐたから、

『何うかしたのかい?』



　と訊いて見た。

『いゝえ。』

『變な顏をしてゐるよ。』

『然うでございますか。』

と徳子さんはもうそのまゝにして、咬みつく機會を覗つてゐた。第一回だから勝手が分らない。食後ゆつくり取りかゝる積りだつた。

その折から、庄司君の來訪が刺戟になつた。友人の家へ行つたら、常に細君を念頭に置いて喋るべきものだ。主人ばかりの家庭でない。主婦は姿を見せなくとも、何處かで必ず聞いてゐるものと思はなければいけない。庄司君は無論惡氣のある男でない。しかし拙いところへ拙いことばかり言つて、時局を破裂へ導いた。新家庭へ來て、その良人を大阪まで引つ張り出さうとする。それも里見君の一存に賴むだ。里見君が又一存で引受けてしまつた。次に庄司君は嫁は利廻りの關係上大阪から貰ふに限ると言つた。東京から貰ふものでないとは言はなかつたが、論理はそこに歸着する。里見君は又それに多大の共鳴を洩らした。最後に職業婦人の話が出た。

『タイピストあたりは何うだい？』

と里見君は早速釣り込まれて、意のあるところ又は曾つてあつたところを示した。それが先刻來た憎い奴だつた。徳子さんたるもの次の間でピリ／＼せざるを得ない。庄司君が歸ると、もう猶豫はなかつた。徳子さんはタイピストから訊いてかゝつた。



『惜しかつたでございませう？』

と再三浴せかけて度膽を拔いた後、

『あなたはタイピストの有田さんを貰ひたかつたんでございませう？』

と具體的に出た。不意を食つた里見君は直ぐタジ／＼になつて、

『徳子や、お前は何か誤解してゐるよ。』
と言つた。良人は形勢不利と認めると、必ずこの辯明法を用ゐる。
『おい〳〵、馬鹿な誤解をしちや困るよ。』
『それはお前の誤解といふものだよ。』
『これは驚いた。飛んでもない誤解だよ。』
と表現は幾らもあるが、皆誤解といふことに力を入れて、よの字をつけて置く。尤も、
『それはお前の正解だよ。』
と正直に申立てゝしまへば、兜を脱いだことになつて、面目が潰れる。
『誤解なら誤解で宜しうございますよ。』
と徳子さんも心得てゐる。決して宜しいのでない。料簡があるといふ恐喝だ。
『まあ〳〵、納得の行くやうに話させておくれ。』
『承はりませう。』
『あれは死んだ友人の妹だ。それ以上に何の關係もない。』
『でも庄司さんが惜しかつたらうつて仰有つたぢやございませんか？』
『庄司君はあの通り口が惡いんで評判の男だ。何を言ふかも知れない。冗談を本氣にしちや困るよ。』
『あの時のあなたの笑ひ方がいつもと違つてゐましたわ。』
『何うして？』
『へゝゝつて、如何にも嬉しさうでございましたわ。』
『然う氣を廻しちや困るね。あんなこと、一笑に附してやつたんだ。』
『あんなことつて何んなこと？』
『何でもないことだよ。』
『兎に角、私、こんなに侮辱されたことはございませんよ。』
『それが誤解だと言ふのさ。俺が何でお前を侮辱する？』
『あなたぢやございませんわ。』
『誰だい？　それなら。』
『あの方よ。女中か何かとでも思つたんでせう。てんで私の存在を認めてゐないんですもの。』
『それは俺が結婚したことを知らせてないからさ。關係のない證據ぢやないか？』



と里見君は相手の武器を利用した。

『知らせてなければ、私は女中に見えるんでございますの？』

と徳子さんは揚げ足を取る。

『然ういふ意味ぢやないけれど。』

『それぢや何ういふ意味でございますか？』

『婆やと二人きりの積りで來たのさ。』

『昔の通りにね？』

『昔だつて何の關係もない。』

『……』

『徳子や、斯ういふ根本問題について變な誤解をしてくれちや本當に困るよ。』

『でも……』

『でも何だい？　思ふ通りを言つて御覽。』

『度々お出になつたやうに婆やから承はりましたもの。私、來る早々、何んなに厭な心持がしたか知れませんわ。』

『婆やの話には誇張がある。彼奴の遣口はお前も分つてゐるだらう？』

『……』

『學校を卒業して口がなかつたものだから、その相談に來たのさ。この春のことだよ。』

『いゝえ、私の來る少し前にもお見えになつたと申しましたわ。』

『然うだつたかね。俺は問題にしてゐないから、一々覺えてゐない。』

『何の御相談にしても、覺えていらつしやらないほど度々お出になつたことは事實でございませう。』



『徳子や、然う一々言葉尻を取るものぢやないよ。』

『……』

『惡い癖だ。それぢや話が出來ないぢやないか？』



と里見君は壓迫を加へる必要を感じた。小手先では迚も敵はない。

『……』

『おい。』

『もう宜しうございます。私……』

『泣くことはないよ。徳子や、徳子や。』

『……』

『小言ぢゃないんだよ。堪忍おし。何でも言ひたいことを言ひなさい。ねえ、ね。』

『はあ。』

と徳子さんは漸く涙を拭つた。これで完全に發言權を獲得したのである。婦人は水力で男子を動かす。

『有田君の妹は來たには來たが、度々つてほどのことはない。口を探してやつてから一遍お禮に來たのを婆やが言つたんだらう。』

『……』

『分つたらうね？ もう。』

『あなたが探して上げましたの？』

『うむ。今勤めてゐる會社へ世話をしてやつたのさ。』

『御親切ね、あなたも。』

『死んだ友人の妹だもの。以前からの關係で、賴まれゝば斷る次第にも行かない。』

『それ御覽なさい。』

『何だい？』

『全く關係がないと仰有るお口の下から、以前から關係があると仰有るぢやございませんか？』

『その關係は關係が違ふ。』

『何んな關係でも、私、好い心持は致しませんよ。』

『何故？』

『あなたが他の方と親しくお話をなさると思ふと悲しくなりますわ。』

『恐れ入つた。』

と里見君は額を叩いて恐悦がつた。これだから押しが利かない。

苟くも男子、三十近くまで獨身でゐる間には、貰ひたいと思つた婦人が二人や三人はあつたに相違ない。相手が勝れて美しくなくても、接近は親和を生む。極く當り前のも會ふ日の重なるにつれて好く見えて來る。まして有田さんは元來綺麗な方だつた。

『あなた、私、憤りませんから、有りのまゝを仰有つて下さい。』

と少時あつて徳子さんが機嫌を直して訊いた時、里見君は、

『貰ひたいとまでは思はなかつたが、無論憎くはなかつたさ。』

と控へ目に實を吐いた。

『然うでございませう。それから何うなすつて？』

『それつきりさ。』



『私、決して憤りませんよ。』

『公明正大なものさ。』

『あなた。』

『何だい？』

『お手ぐらゐ握つたことがあるんぢやなくて？』

『冗談言つちや困るよ。』

『でも憎くはなかつたと仰有るぢやございませんか？』

『別に憎むべき理由もないのさ。男つてものは誰でもそんなものだ。』

『何んなもの？』

『綺麗な人を見れば憎いとは思はない。』

『あなたあんな方を綺麗だとお思ひになつて？』

と徳子さんは間拔けた。矢張り警戒を要する。
『有田が綺麗つて次第ぢやない。一般論だよ。』
『私、あんな禮儀作法を知らない人、大嫌ひ！』
『ミッション・スクールか何かの寄宿舍育ちだから、教養が缺けてゐる。お前のやうな深窓の佳人とは違ふ。』
『まあ！　うまいことばかり仰有つて。』
『本當だよ。お前とは比較にならない。』
『有田さんのことはもうこれで堪忍して上げますわ。』
『機嫌を直しておくれ。厄介な奴が舞ひ込むだものさ。』
『私、あなたがあんな方を御存のくせに何とも仰有らなかつたのが不服よ。』
『問題にするほどのことぢやないんだもの。』
『もう他にございませんでしたの？』
『何が？』
『何がつて。』
『ないよ。絶對にない。』
『本當？』
『嘘をつくものか。』
『お鄕里から從妹の方が叔父さんと御一緒にお見えになつたさうでございますね？』
『あれは東京見物に來たのさ。』
『隨分長らく御逗留だつたと婆やが申しましたわ。』
『二週間もゐたらうかな。』
『その方は何うなさいましたの？』
『もう疾うに片付いてゐる。あんな奴は迚も問題ぢやない。』
と答へたが、里見君は實はこの幼な馴染みにも應分の思召があつた。結婚前は氣が多い。一寸電車に乘つてもこれなら辛抱出來ると思ふのが一人や二人はある。內輪に見て日に一人とし

ても、月に三十人、年に三百六十五人、一々枚擧に遑がない。その中目ぼしいのはいつまでも覺えてゐる。殊に親戚や知人の娘で言葉を交したことのあるのは感銘が深い。就中親み易いのは從妹だ。

『その方は餘りお綺麗ぢやなかつたさうでございますわね。』

『田舍育ちだもの、深窓の佳人とは違ふ。』

『厭よ。』

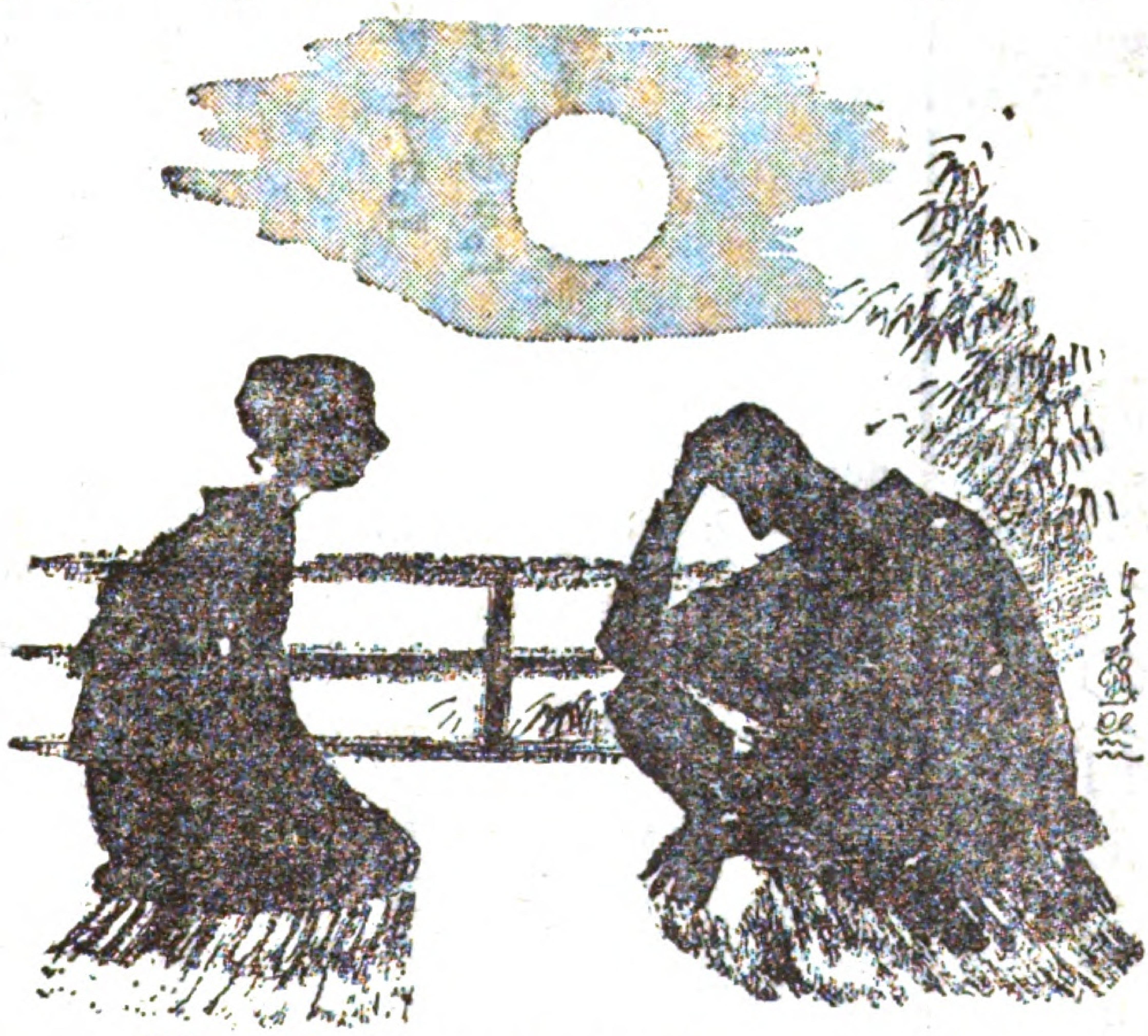
『ハツハヽ。』

『もうございませんの？』

『ないよ。お生憎さまだ。今夜は變なことばかり訊くんだね。』

『私、あんな方にお目にかゝつたものだから、神經過敏になつたんですわ。』

と德子さんは新婚後百日餘りで嫉妬といふことを覺えた。里見君は必ずしも迷惑を感じなかつた。但しこの際調子に乘つて、竊かに艶福と自惚れてゐる昔語りなど始めると大變なことになる。女といふものは割引をして聞く丈けの頭がない。里見君が絕對否定で押し通して、



『庄司君なんかと違ふよ。』

と同僚を引合に出して新婦の執念を岐路へ外らしたのは策を得たものだつた。庄司君もこれ丈けの種を蒔いて行つたのだから、多少惡口を言はれても浮べる。

『庄司さんは職業婦人に二度も失戀なすつたさうでございますわね。』

『それまで聞いてゐたのかい？』

『えゝ。』

『油斷がならない。』

『オホヽヽ。』

『あの男は方々で彈ねられてゐる。』

『あんな人のところへ來る人は幸福でございませうか？』

『幸福ぢやあるまいよ。』

『お氣の毒でございますわ。』

『お氣の毒だ。』

とこれで一寸の間天下泰平になつたが、德子さんは次の問題

に移つた。

『あなた。』

『何だい？』

『私、序にもう一つ申上げたいことがございますのよ。』

『言つて御覧。思つたことは何でも遠慮なく發表するに限る。』

『あなたは庄司さんの御結婚で大阪へいらつしやいますの？』

『行くよ。』

『あなたはそれで宜しいと思つていらつしやいますの？』

『交際上仕方がないぢやないか？』

『御交際は御交際でございますけれど、そんなこと御一存でお定めになつて宜しいと思つていらつしやいますの？』

『お前に相談しなかつたのが不服かい？』

『はあ。』

『そんな我儘を言つちや困るよ。主人は主人の考へがあるんだから。』

と里見君今しがた取つ占められたばかりだから、又かと思つて、グッと癪に障つた。

『我儘でございませうか？』

『我儘さ。』

『それぢや何處の奧さんも我儘でございますわね。』

『餘所の奧さんはもつと從順だよ。主人の行動に一々嘴を容れない。』

『あなたこそ横暴でございますよ。』

『横暴でも宜い。』

『宜かございませんわ。』

と徳子さんは眞劍になつた。

『もう好い加減にしておくれ。』

『遠慮なく發表するに限ると仰有つたぢやございませんか？』

『それぢや何だよ？』

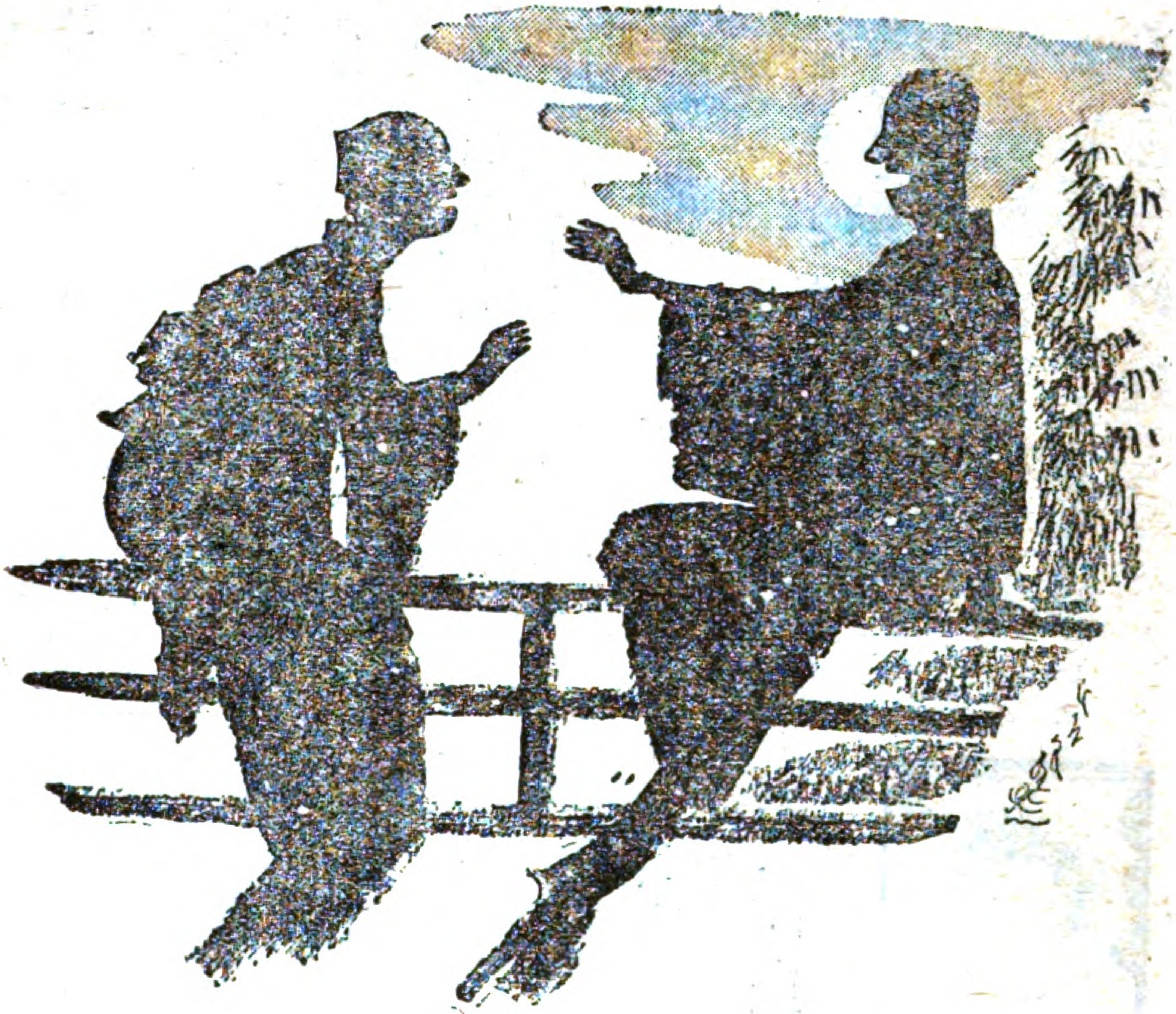
『私、庄司さんのお話を悉皆伺つてゐましたが、坂本さんも川上さんも御一存でお定めになりましたの？』

『さあ。』

『坂本さんは奧さんと御相談中だと仰有いましたわ。』

『然うだつたかね。』

『川上さんは奧さんが臨月に當るので苦情が出たと仰有つたぢやございませんか？』



『ふうむ。あゝあ！』

と里見君は欠伸をした。これが時節柄甚だ宜しくなかつた。悳子さんが里のお母さんからつけられてゐる智恵の中に良人横暴取締の一條がある。主人といふものは、家のお父さんを見ても分る通り、重大問題を獨斷で定めて、枝葉に亙る小面倒なこと丈けを家内に任せる。『女童の知ることならず』と言つて、昔、城を取りつこした時代の遺風が傳はつてゐるから、この點を矯正しなければいけない。ついては初めの中が大切である。少しでも横暴だと思つたら、直ぐに頭を押へつけろといふのだつた。

『あなた。』

と徳子さんが甲走つた時、欠伸の口を閉ぢたばかりの里見君は、

『え？』

と言つて、覺えず居住ひを直した。

『私、今晩はこれから里へ歸つて泊つて參ります。』

『お前は一體何うしたんだい？』

『少し都合がございますから、行つて參ります。』

『いけない。』

『何故いけないんでございますか？』

『突然藪から棒にそんなことを言つちや困るぢやないか？』

『それぢや何うすれば宜しいんでございますか？』

『理由を話して相談するのが當り前だらう。主婦が一晩でも家を明けて里へ歸るつてのは重大な問題ぢやないか？』

『あなたも理由を仰有つて御相談なさるのが當り前でございませう？　主人が一晩でも家を明けて大阪へいらつしやるつてのは重大な問題ぢやございませんか？』

『こん畜生！』

と里見君は理詰めに合つた。

『私、里へ行つて泊つて來たいことなんか些つともありませんわ。』

『吃驚させやがる。』

『唯道理を說いて聞かせて上げたんでございますわ。』

『分つたよ。』

『大阪行きはお斷り下さい。會社からの御出張なら、私、弟達を賴むで來て、幾日でもお留守番を致しますが、私用でいらつしやるなら、責任を負ひません。』

『改めてお前に相談すれば宜いんだらう？』

『はあ。』

と德子さんは澄ましたものだつた。

里見君は我を折つて承諾を求めた後、

『お前はナカ〳〵やるんだね。』

と感心した。

『あなた。』

『お前の「あなた」にはもう懲りた。』

『もう一つございますのよ。』

『澤山だよ、もう。』

『いゝえ、申上げますわ。私、口惜しくて仕方ないんですもの。』

『何だい！　それぢや。ソロ〳〵もう十一時だから、簡單に願はう。』

『お嫁さんは大阪から貰ふに限るさうでございますわね。』



と徳子さんはこれも氣に入らなかつた。
『あれは出司君の説だよ。』
『あなたも御同感でございましたわね。』
『單に調子を合せたのさ。』
『それは巧いなあつて、如何にも羨ましさうに仰有いましたわ。』
『あの男は理窟ぽいから、それぐらゐに言はないと議論になる。決して羨ましがつたんぢやない。』
『占まつたなあつて仰有いましたわ。然うと知つてゐたら料簡があつたのにつて仰有いましたわ。』
『悉皆聞いてゐたんだね?』
『はあ。』
『堪忍しておくれ。俺はお前に迚も敵はない。』
『そんな問題ぢやございませんよ。私、あなたのお心持が伺ひたいんですから。』
『眞の差異に言つたことだ。何の料簡があるものか?』



『然うでせうとは存じましたが、あんなこと承はると、私、冗談でも矢つ張り面白かございませんわ。』
『分つてゐるよ。今夜は俺が重々惡かつた。もう機嫌を直しておくれ。』
『矢つ張りあなたは横暴ね。』
『多少その傾向があるかも知れない。』
『全く御自分本位だから、いけませんのよ。』
『はい〳〵。』
『私つてものを些つとも考へて下さらないんですもの。』

『そんなことはない積りだけれども。』

『いゝえ、それですから、大阪行きをお斷りでお定めになつたんでございますわ。』

『濟まなかつた。』

『それですから、私が氣持を惡くするやうなことをヘラ〳〵とお喋りになるんでございますわ。』

『ヘラ〳〵とは酷しいね。』

『本當は私、咬みついて上げたかつたくらゐでしたのよ。』

『危いところだつた。』

『これからはお互に氣をつけませうね。』

『大に愼むよ。』

『私、草臥れたわ。』

『俺も肩が張つた。お茶の一杯も入れておくれ。』

『はあ。』

『今夜は散々だつた。』

と里見君は拳で肩を叩いてゐた。

間もなく二人は戸締りにかゝつた。盜難以來頗る念が入る。里見君が戸を引く後から、徳子さんが一枚一枚へ釘を差して歩く。作業中、二人摺れ違つた時、里見君は徐つと徳子さんの手を握つた。

『何あに？』

『徳子や。』

『何よ？』

『俺はお前がこんなに强いとは思はなかつた。』

『まあ！』

『ハツハヽヽ。』

『厭ねえ。オホヽヽ。』

（つゞく）

雛はいよ〳〵油がのつて來た。妙味いよ〳〵加はつて來た。評判いよ〳〵高くなつた。以下ますます千變萬化!!　相變らず御愛讀の程を


漫助の釣
ひとし
『今日はしこたま釣つて來るぞ』
『あら、また釣り?』
『ハーテ、風が吹いて來たナ』
『ウヘー大へん』
『やけにてりつけやがるなアあゝあつい』
『ウム、このざるを一つかぶつてやれ』

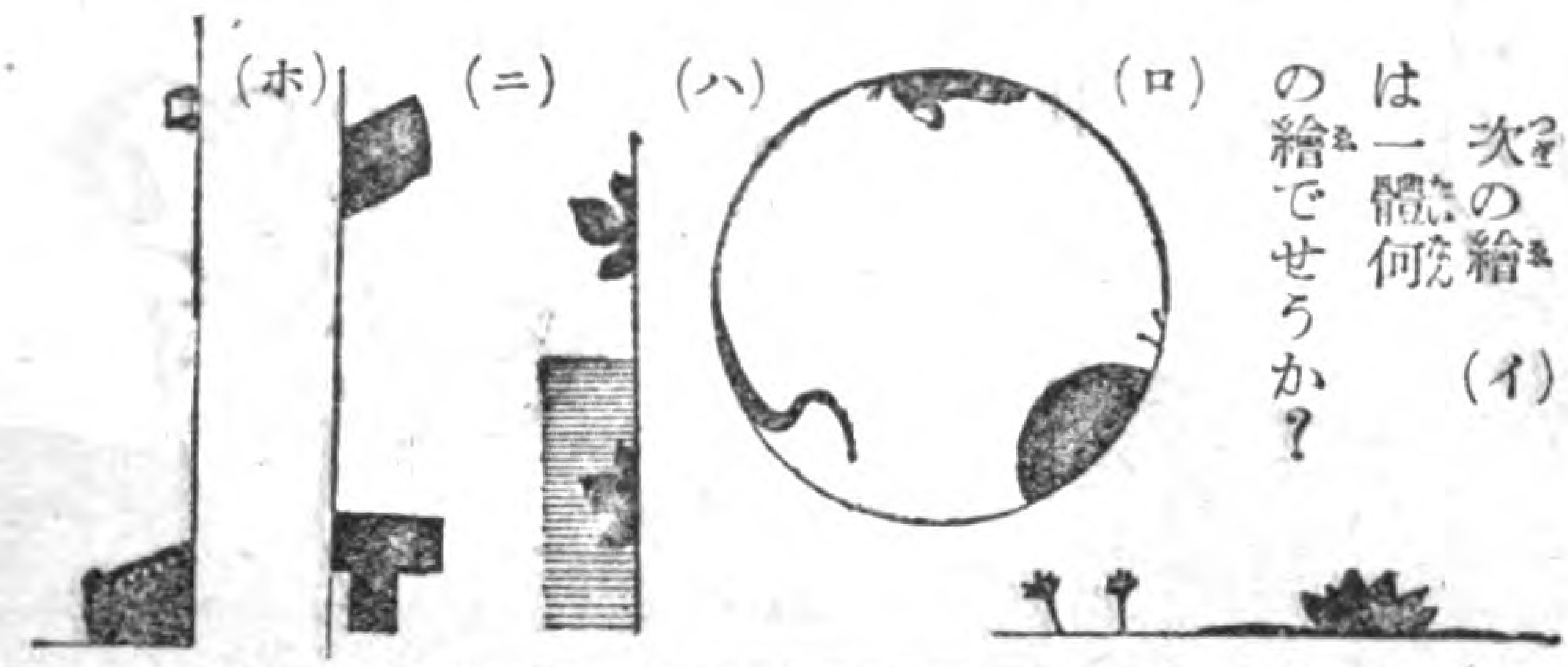

6
『あつ、またやられた』
7
『かうして居れば大丈夫だ』
8
『ア、アーッ』
へ
9
『これはこまつた、裸ぢや帰られぬ』
10
『この関所がうまくこせりや占めたもんだ』
『ブルブル』
『アレ、あんたつたら、まあ！』

新案智慧くらべ

萬人熱狂

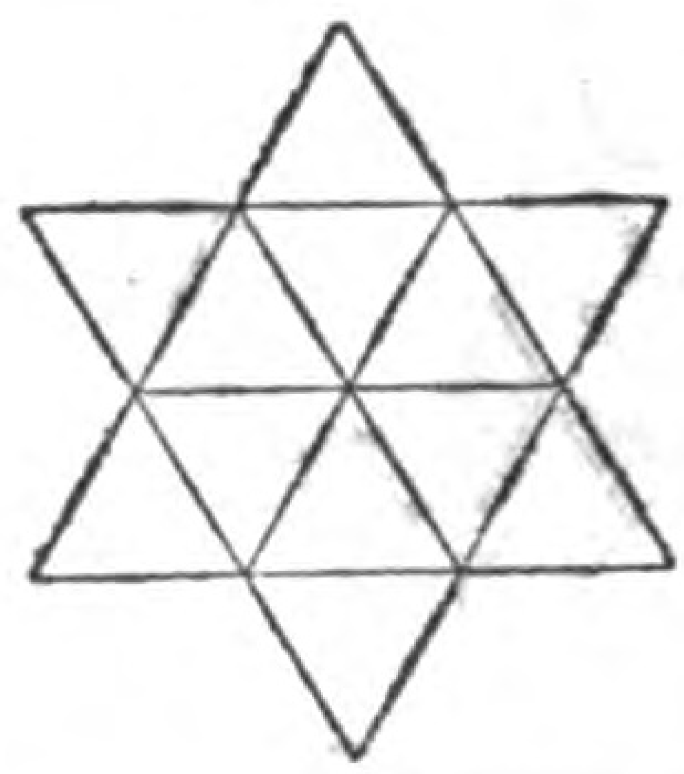
(一) はて不思議

次の繪(イ)は一體何の繪でせうか？



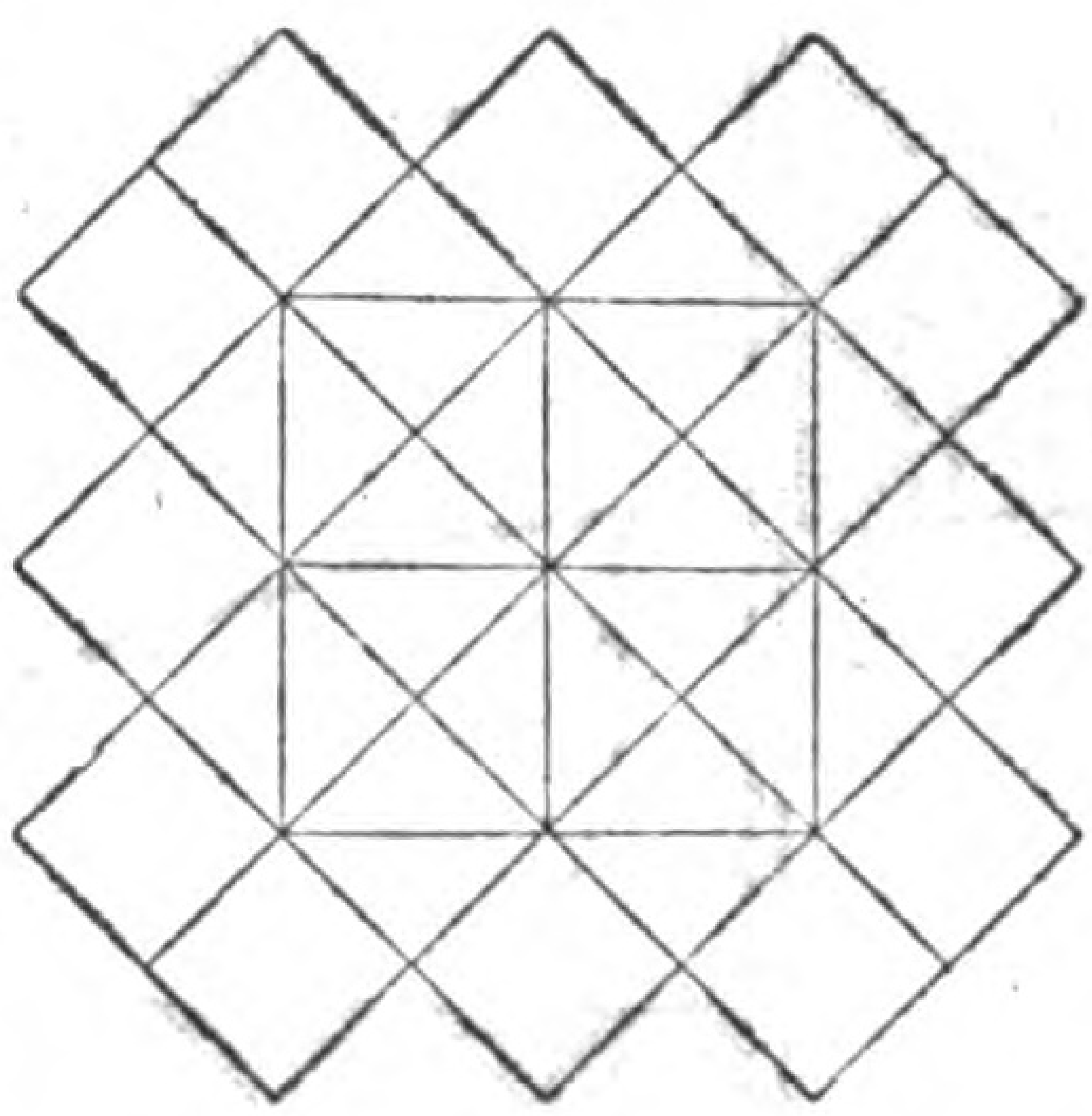
(二) 三角形の數

左の圖の中に三角形が大小合計幾つありますか？



(三) 正方形の數

左の圖の中には隨分正方形が澤山ある樣ですが一體幾つあるでせうか、二十や三十ではありませんよ。



(四) 考へ物

(1) 遠江の國と石見の國とは何れが兄で何れが弟でせうか？

(2) 日本に骨なしの國がありますか？

(3) 一日に二つあつて、一年に一つしかないものは何ですか？

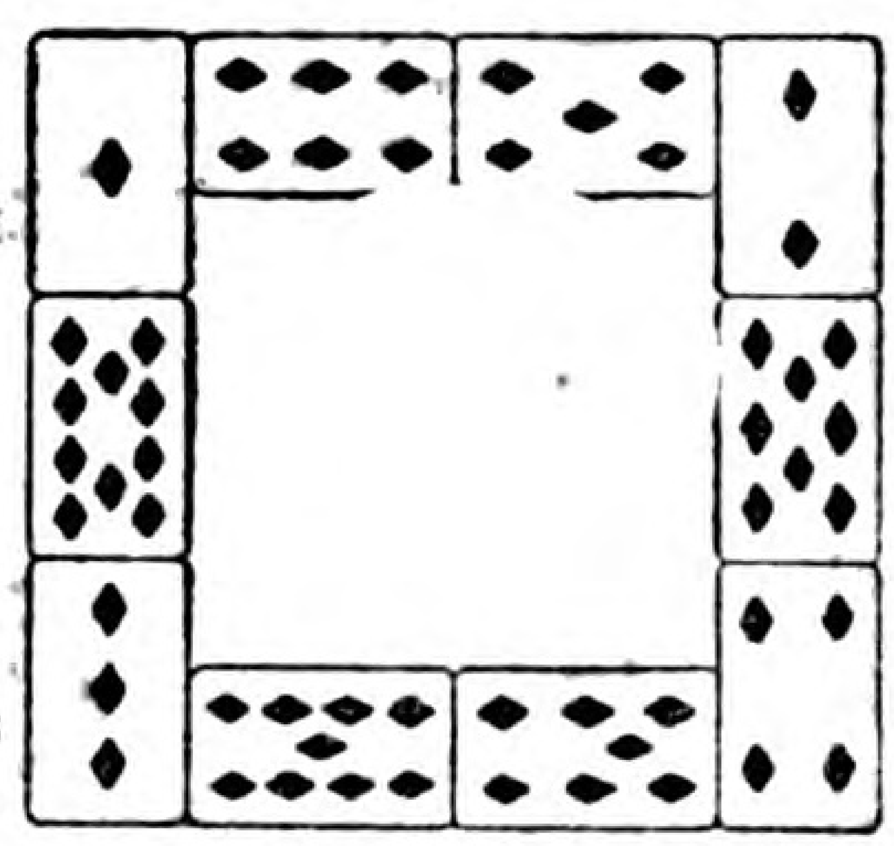
(4) 日本でなければ役立たず、歳は十二。ハテ私の正體は？

(5) 重くなれば重くなる程、上へあがるものは何ですか？

(6) 毛のないおばけ何あに？

(五) 四邊同形

一組のトランプの中からダイヤモンド(何でもよろしい)のエイスから十迄を拔いて下さい。それを圖の如く並べます。數へて御覽なさい。上、左右の三方とも十四となつて居りますが下の列だけは二十三となつてをります。之を並べ替へて四列とも同數になる樣出來ますか。



(六) 生れた月日

甲『君の生れた月と日とを當てて見ようかね?』

乙『當て見給へ。』



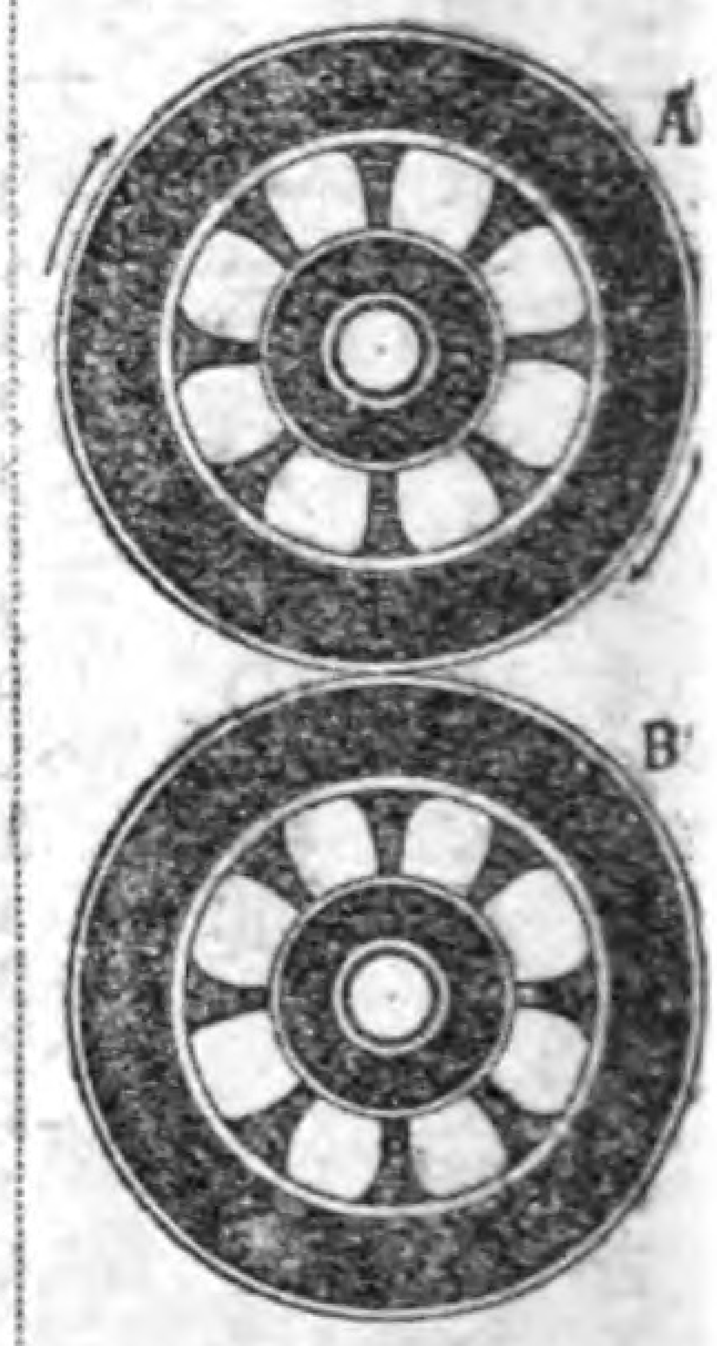
甲『では君の生れた日を胸の中で二倍し、其に五を加へて五十倍し、其に生れた月を加へて呉れ給へ。』

乙『一四六一となつたよ。』

甲『それでは君は十一月十二日生れだらう。』乙『ン、當つたよ。』

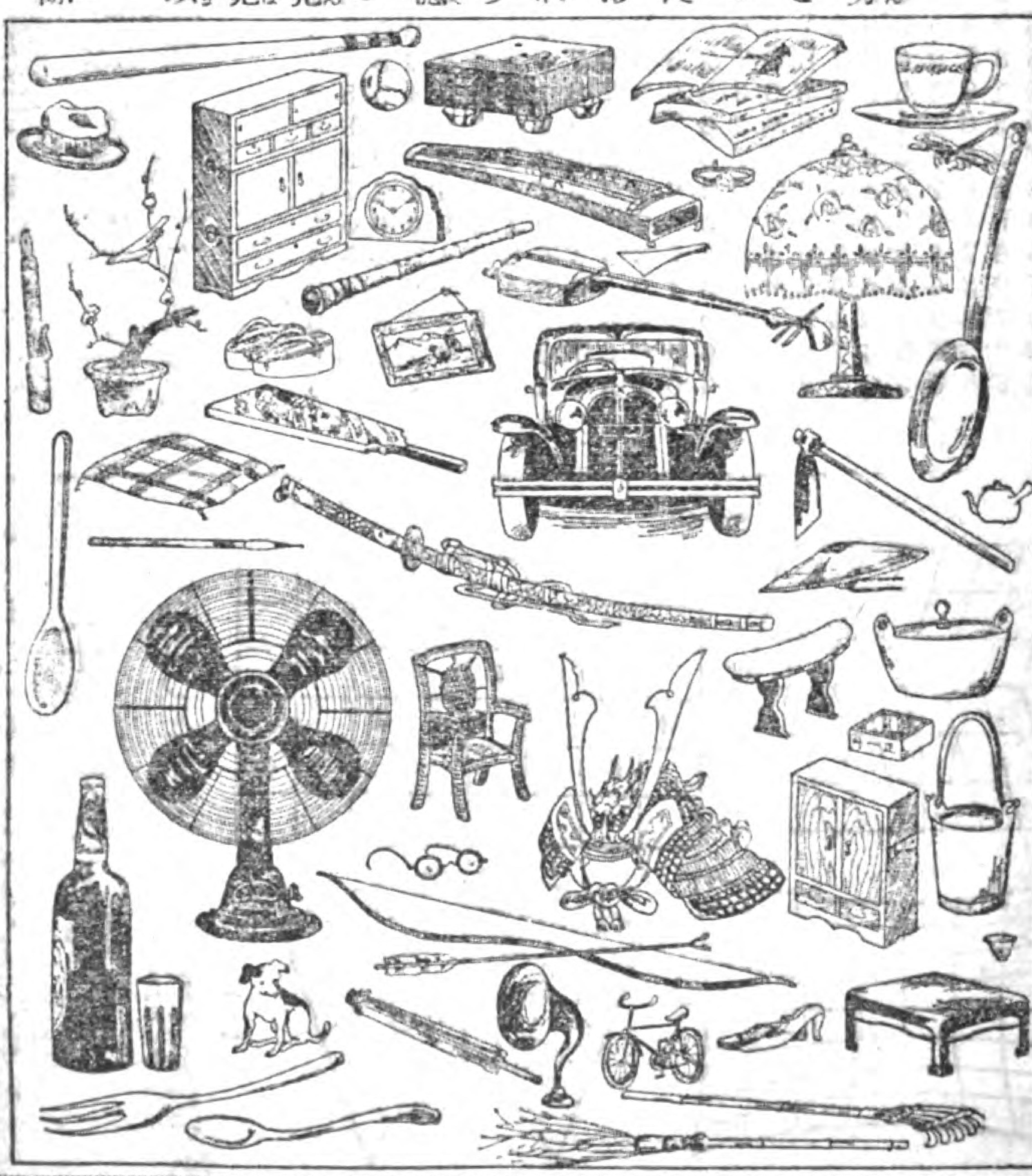
(七) 二個の車輪

同じ形の車輪ですがBは固定して動きません。AがBの周圍を一周回する間に、A自身は何遍廻轉するでせうか?



(八) 記憶力の檢査

下の圖を二分間だけ見て下さい。そして中の品物を出來るだけ多く覺えてゐて下さい。それから此圖を閉ぢて、貴方が記憶してゐる品物の名を書いて御覧なさい。多く覺えてゐる人程頭の良い人です。全部出來たら餘程頭の良い人。



(九) 或る數

2、3、4、5又は6で割ると1が殘り7で割ると割り切れる數の中で一番少い數は幾つでせうか?

(之を三分間以内に答へて下さい)

(十) 切り紙遊び



圖の樣に、幅一寸長さ八寸ある厚紙を點通りに切り離して、四枚の正方形と八枚の三角形を作り、これを寄せ集めて一つの大きな正方形を作るには、どう並べたらよいでせうか？

(十一) 珍物

『僕が見た事の無い物、貴方も見た事のない物、そして二人が今此所で見たが最後、再び誰も見る事の出來ない物を見せませうか。』とお友達に云つて御覽なさい。屹度驚くでせうから、所が種を明せば極簡單で……



(十二) 數字テスト

次の數字の中二つで合計九になるものだけを殘らず括弧して下さい。但し三分間以內。

	8	7	9	1	5	(6	3)	7	8	2	(6	3)	5	3	7	3	(8	1)	6	4	0	(8	1)
A	3	5	7	2	0	5	3	4	5	2	6	0	9	1	5	0	7	2	6	5	9	0	5
B	7	2	0	4	5	6	3	3	2	5	3	8	1	2	6	7	1	0	9	1	3	5	6
C	2	6	4	7	8	9	1	3	6	2	5	7	2	1	0	8	2	3	6	5	3	2	1
D	7	6	5	3	4	6	5	4	3	6	7	8	9	0	3	6	7	4	4	6	7	6	2
E	7	2	8	5	4	3	2	1	8	7	6	3	2	8	5	8	4	4	6	5	4	3	2
F	6	2	1	5	5	6	2	7	8	9	0	3	8	3	6	4	7	2	8	0	3	7	5
G	5	3	7	9	6	3	1	8	9	7	2	3	5	6	7	0	9	2	8	3	5	0	7
H	4	1	6	3	5	2	7	9	6	3	5	6	3	7	8	1	9	3	5	4	0	8	2
I	9	3	6	5	4	7	9	8	2	3	6	7	8	2	9	6	4	5	4	7	2	8	9
J	1	5	6	7	3	2	3	8	7	7	6	5	4	3	6	7	2	1	9	3	0	3	2
K	8	2	0	7	9	3	5	6	7	2	9	8	6	3	3	7	6	6	5	4	6	7	6
L	3	5	4	5	9	8	8	7	7	5	3	8	6	4	3	2	1	8	9	0	6	5	3
M	5	6	7	3	8	9	7	6	4	4	6	7	3	5	4	6	8	9	1	3	4	5	6
N	7	9	3	6	4	6	9	7	8	5	3	1	0	6	6	5	4	8	9	2	3	1	0
O	0	7	8	9	1	3	4	5	6	8	9	1	0	8	2	3	4	6	9	0	8	1	0
P	9	2	3	4	5	6	7	8	9	3	6	0	6	6	7	5	3	8	9	1	9	2	3
Q	1	7	8	5	3	6	7	9	2	1	3	6	4	5	3	1	0	8	9	2	1	6	5

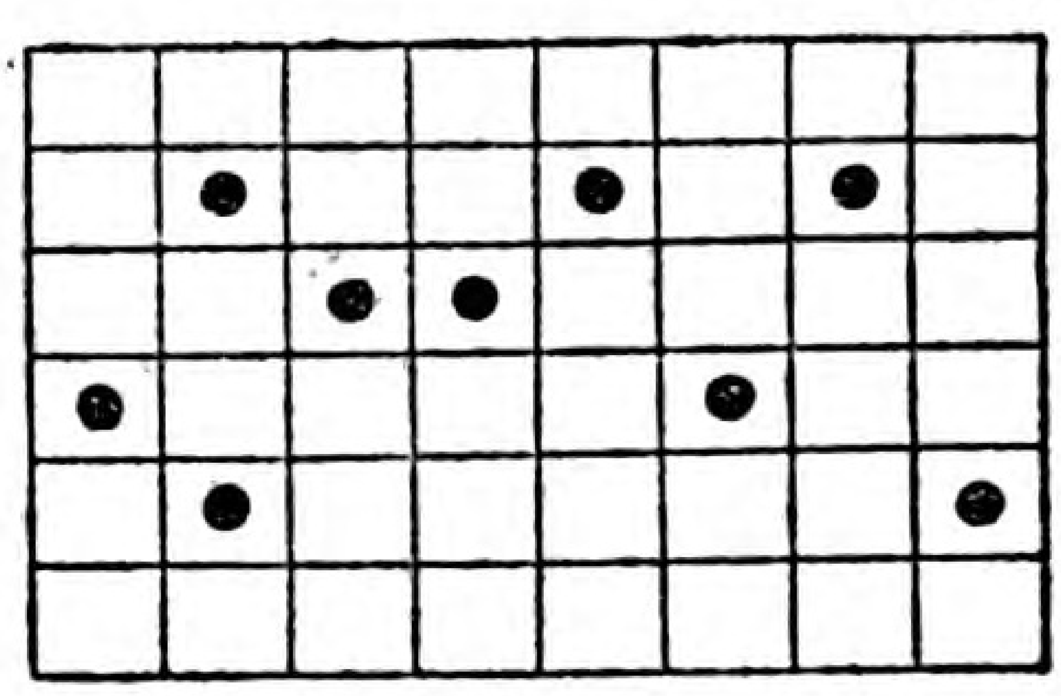
(十三) 六列の國旗

國旗が十本あります。それを五列にならべて立て、どの列も必ず四本宛になるやうにするにはどうしたらよいでせう？

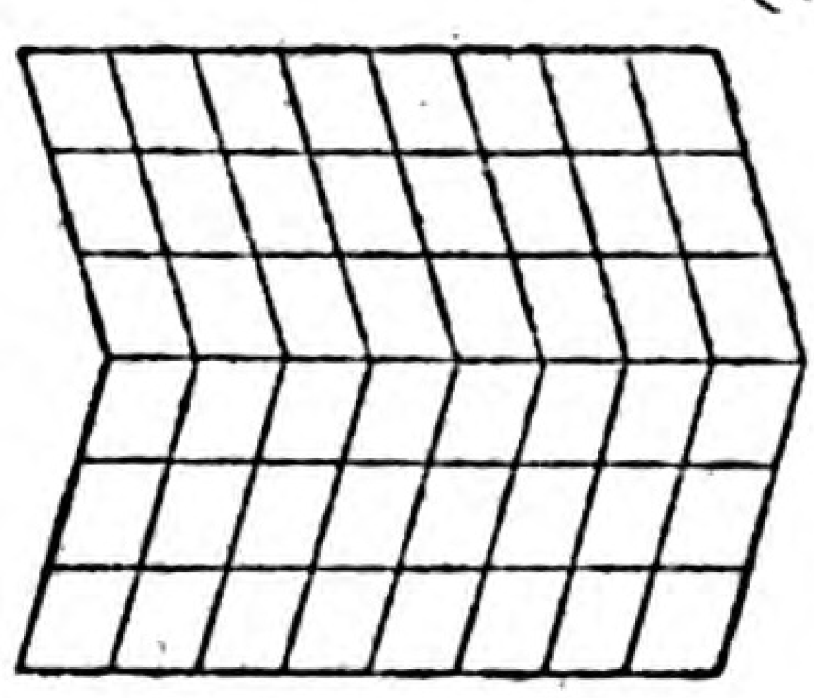
(十四) テストあそび

左の四つとも縱横同じ區劃に分けてあります。上の原圖には十箇の黑點が入れてあります。さて原圖と同じ位置の區劃へ(イ)(ロ)(ハ)とも黑點を入れて見て下さい。原圖を凝乎と一分間見詰めた後、

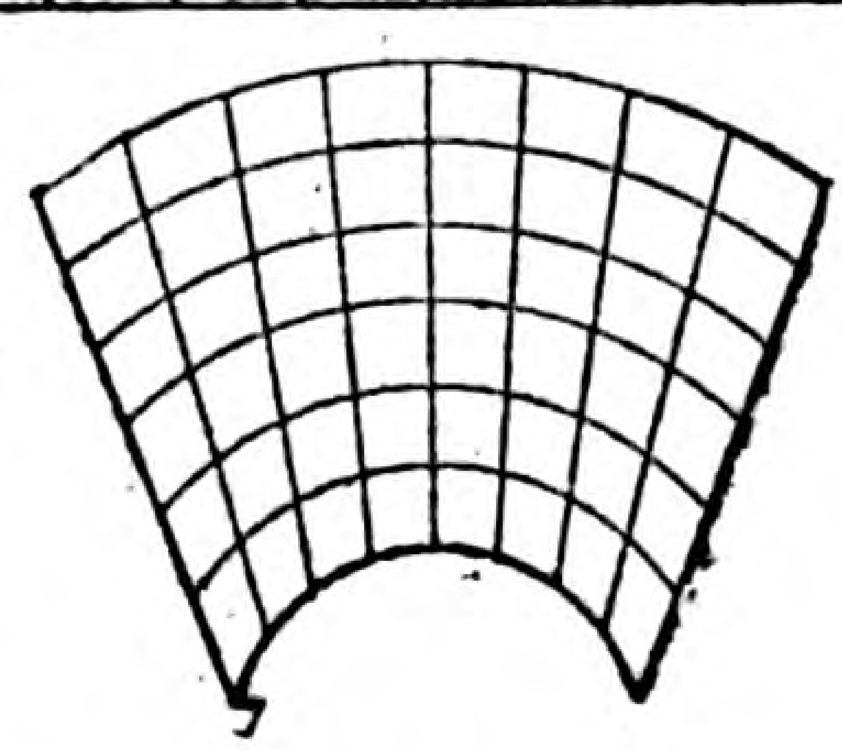
原圖



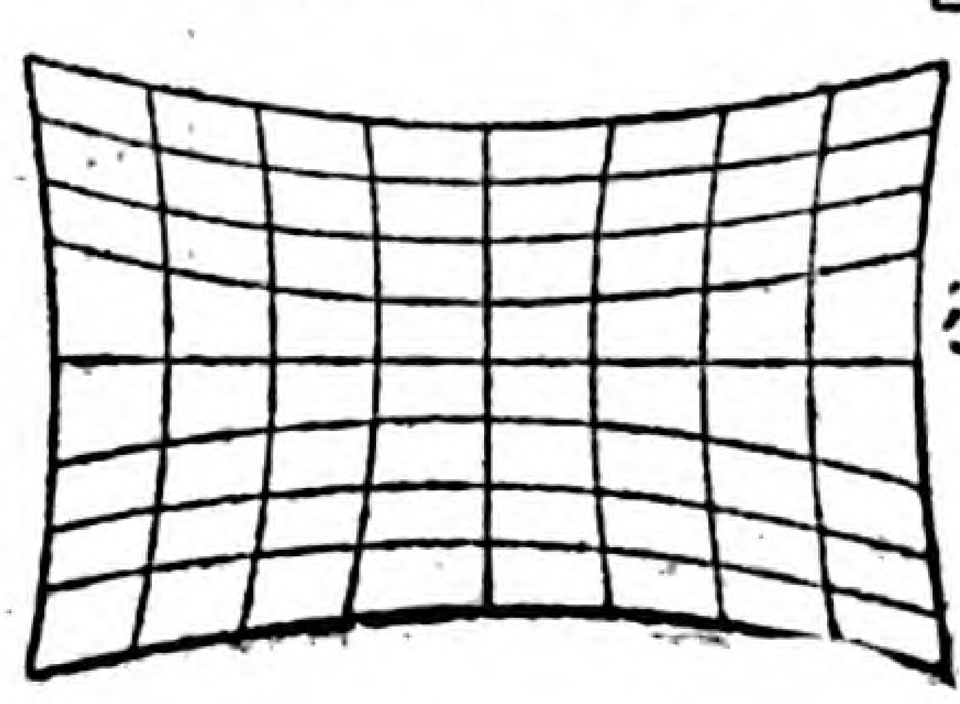
(ロ)



(イ)



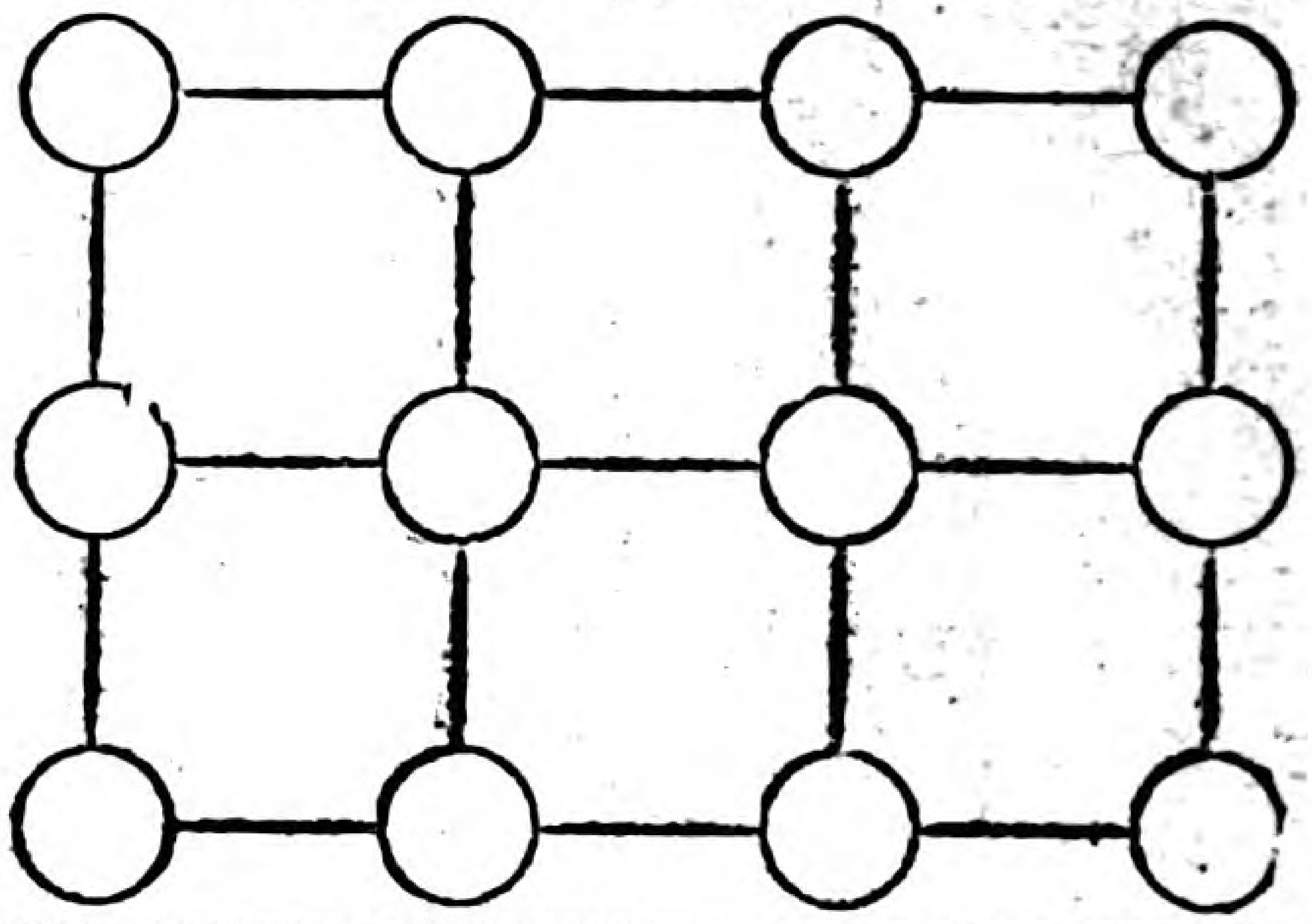
(ハ)



同じく各圖へ一分間で間違はず黒點を入れられたら餘程頭腦の良い人です。

（十五）三つの正方形

十二個の碁石を、圖の樣に並べて六つの正方形を作ります。出來たら、この中から三個の碁石を取り除いて、三つの正方形を殘すには、どうしたらよいでせうか？　但しその三つの正方形は同じ廣さでないといけません。



（十六）繩拔け

『御用!!　御用!!』忽ちにして起る劍戟の響！　大亂鬪、大修羅場、遂に捕はれた勤王

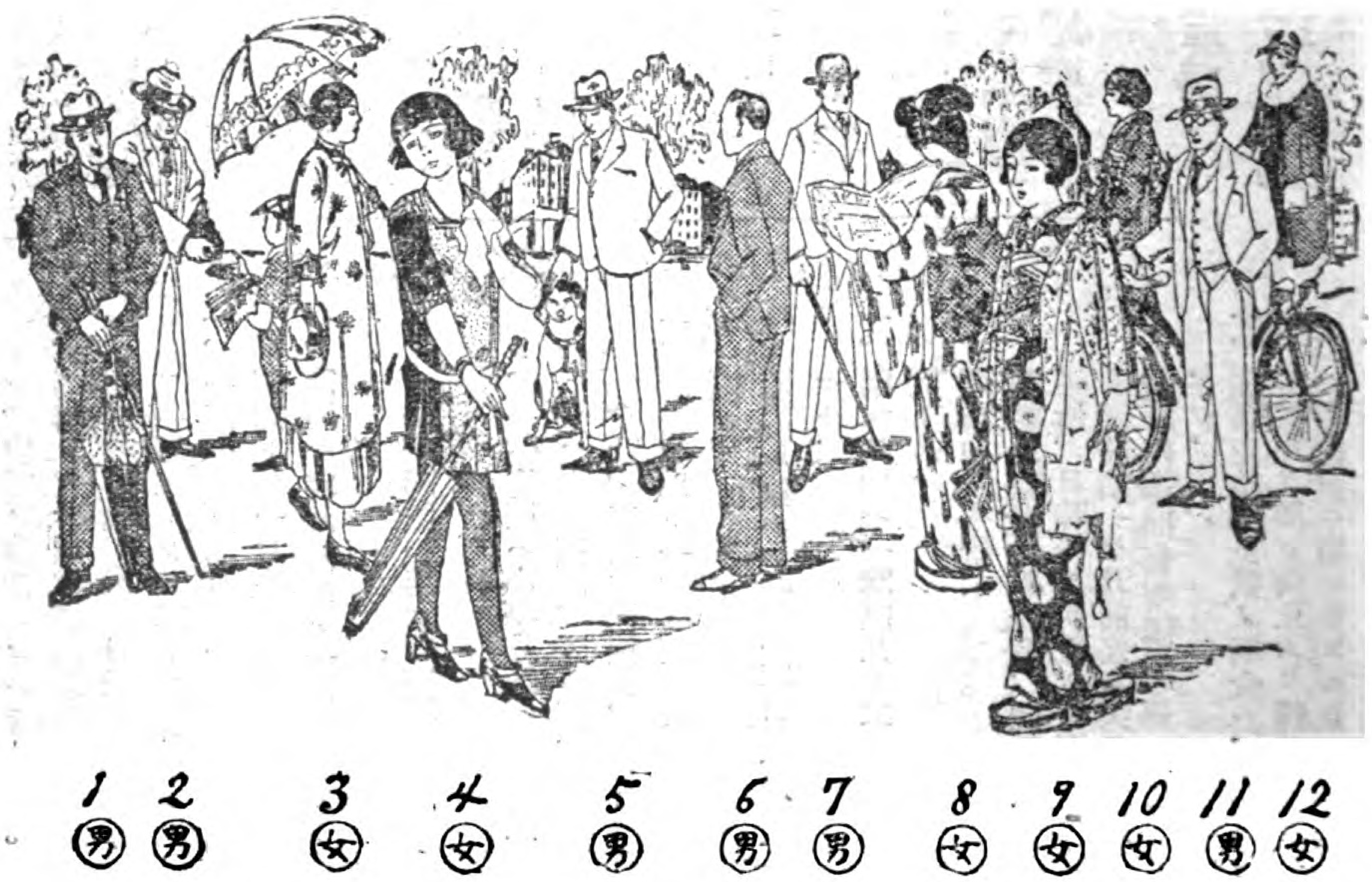


の士志二人、哀れ捕り力の爲に圖の樣に二人一緒に手首を結ばれて了ひました。だが流石は頭の働く武士達だけあつて、何時の間にか二人は別々になつて油斷を見すまして右と左に美事逃げ去つて了ひました。ハテどうして二人が別々になる事が出來たのでせうか？　勿論紐を切つたり、結び目を解く事は出來ません。

（十七）妻定め

下圖の中には六人の男と六人の女がゐます。十二人の男女は六組の夫婦なのです。何番と何番とが夫婦でせうか？

本欄解答は三六三頁にあり



大日本雄辯會講談社ニュース

武道獎勵金

全國男子師範學校へ寄贈

日本をよくするには第二の國民をよくすることが根本で、第二の國民をよくするには先づ教育家によくなつて貰はねばなりませぬ。一般は教育家をもつと尊敬するやうにしたい、同時に教育家にはいよ〳〵立派になつて貰ふやうにしたい。

よい教育家、そこにはいろ〳〵の條件がありませうが、就中、日本精神を十分にもつ教育者をと世間は要望して居ります。それが爲には武道と云ふやうなものを師範學校に盛にすることが必要であるやうに考へられます。

そこで、先年極めて少額ではありましたが武道奬勵の目的で全國の師範學校に對し金員を贈りましたが、更に、本年宮中に於いて天覽試合を擧行せられ、其の後全日本に亙り津々浦々まで武道が盛になり、洵に喜ぶべきことで、此の機會に一層その熱度を高むる一助ともならばと考へ、之亦誠に輕少で御恥かしい次第ではありますが、武道奬勵の一端にあててもらふ爲に、全國男子師範學校に對し金一封づつを六月廿八日御贈りいたしました。既に中等學校には正科として武道を授けつつあり、何れ小學校にもさ樣のことになるでせう、さうすると、將來之等を指導する師範學校生徒諸君の任務はいよ〳〵重いわけで、此の際十分に御努力を願ひたいと云ふ希望に外ならぬのであります。

修養講座愈〻開始

九月中旬東北地方より

先月豫告して置きました修養講座は、愈〻準備成り、來る九月中旬から開始することに致しました。玆に開催要項を御紹介いたします。何れ、其の地方々々毎に御案内を差上げる筈ではありますが、豫め御含み置き下されば幸甚に存じます。

巡回「修養講座」開催要項

一、本講座ハ思想善導人格修養ヲ以テ目的トス。

一、本講座ハ大日本雄辯會講談社之ヲ主催シ、府縣ノ後援ニヨルモノトス。

一、講師トシテ川村理助先生ヲ煩ス。

一、開講ハ各地方毎ニ日程ヲ定メ、各府縣ヲ一單位トシテ之ヲ行フ。

一、一府縣ノ開講日數ハ凡ソ一週間乃至二週間トシ一日一講座トス。

一、講座ハ學校講座ト一般講座トノ二種トス。

1、學校講座ハ男女中等學校以上ノ生徒職員。

2、一般講座ハ小學校教員。府縣官公職員。教育團體、青年團、處女會員、會社、工場、商店員、其他。

一、學校講座ト一般講座トハ各別ニ之ヲ開ク。

一、聽講員數ハ一講座二百人以上タルコト。

一、講演時間ハ一講座凡ソ二時間乃至四時間トス。

一、開講申込手續、

開講希望者ハ學校名、團隊名、員數、場所、日時等ヲ明記セル開講申込書ヲ講座開始一ケ月前迄ニ大日本雄辯會講談社内巡回修養講座係ニ送附セラルベシ。

一、開講申込者多數ノ場合ハ、場所、日時等變更ヲ願ヒ尙止ムヲ得ザル時ハ開講ノ御希望ニ副ヒ兼ヌルコトアルベシ。

一、聽講ハ一切無料トス。

一、講師並ニ講演ニ關スル一切ノ費用ハ主催者大日本雄辯會講談社ニ於テ之ヲ負擔ス。

一、會場ノ準備及ビ聽講者ノ召集ハ一切開講希望者ニ之ヲ依頼ス。　以上

因に、豫て巡回中の、久留島武彦先生を講師とする「雄辯法講座」は、六月より七月にかけ、山陽山陰道を講了、八月は講師の都合により休講、九月は北陸方面を講習の筈ですが、到る處愈々熱烈の歡迎振りにて、各地から多數の申込に對し、日程の差繰にも非常な困難を感ずるの盛況です。

本社の新規事業

この次は何をやる？

昨秋、本社が、御大典記念七大事業の一として發表致しました、修養講談二大全集、既報の如く、每號々々非常な歡迎をうけ、今以つて新規申込が絶えず、然し之は初めのお約束もあり、お氣の毒ながら全部お斷り致して居りますが、いよいよ此の九月を以つて大盛況裡に全十二卷の配本完了いたしますに就いては、是非更に續卷を出すやうにとか、再募集をするやうにとか、或はあの調子で他の新全集を出すやうにとか、熱烈の御要望が每日每日山のやうで、いつも乍ら各位の御厚情一同感激に堪へざる次第であります。

續卷を出すとか、再募集とかいふことは、最初の公約もあり、斷念を願ふより外ありませんが、新規事業については、社内企畫部に於て既に數々の成案があり、段々に實行、諸賢の御滿足を頂く筈であります。

さしづめ、來月號にその一つを發表いたします。これ必ず滿天下の大歡迎請合のもの、刮目してお待ち下さい。

小說『母』大賣行

鶴見祐輔先生の小說『母』は發賣以來、重版につき七月十日までに早くも四十五版に達しました。眞に日本をよくする小說だと大變な評判です。まだ御覽にならぬ方はお早く！定價二圓送料十四錢、全國書店にあります。



懸賞つき美人寫眞大募集（誰方も奮つてお寄せ下さい）

一、寫眞、半身又は七分身、なるべくハッキリ寫つたもの、（必ず御本人の承諾を得て下さい）

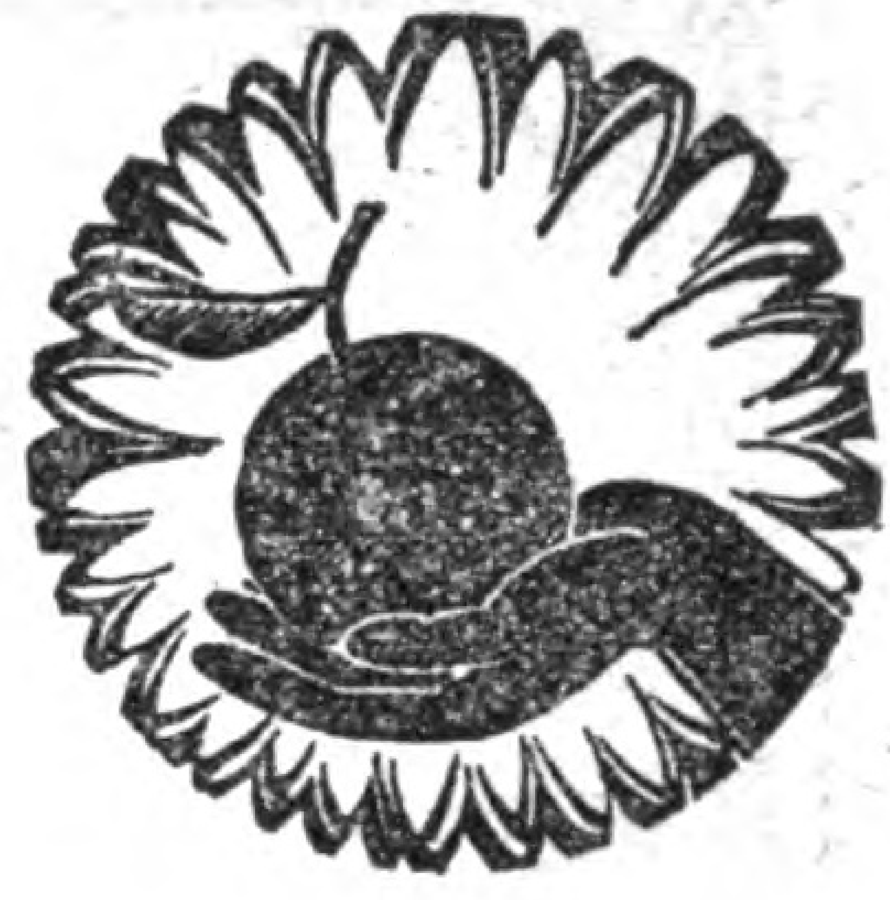
一、住所、寫眞の裏に御本人の住所氏名、身分、職業、出身校、並に應募者の住所氏名を明記して下さい。

一、締切、九月五日、締切後到着の分は翌月にまはします。

一、謝禮、應募寫眞の誌上掲載の分には金拾圓以上贈呈いたします。

一、返送、を要するものは、その旨を書添へ返送用切手を御同封願ひます。

一、宛名、大日本雄辯會講談社・婦人倶樂部美人寫眞係



月給物語

エフイセンシー協會々長 池田藤四郎

年俸一弗の奉公振り

如何に萬事大がかりのアメリカ政府でも、世界戰爭當時は場合が場合ゆゑ、政府の役人だけでは、仕事に手が廻りかねた。そこで大統領ウヰルソンは、民間の圖拔けた頭腦の所有者を、動員する事に思ひついた。動員するといつても、無理やりに御用を命じたのではない。それは各人の愛國心に訴へて、一事一業に成功したその手腕を、戰爭事業に應用して貰ひたかつたのだ。

大統領の請ひに應じ、自ら進んで首都ワシントン市へ集まつて來た各方面の旗頭は、尠からぬ數に達した。態々苦勞を求めるため、彼等は慾得をはなれて、政府の御用に馳せ參じたのだ。如何に臨時の御用であつても、無給で人を使ふ事は、法律規則がそれを許さない。たとへ如何なる少額でも、給料は必ず支拂はねばならないのだ。

と云つて、召に應じて集まつた數百名の棟梁株は、誰も彼も、年收數萬弗以上數百萬弗の、金に不自由せぬ人々ばかりであるから、それに相應する俸給を支出する事は、如何に金まはりのいゝアメリカ政府でも、一寸出來ない相談だ。

一方棟梁株は、言ふまでもなく、誰一人として金錢の報酬を目あてに集まつて來たのではない。彼等の中で、無報酬義務奉公を主張せぬ者は、一名もなかつたのだ。政府は俸給を拂はうと主張し、御歷々はそれを御免蒙ると云ふし、どうにも妙な事になつて了つた。

其處で双方の顔が立つやうに、年俸一弗制なるものが生れたのだ。かうすれば、政府の面目も立ち、棟梁株の奉公も金の爲ではないと判る。彼等は甲乙なく同じ一弗の年俸を受けて、六ケ月勤めたものもあり、中には一ケ年半もワシントン通ひをし

た名士もある。政府は一々相違なく一同へ一弗の小切手を渡した。

さて愈ゝ戰爭が濟んでから、その決濟に取りかゝつて見ると、政府の發行した一弗の小切手は、誰一人それを現金と引替へたものがない。彼等は、それを一弗の小切手とは見て居なかつた。受取人の棟梁株は、その小切手をソツクリその儘、立派な額緣に入れて、それを家寶扱ひにして居た。富豪の邸宅を訪問すると、その客室の上座に掲げてある一弗の小切手が、誠に能く人の目につく。位記勳等の無い國家では、これが何よりの勳章でもあり、家門の譽でもある。一弗の小切手は、かうして金錢に代へ難い寶物と認められる樣になつた。

世界一の安給料は、世界一の持囃されものとなつた。戰後アメリカ政府が、始めて歳出入の豫算を編成することになつた際、民間の名士十二名は、戰時の奉公に倣つて、年俸一弗の顧問役を引受け、從來豫算の無かつたアメリカに、建國第一回の豫算編成を手傳うて、國民の感謝を受けた。謂ゆるダラー・エ・イヤー・マン Dollar-a-year-Man 即ち『年俸一弗級の人物』は、今後も非常時に際して、續々現はれることであらう。



これを思ふにつけ、僅かの名義をダシに使つて、政府のフトコロを絞つて居る人が、萬一にもドコかにあるとすれば、全くその氣が知れないと言ひたい。ヤレ親任待遇の何々委員、ズツと下つては、ソレ何々審議會、何々調査會の委員と云つた具合に、何ともつかぬ人々が、何ともつかぬ問題を、義理一片にひねくり廻して、それ〴〵の御手當報酬を一切辭退せぬとあつては、何となく淺ましく思はれて、國の末が案じやられる。金權萬能と云はれるアメリカでさへ、萬事金錢づくでは、通りがわるい。然るに潔癖無類、金錢を眼中におかぬ國柄の諸君子は、義務奉公を仰せつかつても、血まなこになつて、當然辭退すべき金の分け前に、我勝ちの爭ひを見せて居る。調査會なるものの仕事が、いづれを見ても、一向捗取つて居ないのは、要するに金の祟りだと斷言して、少しも差支ない。

給料だけの仕事とは……

どうもサラリーマンの大多數は、待遇と云ふ體裁のいゝ文字に隱れて、無闇に月給の多い少いのを氣にして居る樣だ。會社の待遇がいゝと云ふ言葉を飜譯すると、月給の額が多いといふ意味だから驚く。學校出の多數は、能くそれを口にしたがる。最初は御仕着せ格で、出身校に應じ、それ〴〵一定の給料にありつくのだが、一二年たつと彼等は必ずブツ〴〵言ひ出すやうだ。仕事を覺えるといふ氣持を全く忘れて、唯モウ明けても暮れても、サラリーの上り下りが氣になつて仕樣がない。世智辛い世の中だから、それも強ち無理ではないとして、扨て聞捨てにならぬのは、よく誰でも『僕は月給以上の仕事をして居る』といふ、愚痴とも己惚れともつかぬ迷ひ言だ。



一體月給以上の仕事とか、月給以下の仕事とか云へる筈はないのだ。成程仕事の報酬は月給でもあらうが單にそれだけではない。それよりも更に大きな報酬がある筈だ。それは『進むべき機會』だ。片假名でつゞれば、オポチユニテイだ。如何なる役向も、悉く『機會』を與へて居る。目先の金錢のみを問題にしては宜しくない。金錢を云々するのは、愈々進むだけ進みきつて登るだけ登り詰めた場合にのみ、許される。此處にかういふ插話がある。—これを一ツ考へて頂きたい。

それは十四五年前の話、その頃アメリカのニユウヨーク・セントラル鐵道會社の社長にスミスと云ふ人が居つた。スミスは大會社の社長に相應はしく巨額の年俸を取つて居た。社長の上には、その頭を押へる取締役會長と云ふのがあつて、社長よりも通例多額の年俸を取つて居るが、スミスは鐵道會社の社長格としての最高給、九萬二千五百八十弗の年俸を受けて居た。拾萬弗に手の屆かうといふ巨額の年俸を受取るくらゐの器量人は、決して給料だけの仕事をすればいゝなどとは云はなかつた。彼はその俸給とは比較にならぬ程の大金を、會社の爲に儲けたのだ。

その時は丁度、世界戰爭の始め頃で、物價は止め度なく騰貴した。大勢の人々は、戰爭が到底長引かぬものと見て、今に物價は必ず下落するに相違ないと、新規の買物を手控へて居た。

　スミスは、別に考ふるところがあつて、七百三十四臺の機關車と、四萬三千輛の客車貨車等、合はせて八千五百萬弗近き新註文を出した。戰爭は依然として長引いた。アメリカ全國を通じ、各鐵道は、戰時品の輸送で目の廻る程忙がしくなつて來た。豫てスミスの註文した新機關車、新客車貨車は、全部出來上つて、忙がしい眞つ最中の間に合つた。會社はこれによつて巨利を占めた。その方の利益勘定は兎に角別として、若しもスミスが註文の時期を誤まつたならば、その後の物價騰貴によつて、同一の註文品に對して、會社は恐らく一億弗以上餘分の支拂を餘儀なくせられた筈だ。十萬弗足らずのサラリーを取つて居た社長スミスは、誰の目にも見えるこの一口だけですら、年俸の千倍に當る利益を會社に與へた。

　戰後、スミスは、時の相場で、先物渡しのレールを、十七萬噸註文した。戰時中、無理をして使つたレールを取替へるために、この註文を出したものだ。この十七萬噸を引取つた頃には、その相場が一噸當り十弗騰貴して居た。スミスは、その年俸の十七倍に相當する百七十萬弗の利益を、斯うして會社に與へたのだ。引續いて又々、機關車、客車、貨車を五千萬弗分註文した。この時も註文後の相場が急に騰つて、會社は三割以上の利得をした。社長スミスの先見の明によつて、その頃の株主十二萬人は、意外の配當にありつき、從業員一同も、殆ど信ぜられぬ多額の賞與金を手にする事が出來た。



　元よりスミスの働きは、之を以つて其の全部を語つたものではない。此所にはホンの二三の例を擧げたに過ぎぬ。僅かにこの三口だけを計算しても、會社は一億二千五百萬弗餘の利益を受けた譯だ。會社はスミスの見込違ひによつて、損を受けたことが一度もなかつた。

建築技師や設計者などは、仕事の一割を報酬と見て居る。五百萬圓の仕様書設計書を作成した場合には、五十萬圓の報酬を受けるのが通例だ。同じ振り合で、ニユウヨーク・セントラル



鐵道會社が、社長スミスへ報酬を支拂ふものとすれば、以上三口の利得金に對して、その年俸千五百九十九ケ年分を支拂ふべき筋合ではないか。若しも月給を唯一のモノサシとすれば、スミスは千五百九十九人力を現はしたことになる。能く五人力、十人力などと言ふが、斯う云ふ實例に較べると、遙に桁違ひだ。社長スミスは、決して縁故情實によつて、社長に選ばれたものではない。彼はメッセンジャ・ボーイから身を起したのだ。メッセンジャ・ボーイと云へば、使ひ走りの小僧さんだ。彼は大した教育も、身分もない小僧さんに過ぎなかつたのだ。

鐵道會社の社長ばかりではない。下廻りの月給取などに就て見るも、自分の月給と、自分の仕事が生む利益とを對照して、かれこれ愚痴を述べるものは、進歩發達を望んで居るアメリカの青年中に、餘り見受けぬやうだ。

給料と働きの釣合を見る方法

尤も近來では、そう云ふ意味合ひからではなく、アメリカの雇主側は、精神療法を應用して、雇人のサラリーと、その働き振りとを一致せしめようと試みて居る。アメリカで二番目、ニユウヨーク市で最大の百貨店メーシー會社は、一萬人以上の店員を使つて居るが、この百貨店では、先年精神療法の大家アンダソン博士を招聘して、その部下に多數の精神醫學者、心理學者などを置き、店員の精神狀態を油斷なく調査監督して居る。その主旨は、精神醫學の立場から、全く不向きの雇人を除き、適材適所の理想を實現せんといふにある。

目下各種の實驗を試みて居るが、結局、店員の任免、異動進級等を、精神醫學的の個人調査を基礎として、實行する事に決定した模樣だ。

お花さんと云ふ女店員は、長年店に務めて居て、誰が見ても相當役に立つ店員と認められてゐたものだ。彼女は店内の事情によく通じて居た。商品にも明るいし、何かにつけて先づ上等の店員と思はれたものだ。今少しく奮發心さへあれば、まこと

に申し分がなかつたのだ。ところが賣上げの成績を調べて見ると、どうも思はしくない。謂ゆる月給だけの仕事はして居ないといふ事が判つた。以前ならば恐らく雇を解かれたことであらう。今日ではそういふ手荒な事をせずに、一と先づ精神治療部へ送られて、アンダソン博士の治療を受ける。博士はお花さんを相手にして、熱心に長話をする。この話が一應濟むと、お花さんの地金がハッキリして來る。次いでメンタル・テスト、體格檢査、智能テスト、人格研究等が行はれ、お花さんは色々のテストが示す成績よりも、遙かに目はしのきく人物と生れ變つて來る。テストと對談とによつて、從來睡つて居た本人の強味が、目醒めて來たのだ。お花さんの擧止動作は際立つて敏活になつて來た。すべての判斷も正しくなつて來て、單に物の表面を見ずに、その內容を突き止めるといつた性質も現はれてきた。

一體お花さんの缺點は、自分の美しさを誇る氣味があつたことだ。賣場で品物を客に賣ることよりも、自分の美貌を賣ることに、一層精を出してゐたやうだ。さうかと思へば、又一面內氣なところもあつて、妙にはにかんだり、他人行儀な點もあつた。無論行儀作法に批難はなかつたのだが、何となく人に接して餘所々々しいところもあつた。身體にも多少の異狀があつたやうだ。そこで精神治療部の手にかゝつてから、先づ身體の故障を取除き、引續いて精神療法を試みるといふ段取になるのだ。お花さんは、實家及び親戚の人々と離れて、只一人下宿住ひをして居たから、成るべくメーシー百貨店內に設けてある店員同士の社交團に加はり、懇親會やら、親睦會などに、顏を出すやうに促がされた。斯うして心おきなく人と交ることを勸められて、その通りを實行した。不成績の原因が何であるかを知つてから、お花さんは自分でそれを矯正するに就ての心得を、神妙に守つた。斯うして手を盡した結果、お花さんの成績は、從來一週間平均百六十三弗の賣上げに過ぎなかつたものが、五百五十三弗に增し、十ケ月後には、同じ賣場中でも最高成績を示すやうになつた。



このお花さんの例にも示す通り、メーシー百貨店では、店員が果して給料相當の成績を擧げて居るか否やを吟味する。若し

も成績が著しく良ければ、給料もそれに伴れて増してやる。その反對に、給料だけの成績を擧げ得ないとすれば、その理由を突き止めて缺點を正し、少くとも、給料だけの稼ぎをするやうに適當な手配をして呉れる。『オレは月給以上働いて居る、僕は今日一日だけでも月給分は稼いだよ』などと、一人よがりの獨善者も、斯うした學問のモノサシで、一々きめつけられては一言もない。

アメリカ人は、日本人と同じく、月給の多いのを喜ぶ。けれども、これのみを當にしては居らぬやうだ。今の大統領フーヴァは、曾て二十萬弗の年俸で、某大會社の重役會長に招かれたのだが、彼はそれを少しも喜ばず、年俸僅か一萬弗の商務長官に居据る方が、遙に上分別だと決心した。金が萬事だと思はぬ處に、人物の大小がうかゞはれる。之について面白い實例を記して見よう。

金錢よりも理想

ダートマウス大學のウエルマン教授は、曾て年收一萬五千弗の會社重役であつた。九年前教授はアメリカのボストン市に於ける、一大製菓會社の副社長として、隨分世間からは手腕家と認められたものだ。元々一廉の實業家に出世するのを目的として、ながい間、迚も耐へられぬ苦學を續けて、ダートマウス大學を卒業したのだ。彼は權助、子守り、賄方の手傳ひなどを、次から次へと勤めて、首尾克く學校を卒業した。段々實業界の樣子を見ると、エライ富豪になつたところで、結局これは一個人の榮達に過ぎないのだから、それよりもいつそ、萬人の榮達を助ける方が有意義だと考へ、ウエルマン君は一萬五千弗の年所得を未練なく打捨てゝ、母校ダートマウスに年俸三千三百弗の商業經營講座を受持つ事に決心した。

それも相當の年輩に達して、隱居仕事に引受けたのならば格別、未だ三十八歳といふこれから本當に働ける年頃になつて、高給を薄給と取換へてしまつたのだ。

彼に取つては、單に給料の多寡が問題ではなかつたのだ。薄給にせよ、それに幸福と言ふ景物が附いて居れば、ソロバンづくの仕事に關係して、數萬弗の高給を取るよりも、遙に滿足であつたらう。

サラリーの多い少いは、單に受取る正味の金高で決めることは出來ない。サラリーの利用方法が一番大事だ。今日は事業經營を一つの技術と見る樣になつて來た。サラリーマンは、何を措いてもそれを學ぶ事に、身を入れなければならぬ。その技術を習得するために、給料の一部分を充て、幾分でも事業經營術を學び得たならば、給料は死に金とならず、立派に活きて、正味の金額に數倍の働きをする。

茶屋小屋にサラリーを捨てゝ了へば、如何に高給を取つても、つまりは薄給同樣だ。（をはり）

海外珍聞 面白ニュース

◇一哩釣魚料金六萬圓

釣魚は最も高尚なるスポーツであるが、英國では貴族富豪のみが、耽り得る娯樂となつて居る、それは鱒や其他の川魚を釣ることの出來る河川は皆權利がついてあり、其權利を買はねば釣りをすることが出來ない上に、其料金が非常に高いからである、近年の釣魚は益〻流行するので釣魚料金は高くなる一方で、今年の春倫敦附近でトラウトの釣れる川で釣する權利金は



一竿につき五十二磅十志（五百二十五圓）乃至百五〇磅（千五百圓）であつて、アバーディンシャーの鱒の釣れる或川は三四十年前迄は一年の料金が五磅（五十圓）であつたのが、今日では五千磅（五萬圓）に上り、ヒアフォドシャーの同じく鱒の釣れる長さ五哩の川では三萬磅（三十萬圓）が徴集された、即ち一哩の釣魚料金六萬圓に當るのである。然も今年は嚴寒と旱魃の爲め川魚の生育甚だ惡く頗る不漁であつたといふ。

英國の太公望は流石にスポーツの國だけあつて、其釣り方は頗るスポーツの精神にかなつて居る、釣は皆擬餌釣で、彼等は決して蚯蚓のやうな生餌を用ひない、萬一生餌を用ゐる釣師があると、その人はスポーツマンでないといつて排斥される、それから小さな魚は釣れても決して持つて歸らず、川に放してやる、彼等が誇りとするは獲物の數や量でなく、其大さであつて、擬餌釣で巧に騙して一番大きな魚を釣り上ぐるを手柄として居る。昨年の早秋グロスターシャーのチユクスベリーといふ小都會で全英國の釣魚競技會が催されたが、參加した太公望は五百四十名に達した、其時釣り上げた魚は目方を量つた後、悉く元の川へ放流された。かくてこそ釣魚は眞のスポーツである。

◇匿名の篤志家

以前には我國の新聞紙にも『宮中錄事』なる一欄が設けられ、そこに皇室に關する記事が收められてあつた、英國の新聞には今猶ほ此一欄が特設されてあるが、最近その中に皇太子殿下がジョーヂ陛下に代り謁見を仰せつけられた貴紳の名が列擧せられたが、其うちに『オウダックス』と引用符號つきの名が出て居た。これは明かに匿名であるので、前例の無いことゝて、世人の注意を惹き、其何人であるかが社交界の茶話の題目になつて居る。



けれど『オウダックス』が何人であるかは今猶ほ判明せぬが、此人はジョーヂ陛下が先般大病にかゝらせられたのに芽出たく御全快遊ばされたのを慶祝するの意を表する爲めに十萬五千磅（百五萬圓）を寄附し、倫敦の下層人民の爲めに陛下の御名をつけた慈善病院を設立することを申し出た篤志家であることだけは知れた。

◇百二十五萬圓の籤

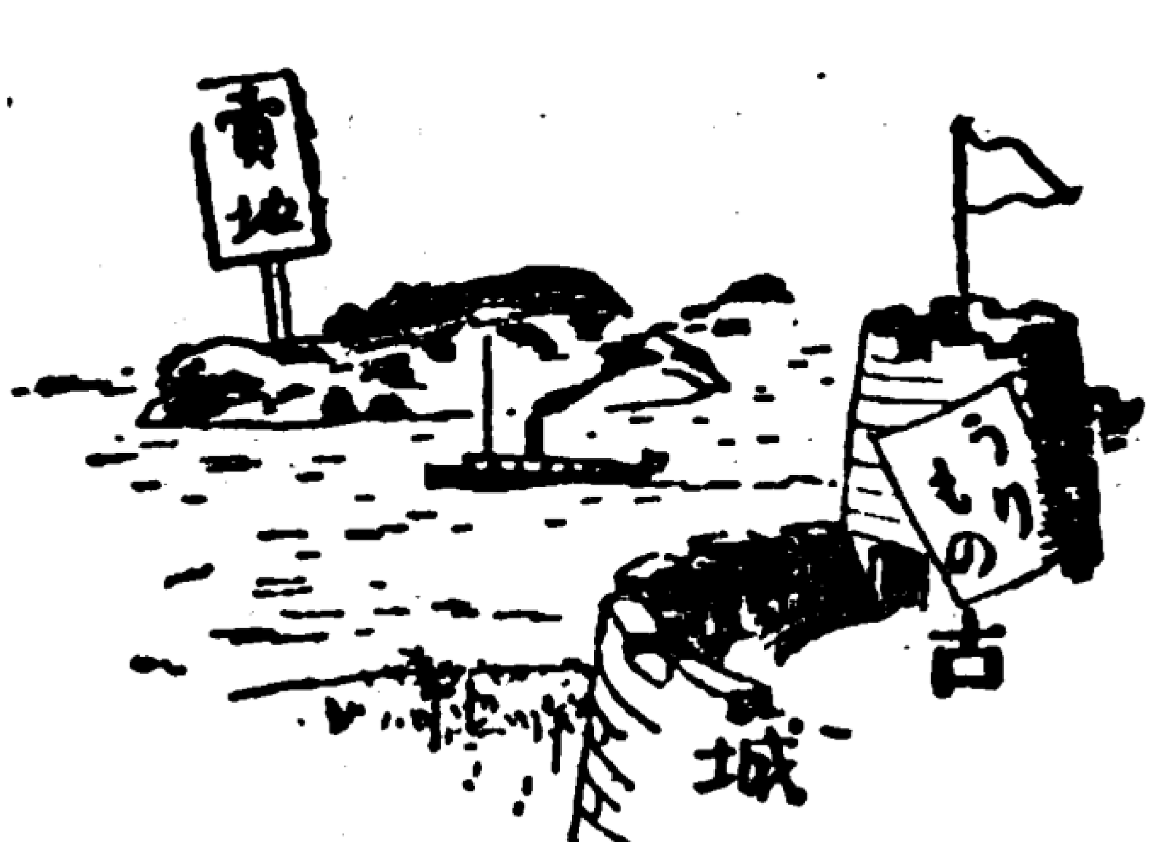
英國では競馬が國民的の娯樂で、あり、諸所に競馬が催されるが中にも同國の年中行事として同國のみならず世界の愛馬黨の大きな感興を惹くのはダービスの大競馬である、此競馬に關聯して一種の賭博が弘く英國民の間に行はれる。それは富籤のやうに僅少の代金で馬券が賣り出され、其馬券が勝馬を名指したものであり、また籤引きで當るとそれを買つた運のよい人が莫大な賞金を得るといふ仕組みである、今年のダービー競馬の勝馬はクラガドアといふ馬であつたが、運よくその馬に賭けて一等の籤を引き當てたのはジムミー・ギップといふ七歳の男の兒であつた。其



馬券は倫敦の或請負會社に勤めて居る父が買つて來て、彼に與へたものであつたが、或日彼が學校から歸つて來ると、彼の母はそはそはして居て、いきなり『お前はほんとに運のよい子だ、お父さんの下さつた馬券が當つて十二萬五千磅(百二十五萬圓)の一等になつたよ』と誇つたところジムミーはおいしい御菓子を一切よけいに貰つた程にも喜ばず『そうですか、いつ貰へるのですか』と言つただけで、其まゝお八つの方に向つたといふ。

◇百圓つけて土地進上

英國では商工業が盛であるだけに、農業は甚だ振はない、地主は高い賃銀を拂つて勞働者を雇ひ、土地を耕作さすよりは草生地にしておく方が利益であるから、英國では食糧品は大部分を外國より輸入し、其土地の大部分は耕作されずにある、世界大戰中獨逸の潜航艇に脅かされて、食糧輸入の途が断たれさうになつた時、官民共に狼狽して公園の草地迄を開墾して、これに馬鈴薯を植ゑつけたりしたが、戰後は舊の通り農業は引合はないので土地の大部分は遊ばせてある。



のみならず此大戰の爲めに受けた財政上の苦痛は今猶大きく殘つて居て、英國民は重税の下に呻吟して居る。それが爲に農業は益々振はず、農民及び田舍に土地を持つて居る人達は、其の土地を持て餘して居る有様であるが、それを雄辯に語るは近着のデーリー・メール新聞に出て居た左の報道である。

ケムブリッヂ地方では同地方を貫流するウーズ河の排水工事被益者たる沿岸の地主より一エーカー(約我四反五畝)につき一年二圓五十錢の割で賦課金を徴收して居るが、地主等は此負擔に堪へ得ぬといふわけで五月十一日ケムブリッヂ市に於て大會を催し、右の賦課金減額の運動を開始した、此集會に於て地主の代表者たる一人は演説して、賦課金の過重なる爲め數千エーカーの土地は次第に荒廢に歸しつゝある旨を述べ『私の代表して居る地主は既に老年年金を政府より支給される年齢に達して居るので、農業を止めて引退することを希望して居る。ついては其所有地十エーカー(四町五反)は誰にでも希望者へ無代で進上したいと言つて居る。他にも同樣其土地を手放したがつて居る地主が大勢ある』と言つた。此時聽衆の中から『私も四十エーカー(二十町)の土地に百圓添へて誰にでも進上する』といふ者があつた。

重税と維持費の負擔に堪へかね

て英國の貴族が其祖先傳來の城を賣りに出すのが最後甚だ多くなつた、現に賣りに出て居る古城が五つあり、何れも歴史的有名なものばかりである、其他廣大な遊園地や、村や、又島が賣りに出て居る。

◇獨逸老大統領の日常

敗殘の獨逸を双肩に荷うて、衰へ行かんとする國運を僅かに數年の間に繁榮の途に引戻し、世界をして感嘆の眼を刮せつゝある獨逸の大統領ヒンデンブルグ元帥はたしかに現代第一の偉人である。元帥は今年八十一歳の高齢であるが、健康と元氣は壯者を凌ぎ、其唯一の娛樂は銃獵で、射撃に於ては名人の域に達して居る。それでたまに休暇を得ると、元帥は身輕に裝うて國境に聳ゆるアルプスの連峯に分け入り、羚羊を狩り歩くのであるが、かゝる時、彼は二千メートルの高峯に徒歩で登攀し、峰を越え、谷を渉りて獲物を探がし求める、羚羊は逃げ足の早い動物で、嗅覺が鋭敏であり、それに近づくことは出來ない、それで羚羊を狩るには近くも二三百ヤードの距離から狙ひ撃をせねばならぬが、ヒンデンブルグ元帥はいつでも唯一發で之を仕止める。

元帥の日常の生活は時計のやうに正確で、夜は十一時に就寢し、朝は七時に起床して、暫く庭園で散歩した後簡單に朝食を攝り、それから事務室に出て、そこで國務を處理し、又多數の來客に應接する。彼は非常に記憶力が强く、僅に一二度會つただけの人でも其名を覺えて居る、三年も前に一度會つた人をすぐ其名で呼びかけるは毎度のことである。

元帥は偉いには偉いが、やはり老人だけに現代人ではない、新しい事は何でも嫌ひで、彼の事務室には電話が架けてあるけれど、めつたに使ふことはない。偶に之を利用する時はハンケチを忘れたから持つて來い位の用達しをする爲めである。それから彼が一番幸福であるのは二人の孫、即ち六つになる女兒と二歳の男兒と遊んで居る時である。此二人の孫を彼は目に入れても痛くないと思はるゝ程に可愛がり、獨りの時には事務室に來て遊ぶことを許して居る。



孫六とX

谷 孫六

現代人の唄ふ金儲け小唄

『何かうまい儲けづくはありませんか』と云ふ言葉を方々で聞く、『どうです』と云へば『どうも儲かりませんな』と云ふ。誰でも金は儲けたいらしい。應接室で要談が濟む。話の切れ目になると『時に何かうまい話はありませんか』と來る。出合ひ頭に『やあ』『やあ』と云ふ、其の次の言葉が直ぐあれだ。して見ると儲けづくなんて云ふものは、挨拶の合の手見たいなものだ。こんなにちよい／＼用ひられると、上ッ調子に見えて、只何となく儲けたい人ばかり多いのだらう。何となく儲けるなぞと云ふ事は出來るものぢやない。それだのに人間は歌に唄つて居る。不景氣が深刻な故だか、錢が重寶な故だか、それは別問題として、金はつく／＼儲けたいらしい。そこで愚痴になつたり、哀願になつたりする。だが、それはほんとうに金儲けをしたいと云ふのではない。只金が欲しいのだ、金が欲しいことを儲けたいと云ふのは過つて居る。漫然と金を欲しがつてこそ愚痴も出る、哀訴も出る。ほんとうの金儲け位愉快なものはない。世の中へ働きかけて金儲けをする。聞いただけで緊張した昂奮

が起るではないか。世人ともすれば金儲けを偶然のやうに云ふ、金儲けは人を傷けてするものだと斷定するものがある。

猫が鼠を取れば、猫は嬉しからうが鼠は悲しい。俺が金を儲ければ何人か倒れる人が出來る。乃ち金儲けは人道の裏を行くものだと云ふ人もある。しかしそれは皆違ふ。猫が鼠を取るのと金儲けを同じやうに考へる人があつたら、もう一度兩方の眼を引つこすつてパチ〳〵やつて見る事だ。

　或る日、孫六の家へ、小さな風呂敷包を抱へた男が訪ねて來た。

『保險會社の方ですか……』

『そうぢやありません』

『町内の寄附金ですか……』

『そうぢやありません、實は折入つてお願ひ致したいことが御座いまして……』

『折入つてお願ひ……？　兎に角お上んなさい』

『それでは御邪魔さして頂きます、結構なお住居ですな』

『……御要件は……？』

『は、他の事ではございませんが、茲に二千圓の金があるので御座います』

　と、客は小さな風呂敷包を膝の上で解きながら、上目で孫六の顏を瞥乎見た。

『はア……？』と、孫六も客の顏をチラり見た。客は井桁に結はかれた紙幣束を、風呂敷からコロ〳〵と出してテーブルの上に載せた。

『これを年一割に廻はして頂きたいのですが如何なものでございませう』

　客はホーッとして紙幣束に見入つて居る。

『これは貴方の金ですか……』

　と、孫六も首を傾げて紙幣束の横ツ腹を見た。

『そうです』

『どうした金です』

『貯めた金です』

『どうして貯めた金です』

『三年間、苦心をして貯めました』

『はア、三年貯金ですな』

『いゝや、そんなぢやありません、此の金を貯めるには並一ト通りの苦心ではあり

商家十訓

(一) まづ眞面目、眞正直
(二) 辛棒づよく、みつちり勵み
(三) 程よき愛嬌を忘れず
(四) 顧客の心理をしつかと攫み
(五) 仕入の商品はよく吟味
(六) ウインドの裝飾は特に注意し
(七) 店内明るく、淸潔に
(八) 見よく、買ひよく陳列し
(九) 一錢の客にも親切、丁寧
(十) 信用肥えれば、店も肥える

ませんでした』
『どんな苦心をして貯められました』
何處まで行つても同じやうな問答が續く、客は端然と揃へた膝がしらの上で、手を早く揉りながら、モヂ〳〵して居たが、コツクリと唾を嚥んで話し出した。

無い智惠絞る
貯金の秘訣

客と云ふのは日本橋馬喰町に、小さな小間物屋を開いて居るSと云ふ男である。彼は十二の時に郷里の長崎から出て、横山町の或る小間物問屋へ奉公に上つた。七年の年季を立派に勤め上げて、禮奉公をして居るうちに兵隊に出た。除隊になつたのを機會に、二十五圓の家賃で現在の店を借受け、郷里から貰つた細君と、小僧一人を置いて商賣を初めた。何しろ九尺間口と云ふ些やかな新店なので最初から店の利益で生活が出來よう道理はない。店は細君と小僧とに委して自分は元の店へ出入りすることゝなり、地方の得意廻りや集金などを手傳つて、月々幾何づつの手當を貰ひ、細々ながら商賣をつゞけて居た。
『何とかして金をのこさなくては！』
彼も細君も其の氣になつて一生懸命働くものゝ、扨金と云ふ奴は出足が早くて、入り足の鈍いものである。『子供でも生れたら』細君は流石女だけにそんなことまで考へながら、彼に内緒で町内の無盡へ入つたり、三年貯金へ入つたりした。けれども元々そんな餘裕があつてのことではない。結局賣上げと仕入れの金が片跛になつて行く、貯金や無盡の積立が出來て行く半面に問屋へ不義理が出來て來る。女賢しうして貯金帳を持て餘してしまつた。細君はとう〳〵白狀して善後策を相談することゝなつた。
『店の賣上げで食べて行くにもやつとです、何か外の商賣でも……』
と云ふやうなことまで云つた。彼は細君の仕打を飽迄善意に解釋した。けれども只それだけで金がのこると云ふ譯には行かない。二人は無い智惠を絞つて二日も三日も考へた。
或る日細君は突然こんなことを云つた。
『ねえあなた。貯金と云ふものは、心掛けだけで出來るものぢやありません。あたし昨夜こんな事を考へましたの、何でもお互に切詰めた生活から絞り出さなければならない。それには毎日の賣上げを午前と午後の二つに分けて計算し、午前中の賣上げの純益だけを必ず貯金することにして、午後の分で暮らして行くとしたらどんなものでせう』
『午前中の賣上げの純益金を貯金するつて？』
『えい、そうですわ、しかし一日分の純益でもやつとこさの暮しですから、出來ない相談かも知れません、けれどもそう云ふ風に憲法を定めてしまつたら、あな

ただつて一ヶ月に二十日はお店の御用で地方へ出張なさるのですから、其の旅費の中から何か生み出すことは出來ないこと……？』

『旅費の中から生み出す……？　それは不可い、旅費だつて實費で精算するんだ、生み出したものはお店へ返へさなければならない』

『それは當然です、しかし人樣と同じやうに使ふ旅費なら差支ないでせう、心懸け一つで屹度生み出せると思ひますわ……』

『心懸けつて、まさか汽車賃を負けて貰ふ譯にも行くまいぢやないか……』

『それです、汽車賃を安く上る工夫です』

『馬鹿ッ、汽車賃を安く上げるつて、團體ならいさしらず、汽車賃が値切れるか……』

『それはさうです、しかし成るべく汽車の中へ泊まるやうな日程を作ることです、汽車の中へお泊りになつたつて、別に宿賃は取られないでせう』



『うむ……！』

『しかし、その宿賃の節約されたものは、お店へお返しになる性質のものだと仰有れば、それはそれ迄です。けれども日取りの都合でどうしてもお泊りにならねばならぬ事があつたら……』

『こんどは宿賃を値切るか……？』

『いや、宿屋は堂々とお泊りなさい、しかし宿屋へおつきになる前に、汽車でお辨當を食べて行く必要があります』

『晩飯は宿屋にあるぢやないか』

『もちろんです、だから夕飯を他で濟まして宿におつきなさいと云ふのです、判つて……？　宿賃を値切る必要はありませんわ、汽車で頂いたお辨

當の三十五錢よりは、自然宿賃の方が安くならないこと……?』

『ふむ……!? 考へて見るとあるものだな、俥に乘るところは歩く、自動車賃の代りに電車、神樣へ參詣したつもりでお賽錢まで貯金すると考へれば、なる程あるね』

『そこでお願ひがありますわ』

『何だ……?』

『それを實行なさるとすれば、其の場で直ぐに其の生み出された金額だけを振替貯金で送つて頂きたいのです。私は早速貯金の方へ入れてしまひますから……』

　彼は細君の必死な注意で、今迄にない工夫を感じた。其翌日彼は地方へ出た、貯金も其翌日から實行された。そうなると店の賣上げも何とかして多くしたければならなかつた。細君と小僧は必死である。

九尺間口の小間物屋、小僧は小僧で店を二倍に使ふことを發明した。



氣轉と工夫で二倍の商ひ

『ねえお內儀さん、店が狹いから品物が並び切れないので、お客樣が來ても探すのに暇が取れて困るんですが』

と、小僧は細君に話しかけた。細君はそれもそうだと考へるもの丶、どうすることも出來ないらしい顏で、

『棚を吊つて、貼り札をして置いたらどう……?』

『ねえお內儀さん、午前中の賣上げの利益だけは貯金なさるんですつてネ』

『あゝ、それが私んとこの憲法になつたんですよ』

『で、午後の賣上の利益で御飯を頂くんですつてね』

『あゝ、さうだよ、だから今迄よりももつと商賣がないと困るのよ』

『では私が一つ考へて、今迄の倍も商賣のあるやうに工夫しますから、店の事をまかして下さいませんか』

『ことによつたら任してもよい

が、どんな工夫だか云つて御覧……？』
『工夫つて別に何でもない事なんです、午前と午後の店をまるで代へてしまふんです』
細君は悸乎となつた。
『馬鹿を云ひなさい、そんな亂暴なことをしたら、旦那に叱られます…』
『いゝや叱られません、旦那は屹度喜んで下さいます。何も店を代へると云つたところで、荒物屋になつてしまふ譯でもなし、ぶち壞して自動車屋にしようと云ふのでもありません』
『それでは、どんなにしようと云ふんです』
『午前のお客樣と午後の御客樣を別にしようと云ふのです』
『おほゝゝゝ、利口なやうでも子供だねえ、活動寫眞ぢやあるまいし、そんな勝手なことが出來るもんかネ』
『いや、笑ひごつちやありませんぜ、私は每日店番をして店のことは誰よりもよく知つて居るんです、午前中に買ひに來る品物と、午後でなければ賣れない品物をちやんと知つて居るんです、それを別別にして賣らうと云ふのです』
『……なる程、理窟だね……』



『先づ朝の店の一番前へ並べる品を考へて見ませうか、第一に齒磨です、齒磨ブラシは午後の方が宜いんです、齒磨は朝になつて氣が附いて馳けつけるのが多いんですから……ブラシは大抵お湯の歸りかなんかに買つて行くものです』
『なる程……』
『それから洗濯石鹼、櫛やリボンは午後の部へ廻はすとして、蟇口や紙入類は午前のものです、舶來マッチに蠅とり粉、妙な取合せのやうですけれど、人樣が午前中に氣がつくやうなものだけを、朝の出し臺へ並べてしまひます』
『なる程』
『お晝御飯を頂いたら、其出し臺の品を全部入れ替へてしまひます。化粧石鹼、香水、ハンドバック、化粧品、化粧品の中でも白粉紙や油取りは朝の方が宜いで

すな、これはみんな出掛ける時に必要なもんですから……』

小僧は店番の經驗から打算して、店中の品物を午前と午後と二つに分けて説明した。細君は諄々と説かれて行く小僧の話に、眼を丸くしたり細くしたりして聞惚れて居たが、

『お前よい所へ氣がついて呉れました、して見ると何と云つても午後の方が金高もんだね、うまく行けば、それだけで暮しの方は充分になるかも知れないよ……』

細君と小僧の協力は、效を奏した。午前の陳列と午後の店つきとを全然取かへたS小間物店は、九尺間口ながら、相當の實行を示して來た。

『と、云ふやうな譯で三年間、貯金帳に溜つた金が二千圓と云ふ數字になりました。これを年一割に廻して頂けば、二百圓、しかも利子税の要らない二百圓の金が出來ると云ふものです、うまい方法は無いものでせうか』

Sは二千圓貯金苦心談の鳧を結んで、年一割廻轉法の説明を求めた。

孫六はつく〴〵感心して聞いて居たが、Sに促された一年一割廻轉法にハッとなつた。



死に金生き金
運用の妙諦

『豪いですなア君の細君は……それよりか小僧さんも豪い』

と、孫六は、もう一度感心し返した。

Sは擽つたい樣にモヂ〳〵して居たが、

『今のうちは子供がありませんから、働いて貯める分には、今のやうなことを繰り返して居られますが、小さいのでも出來ますと、家内の手が塞がります。それに子供の教育費にもと思ひまして、折角溜めた此金を有利に廻して行きたいと思

ふのです』
Sは一身上の相談にまで立入つて來た。孫六は考へた。
『銀行へ定期で預けて置いたのでは駄目ですか……』
『定期預金は年四分五厘で利子税を取られます、信託預金でも五分三四厘から割のよいところで五分七厘です』
『はツはツはツ、すつかり研究されて來ましたな、そこで年一割に廻はせと仰有るのですか……』
『……と、云ふやうな譯なんでございます』
『いや、判りました。しかし君、失禮ですが今私の云ふことをよく味つて下さい、成る程この二千圓の金は、あなた方が血の出るやうな苦心になつてお溜になつた貴い金です、あなたに取つては、生爪を剝がすやうな思ひでせう。けれども私とあなたの眞ン中に置かれた此の金は、どつちつかずの二千圓です、私があなたの要求を入れて引受けたとすれば、私の金になり、私が斷われればあなたの金になる、つまり宙に迷つた金なんです』

店員十訓

1. 主人の心に同化して働くが奉公の眞義。
2. 服裝はサツパリと、美よりも質實。
3. 奉公に來た日の心いつまでも。
4. 返辭はハツキリ大きく早く。
5. 客には商品と滿足を賣れ。
6. 日向より陰の仕事がよく光る。
7. 勤勞と報酬を天秤にかけるな。
8. 人を敬愛すればやがて我身が敬愛さる。
9. 秘密は心の毒、出世の妨げ。
10. 骨惜みせず時間を惜め。

Sは眼を丸くした。
『よろしいですか、その宙ぶらりんの金を二人で冷靜に眺めて見ようではありませんか』
『……………』
『なる程二千圓と云ふ金は少ない金ではありません、けれども腹が減つたからと云つて、此の儘二人が食べても何の味も致しません、暑いからと云つて之れを、懐ろにしたところで涼しくもなりません。これを御馳走に代へ、氷に代へてこそ初めて貴い二千圓になるのです。經濟學で云ひますと、之れを貨幣價値と稱します、其の貨幣價値を上手に繰廻して行くのが利殖術なんです』
『その利殖術をお願ひ致したいのでございますが……？』
『よろしい、承知しました。ところで利殖術を行ふには、私が此の金を御馳走にしてしまつても、氷水にしてしまつても差支ないと云ふことを御承知下さらなけ



ばなりませんよ、即ち一時所有權を私に與へて、私が活用すると云ふ事を認めて頂くんですな』

『それは差支ありません、もと〳〵其のつもりでお願ひに上つたのですから…』

『さうすると、私は此の金をお預りして一生懸命に活用さして一割の利益を生出させなければなりません』

『つまり、さうですな』

『ところで、あなたは何をします』

　Sは狼狽した。そして何か考へて居たが漸くのことで、

『私は……私は其の二千圓の所有者です』と、きつぱり云つた。

『此の二千圓の所有者…？

此の二千圓は今の所宙ぶらりんで、無價値な二千圓です、紙屑と同じやうな二千圓です。それを働かして二千圓の價値だけにするのは私です、あなたは紙屑の持主です。其の紙屑の持主が私に働かして私の働いたものを遊んで居て取らうと云ふのは少し虫が好過ぎはしませんか』

　Sは首を曲げた、それも理窟のやうであり、何だか二千圓の金が反古になつてしまつたやうな說明でもあり、譯が判らなくなつてしまつた。孫六は急に笑ひ出して、

『はツはツは、判りませんな、判るやうに話しませうか、つまり私を働かして一割の利益を得たら、私に働き賃を拂はなければならない、あなたは二千圓の持主だが、一割の金を作るのは私だと云ふのです』

　Sはポンと小膝を打つて、

『判りました、判りました。ほんとうにそうです、それはお支拂致します、純益

の二分五厘と上げませう』
孫六はニヤリとした。
『そうですか、すると私が二分五厘、あなたが七分五厘と云ふのですな』
『そうです、それでも銀行預金より、信託預金より、ずつと利廻りがよくなります』
と、Sは安心したやうに吻となつた。
孫六は目をパチ〱さして居たが、
『Sさん宜いことがあります、斯うなると私とあなたの二千圓みたいなものですから、私もあなたと同じやうな事を考へました』
『えッ、同じやうな事と云ひますと……
……?』
『私も働かないであなたに満足さして上げる法と云ふのです』
と、孫六は卓子の上へ両肱をついた。

馴れた仕事で働かす資本

Sは狐につまゝれたやうな顔をして、
『どんなことなんです……』
孫六は立つて新聞の綴り込みを繰つて居たが商況面のある所へ指して、
『これですよ、公債、社債、株式仲買と云ふところがあるでせう、この内の慥なものを買ふんですな、七分五厘位に廻るのはいくらもあります』
Sは、何だつまらないと云ふやうた顔をした。孫六は鼻の先へ來る微苦笑を押さへながら、
『ねえ君、銀行だの保険會社だの、信託會社だのと云ふのは、それのみんな大きいのです、他人の金を四分五厘で預つて、七分見當に廻せば、二分五厘の利益があるでせう。二分五厘と云ふと少ない利率のやうですが一萬圓なら二百五十圓、十萬圓なら二千五百圓、百萬圓なら二萬五千圓、一億も預金があると二百五十萬圓も只儲かるんです。他人の錢で二百五十萬圓も儲けられる銀行のことを考へると、少し馬鹿〱しくなるでせう』
Sはコックリと首肯いた。
『なる程、そうですな、時に何かうまい話はないでせうか』
すつかり術に落ちたSは、七分五厘は諦めたやうだつたが、矢張り世間並の儲けたい慾望だけは諦められないと見える。
『ありますとも』と、孫六は少し反身になつた。Sはハッとして膝を乗り出した。
『これは私の懇意な問屋と云ふ老人に聞いたんだがネ』
『あの有名な問屋老人ですか』
これはまた耳寄りな話が聞かれるものと、Sは急に居ずまひを直して緊張した。
『時にあなたの店へは毎日何人位の客が見えますか』
孫六は改まつて訊ねた。Sは話題が他へ外れることを恐れるものゝやうに、氣

のない調子で、

『そうですな、五十人位かと思はれます、それに狹い店ですから百人の人が來るとなると足搔きがつきません』

『なる程ね、そこでお店の品物は、どんな利益率で捌いて居られますか』

Sは舌打をしないばかりの口つきで、

『多いのは三割位のもありますが、よく賣れるものは一割見當ですな』

『なる程、して見ると平均したら一割五分から二割と云ふところですた』

『まア、そんなもので御座いませう、時に老人の話と云ふのはどんな話でございますか』

彼はたまらなくなつて焦り出した。孫六は態と落ついた調子で、

『どうです、Sさん、此の二千圓の金で店の品を全部仕入れてしまつては……？』

Sは驚いたやうな眼をして、

『飛んでもない話です、第一あんな手狹な店に並べて置くところがありません。それに先程もお話しました通り、來る人が定つて居るのですから、そんなに品を仕入れたところで寢かして置くだけのことです』

孫六はSの態度を凝乎と見戍つて居たが、

『あなたの店へ來る客は一日六十人と云ひましたな』

『そうです、ですものそんなに品物ばかり殖やしたところで、どうにもなりませんよ』

『それでは、もし私が此の金を引受けて、あなたの店を借りて商賣をするとしたらどうします』

Sは輕蔑したやうな笑ひを口元に含ませて、

『それは駄目です、餅屋は餅屋ですもの、そんな事をしたら缺損は目のあたりです』

と、一向に取合はない。それよ

商家に望む十ヶ條

一、開店當時の意氣込を忘れず、店内を常に新らしく明るくして貰ひたいものです。

二、無暗矢鱈にお世辭を云つて欲しくはありません、却つて店の信用を落とします。

三、家内人悉くが是非秤のかけ方を正確にして下さい。お爺さんは安いがお婆さんの方は高いなどとよく有る事です。

四、問屋間を機敏に立ち廻つて、質實に、しかも流行を考へていたゞきたい。

五、大いに眞實味のある廣告の費用は廣告せざる商店の負擔と云ふ事を承知して下さい。

六、物品を出すのを大儀がらず、可成多數出して、客の選擇を自由にして欲しい。

七、買物の多少にかゝはらず、子供に對しては、特に愛想よくして貰ひたいものです。

八、店へ來た客をジロ〱眺めるのは大禁物です、品物を選ぶのは客の自由に委せ、二三尺離れた所で待つべきです。

九、正札はハッキリした文字にして欲しい、符牒のやうな文字が書き添へてあると不愉快と疑念が起ります。

十、買上げられた品物は早く包んで渡すべきです、紐が見當らなかつたり釣錢に手間取れたり、包みながら他の店員と話して居る事なぞは慎んで頂きたい。

りか老人の話に移つて貰ひたい眼つきで孫六の鼻のあたりを見つめた。

『時にSさん、東京の人口は何百萬でしたツけネ…?』

孫六は自若として質問をつゞける。Sは焦れつたさうに、

『二百萬と覺えて居ますが……』

『そう〱二百萬でしたな、あなたの店へ來る人は六十人……と、二百萬と六十人とでは大へんな違ひですな』と、獨り言のやうに呟いた孫六は、はつきりした眼で、Sの方へ向き直りながら、

『あなたの店は狹くても、あなたの店から一歩外へ踏み出せば二百萬の人が居ます。二千圓位の品物は一時間にも足りない位です、どうですSさん、あなたは店へ來る人だけを客として居るから、折角溜めた金で苦勞なさるのです、其の金を尤も熟練したあなたの手腕で、店の商品に利殖を賴まれるのが最上の分別です。一割五分の利益を一割に切下げて御覽なさい、お客樣は喜びます、賣れます、又仕入れます、月に一回づつ繰り返して行かれると月に一割です、月一割は年十二割に廻ります。私のところへ持つて來て、年一割、二分五厘の手數料と云ふ事を考へて居る暇はありません』と、きつぱり云ひ切つて、

『店は細君と小僧さん、外はあなたの受持ちと、こう決めて二千圓の金を店の商品に代へることです』

Sの首はだん〱に下つた。稍あつて彼はコツクリと唾を嚥んで、

『有難うございました』

『どうです、豪い儲け話ではありませんか』孫六は晴れ〲と笑つた。

次號の金儲の話は

五十錢玉物語

谷孫六

先づ五十錢玉の裏表を篤と御覽下さい、種も仕掛けもありません。大藏大臣の蟇口にあつたからとて五十錢は五十錢です、私の机の抽斗にあつたからとて五十錢は五十錢です。其の五十錢玉一つの運用が、如何に多種多樣でありませう、仔細に分解して御覽なさい、驚くべき事實が發見されます。モダンボーイ、田吾作、給仕、局長、奧樣、八百屋、五十錢の使ひ分けから鮮やかな紙幣束が積み上げられるといふトテモ奇拔で、しかも實際的合理的な何人も感嘆する話。次號執筆。先づ五十錢玉の裏表を篤と御覽下さい。



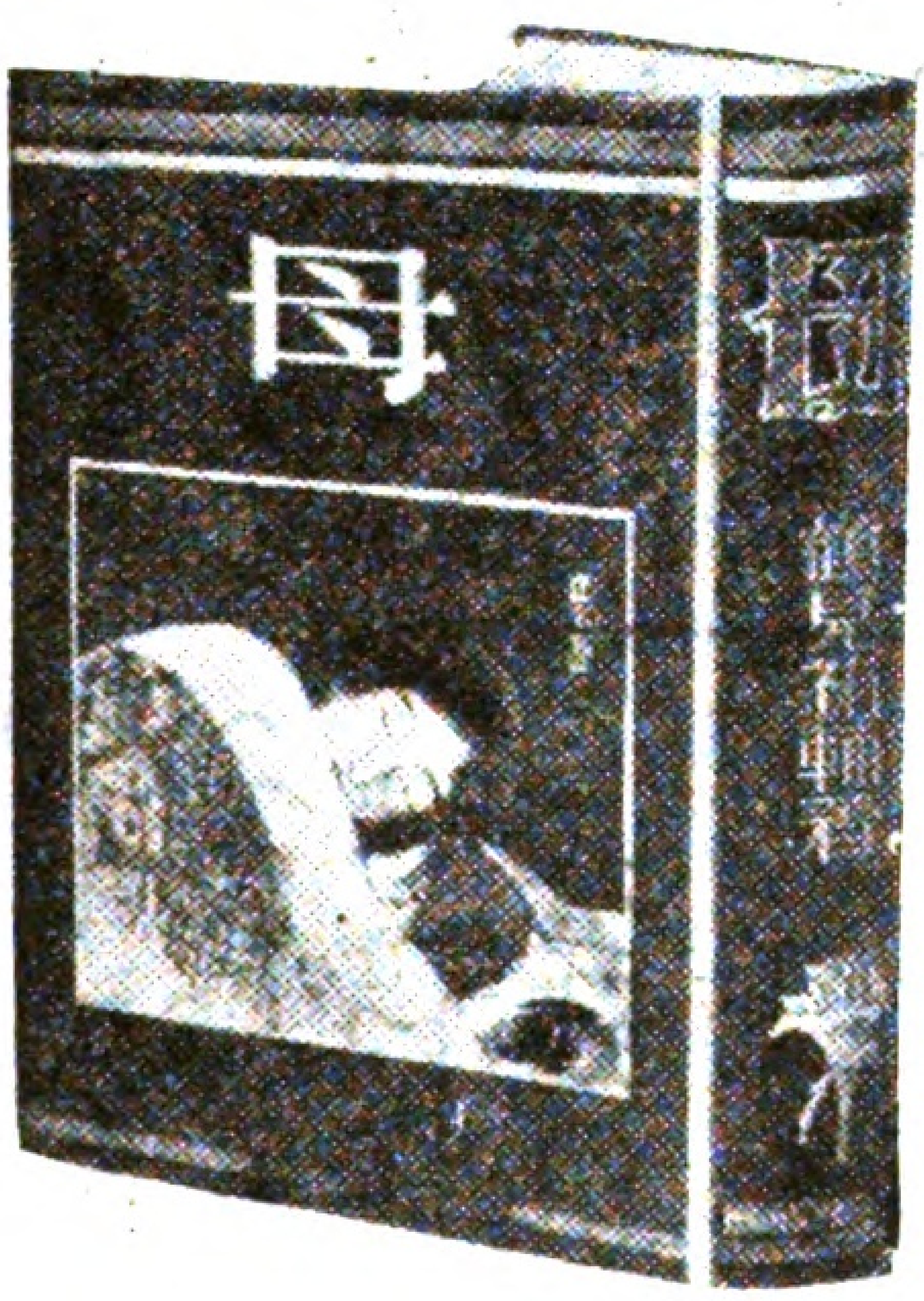
亡き母に再會せる心地

―鶴見祐輔氏の小說「母」を讀みて―

子爵 金子堅太郎

鶴見老臺

余は貴兄の惠贈せられたる母の小說を今朝繙くや手に書册を放つこと能はず晝晩兩度の食事時間を除くの外終日讀み續け只今（夜九時半）漸く全部讀み了りたり。依而貴需に應じ聊か所感の一端を略記して貴兄の厚意を謝せんと欲す、蓋し本書は近來稀に見る名著述ならん、是れ貴兄が書中の人物進の如く僅かに十六歲迄の間に受けたる慈母の尊き感化に基き著述せられたるものならんと驚嘆したり、貴兄は齡十六にして慈母を喪ひてすら此の如き偉大なる感化を受け歐米諸國に見ること能はざる日本婦人の性格・志操・言行を懇切丁寧に說述せられたり、然るに余は十六歲にして父を喪ひ葬式を了りたる後父の位牌の前にて母より教訓を授けられたる時始めて母の尊き感化を受け爾來三十四年間母が七十二歲にて死去する迄常に母の膝下に侍りて其感化を受くるの幸福を得たるにも係らず貴兄の萬分の一だも母性を著述すること能はざるを愧づるのみ、又書中或る場合に於ける朝子の志操又は言行が往々余が母に似たるを讀んで轉た感慨の情に堪へざりき。



本書は近頃世上に流布せられたる戀愛小說又は風俗壞亂の情話と違ひ貴兄の所謂『日本人に偉大ありとせば、それは母たる日本の女性の賜である』と云ふことを此の小說に依り詳細に說述せられたるものなり、故に日本人の母たるものは勿論凡ての婦人も必讀すべき教科書なりと確信す。

堅太郎

佐々木味津三氏著

むつつり 右門捕物帖 愈々出づ

大衆物として 探偵物として
面白きこと 眞に天下一品





江戸一番の美男子！

締つた口、隆鼻白皙、素肌へ結城縮、茶無地の博多帶、蠟色鞘細身の大小、素足に雪駄穿きの扮裝、年頃廿五六の優男！

その瑞々しい眼付は底知れぬ智力の深さを秘めたのみか、その足取り腰付から察すると確かに一流の極意を究めた達人に相違ない。

これぞ名同心近藤右門、平常は默然と不精髭を拔いてゐる所から人呼んでむつつり右門と云ふ。しかし、この男一度事件起るや流石智慧伊豆の御氣に入りだけあり、神の如き直覺力明鏡の如き探偵眼を閃かし、疾風の如くズバリ〱と星を當て、

『拙者は八丁堀の右門ぢや、無手ならば草香流、得物ならば錣正流の居合斬りでこの細身に血を見せようぞ』

と凉しい啖呵を切つて、アッと云ふ間に犯人を片付け、スーッと引上げてしまふ。併も西洋流の冷たい探偵家と異り、酸いも甘いも嚙み分けて血あり淚ある男の中の眞の男、當時八百八町の若者や娘達からワイ〱云はれたのも無理はない。

この稀代の名同心の手柄話の數々を大衆文藝界の花形佐々木味津三氏が斬新な構想、江戸前の筆致で綴られた『右門捕物帖』は、從來の探偵物や大衆物と全く趣向を異にし眞に興味津々、正しく、

探偵物として天下一、
興味讀物界の隨一、
最近小說壇の一大收獲

である。

全卷六百頁十五篇、大江戸爛熟期の人情風俗を背景に美男美女孝子快盜怪盜妖婦入亂れ夫から夫へと起る怪事件に、股肱の岡つ引おしやべり傳六、夜目が利き投繩の名人善光寺辰を從へ、驚天動地の右門の大活躍には或ひは拍手喝采し或ひは膽を冷し或ひは淚をしぼらせ、眞に寢食をも忘れしめる痛快極りなき劃時代的の大名篇である。加之、裝幀插畫亦數寄を凝して美麗豐富、愈々觀る人の感興を唆らしめよう。（定價一圓八十錢送料十二錢）

（大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）發行

濱口內閣成る、雄辯の時代來れり。

聞け！ 新首相の大獅子吼を！

濱口雄幸氏大演說集

定價二圓　送料十錢

突如！ 大命降下！

組閣僅かに半日、七月二日午後九時半、各閣僚を從へて大內山の奧深く畏き大前に帝國宰相就任の式を擧げたる民政黨總裁濱口雄幸氏の得意憶ふ可し。

氏や誠に至誠憂國、剛直進取の大政治家である。而して氏は又偉大なる雄辯の人である。實に氏の雄辯は內容廣大理路透徹、時にその財政演說は天下一品の稱あり、氏一度口を開くや勁烈莊重宛ら天に嘯く百獸の王に似て聞く者をして畏敬推服血躍奮起せしめねば止まぬ。本書は氏の最近十年間の議政壇上熱火の大演說や溫情溢るゝ靑年への修養講演等を蒐集せるもの、

今やライオン宰相は草廬を出で大經綸を行はんとす、乞ふ聞け名の如き氏の大獅子吼大抱負を！

雄辯法講話　加藤咄堂先生著

定價二圓　送料十二錢

雄辯界の耆宿。加藤咄堂先生が多年の經驗を土臺とし、古今東西の雄辯法を參酌して、詳細平易に辯論術を講述せられたるもの、一讀何人も歷然と雄辯の理論と實際を知り得よう。

泰西雄辯集　本社編

定價二圓　送料八錢

古くはギリシヤ、ローマの雄辯家シセロ、デモステネスの熱辯より、近くはリンコルン、チスレリー、グラッドストン等の宏辭に至る迄泰西古今不朽の名演說を集めたるが本書である。

永井柳太郎氏大演說集

定價一圓五十錢　送料八錢

永井氏の雄辯は日本雄辯界の典型だ、本書は政治、思想、文藝、植民、外交等各方面に亙る氏の大獅子吼。

鶴見祐輔氏大講演集

定價二圓廿錢　送料十錢

政界の新人鶴見氏の雄辯は百花の咲き競ふ如く艷麗典雅だ。思想豐富、才氣煥發、眞に胸のすく快辯。

尾崎行雄氏大演說集

定價二圓　送料十錢

往年三國干涉の責任を問うて時の閣僚を畏怖股慄せしめた咢堂先生の五十年の大獅子吼の跡を見よ。

靑年雄辯集　本社編

定價二圓　送料八錢

現在雄辯を以て鳴る人々の若き頃の絕叫、諸名士出世演說等數十篇を集めたる本書は眞に若人の胸に喰込む底力を以つてゐる。

（以上、何れも大日本雄辯會（振替東京三九三〇）發行）

秋の長夜のつれづれに

漫畫とユーモア





谷脇素文畫伯編並畫

川柳漫畫 浮世さまぐ

定價二圓卅錢 送料十二錢

川柳漫畫と云へば素文、素文と云へば川柳漫畫と云ふ位、川柳漫畫は素文先生の獨壇場です。滑稽も諷刺も皮肉も諧謔も人情味も先生の川柳漫畫裡に貫ぬく世相風俗、家庭、夫婦、戀愛生活等の機微、世相を滑脱奇拔に描き出して、觀る人をして胸を躍らせ、腸を捩り、微苦笑せしめ、抱腹絶倒せしむるものはありません。



抱いた子に擲をおもちやにさせておき



惡がたい下女君命をはづかしめ

苛々しい冷たい現代人の心に本書千數百の川柳漫畫は確かにユトリと平和と歡樂とを與へます。

佐々木邦先生の 五大諧謔小説



笑ひとユーモア……笑ひは人生の華であり、ユーモアは平和の象徴であります。明るい、和やかな笑ひとユーモアの世界こそ本當の人生ではないでせうか。

佐々木邦先生の五大諧謔小説こそは實に笑ひとユーモアの大貯藏庫です。

愚弟賢兄
新學士樣の愚弟就職、見合ひ、結婚の行進曲、賢兄夫婦の心盡し
定價二圓 送料十二錢

主權妻權
國寶的美人を妻とした一會社員の濃厚な夫婦愛生活を描く
定價二圓二十錢送料十錢

次男坊
豪傑肌の次男坊の痛快極りなき生立ち、學生生活の脱線振を描く
定價二圓 送料十二錢

世間相人間相
眼に觸れた世間相人間相を片端し題材としたユーモア短篇集
定價二圓卅錢 送料十二錢

親鳥子鳥
發明な一少年を主題として家庭生活の團欒の樣を描いて輕妙
定價二圓 送料十錢

（以上何れも大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）發行）

趣味の科學

面白い鳥の正體

農學博士 内田清之助

＝鴉の雌雄＝鳥と卵＝血を見て害鳥＝鳰の水上生活＝誤譯される鶯＝漁夫の恩人阿比＝三度變色する雷鳥＝何の愚者椋鳥＝

誰か知らん鴉の雌雄

『誰か鴉の雌雄を知らんや』とは、事物の辨別し難いことの比喩だが、實際、あの何れもこれも眞黑な鴉の雌雄は、誰にだつて辨別されよう筈はない。

併し、これは鴉に限つたことではない。丹頂の鶴や雀や鳩など、雌雄同色の鳥類は、皆同樣だ。

また、鳥の生殖器は皆一樣に一穴で、雌雄別ある鳥類でも、外觀上一寸區別は出來ない。唯、鴨、家鴨の類と駝鳥ばかりは、陰莖を備へてゐて明瞭に區別されるのは、例外である。

鳥は卵を幾つ産むか？

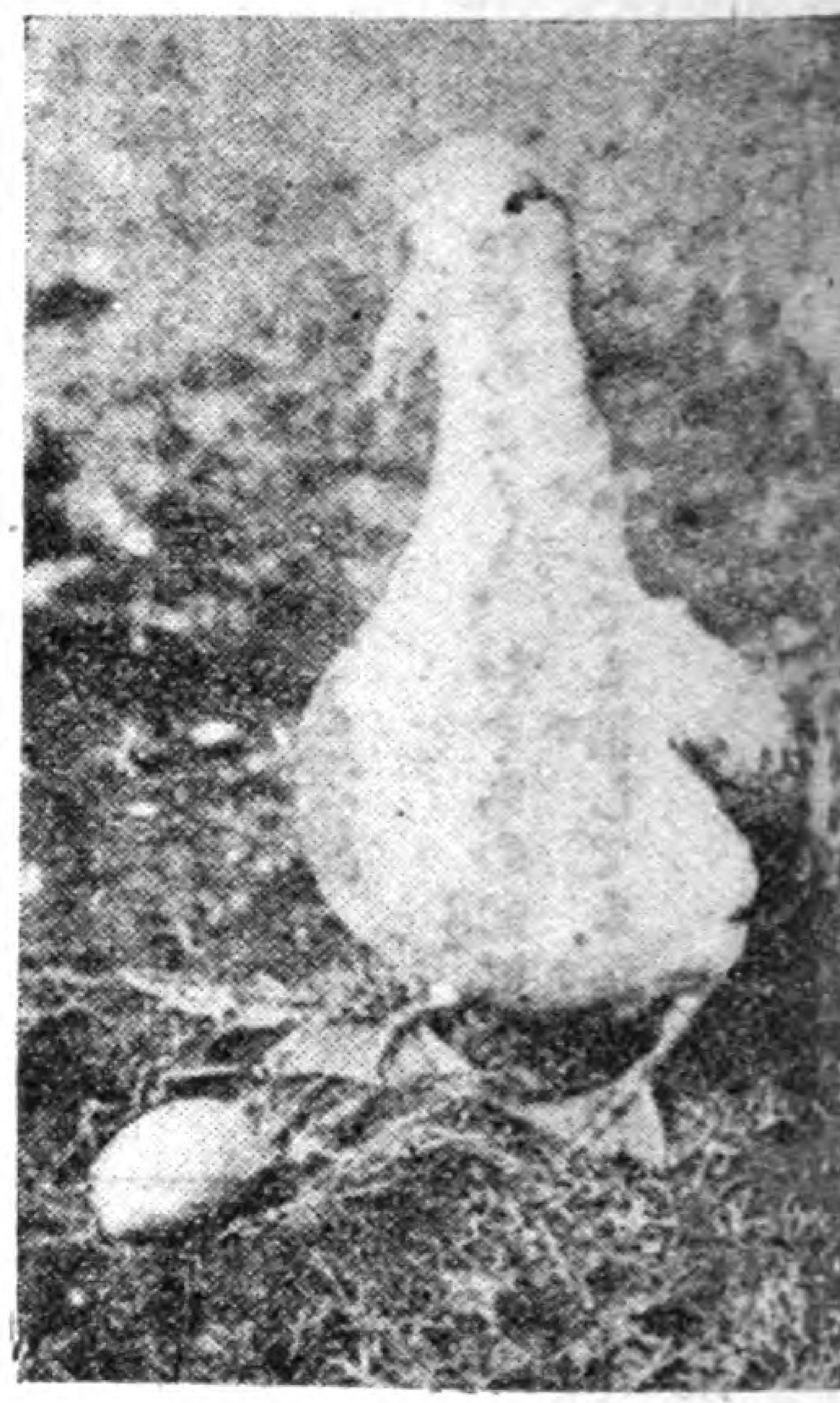
毎朝鷄小屋へ行つて見ると、鷄が、卵を産んでゐる。老練な養鷄家は、一年二百五十から三百の卵を産ませる事が出來るといふ。人爲的に、鷄の産卵數を増減出來るとすれば、樹上の巣で一年一回二三個の卵を産む鸛や鳩でも、人爲的に百も二百も産卵させる事も出來はしまいか？ そんな調法な事が出來るとは鳥渡思はれない。

處が、實驗して見ると、不可能な事ではなかつた。現に農林省では、鳥獸實驗場で雉を養殖してゐるが、あの産卵數の少ない鳥が、忽ち多産鳥となり、一年五六十、多きは百個も産むやうになつた。妙な變化だが、理窟は何でもないことだ。

詰り、種族の繁殖を目的とする産卵は、繁殖の出來るだけ、卵を産まねば目的は達せられぬ。絶海の孤島などで、外敵に襲はれる危險のない海鳥は、年々一個の卵を生んでも、繁殖の目的は達せられ

る。然し、内地の山林で樹上に巢を作る鳥は、その危險率も多いから、二三個から五六個も產む必要がある。況んや外敵の横行頻繁な土地に產卵するものに至つては、十個も十五個も產まねば、到底繁殖の望みはない。

造化の妙は、こんなことにまで到れり盡せりの感がある。尙右のやうに個々の鳥が危險率によつて一腹の卵數が定まつてゐるがそれでも折角產んだ卵がこはされるとか雛が猫に捕られたりした場合にはよくしたものですぐ引續いて新に產卵





上、絶海の孤島に卵を生む阿呆鳥

下、山羊や羊の背で蝨を食つてやる阿弗利加の蜂喰鳥

する能力を自然に持つてゐる。そして、これを逆用したのが、人間である。折角卵を產んでも、直ぐ人間に奪られる鷄は、危險率の最も多い譯である。せつせと卵を產んで、その危險率を補はうとする習性が、何時の間にか出來てしまつた。故に、雞でも鳩でも、一腹の數に達し抱卵を初めないうちにそばから〳〵卵を產んだら直ぐ奪つてしまふと、自然、多產の鳥となるのに不思議はないのだ。

血を見て害鳥になつた犀鳥

臺灣では、白鷺や猩々鷺が、水牛の背に載つて遊んでゐる。また東亞弗利加では、白鷺が象と一緒に遊んでゐる。そしてせつせと、水牛や象の背中に寄生する蝨を啄食してゐるのだ。水牛や象も、非常に喜び、鷺も樂に生活出來る。南亞弗利加では、蜂喰鳥が、野雁や山羊、又は羊の背に乘つてゐるのも見る。殊に面白いのは、犀鳥といふ椋鳥に似た鳥が、野牛や犀の背に乘つて、色々な寄生蟲を食ふことだ。

然るに、文明人がこの地方へ殖民するや、家畜も一緒に移住して來た。犀鳥は、これらの家畜へも乘るやうになつたが、家畜の牛馬は、野獸の犀や野牛と違つて、背の皮膚が柔らかいので、犀鳥に

つゝかれると、皮膚が破れて血が流れ出る。犀鳥は、何時かその血を啜つて、その味を覺えたから堪らない。寄生蟲あさりをするよりも、牛馬の血を吸ふことを本職とするやうになつた。家畜の害蟲驅除に益すると、人に愛せられた鳥が、一轉、畜産上の害鳥となつてしまつた。

動物の習性が、ふとした僅かの動機から、忽ち善悪一變すること、鳥の世界も人生も何ら異るものではないのだ。



鶯にされて實は鶯に非ざるナイチンゲール

鳰の水上生活と浮巣

むぐちよ〳〵、むぐちの頭に火がついて、消しても消しても消し切れない。

蘆の間から、すいと出て來て、頻繁に頭を水に突込んでは、小魚を捕へて食ふ鳰を、茨城縣行方郡邊りで、こんな俗謠に唄つてゐる。實際、鳰——即ちむぐちよは、頭に火がついた程、忙がしく水を潜る可愛い鳥だ。

鳰は普通かいつむり、八丁もぐり、むぐつちよなどとも呼ばれ、大きさは、小鴨よりも稍ゝ小さいが、嘴が錐のやうに尖つて、脚には非常に發達した水搔がついてゐる。雁や鴨のやうに遠くへ渡ることもないから、羽も小さく、尾羽も殆んどない。陸へも上らず、蘆の葉や莖を集めて、お椀の如き巣を作り、純然たる水上生活をする。この巣が、人も知る鳰の浮巣といふのである。

この浮巣は、水草の莖に結びつけられてゐることもあるが、ほつかりと浮游してゐるのもある。鳰は、この巣で卵を産むと、これをじつと抱へて孵化させる。そして、雛が出ると、それを監視しながら、巣の附近を泳ぎ、水に潜つては、小魚を捕へて哺育する。如何にも母性愛に富んだ鳥で、一寸も雛を手元から離せないといふ容子が見える。

年



鶯と誤謬される黄鳥

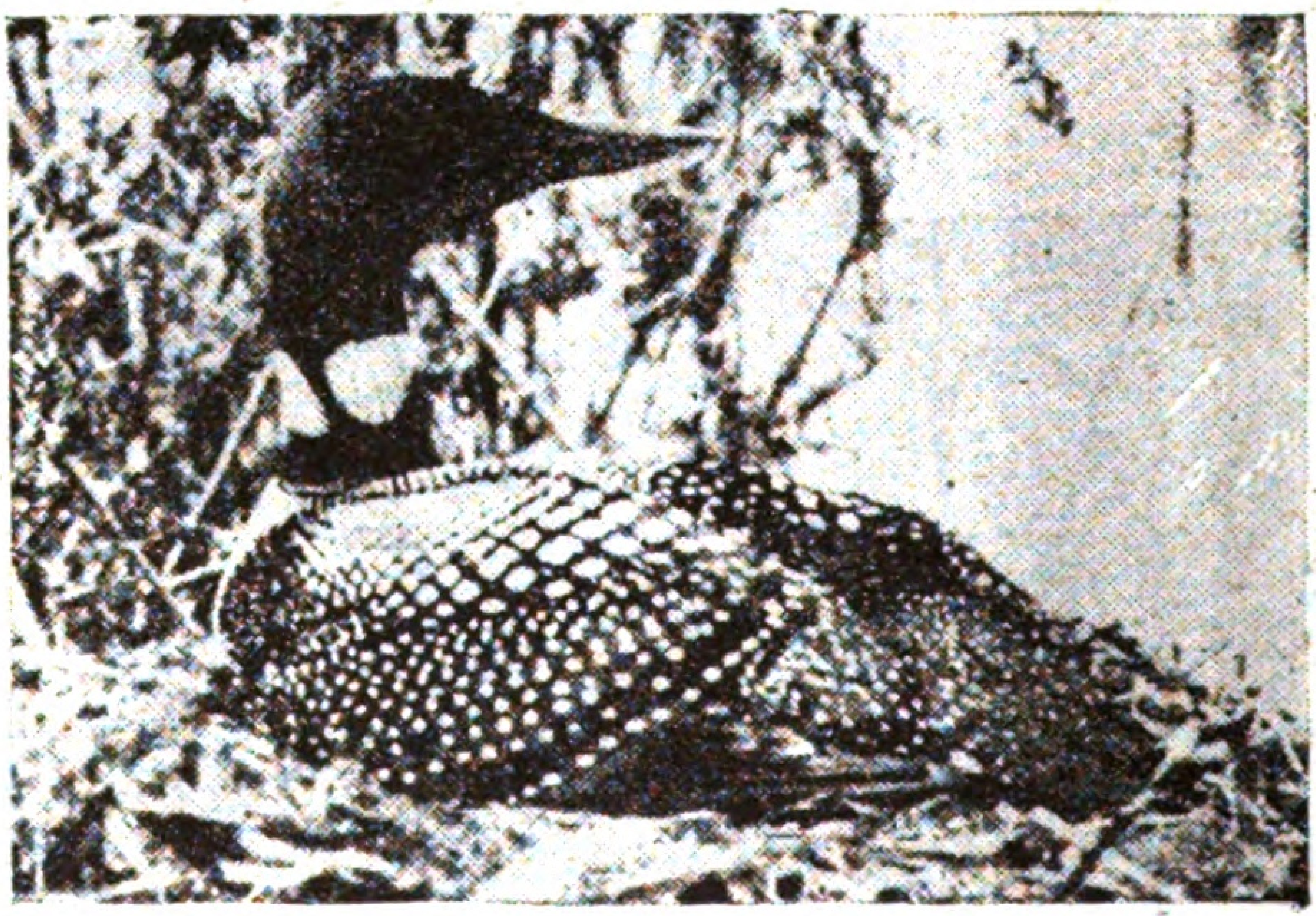
中水を離れぬから、[illegible]は脂肪が漲つてゐて、その脂肪は、刀の錆どめに最もよい。それ故か、支那では鳰を、油鴨とか刀鴨とか稱んでゐる。

誤譯される鶯

英語でナイチンゲールといふ鳥を、鶯と譯してゐるが、あれは飛んだ誤譯で、ナイチンゲールは、駒鳥に近く、しかも夜啼く鳥である。決して鶯ではないのだ。

また、支那で黄鳥といふ鳥を、うぐひすと訓じてゐるが、これも誤りである。支那の黄鳥は、鵯ほどの大きな鳥で、身體も名の如く黄色である。一名高麗鶯ともいはれてゐるが、決して鶯ではないのだ。

鶯は、主として日本特有な鳥で、歐米には産しないから、あの可愛らしいホーホケキョの聲は、本邦でなくては絶對に聞かれない。樺太と千島を除けば、我國なら北海道から臺灣の果まで、彼等の谷渡りをする聲は聞かれる。然し、朝鮮の鶯は、内地の鶯とは少々異つてゐる。その他何處にもゐない鳥だから、外國語で當て嵌まる名もない筈だ。



空中から玉筋魚を襲撃する阿比

漁夫の恩人阿比と鳥持網代

瀬戸内海沿岸地方では、年々春分から八十八夜頃まで、玉筋魚といふ小魚が澤山生ずるので、鯛や鱸の大群が、これを追跡して、外海から續々と入込んで來る。併し、鯛や鱸は、海底數十尋の深處に棲息するから、雲霞の如き玉筋魚群も、海面を游泳してさへ居れば、安全地帯にゐるやうなもので、強敵の顎の怖れは絶對にないのだ。

處が、こゝに、また別の敵が、その鋭い嘴を研いで待つてゐるから情けない。それが阿比といふ鴨ほどの大きさの鳥なのだ。

阿比はよく大空を飛翔し、水上を自由に泳ぐ。そして、碧空から小魚の群を見付けると、さつと下りて來て、素早く魚を捕つて食ふ、玉筋魚群には、鯛や鱸に劣らぬ強敵なのだ。

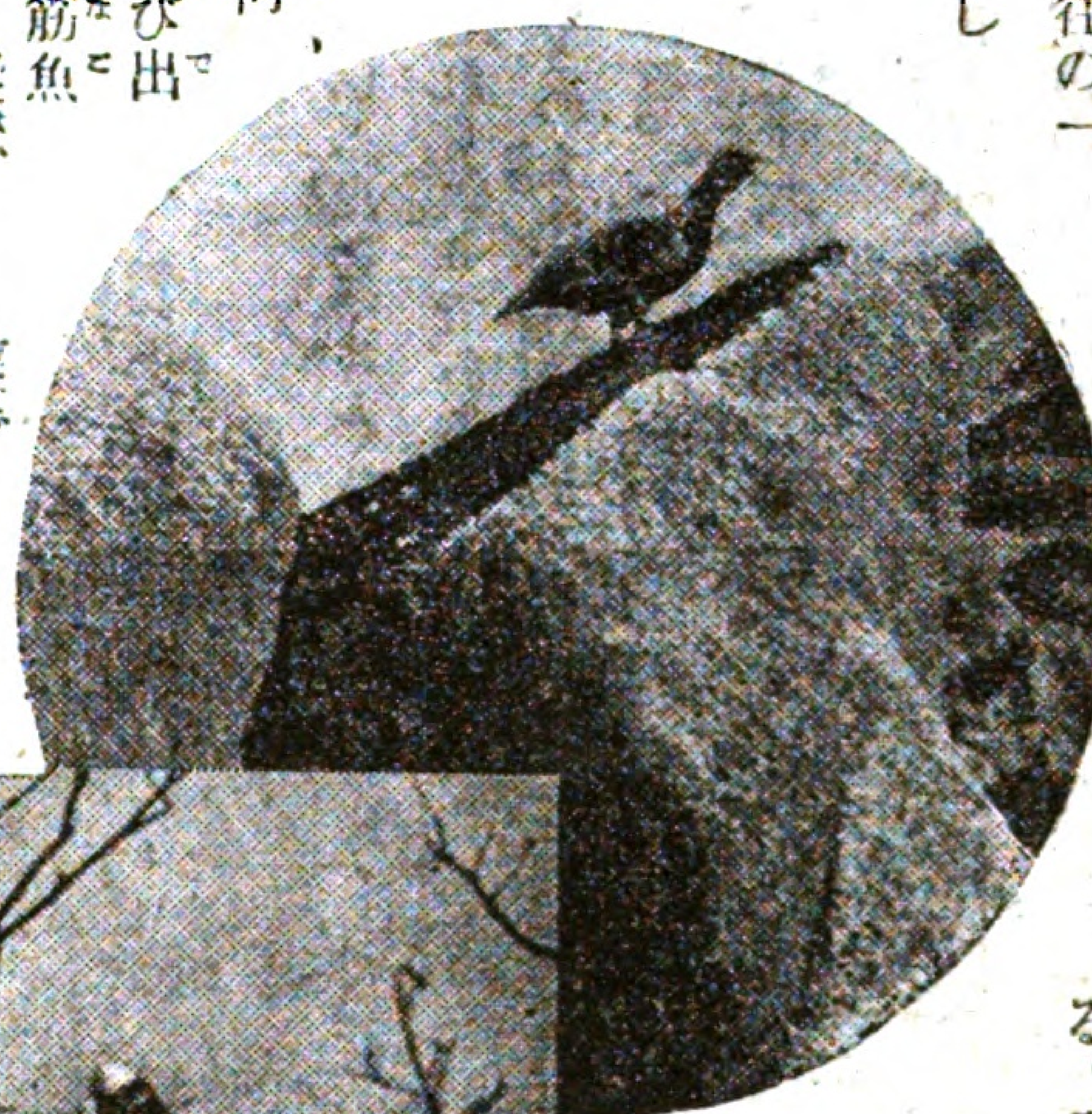
そこで、阿比の群に襲はれると、玉筋魚は、嫌が應でも海面から沈んで、身を隱さねばならぬが、沈めば下にも鯛や鱸

が、齒を光らせて待つてゐる、浮かべば空に阿比がゐる。進退谷まつて、浮いたり沈んだり、右往左往の一大混亂狀態に陷つてしまふ。

この崩れ立つた敵を、心の儘に追撃しては、捕らへ食ふ鯛や鱸の得意は想像されるが、餘り得意になつて、何時しか海面近くへ浮び出てしまふ。そして玉筋魚と思つて食ひつくと、豈計らんや漁夫の擬餌で、あつといふ間に、漁船へ釣り上げられてしまふのだ。

これが、鳥持網代といふ漁法である。そして、阿比なくしては成立たない特殊な漁法である。

故に、漁夫達が、阿比を大切にする事は大變なもので、若しこの鳥が、誤つて擬餌にかゝると遠く離れた海面へつれて行き、叮嚀に針を外づして逃がしてやる。全く漁家の恩人ではあるが、鳥魚の合戰を覗つて、思はぬ漁をする、これこそ本當に漁夫の利といふものだ。





雷鳥の變色
上 海拔二千九百米の野口五郎岳の頂上に於ける夏季の雷鳥
下 冬期白雪皚々たる頃の雷鳥

三度變色する雷鳥

日本アルプス連峰の槍ケ嶽、御嶽、乘鞍ケ嶽等を登山する者は、時に、異樣な鳥を見ることがある。大きさ雉の雌よりも稍ゝ小さく、鳩よりも大きく、背と喉と胸とに、黑と茶色の細かい横斑が一面に撒布され、兩翼の風切羽が純白、尾羽は眞中二枚が背と同じで、他は眞黑、腹は白く、脚は脛まで白毛が密生してゐる、これが、名にし負ふ雷鳥だ。

ところが、一旦冬となり、登山者の姿も見えなくなつて、滿山唯だ白雪皚々たる頃となると、この鳥は、全身純白と變じ、足は踵に至るまで白毛に包まれてしまふのだ。そして再び春陽に浴する頃から、もう一度色を變へて、褐色と黑の部分が多くなるのだ。

これ、取りも直さず保護色で、自分の體色を周圍の色に似せるのだが、こんなのは珍らしいから、動物學者は保護色を説明する時、好例證としてゐる。

椋鳥を愚か者とは以ての外

薄ぼんやりした田舍者を欺さんと、網を張つてゐる狡猾な都會人が、『いゝ椋鳥はかゝらんかなあ？』と、符牒に使ふ椋鳥とは、愚か者、のろ間等の代名詞だ。

椋鳥とは、そんな愚かな鳥であらうか？

東北地方では、夏期だけしか椋鳥の姿は見ないが、關西地方では、四季、農家の附近を飛んでゐる。そして最も人目につくのは、秋の半ばから冬の頃で、宛もよし、彼等の好きな木の實も熟し、稻も苅り取られた田圃には、彼等の好物で、稻の害虫たる螟蟲、切蛆、蝗、包虫などが、切株一面に棲んでゐる。小春日和の田圃の中を、切株から切株へと、彼等は嬉々として飛び廻り、思ふ存分飽食するのだ。試みにその胃嚢を檢べて見ると、一羽に平均二百匹以上の稻の害虫を一日に食べてゐる。これ程害虫驅除に盡粹し、農家に貢獻する益鳥が、他にあらうか？　それを何ぞや、愚か者呼ばはりするとは、以つての外の僻事だ。

併しまだ善い。農事を知らぬ都會人から、愚か者扱ひされても已むを得ぬが、先年、愛知縣の或る地方では、農民達から盗人の濡衣を着せられたことさへあつたのだ。

それは丁度、この鳥の保護令が出た時だ。麥を蒔いた田圃の中を、椋鳥が頻りに飛び廻つて、耕地をツツついてゐた。

『あんなに麥の種子をほじくり返す惡鳥を、保護せいなどと、以つての外だ。縣廳へ押し懸けて行つて、談判しべい。』

農民達は縣廳へ抗議を申し込んで來た。

『そんな筈はないが……』

縣の當局も不審に思ひ、念のため、これを捕らへて解剖して見ると、麥粒どころか、胃嚢の中は麥の害蟲で一杯だつた。農家のために、せつせと害蟲を啄んでゐたこの忠義者を、麥の種子を拾ふ盗人と見誤られたのだ。椋鳥に若し心あれば、餘りの心外さに悲憤の涙を絞しただらう。

かくの如く、農家からは誤解され、都會人からは愚か者扱ひされるが、彼は無心に、人類の爲に偉大なる貢獻をしてゐるのだ。害虫の跋扈に依つて穀物が不作したら、誰が一番苦しむのだ？　農家は不作を嘆じ、都會人は米價騰貴に青息吐息するのは、必然ではないか。それを思へば、農民も都會人も、この椋鳥を見たら帽子を脱いで『有難う』の一つもいつて好い譯だ。恩を受けつゝ、それを知らず、愚か者呼ばはりする者があつたら、その者こそ大愚人ではないか？　椋鳥を莫迦とは、いふ者の愚かさを告白するに外ならないのだ。（丁）

物識ビルディング

英國實業界の世界一くらべ

◇ミツドランド銀行　資本金二十二億ポンド（邦貨で約二百二十億圓）、預金高これまた二十億ポンドあり世界中遙かに傑出した大銀行だ。（八月號キングカード參照）

◇ロンドン株式取引所　仲買員はニウヨーク株式取引所の四倍も居り一日三百萬株もの出來高がある。一日平均出來高十萬株内外の東京株式取引所とは桁が違ふ。

◇デーリー・メール新聞　その發行部數二百萬。廣告も一番有效だといふので第一面の全面廣告料が一回一萬五千圓、それも半年位向ふはいつも豫約濟みだといふ。

日本人の金の使ひ方

内閣統計局の發表によると、一ケ年間に於ける日本國民の擧げる總收入額は百卅三億八千三百萬圓でうち九十三億三千萬圓（約七割）は生活費や娯樂費に使ひ、廿億三千三百萬圓（約一割五分）は稅金に納め、殘りの廿億二千萬圓（約一割五分）は貯蓄する。これを一人當りに概算すると收入二百廿四圓、消費百五十六圓、稅金卅四圓、貯蓄卅四圓の割になる。

八時間に六百足

八時間に六百足の靴が出來上る機械がフランスに現れた。圖の様に車輪裝置で靴の各部分を車輪の周圍の支持器へ置くと縫合其他の工程が忽ち完了する。



一時間十六億圓

メキシコ灣を流れる海水は金を豐富に含んでゐる。一立方メートル中に二セント（約四錢）の金を含み、一時間にそこを流れる潮流中に八億ドル（約十六億圓）の金がある勘定になるとフランスの發明家クロード氏が計測した。

ビールの今昔

ビールが日本へ初めて傳つたのはペルリが浦賀に回航した時である。その時日本の或る蘭法醫がビールをご馳走になつたのがそもそもの初まりで、その蘭法醫はビールの味が忘れられずとうとうオランダか

發明發見 珍ニュース

百年酒を二時間で

葡萄酒は古いのほどよいのであるが、今度フランスの或る釀造學者は電氣の作用で僅か二時間で百年貯藏の古葡萄酒と同じ成熟したものをこしらへる方法を發明した。

卵を二秒でゆでる法

食物を煮るのに、電流を直接食物中へ通じて行ふことを、この程米國の家事經濟研究會で試みられたが、これによると鷄卵なら二秒間でゆでられ馬鈴薯でも一分間で完全に燒くことが出來ると。

面白い能率法

工場などで人を使ふ場合、他國人を交へて使用すると、相互に競爭心理が働くので同國人同士を使ふよりは能率が餘計上がるといふことが今度米國職業局

ら釀造法の書物を取り寄せて造つた。

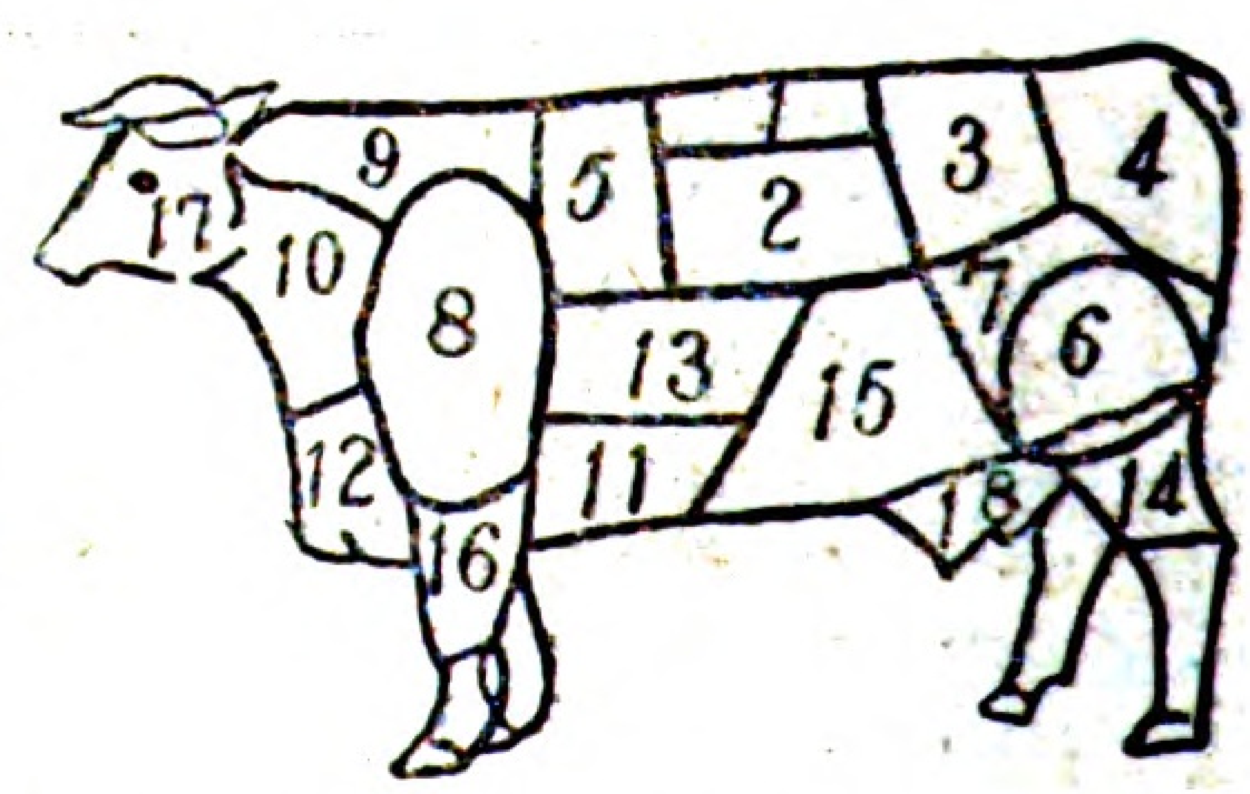
その後明治九年に純官營のビール會社を札幌に設け。一ヶ年二三百石を造つた。それが今では一ヶ年約九十萬石を造り、うち四萬石を輸出するやうになつた。

長壽者共通の五大特長

一、早起きの癖。
二、潔癖性。
三、肉食を厭ひ菜食を好む。
四。酒を好まぬ。
五、色情に恬淡である。

牛肉の等級早分り

圖は牛肉の等級を示すもので、番號の少いほど上等の肉が取れる場所、番號の殖すに從つて肉が低下する。



自動車は午後暴れる

最近警視廳管内の交通事故調査によると、自動車事故は一日の中、午前中は七・八六六で午後中はその約二倍半の二〇・〇八〇パーセントに達するといふ注目すべき事實が發表せられた。午後になつて事故の増す原因は主として運轉手の活動時間が長く身體の疲勞から來るものとされ、交通整理上その對策を研究されてゐる。

氷の新知識

◇ドライ・アイス　解けても水にならず氣體になるといふ氷。今度愈〻市場に現はれる。この氷の特長は手が觸れたら忽ち凍傷に罹る程冷たいことゝ、目方が非常に輕いことだ。

◇氷柱の中に火が灯る　氷柱の中に草花を仕込むことはもう古い。今度は氷柱の中に豆電球を仕込んでそれに電流を通じ氷の中に火が灯されるやうになつた。

◇天然氷　冬期に於ける山國の氷を保存したものだが、塵埃が多く品質は良くない。が單に冷やすだけになら使へるので今でも隨分ある。ひと夏に東京へ丈けでも輕井澤邊から一萬五千貫の天然氷が送り込まれる。

巡回劇場

獨逸では小村落に劇場がないといふので、トラックの兩側の四つの窓に映寫幕四枚を設備し村々を歴訪しながら、中から最新封切の映畫を映寫して一般に觀せてゐる。村芝居の進化だが、小屋を掛ける、必要もなく、木戸錢も取らぬところ近代味たつぷりだ。

で發表された。

飛行機は實用時代へ

飛行機の發達につれ、大西洋方面では郵便物や船客を、陸から船へ又は船から船へと飛行機で運ぶことが實行され出した。操作がすべて簡單で歸途時間も非常に短縮されるわけ。

生きた人間がフイルム

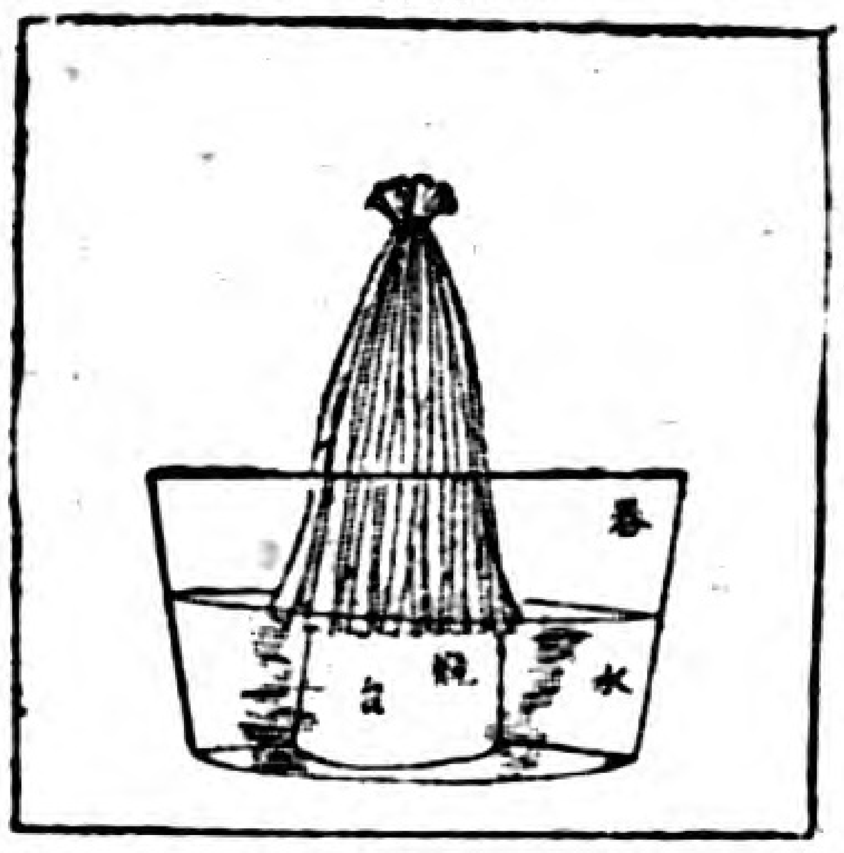
米國コーネル大學の教授リヒトマイエル博士最近X光線によつて生きた人間をフイルム代りにし胃袋の活動してゐる有樣を映畫に寫して見せて驚かせた。なほ同博士はX光線は醫術にばかりでなく、木材や鑛物など建築材料をX線に照らしその内部の裂目などを知つて災害を未然に防いだり、各種物質の結晶構成狀態を知つて材料の良否適不適を鑑別したり、或はX線の照射作用によつて下等動植物の新種を創生することが出來るなど興味ある研究を發表した。



夏のお台所 重寶記

牛乳の簡單な保存法

夏の牛乳は、冷藏函にでも入れておかない限り、朝の配達は夕方までおくと腐敗しますが、しかし次の樣にしておけば一日は充分保存出來ます。まづラシヤか、フランネルを一分ぐらゐの巾に、牛乳瓶より二三寸長めに切り、二十本ばかり用意して上端を全部揃へてしつかり結び、これを牛乳瓶の上からすつぽりとかぶせます。別にバケツか何かに水を汲み、中



央に牛乳瓶をおくのですが、瓶が水面に達しない程度に適當な台を置いて瓶をのせます。さうして瓶の上にかぶせたラシヤの細い布の下端は、水に浸る樣にするのです。かうしておくと、布を傳つて水が蒸發し、牛乳瓶を冷却することになります。但し蒸發するにつれて水の分量は減つてゆきますから、常に布端が水に浸つてゐるやうに水を加へることが必要です。

氷を永く保たせる法

氷をよく洗ひ、新聞紙でぴつたりと包んでおくと、冷藏庫用などは、一日二貫目の氷が必要とすれば、一貫五百目で足ります。

また病人用の氷などは、使用の度に新聞紙をはがすのも面倒ですが、それには新聞紙の代りに、あついタオルか古毛布でかたく氷を包んでおきます。よくおが屑のついたまゝ床下などに入れておく人がありますが、それでは使用の度におが屑を洗ひ落さなければならぬため、氷の減り方がずつと多くなります。冷藏庫がなかつたら、毛布に包んで木箱かバケツに入れ冷暗の場所に貯へます。なほ包んだ布は、溶けた氷のためぢきにびちや〳〵になりますが、濡れたのに包んでおいては何の甲斐もありません。幾枚も用意して包み代へなくてはなりません。



美味しい麥湯の作り方

大麥を一夜水につけ、笊にあげて風呂敷で覆つておくと、四五日後には芽が出ます。それをよく乾かしたら、焦目がつくほど炒つ

些細な注意

子供に衣服を着せてやる時、附紐やバンドや帶を固く結ぶ事は教育の爲めに惡い結果を來たします。然かも一度固く結ぶとそれが直ぐ習慣になつて、少しでも緩いと子供は『もつと固くして』と云ふ樣になります。日本人のお腹には、大人になつても紐の痕が溝になつて殘つてゐる事をベルツ氏が發見して、ベルツ氏溝と云ふ名稱がついてゐる位です。

○

子供を抱き上げる時、腋の所へ手を當てる事もお氣をつけなさい。胸を壓迫する事は大人でも子供でも同樣に惡い事です。兩手で『高い〳〵』などと云つて子供の胸の所を抱いて差上げるのは大層よくない事です。

草花はこうして

西洋草花は概して切花になつてからは開かぬ物が多く、日本花は開く花が多いのです。ですから洋花の切花は必ず開いた物を求めないと失敗します。

○

緣日などで求めた草花が萎れた際には、花の方を逆にさげて水をそゝぎかけ、土間にねかして上から紙を被せて置きますと水蒸氣が一杯に籠つて程なく花が生々として來ます。

○

切花には風と西日とが禁物です。何故なれば風や西日が當ると、花の面の水分を持ち去るため、十日保つものは一日で駄目になつてしまふからです。それから水を取替へる度毎に切口を僅かづつ切つて水揚げをよくしてやる事も是非必要です。

て麥湯にしますと、普通のものよりずつと香ばしくて結構です。

味噌を黴させぬ法

夏は味噌がすぐ黴て困るものですが、味噌の表面を平にならし、寒冷紗か白金巾をぴつたり被せ、その上に煎つた米糠をのせておくと滅多に黴は出ません。



御存じでせうか

腹巻は晒木綿が一等

幼児はお腹を冷やすとすぐ消化器の故障をおこして下痢などはじめますから、常に腹部は暖たかくしておかねばなりません。殊に就寝時には必ず腹巻をさせて腹部を保護することが必要です。お腹さへ冷えなければ、手や足の冷えるのは左程心配はありません。腹巻にはよくネルを用ひる人がありますが、ネルは子供の皮膚を刺戟する上に汗をはじきますから、その汗のために却つてお腹を冷やすことがあります。晒木綿を幅半分に折つて、二三廻りほど巻いておくのが一番簡單で有効です。



くさによく利く膏薬

赤坊の頭には俗に「くさ」といつて汁の出る吹腫物がよく出來ます。捨てゝおくとずんずん廣つて、頭一面かさぶたになつて實に厄介です。昔の人は、これは胎毒のためだなどと言ひますが、決してそんなものではなく、醫學上で言へば一つの濕疹です。醫者にかゝつてもなかなか治りませんが、素人に出來てしかも非常によく利く膏藥があります。それは、單軟膏十グラム、硼酸一グラム酸化亞鉛一グラムを煉合せたもので（藥種店で調合して與れます）この膏藥を朝夕一回づつ塗り込むのです。ひどくなつたのは手輕に癒りませんが初めのうちならきつと癒ります。しかしくさの療法は、藥よ



りもお腫物をかきむしらないことの方が大切で、痒いので掻きむしる。すると汗が方々へついて限りなく蔓延するといふ結果になり、いくら藥をつけても根治しにくいのであります。

有毒な蛾

白蛾と云つて夜になると燈光を取りに來る白い蛾がありますが、あれは毒ですから指で摘まぬやうになさい。黄色い蛾のうちにも毒なのがあります。總て蛾や蝶の翅についてゐる粉がかゝつた物は食べないのが安全。

蜘蛛と天氣豫報

(一)網が大きくて弱々しければ、翌日は無風好天氣です。

(二)網が小さくて丈夫なれば、翌日は風か雨がある兆です。

(三)雨が降り出しても蜘蛛が平氣で働いてゐれば、その雨は間もなくあがる兆です。

(四)雨が降り出すと直ぐ蜘蛛が姿を隱す場合は、その雨は二三日續く兆です。



冷藏庫

小林丑太郎

『あなた、コールドビーフはいかが?』

『もうたくさんだよ』

『それぢやトマトはいかゞ?』

『明日にしよう』

『ではカニサラダを召しあがる?』

面白いもんだい

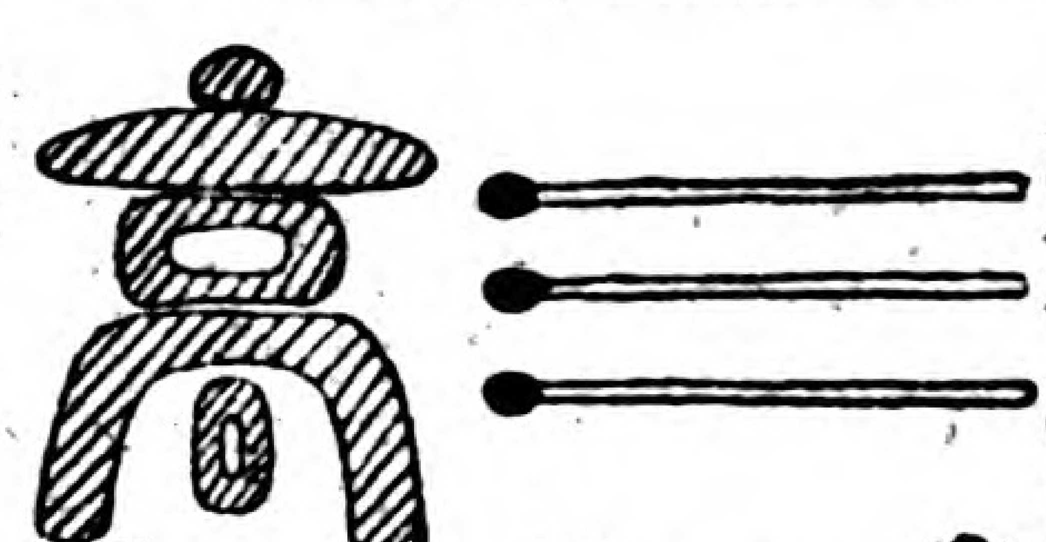
お子樣にお試し下さい

(1) お父さんのおいひつけで、ハガキをかひにゆき、五十錢銀貨をだしたら、五錢おつりがきました。ハガキを何枚かつたでせうか。

(2) 時計がなりました。見ると長い針と短い針とがまつすぐになつてゐます。今何時でせうか。

(3) マッチの棒を三本使つて、うまく組合せ、倒れないやうにして下さい。しばつてはいけません。

(4) 燈籠があると思つてよく見たら字でした。はて何といふ字でせう。



これは幼年倶樂部九月號「ちゑくらべ」問題中の一部です。幼年倶樂部には、毎號兒童を益する記事が豐富にあります。同誌をよませると、メキ〳〵智惠がつくとは一般の定評です。子供の讀物としては、まづ完全に近いものでせう。

興味溢るゝ大快篇!!





□世界の銀行王 巨人ジャニニの活躍

貧しい宿屋の小伜と生れ、早く父を喪つた子が、學校にもゆかずに、只熱心と精勵とで、遂に今日ドルの米國を切り廻すに至つた苦心成功の活模範！壯快無比！

□世界列強 政治の中心人物と其背景

マクドナルド、ムツソリニー、フーバー等、現代世界強國の主腦者達は、如何に生ひ立ち、如何なる立場によつて今後の展開を期して居るか？筆者は永井柳太郎氏！

△歌舞伎座上演脚本 **血笑記**……眞山青果

△長篇戯曲 **大津事件**……中村吉藏

△大衆小說 **忍兵秘帖**……今東光

△戀愛小說 **耀ふ黎明**……長田幹彦

□日本の現狀と拓務……侯爵 小村欣一

□お國氣質を訪ねて 各國大公使館巡り

□彼は何故出世が早かつたか

□名士苦闘時代のエピソード

□模範青年團を作るまで

□農村繁榮の實例を見る

―右は何れも『現代』九月號に掲載。天下無比の名記事揃ひ、一部定價五十錢―

これは漫畫で

(珍妙發明)

冗談と、これは漫畫ではありませんよ。正眞正銘、米國特許局がチヤンと登錄してくれてゐる新案特許品ばかりです。しかし人間の頭の働きもこゝまで來ると漫畫式になつてしまひますね。



(1)汽車の時間は切迫する、大急ぎだ、知合の婦人に會つた、女尊男卑の國、お辭儀しなけりや無禮咎めだ、兩手にトランク、置いてる暇はない、そこでちよいと頭を下げるとピヨコンと帽子のとれる仕掛を發明、脱ぐも被るも頭の調子一つ―稱して「新案挨拶帽子」



(2)これは又奇拔な「警報眼覺し床」朝寢坊には持つて來いの代物。リ、リ、リ、リンと折角ベルを鳴らしても起きないと、頭の上の眼覺し時計が憤慨して、ベッドの頭の方の蝶番を外して寢坊助殿を床へドサリと落す仕掛、そんじよそこらにもこのベッドの要りさうな人が見えますぞ。特許三二五四三七號。



(3)忙しい人には持つて來いの「高速度安全剃刀」とは卽ちこれ。謄寫版のローラーのやうに見えるのはこれなん金剛圓砥、ミシンの車に連結された紐でクルリ〳〵と廻ります。これを顏へあてゝミシンの踏板を足で踏みながら驀地に剃つて行くので、水も石鹸も要らず、便利至極だと發明者は申してゐますが、その安全の程度は保證の限りではありません特許六四六〇六五號。



(4)い、あばたも靨の譬の通り、靨さへあれば八人並の顏も十人並に見えようと云ふもの。尖端の丸い突起を靨を造らうと思ふところへ押しつけて把手を廻すとマッサージ・

はありません
明くらべ(


(5)

ローラーがグル〳〵と小さい輪を描いて廻ります。これでお望み通りの人工靨が出來る事請合と、發明者の自畫自讃。

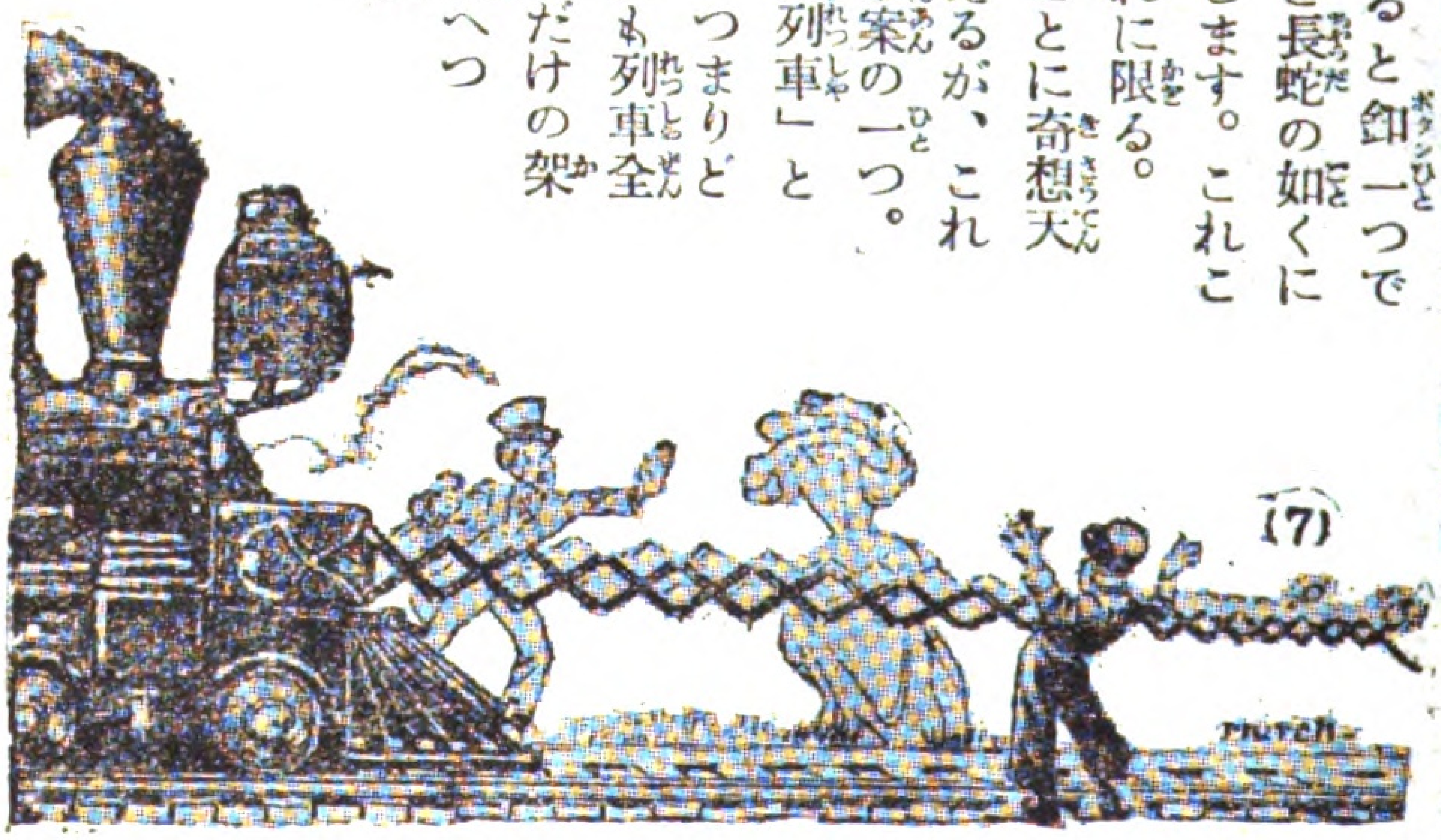
(5)美容術も世と共に進んで御覧の通り「新案毛生器」が出來ました。沙漠の如き頭の皮に小さい孔をあけては毛の芽(?)を植ゑて行くので、立派に生えると認められて特許はされてゐるものゝ、さてこの禿さんの痛さうな顏を見ては二の足を踏まずにはゐられますまいがな。

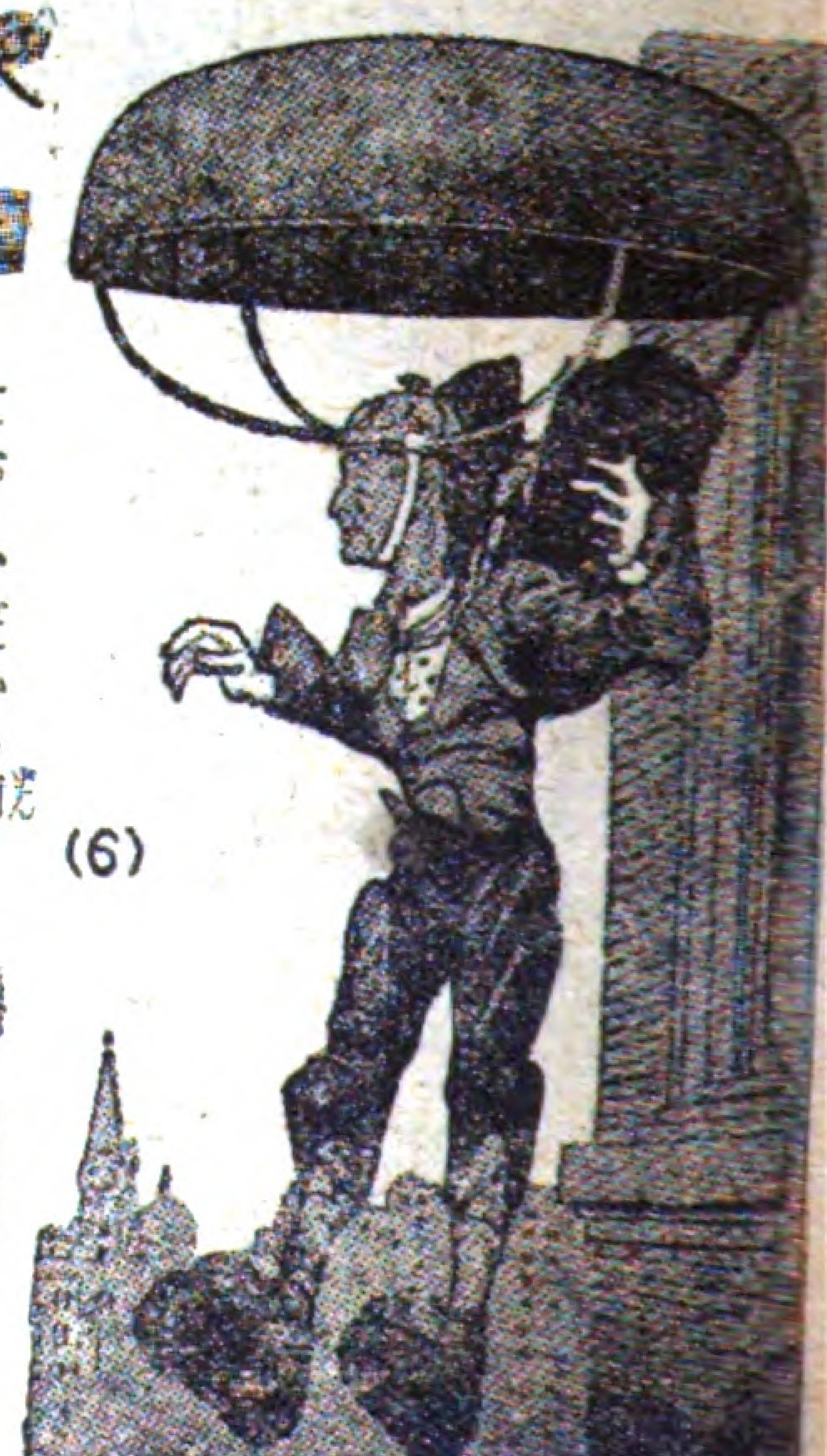
(6)西洋のチンドン屋と間違へるべからず。これなんパラシュート應用の火事避難器。何十階上から飛んでも地上に激突しないやうに御覧の通り素晴しい厚底のゴム靴さへ附屬してゐるとは、發明者お手柄々々。

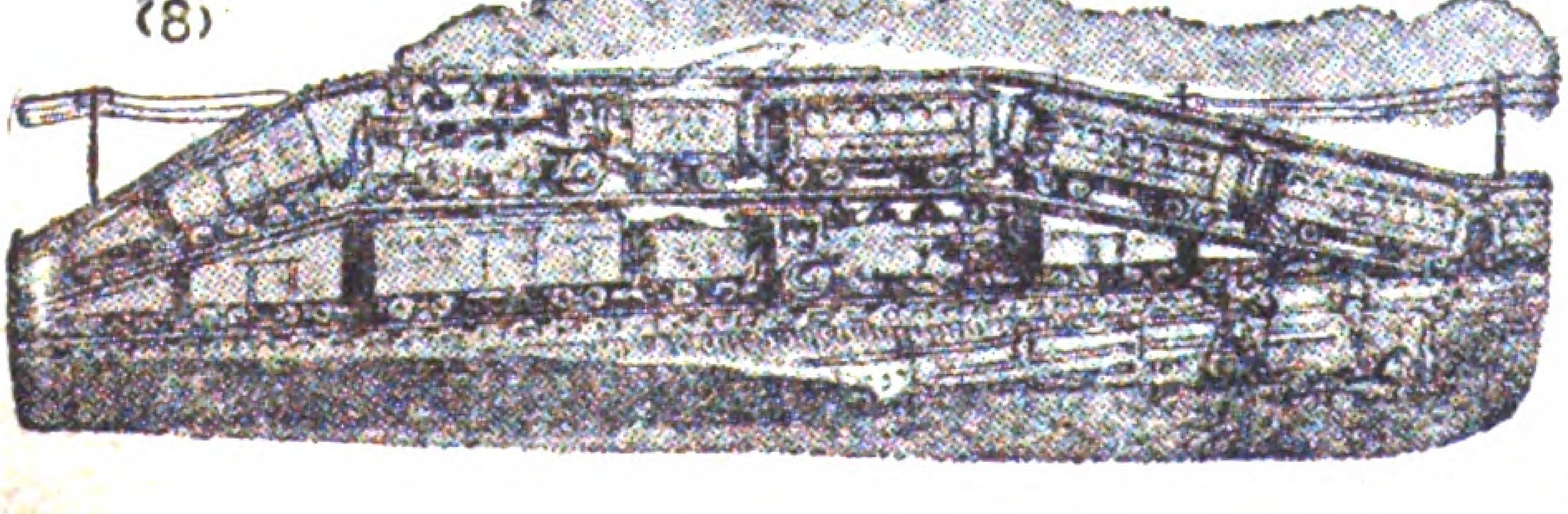
(7)踏切の自動開閉機だつてアテになつたものぢやない、時代遅れも甚しとあつて、機關車の前部へ踏切門をつける工夫。危險な箇所へ來ると釦一つでズーンと長蛇の如くに飛び出します。これこれ、これに限る。

(8)まことに奇想天外と見えるが、これも特許珍案の一つ。「跳越式列車」とは如何。つまりどの列車にも列車全體の長さだけの架柱橋を備へつけ、兩方の端で曲るやうにしておく、だから前部及び後尾の車輛は漸次レールの點まで斜面を作るやうにせねばなりません。アハヤ衝突と云ふ時、列車はピョコンと跳び上つて向ふの列車の頂上を通るのです。これさへ實現すりや複線も要らぬと發明者の鼻息中々に荒いが、さていつの事やら。

―をはり―


(7)


(6)


(8)



社會美談

捨兒七十人を育てた異國の母

函館毎日新聞記者　千葉稲城

一身を神に獻げて

函青聯絡船の乘客が、函館港に入るや、市の一角に、半天を摩する鐘撞塔のあるのを見るであらう。又、函館市民は勿論、滞在の旅客の耳に、朝晝晩の三回、警鐘かと擬ふ消魂しい鐘の音を聞くであらう。これぞ、土地の人が、ガン／＼寺と稱へる天主公教會の寺院の鐘なのである。

この天主公教會は、單に布教傳道によつて救靈の奉仕をするのみでなく、産業、教育、又は慈善事業に盡力貢献してゐる宗教團體で、それに從事する者は、男子ばかりでなく、多數の女子も加はつてゐる。何づれも私利私慾の念なく、一意專念、神への道に精進し、世のため人のためを圖らんと、終生童貞の誓を立て、身をも生命をも一切神に獻げて、力の限り働いてゐる。禁慾主義ではあるが、厭世主義ではない。現世に於ける難行苦行こそ、天國への道程、神への勳功なりとの信念の下に、法悦を感じつゝ、その事業に孜々として勵んでゐるのである。静かなる聖者の姿をした、勇敢なる人生の闘士達である。

今こゝに叙せんとするマリー・オネヂミ女史の如きもその一人である。函館に來住してから既に五十年、その間、兩親が貧困にして養育する事の出來ぬ子供を貰ひ、孤兒、棄兒を拾ひ取り、既に七十餘人の女子を養育したのである。今は何れも相當の所に縁付けて、女史は、慈母の如くに景慕せられてゐる。又、貧困者や病者には衣食を給し、施藥救療をなし、一家を再興し生命を取り留めたる者數百人の多數に達してゐる。正に愛の權化といふべきである。

然し今日まで、女史の事は殆んど知られてゐない。愼み深い女史が、自分の善行を一切口外しないし、聞いても話した事がないからである。

偶ゝ、女史の創立した聖保祿女學校の創立五十周年を迎へ、同校出身者の發起で、昨年五月、その記念祝賀式が擧行せられ、佛國大統領から犠牲勳章が授與せられたので、初めて、女史の善行が人の知る處となつたのである。天明年間の饑饉に、貧

民を救助した出羽の鈴木宇右衛門一家や、古くは寶暦年間に數十名の棄兒を養育した法均尼の篤行にも類ふべき、慈悲慈愛の發露である。

誰か道ふ、『子を生まぬものは、母性愛を知らず。』と。女史の如きは一人の子をも生まずして、七十餘人の慈母たるを得てゐる。或は母性愛に優る、神の愛の持主ともいふべきであらうか？

女子の渡日誓願

オネヂミ女史は、佛國サヴオア縣の生まれである。

佛蘭西と伊太利の國境に在るこの縣は、東南北の三方はアルプス山脈に圍繞せられ、交通不便な山國である。佛國政府は、こゝを罪人の流謫地に指定してゐるので、重罪犯人は皆こゝに移され良民と雜居して居る。進退の自由は拘束されてゐるが、待遇方法は日本よりも餘程寛大である。

罪人の配所を故郷に持つ事と、オネヂミ女史の童貞誓願と、



オネヂミ女史

如何なる關係があるかは判らない。しかし、幼き時、天女の如き女史の眼に映る罪人の姿から、『罪人も亦神の子である。悔悟遷善せしむる事を我が生涯の使命としたい。』さうした天性の博愛の情熱に動かされた事もあつたらうと想像される。

嘗て、佛國巴里を去る二十二里シャールトル町にある聖保祿會に、女史は入會したのである。この會は十八世紀初頭に創立され、今でも本部はこゝに在る。

然し、女史が入會した頃は、修道者の數は一萬數千の多數に上つてゐたので、何處かに、働くべき仕事を見出さねばならなかつた。そこで佛國各地、英國、南亞弗利加、ギリヤン、マチニック島に至るまで、健氣なる彼等の姿を見るに至つたのである。

亞細亞諸國には、十九世紀の中頃始めて、香港に東洋本部が設けられた。次いでマカオ、サイゴン、安南、トンキン、ラヲンに、彼等の慈善事業は施されて行つた。

最後が日本である。

『日本は野蠻未開の國と聞く。如何なる迫害を加へられるか知

れぬが、誰か行く者はあるまいか？』

當時の日本は、事情不明瞭なため、さう誤解されてゐた。

『私が參りませう。』大任を帶びて、健氣にも立つたのがオネヂミ女史外二名の修道女であつた。

そして女史一行三人が函館港に上陸したのは、一八七八年卽ち明治十一年五月二十八日、餘寒尙ほ肌寒き晩春の頃であつた。さなきだに陰欝な北國の空を眺め、見ず知らずの土地に上陸した三女史の心は何んなであつたらう？

その一人は、オネヂミ女史と同じく佛蘭西人であるが、中途病のために斃れた。他の一人は今尙ほ熊本縣下八代の修道院に勤めてゐる白耳義人である。

一人オネヂミ女史は函館に留つて、既に八十三歲の老齡に拘らず、現に博愛病院に働いてゐるのである。

前掛に棄兒を拾ふ

當時の函館は淋しい町であつた。言語風俗人情等、何等理解もない三人の修道女が、如何に當惑したか想像に餘るものがあらう。けれど彼等は、決して失望落膽しなかつた。涙含んだやうな陰氣な北國の空を眺めても、彼等は決して哀愁の涙は流さなかつた。

『私等の姉妹達は、慈善博愛の事業を普及せんため、世界各國に雄々しく働いてゐる。私等も今、この函館にその天地を見出したのです。私等に與へられた處女地を、神の教の鋤を以て耕しませう。』お互ひに心を勵まし合つて、一歩々々彼等の事業に邁進したのであつた。

如何なる事業を始めるにも、語學が最先に必要である。

『ハタ、ハト、マメ……』オネヂミ女史始め、三人の女は子供のやうになつて言葉の稽古を始めた。

その傍ら、彼等は人命救助の大切なるを感じ、高大森と稱する乞食部落を訪問した。高大森は今日の高森町で、今でこそ立派な小學校も建つてゐるが、五十年前は酷い處であつた。海岸から吹上げられた砂山の上に、蓙圍ひの掘立小屋が立並んでゐて、諸國から流れて來た浮浪人共が蛆虫のやうに棲んでゐた。多くは、北海道奥地から內地へ渡らんとする勞働者敗殘者が、路銀盡き、職業にあり付けず、遂にこの乞食部落に投じたものである。寒空に單衣一枚で顫へてゐる者などは珍らしくはない。病苦に呻吟し、命旦夕に迫つて苦悶してゐる者、食ふに食なく餓死を待つ者、その慘狀は目も當てられぬ有樣であつた。

『おゝ神樣！　この人々に惠みを垂れ給へ！』

これを見たオネヂミ女史が何條默視してゐられようぞ！　直ちに古着を買ひ集め、バケツに殘飯を入れて、殆んど每夜この部落を訪れて、彼等貧民を救つたのである。

『深切な毛唐の尼さん。』部落では、神の如く尊敬された。

『その赤ン坊を抱へてゐては困るでせう。私貰つて上げます。』病苦に惱せる母親の懷に、乳を求めて泣く子を見ると、オネヂミ女史は子供さへ貰つてやつた。そして年々十四五人は下

らなかつた。

後にはその深切をつけ込んで、女史の通路を見計つて棄兒をする者もあつた。謀られたと知つても、女史は些しも怒らない。

『棄てられた兒に罪はない。』

何の用意もないまゝに、前掛の中に棄兒を拾つて戻る事も度度であつた。然し、女史は女兒の外は養育しなかつた。それと知つてか女史の通路には決して男兒の棄兒はなかつた。この事でも、故意の棄兒である事が判る。

五十年間の丹精に依つて、女史の手で育て上げられた女子は、前にもいつた如く七十餘人の多數に上つた。今、悉く成人して、官公吏若くは實業家の妻となり、相當家庭の主婦となつてゐる。今こゝにその氏名を發表する事は遠慮するが、かゝる事實は、同教信者の悉く知つてゐる所であるばかりでなく、昨年五月二十八日、佛國勳章傳達式の當日、函館市教育會長ドクトル齋藤與一郎氏の祝辭演説が證明してゐる。

『當時予は、教會の下方に在る田澤病院に勤務中であつたが、オネヂミさんが衣食を抱へて、貧困者を訪問したり、嬰兒を抱き上げて來られたのを、數回目撃して、今この盛式に參列するは、感慨無量に堪へない。』

醫師法違反の罰金



オネヂミ女史は、佛蘭西で醫學校を卒業し、醫師免許狀を持つてゐるが、日本に於いて開業する意志は毛頭なかつた。けれど、前記の如

く乞食部落を訪問して、病苦に惱む者あるを見ては、他の醫師を招聘する程の資力もなく、又その數も二三人には止まらないから、豫ねて研究修行せる醫術に依つて、自ら之れを診察し投藥した。車代も藥代も取らず、病を癒して貰ふのであるから貧民の喜びは大變なものである。

『醫者でもない者が、病人を診察して投藥するとは怪しからぬ。』醫師會の反感を買ひ直ちに告發せられ、遂に醫師法違反の咎で罰金刑に處せられたのである。

國法は勿論枉ぐべきでない。けれど女史の如き神の行爲を、單なる潜り醫者と同罪に問ふのは、商賣敵とはいへ、餘りに雅量に乏しい行爲ではあるまいか。またオネヂミ女史の創立した博愛病院の繁榮を阻碍せんとする、卑劣な一手段とも謂はれよう。併し女史の純潔なる志業は、この位の事で汚損せらるゝものではなかつた。益々、その堅固なる信仰と、博愛の光は燦として輝き、其の事業は、聖保祿學校二代目の校長マリー・オリエー女史の後援を得て、資金も豐富となり、旭日昇天の勢で發展したのである。

オリエー女史は、佛國伯爵の令孃で、莫大な父の遺産を相續したが、終生修道女として博愛の事業に盡した。大正五年五月、オネヂミ女史の看護を受けて死んだのが、七十四歲であつた。オネヂミ女史の悲しみは一通りでなかつた。

佛國大統領の敍勳

斯くの如く、倦まず撓まず、五十年の長い間を函館に於ける慈善事業に盡したオネヂミ女史の功績は、枚擧に遑がない位である。そして、漸く實を結ぶ時が來た。

聖保祿女學校も五十周年の記念式を迎へ、昨年、三階の校舍を新築し、高等女學校に昇格すべく、目下、文部省に申請中である。

また同會の經營する博愛病院は、市郡民の信用篤く、益々隆昌に赴いてゐる。其の間、痛ましくも、明治四十年と大正十年の二度の大火に、二回とも類燒したのであるが、それも、一般市民に迷惑を懸けず、聖保祿會員同志の援助だけで、何れも再興する事を得た。これ皆オネヂミ女史の蒔いた種子の結んだ果實に外ならない。

けれど、斯る事柄も極秘に附されてゐるために、世間的には少しも吹聽されてゐない。それだけ女史の心の奧床しさがある譯であるが、餘香馥郁として洩れずにゐない。遙かに遠く佛國大統領の聞知する處となり、名譽ある機帶勳章を授與せられ、函館公教會教區長ウッド師を代理として、傳達式が行はれた。民間からは佐藤市長、齋藤教育會長等の代表的祝辭があつて、女史の善行は裏書きせられたのである。

外國婦人とはいへ、五十年間函館に在住して、日本婦人のために感化救濟の事業に貢獻したオネヂミ女史の篤行を、何ぞ、日本人が感謝の念を以て、これを稱へずにゐられようか！　女史の今後を祝福する次第である。（了）

當意即妙物語

黑光子

よく切れる唾

藩士か浪人か、三人連の大男が、肩を怒らし、大腕擴げて、大道狭しと、京は二條の大通りを、往來一杯に歩いて來る。

折柄秋酣はの紅葉の盛、東山へ遊山の人通りは織るが如くで有るが、三人は其の中を悠々濶歩して、通行人の妨げをする。アハよくばいたぶつて呑み代にする積、ともすれば、腰のだんびらを振廻し、手に了へぬあぶれ者だつた。悪い相手だと思ふから、身分の有るやうなものは、遠く影を望むで疾く横町へ隠れて了ふ。

折柄運悪く其處へ來懸つたのは、薩藩の名士大久保市藏、後の内務卿大久保利通公で有つた。同藩の有馬某と連立つて、京屋敷へ歸らうとする途中、バッタリ行遭つて了つたのだ。三人が往來狭しとのさばり返る隙を、檐下へ避けて遣り過さうとすると、三人は得たりとばかりに、ドヤ〳〵と公を取巻いた。

『これ、何の遺趣で、拙者の鐺へ當てた。武士の魂を打たれては勘辨ならん、挨拶さつせえ。』

三人は平生の手で、鞘當を言懸りに脅して物にしようとしたのだ。



『挨拶せえとは何としろと言ひなさるのぢやな。自體鐺へ當られたのは、貴公より拙者の方ぢやぞ。』

公は三人の前に只ニヤ〳〵笑つて立つて居る。

『何を己が。……挨拶しろとは、大地へ手を支いて詫れといふのだ。夫が嫌なら、立合ひしろ。』

三人は勢込んで刀の柄に手をかけた。

此の時途中で用事を達して居た有馬は、遥か一二町隔つて夫を見たので、忙てゝ飛んで來るが、危急の場合、及ぶべくもなかつた。

『手を支いて詫るのは嫌だ。……立合つて遣はさう。』

公が一歩退る時に、敵は早くも抜き放した。

此途端である。

公は喝といふ言ふと共に、不意に一團の唾を、眞先の敵の面上へとしたゝか吐きかけた。夫が餘りの意外だつたので、驚いて袖で拭かうとする瞬間、公は隙さず飛懸つて、抜討にバッサリ斬つて捨てた。

當意即妙の機智と、膽が据つた氣勢に驚いて、後の二人はアッと言つて、雲を霞に逃げて行く。

『白痴者め。』と、公が血刀の曇りを拭く時、有馬は始めて駈け附けたが、

『大久保、此奴がやられたのは、刀ではない、唾ぢや。和主の唾は能く切れるな。』

美談の華　逸話の泉

自ら向上せよ

アクバル大帝が一本の線を描いて、その賢臣バアバルに示しながら、

『どうだバアバル、この一本の線を、どうもしないで短かくすることが出來るか？』

といつてにやりと笑つた。

紙の上に描かれた一本の線、それに觸らず切らずして、短かく出來るかといふのであつた。

『出來ますとも陛下――』

バアバルは苦もなげにいつた。

『ほう、出來るか？』

『たとへば、私がある男の才能をそねむとしまする。それでその男の才能をどうかして自分以下にしたいと思つた場合、陛下は何となさいます？　また、ある男が多くの軍隊を持つてゐるのを羨ましく思つて、私が、その男の軍隊を自分以下の軍勢にしようと思つた場合陛下ならばどうなさいます？』



『さうちやのう、朕ならば、自分の才能を相手より向上させる、さうすれば相手が自分以下になる。また、次の場合は自分の軍隊をふやすやうに努力する、さうすれば相手の軍勢を自分以下のものにすることが出來る。』

『さうです陛下！　陛下のおつしやる通り、すべて他の長を羨みそねむ前に、自分自身彼より以上になるべく努力向上することが相手を征服する第一の手段です。この線とてもこの通り――』

といつて、バアバルは、大帝が引いた最初の線に平行して圖のやうに一本の長い線を引いた。

―――――（皇帝の引いた線）

――――――――――（バアバルの引いた線）

『かうすれば觸らず切らずに短かくする

ことが出來ます。たしかに前の線は短かくなりましたでせう。』

汝自身向上せよ、他を猜み羨むは愚也。

故なき加増



備中高松の城主清水長左衞門は、毛利家でも稀れに見る氣骨ある武士であつた。天正十年羽柴秀吉が中國攻めを始める前に毛利家では、家來達にそれぞれ加増の事があつた。誰も彼もほくほく者であるのに一人、長左衞門は苦り切つて喜ばない。小早川秀秋が不審に思つて尋ねた。

『大層不氣嫌だが、加増について何か異議でもござるか？』

すると長左衞門、

『大きに不服でござる。』

『それは何故ぢや。』

『抑ゝ加増の儀は、何か功勞あつて後に行はるゝもの。然るに今何の功もなく加増されるとは誠に不審でござる。恐らく羽柴が中國攻めの軍を進めるとの噂ゆゑ、長左衞門に二心を抱かせぬための加増としか思はれぬ。餘人は知らず、この長左衞門は義に背く男ではござらぬ、加増の儀はお斷り申す。』

きつぱりと反ねつけて高松へ歸つた。

されば、流石の秀吉も高松城には手を燒いて、遂に水攻めといふ窮策を用ひた。これには長左衞門も閉口し、飢と水とに苦しむ城中の男女の命に代へて自分だけ切腹して城を明渡した。壯烈な最期、情ある計らひに敵も味方もその死を惜まぬ者はなかつた。

葭戸を捨てる

浮世繪師の歌川國芳は或る年の夏貧苦に責められ米代にす可き物とてもなかつたので、葭戸を售らうと或る晩ひそかに脊に負うて隅田川の土手を通つた。すると同門の國貞が美しい妻を從へて涼みに出てゐたのを見て、つくづく思ふやう、



『自分と彼とは同じ一陽齋の門で學んだ、然るに彼は得意、自分は貧窮して米鹽の資にも事缺く有樣、これ全く自分の伎倆の劣るためである。』

と歎息し遂に葭戸を河中に投じて家に歸つた。それから刻苦精勵して後には國貞と並び稱せられるにいたつた。

無名の日本紳士

一九二一年の夏の日、大きな黒い牝馬が、重荷を積んで荷車を牽いて、バスチイユ廣場を通つてゐた。ところが、つるりとすべつたかと思ふと、そのままへたばつてしまつた。

『や、馬がすべつたぞ――』

といふなり、群集が物見高い彌次馬根性で、たちまち黒山のやうにたかつて來た。

中に、少々、親切氣のありさうなのが、馬子に手傳つて、馬を立たさうとするが、どうしても立たない。

そこへ、一人の日本紳士がやつて來て、しばらくぢつと見てゐたが、いきなり、上着を脱いで、馬の蹄の下に敷きひろげた。

そして、馬の脚を持ち添へて、叱！叱！とやると、馬はやつとのことで立つた。



道がすべ〲してゐるので、馬は立たうにも蹄がすべつて力が入らないのであつた。日本紳士はそれに眼をつけ、自分の上着を脱いで、馬の蹄のすべらないやうに敷きひろげたのであつた。

その親切と機智！　更に尊敬すべきは、馬が立ち上ると、馬子がお禮をいはぬさきに、上着をとりあげて着るなり、さつさと歩み去つてしまつたことである。

（倫敦、一九二一年六月三十日發行『イヴニング・スタンダード紙』より。LONDON "Evening standard" June 30 1921）

奈翁の慈悲心

ナポレオンが普魯西征討のため伯林に滯在した折のことであつた。

ナポレオンの部下であつたハツチフエルト公の陰謀が暴露した。公爵が敵に內

聴した手紙が、伯林で他の書類に交つて鹵獲されたのである。軍規は峻嚴である。ナポレオンは直ちに公爵を死刑に處するやう命じた。

　この報が傳はると間もなく、ハッチフエルト公爵夫人がナポレオンの陣營を訪ねた。ナポレオンはこれを引見した。公爵夫人は涙ながらに夫の助命を乞うた。ナポレオンは夫人の言には耳を藉さず、默つて一通の書狀を夫人の前に差出した。それは彼女の夫が敵に内通した陰謀の手紙であつた。ナポレオンは彼女がきつとこれは夫の筆蹟でないと言ひ張るだらうと待ち構へてゐた。



　と、夫人はその場に泣き倒れ、悲みと耻に破れた姿で、叫んだ——

『これは確かに良人の筆跡でございます。』

　この意外な答はナポレオンの胸を衝いた。彼は一瞬間考へたが、

『よし、この書面をそこの暖爐に投り込んで燃してしまひなさい。この手紙さへなければ、朕があんたの良人を罰する證據もなくなる。』

　夫人は直ちに手紙を火に投じて、夢かとばかり喜んだ。二時間後に死刑に處せられる筈の公爵は助かつた。

　ナポレオンは後に至つて、人に對ひこの時の事を次ぎのやうに語つた。

『朕は何物にも増して貞操のない婦人を憎む。朕は貞實で、親切で、優しい婦人を好む。朕がハッチフエルト夫人に對して親切を盡したのは、夫人が温良貞淑な婦人であることを知つたからだ。』

本社では今度二大

讀者の聲

○私は講談全集の一愛讀者です。最終もあと二冊となりました。これでお別れするのも惜しいことですから、あと一年川柳、落語などでもよいから、是非發行するやうに切にお願ひ致します。(宇都宮市　栗原幸一)

○從來の圓本の飽かれるのは、餘りに長期に亙るのと、今一つは内容の公約を濫りに破つて恬として顧みない結果だ。ひとり貴社ばかりは公約を重んじ、實質を充し、短期に確實にされるためだ。修養全集が完成したら、實業全集とか趣味の全集かを出して貰ひたい。六冊位のもので結構です。(長崎　大井生)

○記者諸先生には相變らず御奮鬪のことゝ思ひます。他社で出した全集を見ると始めは善く造り、後になる程惡く、頁を減ずる等なので、御社のも失禮ながら始めは信じませんでした。けれども今日に至るまで我が講談全集は何時になつても良くなるばかりです。私は御社にお願ひがあります。是非續篇を出して

全集も近く完了!!

何をやるか?

それは何であるか？あと一ヶ月、十月號まで發表を差控へさせていただきます。素晴しい出版にしたい考へです。

これこそは、誰方にもキットお喜びが願へる

と信じます。どうぞ皆様！その日をお待ち下さい。『明るい日本』にしたい私共の希望はこの出版で達せられるに違ひないと思ふ。眞に面白いものです。

さて何だらう？　何でせう？……

快報

本誌十月號に新計画の詳細を發表します

この玉手箱！　次號において蓋が開きます。御期待下さい、刮目してお待ち下さい！

東京・本郷　大日本雄辯會講談社

下さい。（千葉縣　大澤新一）

○

拜啓　貴社發行の二大全集、卷を増す度にいよ〳〵良く面白くなるには實に驚きましたこの全集が來たら、もう外の本はそつちのけで讀み耽つて居ります。面白いですね。深く感謝して居ります。完了したら又、他の爲になる全集を出して下さい。お願ひ致します。（台北　黑田清一）

○

これがほんとうに家の寶だと思ひます。金色燦然とした二大全集もいよ〳〵全部揃ひます。これが揃つたら特別の本箱を拵へて永く保存したいと思つて居ります。これからも是非、こんな立派な全集を引き續き出して下さいませ。記者様おからだをお大切に。（水戸市　小林ゆみ子）

○

以上の様な通信は日々數十通、全集編輯に今は山と積まれて居ります。この御厚志は決して無駄には致しません。小社でも幾種かの計畫について目下研究中であります。兎に角、來月號までお待ち下さい。これこそは讀まずに居られぬといふ、素晴しい大出版計畫を發表いたします。（記者）

抱腹絶倒落語の落



○藪醫者



或る長尻の醫者が、さる商家の主人と話が合ひ、よく遊びに來ては外科と本道の話を始める。この話が初まると、とても長くて皆が閉口して、蔭では箒に手拭を冠せるやら下駄に灸をするやら大騷をするが常。すると或夜主人の留守にこの醫者がやつて來て、店の者をつかまへて話し出した。皆は氣が氣でない、外科と本道が初まらない中に歸さなければならないと、いろ〳〵智慧を絞つた末、近頃この邊には追剝が出るから御用心なさいとおどす。聞いて醫者は早々に歸つて行つたので、一同やれ〳〵今夜は助つたと云つてゐると、暫くしてから店の戸を敲くものがある。開けてみると先刻の醫者が襦袢一枚で顫へてゐる。冗談から駒が出た。やれ氣の毒、だから云はぬことではない、追剝にお逢ひなされたであらう」と云ふと「いや〳〵さうではない。途中物騷と聞いた故に宅へ歸つて衣類を脱いで來た。もう大丈夫だから、これからゆつくり外科と本道の話を」

○血脈

この頃地獄がめつきり寂れてしまつた。どうしたわけかと段々探つてみると、信州善光寺に血脈の御印といふのがある、多くの善男善女が之を戴いて捺して貰つてどし〳〵極樂へ行つてしまふ爲と判つた。そこで閻魔大王會議を開いてその對策を講ずること丶なり、



石川五右衞門に命じて、血脈の御印を盜ませることになつた。五右衞門承つて善光寺へ行き、首尾よく奪ひ取り「てえ有難や忝けねえ」と臺詞口調で押戴くと、そのまゝどろどろと極樂へ——

○粗忽長屋

同じ長屋の隣同志で名代の粗忽者が二人。一人はまめな男だが、一人は至つて無精者だ。或日まめな男が淺草の仁王門の前を通る

と行倒れがある。見れば隣の男にそつくり、驚いて飛んで歸り、例の無精者を引張り出し、「お前は淺草で行倒れになつてゐる、死骸を打捨つて置くつて法があるか、早く引取れ」と云つて仁王門の傍へ連れて來て、死人を負ぶはせる。するとその男は「何うも不思議だ。俺の背中の死骸は俺だが、背負つてゐる俺は誰だらう」



○猫の茶碗

他師といふのがある。これは地方へ出掛けて骨董品などの掘出し物をする男のことで、この他師の一人が、中仙道筋の茶店に憩つてゐると、えらい物を見つけた。それは茶店の飼猫が飯を食べてゐる食器――だが、確かに繪高麗の梅鉢の茶碗とみた。捨値に踏んでも三百圓。猫の茶碗にする位だから無論親爺は知るまい。一つこれは巧く持ちかけたいものと、さま〴〵の浮世話の末、「私は猫が大好きだ、この猫を是非讓つて貰ひたいが、何うだ呉れないか」ときりだした。そして鰹節代りだと云つて三圓の金をやつて親爺を納得させ、それから徐ろに猫といふものは食器が變つては飯を食はぬものだから序にその茶碗を呉れ、と云ふと親爺は、夫なら他の茶碗を差上げませうと云ふ。いや他の茶碗ならいらぬその茶碗がいゝと云へば、親爺は、その茶碗は上げられぬ。かう見えても、この茶碗は繪高麗の梅鉢の茶碗で、三百圓なら何時でも賣れます。といふので他師は案に相違の面持で、そんな立派な茶碗を何故猫の茶碗などにするかと聞けば「でも、お蔭で時々猫が三圓で賣れます」



○本膳

庄屋からの招きで本膳が出る。ところが村人は誰も本膳の食べ方を知らない。で手習の先生の處へ聞きに行くと、先生も當日招かれて行くから、萬事拙者のする通りにしたら間違ひはないといふので、さて當日先生を上座に据ゑ一同膳に向つた。すると先生誤つて里芋の煮付を膳の上へ轉がした。一同もその通りにやる。また先生が誤つて飯粒を鼻の先へつけると、また一同がこれを眞似る。先生苦



い顔をして、そんなことまで眞似るのではないといふ積りで。隣の男の横腹を肱で突く。これを又さうとは知らず順々に突いて行く。すると末席の男は肱を上げて「先生この肱は何處へやる」

○後生鰻



淺草天王橋の傍の鰻屋は商賣が暇だ。あまり景氣がつかないので、或日鰻でも裂いて商賣のある樣子をしようとしてゐると、表を通りかゝつた一人の隱居が、觀音參りの歸道で、佛心がついてゐるから、生あるものを殺すは無慈悲と、鰻を買取つて、來世はこんなものに生れて來るなよと云つて、天王橋の上から川へ捨てた。こんなことが一二度あつたので、鰻屋はこれはよい商賣と、隱居の通るのを見計らつて、鰻を俎の上に置いて高く賣りつける。すると或日鰻が品切れになつてゐる處へ隱居が通りかゝつた。亭主は突嗟の策略。傍にゐた赤兒を裸にして俎の上へ乘せた。見て隱居は吃驚仰天、飛んでもない事と。早速買取り。來世はこんな家に生れて來るのぢやないよと云つて天王橋からドブン。

○王子の狐

向ふ意氣の强い若者が王子の近くの田圃道を歩いてゐると、一匹の狐が藻を冠つて跳ねてゐる。はゝあ俺を化かす氣だな、面白い化かされた氣になつて、此方で狐を釣つてやらうと思つてゐると、やがて狐は粋な女に化けた。そこでいそ〳〵話しながら行く、時分時なので、連れ立つて近くの扇屋といふ鰻屋へ上り、酒を飲む、男が上手にすゝめるので女は殊の外酔つて、床を枕に寢てしまつた。男はその隙を見て土産の折詰なども拵へさせ、勘定は女が拂ふからと立去つてしまつた。暫くして女中が座敷へ來てみると、大きな尻尾を出した女が寢てゐるので吃驚してかくと知らせる。氣の早い若い者が棒切れなどを持つて座敷へ飛込んで打ちのめすので狐は大怪我をして逃げだした。こちらは最前の男、家へ歸つて今日の話をすると、「それは大變、狐は王子稲荷のお使であるから、その狐を欺して

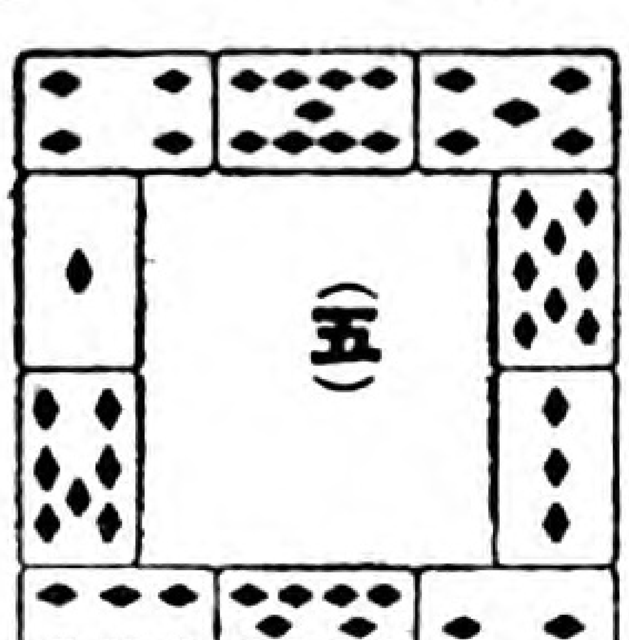


は何んな祟があるか知れぬ、早速御詫びに行くがよい」と云はれて、牡丹餅の折をもつて王子へ行き、狐の穴は何處だらうと探してゐると、奥の方で唸聲が聞えるので、さてはここだなと思ひ、穴の入口で遊んでゐた子狐に牡丹餅の折をやり、詫を言つて歸つて來た。後で子狐はその折をもつて奥へ行く、鉢卷をして唸つてゐた親狐はそれをみて「坊やそんなもの食べるんぢやないよ。この頃人間たら油斷も隙もありやしない。それだつて馬の糞かも知れない」



智慧くらべ解答

（一）（イ）蛙に睡蓮（ロ）三すくみ（ハ）八ツ手と池中の金魚（ニ）庖丁に俎板（ホ）飛行機とビルディング（二）三角形二十（三）正方形四十七（四）（1）遠江は十十三合計二十三、石見は五八三合計十六だから遠江が兄（2）三河（身皮）の國（3）チの字（4）箸（八四）（5）秤の分銅（6）伯母（六）答の數から二百五十を引いて、殘の數の終の二桁が生れた月で、初の桁が生れた日です。

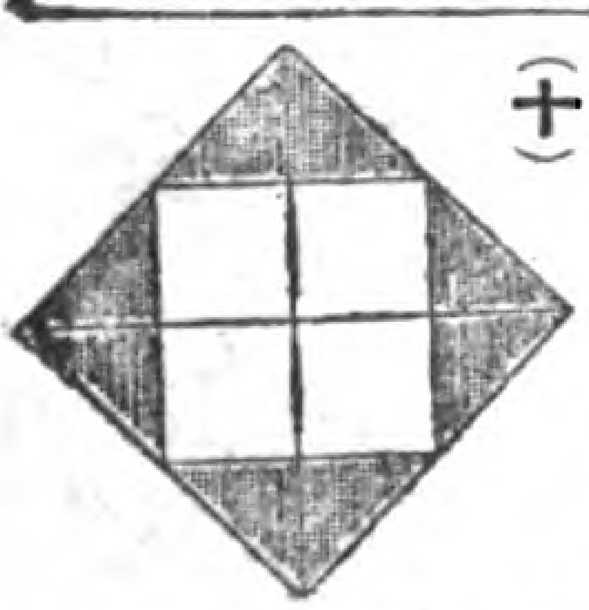


（五）

（七）圓い輪で實驗して御覧なさい。

A自身は二廻轉します。（九）三〇一（十一）袂から南京豆を一個取り出します。そして殼をつぶして中の實を取出し、默つて自分もよく見、友達にも見せてからムシヤ〳〵と喰た

（十）

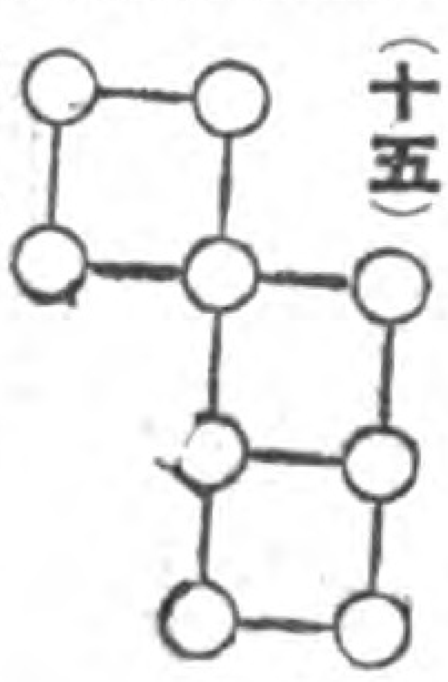


べて了ひます。どうです種を明して了へばフフンでせうが。（十六）圖中の（チ）を引出して（ヌ）の所から矢の方向（ル）の方へ通し（チト）を親指の方へ（チヘ）を小指の方にな

（十二）



（十五）



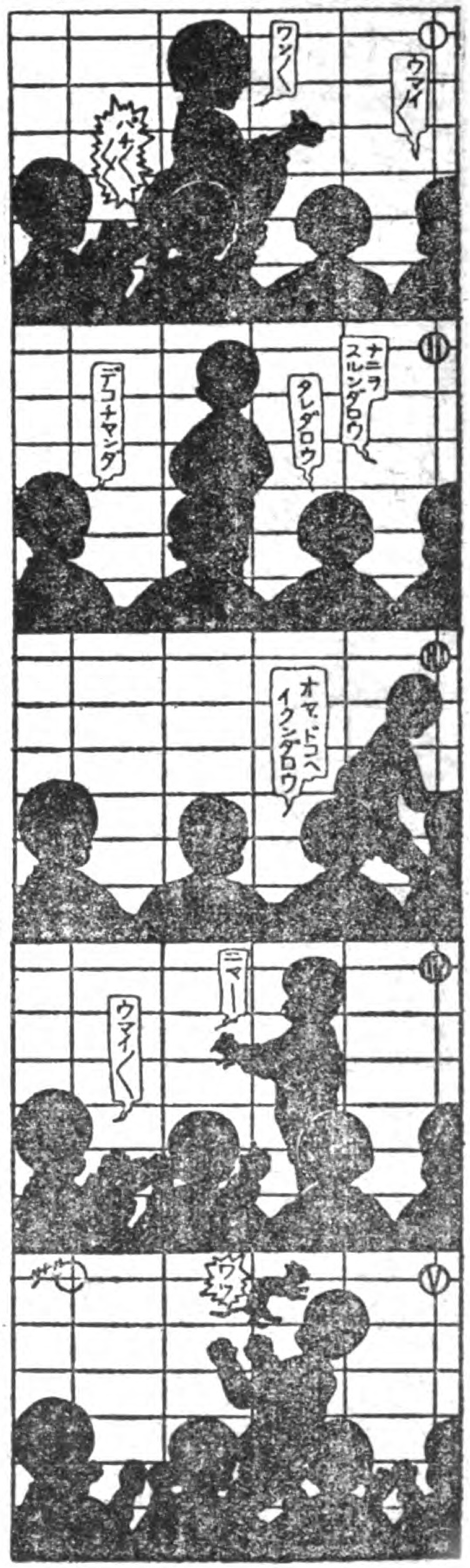


る様に注意してスツポリと手首（イ）に冠せ（リヌ）をくぐらせれば譯なく二人は別々になれます。（十七）男
1女　10男　2女
8男　5女　9男
6女　3男　7女
12男　11女　4夫婦



娯樂室

影繪の失敗　田中悟(作)



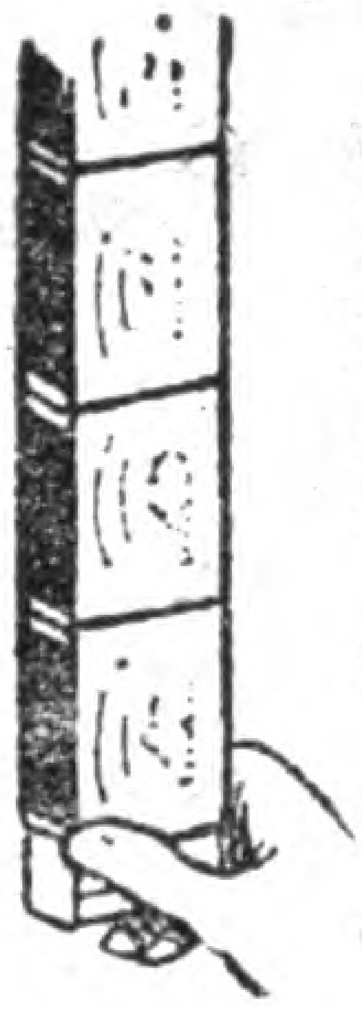
滑稽問答　**商賣往來**

○『あの料理番は苦勞人だね。』
▲『そりや酸いも甘いも皆な承知さ。』
○『飴屋で藏を建てたとよ。』
▲『餘程のばしたと見えるな。』
○『自動車屋の嫁が身重になつたとさ。』
▲『そのうちパンクするだらう。』
○『植木屋の伜が又商賣換をしたさうな。』
▲『氣(樹)が多いからさ。』
○『活動俳優にも心配はあるさうだ。』
▲『そりやファン(不安)が多いからだ。』

マツチ箱を縦に幾つも重ねる法

(謎々)**電話とかけて楠公紋所と解く　心は、見ず(水)に聞く(菊)**

マッチ箱を縦にいくつも重ねる事が出來ますか。そら〱、落ちるでせう。私にやらせればこの通り、十でも二十でも。え、



箱をひきぬいて次々へはめて行くのはずるいって。だつてそこまで考へつかないのがわるいんですよ。

話　○**無駄使ひ**

院長退院して行く患者に向ひ、『貴君の病氣の癒つたのは全く平生身體が丈夫だつたからですよ』



患者『失敗つた。では入院するンぢやなかつた！』



○**芝居ごつこ**

芝居ごつこをしようとして、一番上の兄が弟を順々に見ながら
「お前は何がしたい。」
「僕は大食ひだ。」
「お前は。」「僕、お金持。」
「お前は。」「大將になる。」
さて今年四つになる末の弟に
「坊やは何したいの。」
「坊、おしつこちたい。」

○**詰將棋新題**



持駒　角・桂

四段　小林泰桂出題

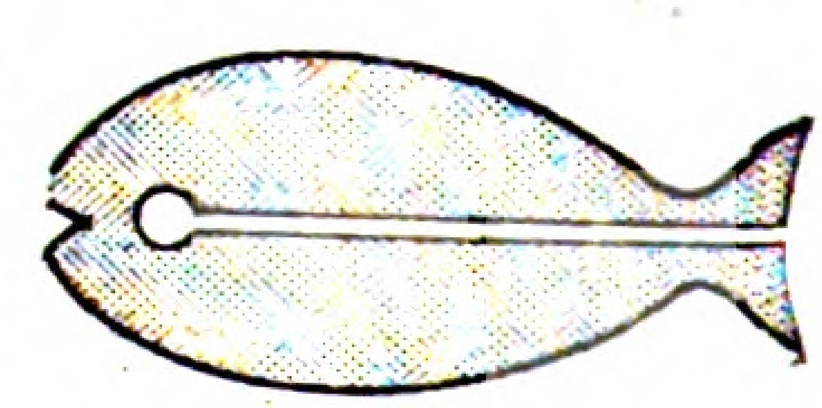
○巧妙なる遁辭



——今日は君濟みませんが五圓用立てゝくれませんか。
——生憎こゝに持ち合せがないんです。
——お宅では？
——みんな達者でゐます。いやありがたう。

○遊戯 水上滑走魚

畫用紙でも古葉書でもよろしい、魚の形を切りぬき眼玉から尾に向つて、圖のやうに切込んで、ミゾを作ります。これを金だらひに水を入れ浮かし、眼玉に一二滴水油を落すと魚は動き出します。魚の表面を水で濡らさぬやう御用心。





↑漫畫 岩田二郎（作）

手紙代りの都々逸

○僕の胸中推察なして
迅速來車を希望する

○名譽回復訴訟の件を
僕は贊成やりたまへ

○尻取り言葉

●坊やの好物飴チヨコよ●
●芳つちやん君は何が好き。
●君とおんなじ飴チヨコさ●
●さア〱仲好く食べませう●
●ウマイ〱おゝウマイ●
●いくら食べても飽きないわ。

○殘暑

和田垣謙三博士著「消遣遊」より

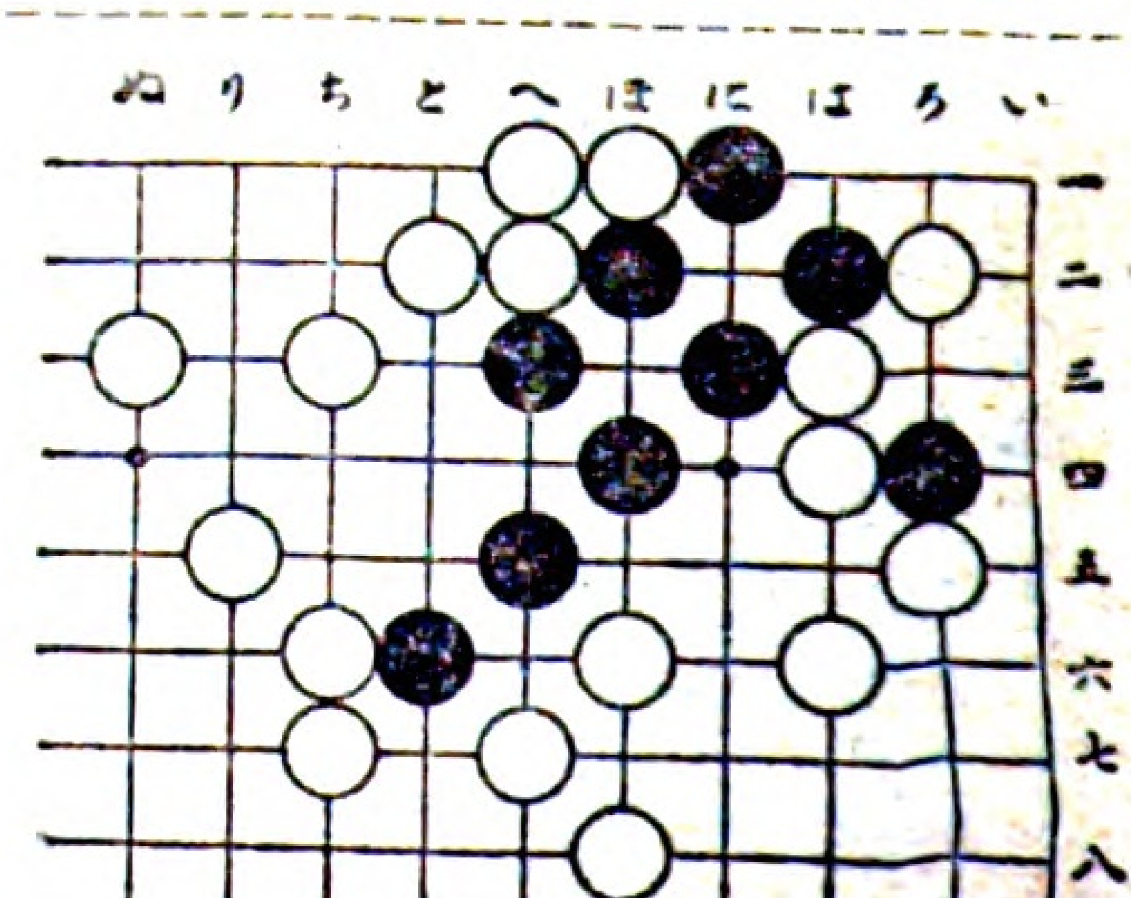
箱根山朝夕冷氣覺え候
御地はさぞや暑う候殘暑

○明治維新當時の狂句

○芋の蔓延びて葵を枯しけり（薩藩の勢力）
○二百年むだ飯喰ひの八萬騎（旗本の無力）
○蟹文字の横へそれ行く人心（歐化流行）
○開化とは開けて化る姿なり（變態の歐化）
○筒つぽの袖ない人がたんと出來（人情輕薄）
○これからは目玉が青くなる斗り（混血兒出生）
○赤髯の涎を舐めて開化ぶり（西洋崇拜）
○アーメンは蕎麥屋で賣ると下女思ひ（基教傳道）

○詰碁新題

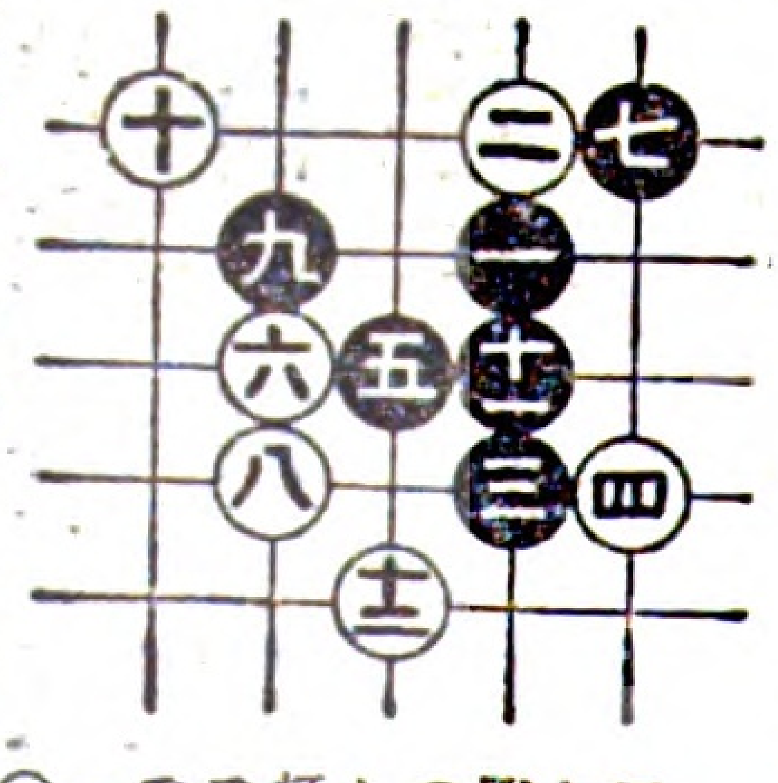
黑先、結果如何



五段 福田正義出題

○聯珠新題【錦の山】

珠叟 楠化坊出題



此題は黑(十二)から追詰勝があるのを見落して斯う打つたのです其處で白は(二)と(六)の間へ三聯に打てば能いやうだが未だ追詰の手がないと見て圖の如く打つて味を殘したが。此(十二)が緩いので黑は無造作に勝ちました、それはどうでせうか。

（本欄解答は三七六頁）



風雲天満双紙

佐々木味津三
挿繪　小田富彌

怪しの女行者

一

――使ひは無論平八郎の出馬を促すために、そのお支配頭たる東町奉行高井山城守が、特に急使として差向けたものでした。前夜の奇怪な出來事のあつた殆んど直後とも言つていいその翌朝に美しい娘が二人までも、更にきくさへもいぶかしい變死を遂げてゐるとの事でしたので、平八郎は即座でした。

『正一郎！』

『はツ。』

『助次郎にも傳へて、すぐさま外出の用意せい！』

だが、まもなく姿を見せると、慓悍兒はや〻憤り顔に復命いたし

ました。

『怪しからんではムりませぬか！　平山様は塾頭と芳音様との一條を根に持つてでもゐると見えまして、何度申し傳へましても、お支度にかゝりませぬぞ。』

　事實としたら、いかさま股肱の同心にもあるまじき態度と言ふべきでした。たとへ戀を失なつたことのためにいか程心は亂れ狂うてゐたにしても、それとこれと公私を混同するのは許しがたき事でしたので、當然平八郎の口に激怒の言葉が上るかと思はれましたが、まこと大愛です。部下を思ふこと平八郎のごとき大度量人でなくば見られぬ寛仁大度な胸の廣さでした。憫むもののごとくに微笑しいしい助次郎の居室を訪れると、同じ微笑をつゞけ乍ら重々しくそして穏やかに言ひました。

『さ、行け。』

『……』

『大丈夫ともあらうものが、婦女子の愛を失うた位に心萎して、恥しう思はぬか。早う一緒に行け。』

　だが助次郎は青ざめた面に兩眼を血走らせて、只默然としたまゝでした。鬼神ですらもその厚味ある人格と温容に接したならば、感奮興起すべきが當然であるのに、おぞましくも立ち上らうとさへしなかつたので、つひに激怒した叱咤が發せられるだらうと豫期されましたが、平八郎は飽迄も寛仁大度な棟領でした。

『さうか。では心の鎭まるまで氣まゝにいたせ。』

　怒らず、咎めず、穏やかに言ひのこしておくと、正一郎只いち人を引隨へて、先づ先に高麗橋袂の小間物問屋松兵衛方に行き向ひました。出ると同時、憤りそのもののごとくに言つたものは慓悍兒です。

『平山様もよくよく情けないお方ではムりませぬか。ほかならぬ先生のお言葉に叛くとは何ごとでムりまするか！　あの思ひ上りやうでは、ゆうべの一條も片手落なお處置のやうに思ひ僻んで、何ぞおぞましい事を仕出かすやも知れませぬぞ。』

　多憤多血な正一郎としては、尤もな憤りであり、また尤もな懸念でしたが、しかし平八郎はおのが薫陶の力の大きさを固く信ずるもののごとくにぴたりと押へて言ひました。

『助次郎もこの中齋が手がけた門下ぢや。わしは死に學問授けてゐぬわ。』

　何等の懸念もなささうに言ひすてると、濠ばた沿ひに道を急ぎました。その行き行く濠ばた沿ひの並木道は、立ち並ぶ柳、銀杏の枝々梢に、愈々青みました綠をたゝへて、同じ浪華表に今いぶかしい變事が起きつゝあるのも知らぬげなすがすがしい朝でした。

　しかし變事のあつた松兵衛方の界隈は、さすがにもうその噂



が軒から軒に傳播したと見えて、行き來もまゝならぬ程の一杯な人集りでした。

『どけどけッ。』

『寄るなッ寄るなッ。』

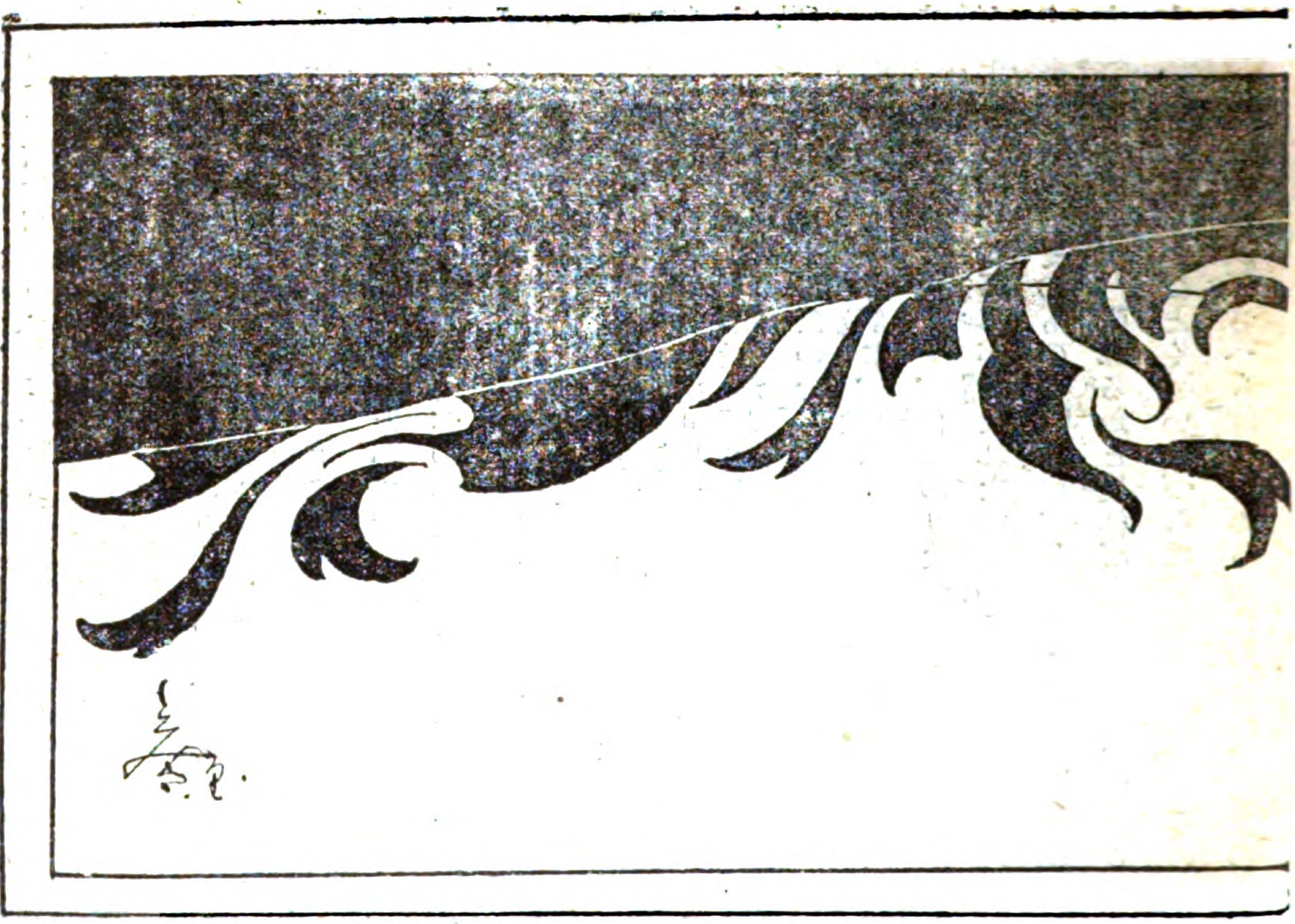
『のぞくなと申すになぜ寄るかッ。』

ひと足先に詰めかけてゐた東町奉行配下の目明し手先達がいか程必死に制しても、物見高い群集は制したそのあとからあとと押しかけて、雪崩を打ちつゝ揉み合つてゐましたが、しかし平八郎の姿を見ると、まこと威嚴と人格の力です。寄せては返へす潮のやうに、ざわざわとざわめいてゐた群集が、ぴたりと鳴を鎭めて、いづれも天滿の棟領のぢかぢかな出馬に安堵の胸なでおろしたもののごとく、信賴と讃仰のまなざしを一齊に注ぎ乍ら、さツと左右に道を拓きました。

と見てそれを知つたらしく、おろおろし乍ら駈け出して、すがりつくやうに言つたものは主人松兵衞です。

『天滿のお先生で厶りまするか！　ありがたう厶ります！　ありがたう厶ります！　先生がお出まし下さらばもう千人力で厶ります。一刻も早う御見調べ下さりませ。』

暗夜の沖に救の光明を發見でもしたかのやうに、上る間もおそしと導いたので、平八郎は正一郎共々、たゞちに娘の部屋へ通ると、あの烱々としたまなざしをひと際鋭く光らし乍ら、ぢ



ッと先づ死者の死相を見眺めました。
然るに不審！　まこと何たるいぶかしさでありましたらうぞ！　いかに死因不明の死を遂げたにしても、凡そ死人と名がつく以上は、面色形相それとひと目に肯かれる死相が漂つてゐるべき筈なのに、いぶかしやそれなる死人の面は、今なほ小町娘の名に違はないあでやかさと生色をたゝへて、安らかに閉ぢられた眼のあたり、ふくよかに丸味を帶びた頰のあたり、さながらにまだ生けるがごとき形相でした。しかもその輕く閉ぢられた花瓣のやうな唇は、ほのぼのとした淡紅色すらをも保つて、血もなほまだ通つてゐるのではないかと怪しまれる程な美しさをたゝへてゐましたので、平八郎はあまりないぶかしさに、そつと瞼を押し開き乍ら、瞳の奥をのぞきました。
と――更に不審！　瞳は冴え〴〵として、澄み渡つてゐるのです。死人ならば當然にぶく濁つてゐなければならぬ筈のものが、むしろそれゆゑに却つて不氣味さを嫌る程にも黒く清く澄み渡つてゐるのです。平八郎は重なる奇怪事に愈ゝ不審を深めて、首筋の筋肉に觸れました。然るに一層奇怪！　血のぬくもりこそ絶えてゐたが、死人のそれのごとくに冷たくないのです。しかも頤から首筋へかけての筋肉は、生けるものゝふくよかさと異らない軟かさでした。そこから眞つ先に死後硬直を初めると傳へられてゐるその筋肉が、いまだに不氣味ななよやか

を保つてゐましたので、平八郎の口に鋭い問ひが上つたのは當然でした。

『醫者共は何と申した?』

『御三方に立會つて頂きましてムりまするが、みなさまお口を揃へて、このやうないぶかしい死人は、見たことも聞いたこともないとお申されてでムります。』

『毒死の形跡はないと言うたか!』

『それすらも一向に診立てがつかぬと申しましたゆゑ、かくうろたへましてお取調べを願うたのでムります。』

『變事のあつたのは何刻頃ぢや。』

『肝腎なそのことが皆目見當さへもつかないのでムります。朝起きて見まするとこの通り床へついたまゝで、死骸となつてでムりましたゆゑ、家中が大騒ぎとなりまして、すぐさま御番所へおしらせに上つたのでムります。』

愈よ募る奇怪と不審に、平八郎は默然と考へたまゝでした。またこれが怪事でなくて、何でありませうぞ! 死因の不明も元より然り、いつ變事が行はれたか不明に至つてはなほさら然り、しかも死者そのものの形相は、凡そ不審なのです。死人かと思へば左に非ず、眠れるかと見れば左にも非ず、生けるがごとく、死したるがごとく、いたづらに只妖々として、そのために却つて一抹の妖氣さへも漂つてゐるかに思はれましたので、わが目わが智慧の及ばぬものとてはないと斷じた天滿の棟領も、こればかりは奇怪にたへないもののやうに、默然と打考へてゐましたが、やがてしかし、おごそかな言葉が靜かに放たれました。

『家の者殘らずを呼んで參れッ。』

二

召されてそこに姿を見せた者は、番頭、手代、少年店員、下女に小間使の小娘、それから乳母の六人でした。そのいづれもが、平八郎の全身全貌から放たれる威嚴と威壓に射すくめられて、はつと一齊に面伏せしたのを、實に不意です。そしてまた實に大鹽流の獨特な吟味法でした。

『六人とも面をあげて目を見せい!』

何ごとであらうと言ふやうに、ぎよッとふり向いた一同の目から目を、ちいッとやゝ暫し見改めてゐましたが、更に不意――。

『主人!』

『はッ。』

『それなる小間使の小娘は何と言ふか。』

『ナミと申します。』

きくやより一層の突然でした。と共にまことに平八郎ならでは

許されぬ烱眼でした。

『ナミとやら！ その方何ぞ隠してゐるな！』

『…………？！』

『いか程隠し立て致しても、そちのその目が語つてゐるぞ。他の者は眞ツ直ぐにこの平八郎の顔が見られるのに、その方の目だけはおどおどしてゐるのが何よりの證據ぢや。怖がることはない。何ぞ隠してゐることがあらば早う申せ。』

ずばりと言はれて、図星をさゝれでもしたかのやうにぎよツとなり乍ら面を伏せてゐましたが、まさに烱眼的中――それ迄鋭く看破されては、もう隠し切れぬと思つたと見えて、おづおづとためらひ乍ら、消え入るやうな聲で小さく言ひました。

『申しわけムりませぬ。實はあんまり恐ろしうムりましたゆゑ、誰にも内緒にしてでムりましたが、いかにも隠してゐることが一つムります。』

『さうであらう。どのやうなことぢや。』

『あからさまにお話しいたしましても大切ムりませぬか。』

『苦しうない。天満の大鹽平八郎が申せと言うてゐるのぢや。何者とても怖がることはないゆゑ、無駄な心遣ひせずと早う言うてみい！』

『では申しまするが、ゆうべこちらの乳母様が不思議なことなさいましたのをたしかに見ましてムります。』

『なに不思議なこととな！ いつ頃ぢやつた。』

『丁度丑満の火の番が通りすぎましたすぐとのあとでムりましたが、一つ蚊帳に寝てでムりました乳母様がふいにむつくり起き上りなさいまして、お眠りなさつたまゝふらふらと廊下を歩いてお行きなさりましたゆゑ、こはごはそつとあとをつけて参りましたら、たしかに何か物の怪にでも憑かれましたに違ひムりませぬ。そこのお縁側の雨戸を一枚するするとお明けなさいまして、そのまゝまたふらふらとお歸りなさつたのを見ましてムります。』

と――、不思議な行動をとつたと言はれたそれなる乳母が當然何か抗辯でもするかと思ひのほかに、突如唇までも眞青にすると、俄かに恐さが募りでもしたかのやうに身慄ひし乍ら、不意にいぶかしいことを言ひました。

『まー 氣味のわるい！ では、では、夕方あのお方に言はれたあのことを夢のうちで、知らずにしたのでムりませうか！ どう致しませう！ どう致しませう！』

何ごとか思ひ起しでもしたもののごとく、聞きずてならぬことをふと口走つたので、同時に平八郎の言葉の鋭く冴えたのは當然でした。

『夕方のあのお方とは誰のことぢや！ 何ぞ不審な事でもあつたか！』



『は。今おナミ樣に言はれまして、急にわたしも氣味がわるくなつたのでムりまするが、きのふの日暮れ時でムりまする。お孃さまが川向ふまでいつて紅筆を買うて來るやうにとお申されましたゆゑ、あそこの高麗橋を渡つたところまで參りましたら、橋の袂のところに立派な一挺の駕籠が止まつてをりまして、中からどなた樣かわたしをお呼びなさいましたゆゑ、何心なく立ち止まりますると、三十一二のお美しい巫女姿を致しましたお女中樣がまつ白なお顏を出されまして、いきなりわたくしを蛇のやうな目元

でちいッと見すくめたのでムりまするよ。』
『なに?! 巫女姿をした女とな! 見すくめられて眠らなかつたか!』
『いいえそれが妙なのでムりまするよ。見すくめられると一緒にわたくしの身體がその力の目の中へ吸ひ込まれたやうに思はれまして、身動きも出來なくなりましたゆゑ、仰天いたしまして逃げ出さうとすると、氣味のわるいのつぺりとしたお顔で笑ひ乍ら、今夜丑滿の火番が通つたあとで、雨戸を一枚あけろ、とはつきりこんなことを申しましたゆゑ、何のことだらうと存じまして聞き返へさうと致しましたら、本當に不思議なこともあればあるものではムりませぬか。駕籠もお巫女樣も見えなくなつた上に、よくよく氣がついてみますると、いつのまにかもうわたくしが錦屋の店先にゐたのでムります。だから歸りましてすぐにそのことをお孃樣に申上げましたら、お孃樣が仰有るには、白夢とか言ふものぢやさうで、年をとるとよくそんなことがあるものぢやと仰有いましたゆゑ、それつきりわたくしも氣にかけませいでをりましたが、本當にゆうべそんなことを眠つてゐて致しましたとしたら、どう致しませう! どう致しませう! わたくしは怕うムります。只もう怕うムります。』
いぶかしいその陳述をきゝ終るや同時――、平八郎の兩眼はまことと文字通り、烱々と異樣に輝き渡りました。またこれをきいて、なぜに目を光らせずにゐられませうぞ! 三人と一人の相違こそあつたが、まさしく前夜天滿の屋敷を襲つたと同じ巫女姿した妖女が、ここにも同樣の大膽不敵さと同樣の、否! 前夜にもまさるべき巧みな妖術を用ひて、しかも人通りの多かるべき街上へ恐るゝところもなく平然と、出沒徘徊してゐたことがはしなくも確められたからです。無論術者は計畫的に前以つてこれを施し、それなる恐るべき術の力によつて夜中眠れる乳母に雨戸をあけさせ、のち悠々とこの家に押入り、かくのごとくに娘の千惠を奇怪この上もない死に至らしめたことが、今にして漸くはつきりと察知することが出來ましたので、平八郎の目が烱々と輝き、その蒼白な面が愈ゝ蒼み冴えたのは當然でしたが、しかしやがて命令一下!
『正一郎!』
『はッ。』
『表の目明しを誰ぞひとり至急に呼んで參れッ。』
呼ばれて敏捷そのもののごとくにキビキビとした、姿を見せた者は、目明し勘太です。
『何ぞお睨みがつきまして厶りまするか。』
『容易ならぬ術者が出沒してゐるぞ。伊賀甲賀の忍道にも見られぬ術ぢやわ。本願寺の力にも定めし番所の者が參つてゐるであらうな。』

『へえい、やつぱり五人程詰めかけてゐる筈で厶りまするが、御呼びの御用は何ぞネタ洗ひで厶りまするか。』

『左様ぢや。たしかにあちらの佛具屋方でも、いぶかしい妖術に會うた者があるに相違ないゆゑ、拔からずにその手口洗つて參れッ。』

『心得ました。』

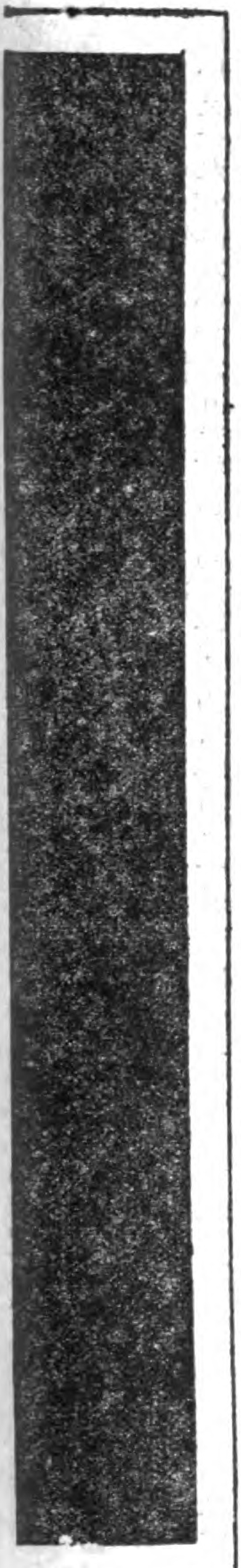
勘太はその場に勿論韋駄天でした、

三

かくして時を待つこと小半刻。青葉に冴えた浪華の朝は、漸くそのとき蒸し暑さを加へて、屋のうちにゐてもぢつとりと汗ばむばかり――。

その汗ばむ汗を拭ひもやらで、目明し勘太が何事か得るところのあつたもののごとくに、勢ひ込んで馳け戻りましたので、早くもそれと知つた平八郎の言葉の鋭まつたのは言ふまでもないことでした。

『やつぱり眠りの術にかゝつた者があつたか！』



『厶りました厶りました。やられた者はおやぢの傳右衛門ださうに厶りまするが、晝間本願寺へ納め物にいつたそのかへり道に、駕籠へ乗つた氣味のわるい巫女から見すくめられまして、九ツの鐘が鳴つたら庭の猫塚とかの前の雨戸を一枚あけろ、とこんなことを言はれたと言ふんですよ。』

『いぶかしいことは只それだけぢやつたか！』

『いいえそれがどうも實に奇態なこともあればあるもんぢや厶んせんか。死んだ筈のその娘御が、今しがたまたひよつくりと生き返へりましたぜ。』

『なにッ蘇へつたとな?! すりやまことのことか！』

『まこともまことも正眞正銘のこの目で、當の本人にちやんと出會つて歸りましたんですもの、嘘僞りは厶いませぬよ。ところがその生き返り方がどうも實に不思議ぢや厶んせんか。手前がいつたほんのひと足先だつたさうに厶りまするが、豊國觀音とやらのお告げをうけて來たとか言ふ女の怪行者が立派な駕籠で不意にやつて參りまして、家の者みんなを遠ざけてから、部屋の中にひとりきりとぢこもつて、何やらほんの少し祈禱をあげますと、娘がにこにこし乍ら生き返つて出て來たと申しましたぜ。』



愈〻出でて愈〻奇怪！　俄然事件はこゝに至つてさらに一つの怪事を加へましたので、いかな天滿の棟領も重なる怪事に狼狽の色を見せるだらうと思はれましたが、事實は反對、勘太のその報告を聞くや同時です。

『ふうむ、左樣か。やはり睨んだ通りぢやな。よしッ、松兵衛！』

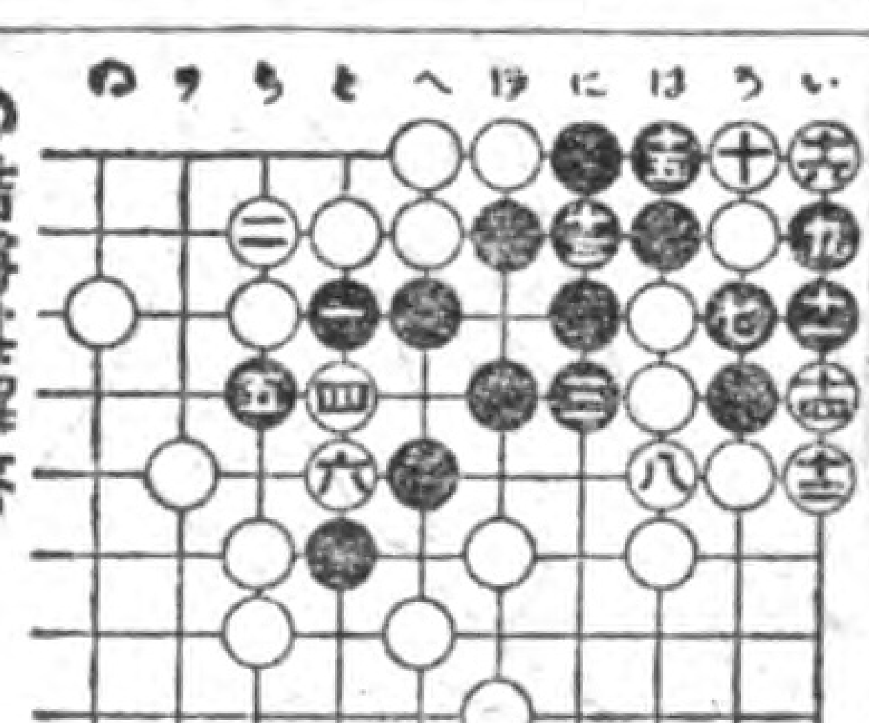
『はッ。』

慧眼すでに何事か推定のついたものゝごとく突然で

した。
『家人の者に言ひつけて、至急にその押入れの中を空に致せ！』
『何となさるのでムります?!』
『豐國觀音の使者ときいて、女行者に思ひ當つた節があるわッ。』
『ではあの、何でムりまするか！　お行者樣とやらが手前の娘をも生き返へらせにお越し下さるのでムりまするか！』
『參るに相違あるまいと睨んだればこそ早う空に致せと言うてゐるのぢや。なれども、參らばよいか、いかなることを申し出ようと、決して行者に逆らつてならぬぞ。それから念もないことであるが、平八郎の押入に隱れてゐること、毛筋たりとも氣づかれぬやう充分に注意して應對いたせよ。』
『心得ましてムります。娘の命の助かることなら何なりとも致しませう！　こりや、ナミ！　ナミ！　急いで中を空にしておあげ申せ！』
松兵衛の欣舞したのは當然。しかし平八郎は慧眼すでに何ものか察知するところあつたものゝごとく、空にされた押入の唐紙襖に、ぷすりと目立たぬ穴をあけて、自ら先に立ち乍ら姿をかくすと、正一郎をも性急に促しました。
『そちも目につかば折角の工夫も水の泡ぢや。早う中にかくれろ！』
と——、殆んど同時です。果然、平八郎の推定通り、怪しの女行者が乘り込んで來たと見えて、急に表の方が騷がしくなつた容子でしたが、まもなく襖を隔てた向ふの部屋で、應對する聲がきこえました。
『そなたが主人でおじやるか。』
『はッ。松兵衛めにムります。』
『自らは豐國觀音より、夜前變死をとげた娘千惠どのの事について夢枕のお告げを蒙り、はるゞゝお使者となつて罷越した者ぢやが、有難くお告げおうけ致しまするか。』

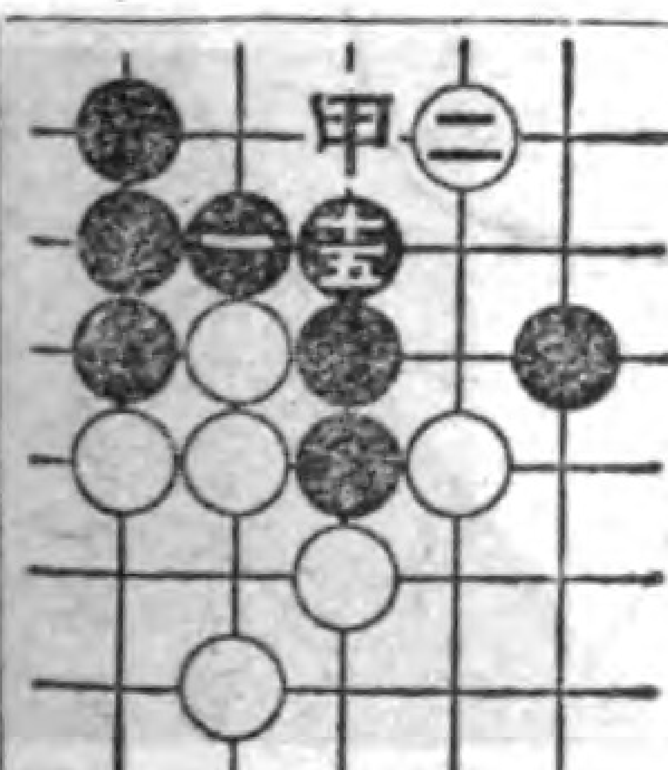
娯樂室解答（本文三六五頁）

○詰碁解答
黑先活。十一妙。
黑十七、七の處

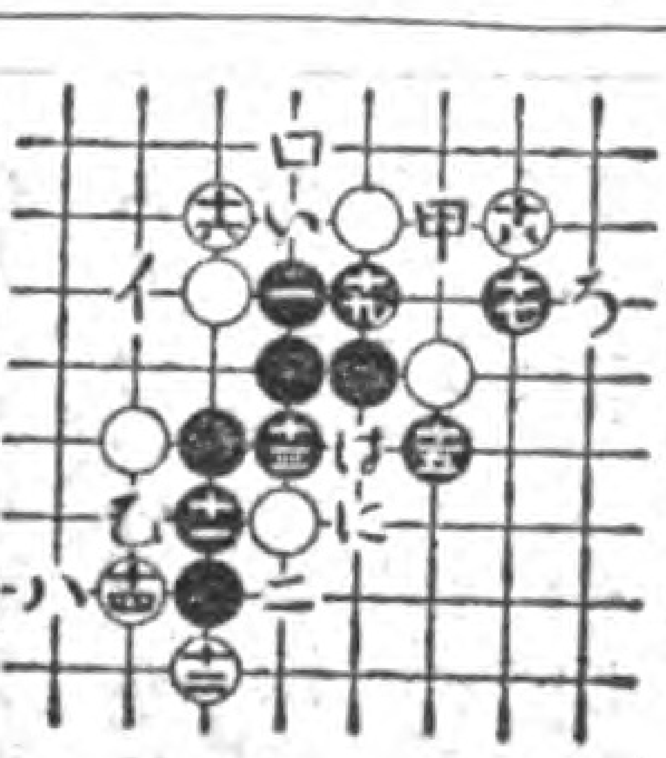


○詰將棋解答
△七四桂▲同香△七三角▲五二王△七二龍▲六二桂アイ△同ナリ角▲同、△四四桂▲同歩△五三歩▲四三王△三三とマデ（十三手）詰メ

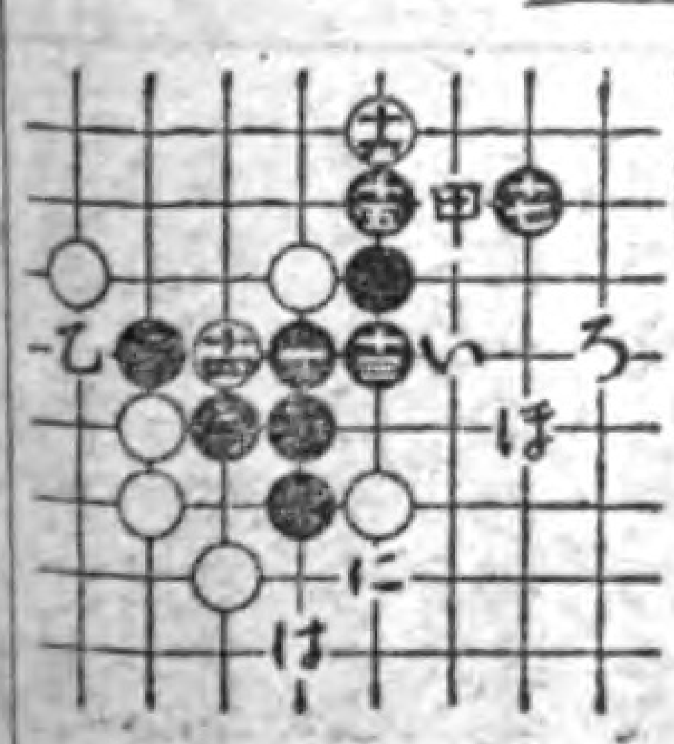
○聯珠解答
七月號『青嵐』正解
○黑（十五）と引いて次『甲』勝
本題は白（二）が（甲）に在るべきを圖の如く誤つたのであります訂正の暇がないので其儘の解を記しました。



八月號『海水』正解
○黑（十九）と引き白（甲）に止めれば黑（廿一）から『いろはに』の四追勝
○白（甲）の手で（乙）に止めれば黑（廿一）から『はにろ』の四追勝
變化
△（十六）反對なら黑（十七）を（イ）に打つて（十六）（ロ）の中を止させ（十九）を（に）に引て次『は』で勝
△（十四）反對なら（十五）を（ハ）に飛で次『十四』で勝
△（十二）反對なら（十一）に（ニ）の應に打つて次『は』と『十二』の兩勝（終）



本號『錦の山』正解
○（十七）と引て次『甲』で勝
△（十六）の反對及び（十四）を（い）に止る等は變化なし
△（十四）を（乙）なら（十五）から『いろはにほ』の四追勝。（終）



『どのやうなお告げでムりませう。身に出來ますことなら何でも致しますゆゑ、仰有つて下さりませ。しかとおうけ致しまするでムります。』

『自らが通力により、今一度お千惠どのを蘇へらせてとらせる代りに、爾今、豐國觀音を信心いたすやう申し傳へよとのお告げでおじやるが、しかとお約束致しまするか。』

『しますでムります！ 致しますでムります！ 大切な娘が生き返へりますなら、どんなことでも致しますゆゑ、そのやうな有難いお通力をお持ちでムりますなら、お願ひでムります！ お早うお助け下さりませ！ お願ひでムります！』

『必ずともに信心のこと違背おじやらぬな。』

『何の違背がムりませう！ そのためにわが家の身代みな獻金せよと仰有りますれば、あすにでも金に替へまして、御上納致しまするでムります。』

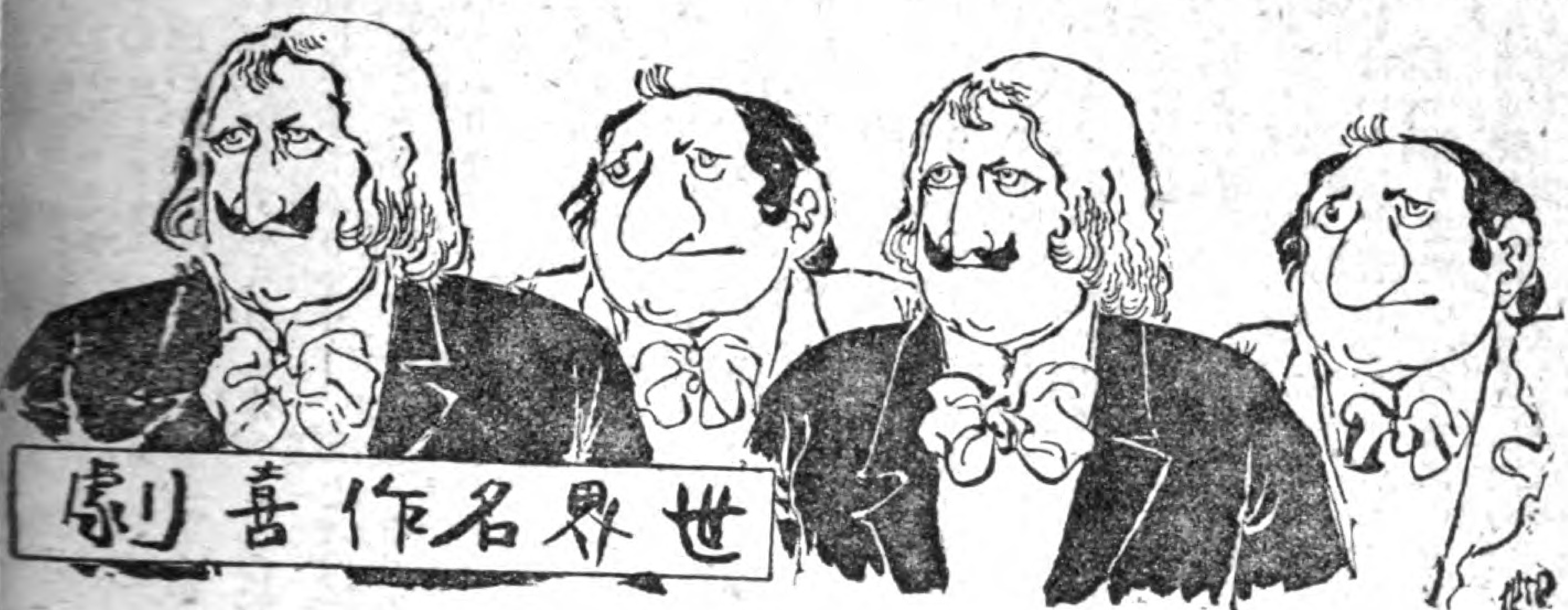
『では祈禱して遣すゆゑ、その間誰も部屋をのぞいてはなりませぬぞ。のぞかば一心こめたお祈りが紊れますゆゑ、ゆめゆめ立入つてはなりませぬぞ。』

――目明し勘太の報告どほり、家人の立ち入るのを嚴禁しておいて、さやさやと衣ずれの音を立て乍ら、死人の寢かされたまゝでゐる一室へ、待ち構へてゐた女行者が這入つて來たらしい氣配でしたので、平八郞は息をころし乍ら用意の穴に目をもつて行くと、先づ行者の正體をたしかめるべく、ぢいツと見眺めました。と同時に、

『よよツ。』

危ふく聲を立てんばかりでした。まさしくそれなる女行者は、前夜天滿の屋敷を襲つて、夢の中の幻のごとくにもうろうと現れた。あの妖女と同じ桂同じ緋色の袴をはいた同じ怪しの巫女だつたからです。

正一郎もまたいつのまにのぞき穴をこしらへておいたものか、それと知るや同時に危ふく聲をあげようとしたので、平八郞は懸命に袖を引いて制し乍ら、一擧一動をも見のがすまじと、愈ゝその目を鋭く注ぎました。（つゞく）



（英）沙翁原作

間違ひつゞき

福永渙

挿繪 細木原青起

一…『うぬ、止せといふのに！』

幼少の時別れた兄の行衛をさがすために下男を伴につれて諸國を旅して歩いた若者アンチフオラスはエフエサスといふ國に到着して宿屋に泊つた。

當時アンチフオラスの生國シラキユースとこのエフエサスとは爭ひを生じて、シラキユース人がエフエサスの國に入つて官憲に見附けられると捕へられて贖償金を拂はなければならぬ、萬一贖償金がない時には死刑に處せられる制規になつてゐた。その日も、シラキユースの商人が捕へられて、金がないために死刑に處せられるといふ噂を聞き、アンチフオラスは自分の生國を隱して、市中を見物して歩いた。

彼はその途中で下僕のドロミオに金を預けて、一足先きに宿屋へ歸らせ、自分は更に市中をぶらつくことにした。と、ものの四五町も歩かぬうちに、向うから下僕のドロミオが足早やにやつて來た。

『お前何故こんなに早く歸つて來た？』とアンチフオラスが聞いた。

と、下僕は呆れ顔をして、

『えッ早くですッて？ どういたしまして、やつとお目にかゝつたんです。』

ドロミオは生れつき剽輕な男だから、アンチフオラスは又戯談を云ふなと思つた。が、ドロミオは大汗を流しながら、一生懸命で、

『奥さんがお待ちかねでございますよ、召上り物が冷たくなると云ふので……』

アンチフオラスに妻がある筈はない。彼は獨身者である。しかも、旅先なのだ。

『おい〳〵、無駄口は止めろ。それよりも、あれはどうした？ どこへ置いて來た、先刻の金は？』

『あゝ、あの五十錢、この間頂いた馬具屋へやるお金、あれは馬具屋へ拂ひました。』とドロミオは平氣な顔。

『おい、戯談ぢやないよ。金はどうした。これ、早く聞かしてくれ。金はどこにある？ 吾々はこゝぢや外國人だぜ。どうして貴様は向う見ずに、あんな大金を手離して來たのだ。』



ドロミオは一寸怪訝な顔をしたが、一つ快活に笑つて、

『もし、御戯談はお食事の時になすつて下さいまし。奥様がお待ちかねなんで……』

『おいく、ドロミオ、無駄口を止めないと承知しないぞ。貴様に預けた金はどこにある。』

『え、手前に？ お金を？ お金なんか頂きやしませんよ。』ドロミオはますく怪訝な顔をする。

『おいく、馬鹿はもう止めにしろ。云ひつけたことは、どういふ風にして來たか、それを話せ。』

『お云ひつけは、あなたを市場からお連れ申して歸れといふんでさ。奥様のお云ひつけでさ。』

『奥様とはどこの奥様だ。』

『あなた様の奥様でさ。あなた様がお歸りにならないので、何も召上らないで、お斷りばかりしてお出ですよ。早くお食事にお歸りになりますやうにッてね。』

『うぬ、止せと云ふのに！ まだおれを馬鹿にしやがるのか。さ、これをくらへ！』アンチフォラスは堪忍袋の緒を切らして、拳を固めてドロミオを毆りつけた。

ドロミオは痛さに耐へかねて、逃げだした。

『ドロミオの奴、きつと金を殘らず騙られやがつたに違ひない。』

アンチフォラスは下僕の後姿を見送つて獨言を云つた。彼はこの町には生馬の目を拔くやうな詐欺師やペテン師で一ぱいだといふ噂を聞いてゐた。ドロミオは到着早々、さういふ悪者どもに騙されたに違ひない。何は兎もあれ、直ぐ宿屋へ歸つて、もう一度ドロミオに金の在所を尋ねようとアンチフォラスは考へた。

が、アンチフォラスは誤つてゐるのである。見違へてゐるのだ。彼が今偶然出逢して、とんちんかんな話をした男は、名も同じドロミオであり、顔も瓜二つであるが、その實は彼の下僕ドロミオではなかつたのだ。どういふ譯で彼の下僕と名も容貌も寸分違はぬ男がひよつくり現れ出たのか、どういふ譯でその男がアンチフォラスを自分の主人として話しかけたのか、讀者諸君は不思議に思はるゝであらうが、この謎を解くにはアンチフォラスの身の上にからまる不思議な運命に就て物語らねばならない。

二……双生兒と双生兒

アンチフォラスの兩親は商用で外國住ひをしてゐる時宿屋で双生兒を生だ。二人とも男の子で、顔は不思議なほどよく似てゐたが、先きに生れた方を兄とし、後れて生れた方を弟と呼ぶことにした。青年アンチフォラスはその弟の方であつた。

所が、恰度その同じ宿屋で、身分の卑しい女が、やはりよく似た男の双生兒を生だ。その親ども夫婦は貧乏人であつたから、アンチフォラスの兩親は、その子供等を金で買ひ取つて、自分の伜たちの下僕にするつもりで養育した。

両親はその後航海をする事になり、一緒に乗つたが、途中で暴風に出遭ひ、船は難破して、母親と兄の男の兒と下僕の男の兒とは行衛不明になつた。父親と弟のアンチフオラスと下僕の男の兒（弟の方）とは外國船に助けられた。國に歸つてから父親は妻や息子の行衛を百方探したがどうしても知れない。父親は死んだものと諦めをつけて、弟息子を大切に育て上げた。すると、弟息子のアンチフオラスが十八歳になると、頻りに兄の事をたづねて、彼同樣兄に離れた下僕のドロミオを連れて、兄の行衛を探しに旅に出たのである。

アンチフオラスが兄をたづねながら終にエフエサスの市に到着したことは、既に讀者諸君の知らるゝところである。所が、アンチフオラス自身は神ならぬ身の知る由もなかつたが、偶然と云はうか、神樣のお引合せと云はうか、彼の尋ねあぐんでゐた兄のアンチフオラスは、當時エフエサスの市に住み、商人として成功し、妻を娶つて立派に暮らしてゐたのである。そして彼はやはり兄ドロミオを下僕として使つてゐた。

弟アンチフオラスが街で偶然出遭したのは、その兄ドロミオであつた。彼が兄ドロミオを自分の下僕なる弟ドロミオと思ひ誤つたのは當然であつた、又兄ドロミオが弟アンチフオラスを自分の主人と間違へたのも是非がない。何となれば、主人同志も、下僕同志も同じ双生兒で、容貌から姿かたちまで、別人とは思はれぬほど酷似してゐたからである。

三…『蝸牛、なめくぢ、阿呆！』

兄アンチフオラスの家では、妻のアドリヤナがその妹ルシヤナと共に痺れを切らして夫の歸りを待ち受けてゐると、使にやつた下僕の兄ドロミオが歸つて來た。

『ドロミオ、足のろの旦那は、どうなすつたえ。』アドリヤナは下僕の顏を見ると聞いた。

『お足はのろくても、お手は敏捷うござんすよ。この耳朶へどえらいのを頂戴しました。』

『お前旦那に會つたのかい。』

『お目にかゝりました。旦那は狂人のやうに怒つてお出でしたよ。お食事時ですからお歸りなさいと申しますると、大金はどうしたとおつしやいます。奧樣がと云ひますと、おれには妻もない、內儀さんもないとおつしやいます。いやはや、手が附けられません。揚句の果に「うぬ、かうしてやる」てんで、手前の耳朶をぴしやりです。』

『まア、そんな事を云つてるの！』

妻アドリヤナは忽ち顏色を變へた。この日頃夫の樣子がをかしいと思つてゐたのだが、さては心變りがしたのか。妻がないとは何といふ情ない言葉であらう。近頃はよく料理屋へ行くやうだが、或はよくない女に騙されてゐるのかも知れない。疑惑は嫉妬に變じて、アドリヤナは居ても立つてもゐられなかつた。嫌がる下僕の兄ドロミオを急き立て、再び迎へにやつた。

「無神經の馬鹿か何かでなければ、こんな侮辱を受けて默つてゐられるかね。どこかに好きな女が出來たに違ひない。でなきや歸つて來ない筈はないんだもの！　ねえ、お前も知つてる通り、私に金鎖をくれるつて約束したらう。あゝ、どうかあれだけは他人へやらないでゐてくれるやうに！、私はもう色香が衰へたので捨てられたのだ。あゝ、どうしてくれよう！」

アドリヤナは口惜し泣きに泣いた。傍にゐた妹のルシヤナは溫順しい内氣な女なので、何と云つて姉を慰めたものかと、はら〳〵しながら氣を揉んでゐる。

一方、弟アンチフオラスは下僕に預けた金が心配になるので、直ぐ宿屋へ引返したが、金は宿屋の主人の手許に預けられてあつたので、やつと安心して、再び下僕の弟ドロミオを連れて市中の見物に出掛けた。二人は兄アンチフオラスの家の前を聲高かに話しながら通りかゝつた。

その聲を聞きつけると、アドリヤナは飛出して來て、いきなり弟アンチフオラスの胸ぐらを取り、有無を云はさず家の中へ引張り込んで、立てつゞけに恨み怨みを並べ立てた。

『たんと他人らしい振りをなさいよ。むづかしい顔をなさいよ。やさしい顔附はもうどこかの好きな娘にやつてしまつたんでせう。私はもうアドリヤナでもなければ、あなたの妻でもないんですよ！』

驚いたのはアンチフオラスである。

『もし、奥さん。そりや私におつしやるんですか。私はあなたにお目にかゝつた事はありませんよ。私はこのエフエサスへ來てからまだ二時間とは經たないんです。全く驚いてしまふ、呆れて口が利けない！』

妹のルシヤナは見兼て、口を挾んだ。

『まア、兄さん！　どうしてそんなにお心變りがしたんです？　つひぞこんな風に姉をお扱ひになつたことはなかつたのに！　ねえ、先刻、お食事ですつて、姉がドロミオをお迎へにあげましたでせう？』

『ドロミオを？』弟アンチフオラスは眉に皺を寄せた。

『私を？』弟ドロミオは驚いた。

アドリヤナは彼を睨みつけて、

『お前をさ。そしたら、お前は歸つて來て、旦那がひどくお打ちなすつて、おれには家なんかない、妻もないとおつしやつたと云つたぢやないか。』

弟アンチフオラスはドロミオを振り返つて、目に角を立てて、

『え、この婦人とそんな話をしたのか。何の爲めに、こんな變な打合せをしたんだ。』

『私がですか……この方は、つい只今まで見たことのない方です。』

『嘘をつけ！　この婦人が云つた通りのことをお前は街で云つた。』アンチフオラスは腹を立てた。

『いゝえ。つひぞこの方とは物なんか云つたことはありま



せん。』

『ぢや、どうしてこの婦人がおれたちの名を知つてゐるのだ。』

アドリヤナは揶揄はれてゐるのだと思つて、口惜しくなつて、涙ぐむ。

『まア、あなたは紳士らしくもない、下男なんかと共謀になつて、泣き悲んでゐる私を嘲弄なさるんですか、あんまりです、あんまりです！』とアンチフオラスの手に縋つた。

アンチフオラスは何が何だか分らなかつた。自分は夢を見てゐるんではないか。彼は髪を引張り、頬ぺたを抓つて見たが、眠つてゐるのでもなければ、夢を見てゐるのでもない。

妹のルシヤナは氣轉を利かして、弟ドロミオに命じた。

『ドロミオや。早く行つてお食事の支度をするやうに云つておくれ。』

ドロミオはいよ〳〵呆れて、身悸ひをしながら、獨言を云つた。

『あゝ、これは魔の國だ。あゝ、どうしたらよからう。とんだ事になつた。』

アドリヤナは彼の耳の傍で怒鳴りつけた。

『何故獨言ばかり云つて、返事をしないの。ドロミオ、なまけ蜂、蝸牛、なめくぢ、阿呆ツ！』

折柄この家の主人なる兄アンチフオラスが歸つて來た。

四…『御戯談でございませう』

兄アンチフオラスは一人の商人と金細工師アンゼロを連れて家に歸つて來た。彼は商人を中食に家へ招いたのである。金細工師を家へ連れ來たのは、妻が平生から時間を守らないとひどくやかましく云ふので、遅くなつた言譯に金細工師を連れて來たのである。金細工師の店で、妻への贈物の金鎖の細工を見てゐたので遅くなつたといふために證人を連れて來たのである。所が、家の前まで來ると、門は堅く閉されて、いくら怒鳴つても、門の開け手がなかつた。弟ドロミオがそこに頑張つてゐて、門を開けないのだ。召使たちもきつと詐欺師が來たのだらうと怖れをなして相手にしなかつた。



兄アンチフオラスはとう〱腹を立てゝ商人と一緒に料理屋へ中食に出掛けて行つた。

弟アンチフオラスは狐につまゝれたやうな、夢を見てゐるやうな氣持で、女たちと食事を濟ますと、ドロミオを呼んでこの奇怪な魔の家を逃げ出す支度をした。すると、そこへ金細工師のアンゼロが訪ねて來た。

彼は馴れ〱しく弟アンチフオラスに話しかけた。

『鎖はこれでございます。どうかお受取り願ひます。』

と云つて、アンゼロは金鎖を渡した。

さて又、不思議なことが持上つた。弟アンチフオラスは怪訝な顔をして、

『これを私にどうしろとおつしやるんです。』

『それは、いか樣とも御意次第に。

あなたのお入用に拵へましたのでございますから。』
『私の入用に？　私は誂へやしませんよ。』
『御戯談をおつしやる。一度や二度ぢやございませんよ、二十度もお命じでございましたのに。どうか奥様をお喜ばせなさいまし。いづれ、お夕食頃もう一度伺ひまして、代金を頂きます。』
　弟アンチフオラスは困つて、
『ぢや、代金は今あげませう。でないと、鎖も金も又とあなたのお手に入らないかもしれませんよ。』
　アンゼロは笑つて、
『御戯談でございませう。いづれ又、では、左様なら。』
　弟アンチフオラスは鎖を手に持つたまゝ、ぽかんとして暫くその場に突立つてゐた。
『どうしたと云ふのだ？　分らない。いよ〱これは妖怪屋敷だ。一刻も早く逃げ出さう。船さへ出れば、こんな嫌な市は直ぐさま出立だ。』



五…『お役人、お訴へします』

料理屋で商人と共に中食を濟ました兄アンチフオラスは、下僕の兄ドロミオを連れて、街を歩いてゐた。
『おい、ドロミオ。貴様は一足先に行つて、繩を買つて來い。晝日中おれを閉め出しやがつた返報に、嬶も召使たちもみんな縛り上げてくれるんだ。』
　ドロミオに別れると、兄アンチフオラスはぱつたり金細工師に出遇ました。金細工師のアンゼロは債權者を連れてゐた。その債權者は今日の船でこの市を出發するので、それまでに是非とも借金を全部支拂へと迫つてゐるのである。金細工師は金がないので、アンチフオラスのために作つた金鎖の代金を受取り、それで債權者へ支拂ひをしようと、うち連れてアンチフオラスの家を訪ねる途中であつた。
　金細工師はアンチフオラスに一伍一什を話して、支拂を要求した。
　アンチフオラスは金を持合せてゐないので、金細工師に向ひ、
『私は、市に少々用がありますので、どうかその力を宅まで案

内なすつて、鎖を家内に渡して、代價を支拂せて下さい。多分私もその頃までに歸りませう。』

『ぢや、鎖は御自分でお持歸り下さいますか。』と金細工師が聞いた。

『いや、あんた持つてつて下さい。私は遲れるかも知れないから。』

『承知しました。鎖はそこにお持ちで入らつしやいますか。』

アンチフオラスは金細工師の言葉が腑に落ちなかつた。金細工師の奴揶揄つてやがるなと思つた。彼は皮肉に、

『私が持つてゐないとすると、多分あんたが持つてるだらう。でなきや、代は受取れないことになるからな。』

金細工師の方ではアンチフオラスが冗談を云ふのだと取つて、

『あゝ、もし、焦らさないで、鎖をお渡し下さいまし。風も潮もいゝと申すに、この方をいつまでもお待たせしては私が濟みませんから。』

『だから、鎖を家内に渡して、代を取りなさいと云つてるぢやないか。』

『鎖はつい半時間前にお渡したぢやありませんか。』

『受取りやしない。そんな言ひがかりを云ふのはひどい。』

『受取らんとおつしやるのは、尚ひどい。私の信用にかゝはるといふ事を考へて下さい。』

債權者は要領を得ない二人の押問答にあきれて、とう〳〵腹を立て、金細工師を訴へるために警官を呼んで來た。

『お役人、お訴へします、この男を引立てゝ下さい。』

警官は金細工師を拘引しようとした。金細工師はアンチフオラスに縋つて、

『ねえ、私の名譽にかゝはります。私に代つて下さらなけりや、このお役人に頼んで、あなたを拘引して貰ひますぜ。』

アンチフオラスは嚇ッとなつて、

『受取りもしないものを支拂へ！ 馬鹿め、見事拘引して見るがいゝ。』

金細工師は終に警官にアンチフオラスを訴へた。警官は拘引しようとした。

そこへ、主人の弟アンチフオラスに命ぜられて港へ行つた弟ドロミオが通りかゝつた。兄アンチフオスの顔を見ると、

『旦那、便船はもう直ぐに出帆します。お荷物はもう甲板へ運んで置きました。』

『この氣狂ひめ！ 誰が貴樣にそんな事を命じた？ おれは繩を買つて來いと云ひつけたんだぞ！』兄アンチフオラスは怒鳴した。

『いゝえ、あなた樣に港で便船を見て來いとお云ひつけになりましたのです。』

『そんな事はどうでもいゝ。急いで、アドリヤナのところへ行つて、この鍵を渡して、机の抽出しに金貨の袋があるから、それを持つて來てくれ。おれは街中で拘引されたといへ。あの金

があれば、保釋になるん



だ。急いで行け、早く行け！』

弟ドロミオは、

『アドリヤナへ！ といふのは中食した家のことだ。あすこは嫌な家だけれど、行かねばならん、家來は主人の命令には背れないから。』

と獨言を云ひながら、立去つた。

六……『默れ、まぬけ魔法め！』

兄アンチフォラスは往來で警吏とともに、下僕が金を持つて來るのを待ち侘びた。やがて、やつと向うから下僕が息せきながら馳けて來るのを見て、忌はしい恥辱から免れることが出來るのを喜んだ。

だが、彼は金を取りにやつたのが弟ドロミオであることを知らなかつた。今向うからやつて來たのは、兄ドロミオであつた。

『へい、これです。これさへありや、大丈夫御返報が出來ますよ。』



と兄ドロミオは繩を差出した。

『それは繩ぢやないか。金はどうした？』

『お金はやりましたよ、この繩の代に。』

『馬鹿！　五百兩の金を繩の代に？』

警官は笑つて、

『もし、その割でなら、私が五百筋位は御用立てませう。』

『やい、何のために貴樣を大急ぎで使にやつたんだ。』

『繩を買ひにでさ。』ドロミオはすましてゐる。

アンチフォラスは怒つて彼を撲りつけた。警官は見かねてアンチフォラスを止めた。

『まア／＼、お耐へなさい。』

『こらへるのは此方の役ですよ。今正に私は逆境にゐるんですからな。』とドロミオが減らず口をきく。

『おい／＼、口をきかないで。』と警官が押へた。

『御親切があるなら、私の口を止めるよりも、旦那の手を止めて下さい。』

『うぬ、このへちもくれの無神經野郎め！』アンチフォラスは再び拳を固めて、下僕をぽか／＼撲つた。

『あゝ、無神經野郎になりたい、そしたら、こんなに打たれても痛かあるまい。』

『打れる時の他は感じのない奴だ。だから、驢馬だ。』

『なるほど、私は驢馬ですよ。この長い耳で分りませう。』ドロミオは警官に向ひ『私は生れ落ちるときから只今まで、この方に御奉公して來ましたが、只もうお打ち下さるのだけが下賜物なんでさ。』

　下僕の減らず口はます／＼アンチフォラスの神經を焦ら立てた。彼が怒りに任せ下僕をさかんに打擲してゐるところへ、妻のアドリヤナとルシヤナが一人の老人を連れてやつて來た。この老人は惡魔ばらひをする呪法家のピンチといふ男であつた。アドリヤナは夫の身に惡魔が宿つて氣が狂つたのだと思つた。で夫の身體から惡魔を追ひだすために、この呪法家の老



人を連れて來たのである。

　アンチフオラスが憤怒してドロミオを打つてゐるのを見ると、妻のアドリヤナは、

『なるほど、あの亂暴さぢや、正氣ぢやないわね。……ピンチ先生、どうぞ夫を正氣に歸らせて下さい。お禮はお望み通りにしますから。』

『まア、あの怖い、凄い顏をなすつてらつしやること！』ルシヤナも身顫ひした。

　ピンチ先生は近寄つて、落着いた態度で、仔細らしく、アンチフオラスに向ひ、

『手を出して、脈をお見せなさい。』

　アンチフオラスは忽ち目を怒らせ、拳を固めて、

『さ、この手に貴樣の耳を診させてくれる！』

彼はいきなり老人の横面をはり飛ばした。

　ピンチ老人は、飛びのいて、切口上で、

『おのれ、この男の體内に宿りをる惡魔め、わが神聖なる祈願によつて、速かに退散せよ！』

『默れ、まぬけ魔法め！　おれは狂人ぢやない。』と

　アンチフオラスは叫んだ、そして妻を睨みつけて、『おいおい、此奴がお前の大事のお客かい。この黄ろい面つきの野郎が、今日おれの家で食つたり飲んだりしてふざけてゐたのか。それを見られちやならんと云ふので、戸を閉めて、主人のおれを入れまいとしたのだな。』

『あら、あなたは家で一緒にお食事をなすつたぢやないの。』

『一緒に食事をした？』アンチフオラスはドロミオに向ひ、『やい、貴樣はどう思ふ？』

『へい、全くのところお家ぢやあがりません。』

『戸に錠を下ろして入れなかつたらう。』

『へい事實、錠を下ろしてお入れになりませんでした。』

　アドリヤナはピンチ老人に向ひ低聲で、

『間違ひ切つたことを申しますのに、何もかも「左樣々々」と調子を合せてゐてもようございませうか。』

『いや、御不都合はございますまい。成るべく逆はんやうにな。』

アンチフオラスは妻に食つてかゝつた。

『貴樣は飾細工師と共謀になつて、おれを罪人にしやがつたな。』

『あら、まア！　私お金をあげましたわ。このドロミオに持たせましたわ。』

『私にお金を！　私は頂きません。』ドロミオは頭を横に振つた。

『ぢや、貴樣は財布をとりに行かなかつたのか。』

『來ましたよ、だから、渡しましたの。』とアドリヤナは云つた。

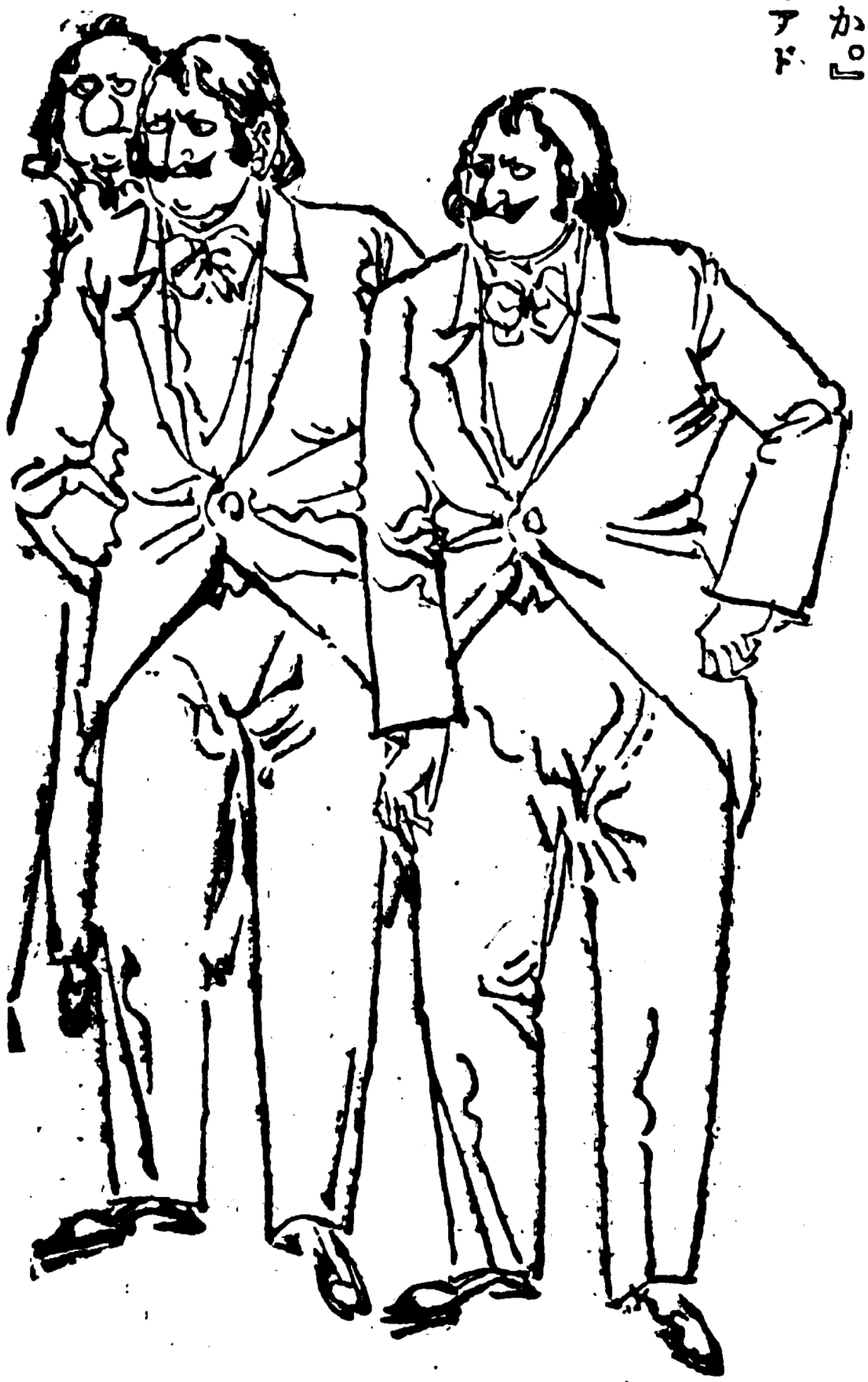
『それは私證人になります。』ルシヤナが口を添へた。

アドリヤナは、わざとやさしく夫に向ひ、

『ねえ、あなた、私決して閉め出したりなんかしやしませんのよ。』

ドロミオは、同じやうにわざとやさしく口眞似をして、

『ねえ、旦那、私は決してお金なんか受取つた覺えはありませんよ。けれども、閉め出されたことは確かです。』



それまで耐へてゐたアドリヤナは、この時忽ち怒を爆發させた。

『この嘘つきめ！　どつちも大嘘だ！』

アンチフオラスも逆上して、

『この嘘つき阿魔め！　貴樣の云ふことはみんな嘘だ。この畜生どもと共謀になつて、散々ばら馬鹿にして、赤ッ恥をかゝせて、面白がつてやらうと云ふんだな！』

と妻に飛びかゝらうとした。

その時、四五人の捕吏が現はれ

て、アンチフオラスを縛らうとしたので、大立廻りが初まつた。
『おゝ、縛つて下さい！　縛つて下さい！』
　アドリヤナは聲を限りに叫んだ。
『あの男も縛んなさい。あの男も氣が狂つてゐる。』とピンチ先生がドロミオを指して怒鳴つた。
　捕吏はアンフチオラスとドロミオを引立てゝ行つた。
　アドリヤナは後に殘つて、警官に夫の拘引された理由を尋ねた。二人が話をしてゐるところへ、弟アンチフオラスと弟ドロミオが拔劍して現はれた。奇怪なことばかりが起るので、彼等は氣が變になつて、魔女や魔男を退治すると暴れだしたのであつた。
『あら、まア！　二人ながら繩を拔けたのよ。』
　ルシヤナが叫んだ。
『拔刃を持つて來たわね。早くもつと人を呼んで、縛つて貰はなくちやいけない。』
『早くお逃げなさい。殺されます！』
　警官は二人の婦人を助けて、逃げて行つた。



七……めでたし、めでたし

　どこまで行つても、間違ひの連續で騷ぎはだん〳〵大きくなるばかりであつた。
　夕方であつた。この市の主權者なる公爵が、大勢の從者を連れて街を通つた。その後から一人の外國商人が繩つきで、首斬人やその他の役人に警護されて從いて行つた。
　この商人は名をイージオンと呼ぶシラキユースの者で、エフ

エサスの國の國法に觸れ、贖償金を要求されたが、金がないので終に死刑に處せられたのである。

ところが、この行列を止めて、公爵に直訴をする者が現はれた。それは縄つきのまゝ飛出した兄アンチフォラスとその下僕であつた。彼は事の次第を述べて、公爵の裁決を仰ぎ、身の證を立てようとした。が、公爵は餘りに一切の陳述が奇怪なので、判斷に迷つた。

と、かの死刑囚の商人イージオンが突然口を開いて、

『公爵様に申上げます。私の一命を助けまするために御定額を支拂つてくれます身寄りの者がこゝにゐるやうでございます。』

『シラキュース人、遠慮なく申せ。』公爵のお許しが出たので、商人は直訴者に向ひ、

『あんたの名はアンチフォラスとは云ひませんか。そしてその男はあんたの下僕のドロミオではありませんか。あんたはこの私を思ひ出しませんか。』

アンチフォラスは知らないと答へた。商人はよく知つてゐる筈だと云ひ張つたが、アンチフォラスはどうしても分らぬと答へた。

が、そこへ弟アンチフォラスと弟ドロミオが飛び出して來て、一切が判明した。商人イージオンは彼等の父親であつた。

折柄、斷けつけたアドリヤナは二人のアンチフォラスを見て驚いた。

『まア、家の人が二人！　それとも、この目がどうかしたのか。』

『どちらが眞人間で、どちらが幽靈なのか、見分けがつかない。』

公爵は先刻法廷で聞いた商人イージオンの身の上話を思ひ出した。そこで、事情が明かになつた。父親と子供たち、二組の双生兒は、互ひに抱き合つて、無事を喜んだ。（完）

稀なる事

永井荷風

文士にして字を知るは稀なり
藝者にしてねだらざるは稀なり
新聞記者にして禮節あるは稀なり
役者にして自分を知るは稀なり
請負師にして金歯なきは稀なり
赤ン坊のお尻にして紫斑なきは稀なり
女學生にして歯の奇麗なるは稀なり

（偏奇館漫錄より）

笑ひの俚諺

○あまりに多く笑ふ人は愚人の天性を持ち、少しも笑はぬ人は意地悪婆の本質を持つ。　イギリス

○病氣を笑つて醫者の拂ひを節約せよ。　イギリス

○茅屋の笑ひは一番心からの笑ひだ。　ラテン

机上避暑通信



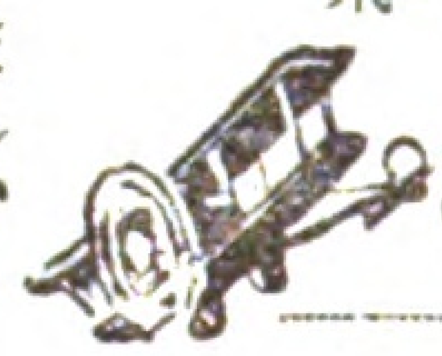
暑い暑いと勝手な理窟をつけて同じ日本に住み乍らやれ海だ、やれ山だと騒ぎ出すのが人間の常だ。且て東郷元帥が歐洲へ航行の途次赤道直下を通過したが、周圍の人達が『暑い、暑い。』と叫ぶのを聞き流して『いや、氣の持ちやうでござる。』と云つた一言はさすが元帥らしい逸話である。

×

本當に氣の持ちやうだ。近來世界各國は競つて兩極の探檢に全力を注いでゐる。暑いと思つた時一度此の寒氣肌を刺す極地の探檢に從事してゐる人達の事を思つて見給へ。思はずぞつとして暑さ等は何處かへすつ飛んでしまふだらう。

×

近來各國の探檢家の努力苦心は涙ぐましい程悲壯である。伊國のノビレ少將、諾國のアムンゼン、米國のバード中佐、英國のウイル



キンスと名を並べただけでも勇壯ではないか。

全世界は今や探檢熱と冒險熱に燃えてゐる。最近のニユースだけでもアフリカの蕃地、アマゾン流域の探檢など、我々の想像を許さない天地にぐんぐんと突入して、痛快極まる話材が續々として世界をアッと云はせてゐる。

×

此の男性的な大冒險、七轉八起の努力の中には素晴らしいロマンスと想像以上の珍談が、山とあつていづれも感激の資でないものはない。

×

南極氷上大飛行機を翔つて白熊を驚かせ、苦心慘憺氷雪と戰つて遂に極地を極めたウイルキンス大尉の大冒險探檢物語『氷上一萬哩』は目下『富士』九月號に掲載されて盛夏の雜誌界を驚嘆させてゐる。

×

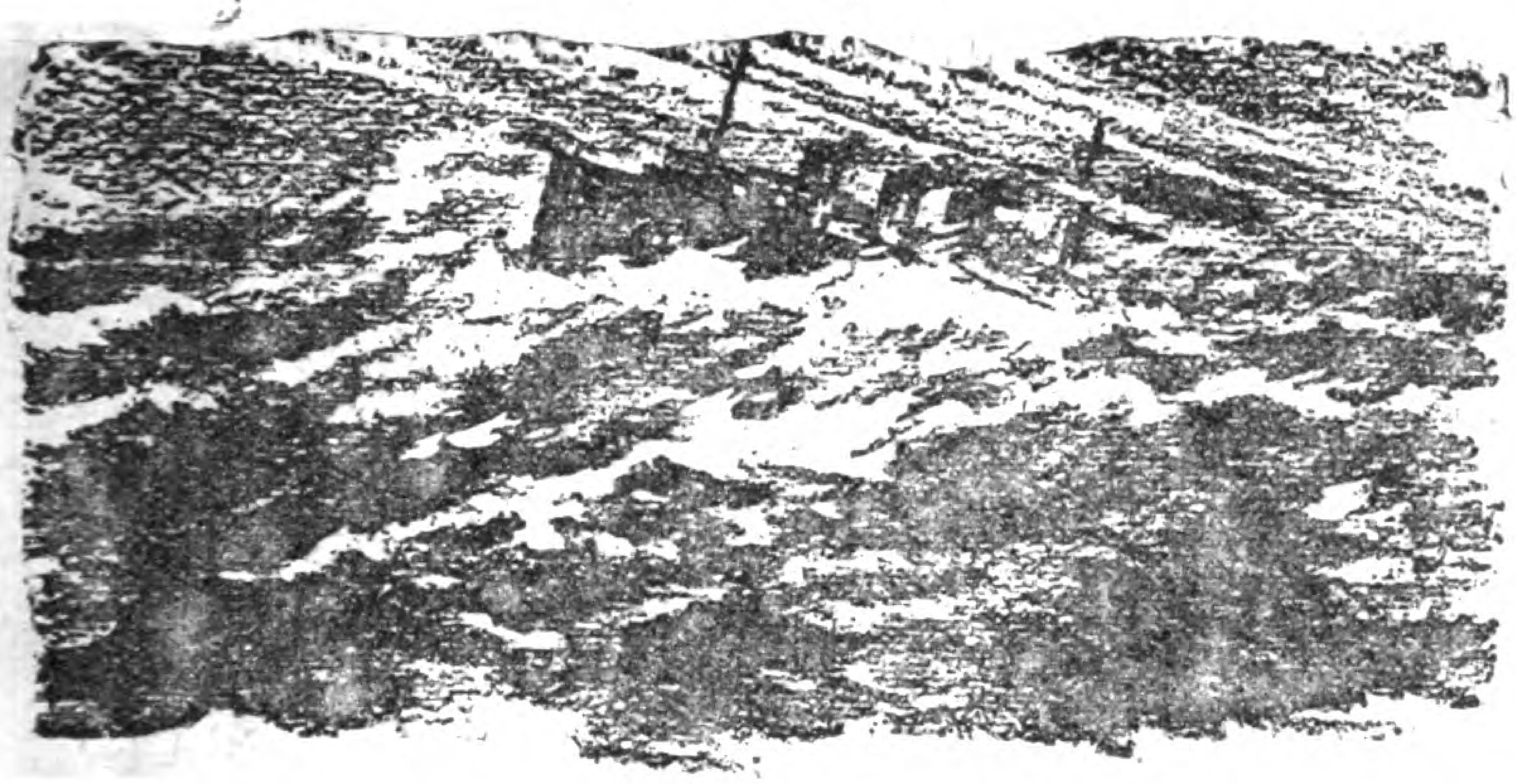
更に驚くべきはアフリカの最蕃地に入つて計らずもライオンの危機を救つてライオンと友達となり、猛獸と戰ひ、人猿社會を探檢して盲目となつた極東の快男兒倉田氏の事實大冒險物語『嘘の樣な本當の話』が同じく『富士』に掲載されてゐることだ。

×

酷寒の極、暑熱の極、兩地の驚嘆すべき物語、感激の苦心談は恐らく雜誌界稀に見る銷夏讀物だらう。

此の二大讀物の他に『富士』には紅綠氏の『若者よなぜ泣くか』岡田三郎氏の『街の曲藝師』事實美談『曉の銃聲』『アフリカ大冒險撮影』『新内閣物語』『干潟八萬石』等々の他佐々木邦氏、吉川英治氏等の大家揃ひで九月號は讀物滿載、凉味横溢、快讀誰にも歡迎されて大評判である。





壯絶快絶 猛獸を生擒にした痛快談

小山荘一郎
挿繪 齋藤五百枝

獰猛な捕虜

さうかうしてゐる裡に、出來事の多かつた一夜は、たうとう明けてしまつた。

美須谷君が、二三時間釣床の中へもぐつて疲れを休めてゐた間に、元氣な死門君は銃を提げて、もう何處かへ出掛けてゐた。

そしてニツパもゐない。

『相變らず元氣な男だ』

美須谷君は二人のゐないのを、格別氣にもかけなかつた。

たゞ美須谷君の胸中を占領してゐるのは昨夜の大鰐のことである。

『彼奴を一體、如何して馴らしたらいゝかしら』

美須谷君は、とつおいつ、思案をしながら、昨夜、自然巖の出ツ鼻に縛りつけて置い

な獰猛な捕虜のところへそつと近づいた。

それと直ぐ氣取つた大鰐は、引括られてゐる大きな口を無理に開かうと、鱗の鎧を着てゐるやうな二十餘尺の巨軀に浪打たせて、ジタバタ身をもがき始めた。この剽悍な鎧武者は、虜の身となりながら、まだ近寄る者を喰ひ殺す氣でゐるのだ。昨夜捕へた時には、ラツソ捕繩の電流が全身にかゝつてゐたので、仕末をしよかつたが、今は危くてどうにも手がつけられない。

『本當にどうしたもんだらうなあ』

美須谷君は思はず溜息を吐いた。

恐しい膽ツ玉と、凄い腕と、科學的機械とで、猛獸や大爬蟲類を見事に生擒する美須谷君は、一面に於いては、その自分で捕へた獲物を、幼稚園の保姆以上の慈愛と注意を以つて、飼育することに努力せねばならぬのだ。といふのは、依頼者である動物學者や動物園長達が、美須谷君の捕へたものを引受けたあとで、餘り手こずらぬ程度にまで馴らして置かねば、折角の獲物も長持ちはしない。勢ひ價値を減ずるし、第一、捕へて歸還することさへ却々難しいからである。

が、獰猛な野生の動物を、そこまで馴らすのはとても大變な仕事だ。折角生捕つても、馴らし得る見込がたゝなければ、また新しく別なのを生捕る外はないが、昨夜生捕つた鰐は却々の大物、容易にこれに匹敵する代りを生捕ることが出來さうにもない。

それは公園の池の鯉を見てもわかる。小さいのは算へきれぬ程澤山右往左往してゐるけれど、尺五位の鯉となると稀れである。それと同樣に、鰐が鯉のやうにゐるといふ、鰐の本場のこのナーバタ河の奥地でも、昨夜偶然に美須谷君の電氣捕繩に引かゝつたやうな老鰐は、さう矢鱈にはゐないのだから、馴れるものなら是非馴らしたい。

然し、これ位の王樣格の鰐になると、とても機敏で殘忍で、おまけに非常に狡猾だから仕末に了へない。人間なぞは自分達の餌の一種だと心得てゐる。だから、その人間なんぞに支配されることは絕對に嫌ひなんだ。然し、いかなる中央印度名物の大厄介物百獸鰐でも、たつた一つの降參することがある。それは人間でも同じことだが『餓え』――だ。

『さうだ！　この腹ぺらしの一手で參らせてやらう、さうでなくてさへ鰐は大食動物中での親玉、これにはきつと屁古垂れるに違ひあるまい、そこで時分を見計つて、自分に經驗のある餌で餓馴らして見よう』

斯う決心した美須谷君は、今後數日間、鰐には觸らないことにした。

さて、もう一つのお客さんは、例の大蛇だ。御機嫌如何にと

訪れると、もう絶對に逃げられぬと觀念したものか、昨日飲みこんだ虎のところだけ、ぽくらんと腹を大きく膨らませたまま、檻の中でとぐろを卷いて眠つてゐた。

『この方は、鰐より餘程仕末がよささうだ』

と肯きながら美須谷君は、この急に生活が變つた珍客の氣をいらだたせないやうに靜かにして、隨分長い間、注意して見てゐた。

やがて天幕へ引揚げた美須谷君は、まだ死門君とニッパの歸つてゐないのに氣がついた。

『如何したのだらう？　默つて出たのはいゝとして、昨夜でもわかる通り、日が暮れたらとても危險なんだ。いゝ加減に歸ればいゝに、……このビンヂャ山麓の人外魔境ナーバタ河の奧地へやつて來てゐて、道草にも程がある。一體、二人は何處で何をしてゐるんだらう』

と、そろ〳〵氣を揉み出した。

が、二人は却々歸つて來ない。

電氣捕縄をはじめ武器の手入れを充分濟ませ、日記をつけたり、今後の行動の準備をしたり、いろ〳〵のことをしてゐる裡に、いつか夕ぐれとなつた。が、二人はなほ歸らぬ。

流石膽ッ玉の甕のやうな美須谷君も、心配で、ゐても立つてもゐられなくなつた。



闇に光る豹の眼

暮れるとなつたら、黑幕をきつて落すやうに、無氣味な程速い熱帶の闇の襲ひは、猶豫なく來てしまつた。

が、二人はなほ歸つて來ない。

たうとう、八時が過ぎて九時になつた。

『愈〻二人は何かにやられたに違ひない』

と美須谷君は思つた。

『斯うしてはゐられない、捜しに出掛けよう』

晝でさへ危險極まるこの猛獸の巢のやうなところを、夜出歩くことの如何に無謀であるかは、美須谷君は知り過ぎる程知つてゐる。が、死門君はひそかに自分の後繼者を以つて擬してゐる愛弟子だし、ニッパは勇敢で、機敏で、正直な愛すべき部下だ。わが身の危險に尻込して、この親身の二人の安否を、たづねずに置くやうな美須谷君ではない。

愈ゝ美須谷君が、三人の土人を從へて、これから夜通し、二人の行衞搜索に出掛けようと決心を固めた時、何ものか天幕に近くらしい微かな物音が聞え出した。

ハッとして美須谷君が耳を聳てると、確かに何ものか天幕に近いて來るのだ。しかもその音は、人間のやうでもあり、獸のやうにも思はれる。

『今頃――何もの？』



油斷のない美須谷君は、右のポケットの短銃をグッと握つて身構へながら、天幕の入口から外を窺つた。

ところへ、勢ひよく驅けこんで來たのはニッパであつた。

『おゝ！　無事だつたか』

美須谷君は、嬉しさの餘り、抱きかゝへようとするかのごとく、大手を擴げて迎へた。

『遲くなりました、團長！』

ニッパも嬉しさうである。

『とても心配したぞッ！　今まで一體、何處に何をしてゐたのだ？……そして死門君は？』

といひかけたところへ、天幕の外から、元氣のいゝ死門君の聲がした。

『遲くなつて、とんだ御心配をかけました。その代り、素晴しい珍客を伴れて來ましたよ。何しろ、ふとしたことで道連れになつて、この危險千萬な猛獸國の暗路を、一緒に苦勞しいしいやつて來たのですからな、兎に角まあ、珍客に會つてやつて下さい、天幕の外に居りますから……』

『餘り遲いので、實は今搜しに出かけようかと思つてゐたところだ――然し好かつた、好かつた、無事で何よりだつた。本當に安心した。ところで、その珍客殿を早速天幕の中へ案內し給へ、外で待たせちや失禮だ』

『ところが、この珍客は天幕の中へ入れられない物騷な奴なんで』

『え！　ぢや、人間ではないんだね』

流石の美須谷君も、一寸度膽を拔かれたかたち。が、直ぐ短銃を握つたまゝ、天幕の外へ出た。そして一目見ると、

『成る程、こいつア天幕へ入れるにや、少し猛烈過ぎるお客だわい』と思つた。

天幕の外はしつかり闇につゝまれてゐる。その中に、ホンの四五步先きで、青水晶の日に輝いたやうな小さな圓い光が二つ動いてゐるのは、紛れもない猛獸の眼玉だ！

『何んだ――豹君か』

美須谷君も思はず破顏一笑。

その刹那、この聲に怒つた珍客は、忽ちその眼を爛々と輝かしたかと見れば、猛然として唸りかゝらうとした。

と見て死門君は、ハッと緊張す。

『畜生！　ふざけるな』

この一喝に、流石の豹も參つたらしく、身を縮めた。そして、ハッハッと火のやうな息使ひ！　どうやら、逆道にしつかり汗になつてゐるらしい。

『やー！　鼻でばかり息をしてると思つたら、口をしつかり縛られてゐるんだな』

『えゝ、この珍客の口ときたら、とても物騷ですからな、はつはつ、――こいつを夕方にやつつけました。かねてのお言ひつけ通り、腰のつがひを二發やつて、三哩の餘も引摺つて來たもんですから、つい遲くなつてしまひました』

『ホウ、そりやお手柄だつた。まあ、早く腰の傷の療治をしてやるんだね、さうすると、これも倫敦への立派なお土産の一つになるよ、――何はともあれ、無事でよかつた、今夜は一つ、新しいウヰスキーでも拔いて、初のお手柄を祝ふことにするかね』

美須谷君は、二人の無事とその土産に、しつかり滿足して言つた。

その翌朝から、土人等は總がかりで、印度馬所蘭と、ボケツト・モンキーを捕りに働いた。

二十日間ばかりの間に、餓ゑに降參した鰐は、もう特別の檻へ入れてもいゝ迄に、粗ら馴れに馴れた。そこで一行は、大蛇や豹や大鰐を、一先づ、ナーバタ河口の假動物道場へ送り、愈よ八方に亙つて大活動することになつた。

猛獸船

斯くて一行は、中央印度を根據として、南は錫蘭島・スマトラ島へ、北はヒンヅスタンを經てヒマラヤ山麓のあたりまで、約五ケ月餘に亙つて、とても變化の烈しい、そして危險でもあり、痛快でもある日を送つた。

その苦心努力の結果、思ひまうけぬ獲物まで、澤山手に入れて、西印度の方のところから、膝のやうに亞剌比亞海に突き出てゐる、グジエラード半島の『デウ』といふ葡萄牙領の港から、愈よ猛獸船を出して、本國英吉利に歸還することになつた。

最新式の大汽船を猛獸船とは、甚だ奇怪千萬な稱呼である。が、船長はじめ一同の者がさう呼ぶのは、その航海は特別の貸切であつて、乘つて行くお客は、猛獸や鰐や蛇の方が、却つて人間よりも遙かに多いからであつた。

その猛獸船ムルタン號乘組の珍客の中で、小さいくせに最も幅を利かせてゐるのは、ニッパの兄の骨折りで、ギアワガ土人の酋長から買ひ取つた、擴げた翼の全長が五尺九寸といふ、世界に珍しいヒマラヤ鷲。――それから體格が大きくて威張つてゐるのは、野々の本場の錫蘭島で生擒して、荒馴らしが濟んだばかりの大猩々三頭――、また體の長いので横綱は、ナーバタ河の奧地で美須谷君が生捕つた、例の虎呑み大蛇の二十八尺強といふところ……。

その他の顏觸れは、大きな印度虎が一頭、木登りがとても上手なヒマラヤ熊が二頭、大猩々が一頭、顏の黒い印度猿が三十匹と四分の一。――生き物を四分の一匹とは、變な計算の仕樣

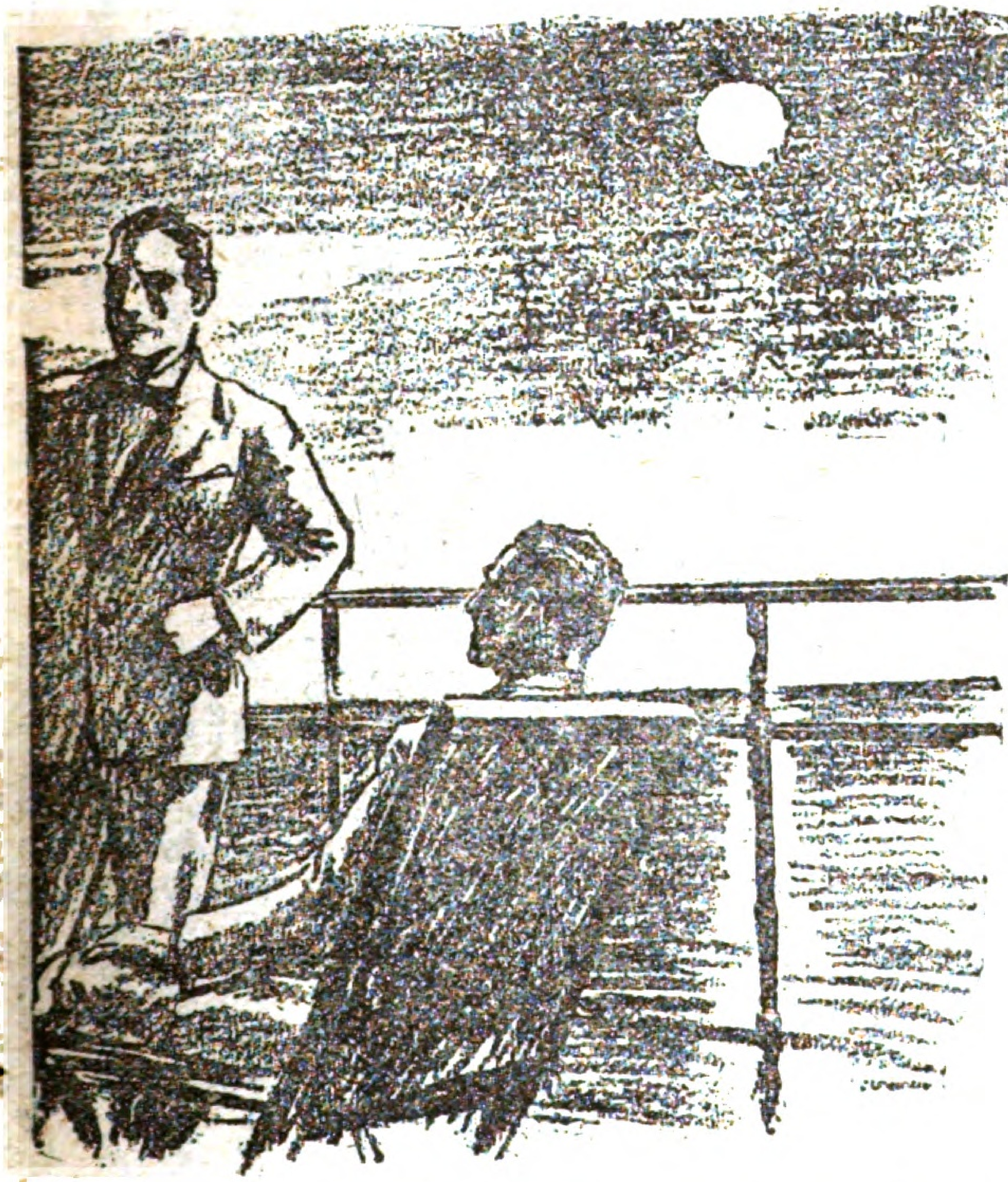
だが、その中に普通の印度猿の四分の一位の大きさしかない、ポケット・モンキーが一匹混じつてゐるのを、氣象の面白い船長ベルゲン君が（これは餘り小さいから、今度の積込鳥獸目錄の中に、四分の一と勘定として計算しよう）といつたのが、面白半分、みんなに贊成されたといふ譯だ。

外に、南部印度の動物園から讓つてもらつた今年三十一歲と保證されてる大蜥蜴一匹、それに死門君が生捕つた豹が、もう腰の傷が癒つて剽悍な顏をして仲間入りしてゐる。その上に珍しい砂漠雀や紅鶴や、等、等數十羽の珍鳥。

この珍しい顏觸れの中でも、珍中の最珍として、船員達の興味の中心になつてゐるのは、最も恐しい顏をしてゐる大鰐夫婦の紛れもない新婚旅行の甘つたれ振であるから笑はせる。

『死門さん、これですか、ナーバタの奥で、美須谷さんの大事な部下ギーザの足を喰ひ切つたといふのは？』

『さうです、船長。この花聟さんの力がさうなんです。何しろ盲滅法に暴れるんで、流石の美須谷さんも、すつかり弱つてゐましたよ。で、吾々が約五ケ月に亙つて、諸方に活動する間、これをナーバタ河畔から遠くない回々教の寺院に預けて置いたのです』



『成る程、それはよいところへ氣が付かれましたね。印度や瓜哇、スマトラ邊の回々教の寺院では、鰐は神の使といふので、澤山池に飼つてゐるやうですね』

『えゝ、そこで奴さん、すつかり馴れてしまつたのはいゝですが、同時にいつか池の仲間に……』

『お安くないのが出來たといふ譯ですか、はつはは』

『さうなんですよ、それで離すと、とても御機嫌が斜めなので、美須谷さんが粹を利か

してその戀女房を寺院から貰ひ受け、一緒に倫敦へ連れてゆくことになつたのです』

『はつはは、出雲の神樣の役廻りまで勤めるンぢや、猛獸生擒家も樂ぢやありませんな』

『はつははは』

二十數尺もある兇猛な鎧武者のローマンスには、腹を抱へぬはなかつた。その裡に、船はすつかり準備をとゝのへて、愈ゝ出帆といふことになる。

美須谷君が、印度へ猛獸狩りに來るのはこれで六回目である。馴染も多いし、それだけ名殘りも惜しい。知己の誰れ彼れは、誘ひあつて埠頭へ見送りに來てゐた。

もう杖に縋つて歩けるやうになつたギーザも來た。また、今度の猛獸狩での第一の殊勲者ニッパも來た。其他いづれも、

『御機嫌よう、またお出でなさい』

『お待ちしてゐますよ』

と、口々に別れを惜しむ。



『遠からず、またお世話になりますよ、第一、この死門君は、すつかり猛獸生擒の滋味を味つたので、國へ歸つても腕が夜泣きして、長くはじつとしてゐられまいからね』

と、またの逢瀬を約してゐる間に、船は徐々に埠頭を離れる。

『左樣なら』

『左樣なら』

忠實無二な土人達は、港を後に出てゆく船を、いつ迄も埠頭に立つて見送つてゐた。

天國から地獄へ

『やれ〳〵、これで重荷を下した』

『本當に安心しましたよ』

その日の夕方、食事を終へてから美須谷君と死門君は、上甲板に椅子を並べて、ゆつたりと腰を下した。

もうこれで、自分等のなすべき務めを果したと思ふと、耐らなく愉快である。あとは豫定の航海を無事に終ればいゝのだ

が、それとて船は最新式の大汽船、船長は老練の士だから、先づ、安心していゝわけ。

『いゝ凪だ、恰るで繪のやうな景色だ』

『こんなのを油を流したやうだとでもいふのでせうね』

得意の二人には、海上の平穏なのさへ、自分達が祝福されてでもゐるやうで、愉快だつた。

暫くすると、眞南の大印度洋から、月が靜々と昇りはじめた。

『やゝとてもいゝ月だなあ――こんな猛獸船で、こんな美しい月夜の海を航海するとは、なんて素晴しい對照だらう、こんな愉快なことは生れて初めてだ』

死門君は殆ど踊り出さんばかりであつた。

『それに美須谷さん、こゝから見渡す限りの相手は月ばかりなんですから、今夜こそは銃も捕繩も要りませんな』

『さう、まさか、海の上では捕繩をひねくりまはす必要もあるまいね、ぢや、一つ、久し振りで角笛でも聞かせてあげようか』

その折柄、最上甲板からドドドドッと、船梯を降りて來たのは、ムルタン號の船長ベルゲン君だ。この諾威人は、動物が好きで、殊に猛獸を船で運ぶのには充分經驗あるだけ、猛獸船の船長には至極の適任者だつた。

が、如何したのか、日頃大黒樣のやうにニコニコしてゐる人が、苦蟲を噛潰したやうな難しい顔をして二人の前に立つた。

『まあ、かけ給へ』

美須谷君は椅子をすゝめる。が、船長はそれすら耳に這入らぬらしく、殆ど獨語のやうに、

『出帆を二三日延期するんでしたな』

と呟いて吐息した。

『船長、冗談言つちやいけませんよ、この月夜の油凪ぎ、僕達は天國へでも行つたやうな好い心持になつてゐる際に、そんな意地の惡いことは言ひつこなしに願ひたいね』

不平さうに美須谷君がいふと、船長は益々眉を顰めて、

『ところが、その月夜の海の凪ぎ過ぎたのがいけないのです。出帆の時はこれ程ではなかつたので、ついうつかりしてゐましたが、この無風状態の後が大變なんです。この凪はね、亞剌比亞海が、心底から腹を立てる前に無言で一息入れてるやうなもので、今に硫黄山一面に火をつけたやうに、海全體が沸き立つ大嵐がやつて來ますよ。晴雨計も非常に惡いし、多分夜中まではかゝらぬかもしれぬ。……なアに船客は内輪の者ばかりだし、船に弱いのは子供を連れてゐる君の妹ぐらゐのものなので、その點は心配ないですが――積んでる猛獸どもが、とても仕末が惡いのでね』

この船長の最後の一話に、恐しいといふことを知らぬ流石の世界的猛獸生擒家も、赤劍でぐつと胸でも突き刺されたやうに戰いた。

『えッ！　本當のことですか、まさか拔ぐンちやありますまいな』

『本當ですとも、直ぐ大騷れになりますよ、そんな際によく、船體の動搖から檻が破れて、猛獸が飛び出すことがあるんでね』

さあ！　大變なことになつて來た。

大時化の際と、猛獸が檻を飛び出したとしたら、これ程仕末の惡いことはない。美須谷君も死門君も、今迄のはしやぎ振りは何處へやら、忽ち、眞蒼になつてしまつた。

船長ベルゲン君の言葉は違はなかつた。

果して、二時間も經たぬ裡に、切れ切れの速い雲が月の面を掠めて飛びはじめた。と、海上は、見渡す限り沸き立つやうに波が吹え出した。

虎！　檻を破る

これはいふ迄もなく、この亞剌比亞海に、時々不意に起る熱帶颶風の、しかも猛烈なやつだ。

やがてムルタン號は、木の葉のやうに波浪に飜弄されはじめた。忽ち、山のやうな大濤の尖端にかけあがつて、高く高く押しあげられたかと見れば、俄然、どつと波と波の谷間に落されて、お辭儀するやうに水にノメリ込む。その度毎に、二尺も三尺もある潮水の瀧が、どう――とをめいて甲板を洗つた。

驚いたのは猛獸達である、大蛇や大鰐達である。珍鳥、奇鳥達である。船が生れて初めてなところへ、この大時化！　天地が覆るやうな天變地異に遇つた如くに狼狽へ始めた。悲鳴！　咆吼！　阿鼻叫喚！　地獄も斯くやと思はれるばかりである。

これより先き、船長の警告を受くると同時に美須谷君と死門君は、船夫や傭の獸夫達と共に、天候が變るまでの二三時間程のあひまを利用して、猛獸や鳥類やの檻や籠を、船が搖れても動いたり轉つたりしないやうに、必死になつて出來るだけの手當をしたのであつたが、こんな猛烈な風に遭つては、そんな俄か不當な仕事は格別役にたゝなかつた。一夜くらして朝になつたらとんでもないことが持ち上つた。

蛇と鰐の檻は、鐵壁で四方を圍まれてゐる船艙の中に入れてあつたので例へ檻を破つても中で半死半生に轉り廻るばかりで、船艙の外へは出てはこれなかつたが、印度虎の檻は中甲板の鐵柱に括りつけてあつたので、船體の恐しい動搖でごろごろ檻が轉がり出すと、虎先生ひどい聲をあげて怒り狂ひつゝ、轉り返つて上になつた檻の木の底を押し破つて、たうと

う外へ飛び出した。

しかも、こゝいらが四つ足の徳な點とでもいふものか、それとも虎が身輕なためかどんなに船が動搖しても、人間のやうに轉びはしない。狂つたやうに咆吼しながら、よろ〳〵彼方此方をうろつき廻はる。

ところへ、何にも知らずに上甲板から中甲板へ、梯を降りて來たのは水夫長だ。

忽ち、

『ウオーッ』と一聲。

虎は水夫長に飛びかゝつて振り飛ばした。

『氣をつけろ！

虎が出たぞツ、

虎が！』

とてもひどい風の呼鳴り、濤の音、必死に叫ぶ水夫長の聲さへ、ともすれば打消され勝ちだつた。



颶風中の大慘鬪

またも大濤が、上甲板をドドッドーッと洗つてゆく。

『猩々を縛れ！』

といふ叫び！

『大蛇があぶない！』

といふ聲——

と、

『アーッ』といふ人間の悲鳴！

今や大颶風の中心に入つたムルタン號は、波浪と鬪ふだけでも容易でないのに、船中至るところ、猛獸と人間の大慘鬪が行はれつゝあつた。

折柄美須谷君は、滿身ビショ濡れになつて、上甲板から中甲板へ轉るやうに降りて來た。

『やつ！ 水夫長、やられたな！』

血みどろの水夫長を一

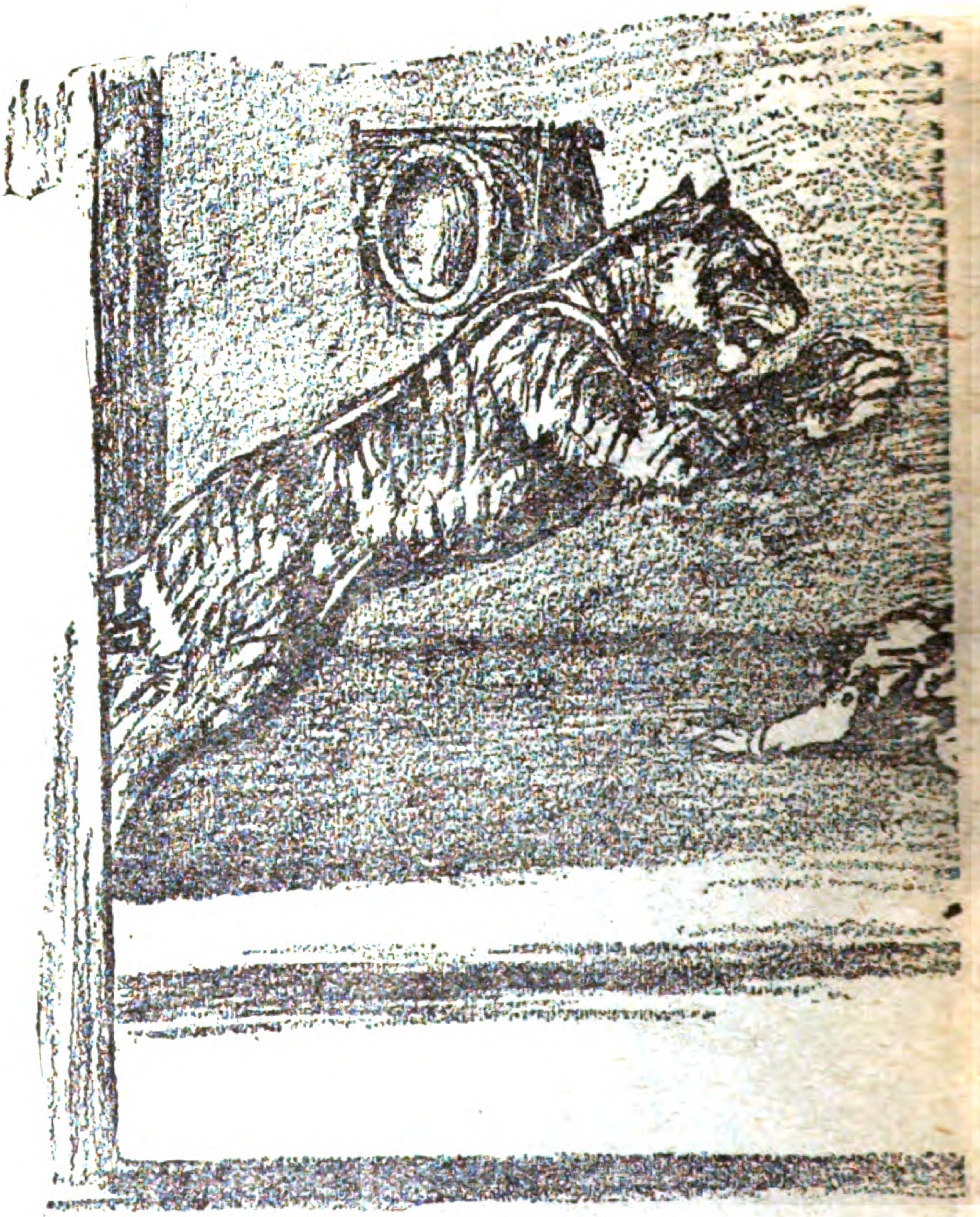
目見るや、美須谷君は飛びついて抱き起した。

『しつかりしろッ！ 相手はなんだ？』

その聲が耳に這入つたか、息も絶え〴〵になつてゐた水夫長は、カッと眼を瞠つた。

『あつ、美須谷さんか！ いゝところへ………虎奴！………私を嚙んでから……せ、船首の方へ行きました。……行止りだから、き、きつと歸つて來ます。……美須谷さん、こ、こゝで、私の眼の前で敵をとつて下さい』

『ようしツ、敵をとつてやるから、それ迄は死んぢやいかんぞツ！ 今、虎のやつを引摺つて來るから………』



と言ひ置いて、美須谷君は虎のあとを追ふ、が、人間だから、この烈しく動搖する船の中を、虎のやうに旨くは歩けぬ。短銃を握つた手を後にして、中腰になつたり、左の手だけ甲板について這ふやうにして進んでゆくと、引返して來る縞虎にバッタリ出會つた。

と、美須谷君は矗乎と立ち上つた。そして右の手の短銃を矢張後に隱したまゝ、左の手を態と大袈裟に振りあげ、虎に打つてかゝらんとする姿勢を示すと、虎は五六間位の距離を一氣に驅け寄り、七八尺位のところから、恐しい牙を鳴らして、猛然、飛びついた。

間一髮！「ドーン」と餘り高くもない銃聲が聞えたかと思ふと、虎は飛びついたまゝ、恐しい呼鳴り聲を發してどうと倒

れ、バッタリ腰を拔かしてしまつた。

早くも美須谷君は、六尺ばかり飛び退いて、四角に出張つた小船室の陰に身をひそめてゐたが、狙ひ違はず虎の腰の番を射貫いたと見るや、再び水夫長の傍に驅け寄つた。

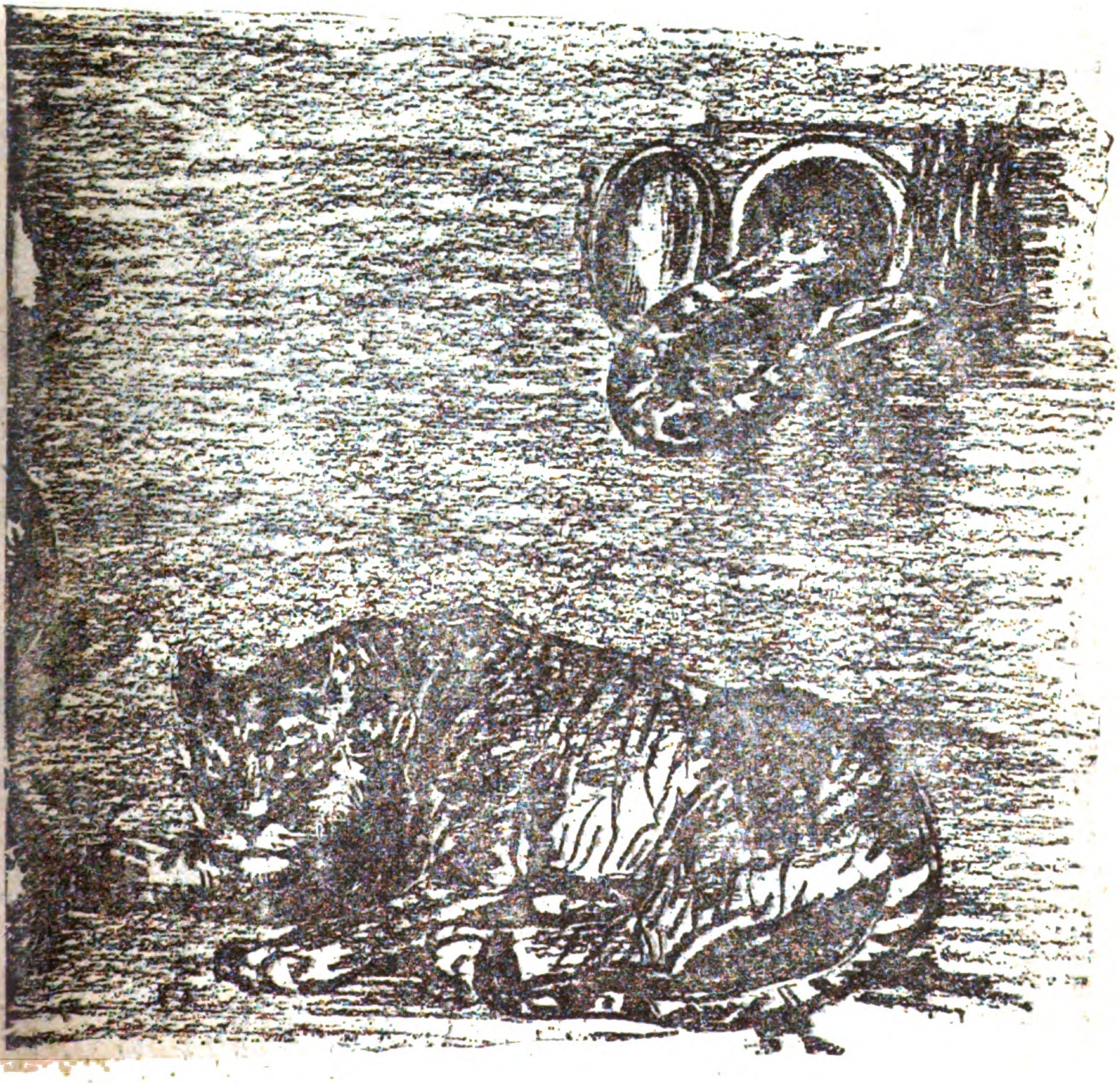
『水夫長！』

『オ、何ンです』

『おや！「何ンです」と言つたな。案外傷は淺いらしいぞ水夫長ッ、その傷が致命傷なら「何ンです」なんて返事が出來る筈がない、しつかりしろ！　活きかへれッ！　傷は淺いんだ！……そら、そこに君の敵が腰が拔けてへたばつてゐる。まあ、敵を討つたやうなもんだ。今、死門君を寄越して傷の手當をさせるから、氣を確かに持つてゐ給へ！』

さう言ひ殘して美須谷君はまた上甲板へ驅けあがつた。

ホンの一瞬の入れ違ひだつた。忽ち船體がひどく傾斜したかと思ふと、今、美須谷



君がかけあがつた船梯の上り口から、ゴウーッといふ物凄い音と共に、瀧のやうに潮水が流れ込んだ。

『呀ッ！』と思ふ間に、水夫長の體はもう十尺ばかりも奥の方へ押し流されてゐた。

『こいつア――酷えや』

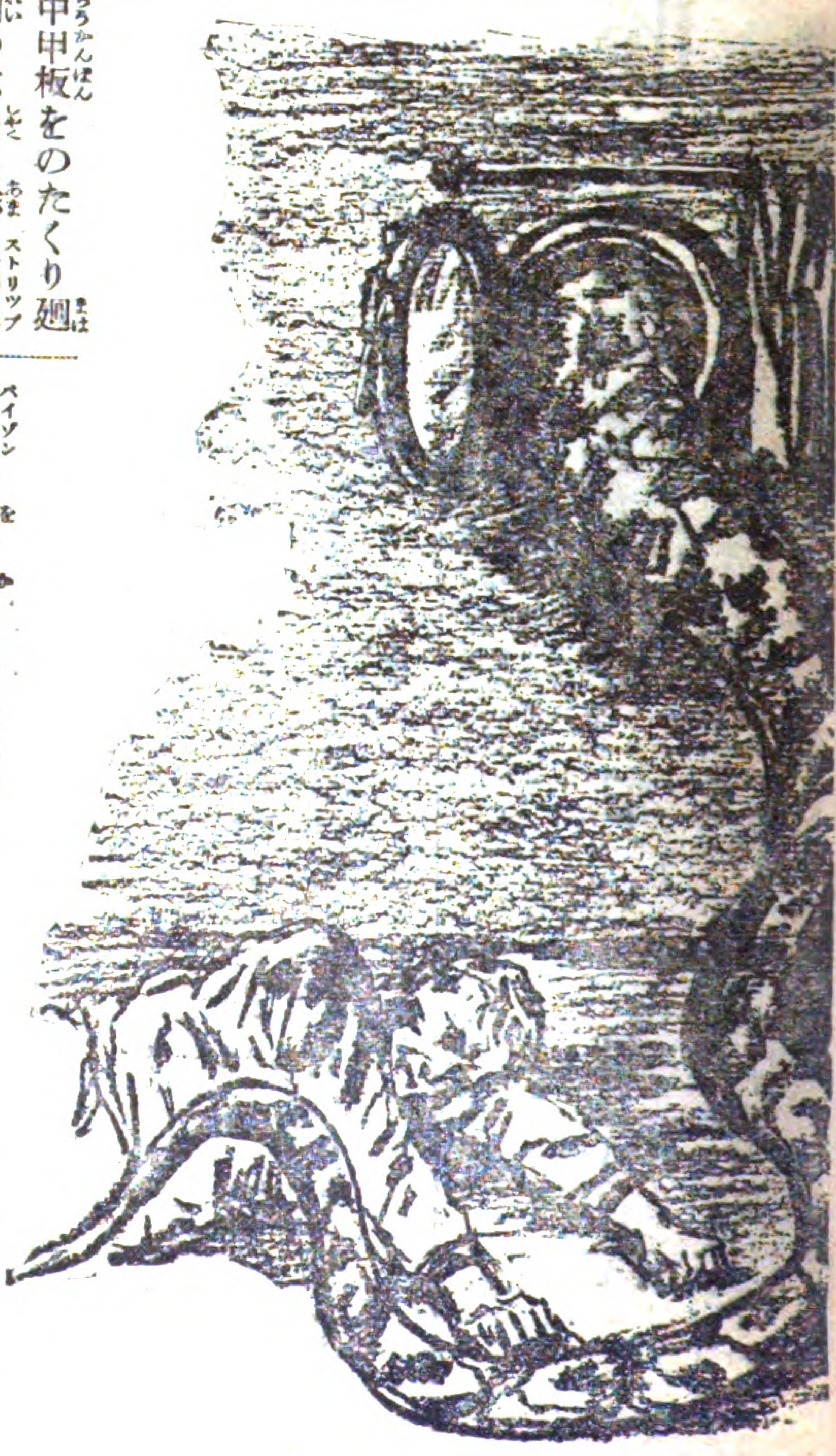
重傷に惱む水夫長も、思はず吃驚して呟きながら眼をあげる。と、今の潮水がもたらした中甲板の珍光景に、再び、

『呀ッ！』と驚きの聲をあげた。

丁度、濡れたお盆の上に鰻が一匹のたくつてゐるやうに、三十尺ばかりの怪物が、中甲板をのたくり廻つてゐるのだ。――いふ迄もなくそれは、例の六尺に餘る縞虎を呑んだことのある曰く付の大蛇先生である。この怪物は、上甲板にあつたその檻が、轉覆して壞れたのに乘じて脱け出して、今の潮水と共に中甲板に流れ込んだのであつた。

と、また船は大搖れに搖れて、船首下りに傾いた。

そのはずみにのたくり廻つてゐる大蛇の尾が、倒れてゐる水夫長の頭を越えて、偶然にも印度虎の胴の上にヌラリと乘かつてしまつた。虎は利かないのは腰だけだ。そしてこの大時化と傷手に、猛りに猛つてゐる際だから耐らない。忽ち、ガブリと大蛇の尾に嚙みついた。



その途端、船はまたもや、轉覆しやせぬかと思ふほど右舷に傾く。――と、その反動で、大蛇も人間も虎も一緒になつて、ごろ／＼と右舷の方へ轉がつた。

そして、虎は出張つた船室のところで止まつたが、大蛇と水夫長は、右舷の船壁にいやといふ程叩きつけられた。

不意に虎に嚙まれた傷さと、今の打擊に、大蛇はひどく慌ててしまつた。そして唯一筋に逃げようと焦り切つてゐた。

その大蛇の眼に止まつたのは、蓋のネヂの止め方が淺かつた

らしく、船が動揺する度毎に、バタバタ開いたり縮つたりしてゐる、船壁に穿つた圓窓だつた。その外が、恐しい怒濤の吠えてゐる荒海ともしらず、どこまでも周章てた大蛇は、またも尾を噛まれない裡にとばかり、その圓窓に首を突込んで、するすると外へ抜け出した。

が、大蛇の胴のところは圓窓より遙かに太かつた、殊に一番太いところは、引絞つても引絞つても容易に抜け出なかつた。それでも無理に細く細く引絞つて、半分の餘も體を抜け出したと思ふ頃、またも船が大揺れに揺れて、ぐつと右舷に傾いた。と――あはれや大蛇は、大濤の眞只中に、ザンブと突き込まれてしまつた。大蛇はすつかり驚いた。圓窓から半分ばかり抜けては見たものゝ、船と一緒に潮水に浸つてしまつて、眼がくらんで、息も吐けない。仕方がないから、またぞろ隣りの圓窓から船内へ首を突つ込んだ。

然し、船内に戻つて見たものの、そこは今尻尾を噛まれた苦しいところだから、流石に躊躇して首を振つてゐる裡に、無理に引絞つて出てゐる、一番目の窓に當る體の部分が、烈しく痛んでだんだん腫れあがつて來た。

痛いから引抜かうと焦せれば焦せる程、肉は腫れ上つて、ギツシリ動かなくなつた。今は大蛇は半狂亂である。またも第三の窓から外へ首を出した。そしてまたも大濤を食つて、第四の窓の外の方から内へ首を突き込み、進退全く谷つてしまつた。

× × × ×

この珍無類な難航海の後、船が英領亞刺比亞の亞典港へ着くと、この船に眞先きに乗りつけた小蒸氣船の人々は、すつかり膽を潰してしまつた。

無理はない、三十尺もあらうといふ大蛇が、丁度信玄袋の締紐のやうに、氣船の圓窓四つを縫うて死んでゐるのだから…。

それから、一ケ月餘を經て、美須谷君の猛獸船は、難なく倫敦に着いた。(大尾)



學生雄辯界の先驅者

◇

本社發行の「雄辯」は明治四十三年の創刊で、今や誌齡二十年になる。當時勃然として湧起つた辯論鼓吹の叫びは天下を震撼する概があつた。「雄辯」はこの雄叫びの間に在つて全國學生青年諸君の唯一の連鎖機關となり引續き現在に至つてゐる。

◇

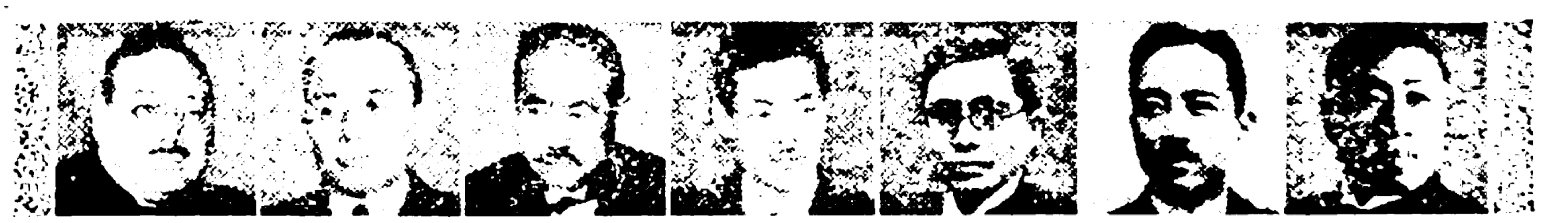
赤門から、早稻田から、三田から、駿河臺から、各方面から……『雄辯』に集つた當時の諸君にして、今や國家有用の材となり、進歩氣鋭の才鋒を發揮してゐる人々が多い。

こゝに掲ぐる諸氏はホンの一部に過ぎない。是等の諸氏は、齡未だ四十代の働き盛り、然も卓然として一頭地を拔いてゐる國家的材器である。十年、十五年、の後には、先人の蹤を襲つて、帝國樞要の地位に坐すべき運命を荷つてゐる。

ウインストン・チヤーチル氏曰く『雄辯は成功の第一要素である』と。然り事實は眞に雄辯に物語つてゐる。

愛讀者諸君よ！ 雄辯にして成功者となり得なかつた人物は、未だ天下に一人もないのである。吾等には爲すべき多くの事業がある。吾等は成功しなければならない。吾等は雄辯家にならなければならない。

右より 大藏省主税局長 青木得三 大使館參事官 芦田均 代議士 田子一民 警視總監 丸山鶴吉 代議士 鶴見祐輔 辯護士 大井靜雄 帝大教授 河合榮治郎 諸氏



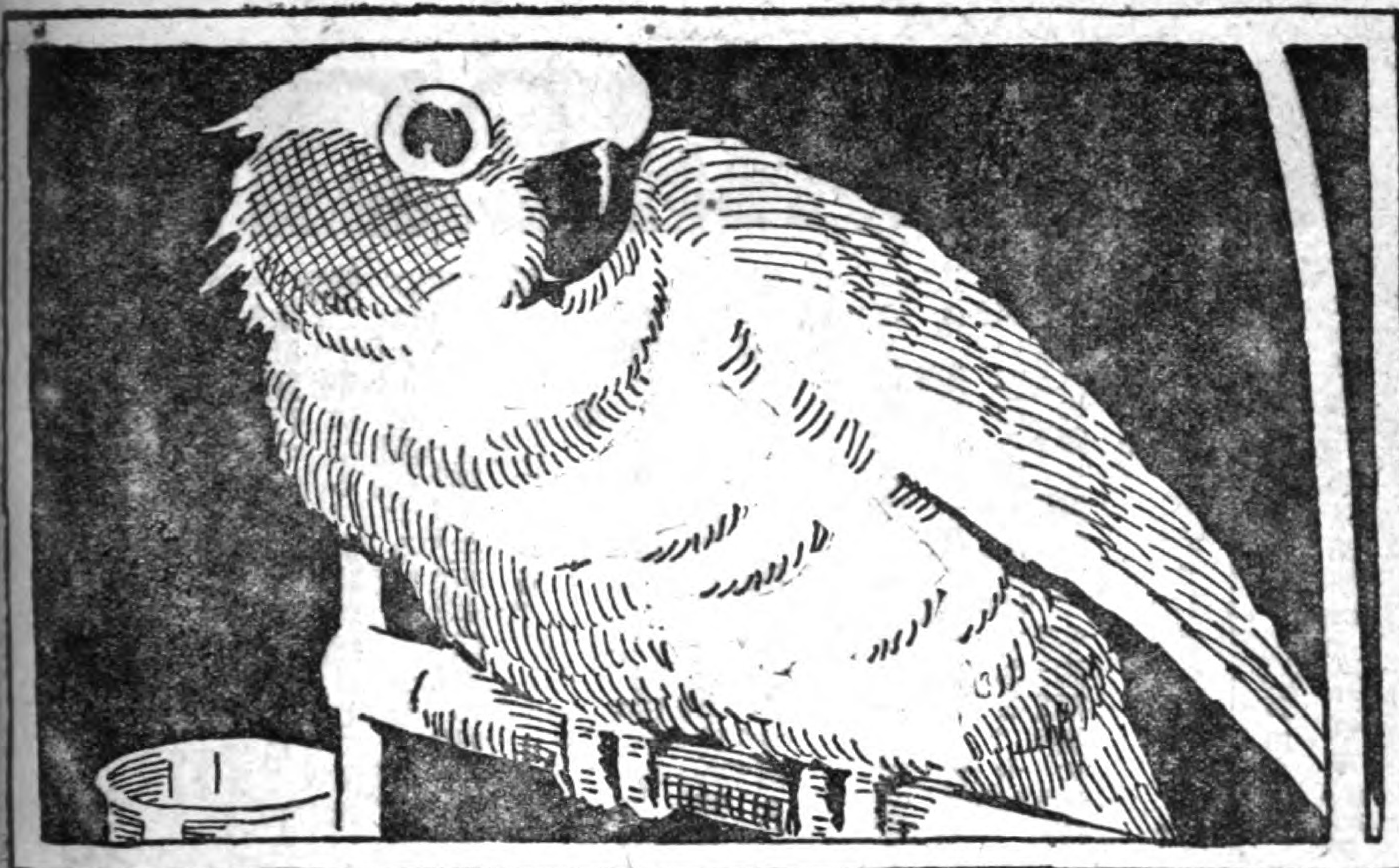
右より 代議士 永井柳太郎 知事 森岡二朗 代議士 牧野良三 早大教授 小澤愛圀 代議士 田淵豐吉 東京市政調査會理事 前田多門 代議士 鈴木文治 諸氏

◇

今や、全國津々浦々に勃興せる雄辯熱は全く凄じいもので、各地に組織せらるゝ雄辯研究會や雄辯聯盟の日に月に、その數を增しつゝある。南には九州雄辯聯盟、北には北海道青年雄辯聯盟をはじめ、宮城雄辯研究會、高崎雄辯研究會、神戸雄辯研究會、南手雄辯俱樂部等枚擧に遑なき程。而して、第二の永井、第二の鶴見は今や、野に畑に旺んなる叫びを擧げてをる。

愛讀者諸君！ 躊躇する勿れ、即刻、雄辯に志せ！ 各地の雄辯研究會は諸君の來たらんことを待つてゐる。

――内に「雄辯」九月號は「より良き日本への大獅子吼」號として各界一流人物の大雄辯を特輯！「雄辯」ならでは見られぬ壯觀であります。切に御愛讀をお奬めいたします。發賣は八月十二日頃、定價は五十錢です――。



東京行進曲

菊池寛
挿繪 寺内萬治郎

その次ぎの寫眞は『熊ならしの娘』と云ふのだつた。デル・リオの女主人公が、自分を鞭打ち、自分の髪の毛を斷つてジプシイの娘としては、最大な恥辱を與へた山賊の首領に、だん〳〵愛を感じてゆく、變態的な戀愛の經路が、いたく早百合をうごかしたらしかつた。

『わたしも、あんな邪慳な男好きだわ。だつてわたしペコ〳〵する男は大嫌ひですもの。あなたが、いつかとても、わたしに邪慳になすつたでせう。だから、わたしあなたが好きになつたのよ。』

早百合は、佐久間の頰に、息のかゝるほど口をよせて、さゝやいた。

『さうでしたかな。僕あなたに邪慳にした覺えなんかありませんね。』

佐久間は、すまして云つた。

『あら、憎くらしい白ばくれて。』

さう云ふと、早百合は佐久間の右の手の甲をかるくつねつた。

『いけません。そんなことをなすつちや、僕は邪慳にする女性は、好きぢや

ありませんよ。』

『えゝ、どうせ、さうよ。あなたの好きな人は藝妓でせう。』

『どうですか。』

『ちやんと、知つてゐますわ。』

佐久間は、折枝の方が、はるかに令孃らしく、早百合の方が、よほど藝妓らしいと思つた。でも、薄暗の中に感ずる早百合の美しさは、折枝のそれに比べて、少しも劣らないほどだつた。

寫眞が終つたとき、二人は廊下へ出た。

『ねえ。佐久間さん、もう外へ出ません？ わたし、どつかを歩きたくなつたわ。』

『さう。ぢや。』

二人は、最後の寫眞を見殘して外へ出た。

初夏の夜の新宿附近は、美しい燈火の海に人波が渦き返るやうだつた。銀座などよりも、もつと潑溂たる新東京の面影があつた。幾組もの戀人同志が、手をとり合つて歩いてゐた。しかし、佐久間と早百合の二人づれほど、洗練されてゐる一對はなかつた。

『ねえ。佐久間さん、わたし神宮外苑を歩きたいわ。つれて行つて下さらない？』

『行きませう。』

二人は、後から後から、幾臺もつながつて來る車の中から、一臺の新ビックを撰み出した。

車は、鹽町を右に折れると、またゝく間に、神宮外苑の入口の橋の上で止まつた。

佐久間と、早百合は車を降りてペーヴした坦々たる散歩道を歩いた。

一面に赤らんでゐる東京の空の中で茲だけは空が青く澄みわたつてゐた。初夏の夜の星が美しくかゞやいてゐた。廣い芝生の中を、散歩道が直線に切られてゐた。都會の混亂をさけて、茲だけには自然と靜かさとが、用意されてゐる。

散歩する人は、ちらほらとしか見えなかつた。

早百合は、日本人には珍らしいほど、美しい足を短いスカートの下で、輕快に運んだ。

夜氣が、ひややかに二人の熱してゐる頰に當つた。薄闇に見る早百合の顏は、白い大輪の花のやうに美しかつた。早百合は、たえず佐久間に離れないやうに、身體をすれずれにして歩いた。

『ねえ。佐久間さん。あなたは、貴夫人と歩くときの作法御存じ？』

『いゝえ。知りません。』

『男の方は、手をとつて下さるものよ。』

早百合の黒い目もとが笑つた。

『かうなんですか。』

佐久間も、冗談半分に、早百合の左の手をとつた。

『さう。これで、やつと形がついたわ。』

二人は、ぴつたり寄り添つて、歩いた。

佐久間の心の中には、折枝のために作られた傷が、大きい口をあけて殘つてゐた。その傷の痛みは、まだちつとも癒つてゐなかつた。でも、早百合の人の心をむせばせるやうな魅惑的な眸や、變轉極まりなき表情は、佐久間の心の傷のいたみを忘れさせる魔醉劑のやうに働いた。

『ねえ。佐久間さん、あなたはモダン・ガールと云ふものをどうお考へになるの？』

『どうつて？』

『つまり、モダン・ガールと云ふもの、お好き？』

『さうですね。』

『やはり、藝妓がお好き？』

『いや、そんなこともありませんね。』佐久間は少しあわてゝ云つた。

『わたし　モダン・ガールと云ふものを、もつと尊敬して貰ひたいのよ。モダン・ガールなんて、形だけの問題ぢやないでせう。一寸、洋裝でもしてゐると、すぐモダン・ガールだなんて、馬鹿にしてゐると思ふわ。それに、モガだなんて。モガなんて、あんな悪趣味な下品な言葉をどうして使ふんでせう。』

『モガだとか、モボだとか、ほんとうにいやな言葉ですね。』

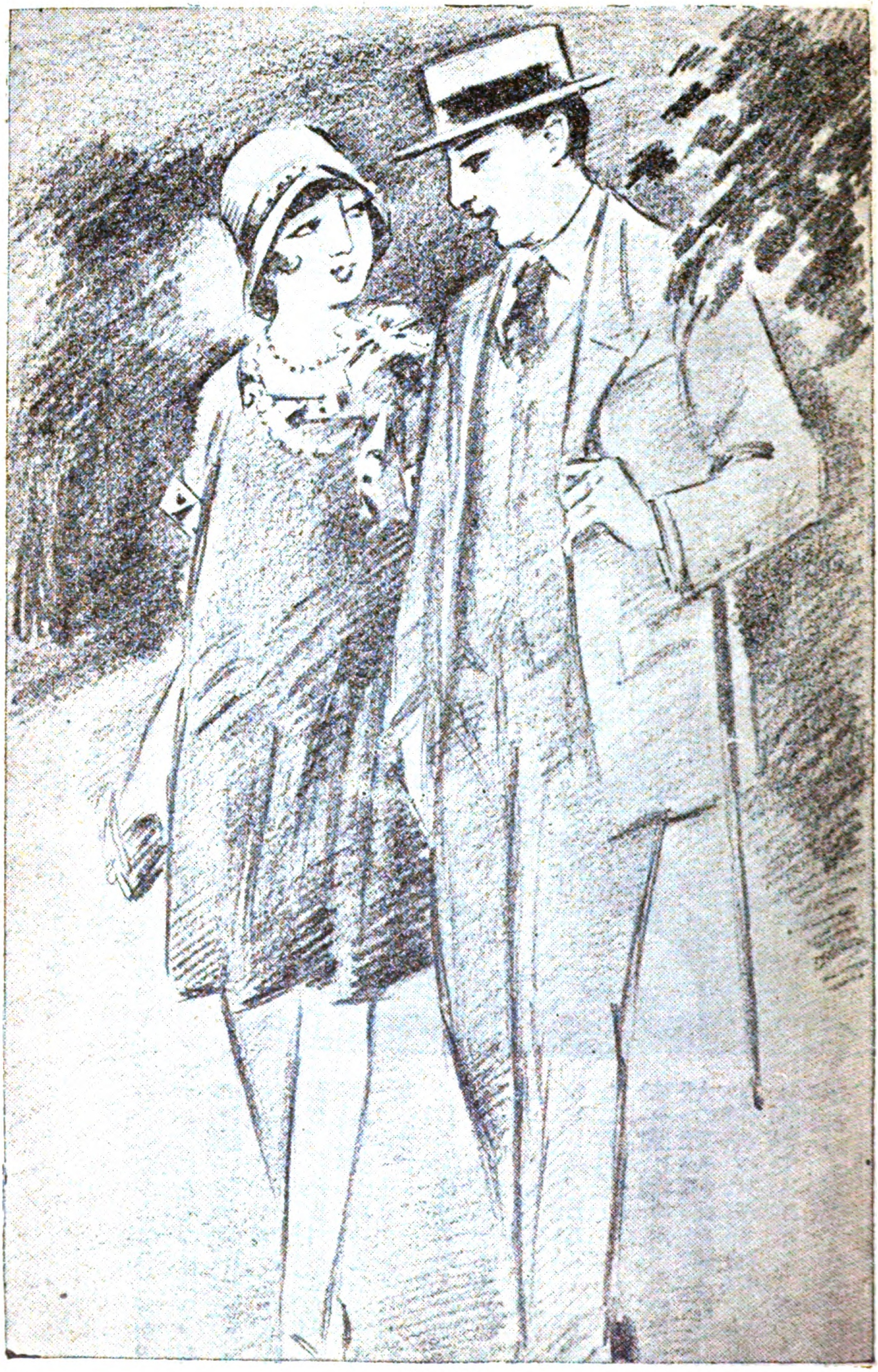
『わたし、さう思ふのよ。モダン・ガールと云ふ言葉は、もつと内容的な意味に使つて貰ひたいわね。女性として、ハツキリした自覺を持つてゐること。新しい戀愛觀と、貞操觀とを持つてゐる事、それがほんとうのモダン・ガールでないでせうかしら。』

『全く。』

佐久間は、折枝と早百合の違ひがこゝにあると思つた。どんなに、お轉婆らしく見えても、やはりちやんと思想的な背景を持つてゐると思つた。彼は、早百合は、馬鹿に出來ぬと思つた。

『わたし、戀愛に就いては、かう思つてゐますのよ。男のするだけのことは、女もしていゝと思つてゐるのよ。今までの戀愛の場合、たいてい女は受身でせう。男は撰み、女は撰ばれてゐるんでせう。男は愛し女は愛されるだけなんでせう。わたし、それぢやつまらないと思ふの。女の方から、盛んに男を撰んでやりたいわ。おほゝゝゝゝゝ』

『さうですね。全く、たゞおとなしく、何等の意志も働かさずに、愛されてゐることなどは、女性としてつまらないことですね。』



佐久間は、折枝のことを考へ出したので、つい深い感情がこもつてさう云つた。

『人形のやうに、お金のために身をまかす女のやうに、たゞ男の意志のまゝに左右されてゐるなんて、わたし眞平だわ。わたしは、うんと選擇をしたいの。デパートで、反物を買ふときのやうに、そこに重ねてあるのを、すつかりひつくり返してやりたいの。おほゝゝゝゝ』

『ぢや、僕なんか、今ひつくり返されてゐるのですか。』

佐久間は、冗談半分に云つた。

『さうね。貴君なんか、よこにとりのけてある分よ。つまり、候補の一反だわ、おほゝゝゝゝ』

『そんな候補の反物が、いくつもおありになるんでせう。』



『それほどでもないの。私が、もしかしたらと思つて、脇にとつてあるのは、五六反よ。』

『五六反！　隨分ありますね。』

『おほゝゝゝゝ』

早百合は、上半身を浪のやうに、うたせながら笑ひこけた。

佐久間は、早百合が、非常にコケットに見えてゐながら、そのくせどこかに深いところがあるのに、驚いた。神宮外苑を一しよに歩かうと誘ひながら、しかも自分で望んで腕をとらせながら、しかも外に五六人も愛人候補があると云ふではないか。

佐久間は、この人の掌中には入つたやうに見えながら、しかも、美しい露の玉のやうに、ころ〳〵ころげてゐる女性に、だん〳〵興味を感じ始めた。その五六人の愛人候補を蹴落して、自分がハッキリ彼女の全部を所有することも、決して氣持のわるいことではない。佐久間は、そんな風に

考へた。

妹として

折枝を良樹の妹として、藤本家に迎へるべき日は、だん〱近づいて來た。稲の家から、すぐ引きとつては、世間の問題にもなると云ふので、一度は彼女の伯父の家に引きとつて、それから改めて、藤本家に入れることにした。

藤本氏は、折枝を娘として家に入れることには反對だつた。自分の恥を娘の早百合やなつ子に知らせたくない氣持だつた。しかし、良樹はそれを承知しなかつた。

『お父さん。折枝は、どんな家庭に入れても、決して差支へのないほど、立派な女性です。それに、長い間いろ〱苦勞をしたのですもの、僕はこの家へ入れて、妹として可愛がつてやりたいのです。』



良樹は、父に說いた。父は、良樹の當然な要求に反對しかねた。

『ぢや。お前にまかせる。あれと早百合やなつ子と折合をよくしてくれんと困まる。』

『それは僕が引き受けます。』

と、良樹は云つた。

良樹は、戀人としてゞなく、妹としての折枝に合はなければならなかつた。

良樹は、もう決して二度とは行くまいと思つた『銀水』で折枝をよぶことにした。

水色に波の模樣のある絽の着物を着てゐた折枝は、良樹の顏を見ると、すぐ淚ぐんだ。

『まあ。おめづらしい。』

『君も、たつしやだつた？』

『もう、いらしつて下さらないものと思つてゐましたの。』

『今日、君をいぢめに來たのぢやないよ。僕はお父さんからみんな聞いたんだよ。折枝、すまなかつたいろ〳〵と。』

さう云ふと、良樹は涙が、はらはらとして流れて來た。

『まあ、はづかしいわ。』

折枝は、疊の上に、顏を伏せて泣いた。

『何もはづかしいことなんかないよ。君のわるいところなんか、ちつともありやしない。』

『…………うれしいわ、わたしうれしいわ。』

折枝は泣きつゞけた。

『折枝、僕こそすまなかつた。僕、お父さんにさう話したんだよ。お前に、家へ來て貰ひたいんだよ。僕は、兄として君にどんなことでもしてあげたいんだよ。』

折枝は、しく〳〵泣くばかりだつた。

『お前は、出來るだけ、早く伯父さんの家へ歸つて貰ひたいんだ。そして、一月ばかり經つてから、僕の家へ來て貰ひたいんだ。それから、佐久間君はお前をほんとうに愛してゐてくれるやうだから、お前さへよければ僕は佐久間君に、お前を貰つて貰はうと思つてゐるんだ。どう？』

『…………』

折枝は返事をしなかつた。あまりに、大きい心の動搖のために、彼女は物が云へないのだつた。

佐久間君なら、僕は信賴出來ると思ふのだ。そしてお前が、僕の妹だと云ふことが分つたら、欣んで、貰つてくれると思ふのだ。』

折枝は、うれし泣きに、なきつゞけてゐた。

母の敵

六月の末のある日だつた。良樹は、その晩早百合となつ子と、三人で仲よく食事をした。

早百合もなつ子も、中形の浴衣を着てゐた。二人とも、白粉をちつともつけてゐなかつたが、色がぬけるほど白かつた。

『お兄さん。銀座へ行きませうか。もつともお兄さんと一しよに歩いたのぢや、ちつともつまらないけれども。』

早百合は云つた。

『あら、わたしはつまらなくないわ。行きませうか、お兄さん。』

となつ子が、云つた。

『うむ。行つてもいゝけれども、今一寸二人に、話があるんだけれども。』

と、良樹は云つた。

『どんな話。』

なつ子は、可愛い眼をみはつた。

『一寸、お兄さんの書齋へ來てくれない。』

『さう。』

なつ子は、すぐ立ち上りさうにした。

『こゝでいゝぢやないの。』

早百合は、面倒くささうに云つた。

『茲ぢや、出來ない話なんだよ。一寸二階へ來てくれない？』

さう云つて、良樹は二階の自分の書齋へ上つて行つた。なつ子は、兄の後から氣がるに上つて來た。早百合は、御食後のいちごをゆつくり喰べてから上つて來た。

良樹は、妹達に椅子をすゝめてから、緊張した顏で云つた。

『ねえ、これから話すことは、君達に一寸意外なことかも知れないんだよ。でも、落着いて聞いて貰ひたいんだ。』

早百合は、兄を馬鹿にしたやうにして云つた。

『いやに、改まるのね。お兄さんが、お嫁さんでも貰ふ話？』

『いや、さうぢやないんだ。だが、とにかくこの家へ新しい家族の一人を迎へる話なのだ。』

『分つた！ お父さまの後妻でせう。お父さま、まだそんな氣があるの？』

早百合は、意地わるさうに目をみはつた。

『いや、それとも違ふのだ。早百合ちやん、もつと眞面目にきいてくれなきや困るよ。』

『眞面目にきくわ。一體誰が來るの。』

『僕達に、妹があつたとしたら、どうする？』

良樹は、ぢいつと早百合の顏をみつめた。

『そんな筈はないぢやないの。』

早百合は、さすがに驚いたらしく美しい眉を、かるく逆立てて云つた。

『うん。ところが、お父さんが外の女にこしらへた子供があつたとしたら、どうする？』

『まあ。いやらしい！』

早百合は唾でもはくやうに云つた。彼女の頭には、臨終の母の顏が幾年ぶりかに、マザ〳〵と浮んで來た。

『なぜ？』

『なぜだつて、そんな女なんて、わたし達のお母さんの敵でせう。』

早百合は、けはしい聲で云つた。

『でも、その子供は何も責任はないぢやないか。子供には、何の罪もないぢやないか。』

『だつて、どうせ藝妓かお妾の子でせう。わたし、そんな人と姉妹などと云はれたくないわ。』

『だつて、お父さまの子である以上、おれ達の妹ぢやない

か。しかも、おれ達とは違つて、日かげで生れたゝめに、いろいろな苦勞をしてゐるとすれば、可愛いさうぢやないか。』
良樹は、興奮して云つた。
『お兄さん、そんな人がほんとうに居るの？』
『居る。』
『いやになつてしまふわね。そして、その人がお家へ來るの。』
『それは、當然の事ぢやないか。』
良樹は、早百合の態度に、憤慨しながら云つた。
『まあ。』
早百合は、あきれたと云ふやうに、黒い眼をみはつた。
『なつ子、お前はどう思ふ。』
『わたしと、その方とどちらが上？』



『お前と同じ年だ。』
『さう。わたし、會ひたいわ。』
なつ子は、可愛い目を、イキ〲と輝かせた。
『わたし、會ひたくないわ。』
早百合は、昻然として云つた。
『早百合、お前はそんな薄情なことを云ふのか。ほんとうの妹に、會ひたくないと云ふのか。』
『わたし、そんな死んだお母さまを不幸にした女の生んだ人なんかに、會ひたくないわ。』
早百合も、唇をきりゝと、かみしめた。
『さうか。でも、お父さんの子だから、この家へ來たつて、わるくはないだらう。』
良樹は、少し高壓的に云つた。
『さうね。そりや、お兄さんやお父さまの勝手よ。でも、わたしその人を妹と思ふか思はないかは、わたしの勝手にしてほしいわ。』
云ひ出したら、あくまで我を通す早百合だつた。
『なつ子、お前は姉妹として、つき合つてくれるか。』
『えゝ、わたしうれしいわ。仲よくするわ。』
『さう。ありがたう。早百合、僕はその人を、この家へ入れるのが當然だと思ふ。その人をこの家へ入れること



が、お父さまが、長い間その人を世話しなかつたせめてもの罪ほろぼしだと思ふ、それにかりにもお父さまの子である以上、僕達が一緒に住んでやるのは、人間として當然な義務だと思ふ。それに、その人は多分、二三日の中には結婚する人だから、ほんのわづかの間の辛抱として、仲よくしてやつてほしいと思ふ。早百合ちやん、どう？』

『さうね。わたしと、一番はなれたお部屋において下さいね。それなら、わたし辛抱するわ。そして、わたしのことお姉さんなんて、呼んでくれなければい丶わ。』

さう云つたかと思ふと、早百合はつと立ち上つて部屋を出て行つてしまつた。

（つゞく）

一羽千金（諧謔ばなし）

竹内栖鳳氏の雀の研究は有名なものだが、この程或人が屏風一双を持ち込み金千圓を謝義とし雀の畫を囑した。氏は數日苦心の結果水墨一抹、朝明の雲を描き、その下に雀一羽を描いて筆を擱いた。一羽千圓は高いと賴んだが小言がましいことをいふと氏は「冗談云つちやいけない、この雀は友呼の雀と云つて、朝早く第一番に地に降りて友を呼ぶ雀で、これから幾千羽の雀が雲の中から降りて來るかも知れない」

（意外錄和田垣謙三著）

負けじ魂・

年に拾錢で世界を明るくする新工風

之は五六年も前の事、米國ボストン市の詩人マホネー女史は、『種蒔き會』といふものを思ひ立つた。女史は子供の時分から、妙に草花が好きで、心無き人々に踏み躙られた路傍の草花を見ると、たまらなく悲しかつた。

年々歳々、野山に咲きほこる草花の中には、實を結ぶ暇もなく、踏み躙られるのが多い。女史はそれを見て、少くとも人間の無考へによつて失はれた天然の美は、たとへ萬分の一でも、心ある人間同士が、進んでそれを補なはねばならぬと考へた。

草花の愛好者は、殆んど到るところに存在する。マホネー女史は、そういふ人々と協力して、毎年十仙袋入りの草種を、少なくとも一袋は何處へなりと蒔くことにした。『種蒔き會』の趣旨は、單にそれだけだ。この會には、世話人もなければ、加入金も會費も又會員名簿もない。それに加はりたい人は、人の前でもよし、又、人の居らぬところでもよし、單に左の誓言をするだけだ。

『私は自分の一生を通じ毎年、路端、野原、又は打捨てゝ顧みられぬ墓地へなりと、草花の種を一袋づつ蒔く事を、茲に謹んで誓ひます。』

入會式はこれで濟み、誰でもスグに會員の仲間入りが出來る。



マホネー女史の思ひ附きは、忽ち全國中へ、話

人間の強味

の種を、草花の種同樣に蒔き散らした。二年目には會員が五十萬人に達し今は恐らく數百萬人にも殖えた筈だ。彼等は近來益々減る一方の野花にとつて代るべき、色とりどりの美しい多年生草花の種を蒔くと誓つた。この運動が發達すれば、終には世界中、花の色にて織られた天然の絨毯に蔽はれるかも知れない。

女史はいつも、講演をたのまれて各地へ出張の都度、種袋を必ず忘れずに信玄袋へ詰めこんで行き、少しでも禿げた地面を見ると、わざわざ足をとゞめて、其處へ、種を蒔く。偶には死刑囚の無縁墓地などへも、美しい花の種を下したりする。山登りをしては、地味と氣候に適した種を蒔く。

詩人マホネー女史



路傍に咲く美しい花は、多く『種蒔き會』の會員が、種を蒔いたものであらう。印度、南米、支那、小亞細亞の聖地などにも會員の蒔いた美しい花が咲いて居る。會員の中には、相當知名の人々が加はつて居る。前駐日アメリカ大使アンダソン氏の未亡人もその一人。世界中何れへ行つて見ても、『種蒔き會』の會員は、その誓言通りを實行し、老若男女、凡てがこれに加はつてゐる。草花屋は、僅か一個の花輪花束をつくるために、前後の考へもなく、無闇に花を無駄にする。けれども數袋の種子を蒔けば、さうした心なき人々の罪を、たとへ少しでも、償ふことが出來るのだ。一婦人の一寸した思ひ附きから、數百萬人の心を動かしたこの實例、知らずに居ては勿體ない。

自然に出來上つた五百萬圓の寺

何が變つたと言つても、商賣のヤリ方程、近年著しく變つたものはない。ヤレ百貨店、ソレ通信販賣、又は聯鎖店などと、めまぐるしい程の變り方だ。

さういふ新式經營に屬する商賣のコツを心得たアメリカの一青年牧師は、僅々二三年間に自分の教會を、迚も大仕掛のものに發展せしめ、たゞの坊主でないことを證明した。惜しいことに、この話の主人公は、日本人でない。この坊さん、最初は書籍の賣子になつて、戸別訪問に苦し味を嘗め、次いで新聞記者、軍隊布教師、社會事業家、と言つた鹽梅で、常に轉々職を變へ、はちきれるやうな其精力を、一ヶ所に集中しきれなかつた程だ。

或時、彼は酒商組合の宣傳に雇はれた。月給も意外によかつた。彼は所得の多いのに滿足して凝とその仕事に落ちつく筈であつた。ところが或日、友達が來て言ふのに、

『君は少しばかり金が餘計入るといつて、折角の才能を、酒屋の爲に、埋れ木にして居るではないか。第一仕事の組立は上手、その上辯舌も人一倍爽やかな君としては、甚だ不似合なことだ。今一層手足の伸びる方面を目指して、大に方向轉換を試みたらどんなものだ。』

さう言はれて、彼即ちニユヨーク州ロツチエスター市のワンダー君は、早速その日かぎり職を辭して、直ちにキリスト教青年會へ入會し、宗教家方面へ身を入れることに決心した。それに次いで、彼は神學校へ入學しキリスト教に關する學問をさめ、卒業間際に土地の教會へ牧師として雇はれた。それでも學校へは、引續いて出席し、無事に卒業して神學士の學位を受けた。

愈よ學校を出てから、彼は神の道を傳ふる事に一身を捧げ、持前の器量を發揮して、最新式の事業經營法を、教會の經營に應用した。一體教會などといふものは、金錢の取扱に不慣れな人達が、行き當りバツタリ、その日暮しと言つた風に、經營して居るのが常だ。普通の寺は、いつも貧乏なものだ。金持の檀家が、たくさんあつて、坊さんが私腹を肥さず、上手に切盛つて行けば、寺はどんなにも大きく發展し、附近もその潤ひを受ける譯だ。

若坊主のワンダー君は、牧師になりたての年に、廣告費を二千弗投じて、新聞廣告、電氣看板、ポスター、窓へ出すカード、通信廣告などを、次から次へと試みて見た。さうすると恐ろしいもので市中の人氣はこの寺の變つた趣向に集中し、從來善男善女から集る零碎の喜捨金が、千弗を超えたことがなかつたのに、新經營法によつて七千弗以上にも増して來た。實際、廣告に支出した現金は、五倍以上になつて戻つて來た。それは單に金錢の問題だが、金よりも大切な人寄せ

と云ふ點に於ても、非常な成功であつた。第一流商店に持つて來いの有ゆる廣告法は、そつくりその儘、教會の宣傳に應用出來る、と言ふのが、彼の主張であつた。

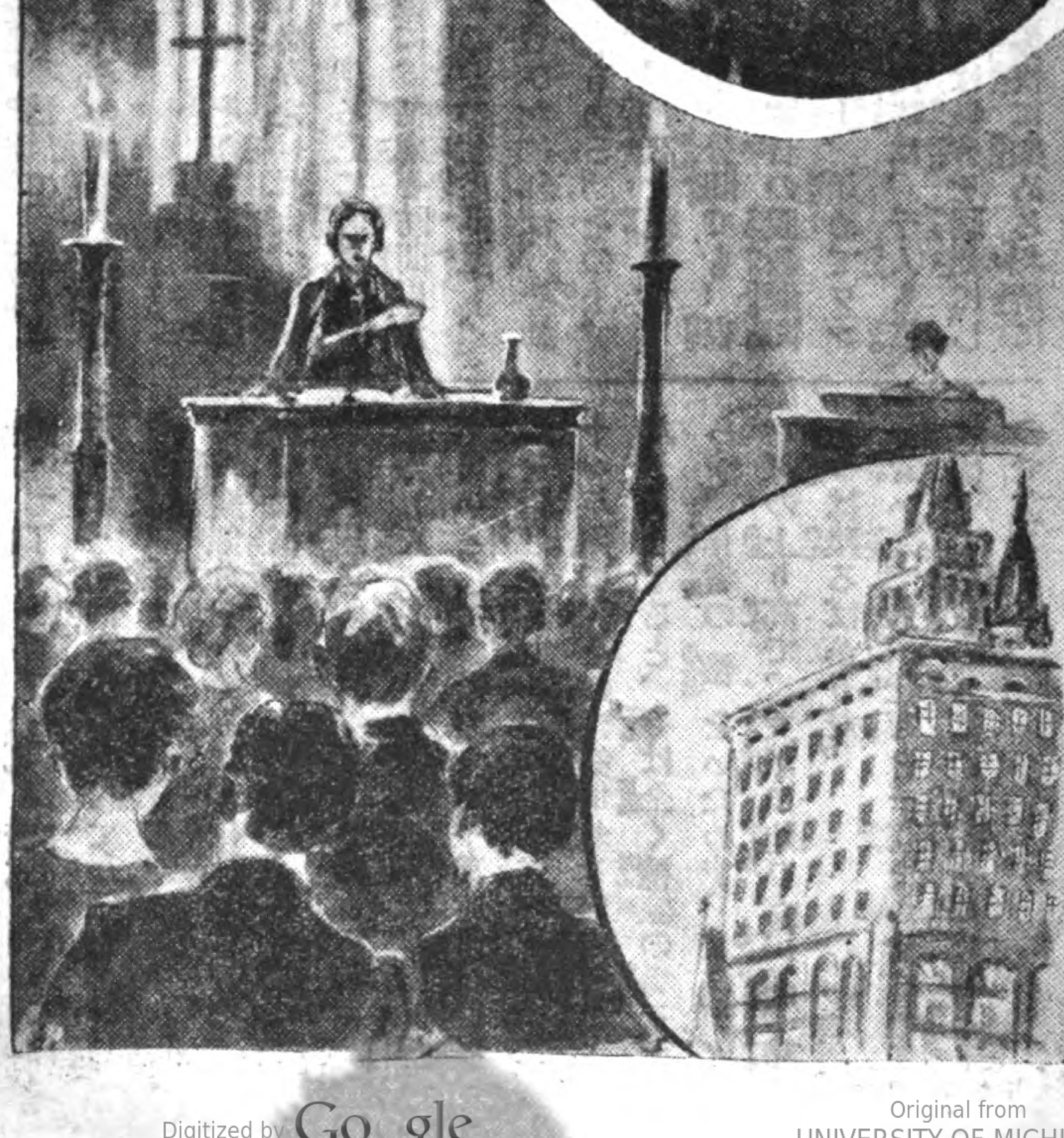
日曜日の夕方、この寺へ說教を聽きに行くと、その入口には一名の案内係が立つて居て、一々丁寧に握手する。寺の內部は、如何にも陽氣に、冴冴と明るい隅の方へ据付けられた大きなオルガンは、人を引立てる樣な調子で、晴々とした樂を奏する。啻に讃美歌の伴奏ばかりでなく、新舊取り交ぜ、あらゆる名曲を奏するのだ。これを若い坊さんは、特に『感激樂』と稱へて居る。それが一と通り濟むと、今度は若い坊さんの說教だ。

說教の始まる前に、內部の電燈は全部消されて、只一個のやはらかな光線は、壇上の牧師を照らして居る。この邊の具合は、何となく新味に富んだ芝居がかつて居る。從來は居睡りにもつてこいの場所だと言つて、多くの善男善女は、教會へ出席したものだ。隨分勿體ない話だ。

ところがこの坊さんは、自分を俳優に見立てゝ、やはらかな光線を浴びながら、壇上で雄辯を振ふのだから、聽聞者の注意は、否が應でも、彼の姿と音聲に集まる。うまいことを考へたものだ。

牧師ワンダー君





彼はこの筆法で、五百萬圓の敎會を、ホンの束の間に新築した。その建物は、十四階建、一階から三階迄を寺が使用し、四階以上十一階までを、全部貸事務所用に充て、年々正味十萬圓の家賃をとつて居る。元々貧乏な寺が、どうして五百萬圓のビルディングを僅かの年月に建て得たかと言ふに、それは先づ最初、擔保附の優先債券を三百萬圓發行し、檀家一名當り三百圓を最小限度の負擔として、五十二萬圓の済し崩し出金を承諾させ、外に又五十二萬圓を、二番抵當で借り出したものだ。敎會の敷地は、ザット百萬圓くらゐに見積もられる。この寺の豫算は、一ケ年二十四萬圓で、その內八萬圓を色々の救濟金に充て、六萬四千圓を經費に使ひ、殘金を新築費に振り向けた。十四階分の家具調度を整へるため、廿八萬圓をあてがつた。

この前代未聞のビルディング式敎會の中には、宴會室もあれば、休憩所もあり、キヤフテリヤもあれば、屋上庭園もある。坊さんの目的は、ビルディング內の各事務所に働く男女事務員に、樂々と手足をのばして、晝休みの出來る場所を宛がはうと言ふのだ。

音樂が聽きたければ、それも自由に聽かれる。横になつて休みたければ、樂椅子を置いた休息室が、到る處に客を待つて居る。退出時間後に、何處ぞ訪問したいと思へば、それに必要の仕度部屋も、出來て居る。友人と會ひたければ、それをもてなす客間の用意もある。その上、この寺は、一週七日間、晝夜を通じて、出入が自由だ。年が年中一分間でも、表を閉めたことはない。日曜日の說敎聽聞者は、平均二千二百人以上、始めてワンダー君が牧師に雇はれた時は、千人も集まらぬ程であつた。彼は敎會を陽氣にして、抹香臭くなく、愉快に樂める場所に變へて了つた。百貨店が商品を賣りつける爲に、店內を美しくして居るのと同じやうに、彼は宗敎を『賣る』爲に、人間の享樂氣分をたくみに利用したものだ。今では信者もドシ／＼殖え、この若い坊さんが居る限り、前途の發展は殆んど際限なしだと見られて居る。檀家は彼を失ふまいとして、彼の身に十萬弗の生命保險を附けた。ビルディング式の寺は、二十ケ年內に、その建築債券を償却する筈だ。さうなると、寺は全く檀家の力を頼らず、信者の懐をいためず、ビルディングの上り高で、立派に賄ひが出來、積立金は殘るばかりだ。

若い人でも、仕事を一切まかせさへすれば、老巧者の及ばぬ成績を舉げ得るものである。

大評判の新案窓飾り業

役者の似顔其他を、切地の押繪で巧妙につくり上げる。我國の羽子板は、他國に眞似手のない獨特のものだ。この押繪を窓飾に應用して、大評判をとつたアメリカ人の元祖は、スコピル夫人と名乘る女性だ。或時、夫人の許へ一通の電報が

届いた。それは懇意の俳優が、近頃の町へ旅興行に行く序に、スコビル一家を訪問すると言ひ越したのだ。スコビル夫妻は、久しぶりで友の俳優に會へるのを樂んでゐた。客は約束通り訪ねて來た。

『今度の芝居も當ればいゝと思ふが、何だか少々怪しいものですよ。』

と、客は如何にも進まぬ顔をしてゐた。スコビル夫妻は、さういふ場合に誰でも思ひやる通り、何とかして客の氣を引立てゝやり度いと思つた。彼女は色々智慧を絞つてみたが、いゝ思ひつきも出て來ない。彼女は結婚前に美術學校へ通つて、繪を習つたこともあり、又工藝學校では、ポスターを作る稽古をしたこともある。其處でフト思ひついたのは、友の爲に、何か變つた趣向のポスターを作つてやつたならば、少しは助けになりはせぬかといふことであつた。それから夫人は、友が去つて間もなく、家内中を探して寄せ切れを集め、劇の場面を大きな板一面へ、押繪のポスターに作り上げた。それも普通の場面では面白くないとあつて、主役を演ずる友人の姿を、思ひ切つて漫畫化してみた。カラーもネクタイも、本物を使つて、それをベタ〳〵縫ひつけた。更に別の場面を、二三枚のポスターにつくり、出來上つたものを、女の出る劇場へ送り届けた。先方へそれが着いてから二三日經つて、女の俳優から電報が届いた。

ポスター製作のスコビル夫人





『御送附の押絵ポスターは、目下大評判、一座は大喜びです。その上劇場の入口へ懸けたのを見たお客衆は、口をあけて見とれて居ます。』

その夜、スコビル夫婦は、その芝居を見物に出かけた。兩人は入口に立つて、例のポスターを、客がどういふ風に見て居るかを注意して見た。成程、見物はその前へ立つて、驚きの眼を見張つて居た。

『ちよいと御覧なさいよ、あれは本當のネクタイだわ、カラーも本物よ。』

などと言ふ言葉が、誰の口からも出て來る。それにつり込まれて客足は多くなり、芝居は大當りであつた。それを見てとつた夫人は、早速宣傳向きの押絵ポスター業を始めることに決心した。餘り變つたポスターであるから、自然人々の好奇心を異常に刺戟した。夫人は、人の注意によつて、押絵の趣向に對し、パテントを取つた。評判は益〻高くなつて、終に或有名な廣告取次業者の耳へそれが傳はつた。スルト或日のこと、先方から人が、それを態々見に來て、

『之は本物のキレ地を使つて居るから、百貨店の宣傳用、窓飾り用などには、實にもつて來いだと思ひます。』

と褒めそやした。そこで早速夫人は出來上つたポスターを携へて、一大都市の大百貨店に廣告部長を訪問した。廣告部長は一と目それを見て、大に喜び、之は必ず大した將來があると言ふ見込を語つて差し向き若干の註文を出してくれた。續いてニユウヨーク市の百貨店からも註文が届いた。さう斯うして居る内に、一人では迚も註文に應じ切れなくなつた。針仕事の上手な女を五六名新規を抱へても、毎週平均五枚以上は出來ない。といつて之を大量生産で作つたのでは面白くない。一枚々々、親切に手をかけて、それ〲の特徴を、發揮せしむるのが、この種類のポスターの生命だ。

かうしてスコビル夫人は、アメリカ唯一の變つたポスター業を立派に經營して居る。

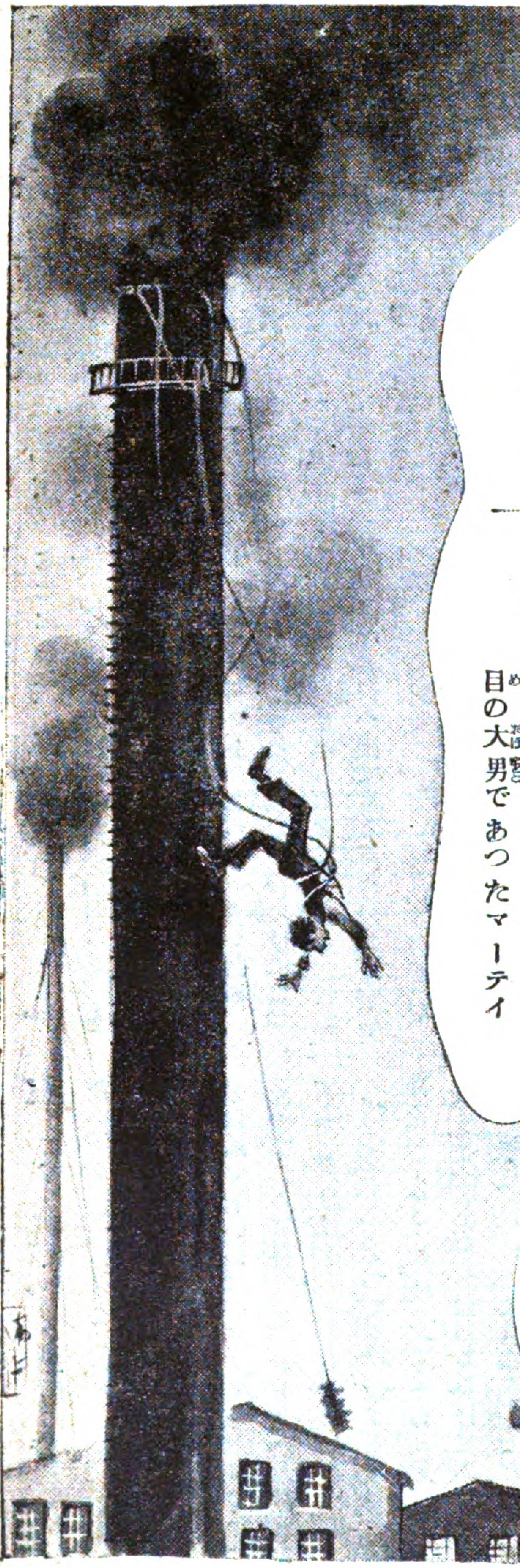
押絵専門の羽子板業は、隨分古くから我國に行はれて居る。これに氣のついた人々は、一日も早く押絵の看板なり、ポスターなりを作つて、寄せ切の利用法と新式ポスターの需要先とを考へて見る事だ。

不死身の煙突屋

度胸がよくて、からだが頑丈で、飽まで負けじ魂の強いマーテインといふ煙突屋は、再々高い塔の天邊や煙突の上から、足を踏外しては墜落し、大抵の人なら往生して了ふところを、妙に助かつて來た。

六七年前、彼は負傷後の腕だめしに、カナダの寺院の註文に應じ、見上げるやうな高塔の尖端に立つて十字架の、金箔塗りを請負つた。

その日一日、ヒドイ風が吹いたにも拘はらず、ピカ〲と金光りの放つ十字架



にピクともせず、強風に耐へた。マーティンは、數條の生命綱を用意して、しかと身體をそれへ結びつけて、いのちがけの仕事を、首尾克く仕果せた。彼はその時、染々と十字架の威光に打たれた。

程なくマーティンは、デトロイト市の電燈會社から、煙突の塗替を命ぜられた。彼は例によつて、太い生命綱を煙突の上部へ括りつけ、それへブラ下つて、一生懸命に塗替をやつて居た。

その內、何心なく上を見ると、自分の身の支へて居る綱の結び目が、煙突の熱でプツ〱燃え出して來たのが目についた。萬一にも結び目が解けたなら、彼は一堪りもなく、セメントで固めた屋根の上へ落ちて了ふ。

かうなつては、如何とも策の施しやうがない。彼は、七丈五尺の高いところから、石のやうな屋根の上へたゝき落された。

一秒前までは、頑健無類な廿三貫目の大男であつたマーティン、今はバラく

不死身の煙突屋マーテイン君



になつた背骨を包んだ肉の一塊りとなつて了つた。誰が見ても、到底助かる見込はなかつたのだ。

　けれども、息は全く絶えたのではない。頭は左右ともに碎かれ、齒も一本殘らず折れ、右腕と右の肋骨三本まで粉碎されて居たのだが、それよりも一層ヒドかつたのは、脊骨を三ケ所折つて居たことだ。大急ぎで呼びにやつた醫者は、一と通り檢査して、迚も十分間とは持たないと傍の人に言ひ渡した。醫者の見立てに相違して、マーテインは、氣がたしかであつた。醫者は匙を投げても、自分は決して死ぬなどとは思はない。

　彼は曾てカナダの寺院の塔上で見た金ピカの十字架を思ひ出した。大風に吹きつけられても、小搖ぎだにせなかつた十字架の强味を、ソツクリ自分の身の上へ移して、飽までも大怪我に抵抗しようと決心した。

　幸ひ氣はたしかであつたし、生來の負けじ魂も、斯うなると愈よその强味を發揮して來る。彼は唯モウ病を征服せんことにのみ、一心を集中した。それ以來、マーテインは、意志の力のみで活きて居たのだ。

　漸く少しづつ動けるやうになつたのは、約一ケ年の後であつた。輕い運動、日光浴、力づける食物などの助けによつて、意志の働きは强固を加へ、どうやらソロ／＼戸外へ出ても差支ないまでになつた。

　病院の費用は、電燈會社が、それを一切負擔し、尙ほ其上に彼は相當の手當を受けた。

　退院後は、差向き金錢の心配をするに及ばず、緩々養生することも出來た。彼はボートを一艘借入れ、毎日海水着を着て、船滑ぎに餘念もなかつた。筋肉を元通りにする運動法は、これに越すものがない。

　最初は、迚も我慢のしきれぬ程、頭の上から足の先まで、强い痛みを感じた。彼は齒を喰ひしばつて、痛みと戰つた。追々慣れるに從つて、ボートへ人を乘せても、其重味を苦とせぬやうになつた。

　降つても、照つても、ボート運動を續けたマーテインは、どうやら元氣も體力も、負傷前の狀態に戾りかけて來た。そして或日、彼は終に再び高塔上の人となつた。普通の人間に、マーテインの眞似は決して出來ない。七轉び八起きを通り越して、彼は何回でも、元の通りに起きかへる。不死身の煙突屋とは、よくも評したものだ。

百萬人を牽ゐる盲大將

　働き盛りのサイモンズ君は、今を去る三十五年前、突然眼病を患つて、全くの盲になつて了つた。

　その當時彼は卅六歲、ニユウヨーク市の市役所につとめて居た。大した給料こそ貰はなかつたのだが、それでも妻子六人を養つて行くには、少しも不足しなかつた。

市役所には、嚴重な規則があつて、不具者を一切使はない。殊にサイモンズの役向は、人一倍眼玉を光らす掃除監督であつたから、迚も盲ではそれがつとまらない。貯へといふほどの貯へもなく、その上、大勢の足手纒は、文字通りの足手纒であつたし、萬一職を解かれたなら、一家は全く途方にくれる。

人間の強味は、斯ういふ時に能く出て來るものだ。サイモンズは、自分の失つた兩眼の代りに、百萬人の手足と眼とを働かせる案に思ひついた。

子供好きの彼は、日頃からその癖を呑込んで居た。元來子供は、チッとして居ることが出來ない。何かしらやつて居ないと、承知が出來ないのだ。それを知つたサイモンズは、局長に献策して、市内の小學兒童を、幾組にも分けて、全市の清掃目附に充てることにした。言はゞ、それは一種の監督だ。

幸ひ彼は、青年當時演說が好きで、稀に見る雄辯家であつた。眼は見えなくなつても、頭と口は能く働いた。局長の許可と、學校の諒解とを得て、彼は殆んど十五ヶ年間、各學校を歴訪して、少年公民聯盟をつくり上げることに成就した。

市役所の方でも、彼の熱心を認めて、特に人間のために役向を設けて吳れた。サイモンズは、盲のまゝで、新たに清掃局少年公民聯盟監督に任命された。給料も、從來よりはよかつた。清掃局の仕事は、大ニユウヨーク市を、キレイに始末して、道路、公園、其他公衆衛生と密接の關係ある場所を、飽まで清潔に保つことにあつた。それは約一萬人の雇員と、一千數百臺の運搬自動車とを常備する程の規模であつたが、それでも却々手は廻りかねた。

一體、掃除の行屆かないのは、アラ探しをする目附役が缺けて居るからだ。少年少女が、豫て教はつた通りに、その鋭い眼で隅々を見廻ると、色々の化物が現はれて來る。化物は見つかり次第、退治されて了ふ。

サイモンズは、殆んど一日も休まずに、各學校を訪うて、放課後に、公民會員を集めては、會員の少年少女に、公民の權利義務を、說き聞かせて居る。市中は清潔に保つべきこと、汚物や紙屑などを道路へ捨てさせぬこと、良くないと認めたことは、直ちにこれを當局へ通知すべきこと、その他色々の心得を、得心の行くまで言つて聞かせる。

毎年一回づつ、聯盟は大懇親會を開いて、一日を愉快に暮す定めだ。平生眞面目に働いて、偶に面白く遊ぶといふのが、その旨意だ。會員の數は、約壹百萬人、いづれも受持役をもつて居る。

小學校内の公民會は、市役所を眞似て、巧妙に組織化して居る。少年少女の中から、市長、助役、參事會員、市街清掃局長、衛生局長、消防課長、公園主任、其他夫々の役向に應じて、適任者を選擧し、至つて生眞面目に仕事を扱つて居る。

斯うして、一面少年少女時代に、公民の資格を養ふ傍、彼等に實際の仕事を見習はさせるといふ面白い趣向だ。

會員の子供等は、毎日報告書を提出する。その中には異つたのがある。

『私は往來へ紙屑を捨てた男の子を二人見つけて、叱つてやりました。私は、會則を少女三人へ聞かせてやりました。屋臺車を引く果物屋が、果物の皮を車の下へ捨てゝ居るのを見て、大に警めました。

イタヅラ子供等のたき火を消してやりました。ゴミ溜が、往來の邪魔をして居るのを見て、注意を與へました。』

少年少女公民聯盟は、各地へ益ゝ擴がつて行く。一人の盲が考へ出した妙案は、非常な勢ひで、アメリカ中は申すに及ばず、フランスのパリ市あたりへも、傳はつて居る。

サイモンズは、本年七十一歳、永年の不自由を一向不自由とせず、依然として活動をつゞけて居る、不具の苦にならぬのは、忙しく働くからだと、彼は主張して居る。

『忙しくして居ると、目の見えぬのも忘れて了ひますよ。自分の不自由を忘れるには、一刻も休まず働くことです。時によると、目明きの方々よりも、一層能く見えるやうな氣がいたします。兎に角自分は、頗る幸福な人間だと思つて居ます。』

不幸にして、彼は失明したが、その働き振りを見ると、たしかに活き甲斐のある世を送つた人と見てよい。

盲大將サイモンズ氏





感動物語

千田翁の涙

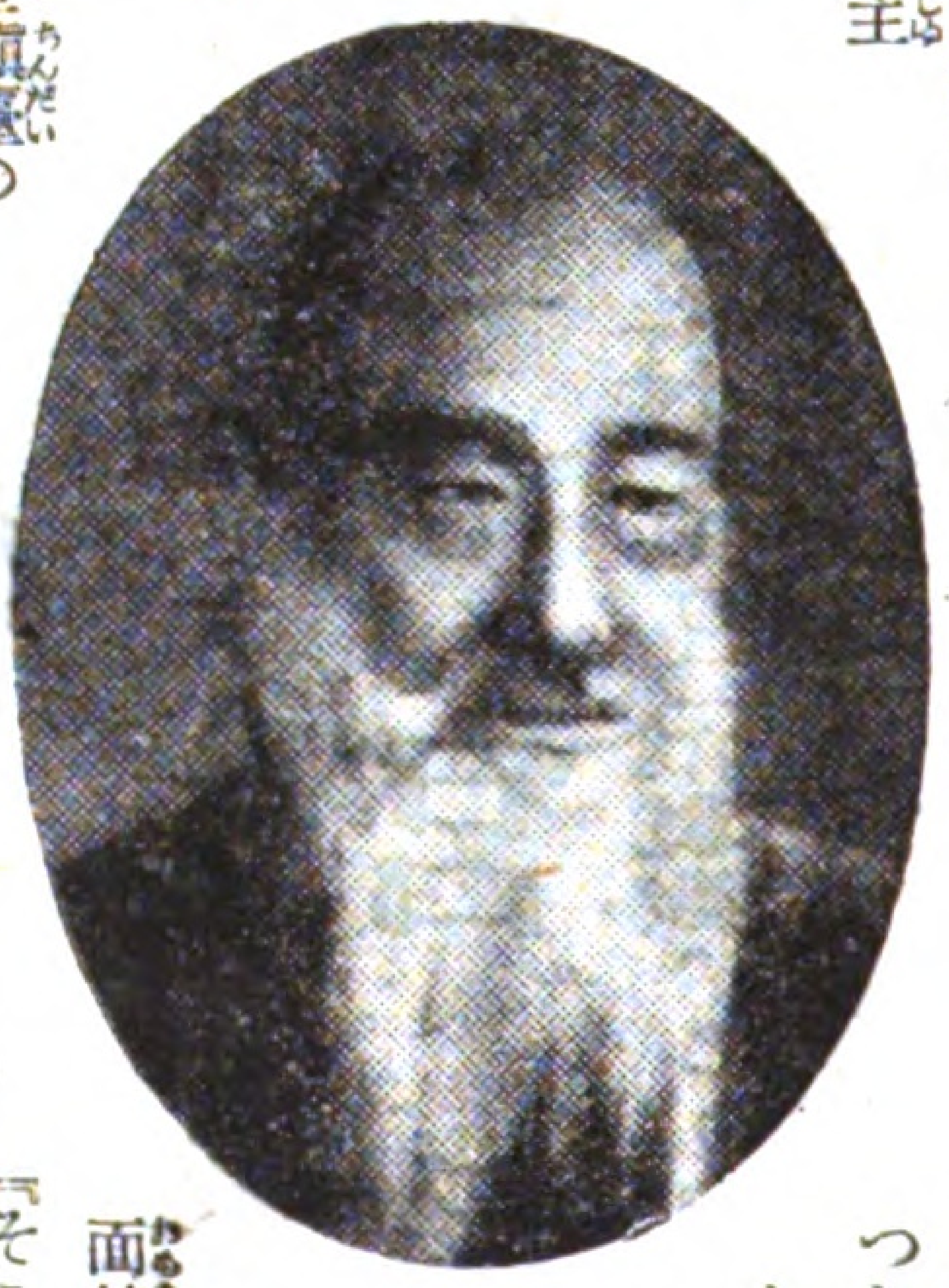
第五高等學校教授 八波則吉

(上) 南洲翁の首

金澤市に千田登文翁といふ今年八十二歳のお爺さんがゐる。元加賀藩士で、明治の初年には藩主の御身附組となつて、殿中でも、道中でも、殿様の御守護役を勤めてゐた。劍道が達者で、今でも武德殿通ひをして、壯者を凌ぐ腕前である。

明治五年、金澤に名古屋鎭臺の分營が出來て、後の乃木大將が少佐で分營長であつた時、千田翁は少尉で、聯隊旗手であつた。此の因縁で、翁は乃木宗の熱心な信者で、乃木會の爲には骨身を惜しまず盡瘁して居られる。

此の千田登文翁である、西南役で、西鄕南洲翁の首を見つけ出したのは！



『戰は濟んだが、西鄕殿の首がない。屍體は見つかつたが、どうしても首が見つからない。岩崎谷の奥深く分け入つたら、折田といふ家があつた。怪しいと思つて調べてみると、其の庭先に埋められてゐた。』

と、翁は五十年の昔を偲んで、感慨無量の面持である。

『そこで私は、土を拂ひ、軍服で包んで、山縣公の前へ持つて出た。首實檢の山縣公は目をしばたゝかれた。私は感極まつて、聲をあげて泣いた。』

語り終へた翁の目に、熱い涙があつた。

(下) 三升入の大瓢簞

千田翁は非常な大酒家であつた。若い時には斗酒なほ辭せず、正味日に三升は飲んだ。朝も酒、晝も酒、夜も酒、酒がなければ半日も過ごせないほどの大酒豪であつたが、今では、ばつたり飲まなくなつた。

『禁酒の動機は？』と御たづねすると、答がなか〳〵振つてゐる。

『或日、友人から三升入の大瓢簞を貰つた。瓢や瓢やと、我が子同樣に愛してゐたのに、妻が之を敲き割つてしまつた。怒るまいことか、私は烈火の如く怒つて、軍刀を拔いて妻を斬らうとした。すると妻が落ちつき拂つて、「どうか、わたしを斬つて、お酒を止めて下さい」と言つた。私はこれつきりぷつつり、お酒を飲まなくなつた。お蔭で、これ此の通り達者で、此の模樣なら百までは大丈夫だ。あはゝゝ。』

と高く笑つた翁の目に、清い涙があつた。

（寫眞は千田登文翁・大正十五年撮影）

人の親切は其當時にこそ餘計なお世話に見えるが、後になると、もう一遍うるさく干渉して貰ひたい時機が來るものである。

夏目漱石（それから）より

諸君!お喜

いよ〱傑作雄篇雲の如くあつまる!

まづ新しく次號掲載確實の六大雄篇を御披露いたします

◎二宮尊德……武者小路實篤

『武者小路氏の二宮尊德、こりやア素晴しいだらう……』と文壇の人達は勿論、これを聞き傳へた有名無名の士悉く、もう執筆前から噂の中心。次號發表の曉は、恐らく天下讀書界の大評判となるんであらう眞にこれ名篇中の大名篇!!

◎妻の心……中村武羅夫

作者近來會心の傑作、キング誌上久方ぶりに筆を執れるもの、一讀大感激を喚起せしめ興味の絶頂をゆく長篇讀切!!

◎滿蒙疑獄の人柱……牧野良三

び下さい!!

當時本事件のために辯護の勞を執れる筆者が、渾身の血熱を傾けて未だ世に知られざる事件の眞理を赤裸々に發表す。一讀悲壯凄烈、眞に息もつがせぬ大雄篇!!

◎飛んだ間違ひ物語……數家執筆

途方もない間違ひは、時により飛んだ悲劇を醸し、喜劇を作るものだ。これに掲ぐる處の篇々、悉く實際にあつた話で、笑ひと涙と相交錯して讀者に應接に遑なからしむるキング近來の名特輯讀物!

◎好敵手物語……數家執筆

劍道、柔道、角力、スポーツは勿論、事業界、學界、宗教界、株式界等その他ありとあらゆる方面の決死の好取組を網羅し活寫せる一讀血湧き肉躍る大特輯!

更に次號はキング獨特の素晴しい

『特別大附錄』がつきます

内容は、此處に申上げませんが、苟も日本國民として必携必讀の別刷大附錄! 御期待を乞ふ!!



御挨拶

夏！　夏！　暑いぢやありませんか。まづ皆樣の御健康を祈ります。皆樣の御庇護によつてキングの誌界に於ける壓倒的聲價は、太陽のそれの如く讀書界に光被してをります。前號の評判など、全く私共の期待以上で、その賣れ脚の早かつたこと、實に驚くばかりでした。どこまで伸びるのか、天井が知れない有樣です。

ところで、次號は新涼候に入るの好季節、この際一つ頑張らずんばあるべからずとあつて、記者一同大いに馬力をかけて東奔西走、汗みどろになつて、何でもアッといはせる樣な立派な十月號をと、今や山なせる名篇佳什の中から一生懸命採擇に苦心してゐます。どうかお樂みにお待ち下さい。

○

意外！　意外!!……何といつても、人生くらゐ複雜多岐なものもあるまい。そこに面白味もあれば、味はひもあらうと云ふもの。一寸した間違ひ！　と云つて濟ましてはゐられない。それがために一國の破滅を招ぐこともあれば、思ひもかけぬ大當りをして成功を來す事もある。六十年の不作を嘆く人、良い女房を貰ひあてたと欣ぶ人、そこにも妙な間違ひが絡んでゐたりする。かうした奇拔で面白いさまざまの妙味ある實話を蒐めて、飛んだ間違物語と題し、次號の誌上を賑はすことになつた。これこそ噛みしめると津々たる興味ある好讀物であらうと信じます。

○

行方不明の兄が……或日、報知新聞社の下田三郎といふ方が本誌の編輯局を訪ねて來られ、かういふ話をせられた——自分には一人の兄があつたが、子供の時に何處へ行つたか、突然行方不明になつてしまつた。兩親は明けくれ、此の事を言ひくらしてゐたが、遂に先年亡くなつた。自分にとつてもたつた一人の肉親の兄の事ではあり、何とかして搜し出したいと念じてゐた矢先、郷里の親戚のものから、お前の兄ではないかと云つて送つてよこしたものがある。見るとこれは六月號のキングの口繪の一部分で、『海外讀者だより』として、下田善策といふ人の寫眞が載つてゐる。なる程、面影が亡父に酷似してゐる。ことによると、兄かも知れない。この人の住所が判つてゐたら教へて貰ひたい云云。そこで早速取調べて、在米オッタリ市の下田氏の住所を知らせて上げたわけであるが、私共はこの善策氏が三郎氏の實兄であられん事を切に祈つてゐる次第である。

○

金儲けの暗示……本號所載谷孫六氏の金儲け話『孫六とX』これまた珍らしい有益な記事として、諸君の期待に背かないことを信じてゐる。次號に掲載する五拾錢玉物語こそは谷孫六氏が苦心慘憺の餘になつた記事だけに、『孫六とX』以上に



興味をよび、諸君の歡迎また熾烈なものがあらうと思ふ。この奇拔な探題の下に、氏は錢といふもの丶本當の性質と金儲けに對する限りなき暗示とを吾人に遺憾なく、披瀝してゐる。何といつても、金が言ふ當節、かうした興味ある、而も有益な記事は、見逃してはならぬ好讀物たるを失はない。池田氏といひ、谷氏といひ、得難い寄稿家が本誌のために力を注がれることは讀者諸

君と共に、大いに欣びとしたい。

○元氣を出せ！…… 毎日キング編輯局を賑はしつゝあるものに、讀者諸君の通信がある。山の如く集まる。これらの通信の中で、相變らず多いのは各長篇小說の讃美であるが、昨今めつきりその數を大きくして來たのが池田藤四郎氏の記事に對する感謝である。讀みついたが最後、面白くて有益なこと此の上もないとあつて、貪る樣に讀まれてゐるのが氏の記事である。その池田藤四郎氏、次號には元氣を出す秘訣といふ記事を寄稿された。これは單なる訓話式のものでなく、科學的の根據があり、而も實際的に何人をも傾聽せしめる名記事で、一讀全身に脈々として元氣の湧出するを覺えしめる。不景氣だ、就職難だと、クヨ／＼する人士は、宜しくこれを讀んで、緊褌一番せよ。卿が眼前、忽ちにして明るい世界が展開されるであらう。

W記者の悲觀……さる一日本所は兩國の出羽海部屋を訪れたモーニング姿もいとど瀟洒たる一紳士、やがて一間に通されたはよいが、さて帽子を掛けようと四邊を見まはしたけれども、帽子掛けらしいものがない。ひよいと見ると、ある！ある！確かにあるが、これは何うしたこと。日頃長身をもつて任ずる件の紳士ではあるが、これには驚いた。何しろ日の下開山と稱へて天下に巨軀を誇る横綱達の揃つてゐる出羽海部屋のことだ。普通の家よりズツと高い所に取りつけてあるのだから、さて帽子を掛けようと思つて脊伸びをしてみたが、おツつかない。はては爪先で立つて飛びついてみるが、なか／＼屆かない。焦れば焦る程玉の汗が流れ出して、ほと／＼昏惑の體。見かねた取次ぎのショボ／＼頭、帽子を君の手から難なく帽子掛けへ。目をパチクリさせてゐた一紳士こそ我がキングのW記者、『いやどうもあの時ばかりはベソをかきましたよ』

◇キング讀む人◇

キング讀む人……樂しみ乍ら修養が出來る
キング讀む人……常識發達時勢に後れぬ
キング讀む人……人柄何時しか立派になる
キング讀む人……愉快痛快娛樂が得られる
キング讀む人……感奮興起出世が早い
キング讀む人……家庭は何時でも圓滿幸福
キング讀む人……友達仲間に尊敬される
キング讀む人……趣味が自然に高尚になる
キング讀む人……居ながら世界が明瞭分る
キング讀む人……心が明るく人世が樂しい



○『キングカード』に感謝……『突然ながら、私共も毎月キングを熱愛して讀んでゐますが、本月號に挿入してあつた「キングカード」には、全く頭が下るほど感激の念を强うしました。これは興味と實益とをかねた、申分のない奉仕的な附錄として、いつもながら御誌の讀者本位な努力には敬服の外はありません』(山形縣松田文平三郎)

○

八月號キングカード中訂正……○世界の高山中 キンチンジャンカ山八、八五〇米とあるは八、五八〇の誤植。○日本の自動車台數中米國は五十人に一人とあるは五人に一人の誤り。

精力と根氣を補ふ

＝殊に神經衰弱と兩性不能に適効する＝

春日普門先生御創製の高貴薬

＝文明と文明病＝

世の中が日に月に、だん〳〵難しくなり所謂生活難にはみな〳〵閉口して居る、早く言へば今世の中は何人もが綱渡りの藝當で、やつと月日を送つてゐるやうな譯である。

かうなると病氣までが難しくなつて來る。なかにもせち辛い文明社會の文明病ともいふべきものは、神經衰弱とヒステリーで一つは働き盛りの男子の難病、一つは一家の柱ともなるべき大事な婦人方の難病である。

この種の病氣は全く困つたもので食は減り睡眠は出來なくなり氣持は妙にいら立つて來て白痴か狂人か自分の頭腦であり乍ら自分にも全く用をなさないことになる。

殊に眉根に縦皺をくしや〳〵とよせて瞳のどんよりとした男の顏を見せられたり、顏の蒼白い眼のいやに光る女の甲走つた聲を聞かされたりすると、はたの者の頭腦までがすつかりそれになつて了ふ。

この神經衰弱とヒステリー位實に厄介な病氣は他には餘り多くはない。第一今日の處之ぞと言ふよい治療法もなければ、藥もないのださうで、これを如何ともする事が出來ないと言ふ事である。

＝その調劑に成功さる＝

然るに茲に私共の誠に喜びに堪へないことは此種の病氣に實に驚くべき効驗ある靈藥が本草學の大家として知られた春日普門先生の御手に依つて最近完成され、支那太古より傳

油断出來ない！ 痔疾の初期

痔疾の初期は 肛門部に少しの痛みを覺えるとか時々肛門内に蟲の這ふ様な感じがするとか又は少し血が出るとか米粒程の疣が出るとかで大して氣にもかけませんし、殊に婦人や手術を厭ふ人などは、ついおろそかになり勝ちでありますが最近輸入された獨逸ヘデンザ會社製の痔疾専門薬は最も簡單で完全な自宅療法薬として目下盛に愛用されて居る新發賣品であります。

曾つて伯林大學 臨床科を始め歐米各國の醫界でも最も合理的優秀な痔疾藥として好評を博して居る有名薬であります。

注入に便なる軟膏チューブ入で少しも刺戟もなくあらゆる痔疾に用ひて著大な效果を奏する事は最近の實驗によつても確證を得て居ります。藥名をヘデンザと言ひ約十回分チューブ入で一圓五十錢（送料内地十五錢）御使用御希望の方は本社の代理部へ御申越し下さい。便宜に御取り扱ひ致します。

法の高貴藥として尊ばれ、漢法寶典たる彼の本草綱目中の不老長壽の秘藥として言ひ傳へられし妙藥が何人にもわけなく得られる樣になりました。

即ち漢法の藥療法が最も自然で最も有効である事は今更言ふまでもなく、それに近時世界の醫藥學大家連が競つて此の方面の研究をされる樣になつたのは、一に漢藥は西洋流の化學的調劑より生れた藥劑より遙に効果顯著なるものがあるのみならず自然物を主としてある丈に副作用を及ぼす憂も絶對にないと言ふ事であります。

＝秘藥の偉大なる效驗＝

春日先生の御研究によるところの秘法藥は精神と肉體の神髓に向つて非常なる精力と根氣とを増す方劑だそうで、今日の神經衰弱や兩性の不能などに實に不思議な効驗あるには先生自身驚嘆の聲を放つて居られる位である。「頭寒足熱」が反對に參つて「頭熱足寒」の人々は是非此の秘藥を服用いたさるべきで心身の精氣は増大し脈搏は強實となり、食慾は進み兩便はよく通じて元氣と精力とを増し、そして兩性の強盛になる事は實に妙千萬だそうであります。

若し兎角逆上がちだとか、眩暈がするとか不眠とか健忘れで困るとか、四肢枯衰いとか勞衰るとか、煩悶するとか、躁狂り易いとか物悸ちで……とか、陰萎てとか早漏ぎとか、夢精、遺精にとか、腎虚せぬとか、或は全く不能だ……とか、またヒステリーで困るとか兎角かうした氣味をば僅かでも感じられるやうた方々はこれを用ひたらば、その偉大なる効驗には驚嘆せられるであらう。

尚數多くの藥療法を試みられて一向その効果が見えないと云ふ樣な實に氣の毒な方々にして若し此の秘藥を一服でも試みられたならば、日ならずして不思議な體驗を得られることゝ信じます。

現に東京第一高等學校共濟部に於てはこの秘藥を學生諸子のために至極有益なるものと認められ、廣く諸子の間に頒布される事になりました。

若し愛讀者にしてこの秘藥を御希望の方々は左記へ御申込みになれば便宜上特別御取扱ひ致します。

春日先生多年御研究の結果その調劑に成功された高貴藥は藥名を（壽仙）と言ひ價は六日分三圓十二日分五圓五十錢（送料内地十二錢領土四十五錢）特に東京市本鄕區駒込坂下町四八大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）で御取次いたします。

房々と毛が生える急速毛生法

帝國藥化學研究所 中村純夫

髪の毛が一丈でも伸る新研究

昔から女は「衣裳髪かたち」と言つて女性美の中心は毛髪にあり、從つて如何したら房々と長い緑の黒髪とする事が出來るかといふ事は昔から藥品や油なぞと種々研究されたものである。殊に無毛症の如きは、迷信から非常に嫌はれて、それが爲結婚出來ない様な人さへもある程であるが、從來毛生藥として用ひられたるものは、百發百中必ず効くといふ譯に行かなかつたといふのは第一に塗布毛生藥は度々剃り等して皮膚を刺戟すると毛の生える事から思ひついたものであるが體内に毛の發生する養分の不足せる者は之を何程塗つても到底發毛する筈がない。乃で此點に着眼して體内の毛髪養分を研究したのが獨逸のエシツンツ博士であるが、最近我國にても九州帝大其の他に依つて更に進歩せる内服毛髪營養劑が發見され非常に有効として推奬されて居る。此内服藥の方は大病や産褥の抜け毛とか毛髪を長く伸長せしむる場合に有効であるが、無毛症等にて急速に發毛せしむる場合、又は病菌の爲に禿る禿頭病の如きは外部から直接刺戟と殺菌とを兼ねる塗布藥の方が有効である。

二ケ月で毛が生える手當

斯く毛髪は皮膚の刺戟と體内の毛髪榮養分たる毛髪素に依つて容易に發生するものであるから榮養さへよければ只度々剃るとか毛の強いブラシで摩擦しただけでも幾分發生するものであるが同時に從來賣藥の毛生液其他の塗布藥を用ひて根氣よく摩擦する時はより有効であり尚毛髪素又は内服劑角質ゼラチンの如きを服用して體内の毛髪榮養を盛んにする時は更に有効である事は論ずるまでもないのである。

最近松山藥學士急速毛生藥として創製發表した内服塗布を併用する藥品「ザノール」は一方に毛髪素を内服し、體内の毛髪榮養を充分にすると同時に最も進歩せる藥化學を應用した絶對的無害有効なる塗布藥（從來の塗布藥には往々非常に有害なものがある）に依つて皮膚を刺戟するものであるから例へば産後や季節の脱毛、臺灣坊主、禿頭病の如きは單に内服用ザノールのみにても有効であるが更に外用ザノールを用ひる時は殺菌と刺戟により、毛髪の伸長を促進し、又無毛症に對しては其希望の場所、例へば頭部でも、髭でも、その部分を朝夕數回塗布摩擦し乍ら同時に、毛髪素を内服する時は急速に毛の發生を促進するのである。島隅學士の實驗報告によれば頑固なる無毛症にても大抵二三ケ月にて奏効せざるはなく、廿二歳の無毛症の婦人内外併用三週間にして幾分發生を見七週間後には相當の伸張を見たり、又禿頭病にて全くの藥罐頭となりたる二十八歳の男子に試用せるに四週間後には薄い乍らも族生し二ケ月後には完全なる恢復を見たと、斯る實驗例は既に數十例に及んで居るが、兎に角斯くの如き綜合的毛生劑の完成されたことは無毛禿頭に惱む人々は勿論毛髪を生命とする女性美の上からも大いに喜ぶべきことである。

果然……世界の記錄を破る！
ろくまく＝肺炎＝百日咳＝

流感―喘息―キカンシ等呼吸器病一切に比類なき偉效を示した、ダウンチリメン草。結核患者は自ら研究されよ

◇新記錄に驚く實驗大家◇

ダウンチリメン草の各種呼吸器病に驚くべき偉效ある事は、本社發行の各雜誌で度々御知らせ致して來ましたから讀者諸氏にはすでに御承知の事と存じますが、本年一月號キング、講談俱樂部に三大醫學博士、三醫學士の本劑に對する專門的實驗談を發表致しましてからは、今迄あり來りの普通賣藥位にしか思はなかつた人々や、醫師、藥劑師等專門家迄その卓效に驚き續々注文し來られる樣になりました。そうして各大家の實驗されし內容を今少し詳細に發表せよとの御要求が所々から參りますが、何しろ一病氣に對し數十名、數百名の多きに達しますので、限りある紙上では一病名丈を發表する事さへ出來ませんので、左に各大家の臨床報告を綜合し世界治療界に新記錄を示した病名とその要點丈を略記し御參考に供します。

◇百日咳では決して死なぬ◇

本病の初期なら十人中八人迄は、四日から七日位で全快し、少しこじれたのでも十日から十二三日で全快して居ります。今迄實驗された多くの中で一番永引いたのは十五日を要したのが只一人あるきりです。その上本藥草を用ひると死亡率の最も高い本病もその憂が全くありません、實驗されし大家が口を揃へて世界唯一の百日咳特效藥だと激賞されしも實に無理からぬ事であります。

◇喘息は根治する◇

喘息に一時押への藥はあつても根治藥は歐米にも未だその例を見ません、我國では古來漢法醫が麻、杏、甘、石の秘法と稱し、麻黃二匁、杏仁、甘草各一匁、石膏四匁を煎じ藥とし唯一の特效藥として來ましたが、此の麻黃と云ふ草は一時的咽喉が樂になるので、之を主劑とした喘息、百日咳、氣管支の特效藥と稱するものは今尚盛に販賣されて居ります。舶來品では喘息煙草と稱し吸ふと一時樂になると云ふ煙草が有名ですが、あれは內地に澤山あるキチガヒ茄子の葉の乾燥たもので多く吸ふと中毒をおこす危險があります。斯樣な程度でありましたが、嬉しい事には

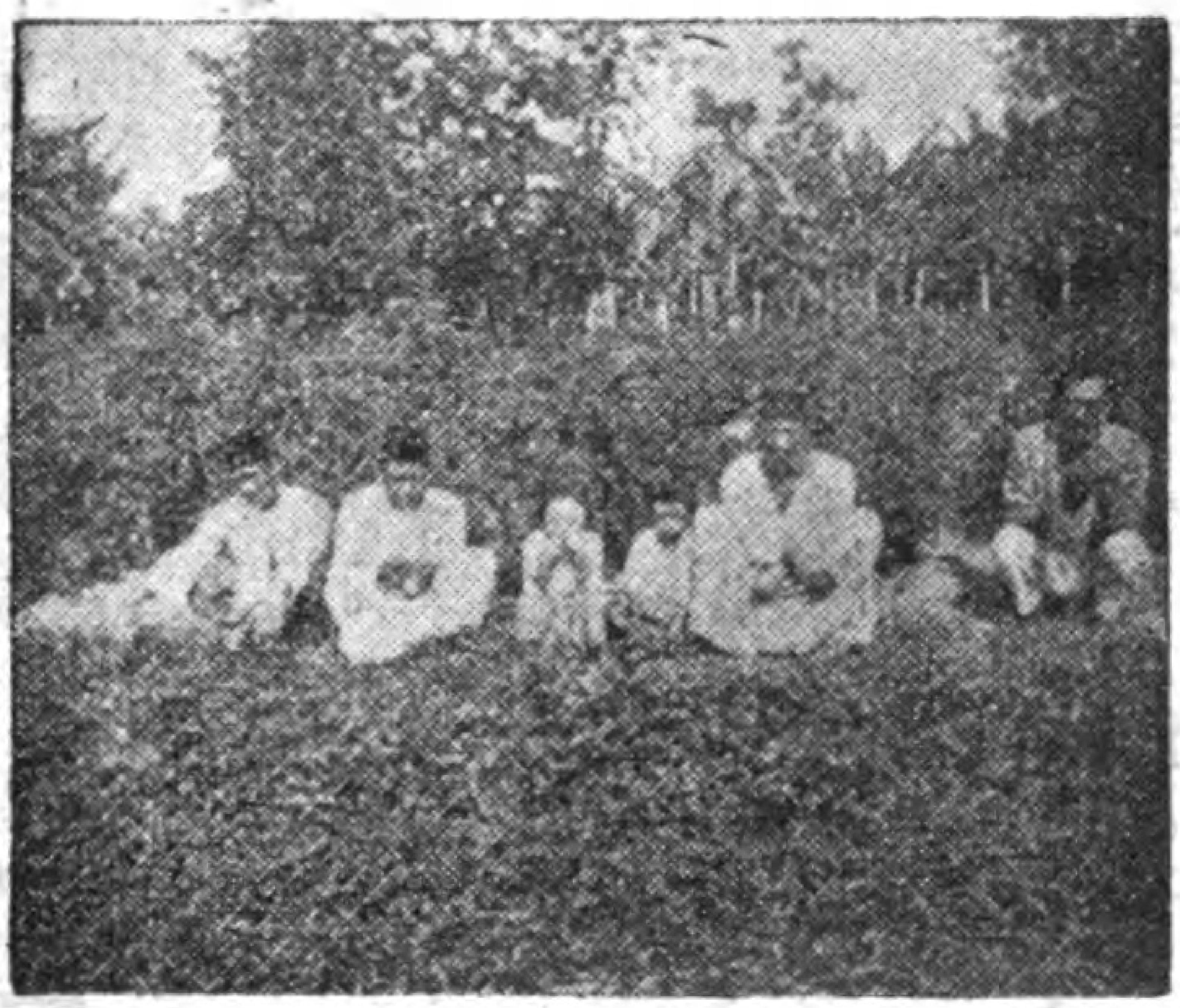
此のダウンヂリメンは岡部醫學博士の發表せられし如く、十數年來の慢性でも根治再發しないのであります。しかし如何に卓效あると申しましても、よく不德賣藥の廣告に見る樣に五日や十日では治りません、今迄の例では一ケ月から二ケ月位は連服を要します。本草が喘息患者に最も喜ばれるのは服用數日で痰が何の苦もなくどん〳〵出切つてしまふ事であります。

◇肺炎の高熱が一夜で◇

高熱四〇度からの危險な肺炎も本草の煎汁で、内服と吸入を併用すれば、一夜で咳が止り熱も平熱近くに下ると云ふ驚嘆すべき實例が澤山御座います。今之を全快者四十六人を平均して見ますと僅か六日六分にしか當りません。肺炎がこの樣に早く治ると云ふ事は世界の何處にもその例を見ないのであります。

◇氣管支加答兒が四日で◇

實驗者七十九人に就て見ますると四日以内で四十四人の全快者を擧げて居ります。この樣に迅速に治る理由は本草が強力な、解熱と鎭咳作用があるのと今一つは、局部的消炎作用をも具備して居るので咽喉の熱を持つた部分を消散してしまふからであります。之が證據にはどんなひどい咳でも又咽喉の痛でも本草の煎汁で吸入するか、含嗽する丈で速に止るのを見ても明であります。これは氣管支加答兒ばかりでなく扁桃腺炎、咽頭加答兒、喉頭加答兒、流感等に對しても同一で特に流感には此の上のない妙藥です。



ジャワ島のダウンヂリメン藥草栽培農場の狀況と發見者　佐々木啓市氏及土人

◇肋膜炎は十五日で◇

本草は肋膜炎には一番適して居る樣で、十五日から二十日位で全快する人が最も多く、中には又四十日も要した例も御座います。本草が肋膜に著效ある理由は(1)胃腸が丈夫になり食慾が増す。(2)汗が出ずに熱が下るから身體が疲勞しない。(3)血行がよくなり抵抗力を増す。(4)咳が止る。此の中抵抗力が強くなるのと胃腸が健全になると云ふ事が、どの位全快を早めるか知れません。この四大特長は肺結核に取りても無二の理想で肋膜同樣すばらしい好成績をあげて居りますが、今は某々二大家が熱心に御研究中でありますれば發表は差控へますが、在來の結核藥とは餘程相違し、しかも絶對に無害でありますれば結核患者肺尖加答兒患者は、自身で抵抗力を強める意味に於ても、血行を好くし胃腸の健全を計る意味に於ても、本草の單味服用或は醫師の藥との併用等自ら研究し、治療を早められん事を望みます。

本劑は原藥草のまゝと、用法の簡單な錠劑の二種類です。効力は皆同じです。いづれも使用法は現品に添付てあります。

▼ダウンヂリメン藥草約十五日分實費壹圓三十日分金貳圓也送料内地十二錢領土五十錢

▼同錠劑小瓶五日分金壹圓也、中瓶十五日分金貳圓八拾錢也、大瓶一ケ月分金五圓也、送料同前、便宜上東京本郷區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）へ御申込み下さいませ

記者附記

豫して本誌上にも屢々掲載せられた如く、ラヂウム温灸治療器の胃腸病征服の偉力は、全く驚くべきもので、興村氏の外にも、白山自動車會社の佐伯氏の三十五日目に三貫五百匁肥り帝大の三木三郎氏の七日間に一貫匁以上肥り、其他驚嘆すべき例は實に枚擧に遑ない程であります、しかも之等の方々が悉く永年の慢性胃腸病に苦しめられ粥も消化出來ぬ人々であるから更に驚かざるを得ません。尚最近の實例を列記するならば、

松山可勝氏	（千葉）	六十日間に一貫匁増
丸澤精一氏	（東京）	九日間に七百五十匁〃
中山恒太郎氏	（岡山）	九十日間に四貫五百匁〃
小林昇藏氏	（東京）	卅五日間に二貫五百匁〃
中村修吉氏	（群馬）	四十日間目に八百匁〃
唯井松二郎氏	（愛知）	三十日間に一貫二百匁〃
臼田正治氏	（東京）	二十五日間に一貫匁〃
沼田三之助氏	（神奈川）	卅日間に一貫六百匁〃
佐伯米藏氏	（茨城）	二十八日間に一貫匁〃
田丸節氏	（千葉）	六十日間に二貫匁〃
佐藤政次氏	（新潟）	四十日間に一貫匁〃
野澤常次氏	（東京）	六十日間に三貫匁〃

ラヂウム温灸器とはどんなものか！

近來愈々驚異的卓効を示して現代醫學界の注目の焦點となり胃腸病者の渇仰救世主の如きラヂウム温灸器とはどんなものか！

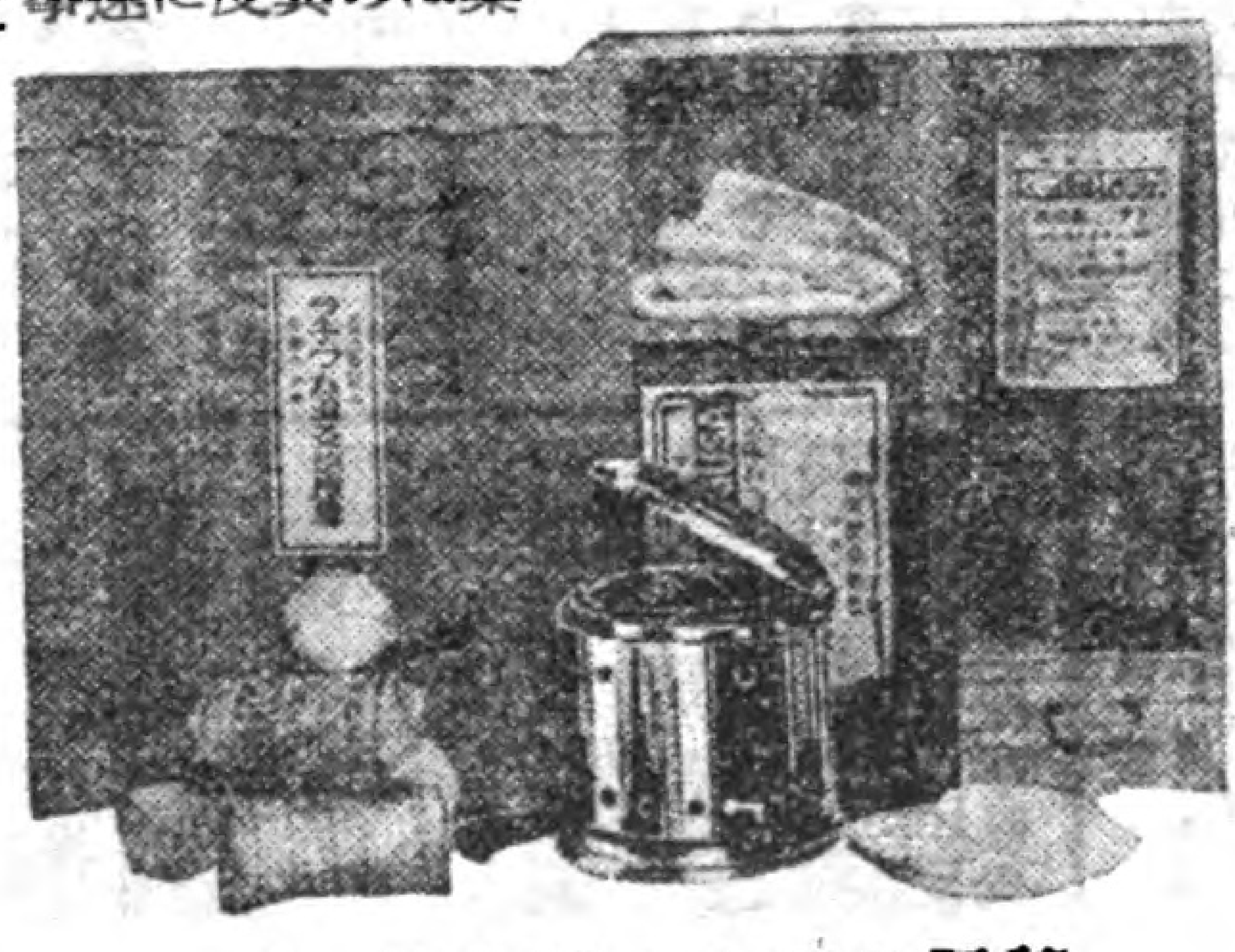
古來我國に於て腹痛と下痢止の秘法として不思議の靈効を傳へられて居る諸部の灸療法に就いて、東京理學療院長　河野先生が苦心永年御研究の結果遂ひにその原理を極め胃腸機能の眞理に結合し更に最近化學を應用して完成し得た專賣特許治療器であります。

嘗て本療法が發表せられますと計らずも學界に一大センセイションを引起し、使用實驗者の醫學博士藤巻先生、西田博士を始め廿餘名の諸大家が激賞し有効なる事を御證明になりました。

手輕で便利で即座に効く

この温灸器は極めて完全な治療器で家庭に居ながら容易く使用する事が出來この恩惠に浴する事が出來ます、尚温灸が胃腸病に奏効する事前述の通りでありますが、その治療範圍も極めて廣く特に今日まで眼立つて好成績なのは冷え症、婦人病、不眠症、消化不良神經痛、痔疾、肩のコリ、腰痛等で中でも婦人病、冷え症等は殆んど百人が百人折紙付即効と申しても決して過言ではありません。

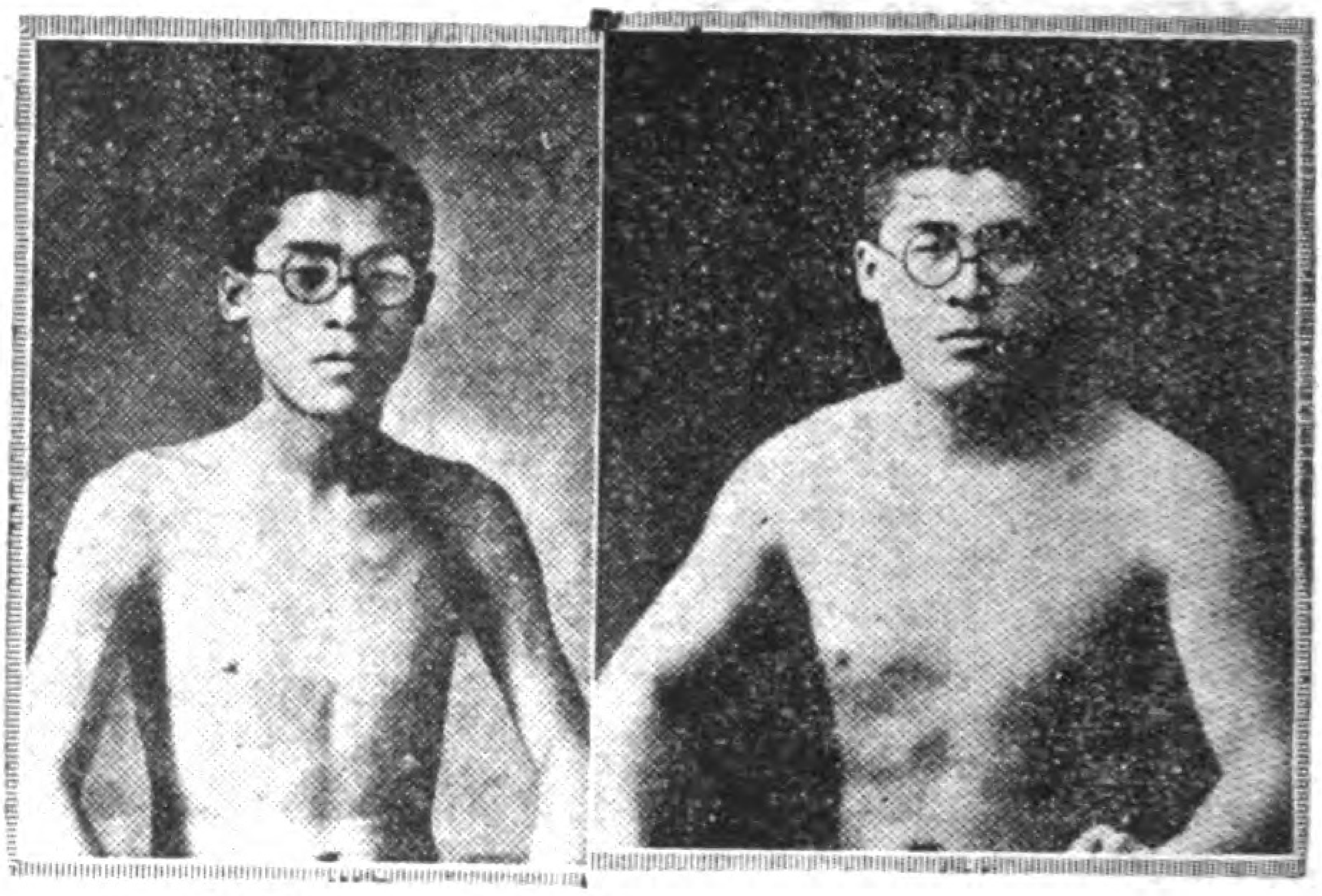
元來温灸はその主効精分が艾の神秘的な灸効力ですから、昨今ありふれた科學的配合藥などとは全然その根據を異にし一度御使用になれば速ぐ解る事で絶對に有効無害然も御家庭で每日僅かに一時間乃至二時間の治療で十分ですから頗る經濟で至極重寶、又使用上には少しの面倒があるわけでもありませんから誰樣も今速ぐこの場所でその絶大な効果に浴する事が出來ます。



特製ラヂウム温灸器一揃

尚本温灸器に就いてのお尋ねは返信料添へ本社代理部氣附河野義宛に御願ひ申上げます

◯左治療前右は治療四十回で五貫目肥つた興村氏



永年の胃腸病と肋膜炎を征服し 五貫目肥つた體驗

中央大學生 興村常次郎

私は永年胃腸病で苦しみました。其の疲勞の極度にある時、風邪が原因で遂ひに恐ろしい肋膜炎に冒されて了ひました。氣の弱い私は醫師の宣告を聞いて倒れんばかりに驚きました。

それは昨年の木の葉の枯れて落葉する晩秋の頃でした。胃腸病と肋膜炎の爲に身も心も疲れ果て、明日の命も豫測出來ない私の胸には秋の自然は事更に哀曲を奏するもの丶如く病は日に〱募るばかり只拱手傍觀疲れ蝕れて行く身は徒らに悲詩を吟ずるのみでありました。

處が或日偶然私と同病の方が温灸治療で全快した喜びの手記を見ましたので、早速その温灸の院長樣を訪問して治療を乞うた次第であります。（中略）

治療後院長樣の教への通り無理とは思ひましたが決死の覺悟で久し振りの平常食を攝りました。最も最初の日は天丼カツレツの樣な極めて不消化物を食べさせられたのですから心配で心配でたまりませんでしたが、程なく空腹を感じましたので、又就寢前御飯三杯程平げそのまゝ床に就きました處、それが私の更生への第一歩を力強く踏出す事が出來たとでも申しませうか翌朝からメッキリ變つた氣分に蘇る事が出來ました。（中略）

胃も消化せぬ程難症の私の胃腸病がその翌日からどんな不消化物を食べても朝までには悉く消化して晝には又空腹を感じてる樣になり、私の決死の努力は謀らずも非常な効を奏したわけであります。

この自信を得てから食べる〱翌日は晝食に鰻丼一個牛鍋一人前食べました。こんなわけで毎日平均普通の人の倍以上も食べ、然も少しの故障がないばかりかメキ〱力がつき目方も肥え、實に温灸治療を始めてから四十日目には、昔日の悲觀は今日の樂觀となり十一貫六百匁の悲しむべき體質から一躍十六貫五百匁の偉大な體格になり人も私も驚いて居る樣なわけであります。

之も皆ラヂウム温灸器の賜で、この喜びは私一個に寄すべきものでないと思ひ、學友にも紹介して、その恩惠に浴さしめて居ります。天下の胃腸病の皆樣よ、決して御心配なくこの温灸の偉大なる効力に接してお喜び下さい

人の厭がるワキガの手當法

藥學士 澁谷乾三

身に付いた惱み

人によつていろ〱の性癖や病氣があるうちに、それが内部に潛んでおつて、自分も氣付かず、他人にも注意されぬ識られもしないものもありますが、如何に隱さうとしても、自然に外部へあらわれて了ふのは、まことに身の退けることであつて、殊にそれが人の厭がる、不快な感を抱かせるものならば、社交上その他の點から見て日常生活に於て人知れず大きな惱みとなり、一生を通じて計り知れぬ妨げとなるものであります。ワキガに惱む方などは先づこの類の大きなもの〻一つであります。

菫の樣な美しい體臭

如何に衣服に贅の限りを盡し、まばゆいばかりに着飾つた整つた顏容の淑女紳士であつても、擦れ違ひ樣、思はず鼻を反けるやうな臭氣がしたならば、振り返り見るどころか、かへつて一種のあざけりと侮りをさへ感ぜしめる程不愉快なものであります。

體臭はすべての人に附き物であります。かの有名なアレキサンダー大王などは菫のやうな體臭をもつたと云はれてゐますが、これに反して大王の從僕タイスは、それこそとても耐へられぬ臭氣を發したといふことであります、惡臭をもつといふことは、それ自身假りに大した苦痛でなくとも、人に嫌はれるだけ損であり、たとへ大王の菫の體臭を發したといふことの眞僞はともかくとして、このやうな事を聞いたら、腋臭に苦しむ人など、羨やましさを通り越して、むしろ癪にさはることでありませう。

春から夏が受難期

ワキガは春先きから夏へかけて、最も甚しいのでありますから、惱む人たちにとつては、これから受難期であります。

元來腋窩には大きな汗腺が澤山あります、そこから出る分泌物即ち汗のなかには人によつて不快な臭氣を發するものが含まれてをりそれが即ち腋臭であります。之が青春の時代になるにつれて一層甚しくなり、發汗するに好機會の夏期などには殊に、其臭氣も激しくなるのであります。ワキガの強い人は、取りかへてゆく〱その局部にあたる衣服などが、すべて黄味がかつて着色し、惡臭はいつまでも滲み込んで、むかつくやうな臭氣は肌襦袢など常に廢棄しなければならなくなり、腋の下は常に爛れたやうに眞紅になつて、見るから

に傷ましいものであります。それが遺傳にも關係あるとも言はれてゐますから、お子樣のある方などは特に注意しなければなりませぬ

輕いワキガにあつては香水位で胡麻化しがきくこともありますが、下手にやるとワキガの惡臭と香水とがゴッチャになつて、却つて何とも言へぬ不愉快な臭氣が鼻を衝くのであります。

色々な脫臭法があります

まづ腋の下を常に淸潔にする事を心掛け、肌着を度々取換へた後香水でも振りかけておくが、他人に氣付かれる程度のものになるとこれ丈けでは到底防ぐことは出來ません。

臭み止めとして用ひられてゐるものは種々ありますが、例を擧げますと、(一)過クロール鐵液　三〇・〇　グリセリン二〇・〇　淨水二〇・〇、(二)タンニン酸一〇・〇　グリセリン三〇・〇　ヨード丁幾五・〇、(三)クローム酸二・〇　淨水一〇〇・〇　以上どれでも液狀であつて混和して筆の先きなどで一日一回位塗布するのですが、尙普通どなたでも應用する打ち粉式の撒布料としては次のやうな處方を用ひます。

(一)滑石一〇・〇　サリチル酸〇・一　茴香末一・〇　桂皮末一・〇　枯礬二〇・〇　或は、(二)タンノフオルム五・〇　亞鉛花五〇・〇　滑石四五・〇、(三)枯礬五・〇　亞鉛花一〇・〇　丁子末二・〇　光明丹一・〇　のやうなものを時々腋の下に撒布しておきますと、第一に汗の出を防ぎ、臭氣も消すことが出來ますが、しかし、これらの方法はどちらかと申せば姑息であつて、度々くりかへさねばなりませぬ。又エッキス光線を利用して皮膚の深部にある汗腺に作用させて汗の分泌を減じて臭氣を去らせる方法があります大抵六週間位いたすのです。しかしこれは餘程熟練を要する技術で、やり過ぎると局處の皮膚が乾燥しすぎて、いろ／＼の皮膚面の故障を惹き起し、又十分に效果あるやうにすべく、あまりにしば／＼エッキス光線に觸れさせるために、この光線そのものからくるいろ／＼の副作用をおこすことがありますから餘程注意して掛らねばなりません。

最も簡單で確實な法

右のやうな手當法のどれもが、いづれも一長一短で、その效き目の程度も體質や、病症の輕重によつて異なるもので、甲の人に效いたものが、必ずしも、同樣に乙の人にも作用するとは限りませんが、皮膚科の大家として名高い賀川醫學博士が、いろ／＼研究された末。新たに推奬すべきものとして處方された秘藥、ワキガ止めくすり(一名闌香)といふのは、多くの人たちの實驗の結果は、もつとも簡單に單に塗布するのみで、他に少しの障害も及ぼさないで、しみず、いたまず、衣服もよごさず、しかも强い防臭、止汗、防腐の作用をもち、一夜のうちにその效き目は確かであり、一二回の使用にて旣にその惱みを去り、連續しておる間に、遂には知らず／＼のあひだに全く滿足な結果が得られることによつて有名であります。何を用ひても思はしくない方などにはお試用も必要かと存じます。

藥治法の外に常に局處を淸淨に保つといふことも最も必要なことであります。かくしてこの厭ふべき惡臭を去つたならば、安んじて外出にも社交にも活動ができ、心おきなく事務もとれますことゝ思はれます。

各種懸賞當選者披露

七月號誌上募集

口繪寫眞考へ物之部

解答　1噴火口、2そば屋、3長靴、4寫眞師、5小學生、6ポスト、7西郷銅像

正解者多數の中から抽籤の結果左記五百名が入賞者に決定いたしました。

〔東京〕 [illegible]

〔京都〕 [illegible]

〔大阪〕 [illegible]

〔北海道〕 [illegible]

〔神奈川〕 [illegible]

〔兵庫〕 [illegible]

〔埼玉〕 [illegible]

〔群馬〕 [illegible]

〔千葉〕 [illegible]

〔茨城〕 [illegible]

〔栃木〕 [illegible]

〔奈良〕 [illegible]

〔三重〕 [illegible]

〔愛知〕 [illegible]

〔静岡〕 [illegible]

〔山梨〕 [illegible]

〔滋賀〕 [illegible]

〔岐阜〕 [illegible]

〔長野〕 [illegible]

〔宮城〕 [illegible]

〔福島〕 [illegible]

〔岩手〕 [illegible]

〔青森〕 [illegible]

〔山形〕 [illegible]

〔秋田〕 [illegible]

〔福井〕 [illegible]

〔富山〕 [illegible]

〔石川〕 [illegible]

〔新潟〕 [illegible]

〔島根〕 [illegible]

〔鳥取〕 [illegible]

〔岡山〕 [illegible]

〔廣島〕 [illegible]

〔山口〕 [illegible]

〔和歌山〕 [illegible]

〔徳島〕 [illegible]

〔香川〕 [illegible]

〔愛媛〕 [illegible]

〔福岡〕 [illegible]

〔大分〕 [illegible]

〔宮崎〕 [illegible]

〔佐賀〕 [illegible]

〔熊本〕 [illegible]

〔長崎〕 [illegible]

〔鹿兒島〕 [illegible]

〔沖縄〕 [illegible]

〔朝鮮〕 [illegible]

伊藤三郎　松野勇夫　富士野倉助　田中江
坂野芳雄　杉浦芳　松島吉太郎　大久保博治
金杜天　小藤友藏　〔臺灣〕
若菊喜代　樋口俊午　窪谷美壽々　並河忠雄
〔樺太〕　伊藤時雄　米津清吉
萬鶴英男　〔支那〕　鈴木平助
藤井靜香　小林ふみ　宮木知司　宮本一夫

六月號誌上
新聞紙上募集

聖なる感激に滿ちた作品之部

去る六月號本誌並に新聞紙にて募集した作品の應募篇數は例によつて今回も亦編輯局の豫想に倍して、文字通り記錄破りの大盛況を呈するに至つた。玆に投稿家諸彥の御好意と御筆勞とに深謝して置く。先づ本號發表の分は、左の一部類であるが、殘りの分も驗て選了するに從つて逐次發表する豫定である。乞ふ、次號を待たれよ。

詩の部

賞金壹百圓　かつこう鳥の啼く頃　東京府下練馬町　梁川省吾

賞金五拾圓　兒等に與ふ　他二篇　千葉縣東葛　南柑子

賞金參拾圓　朝百姓のうたへる　他一篇　熊本西里局區　萩山藻の花

賞金拾圓　樂しき家　兵庫縣篠山町　齋藤子郊

賞金五圓
麥が熟れた他數篇　吉村浩太郎(福岡)
北方の海他數篇　竹内不二子(神奈川)
朝の聲　横堀眞太郎(群馬)
飴屋の爺さん他數篇　竹屋英之助(山形)
朝たのし(山の子の唱ひたる)　吉川久子(大分)
ふくろの聲他數篇　土室鳴水(山梨)
樵夫の歌　中田猛夫(北海道)

選外佳作(無賞)
○山河短唱　森林勇(石川)○共に苦勞の　いきち(福岡)○靑夜無相　及川涙果(岩手)○農夫の歌　夏濱文雄(東京)○お留守居する夜　矢尾板靜波(横濱)○若き農夫の歌へる　山根みさ緒(徳島)○田園小詩　鈴木まき(新潟)○郵便配達夫におくる歌　鈴木健太郎(山形)　○郷土の春が踊る　稻村博行(北海道)○五月の風が吹く　兒玉芳明(鹿兒島)○啞蟬　森英雄(熊本)○砂糖車　入部兼重(鹿兒島)○春夕讃　荒谷與郎(東京)○無題　山口峰吉(三重)○お千代坊　河内しげを(福岡)　○川江敦子(福岡)○安立楨(東京)　○松浦智惠子(愛知)○竹内坂雄(愛知)○伊豫部やい子(埼玉)　○古藤純夫(鹿兒島)○金子晤一(新潟)○池内進(廣島)　○鳥原裕夫(宮崎)○吉永雄二(北海道)○河内繁男(福岡)○澤田貞雄(兵庫)　○後澤重雄(北海道)○綺羅星之介(福岡)○山田靜湖(宮崎)　○角山不惑(大阪)○中田三夫(東京)　○山須勇(山口)○金野細雨(宮城)　○伊藤岱平(岐阜)○松浦秋生(愛知)

五・六月號
誌上募集

口繪寫眞之部

賞金參拾圓　兵庫縣明石市鍛冶屋町　北村喜多藏
同貳拾五圓　東京市神田區東龍閑町　村田半七
同貳拾圓　東京市外向島寺島町　江下桂一
同貳拾圓　東京荏原町小山　櫻井護
同拾五圓　東京市神田富區松町　淺野貞賢

賞金拾圓〔東京〕○淺野松雨○福地大治郎○畑中秀夫
賞金八圓〔名古屋〕○渡邊六三郎〔札幌〕○中村多市〔東京〕○武下如仙〔神戸〕○井上八洲兒〔長崎〕○宮本秀市
賞金五圓〔東京〕○柴田虎雄○神谷茂康○井上柯幸○立石光三○山本義道○山田喜八〔兵庫〕○小田寬治〔新潟〕○橋本三郎〔札幌〕○小島白浪〔青島〕○湯山高茂〔滋賀〕○竹内宿鳳

銀メダル
〔東京〕○村田昇三○藤井尙治○立石光三○岡島英夫○森田金次郎○武藤武夫○石黑光波○淺野松雨○小笠原榮雄○福地大治郎○對島靜太郎○池田英太郎〔兵庫〕○松本八太郎○北野泰郎○北村喜多藏○土岐寫眞館○枝吉滋○小田清榮○鳥居元次○森野鞏○谷崎喜佐太〔大阪〕○宇山繁雄○瀨戸正行○高丘青〔京都〕○本多躅陽○田中久三○矢部敏子〔支那〕○本田鐵次○弓瀨重明○庵地義一○湯山高茂〔北海道〕○宮崎一義○荒川又市○阿部壯次○藤森立城○黑岩帆舟〔朝鮮〕瀨谷崎ヤス○飯田守二○大迫靜二○藤本三郎○清水基○田中響人○森下義治〔臺灣〕○高欣榮○吉生常德○伊藤寬○六原代々策○水谷吉三〔沖繩〕○崎山用佑〔樺太〕○澤田正成○北岡軍馬○竹内政治郎〔滋賀〕○竹内宿鳳〔和歌山〕○奈良靜陽○乾ますみ○前川照子〔山梨〕○中澤秋雄〔三重〕○下村金吾○松原信郎〔福島〕○伊藤晨水○古川儀一〔岡山〕○山本樵○池田萩雄○福田寫眞部〔愛知〕○北村隆雄○淺野五郎○安藤健治郎〔神奈川〕○安藤貞治郎○中村馨〔岐阜〕○辻正典〔青森〕○後藤弘○倉光武夫〔新潟〕○富士野德市郎○丸田左雙○廣瀨渡〔長野〕○河西久雄○吉澤靜雄〔鹿兒島〕○鮫島福城○荒木正廣〔大分〕○福永豪〔宮崎〕○佐竹幽水〔福岡〕○向井辰夫〔山口〕○池木忠人〔栃木〕○坂本正孝〔長崎〕○宮本秀市〔佐賀〕森山寫眞館

附記――選外の寫眞中本社に於て使用する場合はその都度薄謝を呈します。

キング原稿特別大懸賞募集

甲類

○とんだ間違ひ物語

間違ひが更に間違ひを生んで、とんでも無い事になつた事實物語。

○無駄を省いた實例

家庭でも會社でも、何處でもこんな風にして無駄を省いたといふ實例。

○難病全治又は苦境突破の經驗談

心の持ち方又は變つた工夫で難病を全治し、又は苦境を切り拔けた經驗談。

乙類

○各種番附

成るべく新らしい思ひ付きで、世に有り觸れないいろ／＼の面白い番附。

○各種十訓

各種心得要訣等を新らしい標語で表はしたもの。

賞金

甲類　一等五拾圓（一名）　二等參拾圓（一名）　三等拾圓（一名）佳作若干名　本社特製銀製カップ一個宛。

乙類　當選篇には貳拾圓以下貳圓迄の賞金。

投稿規定

○四百字詰原稿二枚以上拾枚以内（乙類は一種一枚）○一人各種何篇應募せらるゝも可○原稿には住所姓名を明記すること○應募原稿は一切返戻せず○採用篇の著作權は本社に屬す

◎〆切　八月三十日

◎發表　キング十二月號誌上

◎宛名　東京市本鄕區駒込坂下町　キング懸賞部

定價表

	國內滿洲支那（送料共）	外國（送料共）
一冊	金五拾四錢	金七拾錢
四ケ月	金貳圓	金貳圓六拾錢
八ケ月	金參圓九拾貳錢	金五圓拾貳錢
一ケ年	金五圓七拾六錢	金七圓五拾六錢

稟告

◎特大號及增刊號は右表の外でございますから、それだけ餘分に申受けます。但し前金御拂込の方はその中より差引き計算いたしますから何卒御了承下さいまし。

○弊社の圖書雜誌の御註文は總て前金の事○振替貯金にて御送金は口座受入手數料金壹錢御同送の事○郵券代用は必ず一割增の事○雜誌代前金相切れ候節は最終の雜誌帶封に『前金切』の印を捺し次の前金領收まで發送停止○前金は本誌到達を以て領收の事と御承知の事○御註文書狀宛名は『大日本雄辯會講談社營業部』の事○郵稅不足又は未納の郵便物は請取不申候○弊社發行諸雜誌廣告料は御照會次第御報知可申上候

昭和四年八月三十日印刷納本
昭和四年九月一日發行（第五卷第九號）

編輯人　淵田忠良
發行人　廣瀨照太郎
印刷人　高木鳥三

東京市牛込區市谷加賀町一ノ十二
印刷所　株式會社秀英舍

東京市本鄕區駒込坂下町四十八番地
發行所　大日本雄辯會講談社
振替口座東京三九三〇番
電話小石川（二三五・二三六・二三七・二八〇・一五二一・五九九六）（五九八一・六九八二・七〇八八・七二七七・㈣一五一〇）

元取次店　東京堂・東海堂・北隆館・大東館

見よ！政治に、思想に、文藝に、教育に、
社會の一切に新生命を齎す大精神！！



新渡戸博士

渡邊司法大臣

鶴見祐輔先生快著

中道を歩む心

舊い思想は光を失つた、舊い道德は力を失つた、家庭も社會も今や危機に瀕してゐる、新に人に感激を與へ、新しい時代を建設するものは何ぞや、鶴見祐輔氏決然起つて玆に永年懷抱の大理想を披瀝す『中道を歩む心』は實に著者本來の面目にして、亦同時に人類の理想境地である。新知識涵養書として、修養書として人物新時代男女必讀！

◆法學博士 **新渡戸稻造氏曰く** 歐洲大戰後英國に於て人心一般が如何に動搖し且つ變動しつつあるかを見て憂ひたが、有名なギブス氏は「道の眞中」を著はし、混沌たる思想界に光明を與へた。鶴見氏の「中道を歩む心」昨夜夜の更くるも知らず通讀した。表題を見てギブス氏の著書を思ひ出した。兩者の謂へんとする所は一である。

◆司法大臣 **渡邊千冬子曰く** 本書全卷を通じて理智踊躍し詩思横溢其最も興味ある一節たる「清談禮讃」とは本書の著者にして、始めて高唱する資格あるものと云ふべきであらう。快著といふは未だし、小生は本書を目して名著と云はんと欲するものである。

忽ち四十五版

著者 鶴見祐輔氏

定價貳圓五十錢（送料十四錢）

發行所 東京本郷駒込坂下町四八（振替口座東京三九三〇番）

大日本雄辯會講談社

KING.
Published monthly by the **Dai Nippon Yubenkai Kodansha,** Tokio, Japan.
Entered as second class mailmatter at the P.O. at Los Angeles, Cal., U.S.A.
大正十三年十一月二十日第三種郵便物認可　昭和四年八月三日印刷納本　昭和四年九月一日發行（毎月一回一日發行）